

第503図 1号炭窯 (2)

るが、その細かい時期は特定できなかった。しかし、F区の2号炭窯の存在もあり、近世以降の所産ではないかと推定される。また、灰原の礫の出土状況から、何度かの造り替えのあったことが窺われる。

尚、遺構の上位構造は西に向かって崩されたようで、全く破壊されており、遺構そのものとしては確認することはできなかった。

規模 全長：593cm

窯本体部 長径：344cm 短径：230cm 高さ：24cm

灰原部 長径：494cm 短径：300cm 高さ：12cm

煙道 幅：55cm 長さ：32cm

掘り方 長径：260cm 短径：164cm 深さ：28cm

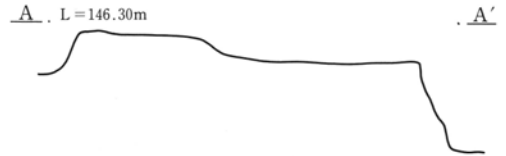
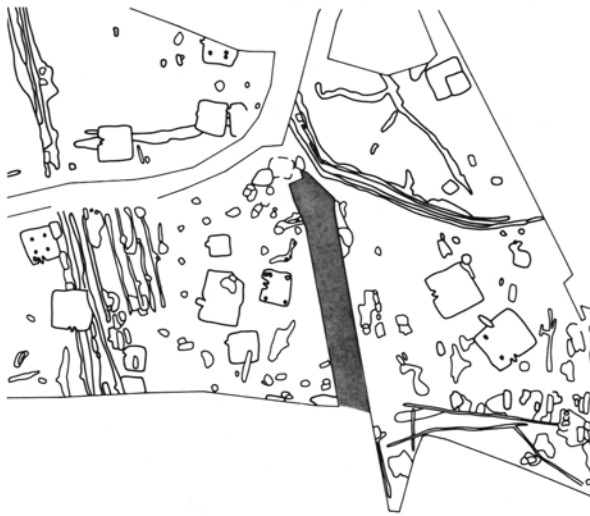
構造 本炭窯はΩ字状のプランを呈する。

斜面を盛り土若しくは掘削によってΩ字状に平な面とし、東側のレモン形プラン燃焼部を土坑状に掘り窪めて、西側の灰原部分と同レベルにする。灰原は焚き口左右に広がって見られる。煙道は奥壁（東側）中央に両側に礫を立てて掘り窪めて造っている。

上位構造は焚き口部を中心とした部分については焚き口と灰原部の礫の遺存状況からみて礫を積み上げて壁体を造っていたものと思われるが、窯本体は中位レベル付近に礫を置いた痕跡は窺われるものの、その壁体及び天井部は基本的には土壌で造られていたものと思われる。

E区西側農道（江戸時代以降か、第504図）

概要 E区に於いては東北東から西に抜けるものと、これに北からぶつかるものの2本の農道が走っていた。特に調査時点で「西側農道」と称した後者



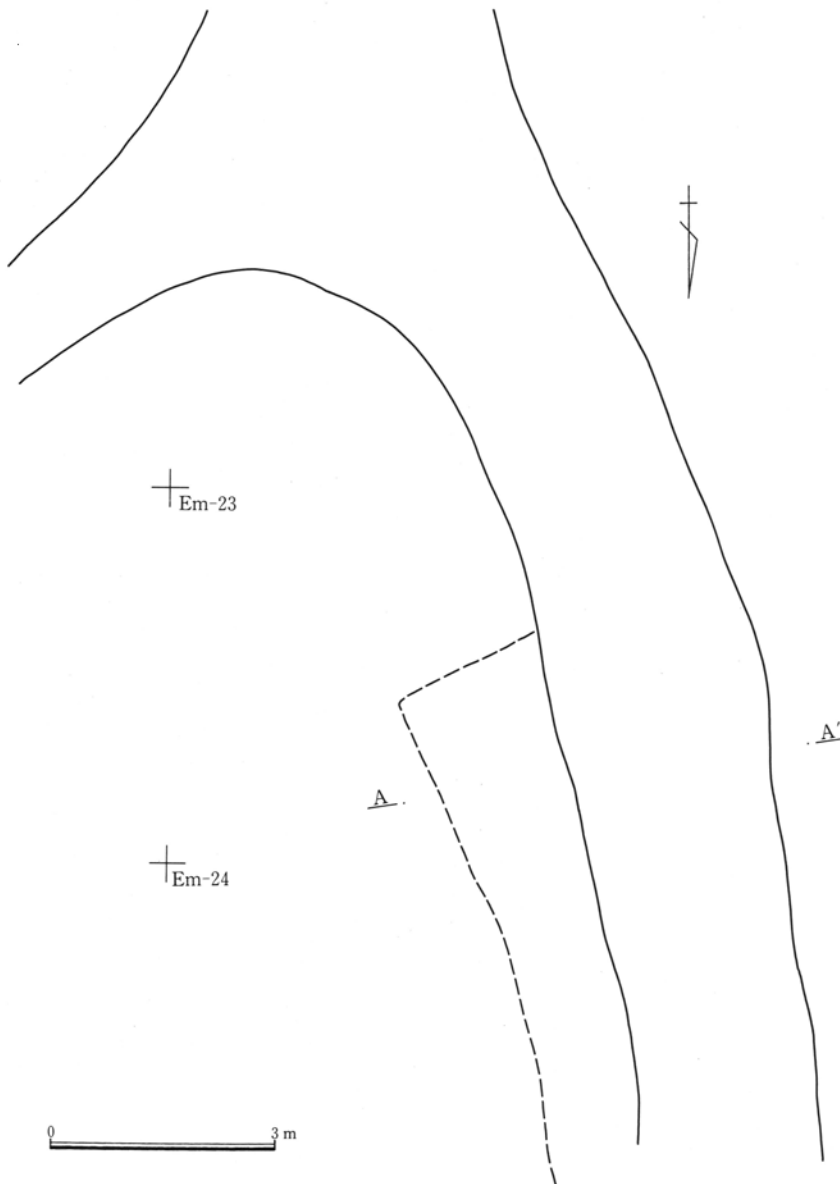
の農道はE区の中・東部と西部とを画するもので、この道路を境にその西側は近世の所産と思われるF区へ続く一段低い区画である削平面が形成されている。

また、表出させた道路面にはわだちの痕跡は認められず中央が落ち込む形態を示していたため、車両の往来がなかったか、あっても希で、基本的にこの道路面の形成が基本的にヒトの往来によるものであったことが想定される。

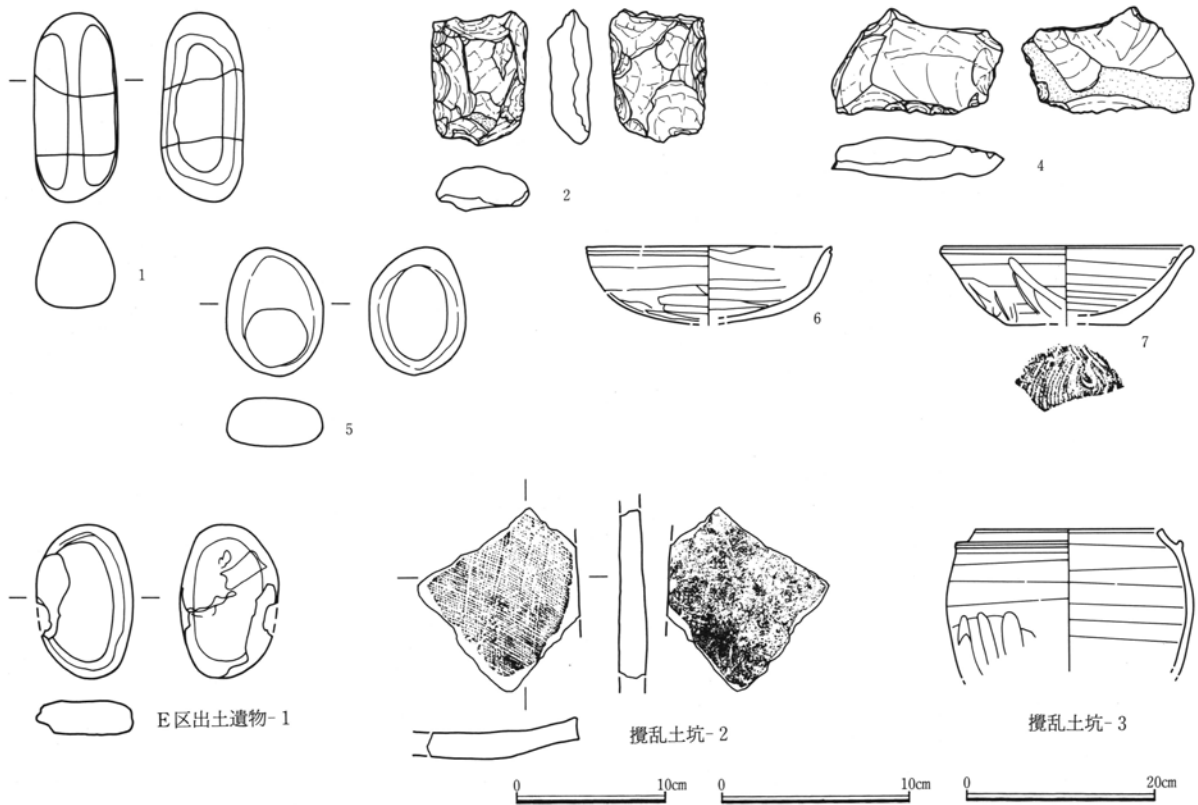
規模 幅：260cm 深さ：8cm

構造 西側農道は南北走行の道路である。

道路面は東側の土地に対しては30数cm低い位置に造られるが、そのレベルは西側の土地に対しては115cm程高い位置に当たっている。道路面は中央部に向かって緩やかなカーブを描くように若干低くなる形態を示している。



第504図 西農道



第505図 E区遺構外出土遺物

E区に於ける遺構外の遺物 (第505図, 図版201・203)

概要 E区に於いては上記の遺構に伴わない、少なくない遺物の出土が見られた。これらの多くはE区に於いて確認された諸遺構から出土した遺物、即ち古墳時代後期と平安時代のものを主体としているが、竪穴住居を確認された遺構の主体とする他の地区、即ちB～D・K区の遺構外出土の遺物と比べて平安時代の遺物の占める割合が多かった。

このうちグリッド単位で取り上げることのできた遺物には、縄文時代の磨石(1, 5)・スクレイパー(2)・不定形石器(4)の他、6世紀後半期のもの

と思われる土師器坏(6)や9世紀後半期のものの特徴を持つ須恵器坏(7)、そしてこも編み石(3)などの出土が見られた。

一方、攪乱土坑とした近・現代の耕作遺構の出土遺物であって、概ね所在グリッドに伴うものと思慮される遺物には、こも編み石(1)や布目瓦の女瓦(2)、羽釜片(3)などが見られた。

この他、E区の中で細かい出土位置・区域の特定できなかった遺物としては、磨石(1, 3)やこも編み石(2)なども見られた。

第9節 F区の概要

F区は本遺跡の乗る台地の西端部に在り、西は矢田川の沖積地へ降りる斜面、南は多比良の集落から北流する沢が西に流れを変じたものに画されている。東端近くには追部野の集落より来る道路が南北に走り、この道路から西に走って矢田川沿いの沖積地に降りる道路が分岐する。後者の道路はF区を南部の地域と中・北部の地域区分している。

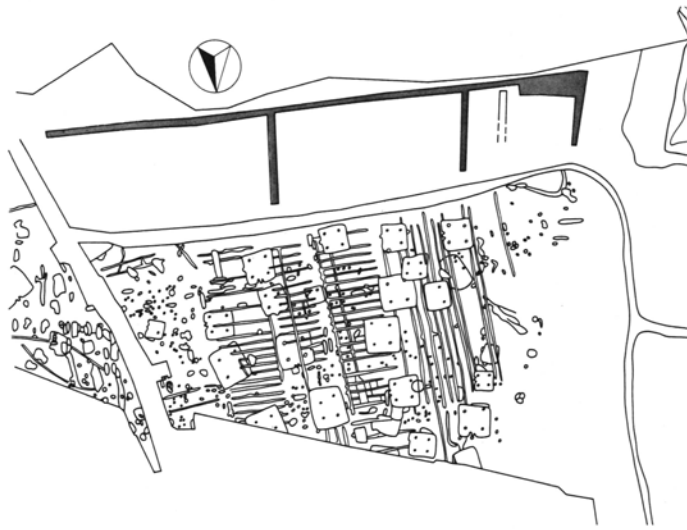
F区南部の地域は試掘調査などを実施し結果、当該地域は沢による沖積地で若干の小ピットのほか数段の遺構は確認されなかった。

これに対し中・北部の地域は遺構が密集するが、

近世以降の耕作溝によって縦横に攪乱されている。調査した遺構には縄文時代のもの2軒、古墳時代前期のうち赤井戸式期の弥生土器を伴うもの5軒、伴わないもの1軒、古墳時代後期のもの14軒、平安時代のもの3軒を含む竪穴住居跡30軒があり、溝3条、土坑36基、風倒木1基などもある。この他17節に後述するAT下に10ブロック、414点の石器を出土した旧石器時代の遺物包含層と、石器を出土した縄文時代の包含層も調査した。また、近世以降の畝3面や、戦後の復興期に使用された小型の炭窯1基など、特徴的な遺構の記録化も行った。



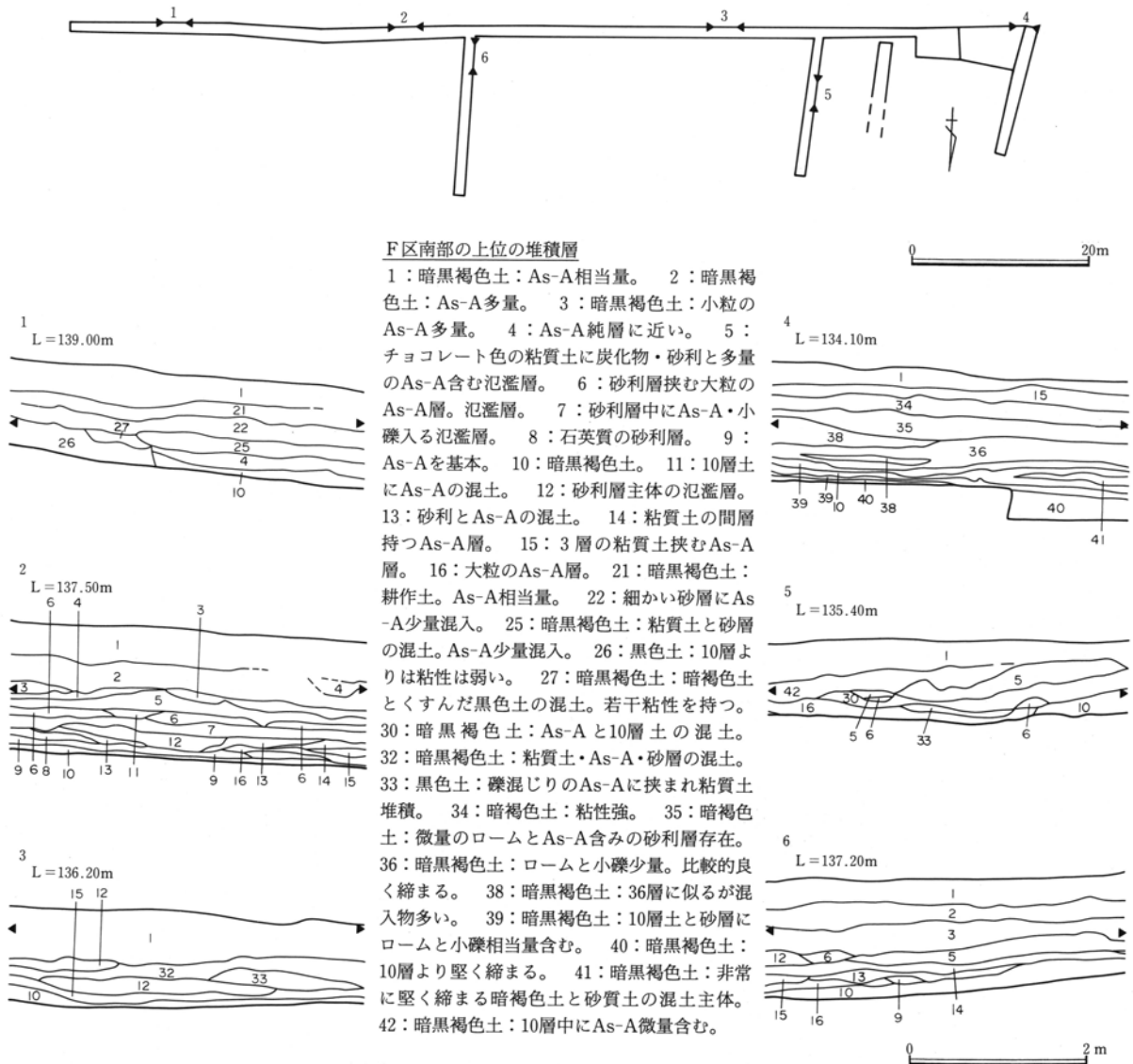
第506図 F区全体図



第10節 F区南部の調査

F区南部は前述した西流する沢に沿っており、矢田川に対しては段丘に当たるところである。西端においてG区に接するが、G区のうちこの隣接部は地形的に連続するので、G区の隣接部を含めた地域としてF区南部で一括して報告することとする。

F区南部についてはトレンチによる試掘調査を本調査に伴って実施した。トレンチは下図に示したように南側の路線巾に沿って東西



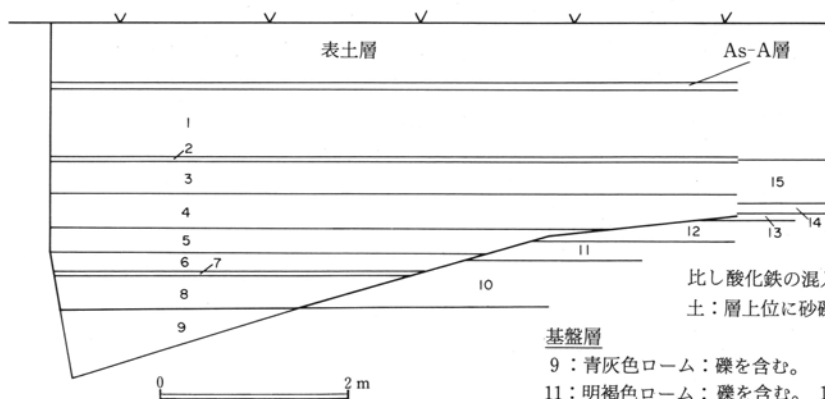
第507図 F区南部試掘

方向に直線的に1本を設定し、これから引き出すように土地の傾斜等に合わせて3本を南北方向に設定した。

F区南部は現地形に於いて南は沢を隔てて比高差10m余りの台地があり、北側のF区中・北部からは一段下がって谷地形をなしている。しかし乍ら、西流する沢はF区南部を1～2m程削って流れ、F区南部は中・北部に対して大きな比高差がなかったために遺構の存在が想定された。そうして実施された試掘調査によってF区南部の土層堆積の状況は沢の側に傾斜し、且つ西側に緩傾斜するという現地形と同様の状況を呈し、黒色または暗黒褐色の粘質土があり、(東端部を除く部分では)As-Aの純層が乗り、その上に上述の沢のオーバーフローによると思われる粘質土・砂利・As-Aの混土層があり、更に表土層であるAs-Aを含む耕作土が覆うという土壌堆積の状態が確認された。西端のG区部分では暗黒褐色土

中に砂利層の入るものがあり、As-A降下以前のオーバーフローも確認された。また、この暗黒褐色土中の砂利層にはAs-Aを含むものもあり、上位のAs-Aの純層が2次堆積であることが窺われるのである。

一方、南北方向の試掘トレンチと当該地区の調査終了に伴って行った深掘り(第508図)によって、F区南部の地形が中・北部に見られるローム台地を(恐らく西流する沢が)3m程侵食した後の沖積層の堆積によって形成されていった様相が確認されたのであるが、侵食の時期は特定できず、沖積層の堆積の時期もAs-A降下の段階までは特定できなかった。尚、各沖積層間に著しい切り合いなどが確認されなかったことから、F区南部地区の流水は恒常的なものではなく、沢の一過性のオーバーフローの繰り返しによって沖積層が堆積し、地形が形成されていったものと判断されるのである。



第508図 F区南部深掘概念図

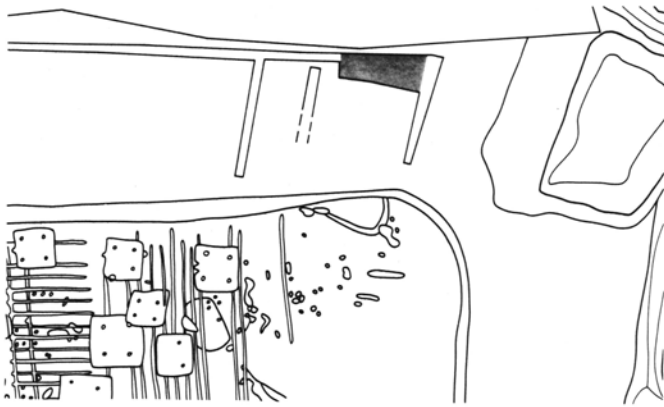
さて、試掘調査によってこの地区では遺構確認面たるローム層・ローム漸移層が削り取られていることが分かったが、As-Aの堆積が確認されたため耕作遺構の存在が考慮された。そこで、As-Aの堆積のはっきりしていたF・G区にまたがる当該地域の南西部について、面的拡張を試みたのであるが、第509図に示したような深さ数cmの小ピットや周囲に対し5～20cmの深さを持つ土坑状の落ち込みが見られる程度

F区南部の下位の堆積層

1：黒褐色土：処々に砂のレンズ状堆積層が見られる。 2：砂層。
3：暗褐色土：処々に砂のレンズ状堆積層が見られる。 4：暗褐色土：砂礫やや大きくなる。 5：暗褐色土：赤褐色の酸化鉄の小ブロックを含む。 6：黒褐色土：5層に比し酸化鉄の混入は少ない。 7：砂礫層。 8：黒褐色土：層上位に砂礫を含む。

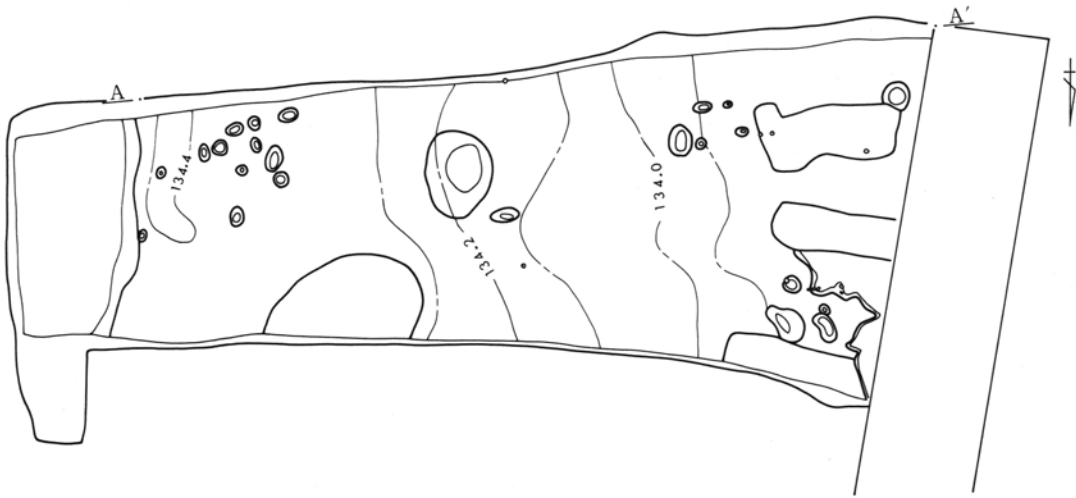
基盤層

9：青灰色ローム：礫を含む。 10：におい黄橙色ローム：礫を含む。
11：明褐色ローム：礫を含む。 12：オリーブ色ローム：礫を含む。 13：におい褐色ローム：礫を含む。 14：におい黄橙色ローム層。 15：におい黄橙色ローム：径の大きい礫を含む。

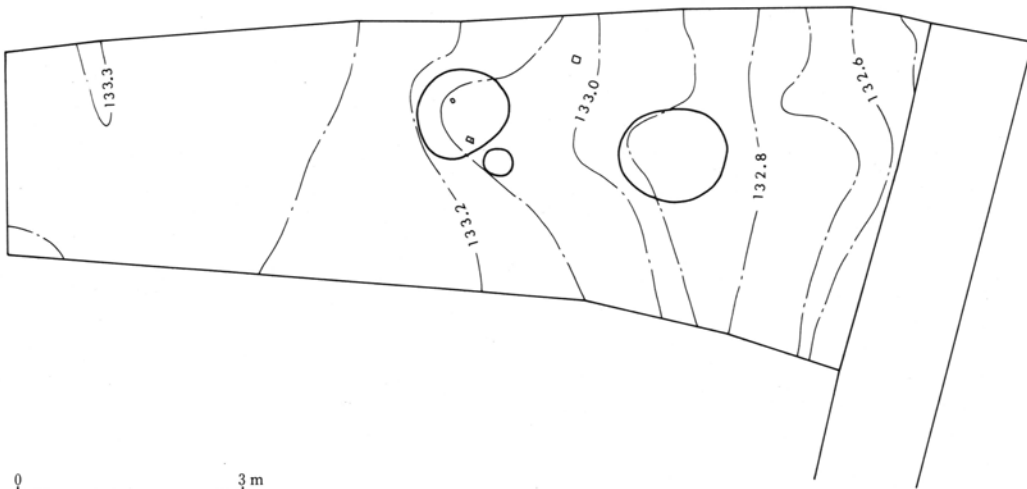
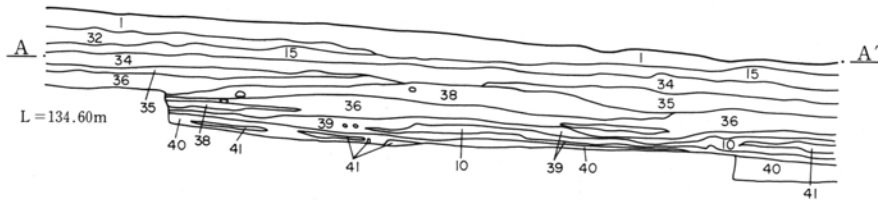


で、畠やサクを特定できる遺構は認められず、小ピットについても規則性は特定できなかった。また、砂礫層である39層の下面についてもはいで見たが、やはり遺構を確認することができなかった。

以上の点から（一部G区を含む）F区南部地域の土地利用は、As-A降下以降までは無かったものと判断されるのである。

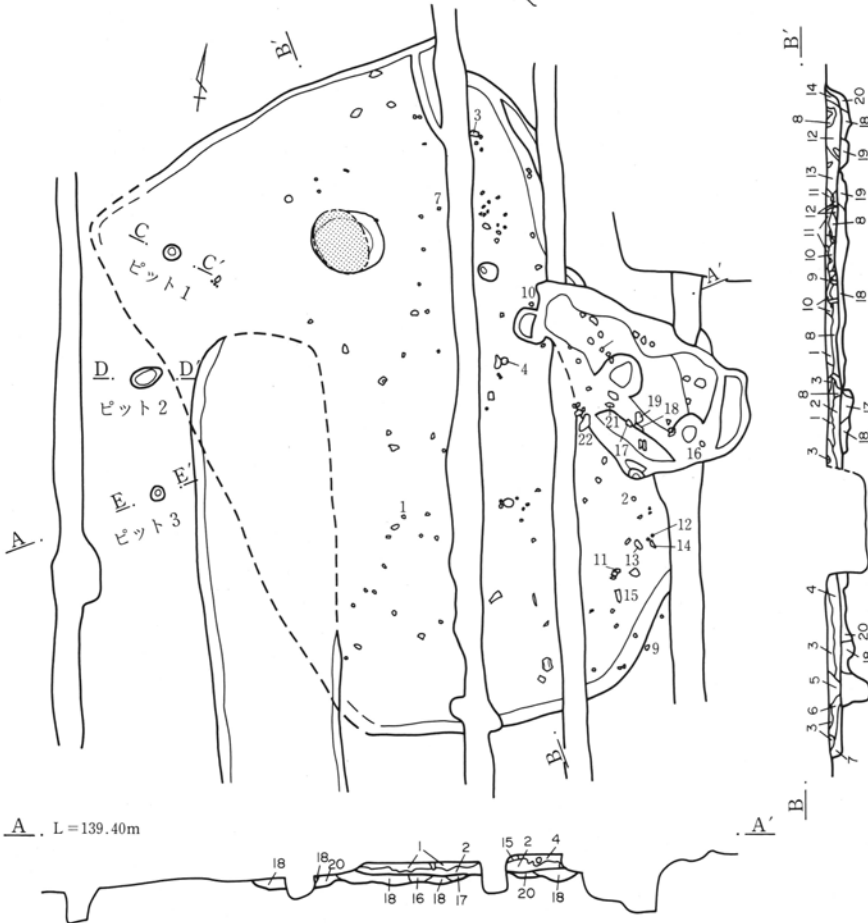
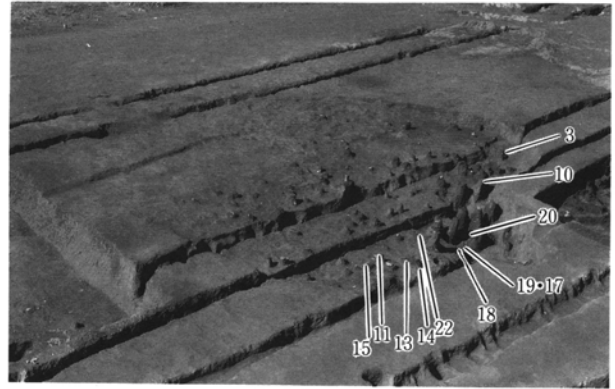


第507図 F区南部の上位の堆積層
土層注記参照



第509図 F区南部面的調査

第11節 F区の遺構と遺物



住居覆土

- 1・10：褐色土・黒褐色土・に
ぶい黄褐色土・褐色土の混土層。
- 2：褐色土・黒褐色土やや多く
混入するローム漸移層(以下「漸
移層」)土。
- 3：黄褐色土：漸移層下層土。
- 4：にぶい黄褐色：にぶい黄褐
色と褐色土の混土。
- 5：黄褐色土：漸移層土主体。
- 6：暗褐色土：にぶい黄褐色
土・褐色土やや多く入る。
- 7：にぶい黄褐色土：漸移層土
主体。
- 8・12・13：黒褐色土主体の層。
- 9・14：黄褐色土：褐色土等入
るローム質土。
- 11：暗褐色土：8層土と9層土
の混土。
- 15：黄褐色土：3層に近いがサ
ラサラする。現耕作土か。
- 掘り方覆土
- 16：暗褐色土主体の層。
- 17：にぶい黄褐色土：黒褐色
土・黄褐色土の混土主体。
- 18：黄褐色土主体の層。
- 19：黒褐色土主体の層。
- 20：黄褐色土：にぶい黄褐色土
やや多く含むローム。

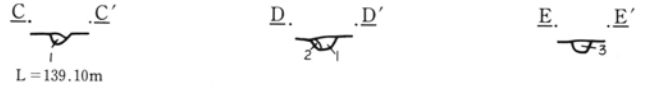
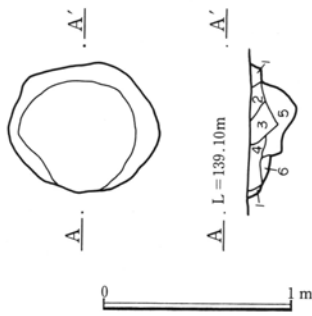
第510図 J-1号竖穴住居

J-1号竖穴住居 (縄文時代前期, 第510~512図, 図版215・222)

概要 本住居は矢田川沿いの沖積地に落ちる斜面に
近い位置にある。東部は風倒木によって切られ、更
にF区の他の遺構と同様に耕作溝で切られているた
め、遺存状況はあまり良好ではない。出土遺物の多

くは石器であり、土器は破片であり多くない。こ
のうち土器では同一固体と思われる前期の縄文土器
深鉢(1)の破片が8片ほど出土しているが散在して
いる状態で、本住居に直接伴うかどうかは特定でき

第3章 発見された遺構と遺物

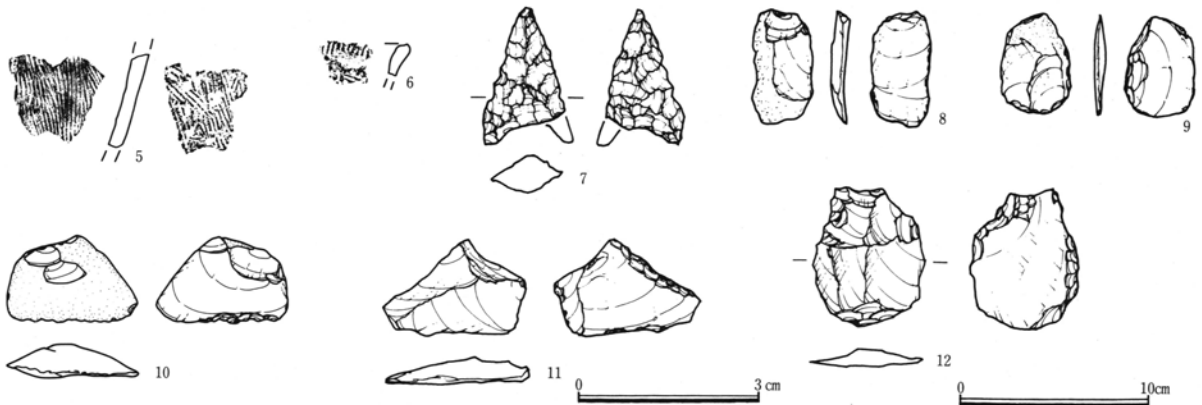
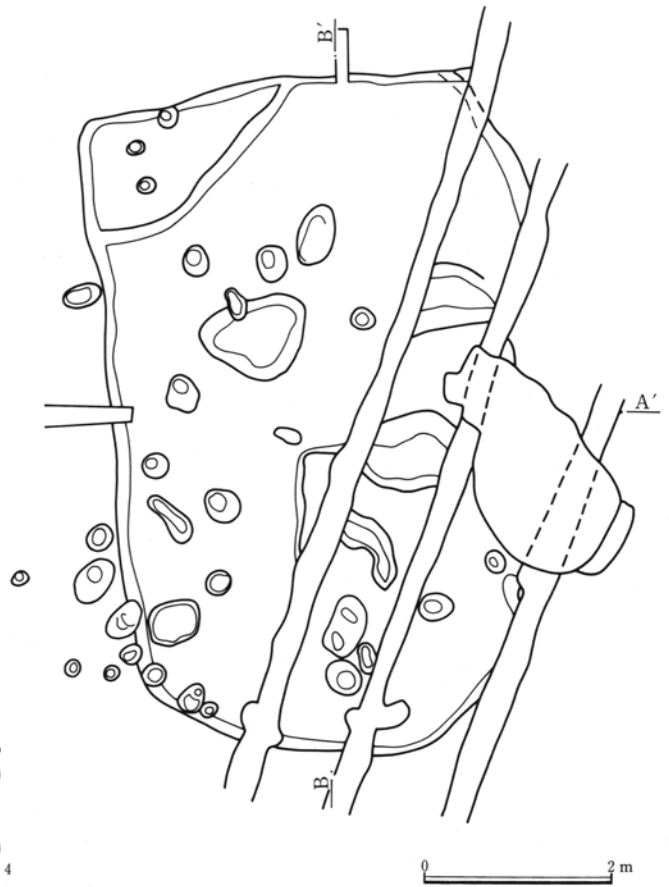
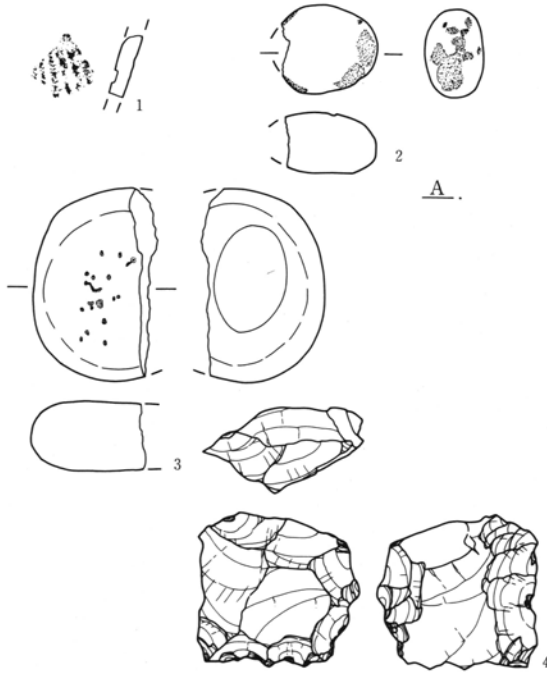


ピット覆土

- 1：黄褐色土：住居覆土下位に含まれる黒褐色土やや多く含む。
- 2：黄褐色土：ロームと暗色ロームの混土。
- 3：褐色土：住居覆土下位に含まれる黒褐色土やや多く含む。

伊断面

- 1：明黄褐色土：ローム主体。 2：にぶい黄褐色土：明黄褐色ローム多く入る。 3：黒褐色土：ローム。 にぶい黄褐色ローム等入る。
- 4：暗褐色土：黒褐色ロームとにぶい黄褐色土の混土。 5：明黄褐色土：2層土入る。 6：黄褐色土：4層土と5層土の混土。



第511図 J-1号竪穴住居遺構及び出土遺物



第512図 J-1号竪穴住居出土遺物

なかった。しかし少なくとも住居埋没時に投棄されたものと考えられるので、本住居は縄文時代前期頃の所産と思われる。

石器のうち本住居のものとして特定できるものは敲石(2,3)、石核(4)があり、覆土中からは、石鏃(7)、石匙(8)、削器(9,10,11)、打製石斧(13,14,15)が出土している。また本住居と切り合い関係にある風倒木痕からは石匙(16)、削器(19,21)、磨石(20)、打製石斧(17・18・22)が出土しているが、これらは本住居に伴う可能性を持つ。

尚、耕作による攪乱のため古墳時代後期の土師器甕(23)片の混入も見られた。

規模 長軸：716cm 短軸：460cm以上 深さ：16cm
 ピット1 径：18×15cm 深さ：24cm ピット2

径：32×20cm 深さ：27cm ピット3 径：15×14cm 深さ：15cm

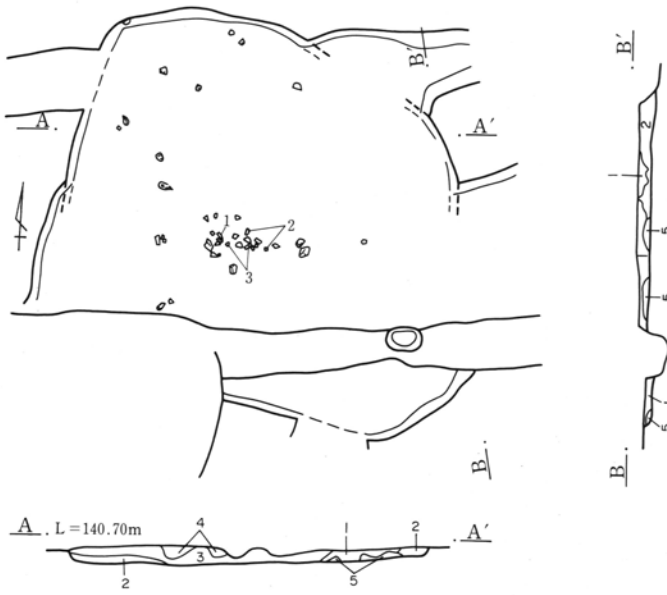
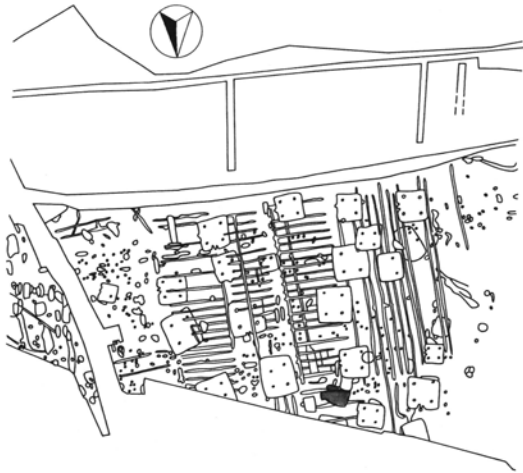
構造 本住居の遺構構造はあまりはっきりしないが、本住居のプランは、南側に膨らみを持つ長方形を基調とする形状を呈するものと推定される。

浅い掘り方を持っており、床面は黄褐色土を中心とする土で埋め戻して造り出されている。

住居の北端寄りには70×53cmの地床炉が確認されたが、炉に掘り込み等は特段に確認されなかった。

本住居と同時期(付随する)と判断されるピットは3基あるが、これらのピットのうちピット1はプランの北西隅部に在るものの、ピット2・3はプランの西側に出る。

第3章 発見された遺構と遺物

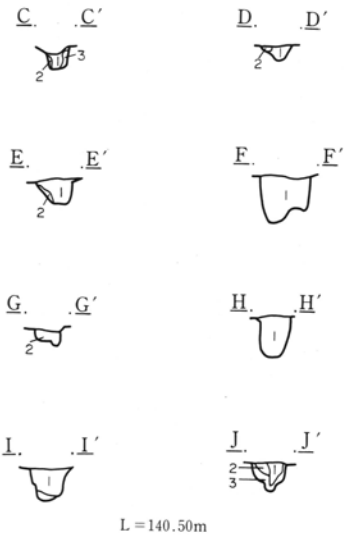
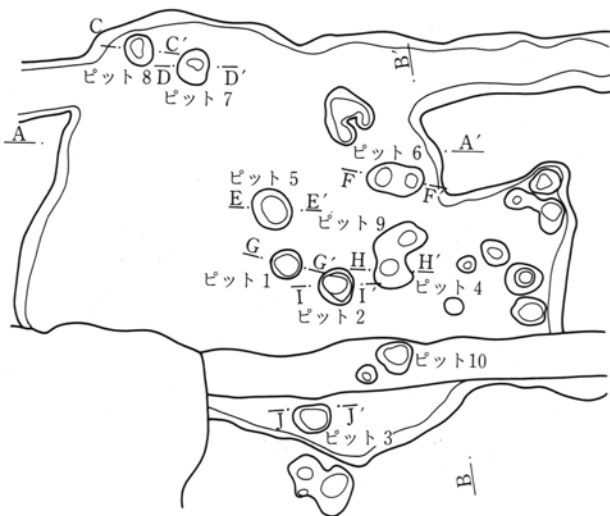


住居覆土

- 1 : 黒褐色土主体の層。
- 2 : 暗黄褐色土主体の層
- 3 : 暗黄褐色土主体の層。
- 4 : 暗黄褐色土 : As-A僅かに入。
- 5 : 黄褐色土 : ローム含む。

ピット覆土

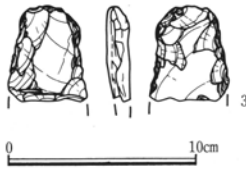
- 1 : 黒褐色土 : ローム少し含む。
- 2 : 褐色土 : ローム多く含む。
- 3 : 黄褐色土 : ローム主体。



L=140.50m



第513図 J-2号竪穴住居



J-2号竪穴住居（縄文時代早期、第513～514図、図版215・222）

概要 本住居は矢田川沿いの沖積地に降りる斜面の縁辺よりやや東に入ったところに位置する竪穴住居跡である。遺構の遺存状況はJ-1号竪穴住居より良好だったものの、やはり耕作溝や土坑などに切られ壊されていた。ピットは本住居に伴うものであるか否かは特定はできなかったが、9内至12基を確認することができた。尚、炉は特定できなかった。

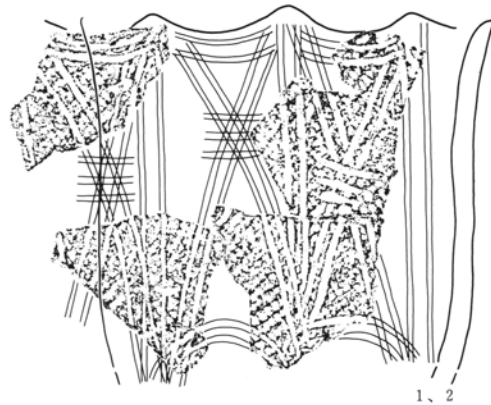
出土遺物はあまり多くないが、早期終末に比定される縄文土器片(1,2) 20点程が出土している。これらはほぼ住居中央やや南よりに集中し、床面及び床上10cm内外のレベルで出土してきている。1個体が割れたものとも考えられるが、出土レベルから本住居に直接伴うか否かは特定できなかった。しかしこれらの出土位置から本住居は住居埋没開始後早い段階には、はっきりした窪地として現認されたものと推定され、換言すれば遺物は一括投棄されたものと思慮される。従って、本住居は早期終末期を前後する近接した時期に営まれていたものと想定される。

また、覆土中からは剥片等も出土しているが、これらに混ざって打製石斧片(3)も見られた。

Y-1号竪穴住居（古墳時代初頭、第515～517図、図版213・222）

概要 赤井戸式の土器を出土する竪穴住居跡のうちの一軒である。主軸は北西を向き、Y-2号竪穴住居と同一線上に位置する。住居の中・西部には耕作溝が入り、一部床面まで及んでいる。

出土遺物のうち本住居に直接関連すると判断されるものには縄文の施文された赤井戸式の弥生土器壺の口縁部片(1)と篋磨きの施された弥生土器器台(2)がある。この外、覆土中には弥生土器器台(6,7)、弥生土器壺(4,5)、縄文を持つ赤井戸式の弥生土器



第514図 J-2号竪穴住居出土遺物

規模 長軸：推定480cm 短軸：418cm 深さ：32cm

ピット1 径：37×30cm 深さ：19cm ピット2

径：34×30cm 深さ：30cm ピット3：32×31cm

深さ：22cm ピット4 径：43×38cm以上 深

さ：45cm ピット5 径：44×42cm 深さ：25cm

ピット6 径：60×36cm 深さ：61cm ピット7

径：36×34cm 深さ：21cm ピット8 径：32×

30cm 深さ：26cm ピット9 径：58×33cm 深

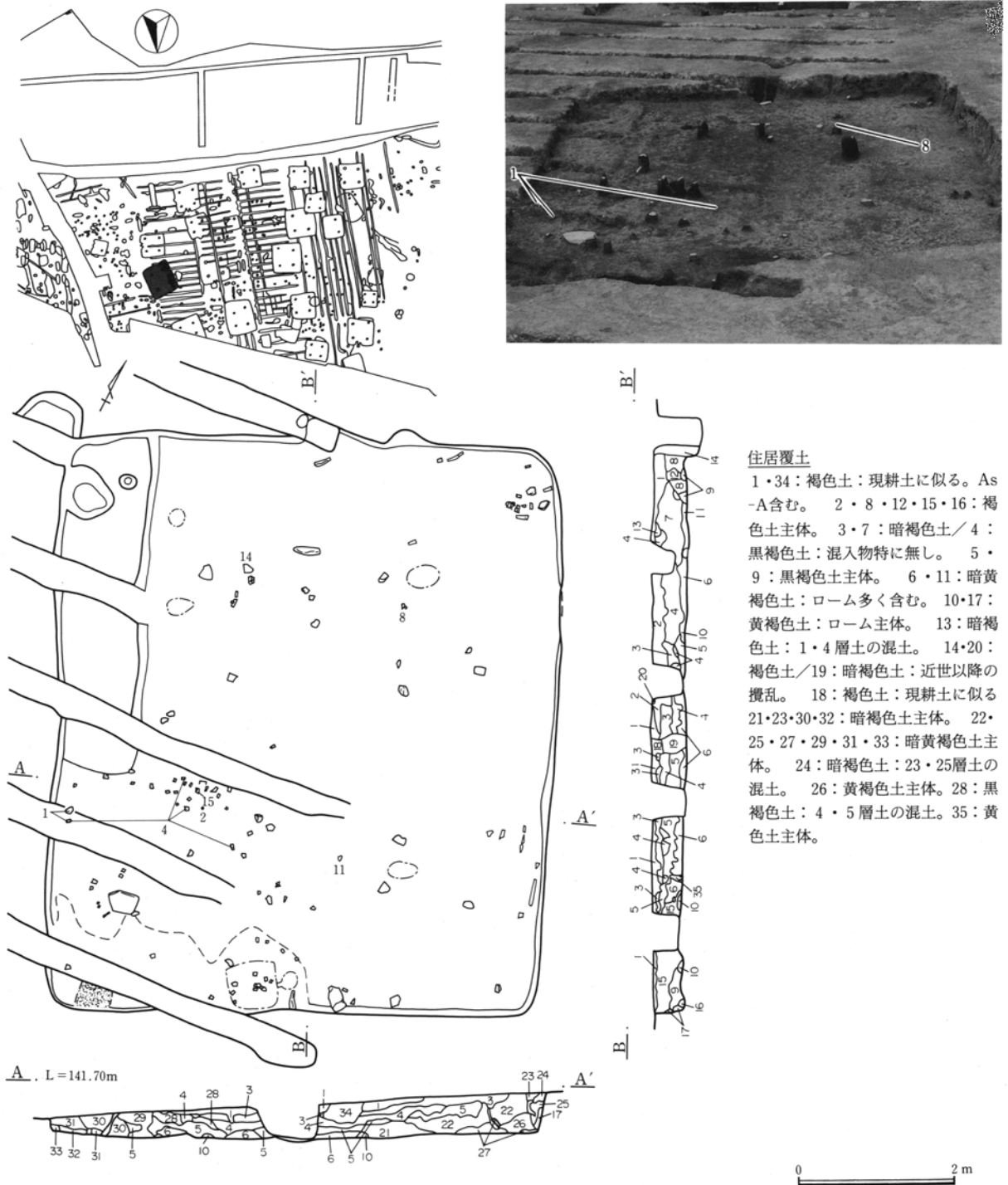
さ：47cm

構造 本住居は東に張り出しを持つ長方形のプランを呈し、掘り方は確認されなかった。炉の設置位置や構造は不詳である。ピットのうちピット3・4・6・7・8・9・10、及びピット6の西に位置する不整形のピットは住居壁のラインに沿って掘削されているので、柱穴として把握できるものと思われる。

壺(3)と弥生土器破片(8)が出土し、縄文時代の不定形石器(10)や耕作溝に伴って古墳時代頃と推定される敲石(11)、「大小樽」の墨書のある9世紀後期の須恵器碗(13)、15世紀後半に比定される軟質陶器鉢(14)、及び近代の石板(16)も出土している。また壁際の床面には炭化材も出土しており、本住居が焼失家屋であった可能性も考えられる。

規模 長軸：722cm 短軸：644cm 深さ：58cm

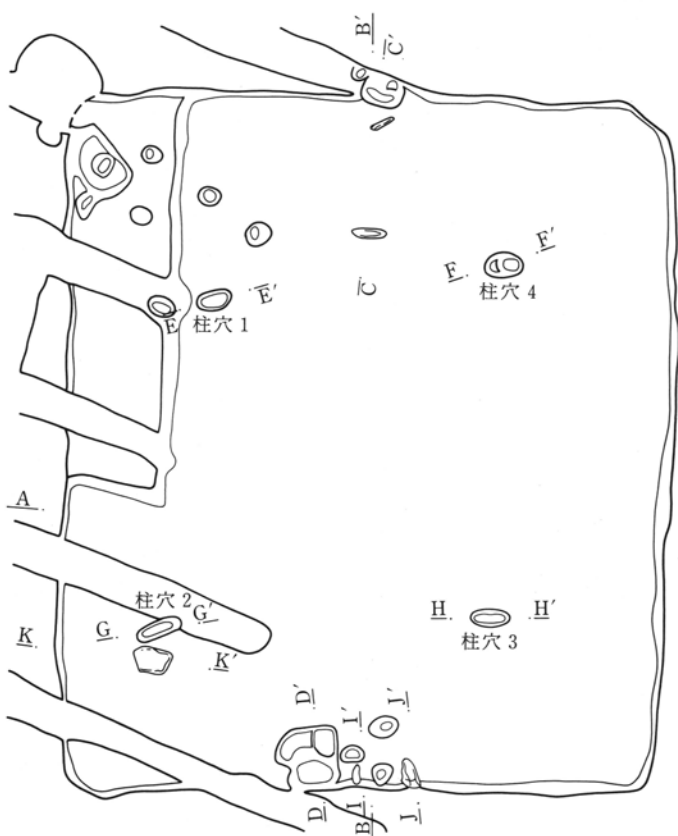
柱穴1 径：38×21cm 深さ：14cm 柱穴2 径



第515図 Y-1号竖穴住居

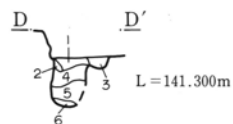
：48×17cm 深さ：34cm 柱穴3 径：40×19cm
 深さ：25cm 柱穴4 径：40×28cm 深さ：51cm
構造 本住居は方形のプランを呈し、掘り方を埋め戻して床を造り出している。柱穴は4カ所あるが、何れも楕円形乃至長方形のプランを呈することから

柱穴1を除いては板状の柱材を使用し、柱穴4の断面観察から厚みは14cm程あり柱間から幅は20数cmから30数cm程あったことが想定される。炉は枕石を持ち、断面観察から北側の柱穴を結ぶラインの北側に設置されたものと判断される。また、南壁中央付近



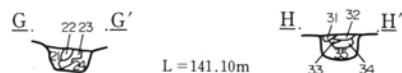
炉断面

- 1: 暗黄褐色土: 焼土含む。 2: 黒褐色土主体。
 3: 暗黄褐色土: ローム主体。 4: 褐色土主体。
 5: 黄褐色土: ローム主体。



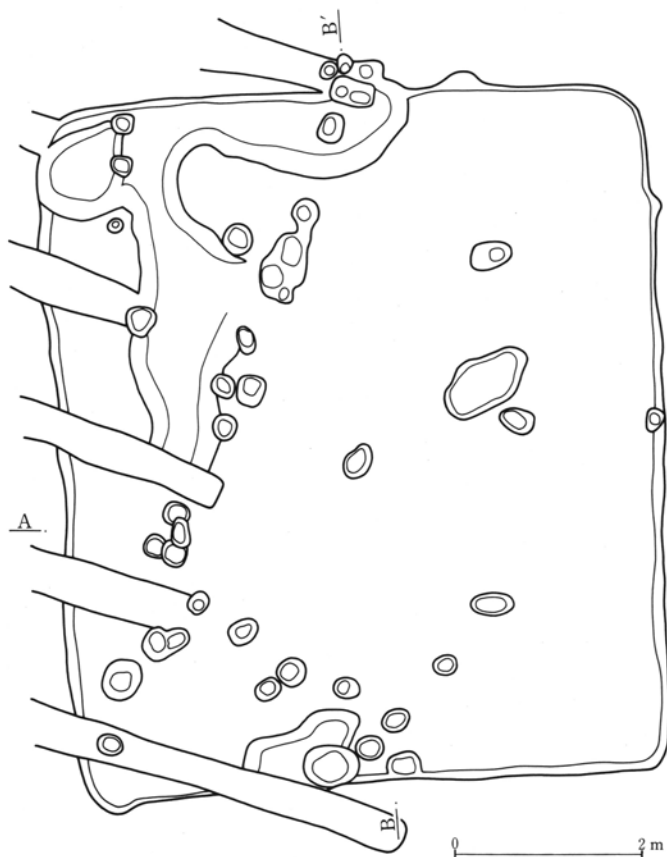
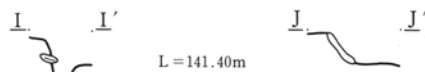
貯蔵穴覆土

- 1・2: 暗褐色土主体。 3: 黄褐色土: ローム主体。
 4: 黄褐色土: ローム主体。埋め戻し土か。 5・6: 褐色土: 混入物無し。



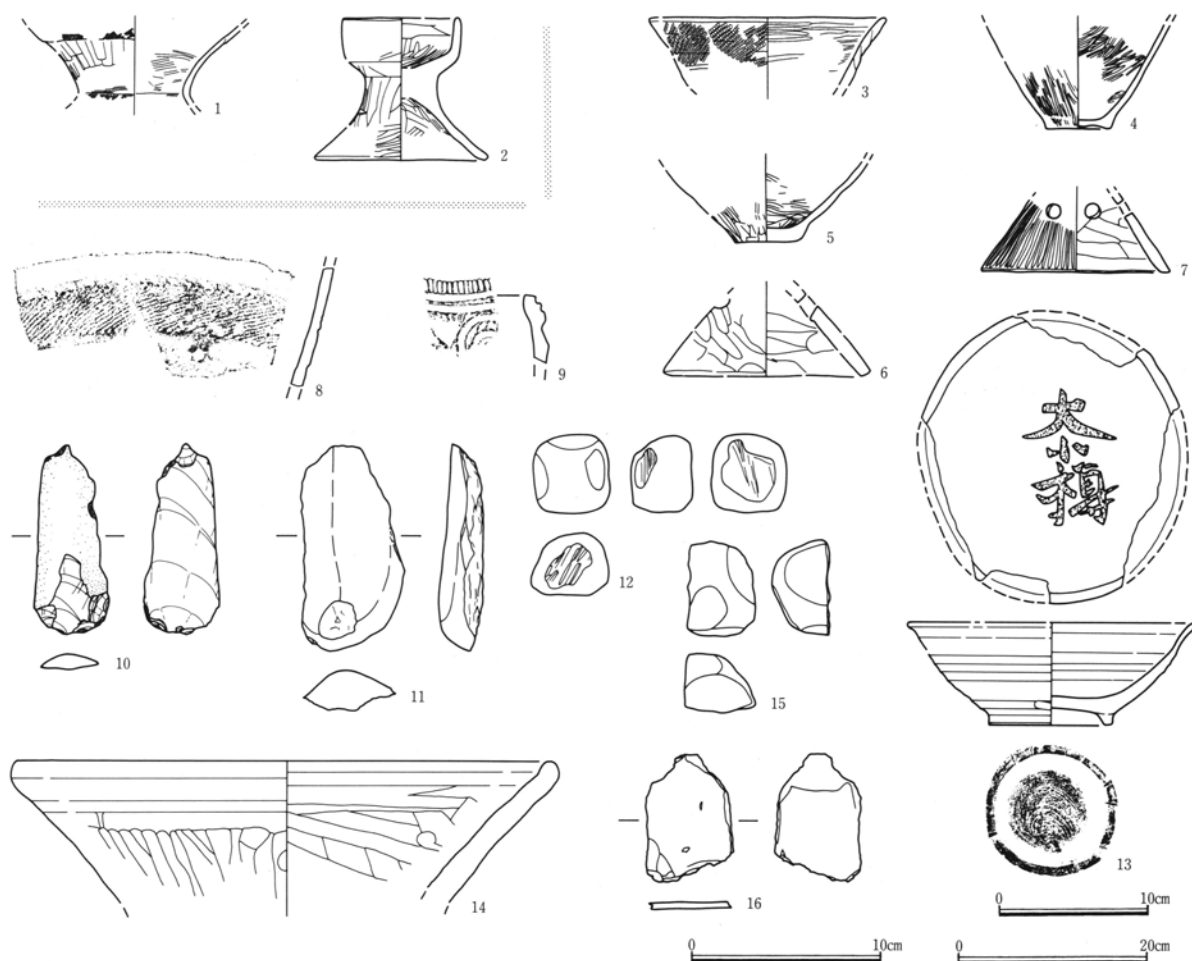
柱穴覆土

- 11・12・21・22・23・31・41・42: 暗褐色土主体。 13・43: 暗黄褐色土: ローム多く含む。 14・35・44: 黄褐色土: ローム主体。 24・32・33・34: 暗黄褐色土主体。



には55cm隔てて西側のは壁面の中位に、東側のは壁面に立て掛けるように礫が残され、この中央に引かれるライン上には径22~28cmの5~7cmの浅いピットがあり、これら——特に前者については入り口遺構ではないかと考えられるものである。

第516図 Y-1号竪穴住居遺構



第517図 Y-1号竪穴住居出土遺物

Y-2号竪穴住居（古墳時代初頭、第518～519図、図版213・223～224・250）

概要 本住居はY-1号竪穴住居の北西に在って、同住居と同一ライン上に位置し、主軸も同じく北西にある。本住居の北側は路線外に出ていて調査することはできなかった。調査範囲で南側の柱穴は確認できたが、炉は認められずY-1号竪穴住居と同様北半部に設置されていたものと思われる。

出土遺物のうち出土位置から本住居のものと考えられる遺物には弥生土器碗(1,2)、弥生土器器台(3)、弥生土器小型甕(4)、弥生土器壺底部片(5)があり、弥生土器と同質の紡錘車が3点(7・8・9)が出土している。覆土中からは近似した時期のものとして弥生土器壺の体部片(10)や赤井戸式期の縄文を施された弥生土器壺の口縁部片(11)が出土している。また縄文時代のものと思われる遺物には不定形石器(14)や敲石(15)、磨石(16)や黒曜石製の石鏃

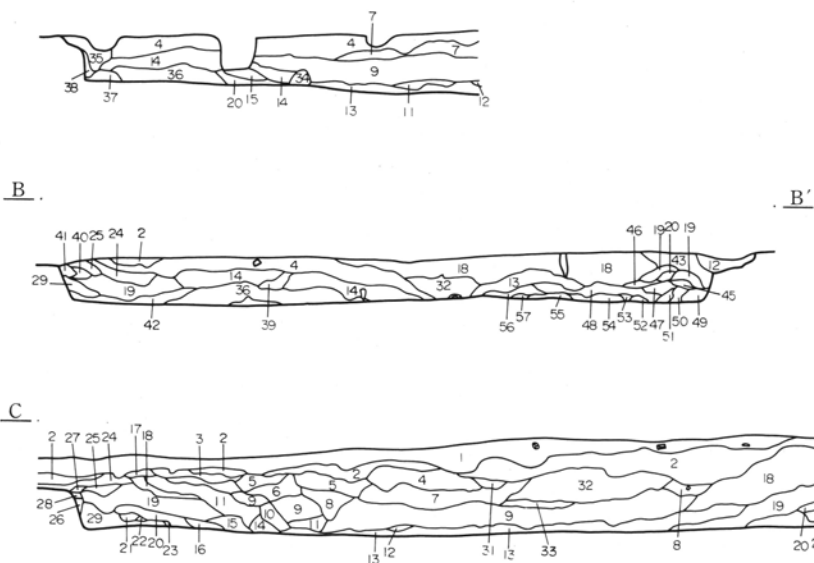
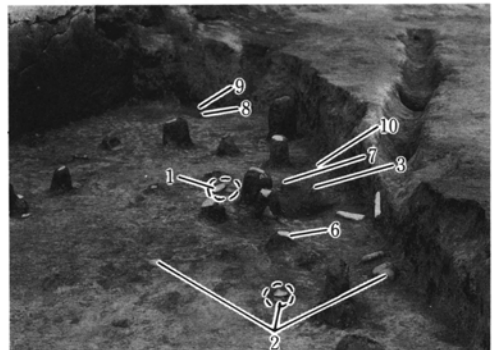
(12・13)がある。

規模 長軸：6 m以上 短軸：696cm 深さ：65cm

柱穴1 径：28×19cm 深さ：33cm 柱穴2 径：30×23cm 深さ：65cm

入り口遺構 径：62×43cm 深さ：55cm

構造 本住居はその北側が路線外に在って調査できなかったため、全体の構造等は明らかではないが、調査した部分の所見から方形または長方形のプランを呈すると推定される。また、柱穴は2カ所確認されているが、4本柱であるものと思われる。床は地床である。土層断面から特定はできなかったが、柱穴のプランは楕円形或は長方形を呈しており、Y-1竪穴住居と同様に板状の柱を用いていたことが想定される。また南壁近くに入りに口に関連したと考えられる小土坑が1基確認されている。

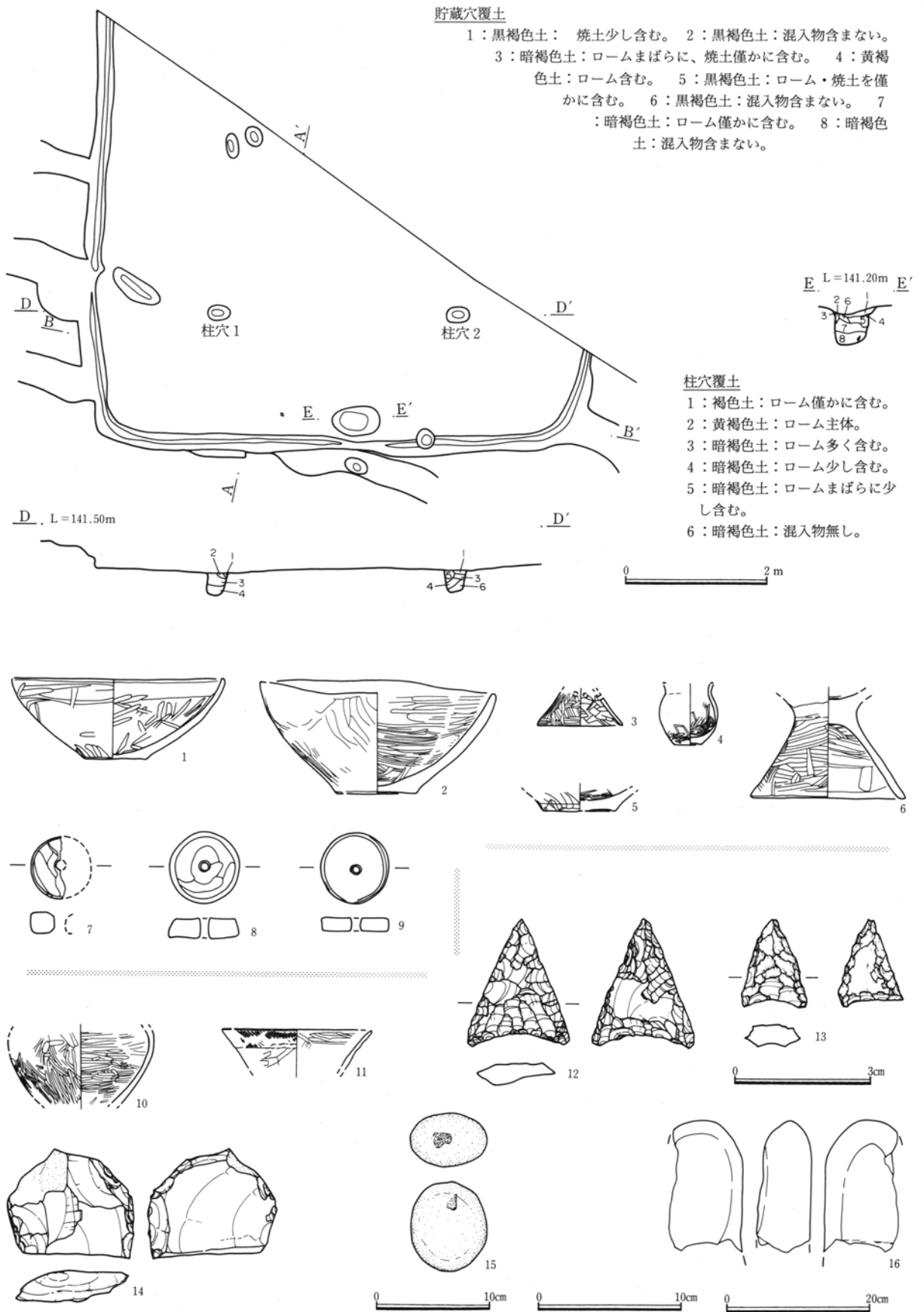


住居覆土

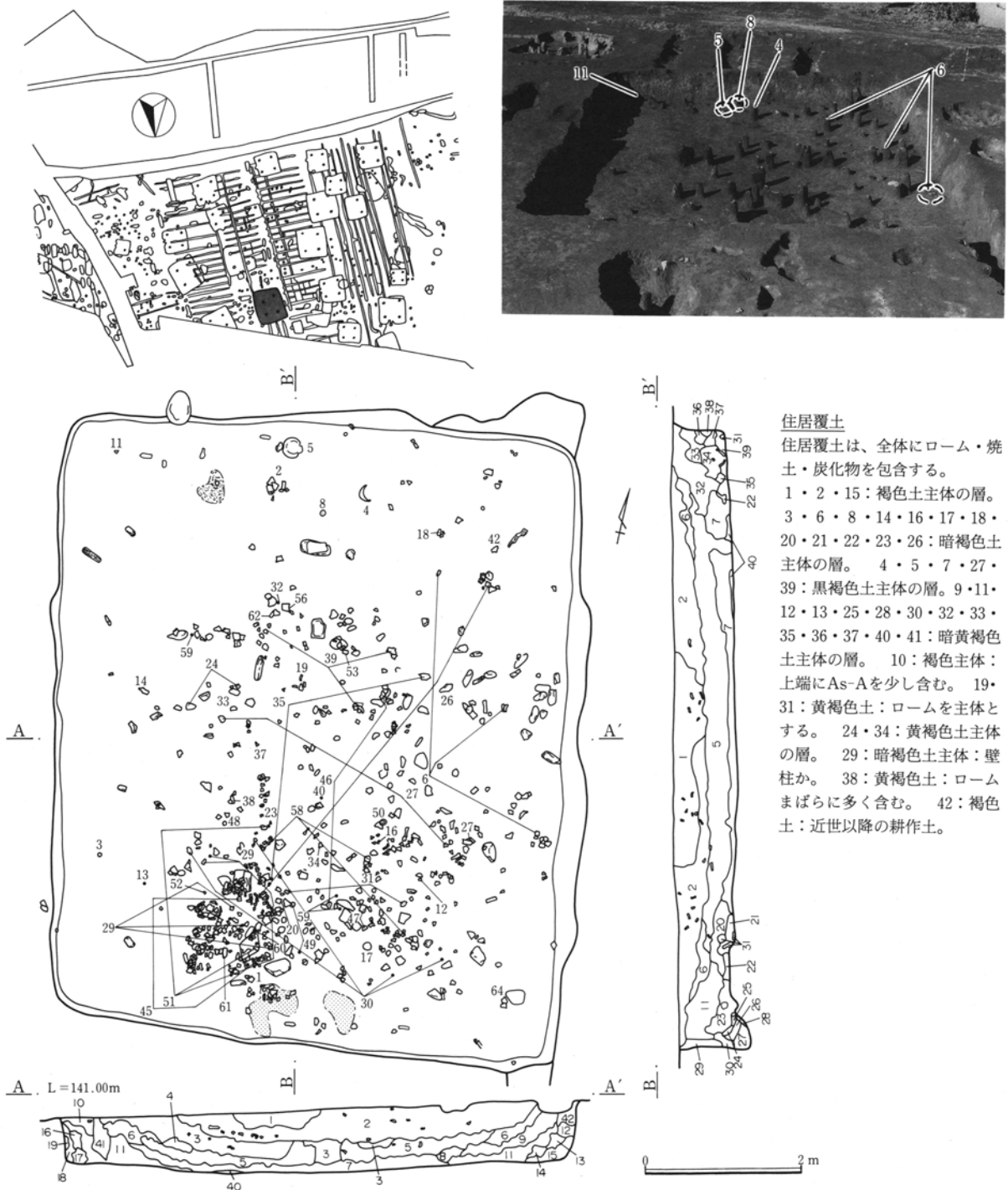
全体にサクサクした土で、ロームブロックやローム粒の混入はほとんどない。1：褐色土：As-A多く含む現耕作土。2・3・17：褐色土：As-Aが入る。4・5・15・16・18・19・24・25・27・30・39・53・56：褐色土主体。6・7・8・11・13・14・28・29・31・32・34・40・42・43・45・46・47・48・49・54・55・57：暗褐色土主体。9・10：黒褐色土主体。12・35：褐色土：近世耕作土。20：暗黄褐色土主体。21：黄褐色土：ローム主体。22・36：暗黄褐色土：20層土と21層土の混土。23・26：黄褐色土主体。33：黒褐色土：9層土と32層土の混土。37・38：黒褐色土主体。41：褐色土：樹木の根の痕跡か。50・51・52：暗赤褐色土：焼土入る。

0 2m

第518図 Y-2号竪穴住居



第519図 Y-2号竪穴住居及び出土遺物



第520図 Y-3号竪穴住居

Y-3号竪穴住居（古墳時代初頭、第520～523図、図版214・224～226・250）

概要 本住居はY-2号住居の西に隣接するが、主軸は北北西を向く。また遺物の出土状況から、7世紀前半頃までは窪地として残ったことが想定される。

出土遺物で本住居に伴うものには弥生土器甕(1)、ミニチュア土器(3)、赤井戸式の弥生土器壺(2,4)

土師器小型壺(6)、同甕(5)、弥生土器器台(8)、土師器の甕(7) 小型甕(9)、磨製石斧(10)があり、覆土中の遺物には縄文の土器片(11～14)や石器(15～18)、古墳時代中期(19)と後期の土師器(20・23～30,32～39,45～48,50)、須恵器片(56)や奈良

第3章 発見された遺構と遺物

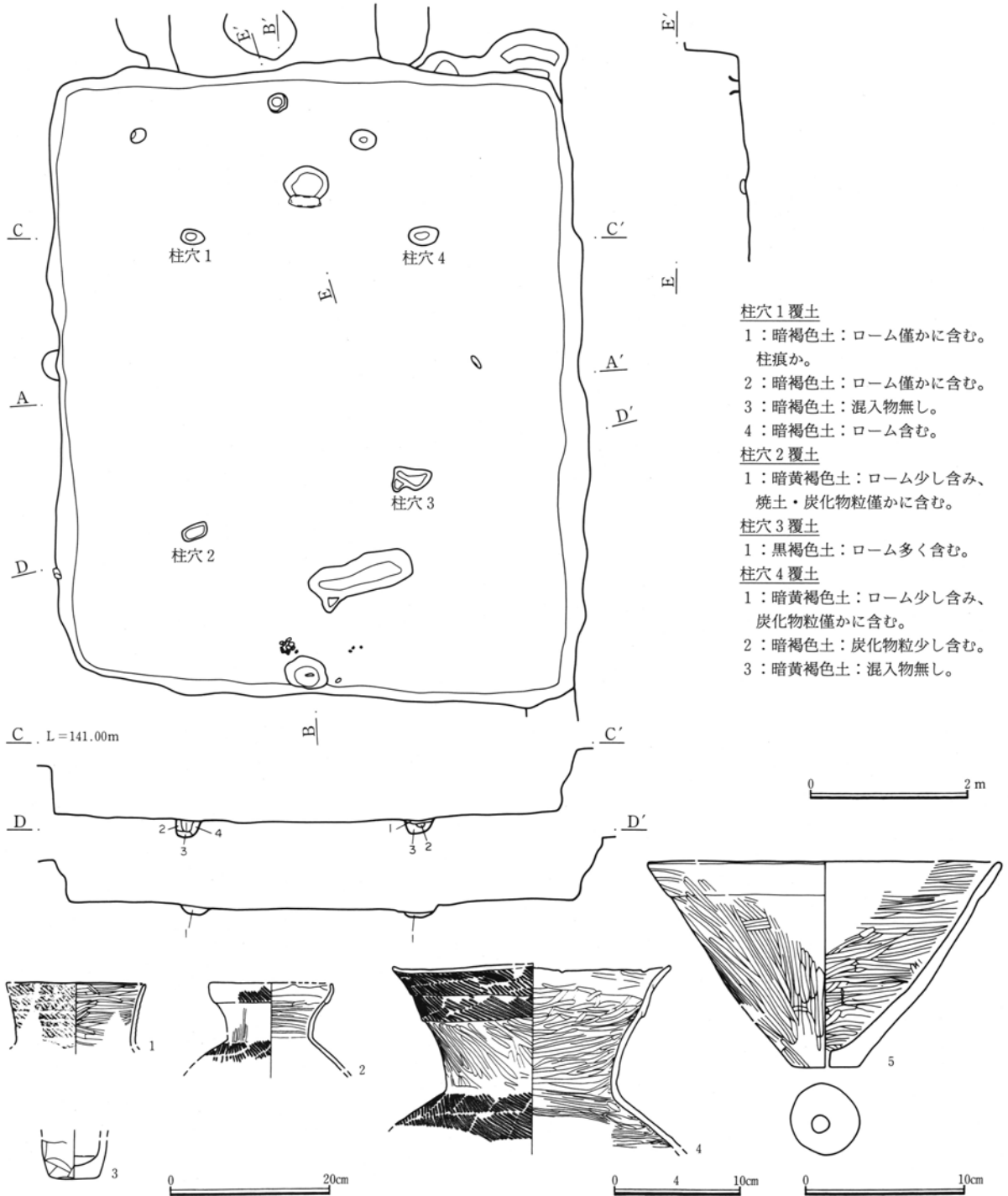
時代の土師器 (55) があり、砥石 (62) やこもあみ石 (60,61)、板碑片 (63,64) も混入する。

規模 長軸：882cm 短軸：676cm 深さ：90cm
 炉 径：57×52cm

柱穴1 径：31×18cm 深さ：21cm 柱穴2
 径：35×18cm 深さ：7cm 柱穴3 径：48×32cm

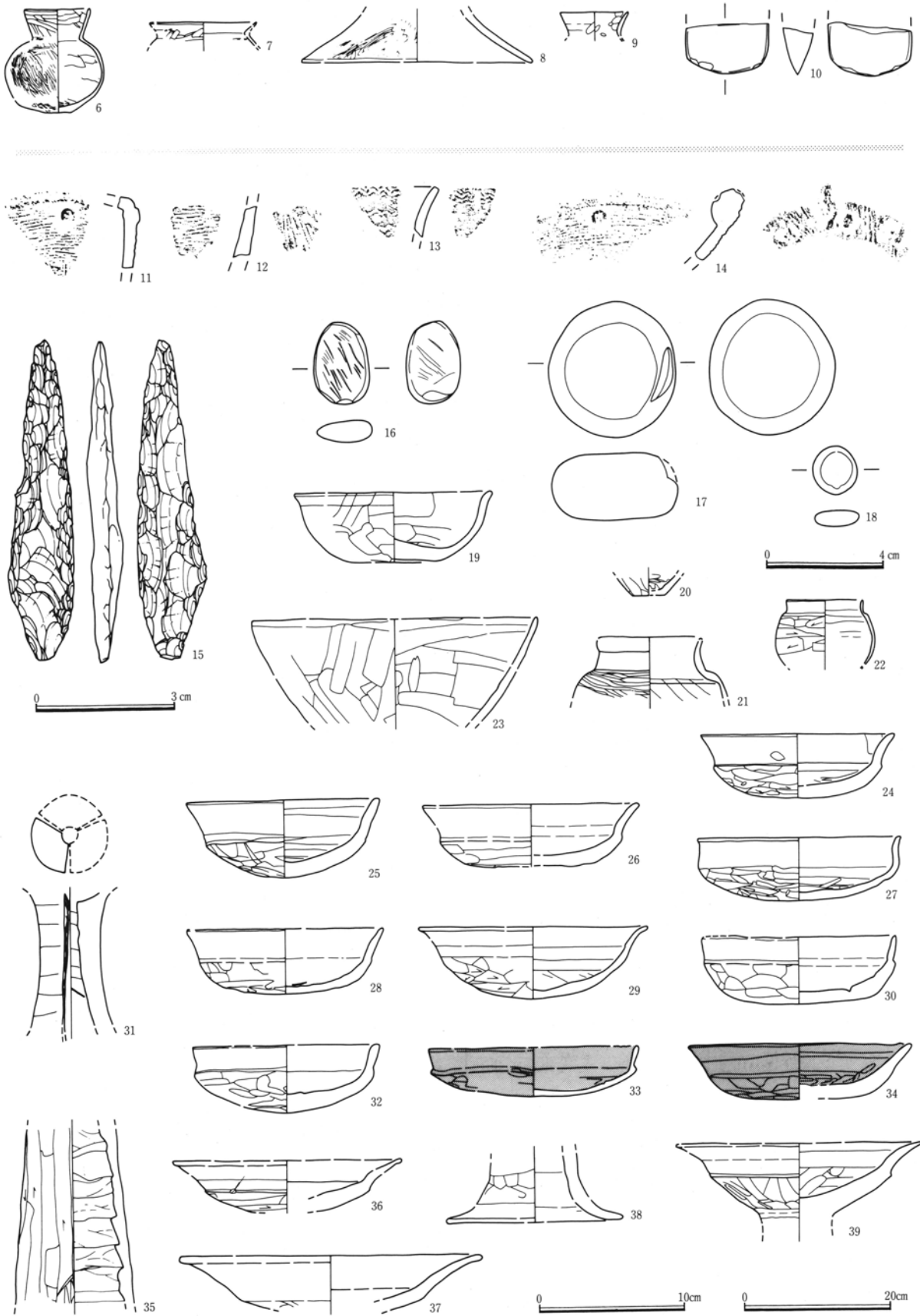
深さ：12cm 柱穴4 径：39×24cm 深さ：20cm
 入口遺構 径：50×40cm 深さ：50cm

構造 住居は長方形プラン。主柱穴である柱穴1・2・4は楕円形プランで、板状の柱を窺わせる。炉は枕石を用い、柱穴1・4のライン外側に在る。南壁中央には入り口遺構らしいピットが掘られる。



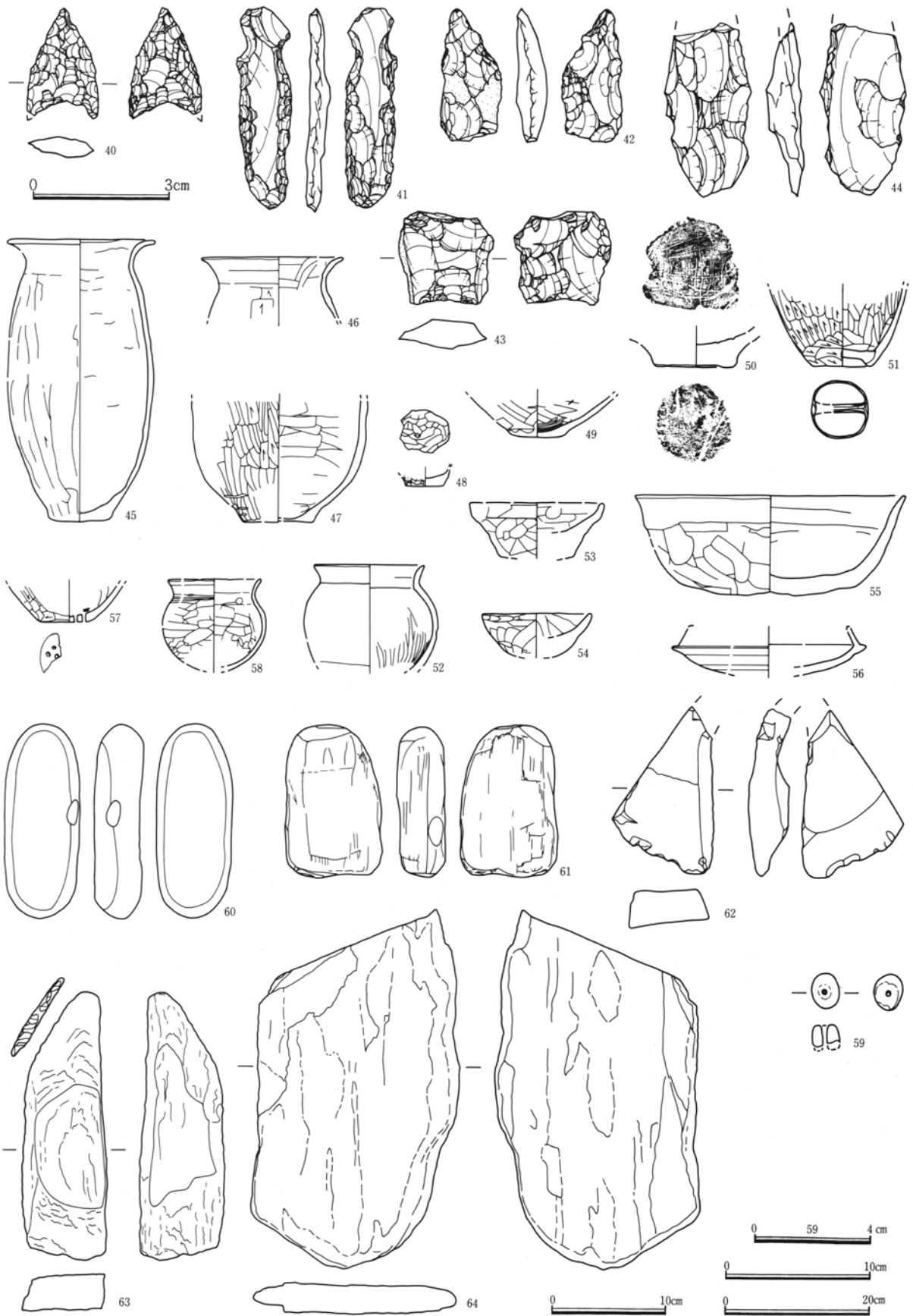
第521図 Y-3号竪穴住居及び出土遺物

第11節 F区の遺構と遺物

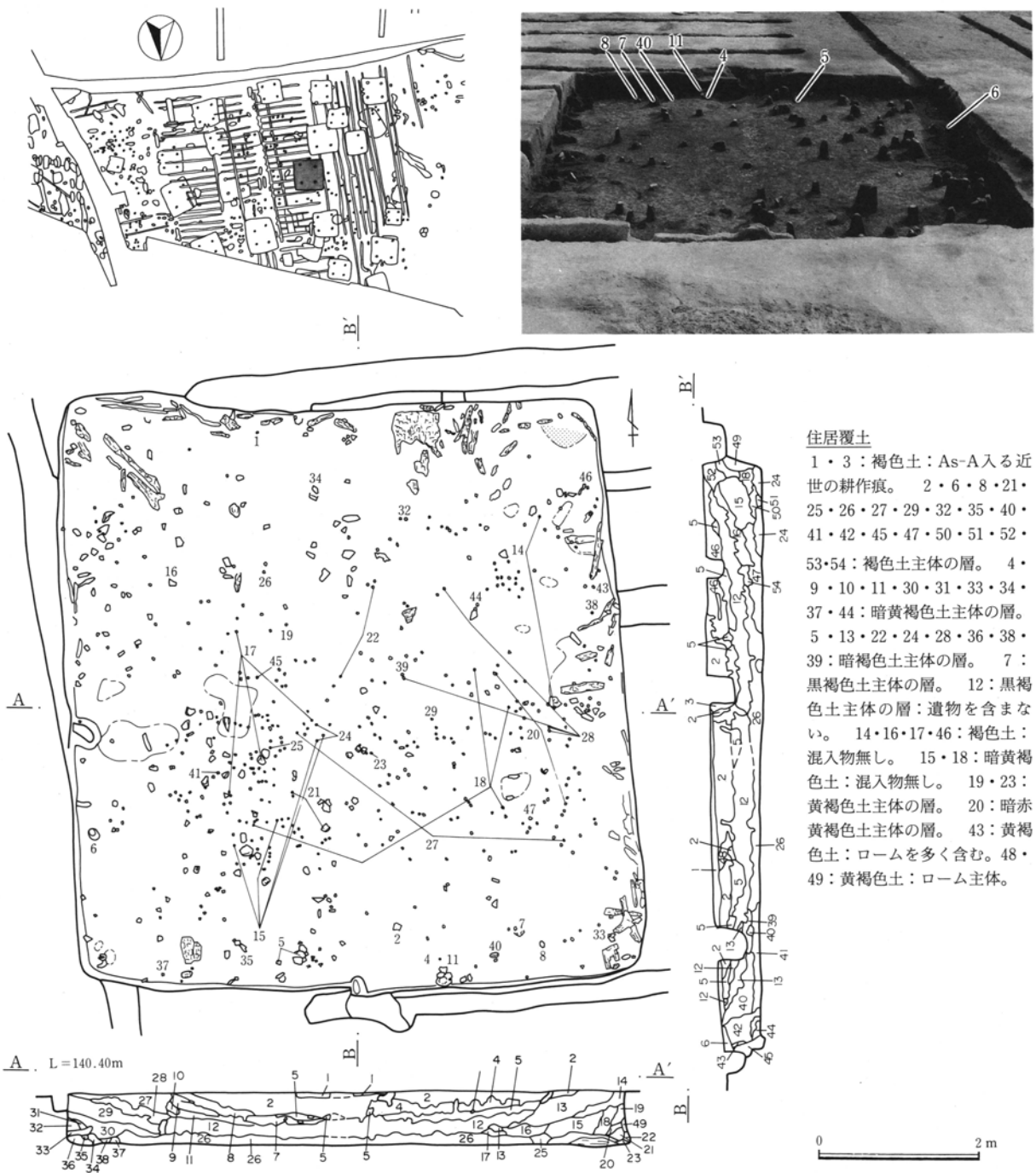


第522図 Y-3号竖穴住居出土遺物(1)

第3章 発見された遺構と遺物



第523図 Y-3号竖穴住居出土遺物(2)



第524図 Y-4号竖穴住居

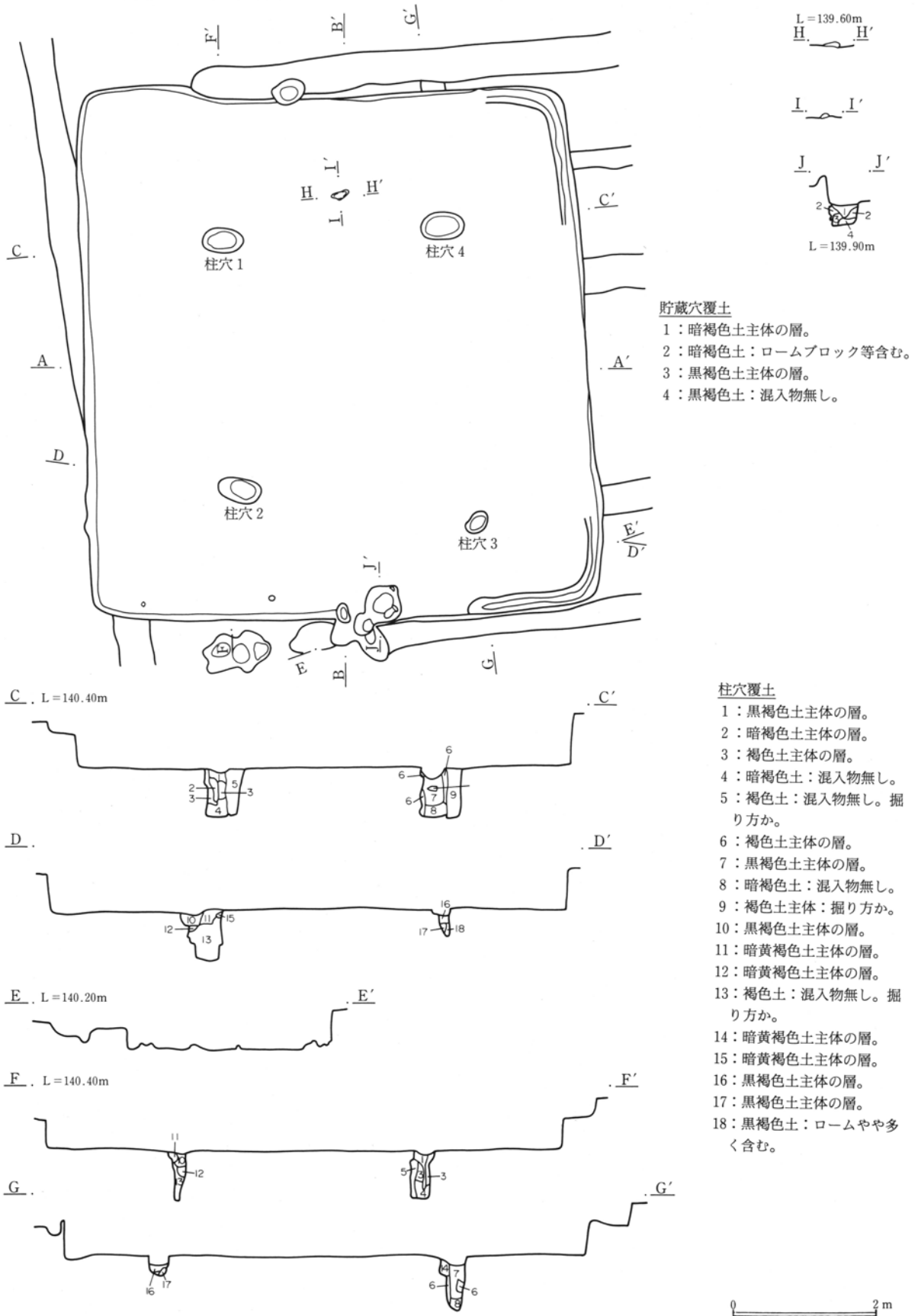
Y-4号竖穴住居（古墳時代初頭、第524～527図、図版214・227～228・250）

概要 本住居はY-3号竖穴住居の南西に位置し、Y-5号竖穴住居の東北東に近接する。主軸はほぼ北側を向く。やはり耕作溝に伴う攪乱を受けるが、比較的良好な遺存状況を示す。

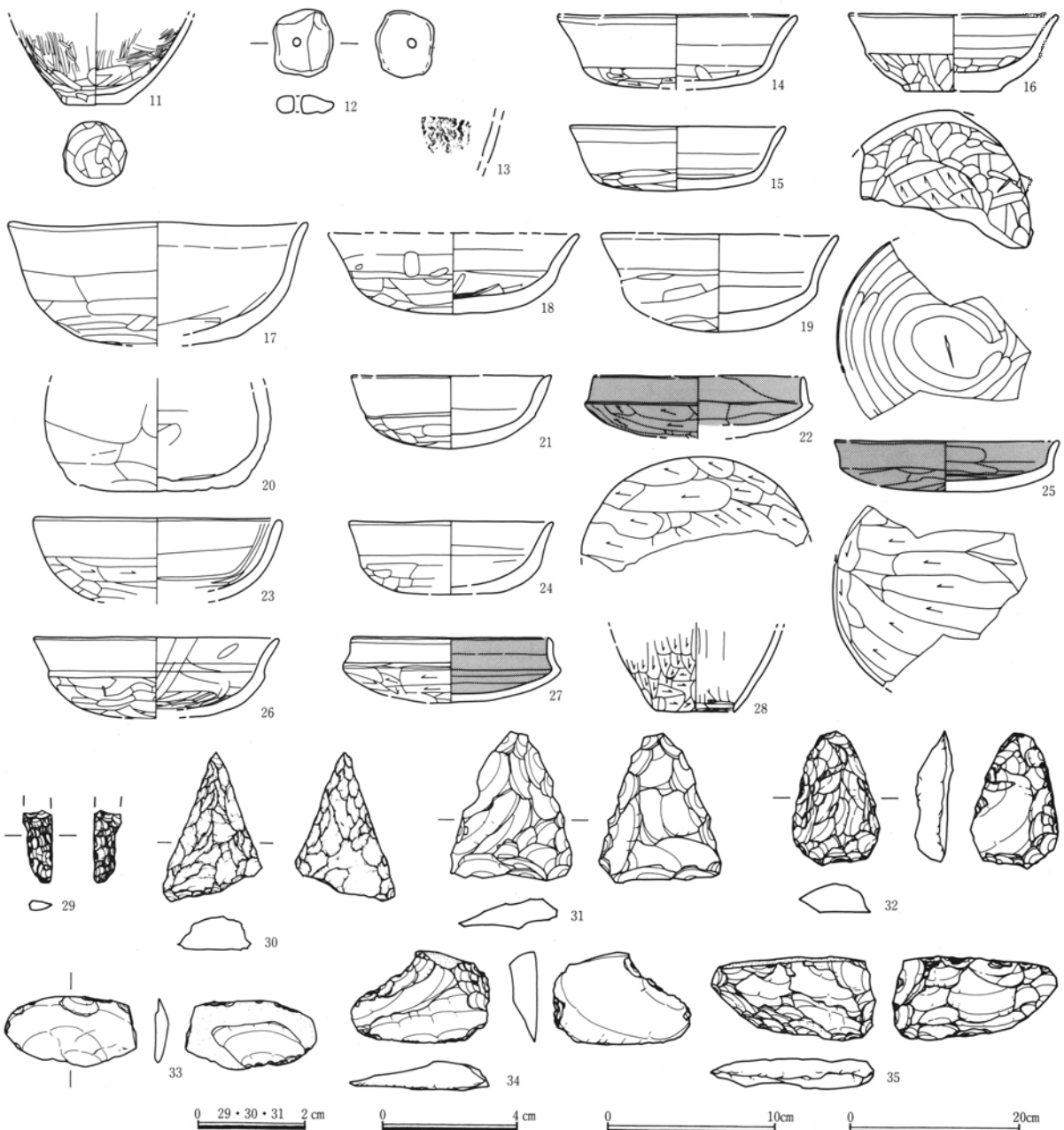
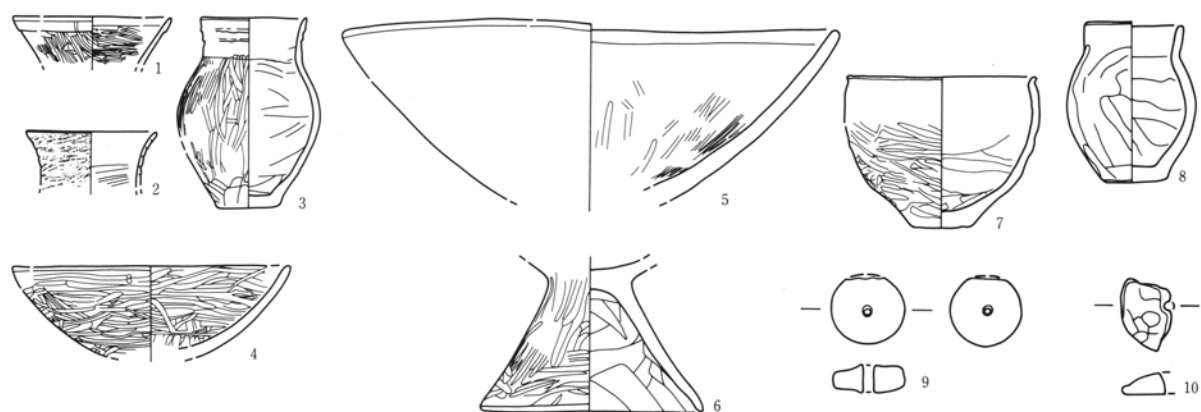
本住居に伴うと判断される遺物には、何れも弥生土器の壺（1,3）・甕（2）・鉢（4,5）・高坏（6）・小

型甕（7）・ミニチュア（8）、紡錘車（9,10）がある。また覆土中からは同時期の弥生土器壺の底部片（11）が出土しているほか、白玉（12）、6世紀から7世紀にかけての土師器坏（14～27）、や甑底部破片（28）があり、磨石（43）、こも編み石（44～47）も出土しており、縄文時代の打製石斧等の石器類（31～42）

第3章 発見された遺構と遺物



第525図 Y-4号竪穴住居遺構



第526図 Y-4号竪穴住居出土遺物(1)



第527図 Y-4号竪穴住居出土遺物(2)

も混入していた。

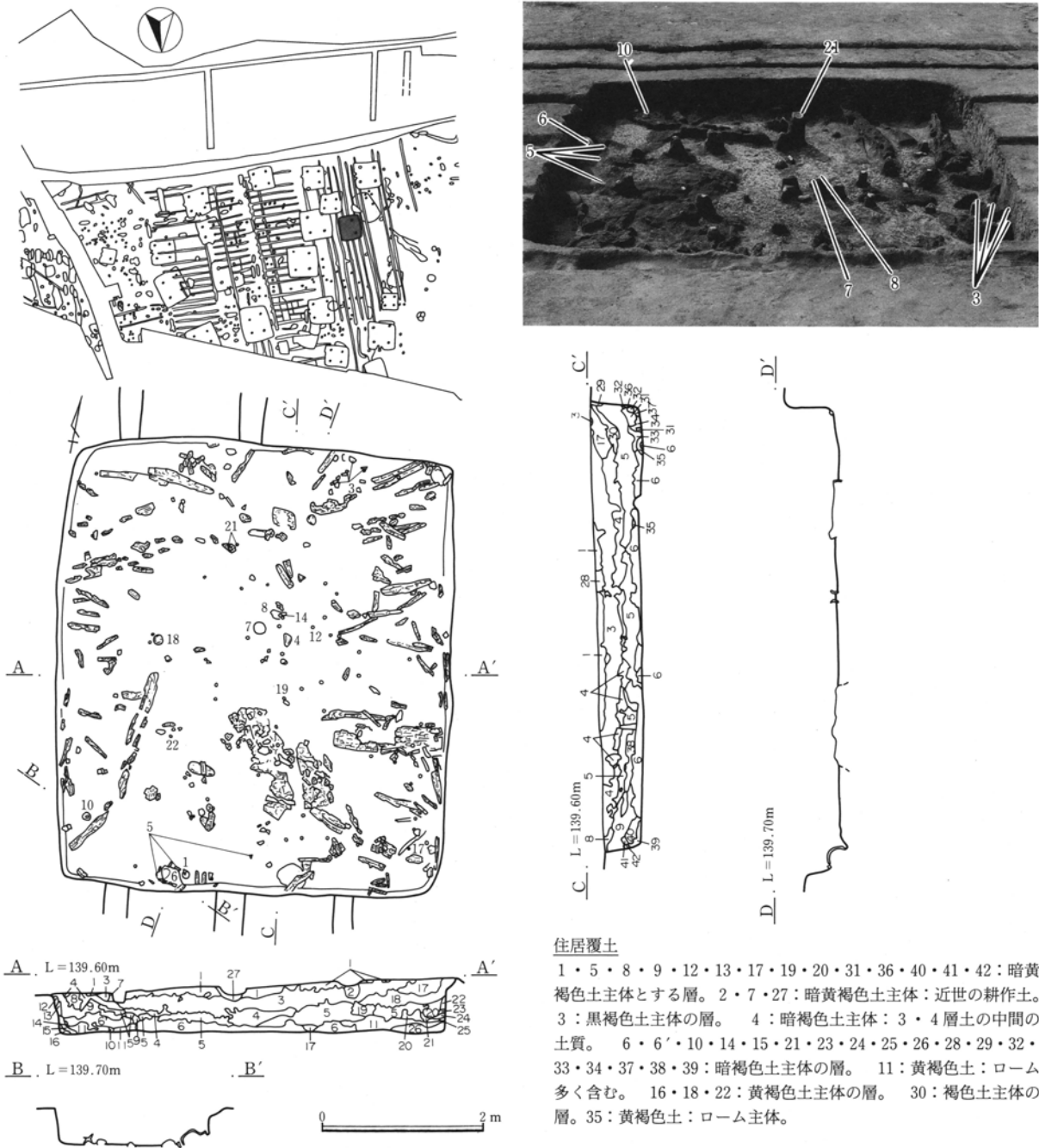
尚、覆土中出土の遺物には6世紀から7世紀中頃までのものが多いため、同時期頃まで本住居が窪地であった可能性が想定されるのである。

規模 長軸：728cm 短軸：701cm 深さ：59cm

柱穴1 径：56×36cm 深さ：68cm 柱穴2 径：60×34cm 深さ：72cm 柱穴3 径：28×24cm 深さ：30cm 柱穴4 径：58×40cm 深さ：68cm
土坑 径：50×50cm 深さ：32cm

構造 本住居は正方形に近いプランを呈する。床面は地床であり、炉は枕石を伴うが全体の形状や規模

は特定できなかった。柱穴は4本あり、何れも東西方向に長く南北方向に短く、当該期の他の竪穴住居と同様板状の柱材を使用していたものと推定される。柱穴1・2・4の材は柱間穴の断面観察から幅24～32cm、厚み16cm程度と推定される。尚、覆土中の12層土は上下の堆積土と異なり黒褐色で混入物をほとんど含まないことから、土屋根材であった可能性が考えられる。尚、南壁際中央付近には貯蔵穴若しくは入り口遺構と考えられる方形プランの土坑が掘られている。



第528図 Y-5号竪穴住居

Y-5号竪穴住居（古墳時代初頭、第528～529図、図版214～215・228～229）

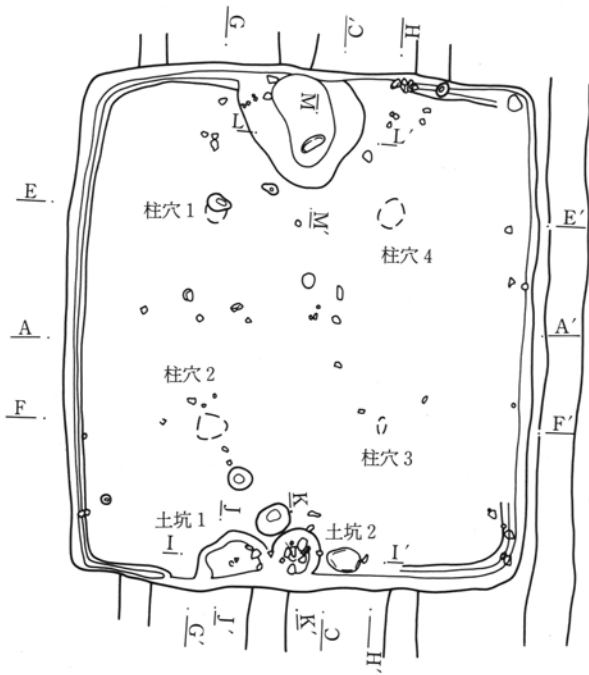
概要 本住居はY-4号竪穴住居の南西に近接し、主軸はY-2号竪穴住居と同様北北西を向く。本遺跡に於ける当該期の住居としてはやや小型であるが、掘り込みも深く遺存状況は良好である。本住居は所謂焼失家屋であり、炭化材も多く出土している。本住居に伴う遺物としては、何れも弥生土器の壺(2,4,5)、甕(7)、小型甕(1)、高坏(8,9,10,11)

住居覆土

1・5・8・9・12・13・17・19・20・31・36・40・41・42：暗黄褐色土主体とする層。2・7・27：暗黄褐色土主体：近世の耕作土。3：黒褐色土主体の層。4：暗褐色土主体：3・4層土の中間の土質。6・6'・10・14・15・21・23・24・25・26・28・29・32・33・34・37・38・39：暗褐色土主体の層。11：黄褐色土：ローム多く含む。16・18・22：黄褐色土主体の層。30：褐色土主体の層。35：黄褐色土：ローム主体。

があり、赤井戸式の弥生土器壺(6)も出土している。これらの多くは南壁際中央の土坑(土坑2)付近から出土している。また、覆土中からは同時期の弥生土器の器台(14)、甕(12)、壺(15)が出土し、6世紀後半から7世紀前半の土師器坏(20,21)も見られた。このほか縄文時代の石器(16,17,18)や後代の砥石(22)なども出土している。

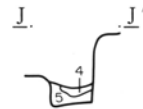
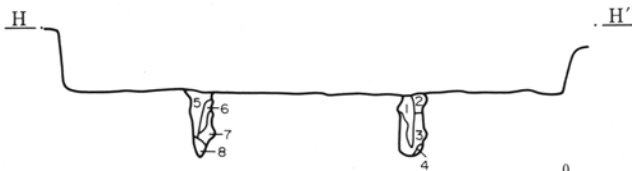
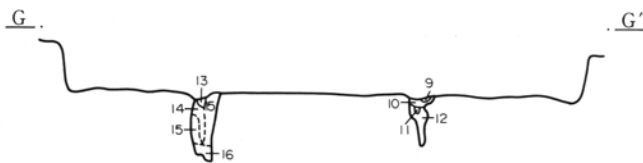
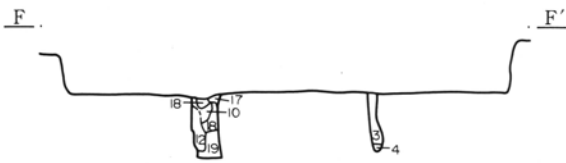
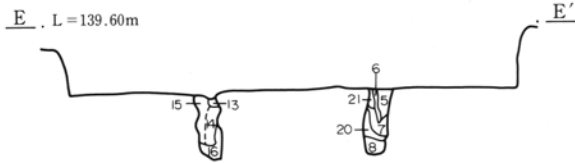
第3章 発見された遺構と遺物



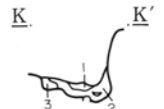
貯蔵穴覆土

1：暗褐色土：ローム等少し含む。 2：黒褐色土：炭化物・焼土・ローム少し含む。 3：褐色：ローム主体。 4：暗褐色土：ローム少し、炭化物僅かに含む。 5：暗褐色土：ローム僅かに含む。

I. L=139.40m



L=139.40m



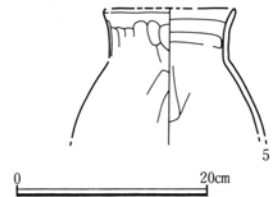
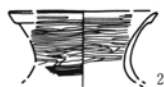
L=139.0m



柱穴覆土

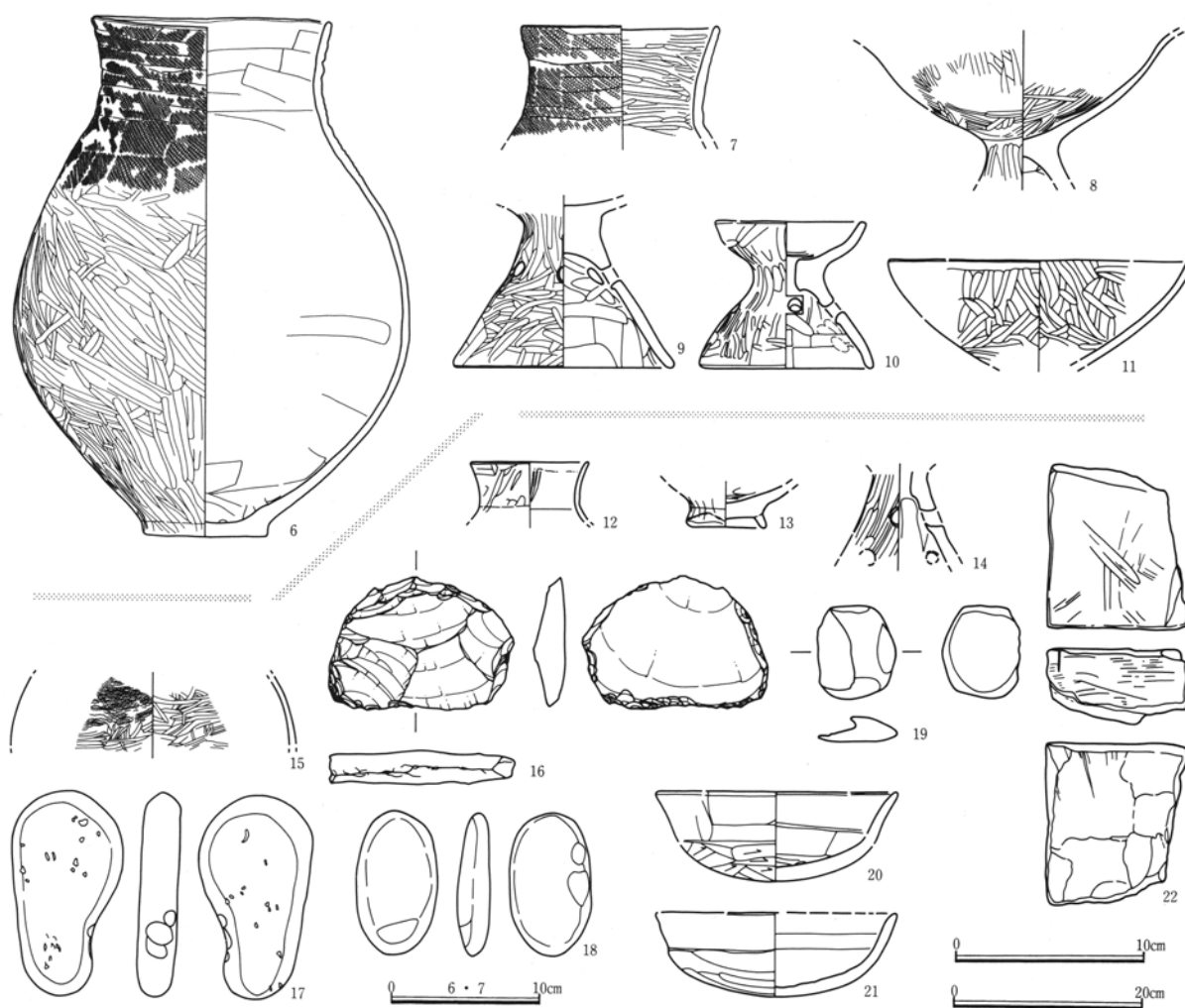
1・6・10・11：黒褐色土主体の層。 2・20：褐色土主体の層。 3・7・12・13・14・21：暗褐色土主体の層。 4・16・19：暗褐色土：混入物無し。 5・9：暗黄褐色土：ローム多く含む。 8：暗黄褐色土：ローム主体。 15：暗黄褐色土：混入物無し。 17：暗黄褐色土主体の層。 18：黄褐色土：ロームかなり多く含む。

0 2m



0 20cm

第529図 Y-5号竪穴住居遺構及び出土遺物



第530図 Y-5号竪穴住居出土遺物

規模 長軸：562cm 短軸：494cm 深さ：67cm

炉 径：124×126cm 深さ：8cm

柱穴1 径：30×28cm 深さ：75cm 柱穴2 径：32cm 深さ：68cm

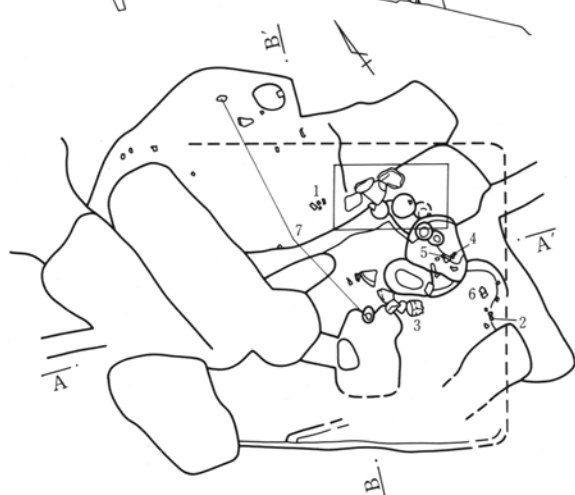
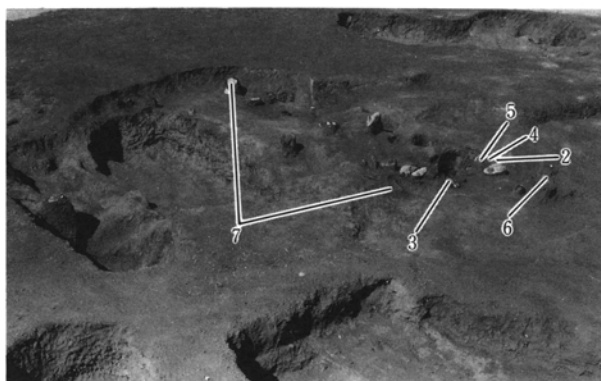
南壁際遺構 土坑1 径：88×48cm 深さ：32cm

土坑2 径：51×50cm 深さ：33cm ピット 径：37×31cm 深さ：37cm

構造 本住居は方形のプランを呈し、しっかりした掘り込みをもって造られている。床面は地床であり、幅10~20cm内外、深さ7cm以下の周溝が西・北壁と中央付近を除く南壁付近に確認された。炉は柱穴1の北側、北壁際に1mを越える大きな浅い掘り込みを持ち、絹雲母片岩の細長い枕石を伴っている。柱穴は2カ所を確認できたに過ぎなかったが、柱穴1は該期の住居に見られたのと同様東西にやや伸びる

楕円形のプランを呈している。また、南壁際中央には土坑2があり、その左右には対をなすように土坑1と、幅26cm、長さ34cm、厚さ10cmほどの自然石が設置されている。この2つの土坑と自然石からなる遺構は入り口に伴う遺構の可能性があり、また土坑2は遺物の出土状況等から貯蔵穴である可能性を持っている。

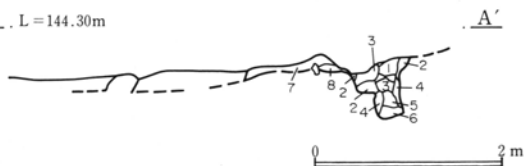
本住居に多量に見られた炭化材の多くは垂木材と推定されるが、棧らしいものも散見され、西南部の'a'とした材は北西の柱材の転倒したものと推定される。また、南部の炭のまともりは特徴的で葺き材と推測される。尚、炭化材の燃焼状況から土屋根の存在が想定されるが、土葺き材としては炭化材を含み黒色の強い6層土やロームを多く含む11層土が考えられる。



住居覆土

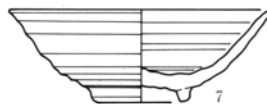
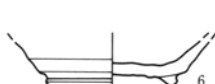
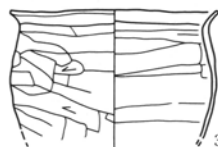
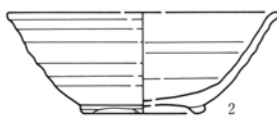
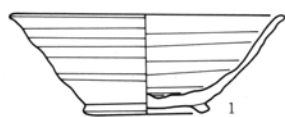
- 1：褐色土：焼土ブロック多量に含む。
- 2：褐色土：夾雑物なし。
- 3：暗黒褐色土：炭化物少量、褐色土微量。
- 4：暗黒褐色土：褐色土微量に混入。
- 5：暗黒褐色土：暗黒褐色土と褐色土の混土。
- 6：暗黒褐色土：4層土と5層土の混土。
- 7：褐色土：くすんだ暗褐色土を微量に含む。
- 8：暗褐色土：比較的粘性強。焼土微量。

A . L=144.30m



0 2m

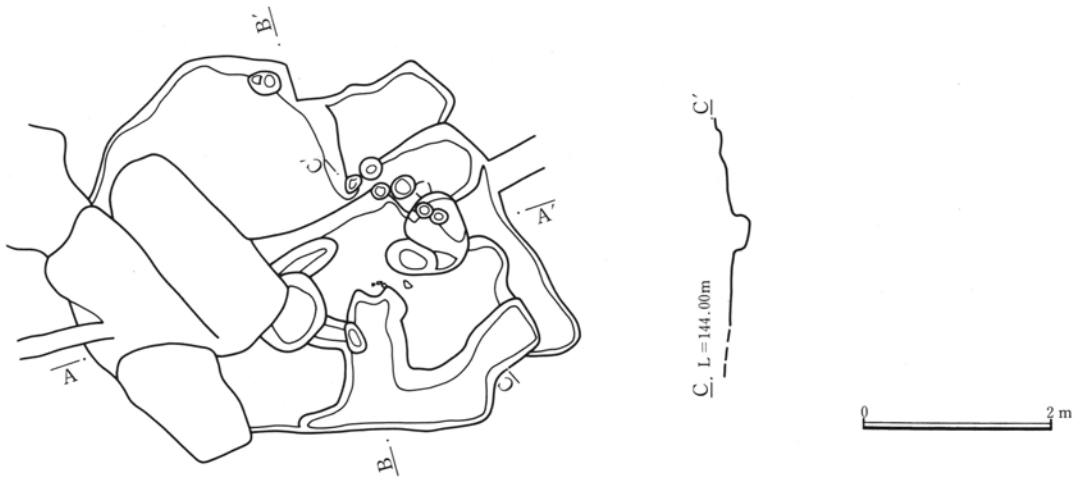
0 1m



0 10cm

0 20cm

第531図 H-171号住居及び出土遺物



第532図 H-171号住居掘り方

H-171号住居（平安時代、第531～532図、図版204・229）

概要 本住居は小型の竪穴住居跡であるが、上部は削平され157・160号土坑や近世以降と判断される攪乱等によって壊されており、遺存状況は極めて悪い。住居の形態・規模もつまびらかでない。僅かにカマド前の狭い範囲で床面を確認することができ、カマドの痕跡と壁と推定される南辺のラインから主軸は北北東と想定されるのである。

この僅かに残されたカマド前の床面付近からは10世紀初頭頃の所産と考えられる須恵器碗(1,2)、羽釜(3)、小型甕(4)といった遺物が出土しており、また、覆土中からも当該期の須恵器碗(5,6,7)が出

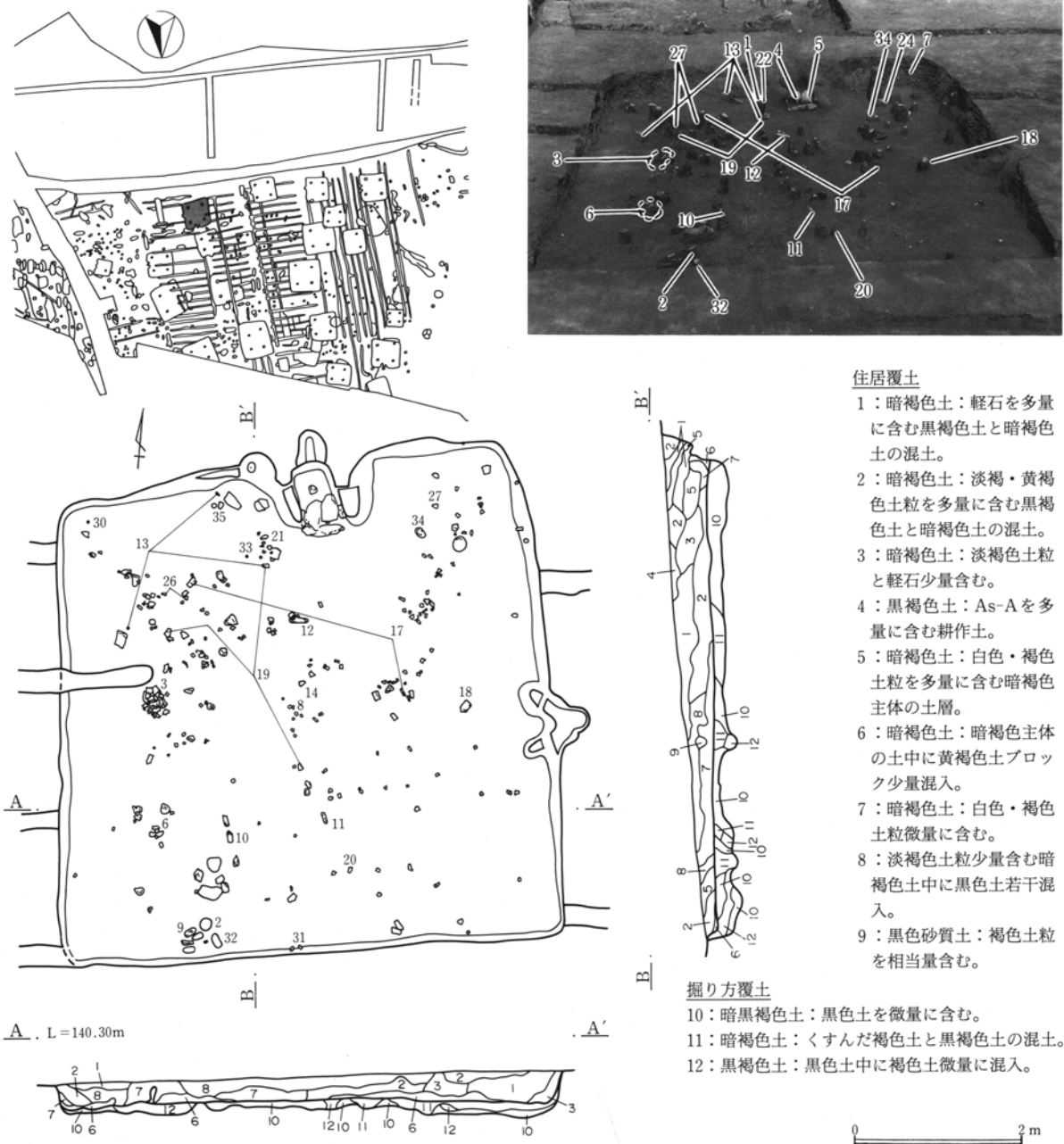
土している。

規模 長軸：300cm以上 短軸：260cm以上

カマド 幅：72cm以上 貯蔵穴：78×60cm

構造 横長のプランを呈すると推定される。掘り方等は特定できなかった。カマドは右側袖の袖材として使用されたと思われる立石があり、33cm隔てて同様の小ピットが残るので立石を袖材として使用したことが想定される。この袖材と袖材を結ぶラインの住居内側には浅い掘り込みが見られる。カマド右手前には貯蔵穴が掘られているが、柱穴は認められなかった。





第533図 H-172号住居

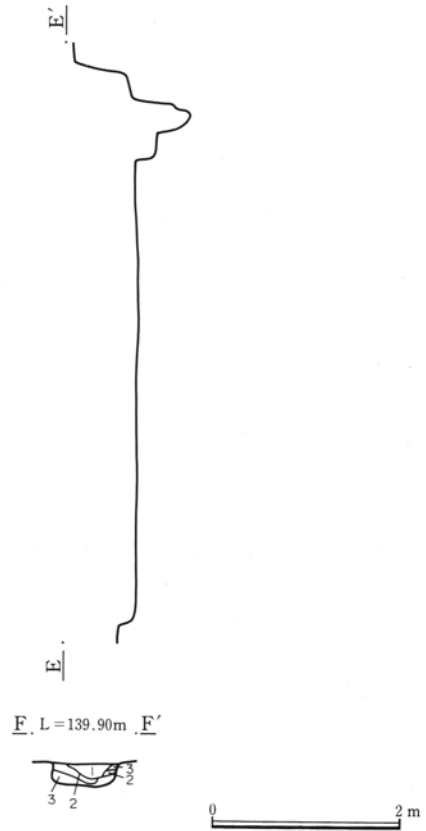
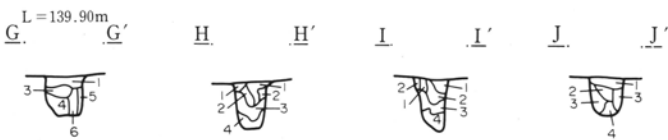
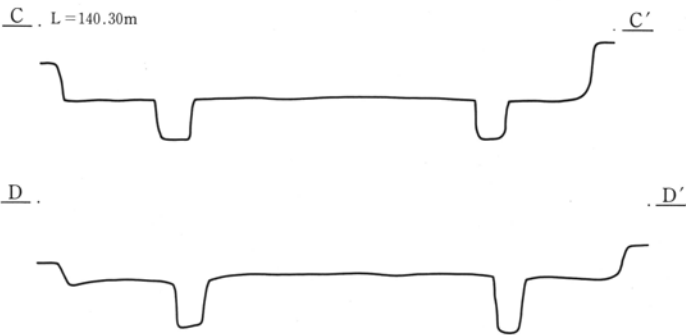
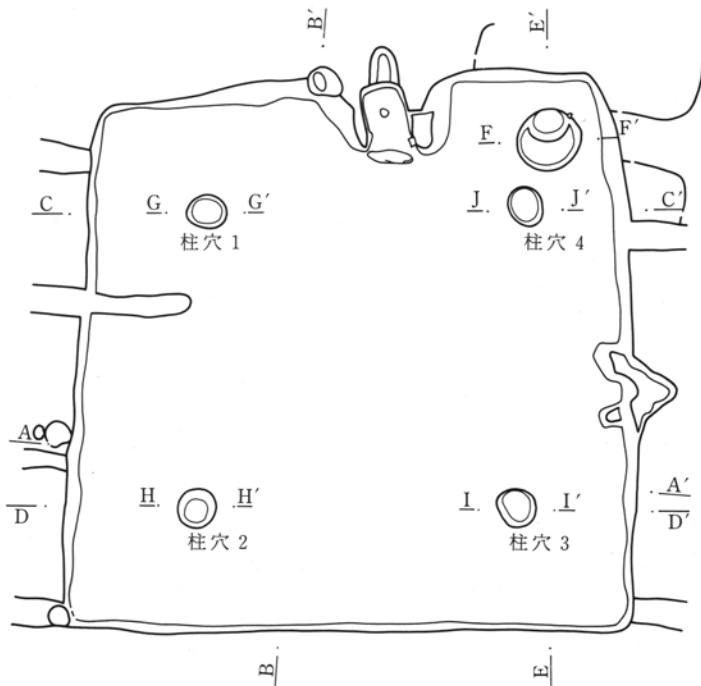
H-172号住居(古墳時代後期, 第533~537図, 図版204・230~231・250)

概要 本住居は4本柱を持ち、F区に於いては標準的な大きさを示す竪穴住居跡である。確認面の傾斜から、北側に向かって遺存状況が良くなる。

本住居の特徴として北と東の2方向にカマドを持つことが上げられる。遺存状況から2つのカマドのうち北カマドが廃棄時に使用されていたものと判断されるが、東カマドも袖を残しており、D・E区に見られたのと同様に単純な作り替えによるものとは

考えにくい。

出土位置から本住居に伴うと判断したものには、何れも6世紀後半と判断される土師器の坏(1)や甑(3)、甕(4,5)があり、他に『キ』字の線刻の入る須恵器蓋(2)や須恵器高坏の脚部(6)があり、砥石(8)やこも編み石(9・10・11・12)も出土している。特に土師器甕は北カマド内に並べて設置されていたようである。このほか、覆土中には縄文土器片(27)



貯蔵穴覆土

- 1：暗黒褐色土：粘性強。黄褐色土ブロックと焼土微量に混入。
- 2：暗黒褐色土：淡黄褐色土との混土層。
- 3：黄褐色土：As-B含み、黒色土微量混入。

柱穴覆土

- 1：暗褐色土：淡黄褐色土ブロック微量含。
- 2：暗褐色土：黄褐色土ブロック少量含む。
- 3：暗黒褐色土：暗黒褐色土と暗褐色土の混土。粘性に富む。
- 4：暗黒褐色土：夾雑物殆ど無く粘性富む。
- 5：暗褐色土：夾雑物殆ど無く粘性富む。
- 6：暗褐色土：黒色土少量含み比較的よく締まる。

第534図 H-172号住居遺構

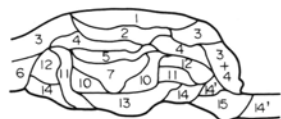
や石器 (29) が混入し、古墳時代後期と判断される遺物 (13~26,30,31,33,34) があるが、7世紀後半のものが多く本住居がその時期まで窪地等の痕跡として残されていたことが想定される。

規模 長軸：602cm 短軸：583cm 深さ：18~54cm
 北カマド 幅：144cm 奥行き：119cm 左袖 幅：47cm 長さ：64cm 高さ：34cm 右袖 幅：59cm 長さ：76cm 高さ：20cm 燃烧部 径：66×40cm 煙道 幅：14cm 長さ：30cm

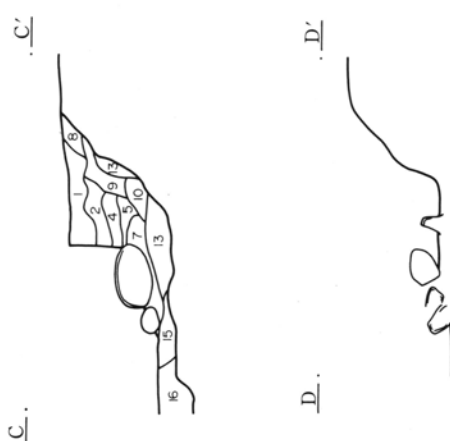
東カマド 幅：51cm 奥行き：91cm 左袖 幅：39cm 長さ：41cm 高さ：17cm 右袖 幅：24cm 長さ：36cm 高さ：6cm 燃烧部 径：26×32cm
 煙道 幅：30cm以下 長さ：41cm
 柱穴1 径：41×36cm 深さ：44cm 柱穴2 径：42×38cm 深さ：47cm 柱穴3 径：42×38cm 深さ：58cm 柱穴4 径：41×36cm 深さ：41cm
 貯蔵穴 径：67×64cm 深さ：62cm(段差：37cm)
構造 本住居はほぼ正方形のプランを呈し、暗褐色



A. L=140.30m A'



B. B'



C. C'

D. D'

北カマド覆土

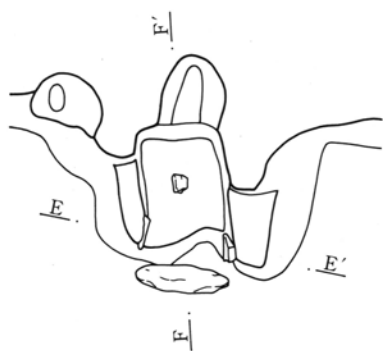
1: 暗褐色土: 軽石・焼土微量に含。 2: 暗褐色土: 褐色微粒子・焼土微量に含。 3: 暗褐色土: 少量の白色微粒子・焼土等含。 4: 暗褐色土: 少量の白色微粒子と若干の焼土混入。 5: 暗赤褐色土: 多量の焼土ブロック等含。 6: 暗黒褐色土: 褐色土との混土。焼土・灰色粘土微量に入。 7: 暗黒褐色土: 5層に似るが焼土少なく黒色土微量に入。 8: 暗赤褐色土: くすんだ焼土微量に混入。 9: 暗赤褐色土: 焼土・炭化物・暗褐色土混入。 10: 暗赤褐色土: 焼土・炭化物少量入。

袖構築材

11: 暗赤褐色土: 焼土ブロックと黒褐色土の混土。 12: 暗褐色土: 比較的良く締まる。 14: 黒色土: 14'層土と褐色土の混土。 14': 黒色粘質土: 白色土と微量の灰白色粘質土入。

掘り方覆土

13: 赤褐色土: 焼土主体。黒汚。 15: 暗褐色土: 暗黒褐色土と淡褐色土の混土。 16: 暗褐色土: 黒色土微量混入。



E. L=140.30m E'

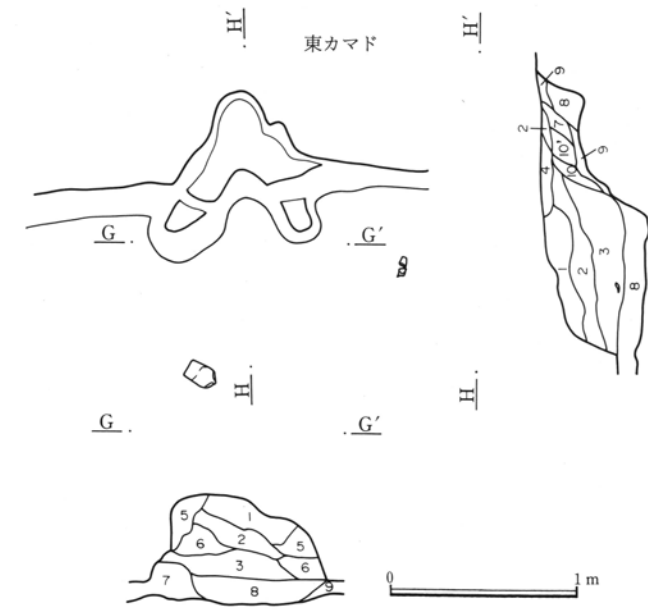


あるいは黒褐色の土壌を埋め戻して床を造り出している。

カマドは北側と東側の2カ所にあり共に袖を残す。このうち廃棄段階での使用が想定される北カマドは、黒色系の土に一部に焼土を混ぜて袖を造り、自然石の天井石を乗せている。燃焼部は方形の区画である。

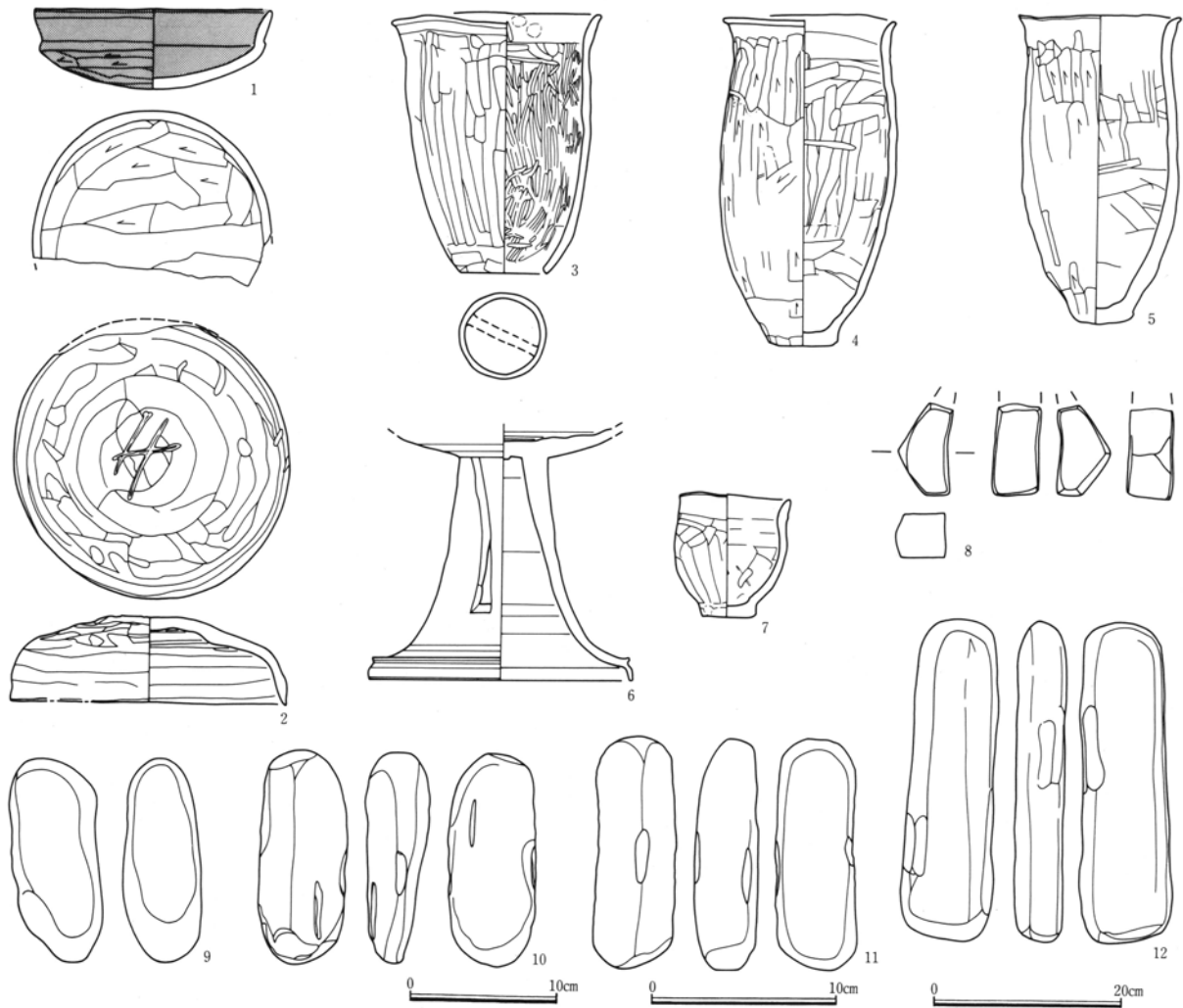
柱穴は掘り込みのしっかりした楕円形や隅丸方形プランものが4本あるが、断面観察から柱の形状を特定することはできなかった。尚、貯蔵穴は円形プランで中段を持つものが、北カマドの右側に掘られている。

第535図 H-172号住居北カマド



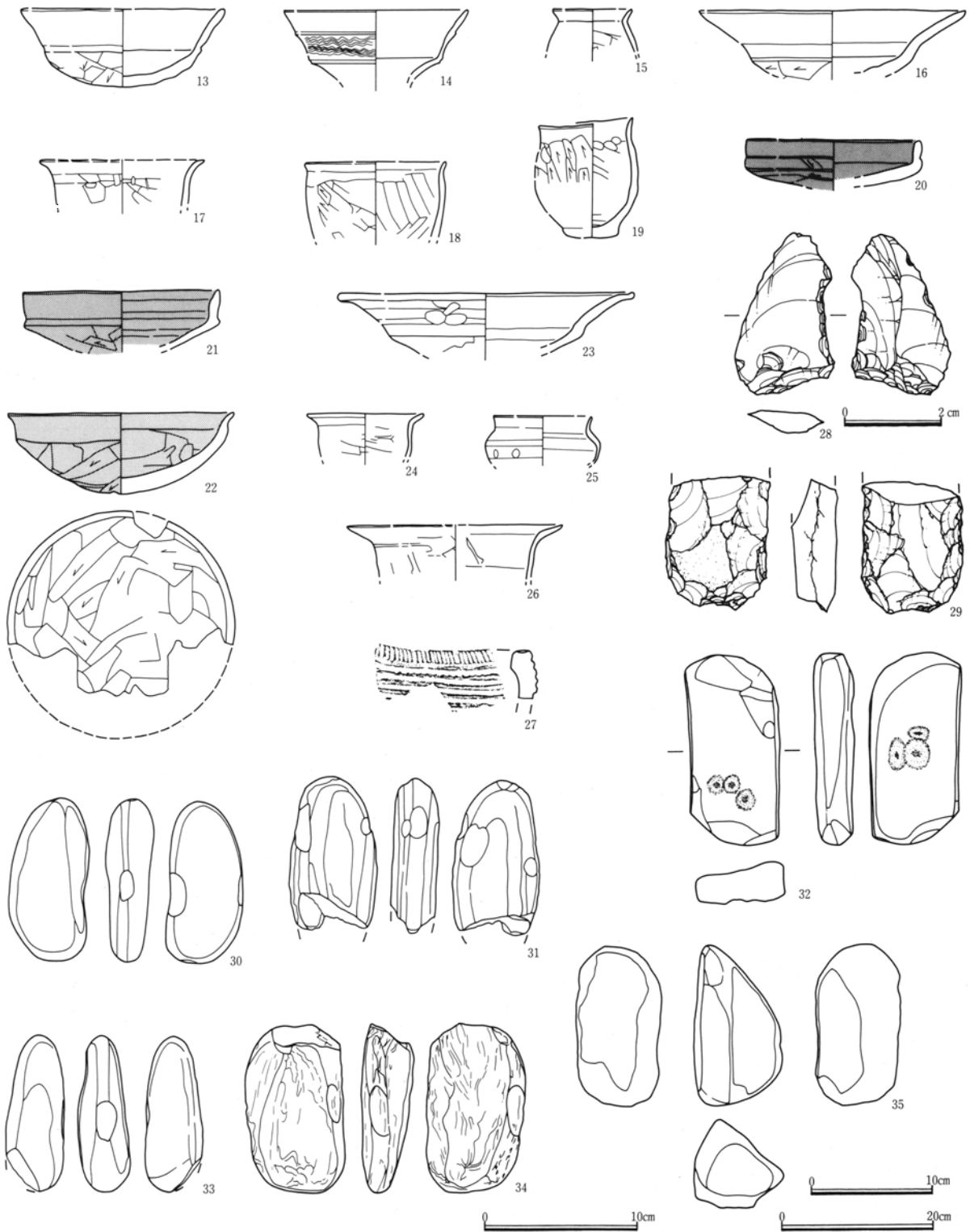
東カマド覆土

1：暗褐色土 2：暗褐色土 3：暗褐色土：白色微
 粒子・褐色土粒相当量含。 4：暗褐色土：淡褐色土
 と暗褐色土の混土。 5：暗褐色土：褐色土粒相当量
 含。 6：暗褐色土：多量の褐色土ブロック等含。
袖構築材・掘り方覆土
 7：暗黒褐色土：黒色土・暗褐色土・明褐色土の混土。
 8：暗黒褐色土：黒色土と暗褐色土の混土。焼土微量。
 9：暗褐色土：黒色土微量に入。 10：暗褐色土：焼
 土ブロック微量に含。 10'：10層に比し焼土多め。



第536図 H-172号住居東カマド及び出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物



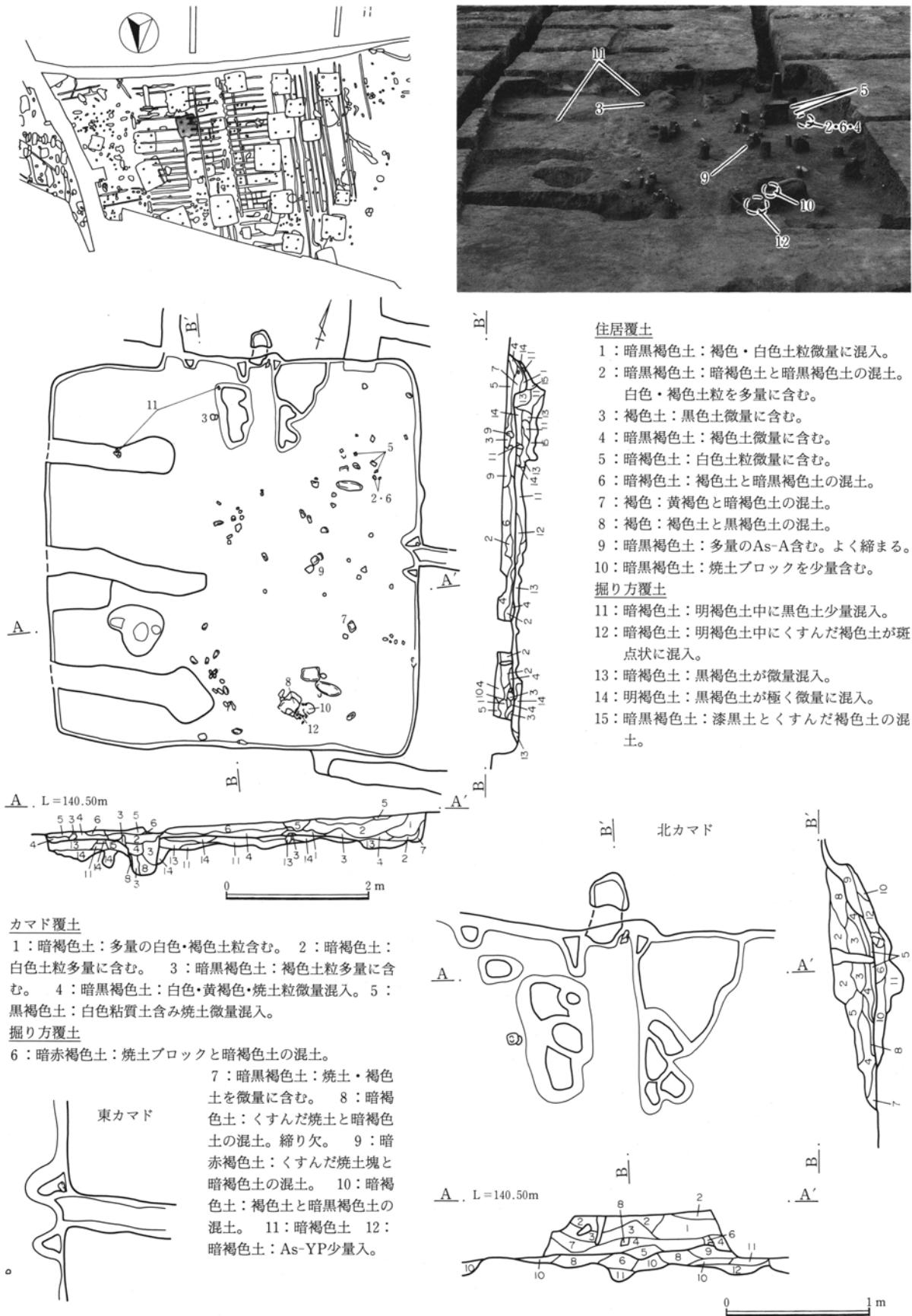
第537図 H-172号住居出土遺物

H-173号住居 (古墳時代後期, 第538~540図, 図版204~205・231)

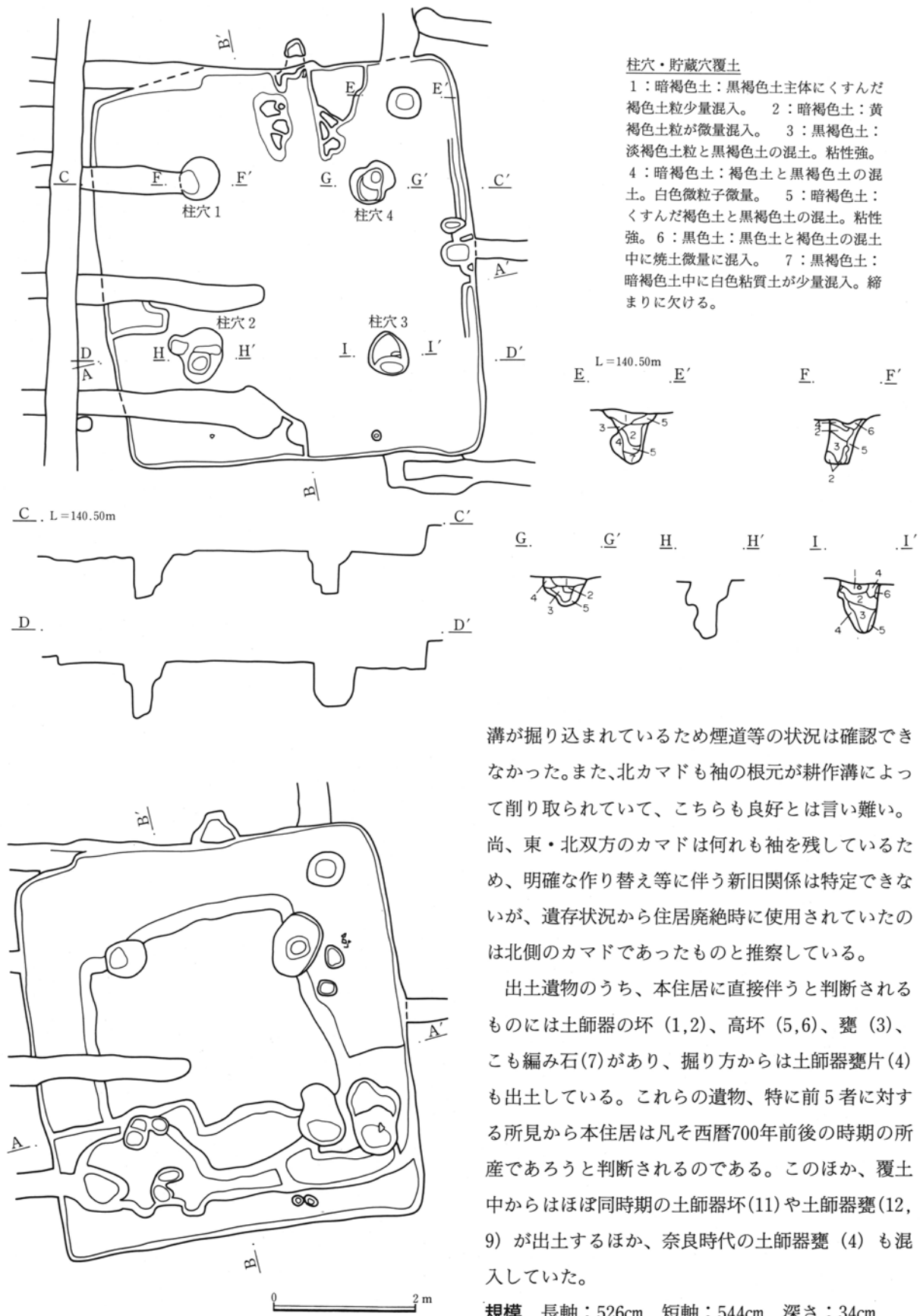
概要 本住居はH-172号住居の北側に近接し、F区に於いては標準的な大きさを示す竪穴住居跡である。本住居の、特に西半分には4本の耕作溝が深く

入り込んで遺構を壊している。

本住居もH-172号住居と同様に東と北の2方にカマドを持っているが、東のものは中心線上に耕作



第538図 H-173号住居及びカマド

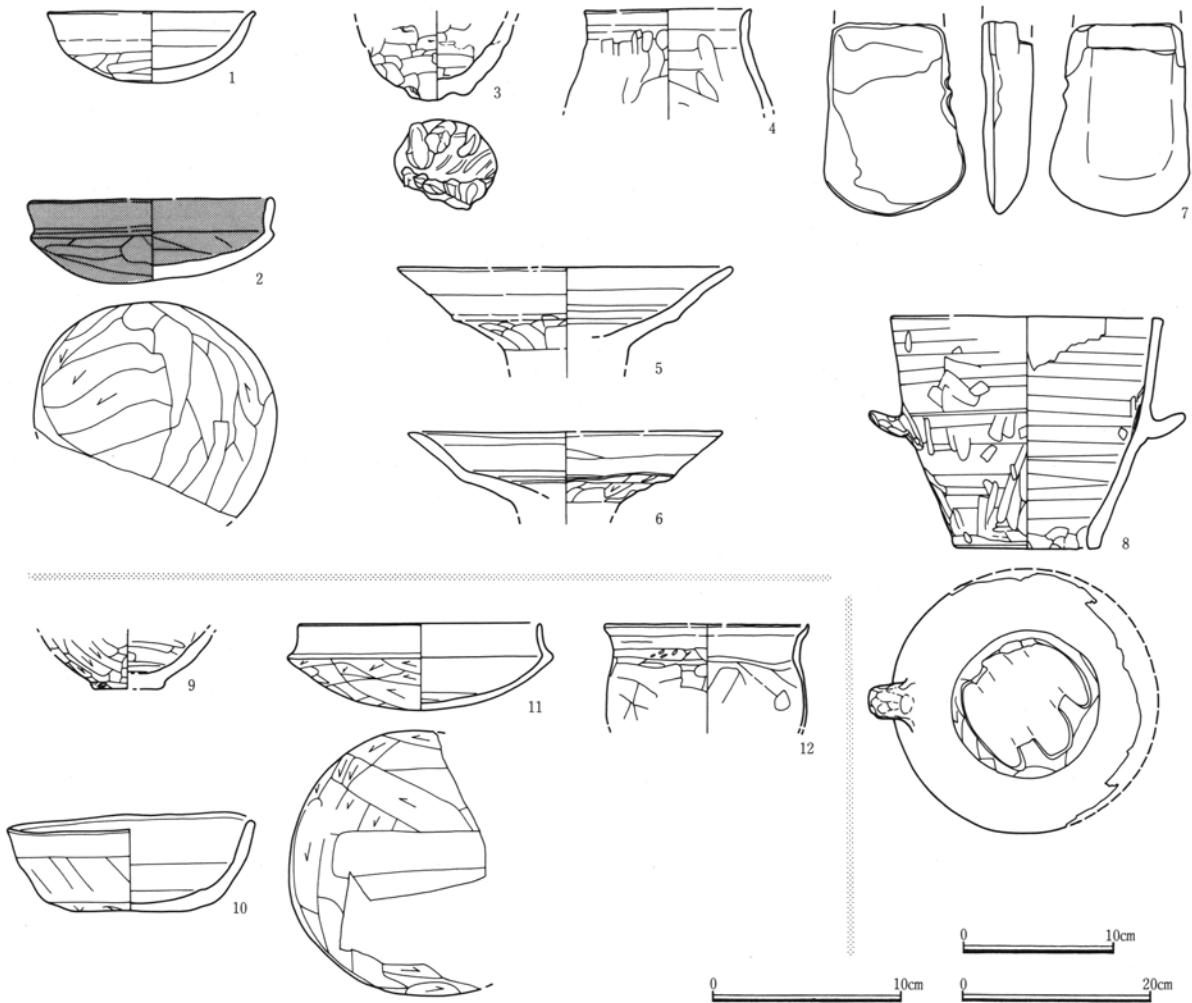


第539図 H-173号住居遺構

溝が掘り込まれているため煙道等の状況は確認できなかった。また、北カマドも袖の根元が耕作溝によって削り取られていて、こちらも良好とは言い難い。尚、東・北双方のカマドは何れも袖を残しているため、明確な作り替え等に伴う新旧関係は特定できないが、遺存状況から住居廃絶時に使用されていたのは北側のカマドであったものと推察している。

出土遺物のうち、本住居に直接伴うと判断されるものには土師器の坏(1,2)、高坏(5,6)、甕(3)、こも編み石(7)があり、掘り方からは土師器甕片(4)も出土している。これらの遺物、特に前5者に対する所見から本住居は凡そ西暦700年前後の時期の所産であろうと判断されるのである。このほか、覆土中からはほぼ同時期の土師器坏(11)や土師器甕(12,9)が出土するほか、奈良時代の土師器甕(4)も混入していた。

規模 長軸：526cm 短軸：544cm 深さ：34cm
北カマド 幅：165cm以上 奥行き：173cm 左袖



第540図 H-173号住居出土遺物

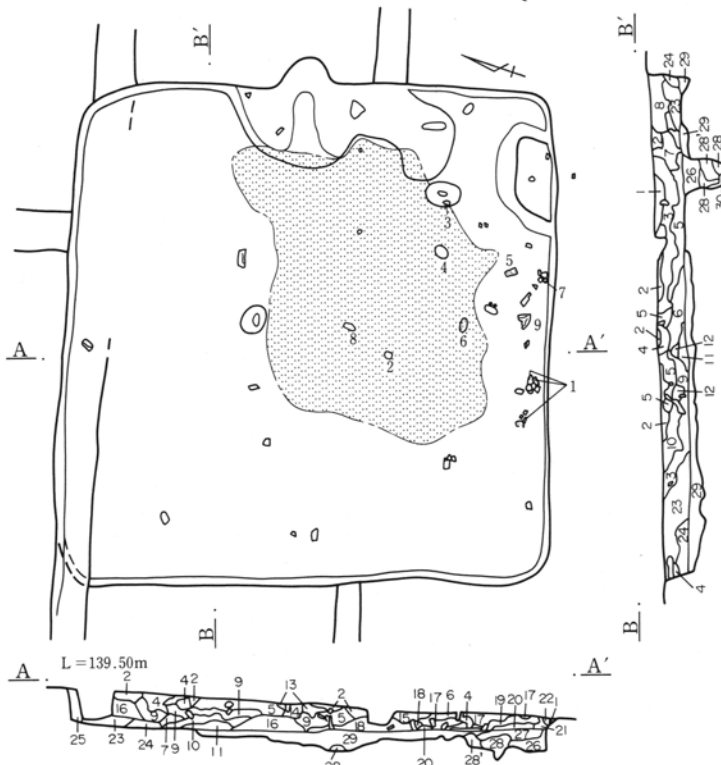
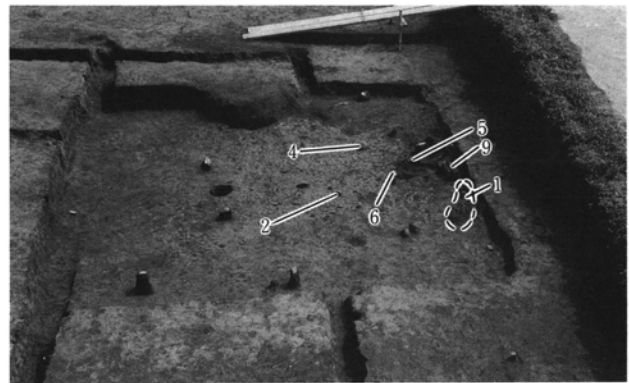
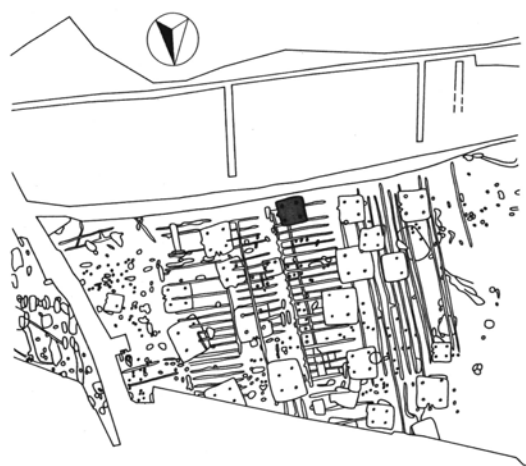
幅：48cm以上 長さ：130cm 高さ：18cm 右袖
 幅：83cm 長さ：129cm 高さ：12cm 燃烧部
 径：33×118cm 煙道 幅：20cm 長さ：48cm
 東カマド 幅：72cm以上 奥行き：46cm以上 左袖
 幅：29cm 長さ：34cm 高さ：13cm 右袖 幅：
 23cm 長さ：22cm 高さ：24cm 燃烧部 径：34
 ×24cm

柱穴1 径：60×54cm 深さ：68cm 柱穴2 径
 ：78×56cm 深さ：82cm 柱穴3 径：57×57cm
 深さ：64cm 柱穴4 径：66×52cm 深さ：64cm
 貯蔵穴 径：48×44cm 深さ：69cm

構造 本住居は中央の平場の周囲に89～185cm(平均
 110cm内外)幅、深さ7～11cmの溝状の掘り込みを持
 つ掘り方を、暗褐色土等の土壌で埋め戻して床を造
 り出している。

4基の柱穴を有するが、形態から掘り直しの行わ
 れた可能性が考慮される。また、断面観察から柱の
 径は25cm程度あったものと推定される。貯蔵穴は方
 形のプランを持ち、北カマドの右側に掘られている。

カマドは前述したように、東と北の2カ所に持つ
 ている。双方のうち遺存状況の良い北カマドの所見
 を述べたい。北カマドは北壁に係る位置に180×150
 cm程の浅い掘り方を掘り、これを埋め戻して造って
 いる。袖は焼土と暗褐色系の土壌の混土で造ってい
 るが、袖の幅は広く長い。袖に挟まれた燃烧部は長
 方形のプランをなしている。煙道はトンネル状をな
 して、燃烧部より数cm高い位置から壁面をやや
 斜め上方向に掘り込んでいる。煙道のトンネルは40
 cm程掘り込んでから上方に抜けている。



住居覆土

1・2：暗褐色土：後世の耕作土と思われるローム漸移層（以下「漸移層」）土上層土を中心とした混土。 3：黒褐色土／7・13：暗褐色土／12：黒褐色土／18：にぶい黄褐色土：漸移層上層土中心の混土。 4：明黄褐色土：ロームブロック層。 5・24：褐色土／23：黄褐色土：漸移層下層土中心の混土。 6：にぶい黄褐色土：漸移層下層土ブロック中心。 8：にぶい黄褐色土／9・25：暗褐色土：漸移層土中心の混土。 10：褐色土：ロームと漸移層土中心の混土。 19：褐色土／11：暗褐色土：漸移層土中心の混土。 14：暗褐色土：9層と13層土のブロック層。 15：にぶい黄褐色土：ロームと漸移層上層土中心のブロック層。 16：黄褐色土：ローム中心のブロック層。 17：黄褐色土：18層土にロームやや多く入る。 20：黒褐色土：黒ボクに漸移層上層土の入る混土。 21：にぶい黄褐色土：漸移層土とロームの小ブロック層。 22：漸移層上層土とロームの混土。

掘り方覆土

26：黒褐色土：暗褐色土と褐色土主体の混土。 27：暗褐色土：くすんだ褐色土と暗黒褐色土の混土。 28：暗褐色土：暗褐色土主体の混土。 28'：28層に比し黒色土多。 29：暗褐色土：黒色・褐・淡褐色土多量に混入。 30：暗黒褐色土：暗褐色土主体。灰白色粘土若干入。

第541図 H-174号住居

H-174号住居(古墳時代後期, 第541~543図, 図版205・231~232・250)

概要 本住居はF区南部の谷地部と接する縁辺部に位置する。耕作溝による攪乱を受けている。

出土遺物のうち本住居に伴うと判断されるものには7世紀前半の土師器坏(3,4)、6世紀後半の甕(1)と6~7世紀の甗(2)、こも編み石(5~7)がある。その他、覆土中からは7世紀後半のものと思われる土師器甗(9)や縄文時代の石器として凹石(11)と磨石(10)が出土している。また南壁下の東寄り覆土中には炭化物も確認された。

規模 長軸：543cm 短軸：518cm 深さ：48cm

カマド 幅：135cm 奥行き：96cm 左袖 幅：

57cm 長さ：86cm 高さ：26cm 右袖 幅：

長さ：93cm 高さ：16cm 燃焼部 径：50×62cm

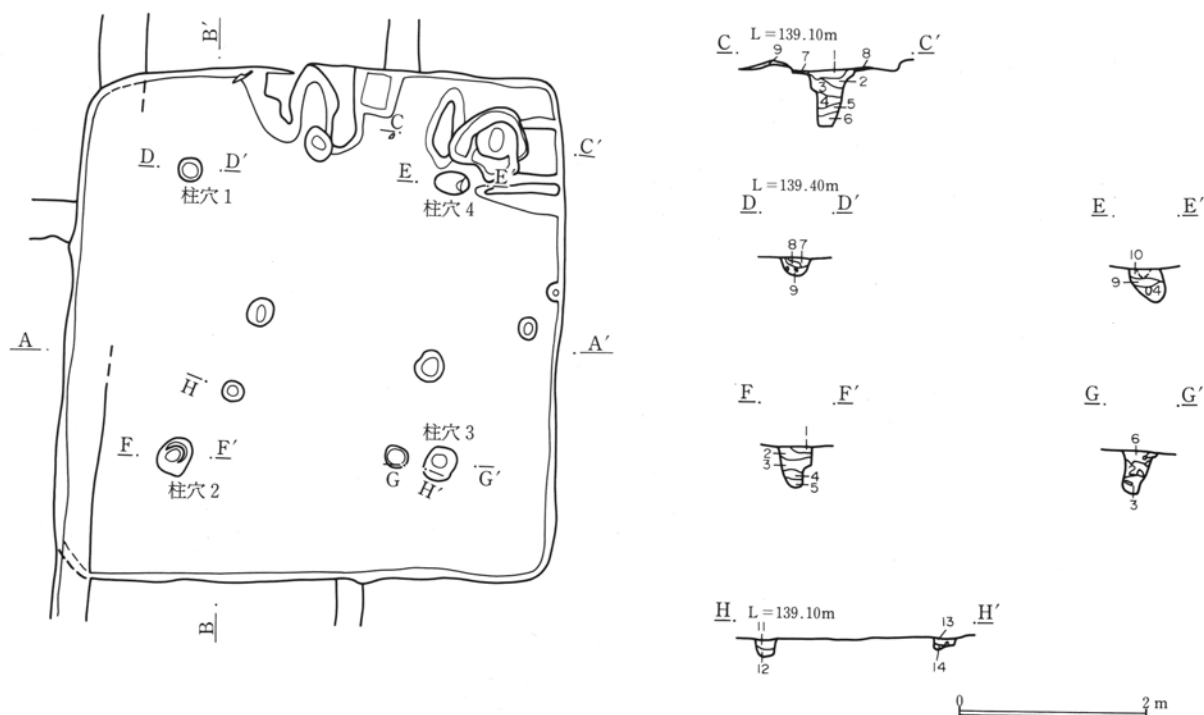
柱穴1 径：45×36cm 深さ：44cm 柱穴2

径：42×42cm 深さ：49cm 柱穴3 径：36×32cm

深さ：60cm 柱穴4 径：43×36cm 深さ：50cm

貯蔵穴 径：45×43cm 深さ：54cm 肩部段幅 18

cm 深さ：6~20cm



貯蔵穴覆土

1：にぶい黄褐色土：ローム漸移層（以下『漸移層』）土に黒褐色土入。 2：褐色土/3：にぶい黄褐色土/4：灰黄褐色土：漸移層土中ブロック中心。 5：黒褐色土：漸移層上層土中ブロック中心。 6：暗褐色土：黄褐色シルト含む漸移層上層土中ブロック層。

蓋設置の推定位置覆土

7：にぶい黄褐色土：漸移層下層土中ブロック中心。

住居掘り方

8：にぶい黄褐色土：7層土に黄褐色ローム等混入。

カマドの崩落か

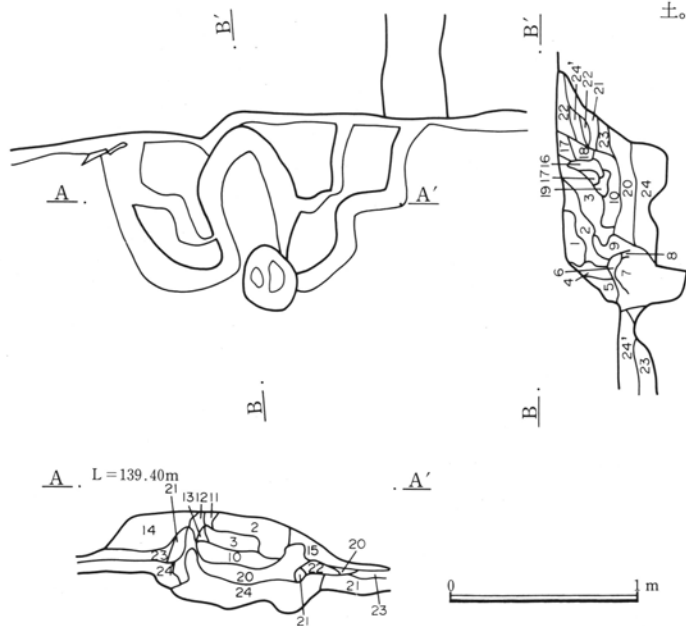
9：黄褐色土：ロームブロック層。焼土含む。

柱穴覆土

1：黄褐色土：ローム質土中心。 2：にぶい黄褐色土：3層と黄褐色ローム。 3：にぶい黄褐色土：ローム漸移層（以下『漸移層』）土等。 4：暗褐色土：漸移層上層土等。 5：黒褐色土：黒褐色土と2層。 6：黒褐色土：2層に黄褐色ローム多入。 7：明黄褐色土：淡いローム等。 8：9層に黒色土・ローム入。 9：オリーブ褐色土：漸移層土等。 10：にぶい黄褐色土：9層土入。点線内に黒色土・ローム多量に入。

小ピット覆土

11：にぶい黄褐色土：漸移層下層土中心。 12：黒褐色土：漸移層上層土中心。 13：褐色土：黒褐色・黄褐色土入る漸移層土。 14：黄褐色土：黒褐色土多く含むローム小ブロック。



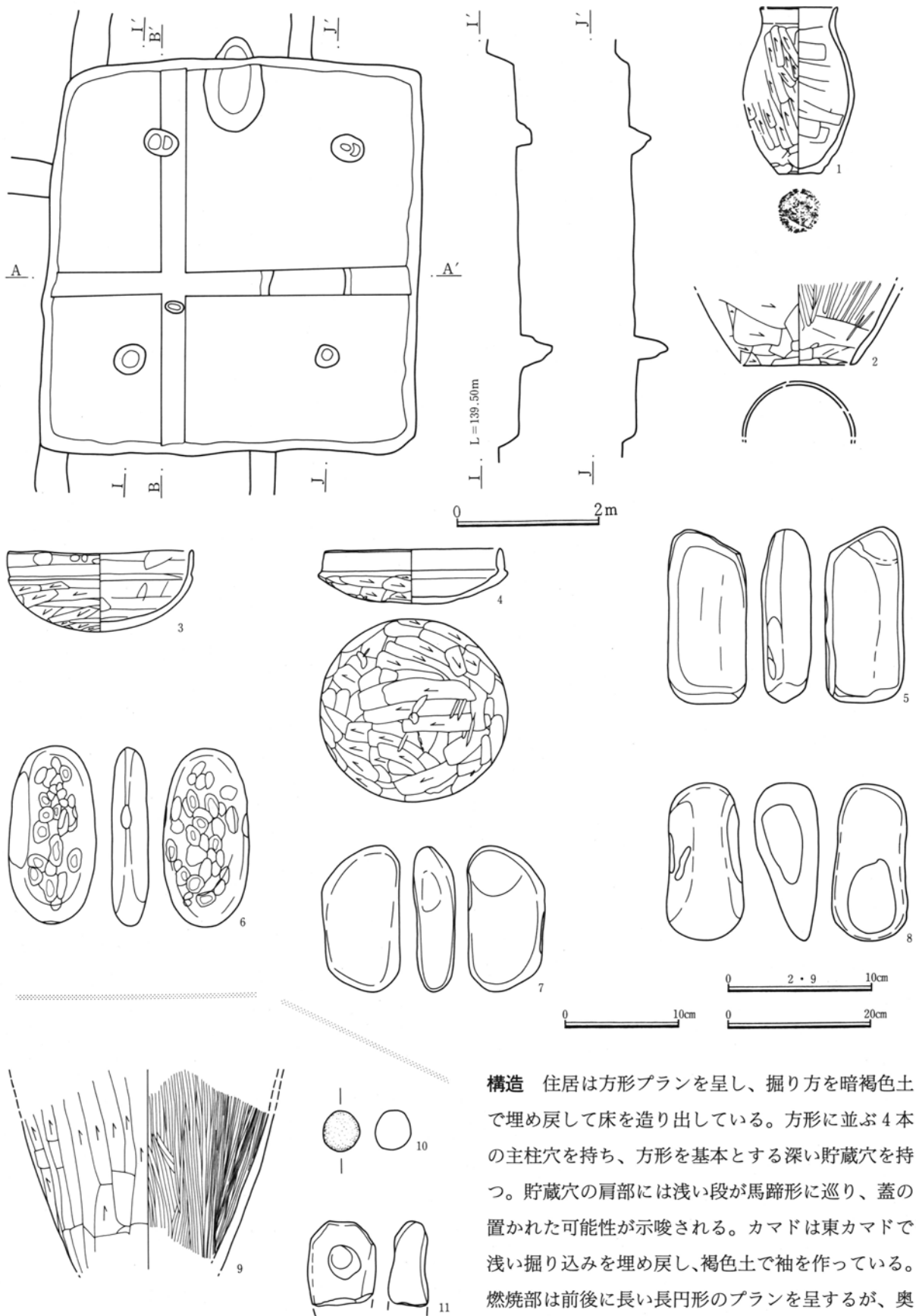
カマド覆土

1：暗黄褐色土：ローム等含。 2：オリーブ褐色土：ローム少し等含。 3：オリーブ褐色土：焼土粒2層より多。 4：褐色土：焼土粒僅か。 5：黒褐色土：焼土等僅か。 6：暗赤褐色土：焼土含。 7：黒褐色土：ローム少し等含。 8：暗赤褐色土：焼土多。 9：暗赤褐色土：焼土少。 10：暗赤褐色土：焼土少。 11：オリーブ褐色土：焼土少。 12：褐色土：ローム・焼土少。 13：赤褐色土：ローム・焼土少。 14：暗黄褐色土：ローム少。 15：暗黄褐色土：焼土少。 16：灰色がかった褐色土：17層土僅かに含。 17：黄色がかった褐色土：ローム含。焼土少。 18：褐色土：焼土少し等含。 19：暗赤褐色土：焼土含。

袖材・掘り方覆土

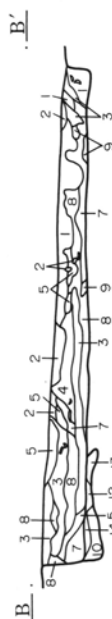
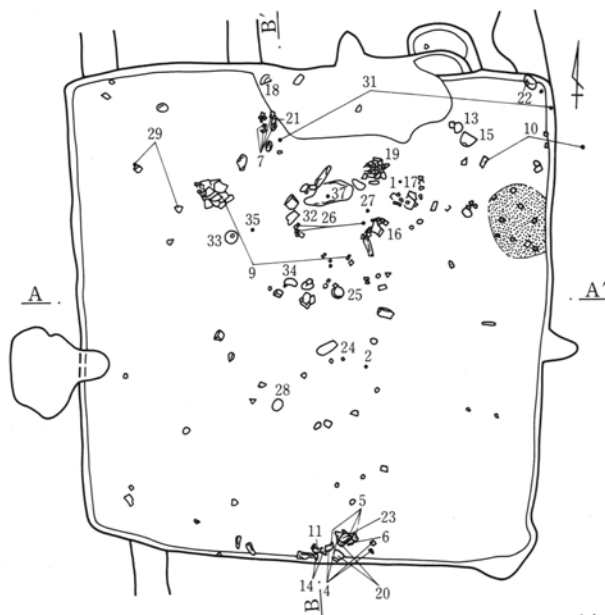
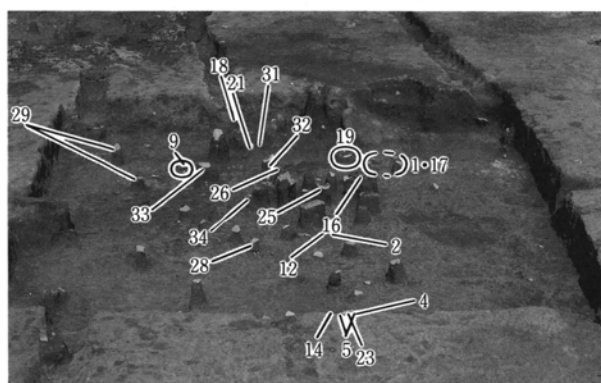
20：暗赤褐色土：焼土ブロックにくすんだ褐色土少。 21：褐色土：焼土微量。 22：褐色土：夾雑物皆無。 23：褐色土：焼土等若干。 24：暗黒褐色土：As-BPと黄褐色・黒色土ブロック相当量。 24'：24層に比し黒色土増加。

第542図 H-174号住居及びカマド



第543図 H-174号住居掘り方及び出土遺物

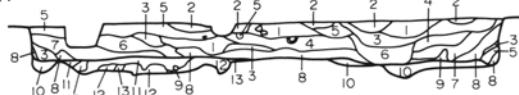
構造 住居は方形プランを呈し、掘り方を暗褐色土で埋め戻して床を造り出している。方形に並ぶ4本の支柱穴を持ち、方形を基本とする深い貯蔵穴を持つ。貯蔵穴の肩部には浅い段が馬蹄形に巡り、蓋の置かれた可能性が示唆される。カマドは東カマドで浅い掘り込みを埋め戻し、褐色土で袖を作っている。燃焼部は前後に長い長円形のプランを呈するが、奥側壁面は鋭く立ち上がり煙道は特定できなかった。



住居覆土

- 1：暗黒褐色土：黒色・暗褐色土・茶褐色土の混土。
 - 2：暗黒褐色土：褐色土粒微量混入。
 - 3：暗黒褐色土：暗褐色土中に黒色土ブロック・褐色土粒極く微量混入。
 - 4：暗褐色土：黒色土ブロック・焼土粒が極く微量混入。
 - 5：暗褐色土：暗褐色土と茶褐色の混土。
 - 6：暗黒褐色土：くすんだ黒色土少量混入。
 - 7：褐色土：くすんだ褐色土で夾雑物ほとんど含まない。
 - 8：暗褐色土：暗褐色土中に褐色土ブロック少量混入。
 - 9：褐色土：夾雑物なし。
- 掘り方覆土
- 10：暗褐色土：黒色土微量混入。
 - 11：黒褐色土：褐色土・黒色土ブロック微量に混入。
 - 12：暗黒褐色土：褐色土・黒色土・黒褐色土の混土。
 - 13：暗褐色土：中に黒色土が微量混入。
 - 14：暗黒褐色土：焼土ブロック多量に混入。

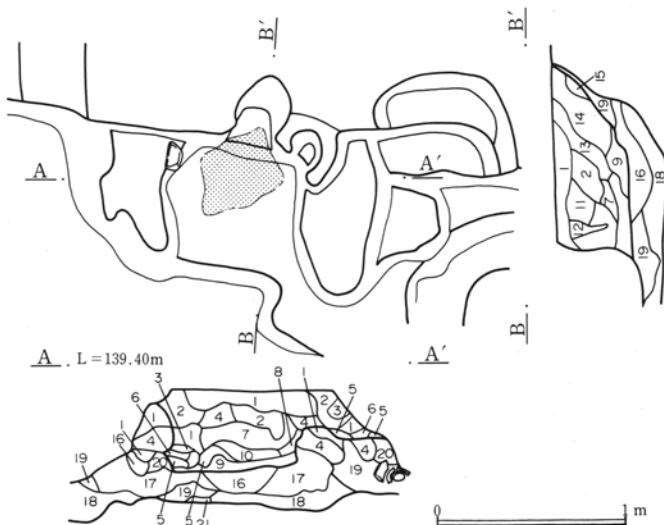
A . L=139.40m



0 2 m

北カマド覆土・掘り方

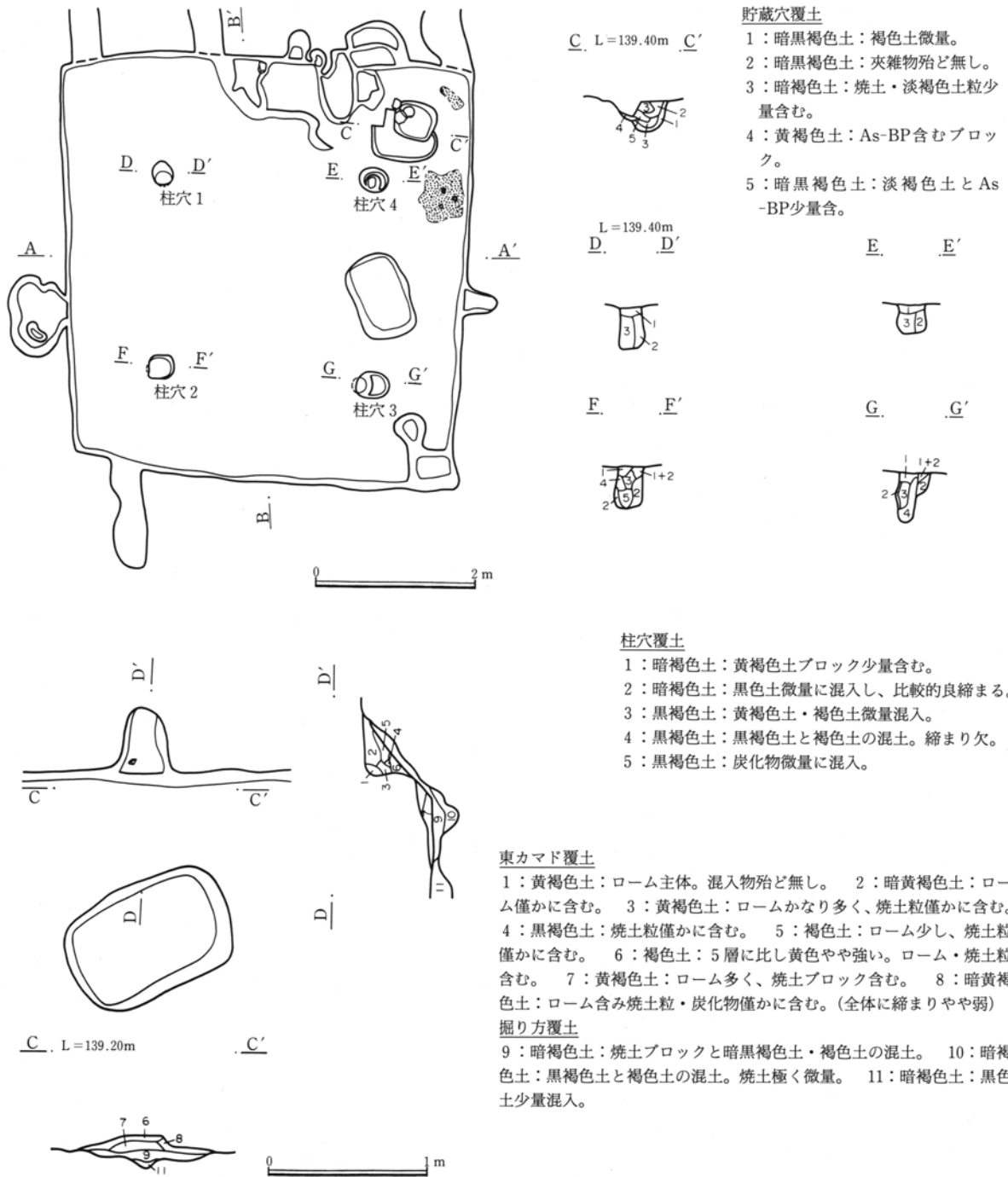
- 1：暗褐色土：暗黒褐色土とくすんだ褐色土の混土。
- 2：暗褐色土：くすんだ褐色土主体。
- 3：暗黒褐色土：黒色土主体。
- 4：暗褐色土：暗黒褐色土主体。
- 5：暗赤褐色土：暗褐色土と焼土ブロックの混土。
- 6：灰赤褐色土：灰白色粘質土主体。
- 7：暗黒褐色土：暗褐色土主体。
- 8：暗黒赤褐色土：黒ずんだ焼土主体。
- 9：赤褐色土：焼土ブロックと黒ずんだ焼土粒の混土。
- 10：黒赤褐色土：焼土主体。
- 11：暗黒褐色土：暗褐色土主体。
- 12：暗褐色土：夾雑物殆ど無。
- 13：褐色土：ローム少量。上層ほど焼土多。
- 14：暗赤褐色土：ローム等少量。
- 15：黄褐色土：ローム。
- 16：暗赤褐色土：焼土と暗黒褐色土の混土。
- 17：暗黒褐色土：暗黒褐色土主体。
- 18：暗褐色土：As-BP等微量。
- 19：暗黒褐色土：焼土微量。
- 20：暗黒褐色土：焼土等若干。
- 21：褐色土：黒色土微量。



A . L=139.40m

0 2 m

第544図 H-175号住居及び北カマド



第545図 H-175号住居及び東カマド

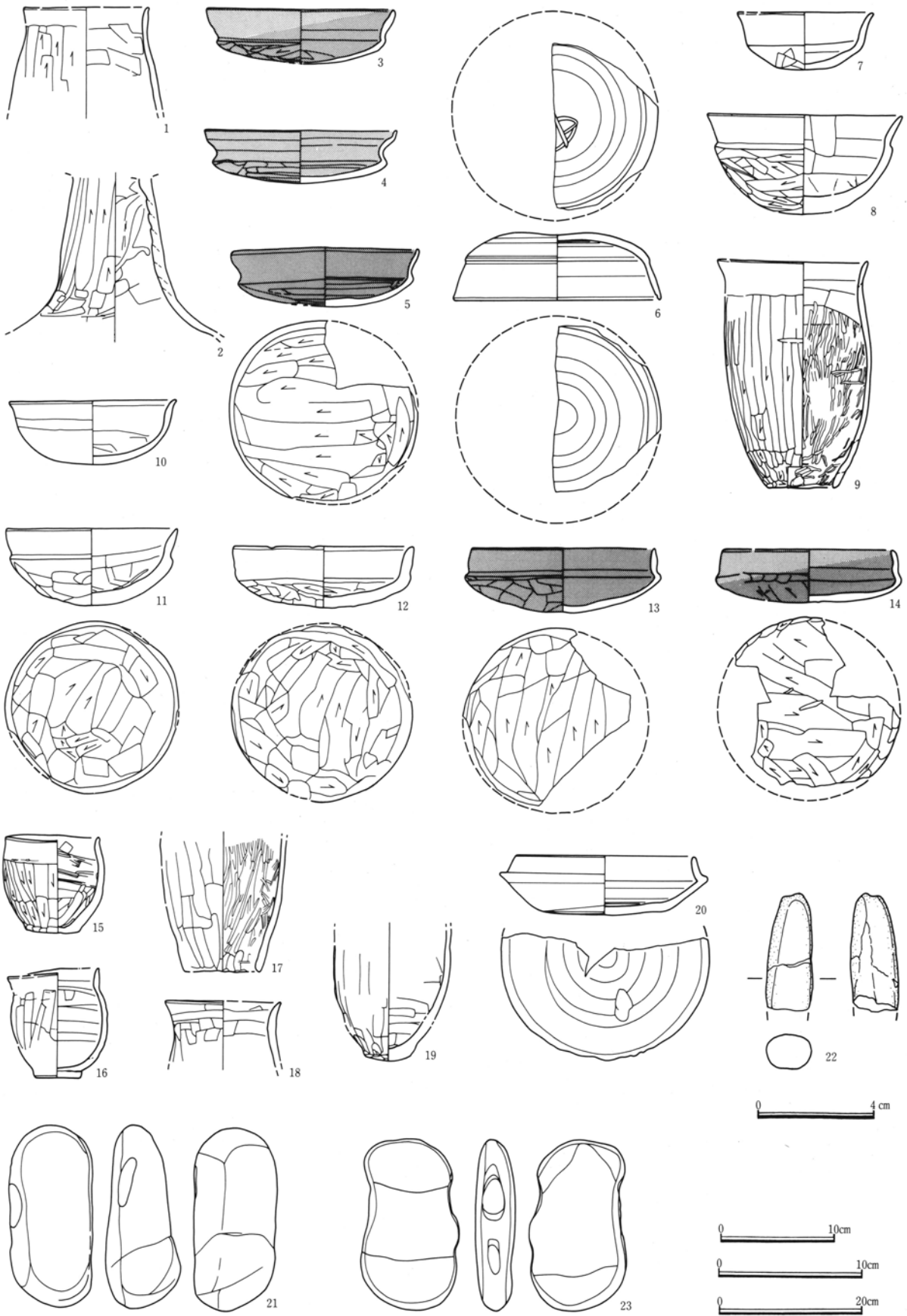
H-175号住居(古墳時代後期, 第544~547図, 図版205~206・232~233・250)

概要 本住居はF区南西部に所在する。

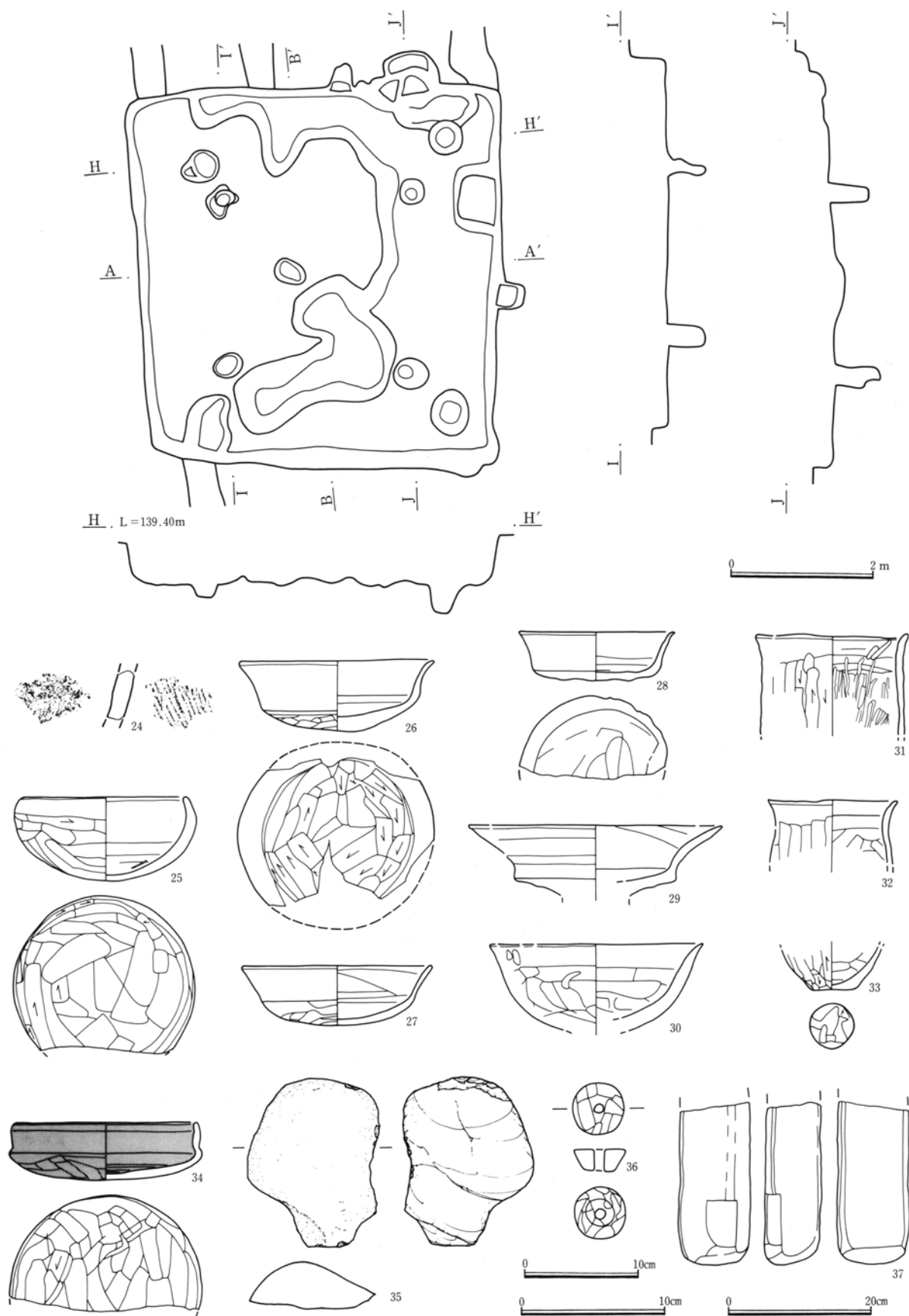
東と北の2カ所にカマドを持っているが、東カマドは煙道を確認したに過ぎず、これに伴うと思われる貯蔵穴らしき土坑も床面で確認できなかった。

本住居に付随すると判断された遺物には土師器の

高坏(2)・坏(3~5, 7, 8, 10~14)・甕(19)・甗(1, 9, 17)・小型甕(15, 16)や、須恵器の蓋(6)・坏(20)があり、床付近からこも編み石(21, 23)も出土している。また、北寄り東壁際の床面上には粘土塊が放置されていた。



第546図 H-175号住居出土遺物



第547図 H-175号住居掘り方及び出土遺物

一方、覆土中からは縄文時代の不定形石器(35)、本住居に先行する時期の土師器の坏(25,26,28)、高坏(29)や、本住居と同時期の土師器坏(27,34)や甕(32,33)、後続の時期の土師器椀(30)など古墳時代後期の土器も出土し、同時期と思われる紡錘車(36)と砥石(37)も出土している。

以上のことから、本住居は概ね西暦600年前後の所産と判断される。

規模 長軸：528cm 短軸：515cm 深さ：41cm

北カマド 幅：181cm 奥行き：116cm 左袖 幅：79cm 長さ：90cm 高さ：19cm 右袖 幅：52cm 長さ：94cm 高さ：21cm 燃烧部 径：68×70cm 煙道 幅：28cm 長さ：38cm

東カマド 煙道 幅：36cm 長さ：40cm

柱穴1 径：32×26cm 深さ：55cm 柱穴2 径

：32×31cm 深さ：51cm 柱穴3 径：40×32cm

深さ：63cm 柱穴4 径：33×31cm 深さ：57cm

北側貯蔵穴 径：53×49cm 深さ：52cm 肩部段幅：30cm 深さ：11cm

東側貯蔵穴 径：62×52cm 深さ：推定56cm

構造 本住居は方形プランを呈している。

床面は住居中央から南に地床を残し、他は掘り方を暗褐色～黒褐色系統の土で埋め戻して床を造っている。

北カマドは浅い掘り方を焼土を含む褐色～黒褐色の土で埋め戻し、袖は暗褐色土で造られている。

これに伴う隅丸方形プランの貯蔵穴がカマド右側手前の床面に確認され、H-174号住居と同様貯蔵穴の南側には方形の浅い段差が造られ、蓋の設置が考慮される。また、主柱穴4本も確認されている。

H-176号住居(古墳時代後期、第548～551図、図版206・233～234・250)

概要 本住居はF区南西部に所在する。

東と北の2カ所にカマドを持っているが、遺存状況は同程度で、同時使用の可能性が考えられる。本住居はH-186号住居と切り合い関係にあるが、本住居の方が新しい。

本住居は西暦600年前後の所産と判断したが、本住居に伴うと判断された遺物には土師器の坏(1,2,3,4)・高坏(9)・甕(6,7,8,10)・小型甕(5)があり、床面からはこも編み石(12,13,14,15,16)の出土も見られた。

また覆土中からは縄文時代の打製石斧(24)の他、先行する時期の土師器坏(17,19)と胴張甕(21)や本住居と同時期の土師器甕(20)、後続する時期の土師器坏(18)が出土し、石製模造品の白玉(22,23)や砥石(25)も出土している。

規模 長軸：516cm 短軸：510cm 深さ：28cm

東カマド 幅：84cm 奥行き：95cm 左袖 幅：26cm 長さ：75cm 高さ：29cm 右袖 幅：23cm 長さ：56cm 高さ：33cm 燃烧部 径：71×37cm

煙道 幅：39cm 長さ：20cm/北カマド 幅：141cm

奥行き：62cm以上 左袖 幅：50cm 長さ：40cm

高さ：17cm 右袖 幅：34cm以上 長さ：62cm

高さ：22cm 燃烧部 径：67×46cm

柱穴1 径：38×31cm 深さ：26cm 柱穴2 径

：31×30cm 深さ：62cm 柱穴3 径：45×41cm

深さ：63cm 柱穴4 径：25×24cm 深さ：64cm

東貯蔵穴 径：62×60cm 深さ：11cm/北貯蔵穴

径：57×55cm 深さ：65cm

北カマド左側 東ピット 径：37×37cm 深さ：

6cm 西ピット 径：34×32cm 深さ：9cm

北カマド手前の土坑 径：84×60cm 深さ：13cm

床下粘土坑 径：203×155cm 深さ：16cm

構造 本住居は方形のプランを呈している。

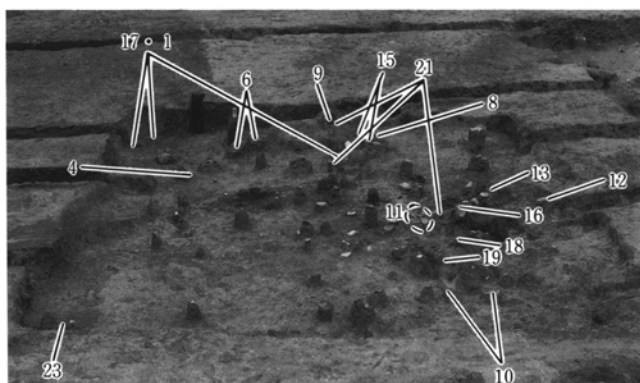
掘り方を有し、これをローム漸移層土で埋め戻して床を造り出している。

カマドは2カ所で、何れも浅い掘り方を埋め戻し、東カマドは暗褐色土と黒褐色土、北カマドはローム質の土で袖を造っている。北カマドは天井石を伴う。

主柱穴は4本で、貯蔵穴は個々のカマド右側手前に掘られる。掘り方中央付近には床下粘土坑らしき浅い土坑がある。北カマド左側及び手前の小ピット2基と土坑1基が本住居に伴うかは不明。



第548図 H-176号住居



H-176号住居覆土 (以下「ローム漸移層」は「漸移層」とする)

1: オリーブ褐色砂質土: 現耕作土。 2: 褐色土/6: 褐色土/9: におい黄褐色土/10: 褐色土/13: におい黄褐色土/16: 褐色土/17: におい黄褐色土: 漸移層下層土主体。 3: 褐色土/21: におい黄褐色土: 漸移層土主体。 4: におい黄褐色土: 漸移層土にローム混入。 5: 暗褐色土/8: 暗褐色土/15: 暗褐色土/20: 暗褐色土/23: 黒褐色土: 漸移層上層土主体。 7: 褐色土/14: 暗褐色土: 漸移層土の中ブロック層。 10': 10層土に炭化物やや多く入。 11: 黄褐色土/22: 明黄褐色土: ロームブロック主体。 12: 黄褐色土: 9層土と11層土の混土。 18: 黄褐色土: ロームと漸移層下層土の中ブロック層。 19: 褐色土: 8層土にロームやや多く混入。

H-176号住居貼床

24: におい黄褐色土/26: におい黄褐色土: 漸移層下層土主体。 25: におい黄褐色土: 24層土にローム混入。 28: 黄褐色土: 漸移層土ブロック層。ロームやや多く混入。

H-176号住居掘り方覆土

29: 暗褐色土/31・31': 褐色土: 漸移層土ブロック層。 30: におい黄褐色土/32: 褐色土: 漸移層下層土主体。 33: 黒褐色土/34: 褐色土: 漸移層上層土主体。

179号土坑覆土

35: 黄褐色土: 漸移層下層土とロームの中ブロック層。 36: 暗褐色土: 漸移層上層土主体。 37: 暗褐色土: 漸移層上層土のブロック層。 38: 褐色土: 漸移層の中ブロック層。

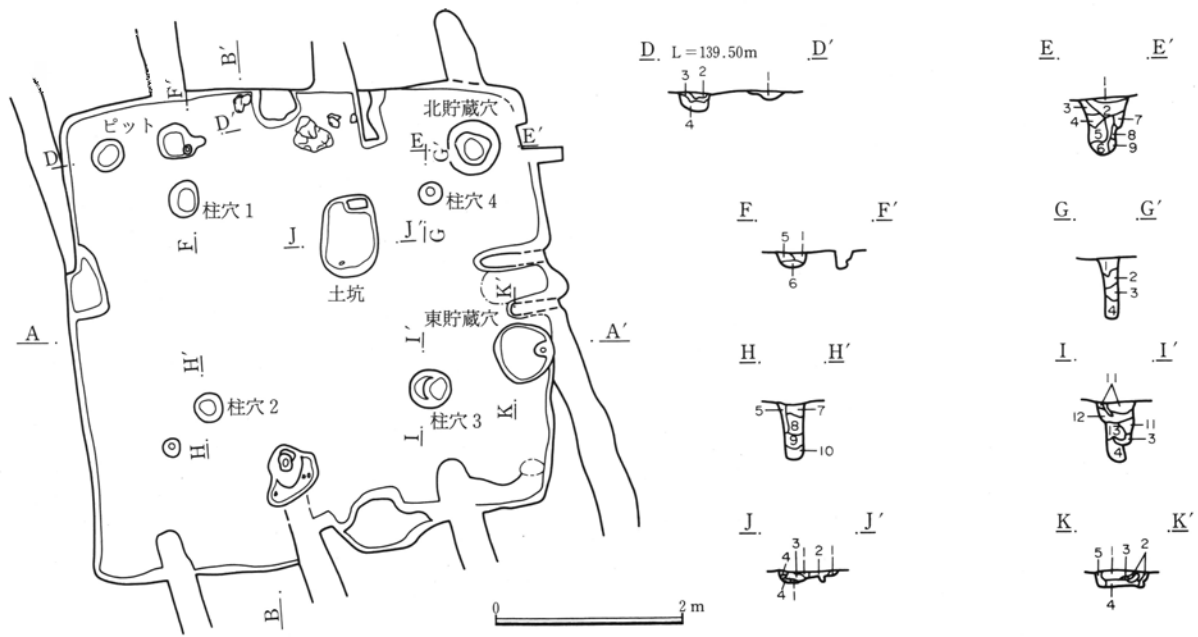
H-177号住居 (古墳時代後期, 第552~553図, 図版206~207・234~235)

概要 本住居はF区東部に位置するやや大型の竪穴住居跡であるが、耕作溝に切られ遺存状況はあまり良好ではなかった。

本住居に伴うと判断された遺物には6世紀前半期の特徴を示す土師器坏(1)もあるが、主体は6世紀後半期から7世紀前半期の特徴を示すもので、土師器坏(1,4,5,6)・甕(3)や、須恵器坏(2)がある。

一方、覆土中からは古墳時代後期の土師器甕片を中心に5世紀の土師器高坏(7)や本住居に先行する時期の土師器坏(8,9)や甕(10,11)なども出土している。

これらの状況から、本住居は7世紀前半の所産と判断したが、覆土中の遺物の状況から平安時代頃までは本住居はその痕跡を留めていたものと思慮され



ピット覆土

1：にぶい黄褐色土：黄褐・暗褐色土入る。 2：黒褐色土：黒・褐色土に明黄褐色土入る。 3：明黄褐色土：にぶい黄褐色土入る。 4：にぶい黄褐色土：褐色土と若干の黒褐色土入る。

北貯蔵穴覆土

1：黒褐色土：褐色土入る。 2：黄褐色土：褐色土若干入る。 3：黄褐色土：褐色土やや多く入る。 4：褐色土：黄褐・暗褐色土含む。 5：にぶい黄褐色土：暗褐色土等若干含む。 6：褐色土：ローム粒と上位に若干の黄褐色土含む。 7：にぶい黄褐色土：暗褐・黄褐色土含む。 8：黄褐色土：褐色土等含む。 9：褐色土：黒褐・黄褐色土含む。

柱穴覆土

1・3：黄褐色土：褐色土入る。 2：暗褐色土：黄褐色土入る。 4：暗褐色土：にぶい黄褐色土多。 5：明黄褐色土：褐色土若干混入。 6：黄褐色土：褐色土入る。 7：にぶい黄褐色土：ロームと褐色土入る。 8：黄褐色土：褐・暗褐色土入る。 9：暗褐色土：黄褐・黒褐色土入る。 10：褐色土：黄褐・黒褐色土入る。 11：黄褐色土：焼土と褐・黒褐色土若干入る。 12：黄褐色土：褐色土

やや多く入る。 13：褐色土：暗褐色土等入る。

土坑覆土

1：にぶい黄褐色土：暗褐色土入る。 2：黒褐色土：褐色土・焼土・ローム・カーボンやや多く入る。 3：褐色土：黒褐色土等入る。 4：黄褐色土：明黄褐色土入る。

東貯蔵穴覆土

1：黄褐色土：褐色土の入る中ブロック層。弱い焼土化。 2：黄褐色土：1層土にローム・黒褐色土混入。 3：黄褐色土：1層土と4層土の混土。 4：明黄褐色土：ロームの入るブロック層 5：黒褐色土：中ブロック層。ロームと黄褐・褐色土混入。

北カマド覆土

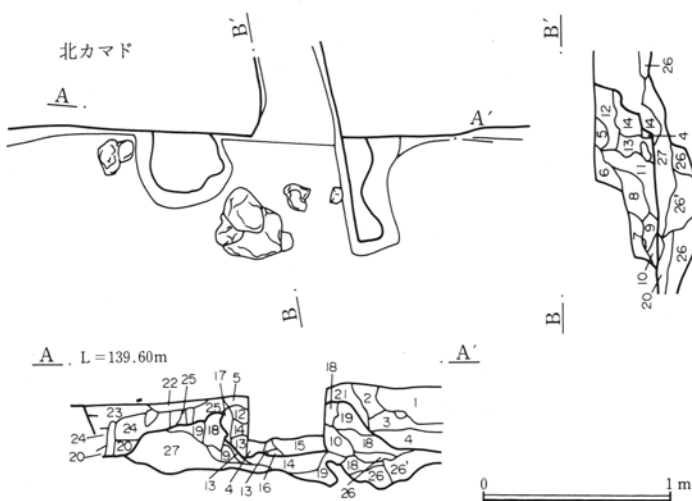
1・2・3：にぶい黄褐色土：ローム漸移層(以下「漸移層」)土主体。 4・22：明黄褐色土：ロームブロック主体。 5：黄橙土：焼土化見るシルト質土。 6：にぶい黄褐色土：焼土化見る漸移層下層土主体。 7：褐色土主体 8：黄橙土：焼土化見る。 9：にぶい黄褐色土：シルト質主体。 11：弱く焼土化する黄褐色土主体。 12：橙土：5層土の焼土化進行。 13：明赤褐色土：8層土の焼土化進行。 14：明赤褐色土：15層の焼土化進行。 15：褐色土：漸移層の焼土化進行。 16：にぶい赤褐色土：焼土層。 17：明赤褐色土：18層土の焼土化。 21：黄褐色土：やや焼土化見るローム質土。 23：明黄褐色土：漸移層最下層土か。

北カマド袖材・掘り方覆土

10：黒褐色土主体。 18：明黄褐色土：ローム主体。 19：弱く焼土化するにぶい黄褐色土主体。 20：にぶい黄褐色土：弱く焼土化する漸移層下層土主体。 26：暗黒褐色土：暗褐・黒色土等の混土。 26'：26層に比し黒色土の混入多い。 27：黒褐色土：褐・暗黒褐色土の混土。微量の焼土入る。

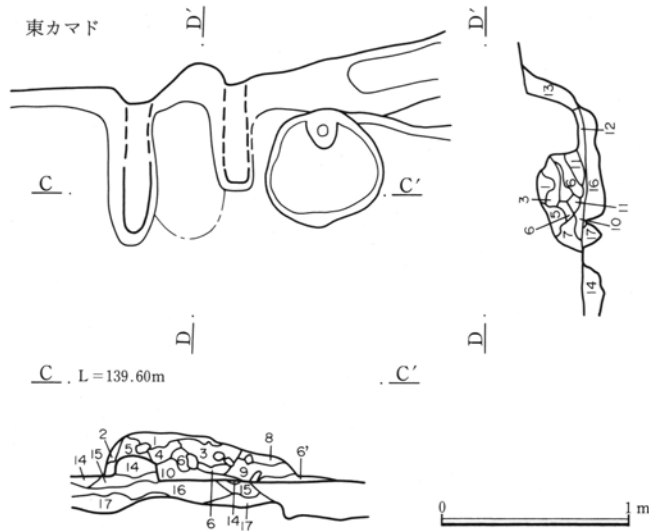
自然堆積層の疑いのある土層

24：明黄褐色土：ロームブロック層。 25：明黄褐色土：やや焼土化見るロームブロック層。



第549図 H-176号住居遺構及び北カマド

第3章 発見された遺構と遺物

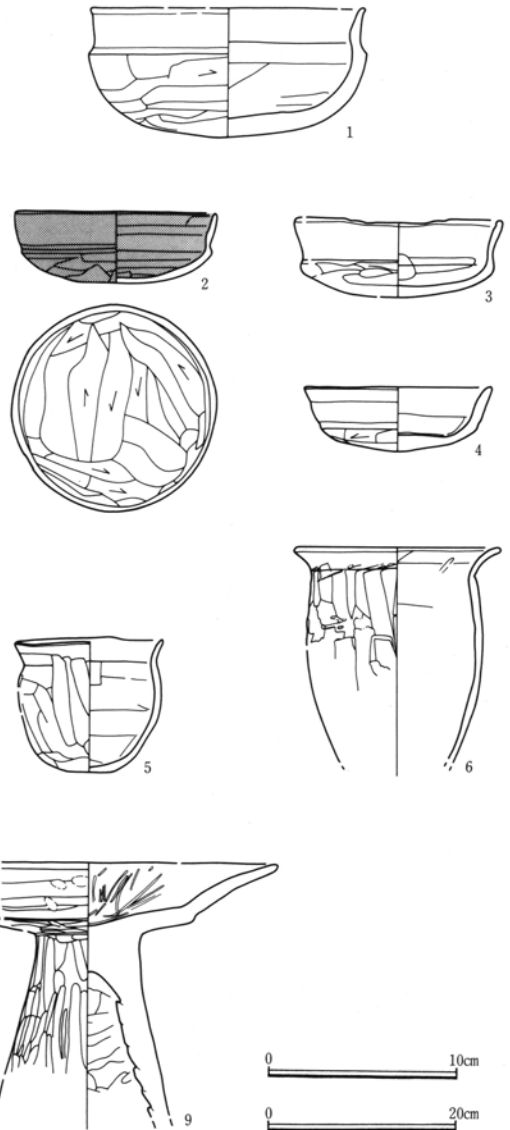
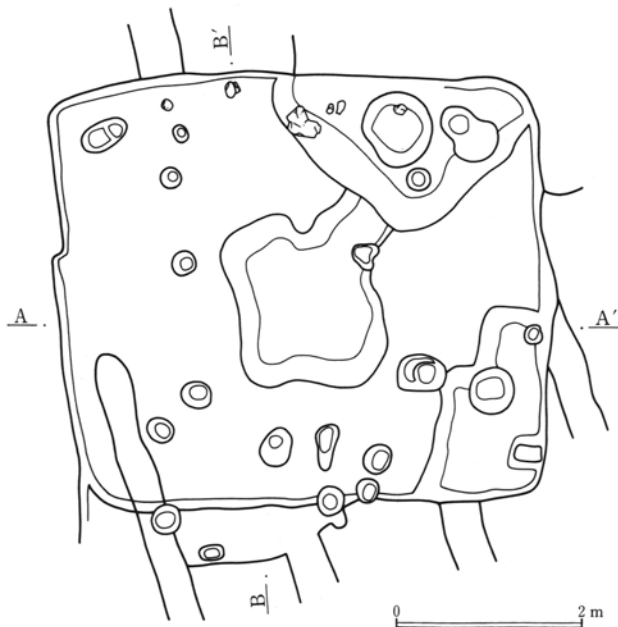


東カマド覆土

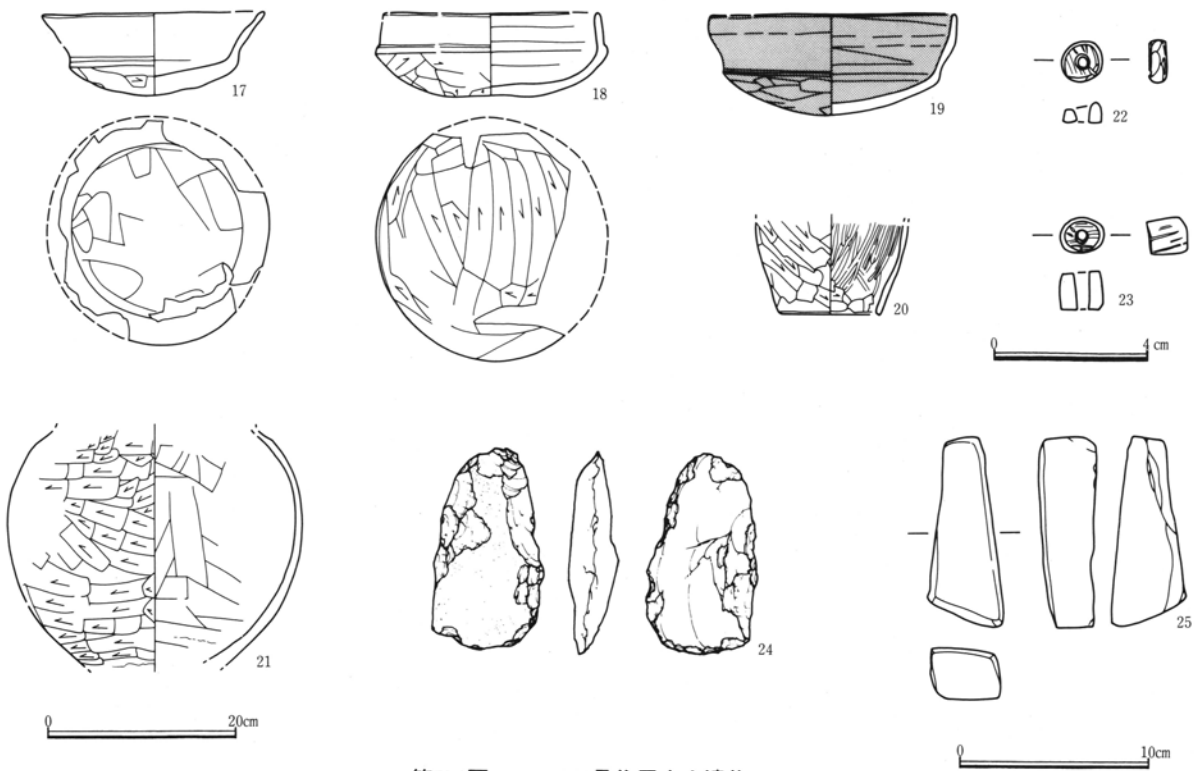
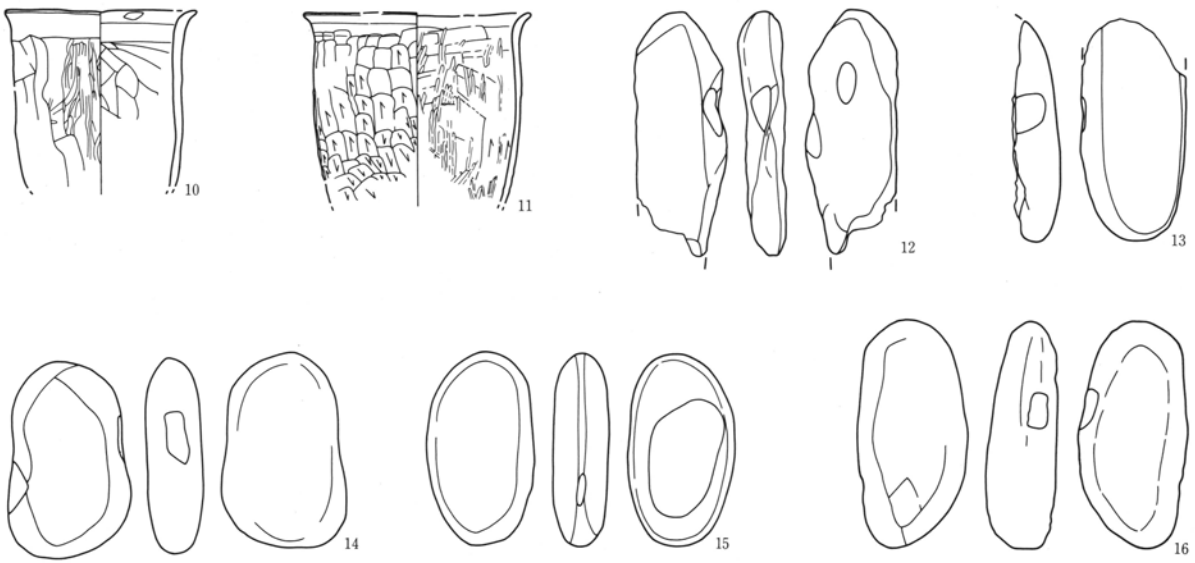
1：にぶい黄褐色土／8・9：褐色土：弱い焼土化見る
 ローム漸移層（以下「漸移層」）土主体の層。 2：黒褐色土：漸移層上層土主体。 3：明黄褐色土：弱い焼土化見る。 4：褐色土：1・3層土の混土。 5：にぶい黄褐色土と黄橙色ロームの混土。 6：にぶい黄橙色土：黄橙色ローム主体の層。 7：にぶい黄褐色土：5層に似るがローム多い。 10：にぶい黄褐色土：ロームやや多く混入する漸移層土。 11：黄褐色土：6・10層土の混土層 12：黄褐色土：10層土の焼土化の進行したもの。 13：褐色土：焼土化見る漸移層土主体の層。

袖材・掘り方覆土

6'：にぶい黄褐色土：6層に似るがやや焼土化見る。
 14：暗褐色土：暗褐色土と黒褐色土の混土。 15：暗褐色土：焼土微量混入。 16：暗褐色土：As-YP微量に混入。 17：暗褐色土：暗黒褐色土中に黒色土少量混入。



第550図 H-176号住居遺構及び出土遺物



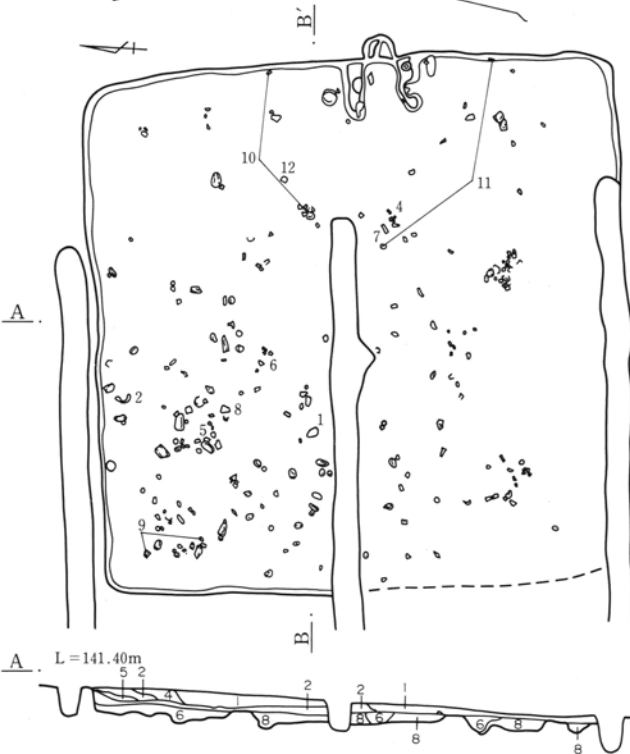
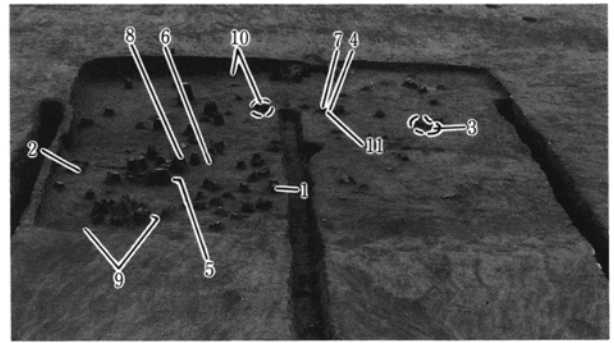
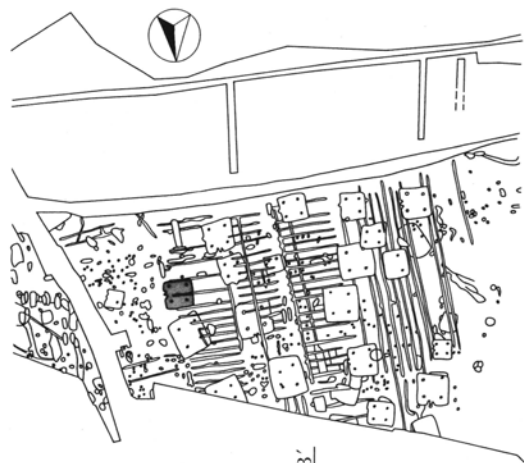
第551図 H-176号住居出土遺物

るのである。

規模 長軸：576cm 短軸：560cm 深さ：33cm
 カマド 幅：85cm 奥行き：85cm 左袖 幅：58cm
 長さ：61cm 高さ：9cm 右袖 幅：60cm 長さ
 ：60cm 高さ：12cm 燃烧部 径：48×101cm

煙道 幅：33cm 長さ：23cm

柱穴1 径：42×38cm 深さ：56cm 柱穴2 径
 ：38×36cm 深さ：20cm 柱穴3 径：51×46cm
 深さ：48cm 柱穴4 径：40×37cm 深さ：58cm
 貯蔵穴 径：68×59cm 深さ：79cm



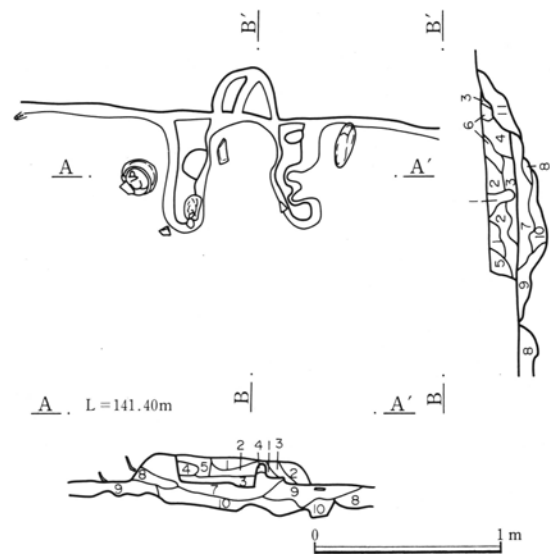
- 住居覆土**
 1：暗黒褐色土：白色微細粒多量。 2：暗褐色土：暗褐色土と褐色土の混土。 3：褐色土：黒褐色土少量混入。 4：黒褐色土：白色微細粒多量、褐色土少量。 5：暗褐色土：褐色粒微量。
- 住居掘り方覆土**
 6：暗褐色土：黒色土と暗褐色土の混土。 7：明褐色土ブロック。 8：暗褐色土：黒色土若干混入。
- カマド覆土**
 1：暗褐色土：焼土・白色土粒微量に含。 2：暗褐色土：焼土少量含む。 3：暗褐色土：焼土微量。 4：赤褐色土：焼土主体。 5：黒褐色土：白色土粒微量。 6：暗赤褐色土：くすんだ焼土主体。
- カマド袖材・掘り方覆土**
 7：暗赤褐色土：くすんだ焼土と黒色土の混土。 8：褐色土：黒色土微量。 9：暗黒褐色土：暗褐色土・黒色土の混入土主体。 10：暗黒褐色土：黒色土中に焼土微量。 11：褐色土：焼土微量。

構造 本住居は方形のプランを呈している。

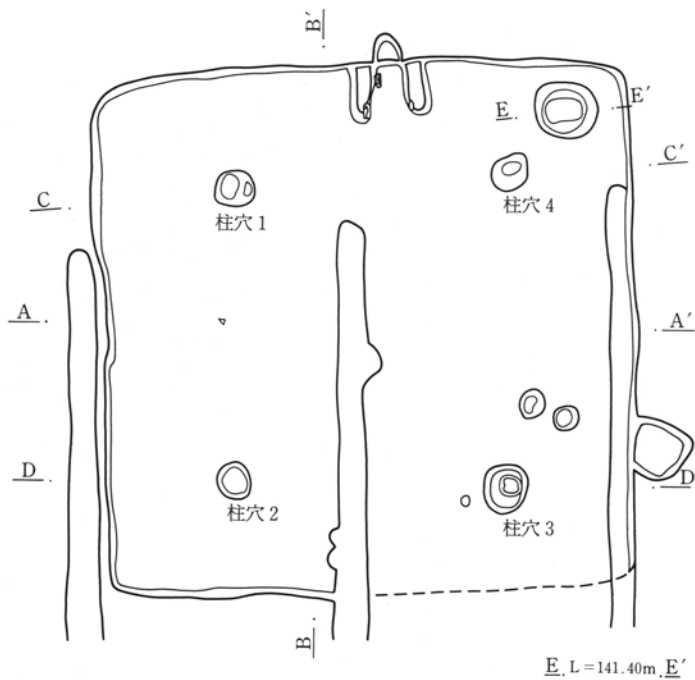
掘り方を有し、これを暗褐色土と黒褐色土で埋め戻して床面を造り出している。

カマドは東カマドで、東壁中央付近に造られる。浅い掘り方を持っており、これを埋め戻して燃烧面を造っている。燃烧部は壁面の手前側にあり、その両側に袖石を伴っていたものと推定される袖が造られている。袖は焼土化していた。

主柱穴は4カ所確認された。貯蔵穴はカマド右側に掘られているが、上位が開いているので蓋を伴っていた可能性も考えられる。



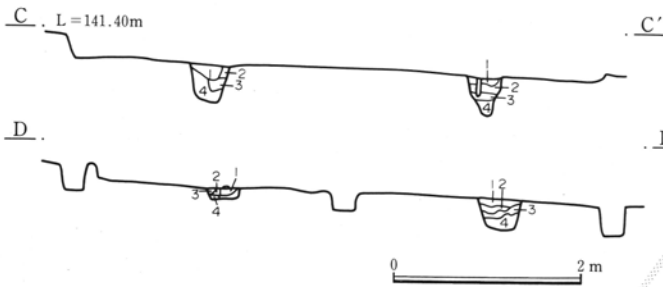
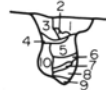
第552図 H-177号住居及びカマド



貯蔵穴覆土

1: 暗黄褐色土: ローム僅か。 2: 暗黄褐色土/7: 暗褐色土: ローム少。 3: 暗黄褐色土/6: 黒褐色土: ローム粒僅か。 4: 暗黄褐色土: ロームまばら。 5: 暗黄褐色土/8: 暗褐色土/10: 暗褐色土。 9: 黄褐色土: ロームかなり多。

E, L=141.40m, E'



柱穴1覆土

1: 暗黄褐色土: ローム・黄色粒僅かに含む。 2: 褐色土: 混入物無し。 3: 黄褐色土: ローム多く含む。 4: 暗黄褐色土: 混入物無くやや黄色強い。

柱穴2覆土

1: 暗黄褐色土: ローム僅かに含む。 2: 暗褐色土: ロームやや多く含む、締まり3層に比しやや弱。 3: 暗褐色土: ロームやや多く含む。 4: 暗黄褐色土: ロームかなり多く含む。

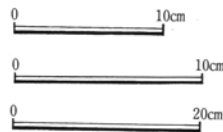
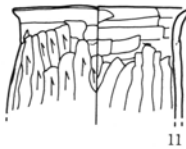
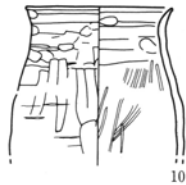
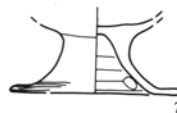
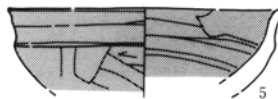
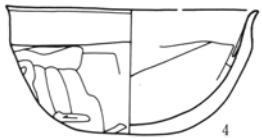
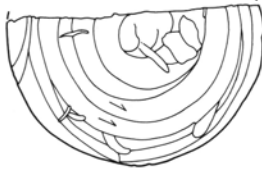
柱穴3覆土

1: 暗黄褐色土: 白・黄色粒僅かに含む。 2: 暗黄褐色土: ローム含む。 3: 黄褐色土: ローム少し含む。 4: 暗黄褐色土: ローム僅かに含む。

柱穴4覆土

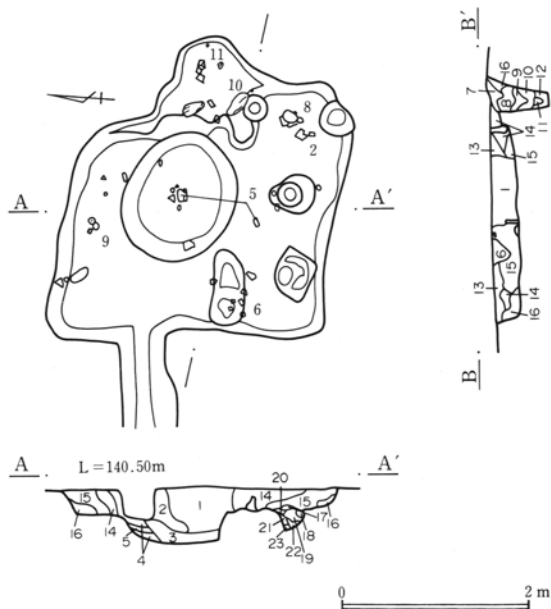
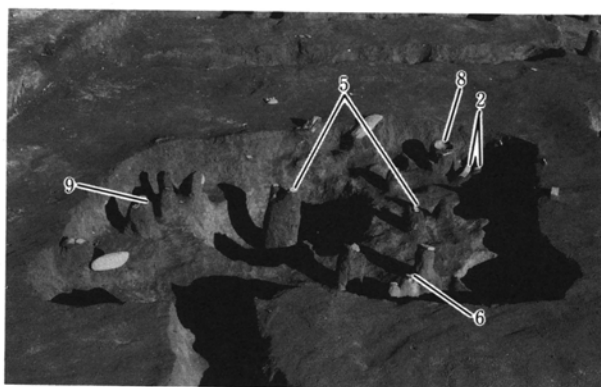
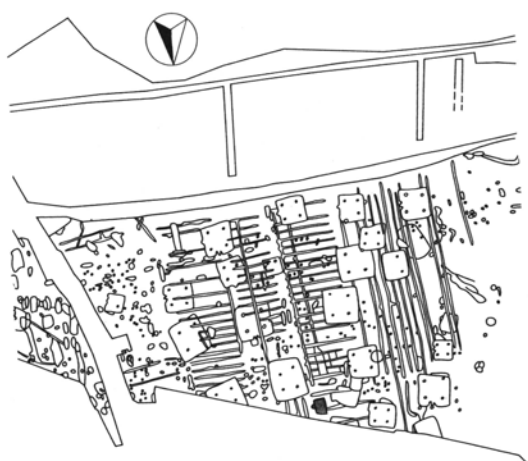
1: 褐色土: 黄色粒僅かに含む。 2: 暗黄褐色土: ローム含む。 3: 暗褐色土: ローム粒僅かに含む。 4: 暗褐色土: 混入物無し。

(柱穴覆土は全体的に締まりに欠ける傾向にある。)



第553図 H-177号住居遺構及び出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物



カマド覆土

1：黒褐色土：黄色粒僅かに含む。 2：暗褐色土：黄色粒僅かに含む。 3：褐色土：ローム・焼土を少し含む。 4：黒褐色土：本層のみやや締まり有り。上部やや硬質でガリガリする。焼土・黄色粒少し含む。 6：黒褐色土：ローム粒少し含む。 7：暗黄褐色土：ローム多く含む。

H-178号住居(平安時代。第554～555図。図版207・235)

概要 本住居は、F区中央部北壁付近に調査された小型の竪穴住居跡である。

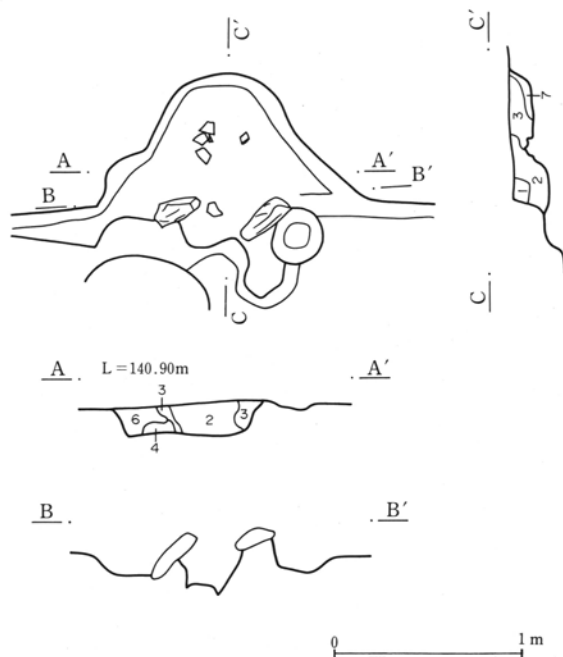
本住居の中央付近には土坑1基、南半部には4基のピットが掘り込まれており、北半部には西側から耕作溝が入って来るなど住居全体として激しく攪乱

近世の攪乱による層

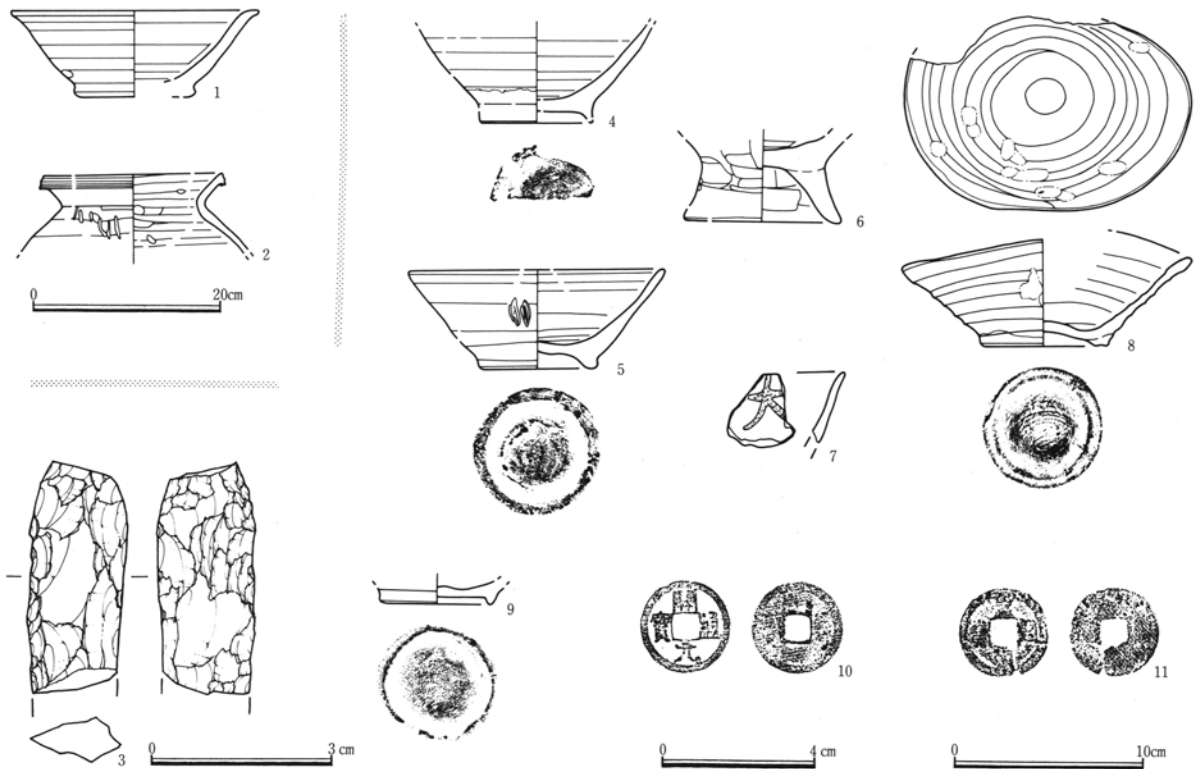
1・2：暗褐色土：サクサクする。 3：黒褐色土：ローム粒含む。 4：黒褐色土：ローム少し含む。 5：暗黄褐色土：ローム多く含む。

H-178号住居覆土

6：暗黄褐色土：焼土粒等僅かに含む。 7：暗黄褐色土：混入物無し。 8：暗黄褐色土：焼土粒・ローム等僅かに含む。 9：黒褐色土：ローム・黄色粒僅かに含む。 10：黒褐色土：ローム粒含む。 11：黄褐色土：ロームブロック含む。 12：黒褐色土：ローム粒僅かに含む。 13：暗黄褐色土：混入物無し。 14：暗褐色土：白色粒僅かに含む。 15：暗褐色土：白・黄色粒少し含む。 16：暗黄褐色土：地山(暗黄褐色土)ブロックとローム少し含む。 17：暗褐色土/18：黒褐色土：ロームまばらに少し含む。 19・20：黒褐色土：ロームまばらに含む。 21：黄褐色土：ロームブロック。地山か。 22：黄褐色土：ローム主体。 23：黒褐色土：ローム粒少し含む。



第554図 H-178号住居及びカマド



第555図 H-178号住居出土遺物

されている。特にカマド付近に掘削された土坑はカマド左袖を削り取るなど、本住居の主要部分を著しく壊している。その他、本住居の西壁南寄り付近には長軸79cm、短軸35cm、深さ11cmを測る不整形のピットが見られたのであるが、これも本住居に伴うものかどうかは特定できなかった。また調査時点での遺構の検出も難しく、煙道付近を掘り過ぎてしまっている。

さて、本住居の出土遺物も多くなく、土坑等で掻き回されているものもあると思われるが、この中で本住居に伴うと判断された遺物には、回転ロクロ成形による須恵器の高台付碗(1)があり、破片資料ではあるが須恵器甕の口縁(2)も床面付近から出土している。

一方、住居覆土や土坑の覆土中からは、9世紀後半から10世紀前半にかけての回転ロクロ成形による高台付碗(4,5,8,9)や土師器脚(6)などが出土している。その他、回転ロクロ成形による碗の破片資料で『大』字の墨書のあるものや、有舌尖頭器の破片(3)も出土している。

これらのことから、本住居は10世紀前半代の所産ではないかと想定されるのである。

規模 長軸：278cm 短軸：274cm 深さ：28cm

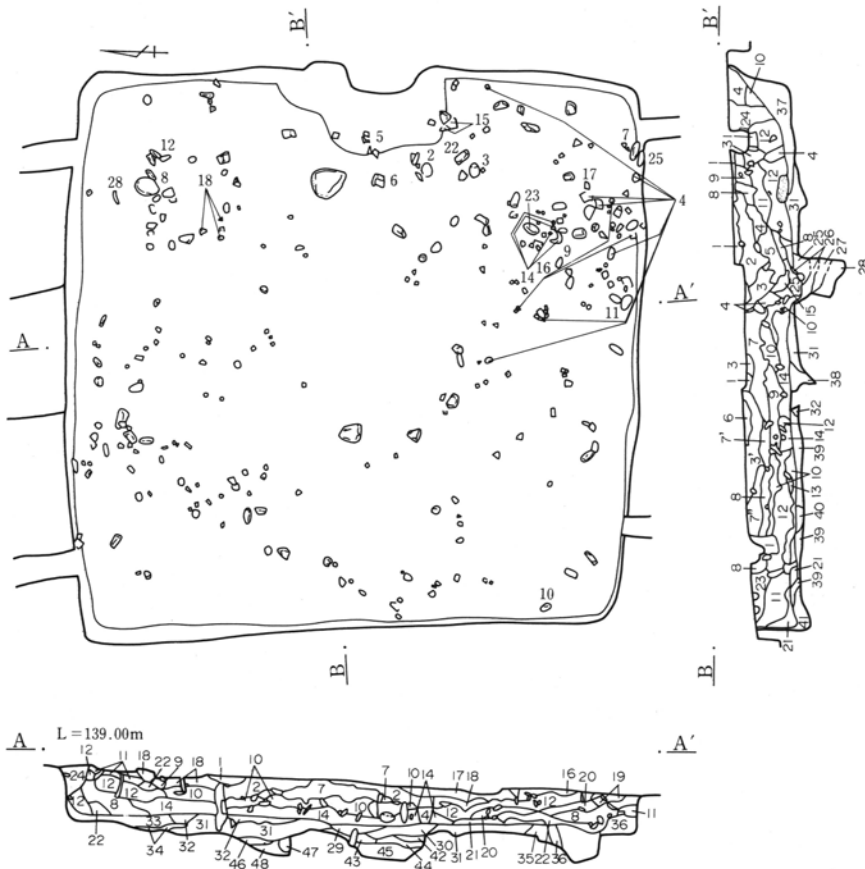
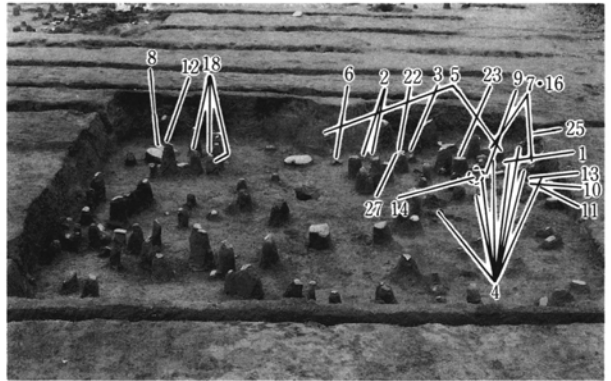
カマド 幅：±115cm 奥行：125cm 右袖 幅：35cm以上 長さ：60cm 高さ：9cm 煙道 幅：79cm 長さ：80cm

構造 本住居は隅丸方形を基調としているが、やや台形に近い不整形のプランを呈している。

掘り方を確認することはできず、その有無を特定することもできなかった。従って床面は地床構造を呈していたものと判断される。

カマドは東カマドで東壁中央付近に造られる。カマドの掘り方の存在の可否は特定できなかった。また袖は短く、袖材の使用はなかったものと判断される。煙道は燃焼部から8cm程高いレベルで段差を以て壁面を40cm程水平方向に掘り進んでから上方へ掘り上げられている。

床面に於いては柱穴・貯蔵穴等の構造を確認することはできず、住居規模と併せて掘削されなかったものと思慮される。



As-Aの混入する土層

1：にぶい褐色土：現耕土。 2：暗褐色土／3・3'・24：褐色土／4：黄褐色土：ローム漸移層（以下「漸移層」）層土主体。 5：黒褐色土：黒ボクと漸移層上層土主体。

H-179号住居覆土

6・13：黄褐色土／8・9・16・20：褐色土／10・12・19：にぶい黄褐色土／17・22：暗褐色土／18：明褐色土／23：黄褐色土：漸移層土主体。 7・7'・7''：黒褐色土：黒ボクと漸移層上層土の混土主体。 11：黄褐色土／15・21：明黄褐色土：ローム層土主体。 14：黄褐色土：漸移層下層土とローム主体。

ビット覆土

25：明黄褐色土／26：暗褐色土：漸移層土主体。 27：黄褐色土：ローム主体。 28：黒褐色土：黒ボクと漸移層上層土主体。

掘り方覆土

31：黄褐色土：明黄褐・暗褐色土主体。 32・35・41：にぶい黄褐色土主体。 33：黄褐色土。 36：暗褐色土主体。 37：褐色土主体。 38：にぶい黄褐色土：黒褐色土やや多。 39：黄褐色土主体。 40：褐色土：黒褐・暗褐色土と明黄褐色ロームの混土。

床下粘土坑の可能性のある層

29：にぶい黄褐色土：灰黄褐色シルト含。 30：にぶい黄褐色土：暗褐色土・黄褐色ローム含。 34：黒褐色土：黒色土粒・灰白色シルトとやや多くの黄褐色土入。

掘り方か地山か特定できない層

42・43・44：灰黄褐色の暗色ローム主体。 45：灰褐色シルト質土：黄灰色シルト多し。 46：にぶい黄褐色シルト質土主体。 47：灰黄褐色土。 48：灰褐色に近い黒褐色ローム：45層近似。

第556図 H-179号住居

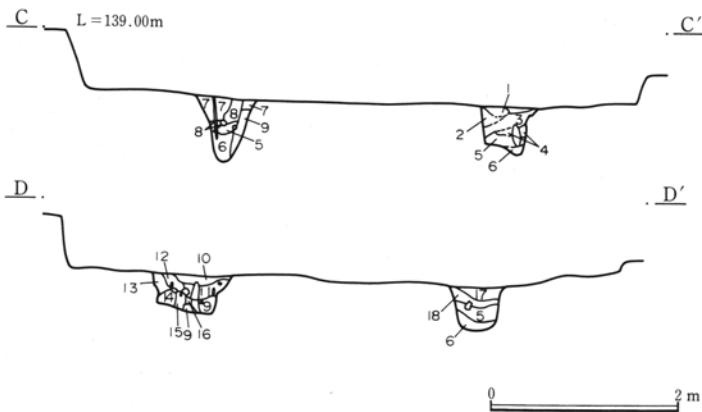
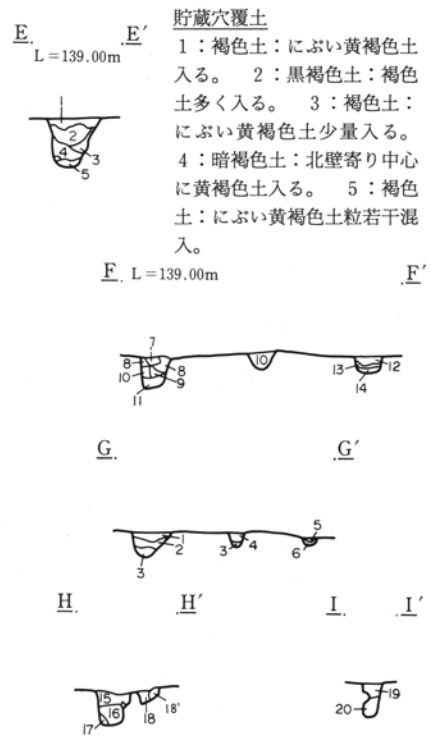
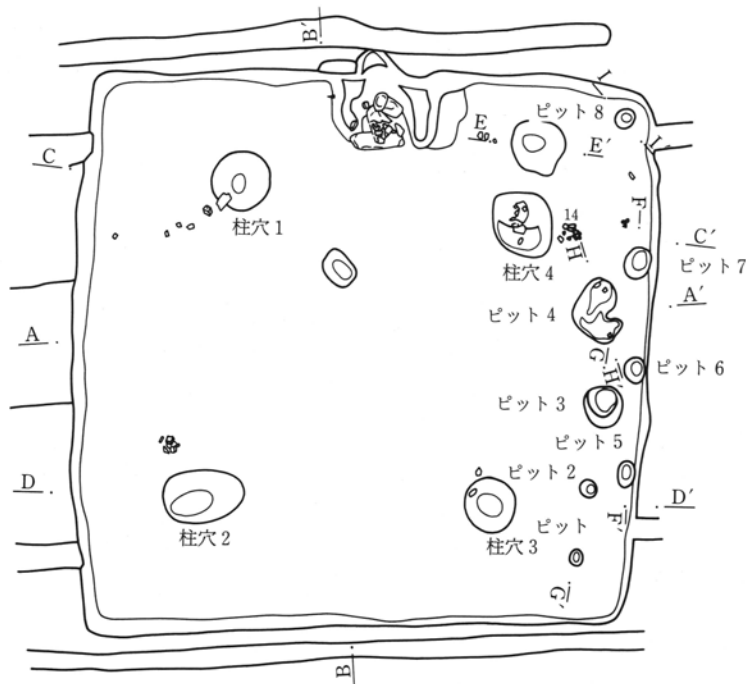
H-179号住居(古墳時代後期, 第556~560図, 図版207・235~236・250)

概要 本住居は本遺跡の最も西南隅に位置する竪穴住居跡で、F区北半部を西端とする本遺跡の台地部の南西隅近くに所在している、F区に於いては大型

のものに属する竪穴住居跡である。

本住居付近には現代の耕作溝が多く見られ、本住居も一部が壊されているが、幸い床面への影響はな

第11節 F区の遺構と遺物



貯蔵穴覆土
 E. L=139.00m E' 1: 褐色土: におい黄褐色土入る。 2: 黒褐色土: 褐色土多く入る。 3: 褐色土: におい黄褐色土少量入る。 4: 暗褐色土: 北壁寄り中心に黄褐色土入る。 5: 褐色土: におい黄褐色土粒若干混入。
 F. L=139.00m F' 7: 褐色土: におい黄褐色土や多く入る。 8: 褐色土: におい黄褐色土や多く入る。 9: 褐色土: におい黄褐色土や多く入る。 10: 褐色土: におい黄褐色土や多く入る。 11: 褐色土: におい黄褐色土や多く入る。 12: 褐色土: におい黄褐色土や多く入る。 13: 褐色土: におい黄褐色土や多く入る。 14: 褐色土: におい黄褐色土や多く入る。
 G. G' 2: 褐色土: におい黄褐色土や多く入る。 3: 褐色土: におい黄褐色土や多く入る。 4: 褐色土: におい黄褐色土や多く入る。 5: 褐色土: におい黄褐色土や多く入る。 6: 褐色土: におい黄褐色土や多く入る。
 H. H' 15: 褐色土: におい黄褐色土や多く入る。 16: 褐色土: におい黄褐色土や多く入る。 17: 褐色土: におい黄褐色土や多く入る。 18: 褐色土: におい黄褐色土や多く入る。 19: 褐色土: におい黄褐色土や多く入る。 20: 褐色土: におい黄褐色土や多く入る。
 I. I' 15: 褐色土: におい黄褐色土や多く入る。 16: 褐色土: におい黄褐色土や多く入る。 17: 褐色土: におい黄褐色土や多く入る。 18: 褐色土: におい黄褐色土や多く入る。 19: 褐色土: におい黄褐色土や多く入る。 20: 褐色土: におい黄褐色土や多く入る。

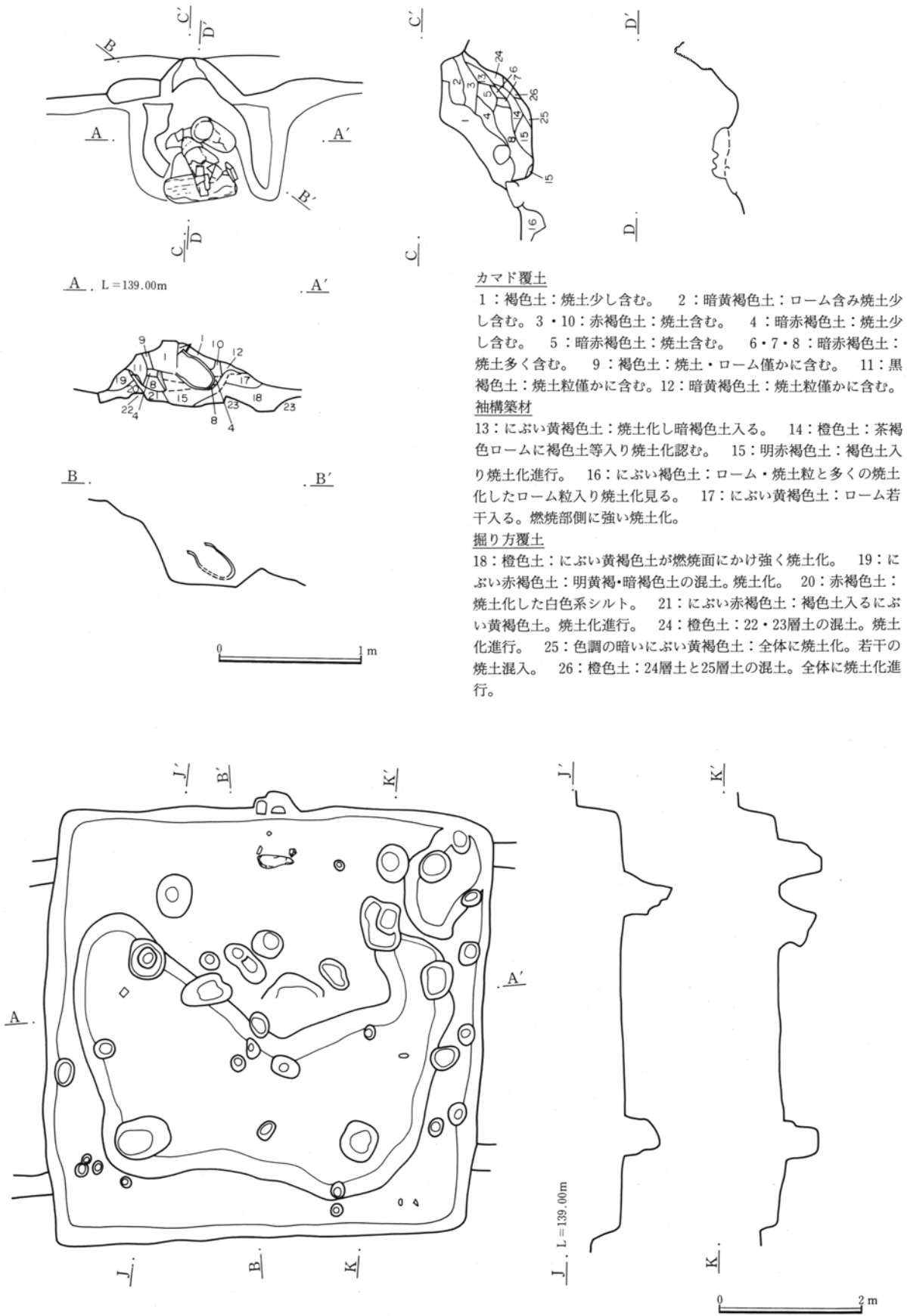
柱穴覆土
 1: 暗褐色土: ローム漸移層 (以下『漸移層』) 上層土主体。 2: 明黄褐色土: ローム主体。 3: におい黄褐色土: ロームと黒褐・褐色土多く入る。 4: 褐色土: 漸移層土主体。 5: 黒褐色土主体。 6: 黒色土: 黒ボク。 7: におい黄褐色土: 黄褐色土多く

入る。 8: 褐色土: におい黄褐色土や多く入る漸移層土ブロック層。 9: 灰黄褐色土主体。 10: 褐色土: 黒褐色土におい黄褐色土多く入る。 11・14・17: 黄褐色土主体。 12: 明黄褐色土: ローム質土。 13: 明黄褐色土主体。 15・16・18: におい黄褐色土主体。

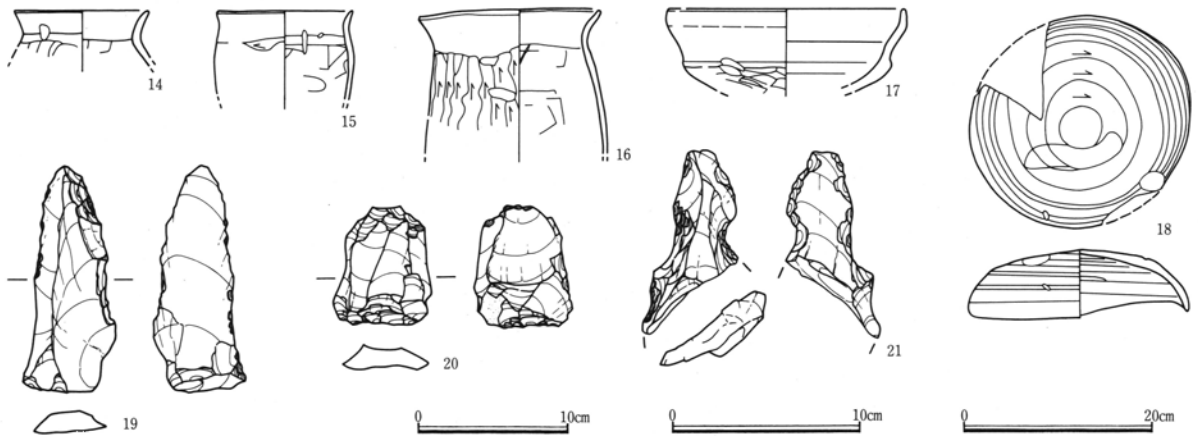
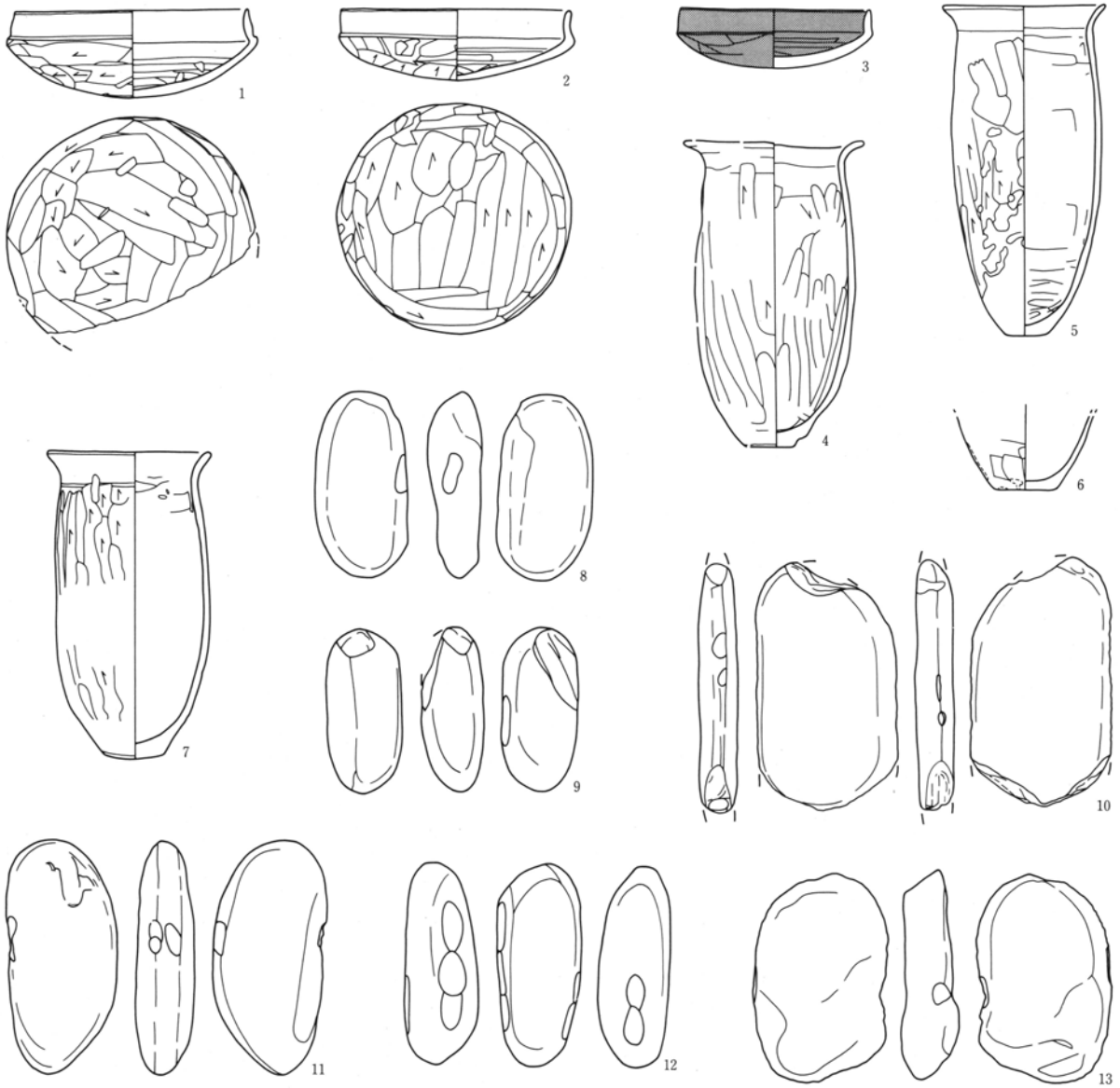
第557図 H-179号住居遺構

く、比較的良好的な遺存状況を示していた。
 本住居からの出土遺物は比較的多く見られたが、この中で本住居に伴うと判断された遺物には土師器の坏 (1,2,3) や甕 (4,5,6,7) があり、こも編み石 (8~13) の出土も見ている。
 一方、覆土中からは古墳時代後期の土師器甕片を中心に多くの遺物の出土を見た、この中には縄文時

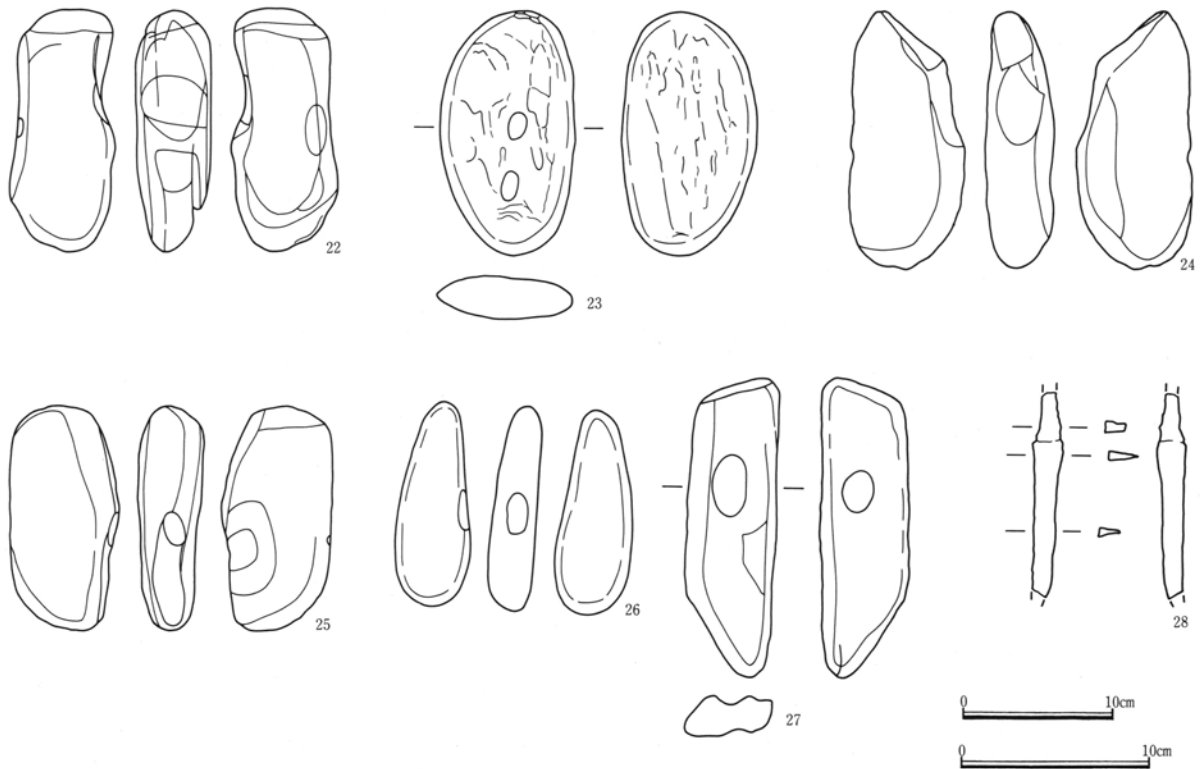
代の石錐 (21) やスクレイパー (19)、楔形石器 (20) の他、6世紀後半を主とする土師器の小型甕 (14, 15)・甕 (16)・坏 (17) や須恵器蓋 (18)、こも編み石 (22~25,27) が見られ、掘り方からもこも編み石 (26) の出土も見られた。
 以上の点から、本住居は7世紀中葉頃の所産と判断され、覆土中の遺物の状況から平安時代頃までは



第558図 H-179号住居カマド及び掘り方



第559図 H-179号住居出土遺物(1)



第560図 H-179号住居出土遺物(2)

その痕跡を留めていたことが窺われ、遺物の投棄が行われていたものと思慮される。

規模 長軸：617cm 短軸：598cm 深さ：64cm

カマド 幅：119cm 奥行き：102cm 左袖 幅：27cm 長さ：72cm 高さ：25cm 右袖 幅：35cm 長さ：76cm 高さ：17cm 燃烧部 径：53×70cm

煙道 幅：56cm 長さ：35cm以上

柱穴1 径：64×62cm 深さ：71cm 柱穴2 径：

86×56cm 深さ：50cm 柱穴3 径：58×54cm

深さ：51cm 柱穴4 径：68×62cm 深さ：40cm

貯蔵穴 径：58×56cm 深さ：62cm

南壁下ピット ピット1 径：16×12cm 深さ：

11cm ピット2 径：19×18cm 深さ：35cm

ピット3 径：42×38cm 深さ：58cm ピット4 径：

50×36cm 深さ：38cm ピット5 径：30×18

cm 深さ：22cm ピット6 径：24×22cm 深

さ：25cm ピット7 径：34×26cm 深さ：39cm

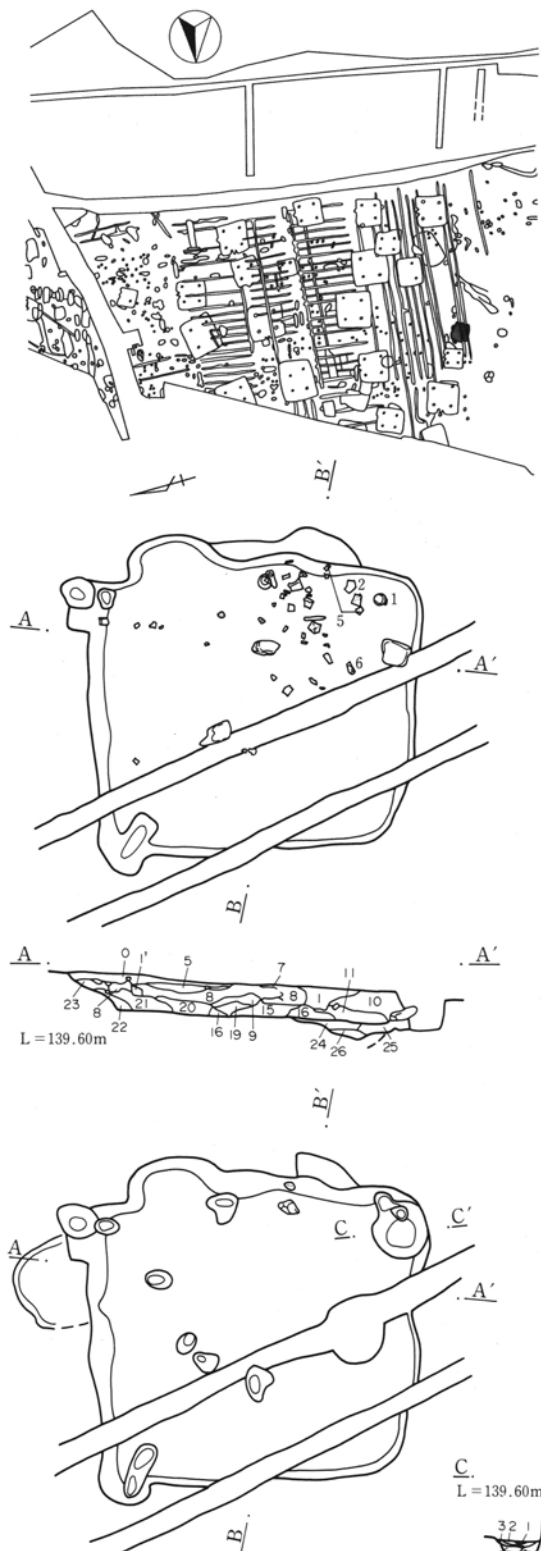
ピット8 径：20×20cm 深さ：37cm

構造 本住居は方形プランを呈している。

掘り方を有し、掘り方の壁際にはカマド前で304cm程と幅広いが、南・西・北壁際では124cm以下の幅を測る深さ10cm以下のテラス状の掘り残しが認められた。その他、幾つかの凹凸が認められたが、床面はこうした構造を持つ掘り方をローム質を中心とする土で埋め戻して造っている。

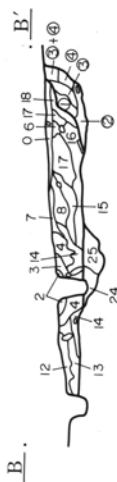
カマドは東カマドで、東壁中央に造られている。浅い掘り方を有し、暗褐色系の土壌で埋め戻して燃烧面を造っている。燃烧部は壁面の手前側に設定されるが若干壁面にかかっており、その両側にやはり暗褐色系の土壌で袖を造っている。板状の礫を用いた天井石が袖の上に渡されており、甕が2個並べて掛けられていた。

床面に於いては主柱穴4基を確認し、カマド右側には貯蔵穴を持つ。南壁下には壁に沿うように小型のピットが8基確認されたが、これらのピットには壁面の土止め(ピット5～8)、棚状の構造物(ピット1・2・《3》)、入口の構造物(ピット4・5)等の可能性が考慮される。



貯蔵穴覆土

1：にぶい黄褐色土主体の層。 2：暗灰黄色土と焼土化見られる褐色土が交互に4層堆積。 3：焼土化見られる黒褐色土主体の層。 4：にぶい黄褐色土主体の層。 5：にぶい黄褐色土：暗褐色土やや多く入る。



近世以降の埋土

0：客土。 1・4：黒褐色土／1'：暗褐色土：ローム漸移層(以下『漸移層』)上層土主体。As-A混入。 2：暗褐色土：漸移層上層土主体。As-A入る。 3：黄褐色土：ローム主体。 23：褐色土：8層土に黒褐色土とAs-A混入。

H-180号住居覆土

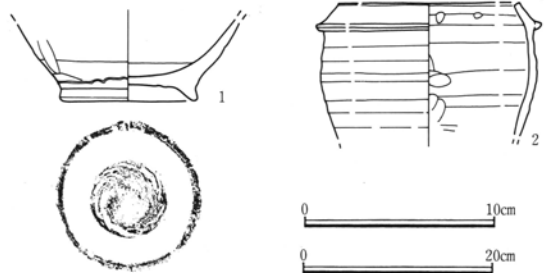
5・7・9・15・19・22：暗褐色土／6・21：黒褐色土／8・11・23／黒褐色土：漸移層上層土主体の層。 10・12・14：にぶい黄褐色土／13：褐色土：漸移層下層土主体の層。 16・17：褐色土／20：暗褐色土：上下漸移層の混土主体の層。 18：にぶい黄褐色土：ローム主体。

H-180号住居掘り方覆土

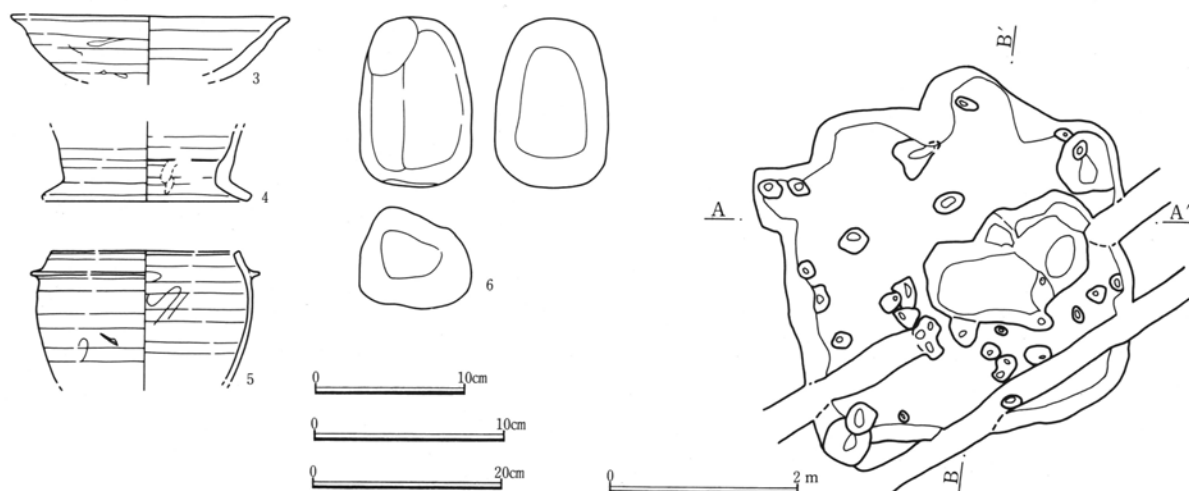
24：暗黒褐色土：暗黒褐色土と黒色土の混土。 25：暗褐色土：褐色土と暗褐色土の混土。 26：暗褐色土：褐色土と黒色土の混土。

H-180号住居カマド覆土

①：暗褐色土：よごれた暗褐色土中に焼土微量に混入。 ②：暗黒褐色土：褐色土少量混入。 ③：褐色土：夾雑物認められず。 ④：褐色土：暗褐色土と褐色土の混土



第561図 H-180号住居及び出土遺物



第562図 H-180号住居掘り方及び出土遺物

H-180号住居(平安時代. 第561~562図, 図版207~208・236)

概要 本住居は台地部の西端、矢田川へ落ちる斜面との境付近に位置する小型の竪穴住居である。

本住居は耕作溝によって壊され、遺存状況はあまり良好ではなかった。また、床面に於いて深さ25~45cmを測る小ピット9基程が見られたが、本住居に伴うかどうかを特定することはできなかった。

遺物の出土はカマド前に集中するが、全体としては多くなかった。この中で本住居に伴うと判断されたものには9世紀後半の所産と判断された回転ロクロ成形の高台付碗(1)と羽釜(2)が見られた。

一方、覆土中からは10世紀前半頃の回転ロクロ成形の須恵器坏(3)と須恵器甗(4)、羽釜(5)などの出土が見られた。

これらのことから本住居は9世紀後半期の所産であると判断され、覆土中の遺物から10世紀前半頃まではその痕跡を留めていたものと思われる。

規模 長軸：356cm 短軸：338cm 深さ：43cm

カマド 幅：146cm以上 奥行き：85cm以上 燃烧部 幅：65cm

貯蔵穴 径：60×58cm 深さ：28cm

床下粘土坑 径：139×84cm 深さ：14cm

構造 本住居は隅丸方形のプランを呈する。

住居中央付近には隅丸長方形を呈する浅い床下土坑を持ち、ここから南に部分的に掘り方が見られた。床面は概ね地床であったが、この掘り方部分では褐色~黒褐色の土で覆われて床面が造られている。

カマドは東カマドで東壁やや南に造り付けられ、燃烧部は壁まで食い込んでいる。カマドの袖等は破壊され、全体の状況はつまびらかではない。

床面に於いては柱穴は見られなかったが、柱穴様の形態を呈する貯蔵穴がカマド右側の南東コーナーに掘られている。

H-181号住居(古墳時代後期. 第563~564図, 図版208・237)

概要 本住居はF区東南角部に位置する。

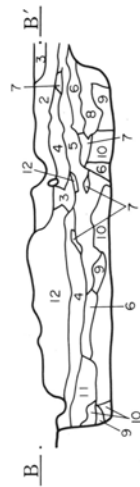
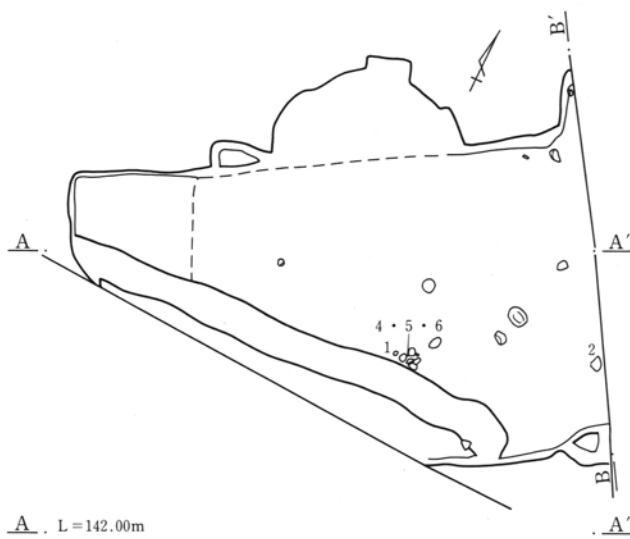
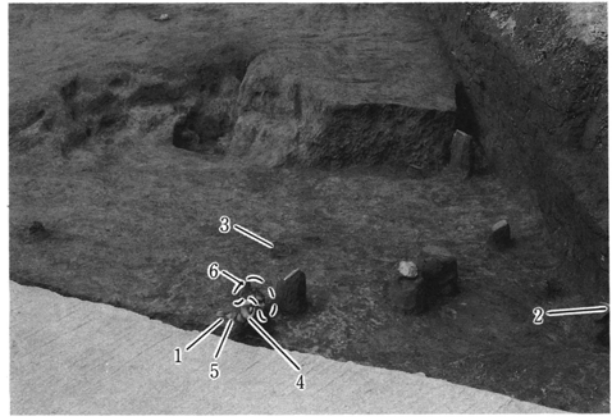
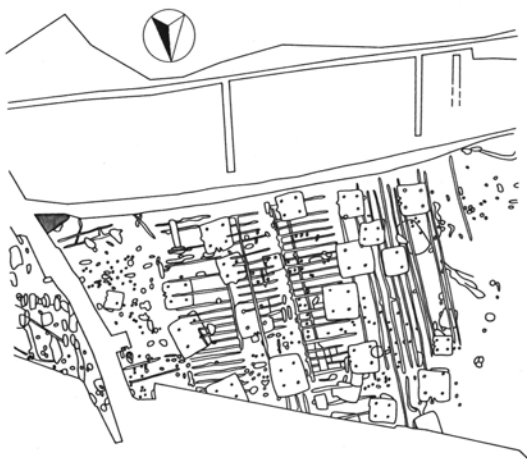
残念乍ら東及び南が公道下に潜っていたため、全体を調査することができなかった。調査できた範囲は遺構形態から1/6以下と推定される。また2号炭窯や耕作溝によって破壊されている部分もあった。

本住居は出土遺物から6世紀後葉の所産と判断し

ているが、住居に伴う遺物としては土師器坏(1,3)・高坏(4,5)・甕(2)があり、覆土中からは縄文時代のスクレイパーと6世紀前半の土師器坏が出土している。

規模 確認範囲：550×400cm 深さ：52cm

カマド 煙道 幅：推定40cm 長さ：56cm



近世以降の埋土

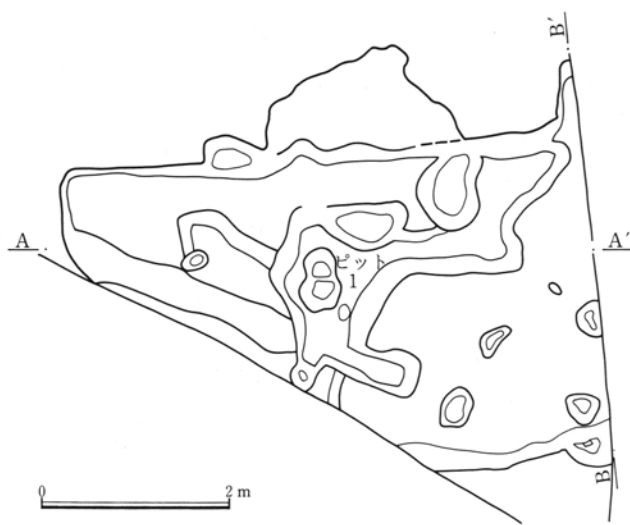
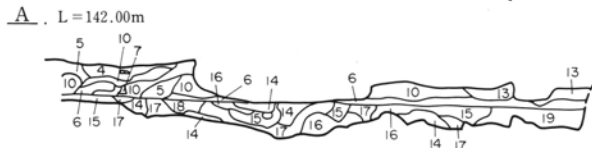
2：黒色砂質土：As-A微量。 3：黒色砂質土。 4：黒色土：As-A等若干含む。19：暗黒褐色土主体。炭窯に伴う攪乱か。

住居覆土

5：黒色土：黒色土と暗黒褐色土の混土。 6：暗黒褐色土：黄褐色土との混土。 7：暗黒褐色土／8：暗褐色土：くすんだ黄褐色土主体。 9：褐色土：ローム。10・13：暗褐色土：黄褐色土との混土。11：暗黒褐色土主体。 12：黒色土：硬く締まる黒色土と暗黒褐色土の混土。

住居掘り方覆土

14：暗褐色土：暗黒褐色土との混土。 15：黒褐色土主体。 16・17・19：暗黒褐色土主体。 18：黒色土：漆黒土主体。



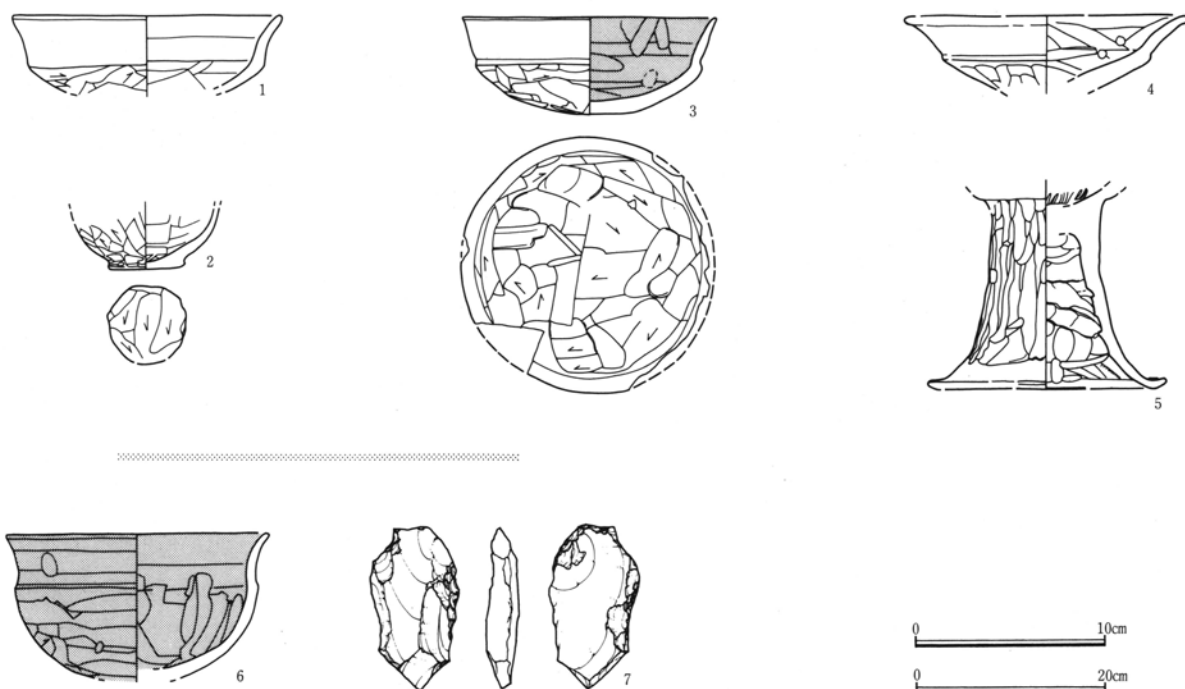
構造 上述のように全体の状況を明らかにすることはできなかったのであるが、本住居は方形のプランを呈していたものと推定される。

掘り方を有し、掘り方面はカマド左側が12cm以下の深さで低い。この掘り方を暗褐色土を中心とする土で埋め戻して床面が造られている。

カマドは北カマドであるが、破壊されていて詳細は不明である。

貯蔵穴は、床面に於いても掘り方面に於いても確認することはできなかった。しかし、柱穴は床面では確認できなかったが、掘り方に確認された掘り込み（ピット1）が比定されよう。ピット1は2つのピットからなっており径68×46cmの瓢箪形のプランを呈している。床面からの深さは38cm及び42cmということになる。

第563図 H-181号住居



第564図 H-181号住居出土遺物

H-182号住居 (古墳時代後期, 第565図, 図版208)

概要 本住居は、F区東部に位置する小型の竪穴住居跡である。上位は深く削平されており、遺構存在状況は不良であった。

出土遺物は皆無で、時期を特定することはできなかったが、カマドを有するので古墳時代後期から平安時代の所産であると判断される。

規模 長軸：364cm 短軸：338cm 深さ：29cm

カマド 幅：143cm 奥行：56cm 左袖 幅：

50cm 長さ：52cm 高さ：13cm 右袖 幅：51cm

長さ：48cm 高さ：9cm 燃烧部 径：62×58cm

柱穴1 径：37×36cm 深さ：66cm **柱穴2** 径：

39×37cm 深さ：35cm **柱穴3** 径：32×31cm

(深さ：58cm) **柱穴4** 径：31×28cm (深さ：

52cm) **柱穴5** 径：32×30cm 深さ：28cm

柱穴6 径：46×46cm 深さ：50cm **柱穴7** 径：

35×31cm (深さ：28cm)

貯蔵穴 径：46×45cm 深さ：62cm

構造 本住居は隅丸方形のプランを呈し、掘り方を

暗褐色～黒褐色の土で埋戻して床面を造っている。

カマドは東を向き、浅い掘り方を焼土等を含む暗褐色

土で埋め戻し、褐色土で袖を造り出している。円

形プランを呈する貯蔵穴はカマド右側に造られる

が、中側と外側の土層に明確な分層がなされるので、

容器を埋納していたことが想定される。

H-183号住居 (古墳時代後期, 第566～567図, 図版208～209・237)

概要 本住居は小型の竪穴住居跡であり、耕作溝が2条深く入り、上位は大きく削平されて遺存状況はあまり良好ではない。

出土遺物のうち本住居に伴うと判断された土師器

坏 (1) と土師器高坏 (2) の出土により、本住居は

7世紀前半の所産と判断される。また、床面からは

こも編み石 (3) も出土している。

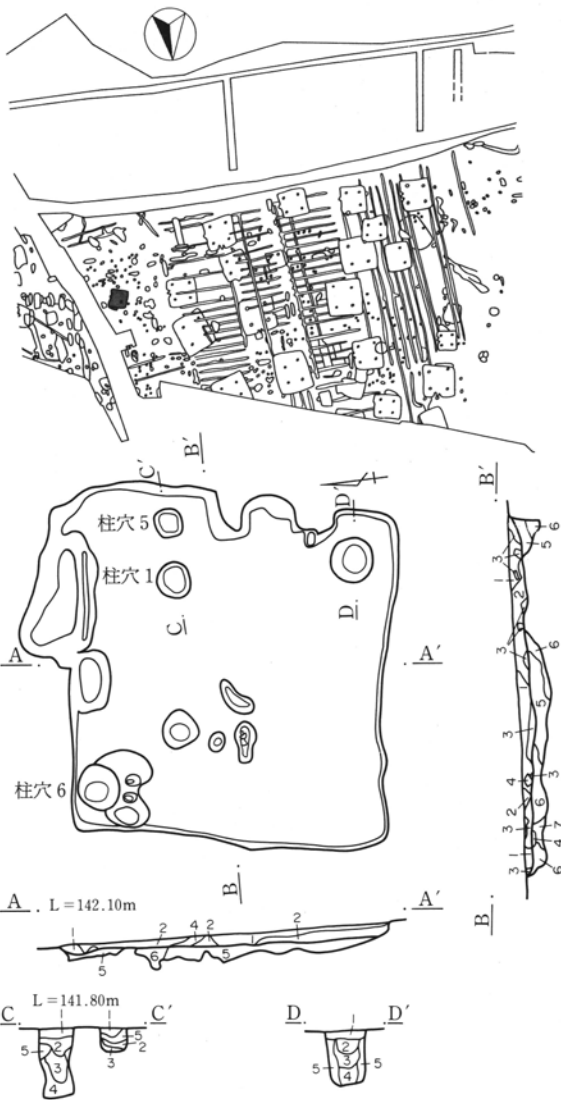
一方、覆土中からは本住居に先行する時期の土師

器高坏 (4,5)、土師器甕 (6,7) 土師器甗 (8) が出

土している。

規模 長軸：362cm 短軸：347cm 深さ：20cm

カマド 幅：93cm以上 奥行：62cm 左袖 幅



住居覆土

1：暗黒褐色土：褐色土粒を少量含む。 2：暗黒褐色土：くすんだ褐色土微量含む。 3：暗褐色土：褐色土と暗褐色土の混土。 4：褐色土：夾雑物殆ど含まず。

掘り方覆土

5：暗褐色土：褐色土中に黒褐色土少量混入。 6：暗黒褐色土：暗黒褐色土と褐色土の混土。 7：暗黒褐色土：暗黒褐色土と黒色土の混土中に褐色粘質土ブロックが少量混入する。

柱穴覆土

1：黒褐色土：明褐色土と暗褐色土の混土。 2：暗褐色土：明褐色土中に黒褐色土が少量混入。 3：褐色土。 4：黒褐色土：夾雑物認められず。 5：黒色土：褐色土粒多量に含む。

貯蔵穴覆土

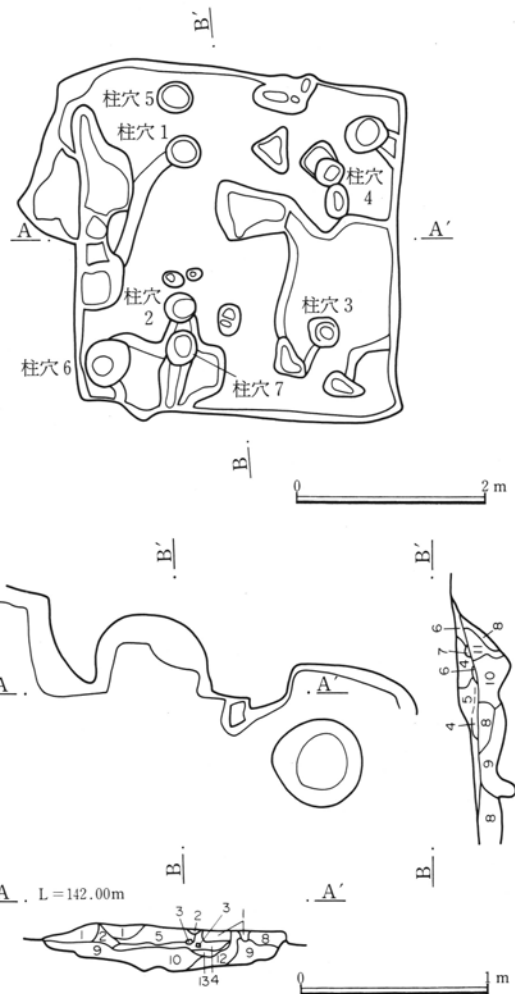
1：暗褐色土：炭化物・淡褐色土粒が少量混入する。 2：暗褐色土。 4：褐色土：褐色土と暗褐色土の混土。 3：褐色土：夾雑物認められず粘性強し。 5：暗褐色土：夾雑物認められず。

カマド覆土

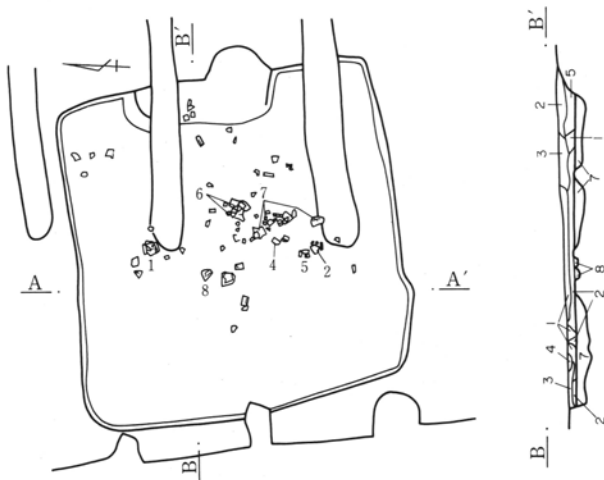
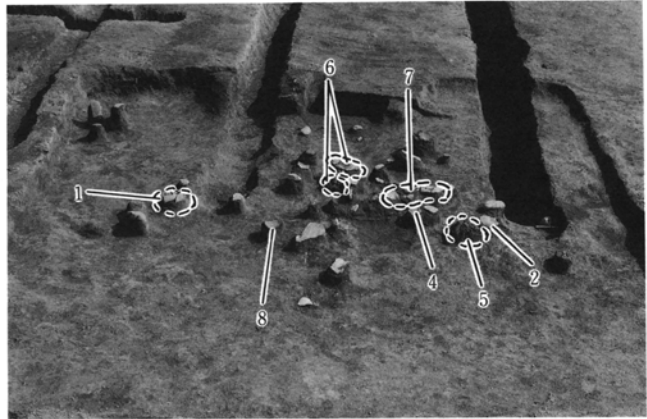
1：暗褐色土：褐色土に暗褐色土と焼土粒少量入。 2：暗黒褐色土：焼土微量。 3：黄褐色土：夾雑物含まず。 4：暗赤褐色土：黒ずんだ焼土と暗褐色土の混土。 5：暗黒褐色土：黒色土ブロックと暗褐色土の混土に焼土混入。 6：暗褐色土：褐色土ブロック微量混入。 7：赤褐色土：焼土粒主体土。

カマド掘り方覆土

8：褐色土：黒色土微量混入。 9：暗褐色土：黒色土ブロックが少量混入。 10：暗黒褐色土：暗褐色土主体土中に褐色・黒色土ブロックが少量混入する。 11：暗赤褐色土：暗褐色土と焼土の混土。 12：暗黒褐色土：暗褐色土とAs-YPと褐色粘質土ブロックの混土。 13：暗黒褐色土：締まりに欠ける褐色土ブロックが微量混入する。



第565図 H-182号住居

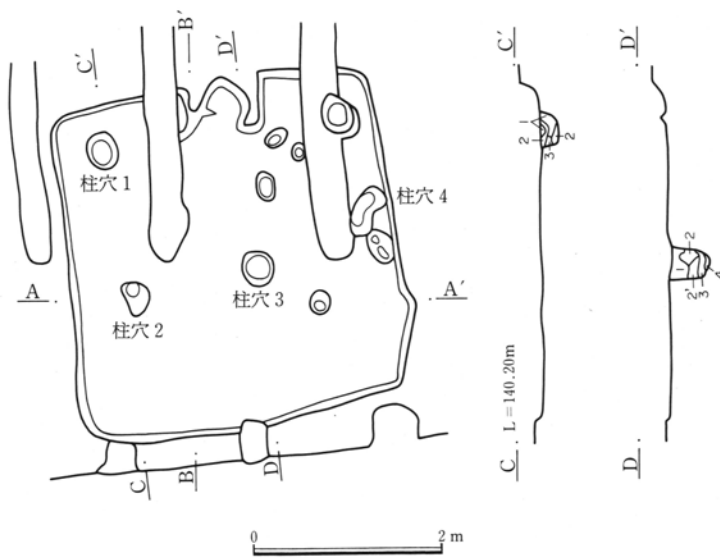
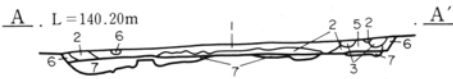


住居覆土

1：暗黒褐色土：くすんだ褐色土少量混入。 2：暗褐色土：褐色主体土中に暗黒褐色土少量混入。 3：暗黒褐色土：褐色・白色土粒が若干量混入。 4：暗黒褐色土：褐色土粒と焼土ブロックが少量混入。 5：暗褐色土：暗黒褐色土と褐色土の混土。 6：褐色土：夾雑物殆ど含まず。

掘り方覆土

7：暗褐色土：黒色土が微量混入する。 8：黒色土：褐色土が微量黒色する。



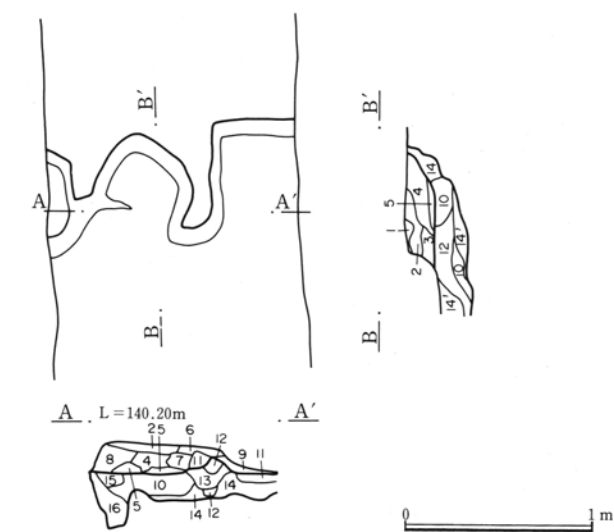
柱穴3覆土

1：暗黒褐色土：白色土粒と褐色土ブロック微量含む。 2：暗黒褐色土：褐色土少量含む。 2'：2層に比し更に多量の褐色土含む。 3：黒褐色土：暗黒褐色土中に淡褐色土ブロックが微量混入。 4：褐色土：黒色土微量混入。

柱穴1覆土

1：暗褐色土：褐色土と暗黒褐色土の混土。 2：褐色土：黒色土を微量含む。 3：黒色土：褐色土微量含む。

第566図 H-183号住居

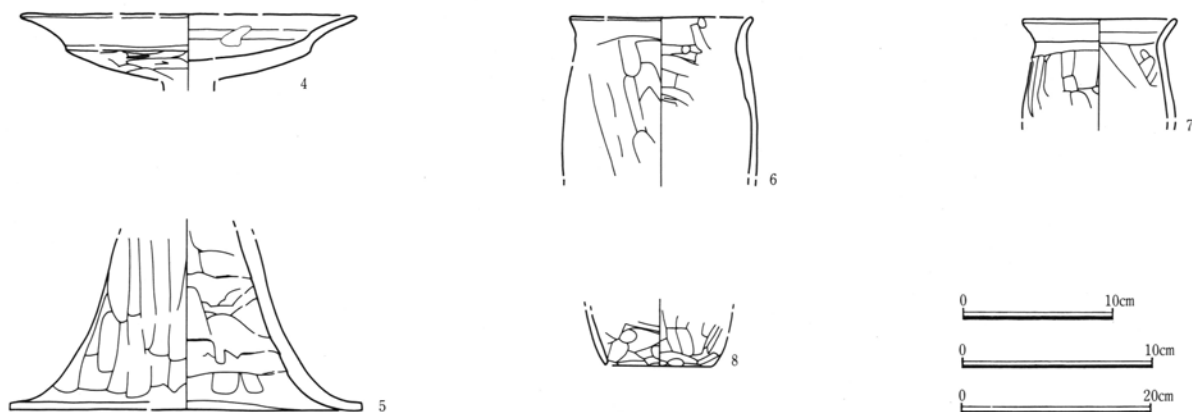
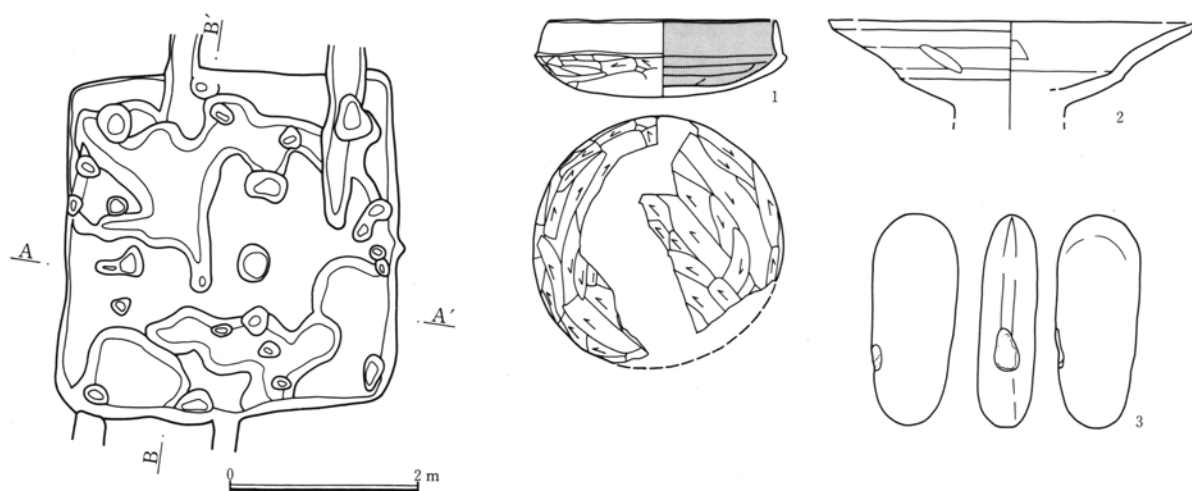


カマド覆土

1：褐色土：混入物特に無し。 2：暗褐色土：ロームブロック・焼土僅かに含む。 3：暗黄褐色土：ローム含む。 4：暗赤褐色土：焼土少し含む。 5：暗赤褐色土：焼土含む。 6：褐色土：粘土粒・焼土を僅かに含む。 7：暗赤褐色土：ローム・焼土粒少し含む。 8：暗褐色土：焼土僅かに含む。 9：褐色土：混入物特に無し。

カマド掘り方覆土

10：暗褐色土：暗褐色土と褐色土の混土に焼土がブロック状に微量混入する。 11：暗褐色土：暗褐色土とくすんだ焼土の混土。 12：暗褐色土：褐色土粒を少量含む。 13：暗褐色土：若干量の白色土粒・褐色土粒と黒色土ブロックを微量含む。 14：暗褐色土：褐色主体土中に黒色土若干混入する。 14'：暗褐色土：14層に比し黒色土の混入量が増加する。 15：黒色土：夾雑物見られず。 16：黒色土：暗黒褐色土と黒色土の混土。



第567図 H-183号住居遺構及び出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

：残存24cm 長さ：57cm 高さ：7cm 右袖 幅：30cm 長さ：64cm 高さ：12cm 燃烧部 径：38×52cm

柱穴1 径：38×32cm 深さ：23cm 柱穴2 径：35×28cm 深さ：22cm 柱穴3 径：37×34cm 深さ：47cm 柱穴4 径：38×28cm 深さ：64cm 貯蔵穴 径：51×40cm 深さ：75cm

構造 本住居は隅丸方形のプランを呈する。掘り方

を持ち、暗褐色～黒色の土壌で埋め戻して床面を作り出している。カマドは掘り方を持ち、これを埋め戻し乍ら焼土を含む暗褐色土で袖を造っている。袖材等は確認されなかった。主柱穴を特定することはできなかったが、柱穴として柱穴1～3を確認した。しかし北東に寄り過ぎているので、住居の拡張か、或いは掘り方でも南東のものが特定できず柱穴4の存在することから掘立柱建物の存在が考慮される。

H-184号住居(平安時代, 第568～569図, 図版209・237～238)

概要 本住居はF区中央やや北東寄りに位置し、南東隅にカマドを持つ小型の竪穴住居である。上位は削平され、耕作溝で攪乱されていて遺存状況は良くなかった。

出土遺物はカマド及びその対する住居北西部に集まる。出土遺物のうち本住居に伴うと判断されるものは凡そ9世紀後葉のもので、回転ロクロ成形の高台付き碗(1)、土師器の小型甕(2)とコの字状口縁の甕(3)、及び吉井型の羽釜(4,5)がある。また、覆土中からは4世紀前半の器台や8世紀頃の布目瓦(12)、こも編み石(13)、本住居に引き続く時期の灰釉陶器碗(9)や藤岡・吉井窯址群産の回転ロクロ成形の高台付き碗(7)や長頸壺(11)が出土してお

り、15～16世紀の志野の皿の破片(10)も混ざり込んでいた。

規模 長軸：388cm 短軸：357cm 深さ：17cm

カマド 幅：93cm以上 奥行き：89cm以上 燃烧部 径：93×89cm

構造 本住居はやや菱形に近い方形プランを呈し、掘り方をロームや褐色土などで埋め戻して床を造っている。床面に柱穴や貯蔵穴は認められなかったが、西壁北端に幅22cm、深さ数cmの周溝様の落ち込みが長さ91cmに亘って確認された。カマドは住居南東隅に東を向いて造られる。破壊がひどく詳細は不明だが、カマドセクションのB-B'ライン上に乗る2つの小ピットは袖石を抜いたものと推定される。

H-185号住居(古墳時代後期, 第570～573図, 図版209～210・238～239)

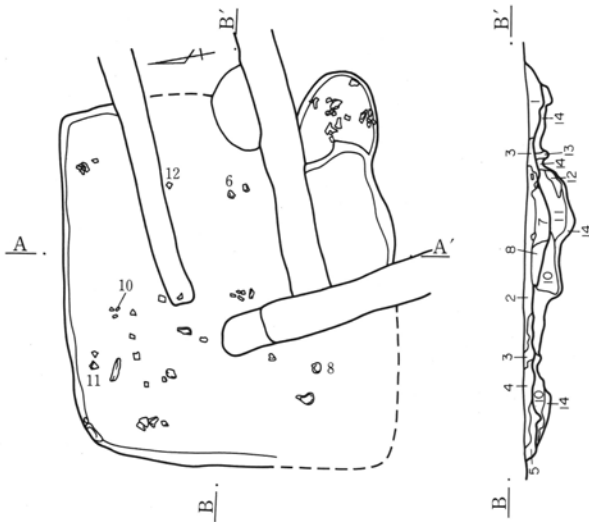
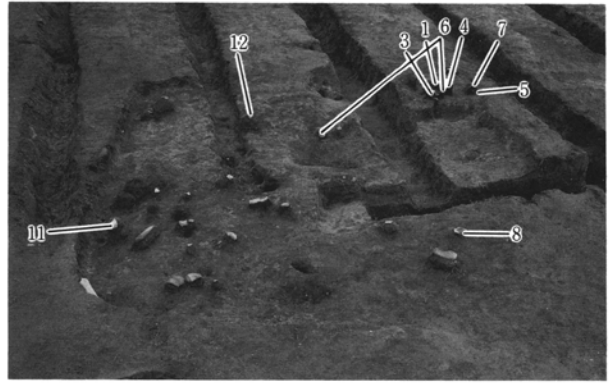
概要 本住居はF区中央北寄りに位置し、H-184号住居の南西に隣接する大型の竪穴住居跡である。住居は南に向うほど強く削平されている。また耕作溝が深く掘られ、住居南半分を中心に遺構が壊され、特に住居の東壁と南遺構の大半は滅失してしまっていた。しかし攪乱される部分以外の遺構の遺存状況は良好で、ここのパーツの構造などは比較的是っきり捉えることができた。

出土遺物は比較的多かった。本住居に伴うものとしては6世紀後半の形態を残す土師器高坏(1,2,3)と7世紀前半に含められる土師器の坏(4,5)と甕(6)があり、床面からは土製模造品の白玉(8,9)が出土している。従って本住居は西暦700年前後の所産では

ないかと考えられる。また覆土中からは縄文時代の遺物として中期の深鉢片(10)や打製石斧(12)、凹石(11)が出土したほか、6世紀から7世紀前半にかけての土師器坏(14,15,16,23)や土師器甕の底部(19,20)、土師器甕の底部(18)が出土し、掘り方からは土師器甕(7)の出土も見た。このほか8世紀後半から9世紀にかけての土師器坏(21,22)やコの字状口縁の甕(17)が出土しており、本住居が奈良・平安期まで窪地であった可能性が考えられる。

規模 長軸：711cm 短軸：689cm 深さ：43cm

カマド 幅：82cm 奥行き：93cm 左袖 幅：26cm 長さ：66cm 高さ：20cm 右袖 幅：29cm 長さ：68cm 高さ：29cm 燃烧部 径：36×64cm

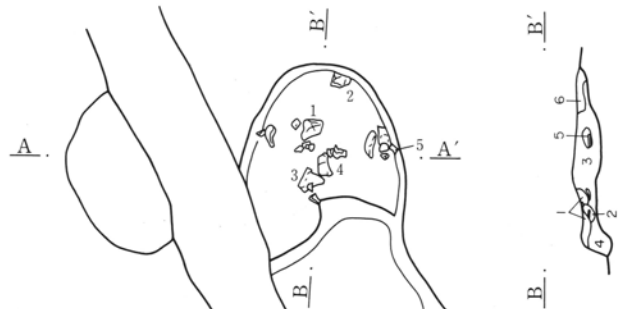
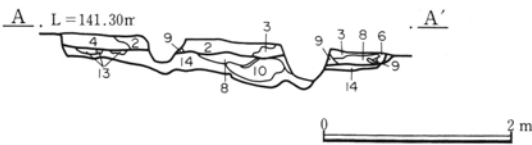


住居覆土

- 1：暗褐色土：ローム少し含む近年の攪乱。
- 2：暗褐色土：暗色やや弱い。白色粒僅かに含む。
- 3：暗褐色土：やや黄色がかかる。ローム含む。
- 4：暗褐色土：2層と同じ色調。混入物無し。
- 5：暗黄褐色土：ローム少し含む。
- 6：褐色土：白色粒（As-Aか）含み、焼土粒僅かに含む。
- 7：暗褐色土：ローム、白色・黄色・炭化物粒を少し含む。
- 8：褐色土：白色・黄色・炭化物粒含む。一部は貼床か。
- 9：黄褐色土：ロームをかなり多く含む。

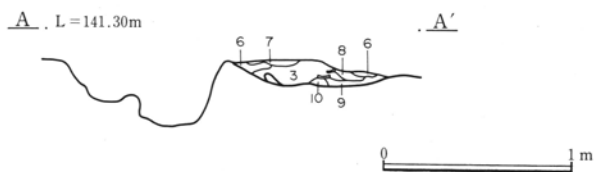
掘り方覆土

- 10：褐色土：ローム少し含む。
- 11：褐色土：白色・黄色粒、ロームブロックを多く含む。
- 12：暗黄褐色土：ロームを多く含む。
- 13：暗褐色土：混入物無し。
- 14：黄褐色土：ロームを主体とする。



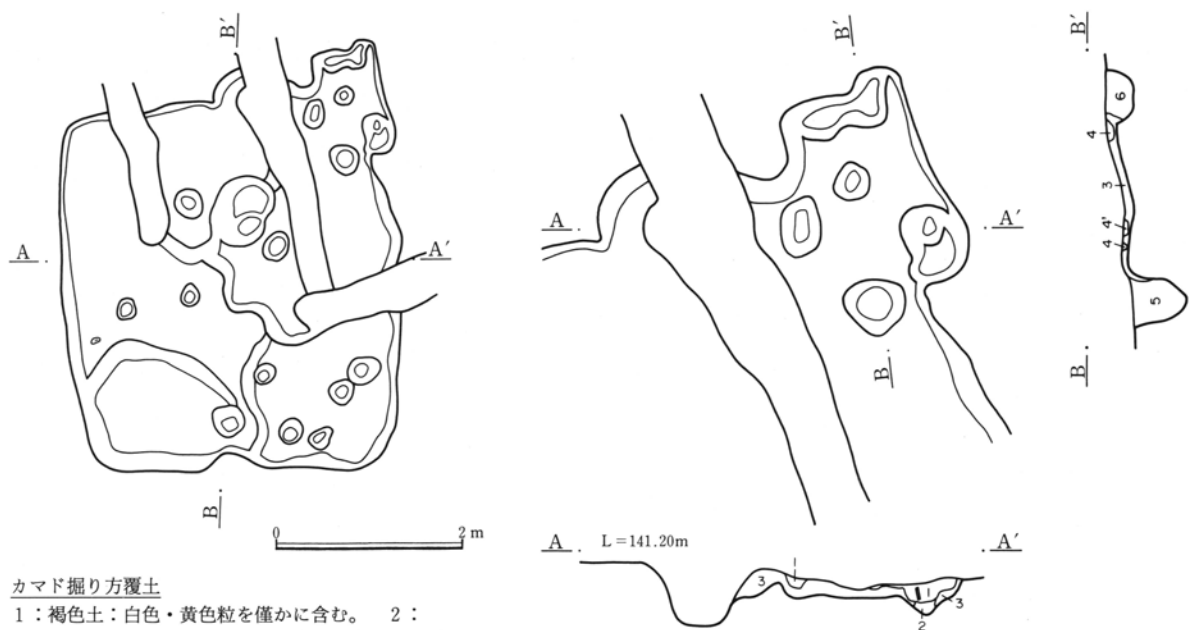
カマド覆土

- 1：暗褐色土：As-A少し含む。縮まり弱い。
- 2：黒褐色土：焼土炭化物少し含む。縮まり弱い。
- 3：褐色土：やや赤みがかかる。焼土少し含む。縮まりやや弱い。
- 4：暗黄褐色土：ローム少し含む。縮まりやや弱い。
- 5：暗赤褐色土：焼土多く含む部分。縮まり弱い。
- 6：暗褐色土：焼土・白色粒少し含む。縮まり弱い。
- 7：褐色土：焼土僅かに含む。縮まり弱い。
- 8：褐色土：焼土粒少し含む。縮まり弱い。
- 9：褐色土：焼土ブロック少し含む。縮まり無し。
- 10：暗黄褐色土：白色粒僅かに含む。縮まり無し。



第568図 H-184号住居及びカマド

第3章 発見された遺構と遺物

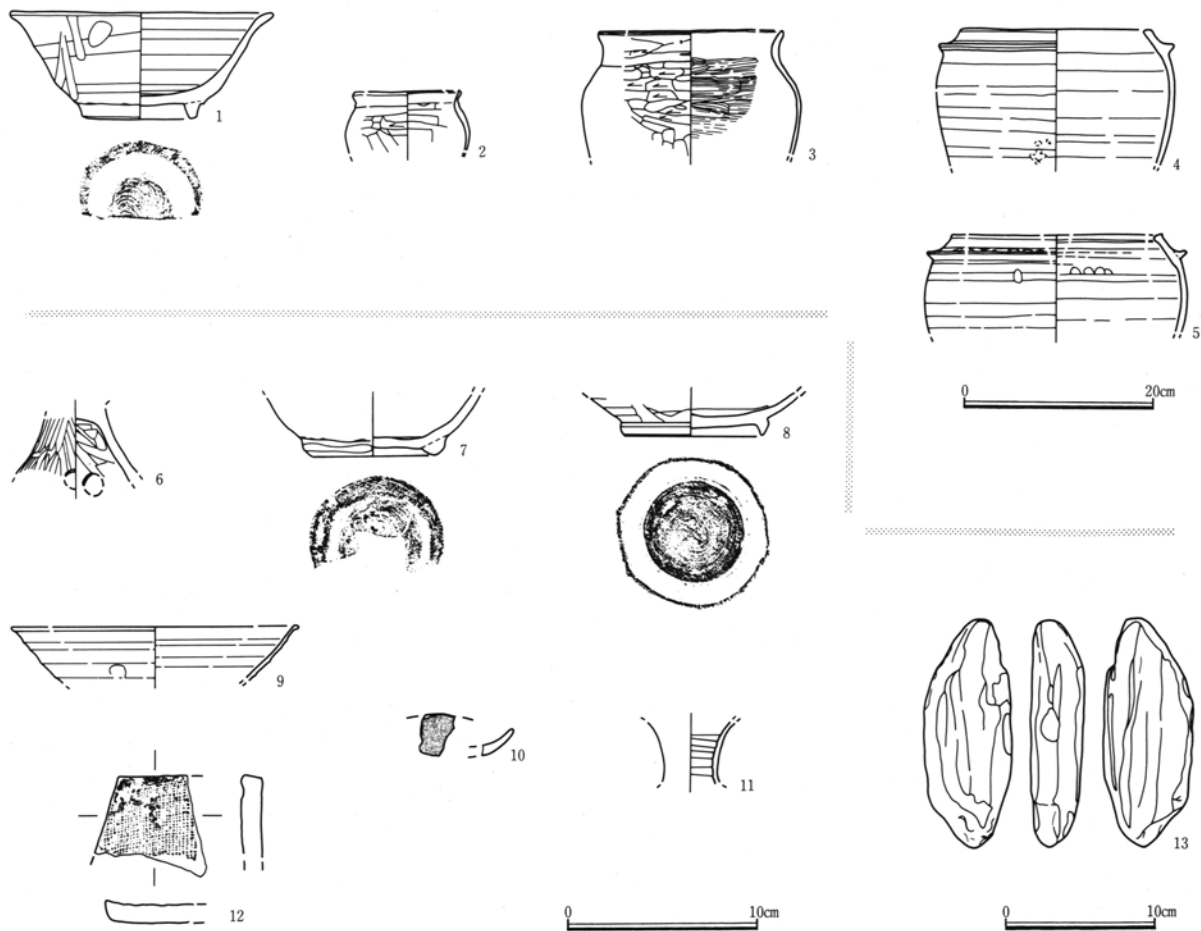


カマド掘り方覆土

1：褐色土：白色・黄色粒を僅かに含む。 2：暗褐色土：混入物無し。 3：黄褐色土：ロームを主体とする。 4：褐色土：白色・黄色粒を少し含む。 4'：4層のうち焼土粒を少し含む。

樹木の根の痕跡

5：褐色土／6：褐色土：ローム入る。



第569図 H-184号住居掘り方及び出土遺物



近世以降の層

1・2・2'：褐色土：As-A含みザラつく。近世以降の耕作溝覆土。

住居覆土

3・4・5・6：暗黄褐色土主体の土層。 7・10・11・12・13・

14・16・18・19・21：暗黄褐色土主体の土層。 8・9・15：暗褐色土主体の土層。

17：黄褐色土：地山ブロック層。硬質。 20：黄褐色土：ローム主体のブロック層。

第570図 H-185号住居

煙道 幅：34cm以上 長さ：36cm

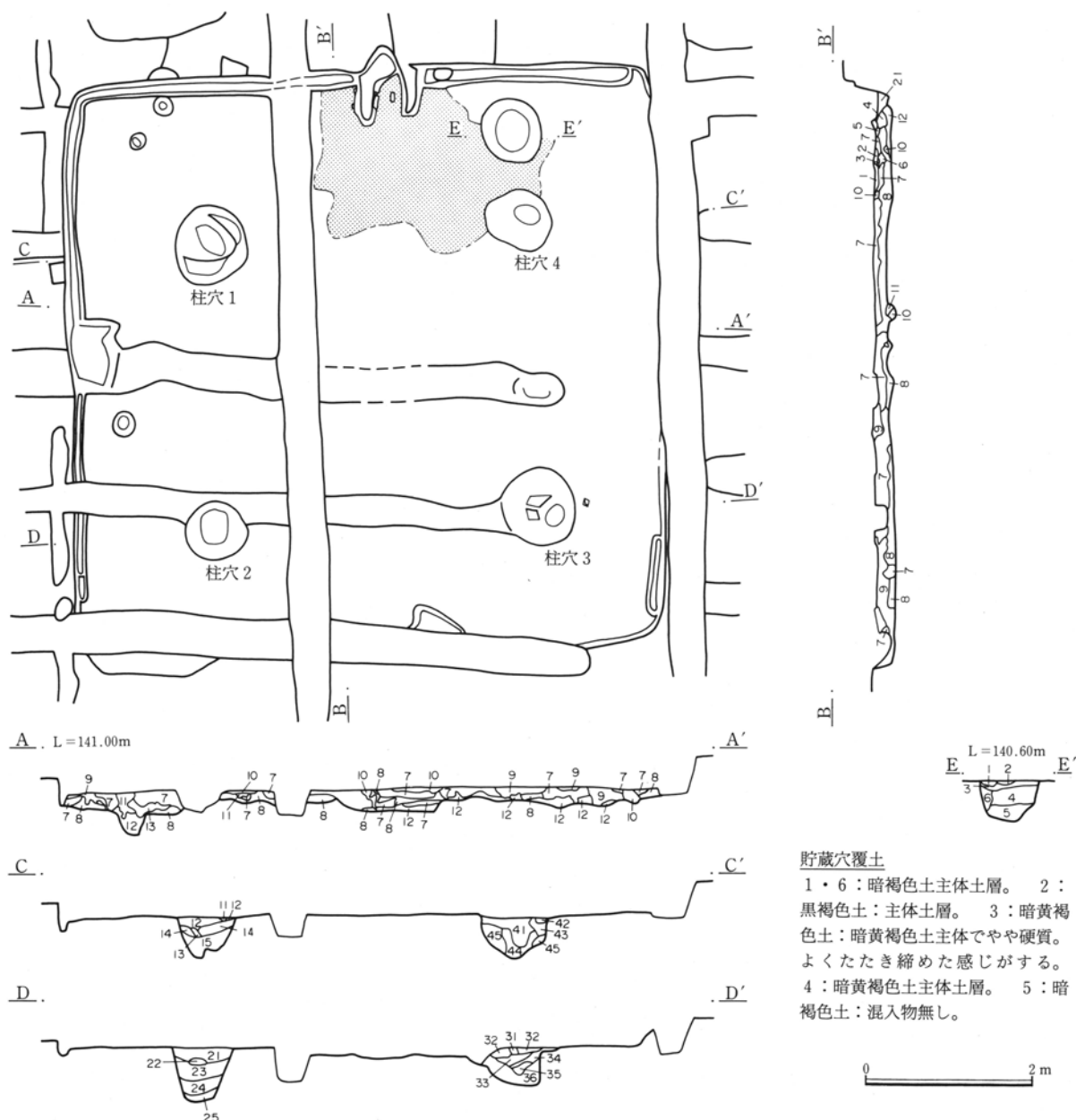
深さ：58cm 柱穴4 径：80×70cm 深さ：62cm

柱穴1 径：94×83cm 深さ：42cm 柱穴2 径

貯蔵穴 径：80×69cm 深さ：90cm

：73×70cm 深さ：65cm 柱穴3 径：93×83cm

床下土坑1 径：173×157cm 深さ：11cm 床下



貯蔵穴覆土

1・6：暗褐色土主体土層。 2：黒褐色土：主体土層。 3：暗黄褐色土：暗黄褐色土主体でやや硬質。よくたたき締めた感じがする。 4：暗黄褐色土主体土層。 5：暗褐色土：混入物無し。

掘り方覆土

1：暗赤褐色土：やや硬質で焼土粒多。 2：灰褐色土：やや灰質。 3：赤褐色土：焼土主体。 4：暗黄褐色土：ロームかなり多。 5：暗黄褐色土主体土層。 6・9・10：暗褐色土主体土層。 7：暗黄褐色土：ローム含む。 8・12：黄褐色土：ローム主体土層。 11：黒褐色土：混入物無し。 13：暗黄褐色土：ロームやや多。

柱穴覆土

11・12・31・33・35・42：暗褐色土主体土層。 13：黄褐色土：ローム多く含む。 14・34：黒褐色土主体土層。 15：黄褐色土主体土層。 21・22・23・45：褐色土主体土層。 24：褐色土：夾雑物無し。 25：黒褐色土。 32・36：暗黄褐色土主体土層。 41・44：暗褐色土：混入物無し。 43：黄褐色土：ローム主体。

第571図 H-185号住居遺構

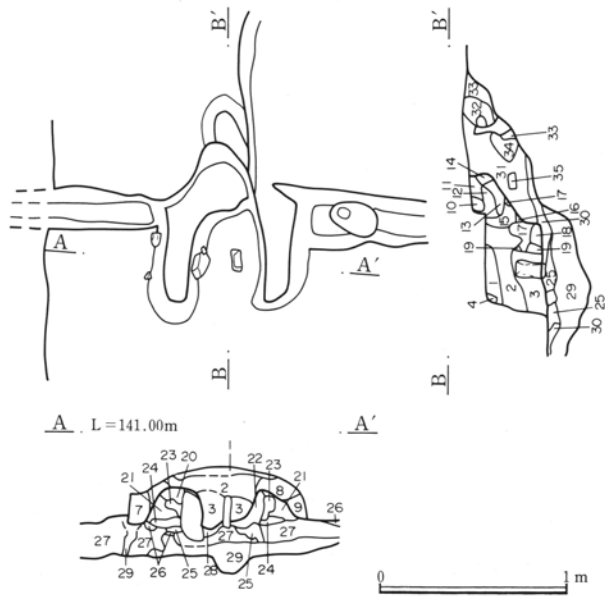
土坑2 径：170×168cm 深さ：12cm

周溝 幅：15cm前後中心 深さ：23cm以下

構造 本住居は方形プランを呈し、掘り方を持つ。

掘り方中央には7層土に8層土が挟まれた土層堆積を見せる床下粘土坑と考えられる床下土坑1があ

り、その南部にも床下土坑2がある。この掘り方を黄褐色土等で埋め戻して床を造り出している。カマドは北壁中央やや東寄りに構築されている。浅い掘り方を持ち、これを埋め戻して焼土を含む褐色～暗褐色土で袖を造っている。袖材等は確認できなかった



カマド覆土

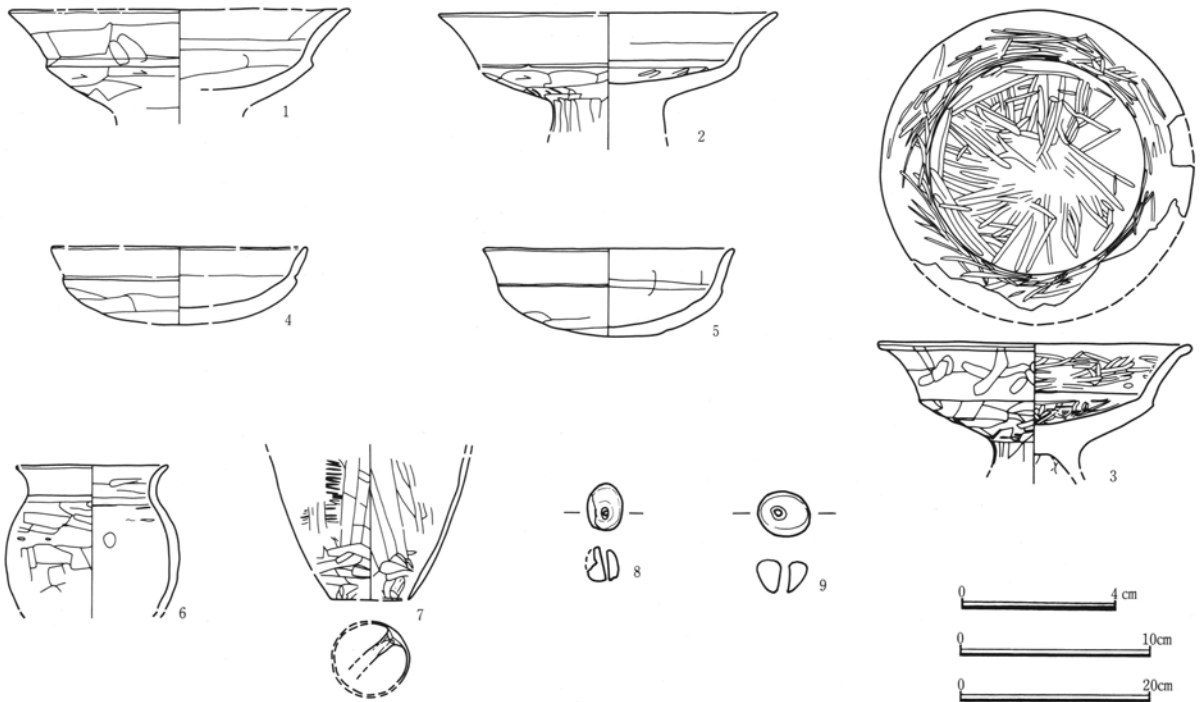
1・2・8・11・12・13・14：褐色土主体土層。 3：暗赤褐色土：焼土含む。 4・19：黄褐色土：ローム多く含む。 9：暗褐色土：混入物無し。 10：暗黄褐色土主体土層。 7・15・18：暗褐色土主体土層。 16：赤褐色土：焼土主体。 17：暗赤褐色土：焼土多く含む。

袖構築材

20・21：褐色土主体土層。 22：暗赤褐色土：焼土多く含む。 23：暗赤褐色土：焼土主体。 24：暗褐色土主体土層。

掘り方覆土

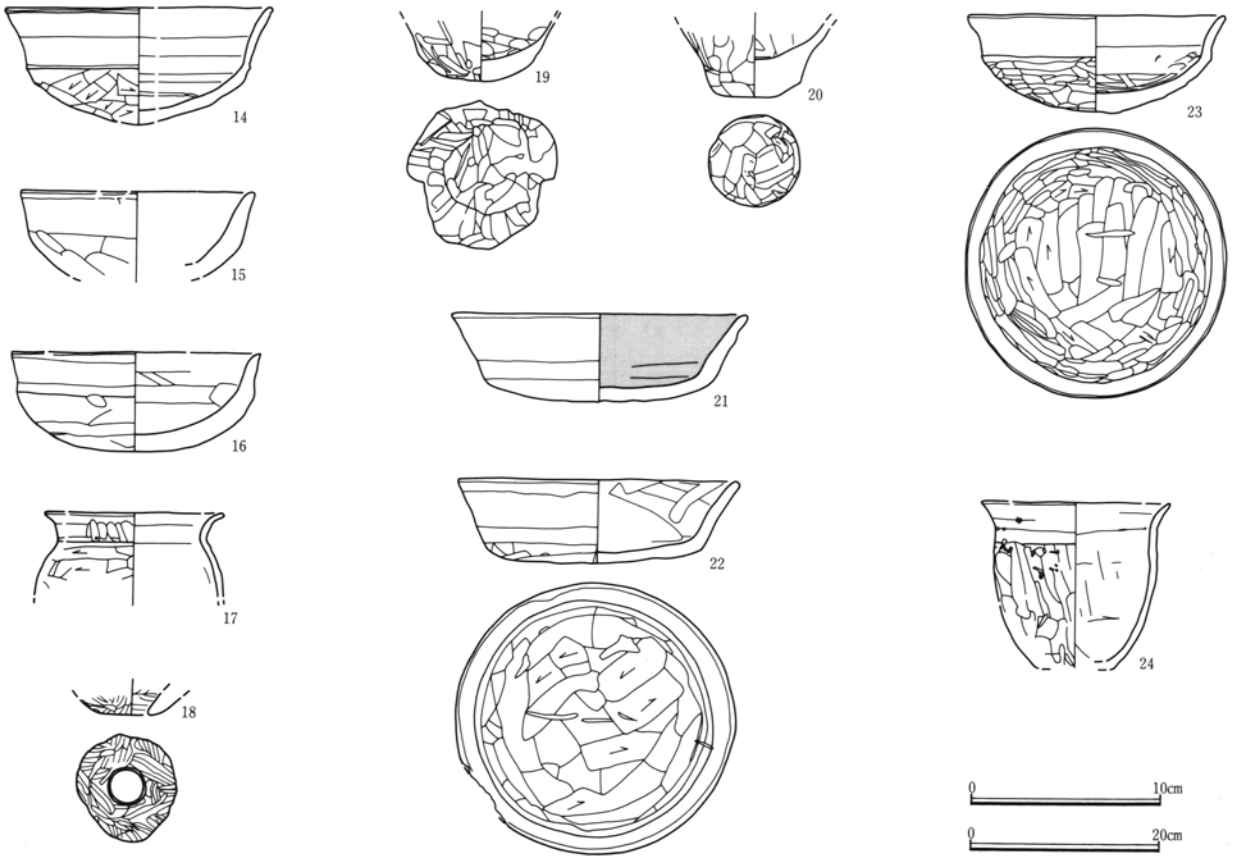
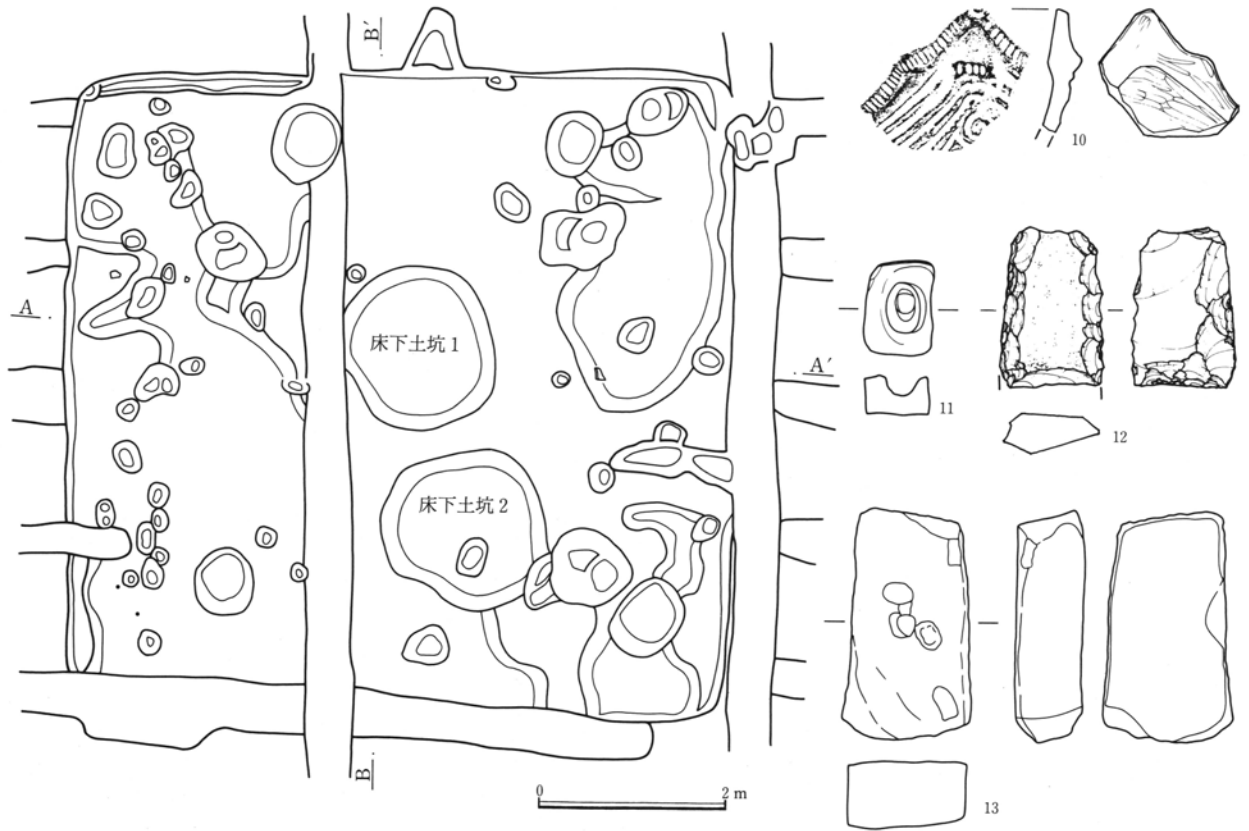
25：暗黄褐色土主体土層。 26・30・34・35：暗褐色土主体土層。 27：暗黄褐色土：ロームかなり多く含む。 28・32：暗赤褐色土：焼土多く含む。 29：黄褐色土：ローム主体。 31：暗赤褐色土：焼土かなり多く含む。 33：暗赤褐色土主体土層。



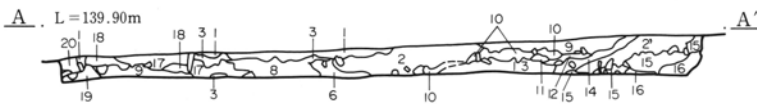
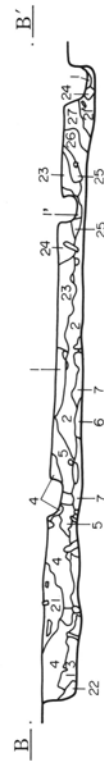
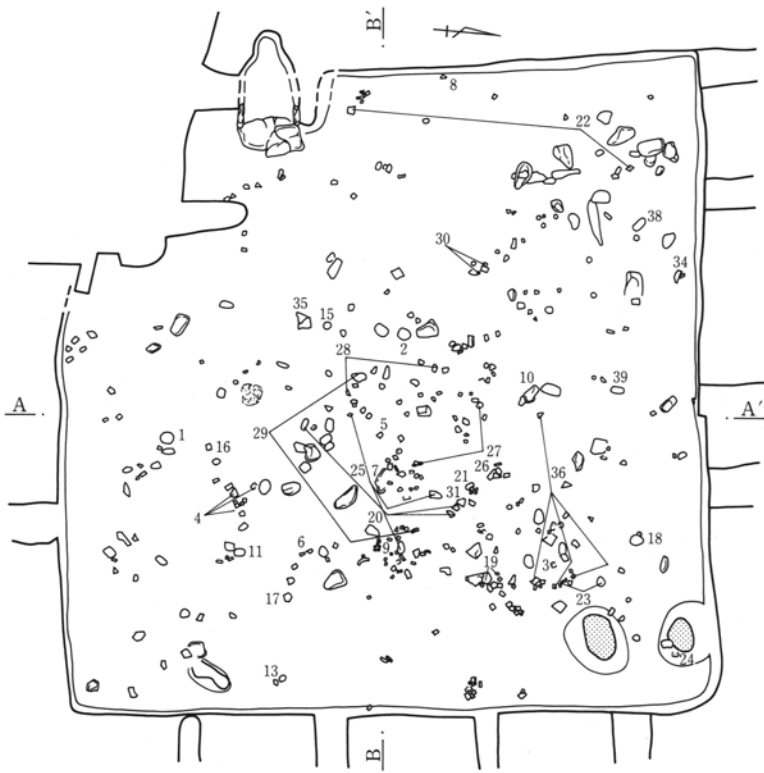
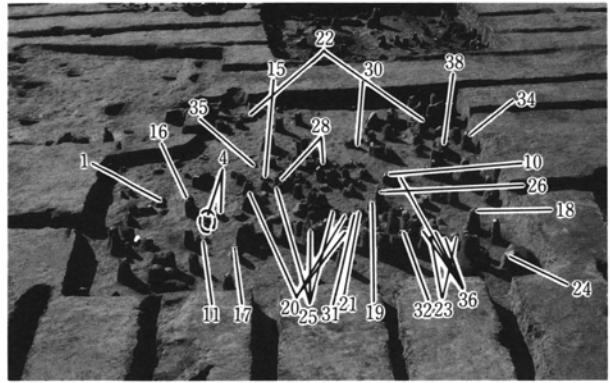
第572図 H-185号住居カマド及び出土遺物

た。燃焼部はフラットで、煙道は特段の段差を持たず斜めに上がっていている。主柱穴は円または楕円形のプランを呈し4カ所確認されている。比較的しっかりした掘り方を持つが、柱穴1・3は柱が沈み込んだ可能性を示す。また、柱穴2・3・4の土層断面の観察から、柱の径は30cm程度あったことが

推定される。貯蔵穴はカマド右側、柱穴4の北側に隣接して設置され、円形プランを呈し丸底である。また、耕作溝によって東壁と西壁沿いの大半の部分を確認できなかったが、カマド部分を除く北壁と西壁、及び東壁の一部に周溝を確認している。



第573図 H-185号住居掘り方及び出土遺物



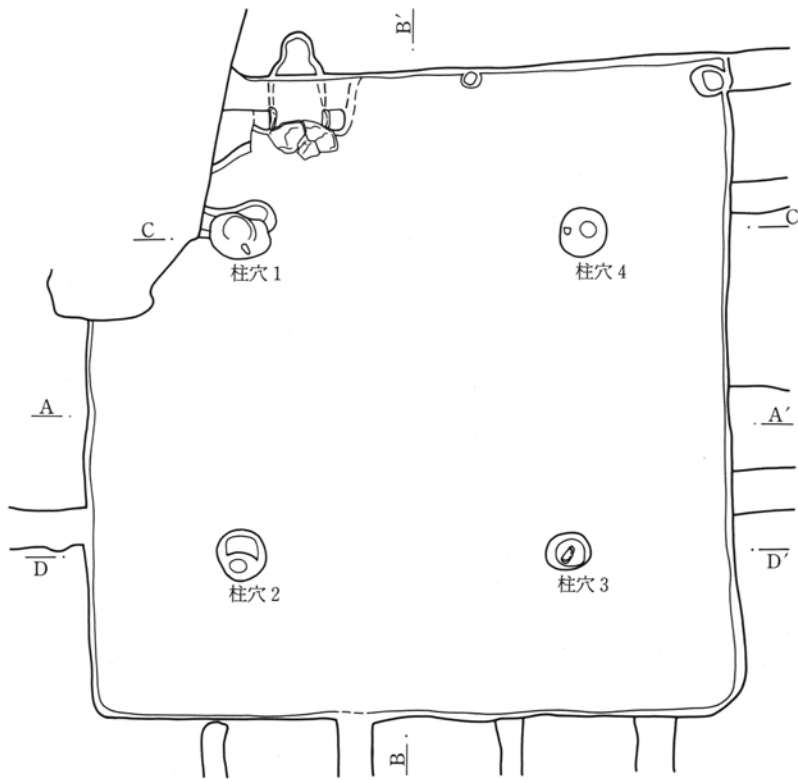
0 2 m

住居覆土

1・1'：にふい黄褐色土：As-A・ローム粒等含む。 2・2'：暗褐色土/12：にふい黄褐色土：褐色土・黒褐色土やや多く含むローム漸移層（以下『漸移層』）土ブロック層。 3：灰褐色土/27：暗褐色土：漸移層上層土ブロック主体。 4・6・14・15：褐色土/5：暗オリーブ褐色土/10：黒褐色土/13：黄褐色土：漸移層土ブロック主体。 7・23：黄褐色土主体層。 8・19・24：にふい黄

褐色土主体層。 9：にふい黄褐色土：褐色土やや多く入る漸移層ブロック層。 11：暗褐色土：10層土と12層土の混土。 16：暗褐色土：黒褐色土のやや多く入る漸移層ブロック層。 17：褐色土：暗褐色土・黒色土・ロームやや多く入るブロック層。 18・20：黒褐色土主体層。 21・21'：にふい黄褐色土/26：黄褐色土：褐色土多く入るブロック。 22：明黄褐色土主体のブロック層。 25：暗褐色土主体のブロック層。

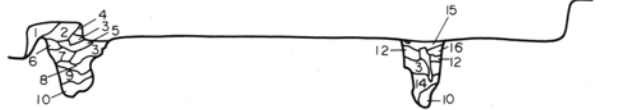
第574図 H-186号住居



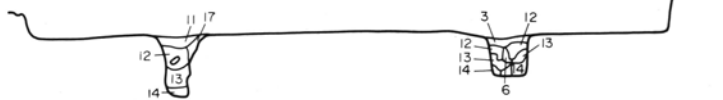
柱穴覆土

1：明褐色土／2：明赤褐色土：焼土化するローム主体。 3：黄褐色土／ 4：明黄褐色土：ローム質土主体。 5：褐色土主体。 6：にぶい黄褐色土：2・7層土混土。 7：にぶい黄褐色土：灰色粘土粒等やや多。 8：にぶい黄褐色土主体。 9：黄褐色土／ 10：にぶい黄褐色土：ローム質。 11：暗褐色土：黒色土・ローム多し。 12：黄褐色土主体層。 13：にぶい黄褐色土：ローム等やや多。 14：にぶい黄褐色土：褐色土やや多く入るローム漸移層質土。 15：にぶい黄褐色土中ブロック主体層。 16：明黄褐色土主体層。 17：明黄褐色土：12層土とロームの混土。

C. L=139.90m



D.



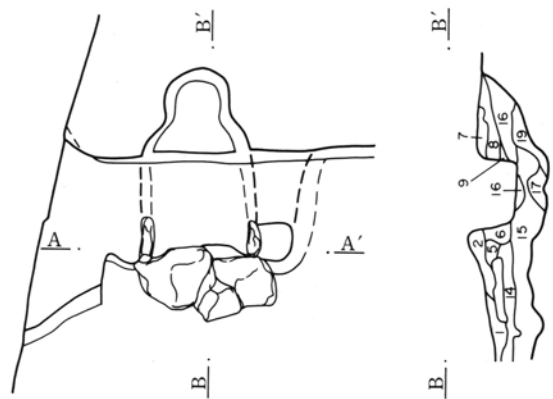
0 2 m

カマド覆土

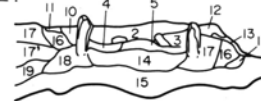
1：にぶい黄褐色土：弱い焼土化。 2：褐色土：ローム漸移層（以下「漸移層」）土主体。 3：にぶい赤褐色土：焼土化したロームか。 4：黄褐色土：弱い焼土化。 5：暗赤褐色土：焼土化進行の褐色土か。 6：橙褐色土：焼土化進行のにぶい黄褐色土主体。 7：明褐色土：焼土化進行のにぶい黄褐色土主体。 8：にぶい赤褐色土：焼土化した漸移層土主体。 9：赤灰色土：焼土・黒色土粒と灰の混土。 10：明黄褐色土：焼土化進行のローム主体。 11：にぶい黄褐色土：弱い焼土化見るローム主体。 12：黄褐色土：ロームの焼土多い弱く焼土化する漸移層土主体。 13：褐色土：漸移層上層土主体。

カマド袖材・掘り方に使用の土層

14：暗黒褐色土と黒色土の混土。 15：暗褐色土：褐色土主体。 16：黒褐色土：暗褐色土主体。 17・17'：黒褐色土主体層。 18：暗褐色土：褐色土と黒色土の混土主体。 19：暗褐色土：暗褐色土と黒色土の混土。

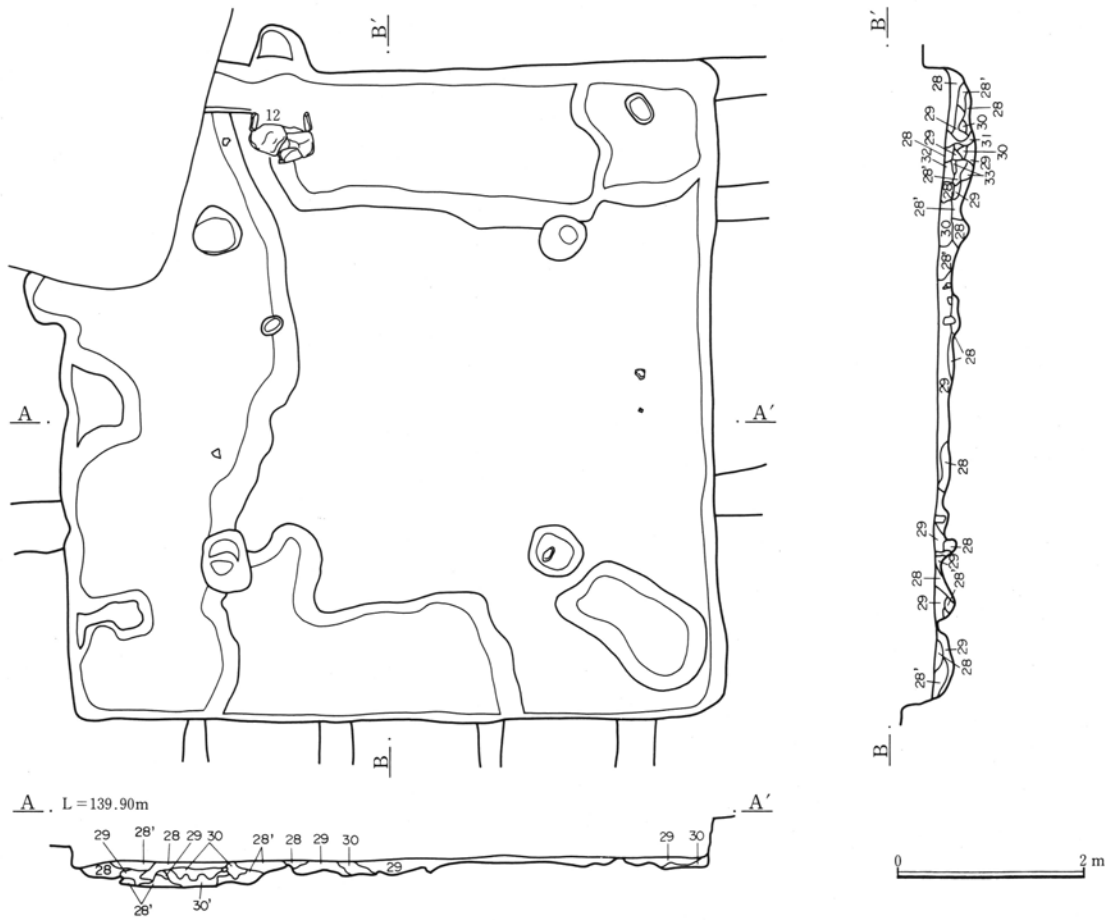


A. L=139.60m



0 1 m

第575図 H-186号住居遺構

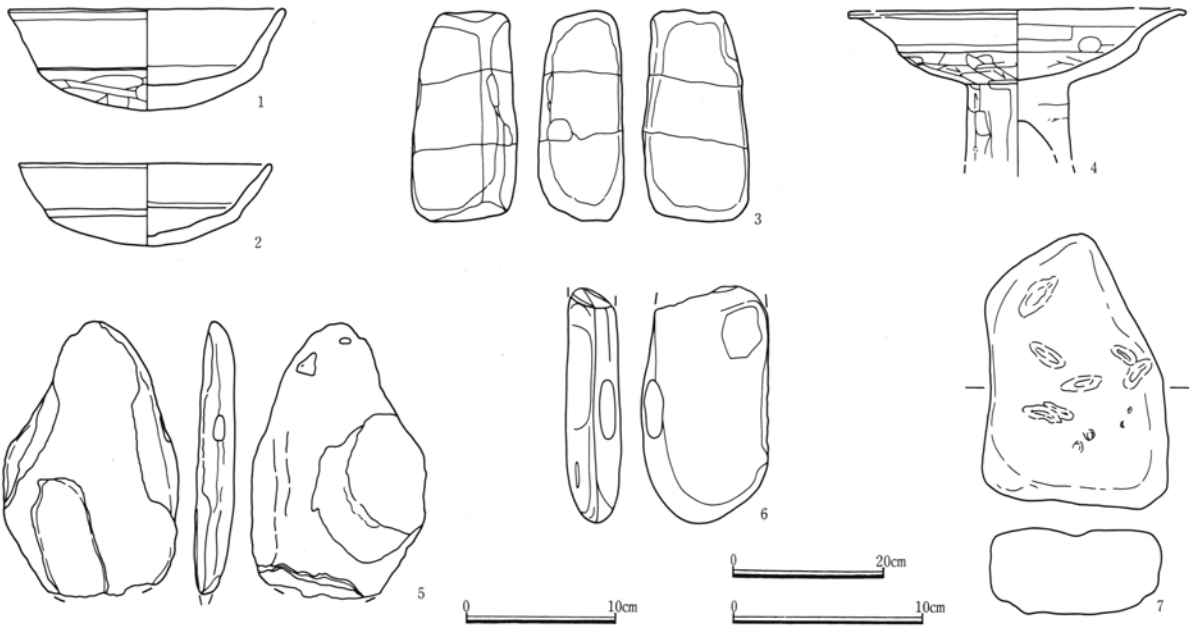


掘り方覆土

28：黒褐色土：褐色土と暗褐色土の混土主体。 28'：28層に比し褐色土増加。 29：暗黒褐色土主体土。 30：暗黒褐色土：暗黒褐色

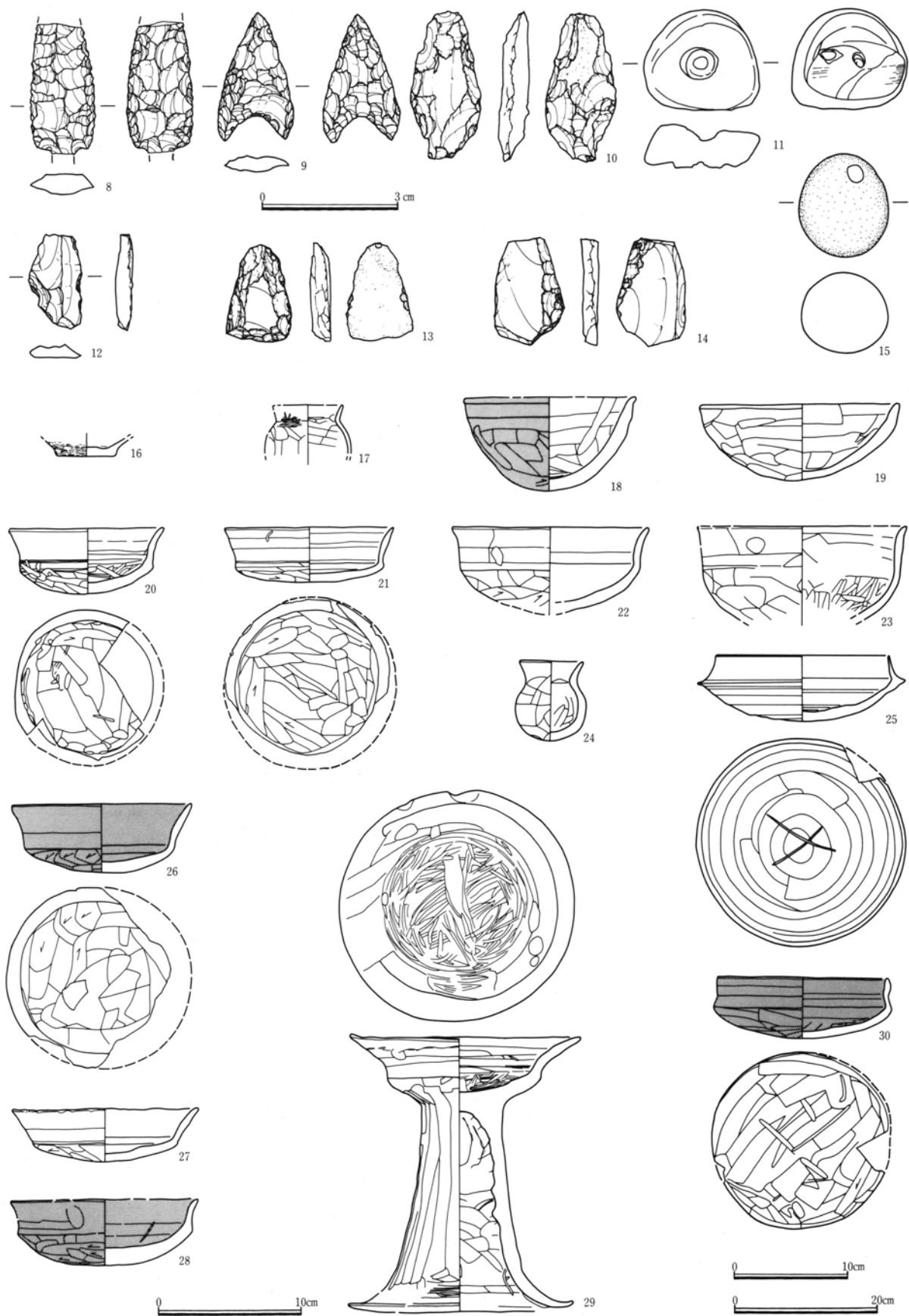
土と黄褐色土のブロック層。 30'：30層に比し黄褐色土多し。

31：暗黒褐色土：夾雑物含まず。 32：褐色土：As-YP多量に含む。 33：黒褐色土：黒褐色土と暗褐色土の混土主体。

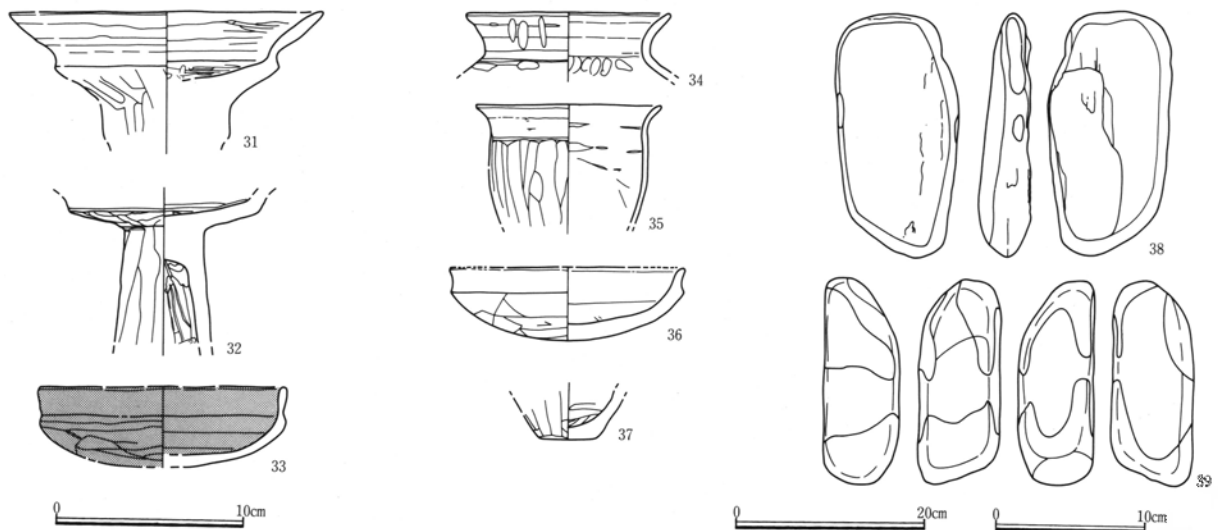


第576図 H-186号住居掘り方及び出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物



第577図 H-186号住居出土遺物(1)



第578図 H-186号住居出土遺物(2)

H-186号住居(古墳時代後期, 第574~578図, 図版210・239~240)

概要 本住居はF区西部に位置する大型の竪穴住居跡であり、H-176号住居によって南西の一角を切られている。また、耕作溝が深く入り、カマドの中程にも入ってこれを壊している。

出土遺物は多く見られたが、本住居に伴うものでは土師器の坏(1,2)・高坏(4)があり、これらの観察から本住居は西暦600年を前後する時期の所産と判断した。更に床面付近からはこも編み石(3,5,6)、台石(7)も出土している。

また、覆土中からは縄文時代の石槍(8)、石鏃(9)、スクレイパー(10・12)、不定形石器(14)、打製石斧(13)、凹石(11)、磨石(15)が出土し、弥生土器壺の底部(16)、5世紀代の土師器の小型甕(17)や坏(18,19)、本住居に先行する時期の土師器坏(20,21,22,23,26)や須恵器坏(25)、ミニチュア土器(24)、本住居と同時期の土師器の坏(27,28,30,33)・高坏(29,31,32)・胴張甕(34)、後続の時期の土師器坏(36)と土師器甕(37)も出土している。その他、こも編み石(38)やコの字状口縁の土師器甕(35)も出土している。

覆土中の遺物や礫は、北東角近くでは床面上30cm強、北東部中央付近では25cm強、住居中央付近と南西角部では10cm強、北西角部で20cm前後と、概ね摺鉢状に分布している。住居廃絶後も窪地として残っ

ていたことが想定されるが、その時期は少なくとも7世紀後半頃までは下るものと思慮される。

規模 長軸：690cm 短軸：689cm 深さ：42cm

カマド 幅：残存106cm 奥行：108cm 左袖

幅：残存24cm 長さ：57cm± 高さ：16cm以上

右袖 幅：残存33cm 長さ：65cm± 高さ：13cm以上

燃焼部 幅：50cm 長さ：60cm± 煙道 幅：

56cm 長さ：44cm以上

柱穴1 径：68×47cm 深さ：70cm 柱穴2 径

：54×52cm 深さ：70cm 柱穴3 径：44×41cm

深さ：41cm 柱穴4 径：52×50cm 深さ：73cm

床下土坑 長さ：168cm 幅：100cm 深さ：11cm

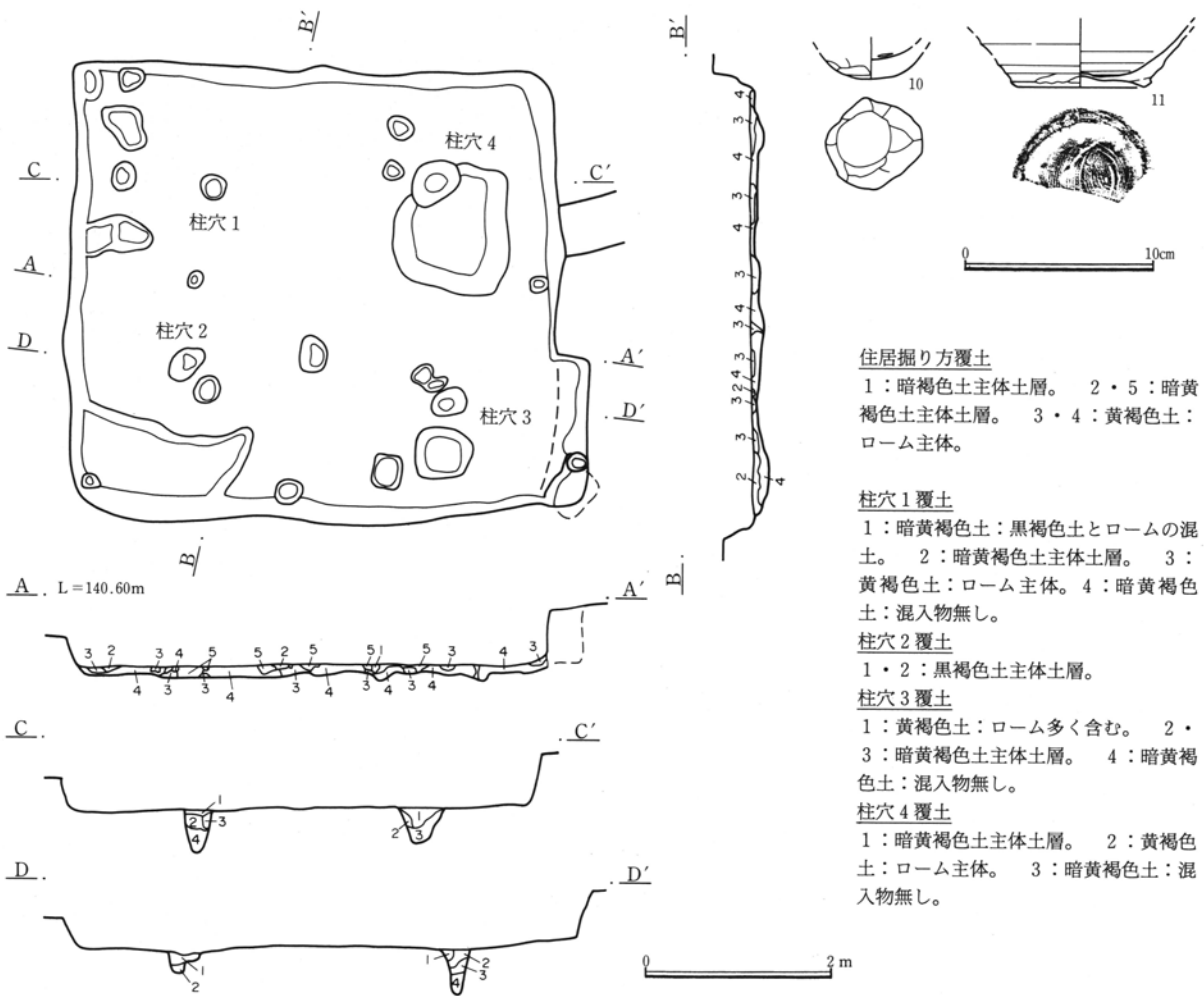
構造 本住居は方形のプランを呈する。掘り方は西壁に沿って幅約160cm、深さ26cm以下、南壁に沿って幅約200cm、深さ19cm以下、東壁に沿って幅約140cm、深さ13cm以下で低くなっている。柱穴3の南西に床下土坑を持つ。この掘り方を、黒褐色を中心とする土で埋め戻して床を作り出している。

カマドは西壁のやや南に寄った地点に造られている。浅い掘り方を埋め戻し、袖石を袖前部燃焼部側に立て、焼土を若干含む黒褐色土で袖を作り出している。天井石を使用している。

主柱穴は4カ所あり、しっかりした掘り方で深い。尚、貯蔵穴は特定することはできなかった。



第579図 H-187号住居及び出土遺物



第580図 H-187号住居遺構及び出土遺物

H-187号住居 (古墳時代中期以前, 第579~580図, 図版210・240~241)

概要 本住居はF区北西部に位置する、小型の竪穴住居跡である。地山層が不安定で識別に苦慮したため、掘削時に東南部の壁を掘り過ぎてしまっている。

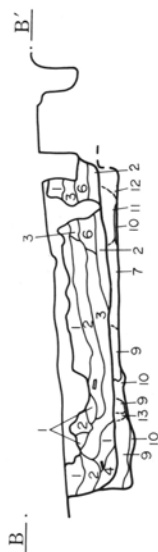
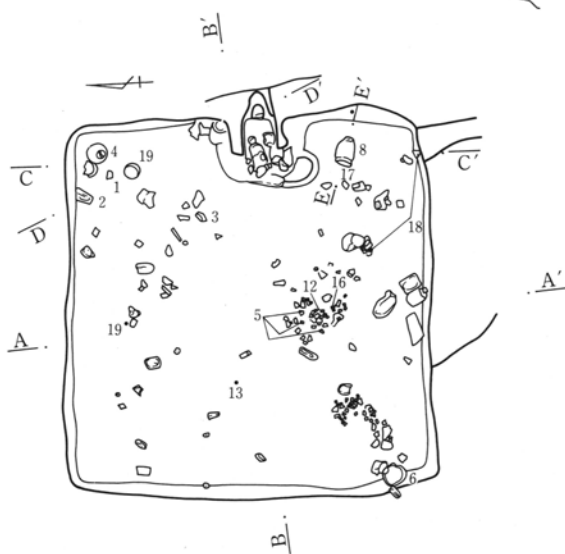
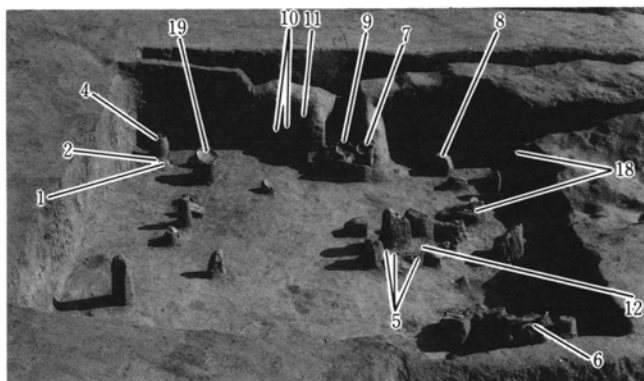
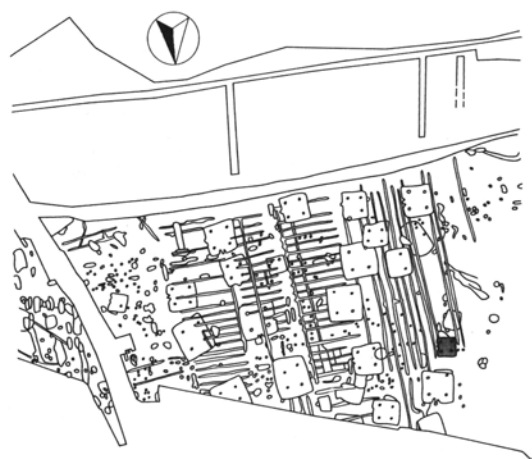
出土遺物はあまり多くなく、本住居に伴った遺物として特定できたものは何もなかった。覆土中からは縄文時代の敲石(1~3)があり、赤井戸式の縄文施文のある壺片(6)や4世紀前半の土師器埴(7)も出土している。また5世紀中頃の土師器高坏(8)があり、土師器の紡錘車があり、出土位置不詳だが6世紀前半の可能性を持つ土師器甕の底部(10)がある。耕作溝に絡んで10世紀前半の高台付碗(11)も出土している。

時期については、カマドを伴わないことと覆土中世紀中頃までは深く窪んでいたものと想定される。

規模 長軸：530cm 短軸：413cm 深さ：51cm

柱穴1 径：35×31cm 深さ：59cm 柱穴2 径：39×38cm 深さ：22cm 柱穴3 径：23×19cm (掘り方面径：36×29cm) 深さ：49cm 柱穴4 径：40×38cm 深さ：49cm

構造 本住居は方形のプランを呈する。掘り方をロームを含む土壌で埋めて床を造り出している。床面の北東部に数cm盛り上がる部分があった。主柱穴は4カ所確認できたが、柱穴3は床面では柱痕を確認できたに過ぎなかった。柱穴の断面観察等から柱は柱穴1が19cm、柱穴2が16cm、柱穴3が10cm、柱穴4が15cmの径を持っていたものと推定される。貯蔵穴や炉は確認できなかった。

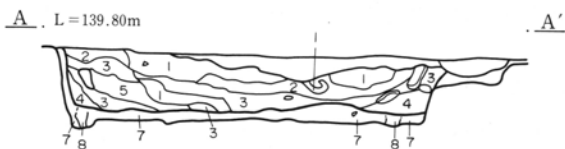


住居覆土

1：暗黒褐色土：褐色土粒多量に入る暗黒褐色土と暗褐色土の混土。 2：暗黒褐色土主体土層。 3：淡暗褐色土：夾雑物無し。 4：暗褐色土：暗褐色土と褐色土の混土。 5：暗褐色土：暗黒褐色土入る。 6：暗黒褐色土：暗褐色土入る。

掘り方覆土

7：暗黄褐色土：ロームと暗褐色土の混土。 8：黒褐色土：樹木の根の痕跡か。 9・12：暗褐色土主体土層。 10・13：黄褐色土：ローム主体。 11：暗黄褐色土：ロームかなり多く含む。



E. E'



0 2m

第581図 H-188号住居

H-188号住居(古墳時代後期, 第581~583図, 図版210~211・241~242)

概要 本住居はF区北西部、矢田川の沖積地へ落ちる斜面の縁辺に位置する、小型の竪穴住居跡である。

本住居は6世紀後半の所産と考えられ、本住居に伴う遺物には土師器の坏(1,3,2)・甗(4)・長胴甗(7,9,11,10,12)・胴張甗(5,6,8)があり、床面より土製模造品の勾玉(13,14)や同時期頃の手捏ね土器(15)も出土した。

また、覆土中からは古墳時代後期の土師器甕片を中心に出土し、土師器小型甗(16)や、本住居に続く時期の土師器坏(17,19)や須恵器坏(18)も見られた。この他、縄文時代のスクレイパー(20,22)や、小鍛冶に使われたらしい台石(21)も見られた。

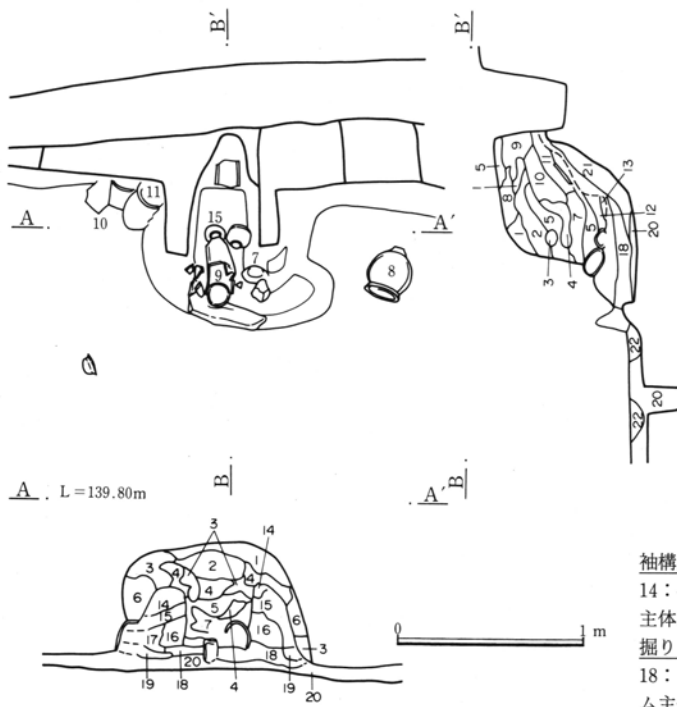
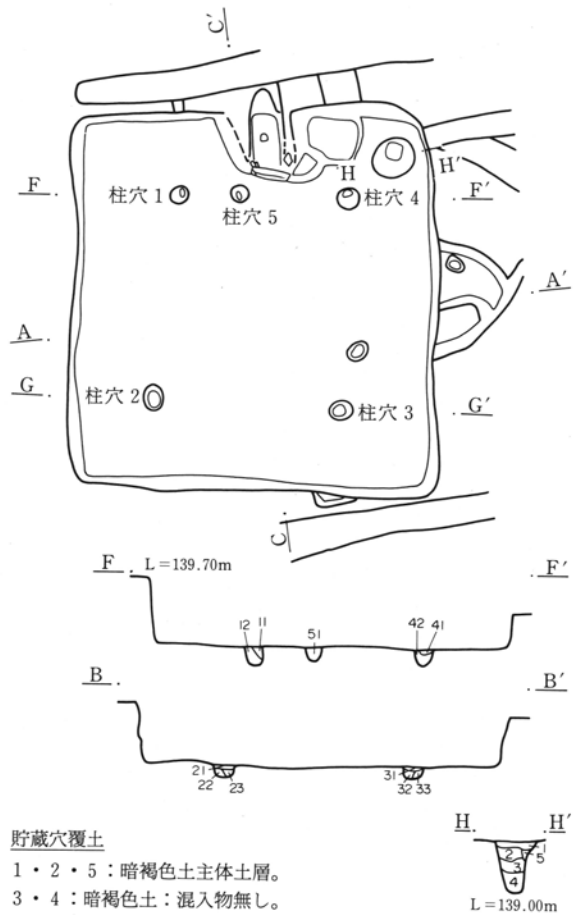
規模 長軸：420cm 短軸：389cm 深さ：74cm
カマド 幅：103cm 奥行き：93cm 左袖 幅：43cm 長さ：77cm 高さ：32cm 右袖 幅：32cm 長さ：72cm 高さ：36cm 燃烧部 径：30×68cm 煙道 幅：24cm 長さ：27cm
柱穴1 径：19×18cm 深さ：42cm 柱穴2 径：25×25cm 深さ：14cm 柱穴3 径：21×21cm 深さ：18cm 柱穴4 径：22×22cm 深さ：28cm 柱穴5 径：19×18cm 深さ：22cm
貯蔵穴 径：42×41cm 深さ：69cm
床下土坑 径：112×86cm 深さ：5cm

構造 本住居は方形プランを呈する。

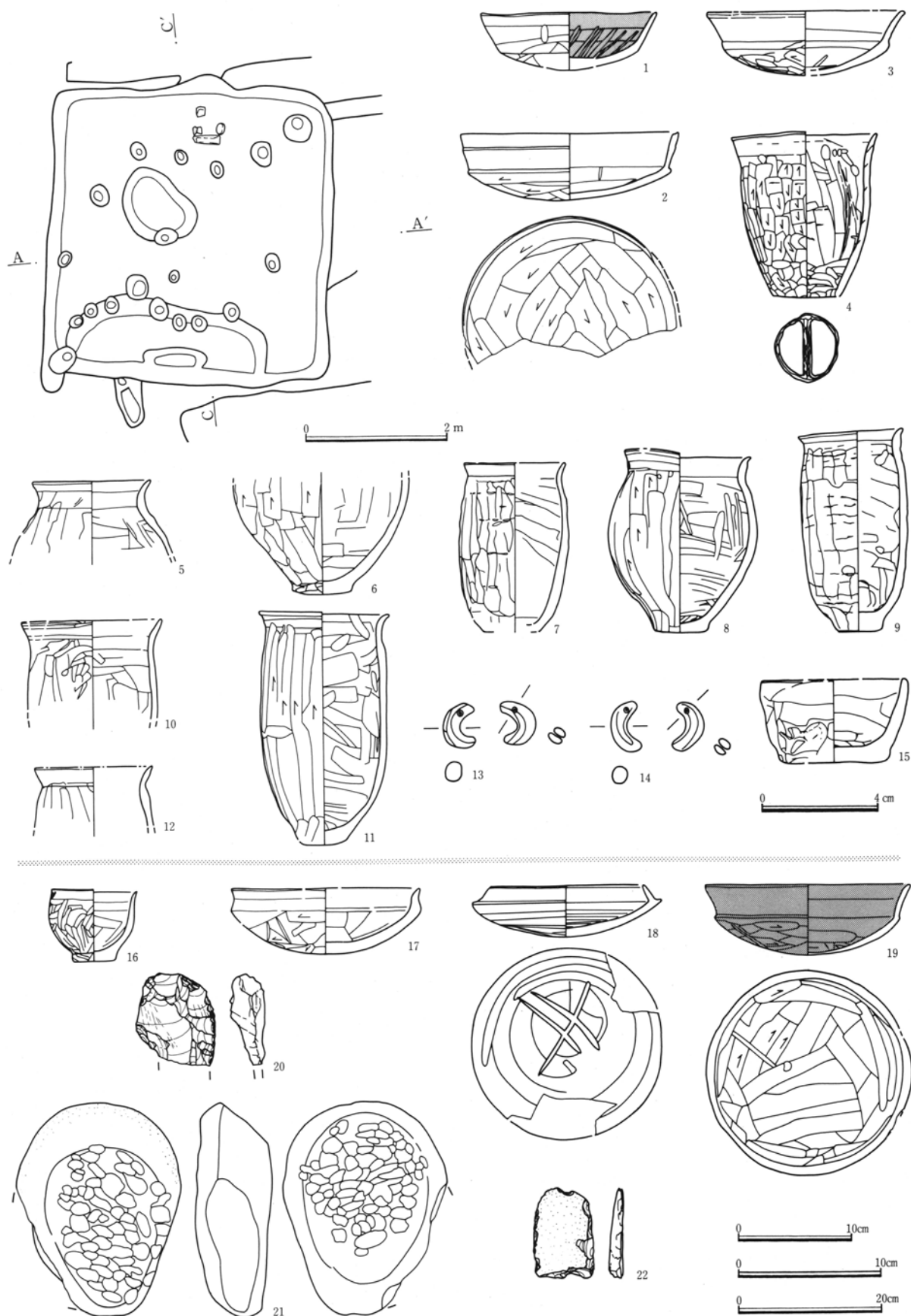
掘り方を有し、これを暗黄褐色土・暗褐色土で埋め戻して床面を造り出している。

カマドは東壁やや南寄りに造られ、浅い掘り方を持つ。袖は袖石をロームを主体とし焼土を含む土壤で包んで造っている。また天井石と礫の支脚を伴う。

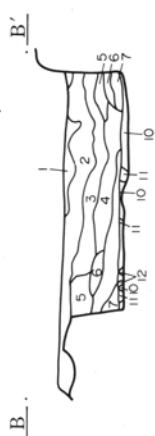
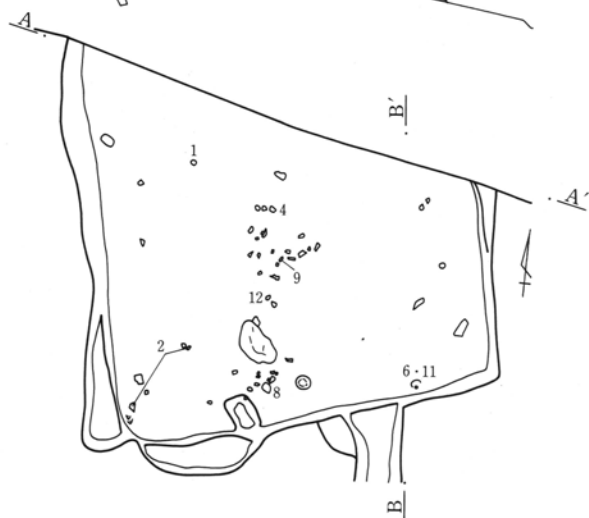
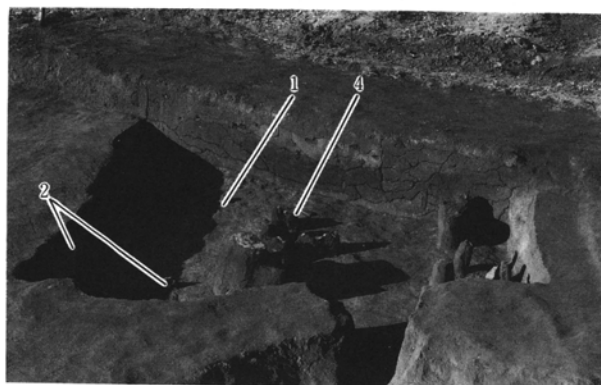
また、床面に於いては細い主柱穴が4カ所あり、柱を建てた後に床を貼ったものと推定される。尚、貯蔵穴はカマド右側、東南隅部に掘られている。



第582図 H-188号住居遺構及びカマド



第583図 H-188号住居掘り方及び出土遺物

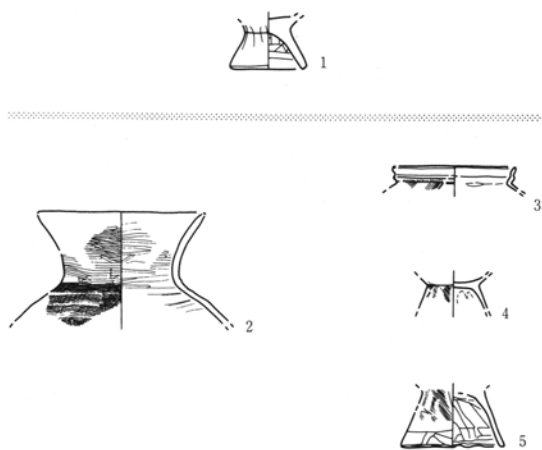
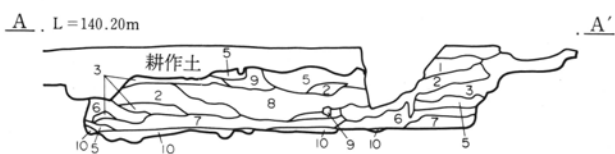


住居覆土

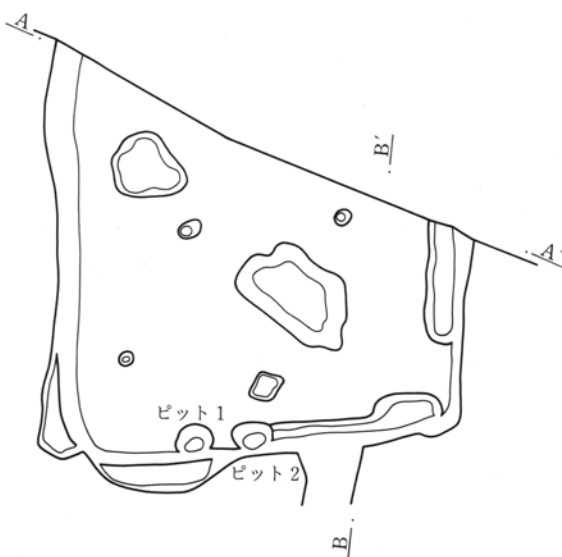
1：暗褐色砂質土：白色・黄褐色微粒子多量に含む。 2：黒褐色土：黒色土に白色・黄褐色微粒子と炭化物多量に混入。 3：暗褐色土：褐色土と黒褐色土の混土主体。 4：褐色土：褐色粒子多量に含む。 5：褐色土：夾雑物殆ど無し。
6：褐色土：暗褐色土と褐色土の混土主体。 7：暗黒褐色土主体。 8：黒色土：漆黒土中に褐色土粒と炭化物多量に混入。 9：暗褐色土：褐色土と黒色土の混土。

掘り方覆土

10・11：黄褐色土：ローム主体。 12：暗黄褐色土：混入物無し。樹木の根の痕跡か。

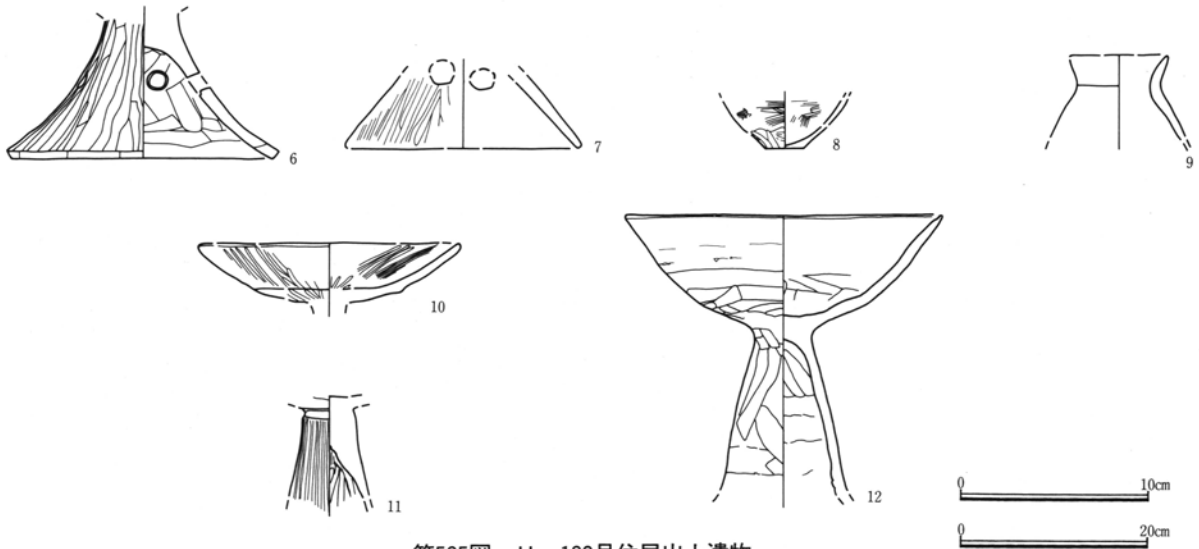


0 20cm



0 2m

第584図 H-189号住居及び出土遺物



第585図 H-189号住居出土遺物

H-189号住居(古墳時代後期, 第584~585図, 図版 211・242)

概要 本住居はF区北西端部に在る竪穴住居跡で矢田川沿いの沖積地へ落ちる斜面の縁辺部に在り、H-190号住居の北に隣接する。住居の北部は路線外に出ていて調査できなかった。

出土遺物は多くなく、本住居に伴うと判断されたものは4世紀前半と思われる土師器台付甕の脚部(1)だけであったが、後述する理由から(2)の樽式の弥生土器壺は本住居に伴うか廃棄後極めて近接した時期に投棄された可能性を持つ。また覆土中からは石田川期のS字状口縁の台付甕の口縁部(3)と脚部(4,5)、4世紀前半期の器台脚部(7)や小型壺の底部(8)と口縁部(9)、4世紀後半と判断される高坏脚部(11)、5世紀前半の高坏(12)、7世紀後半高坏坏部(10)が出土している。

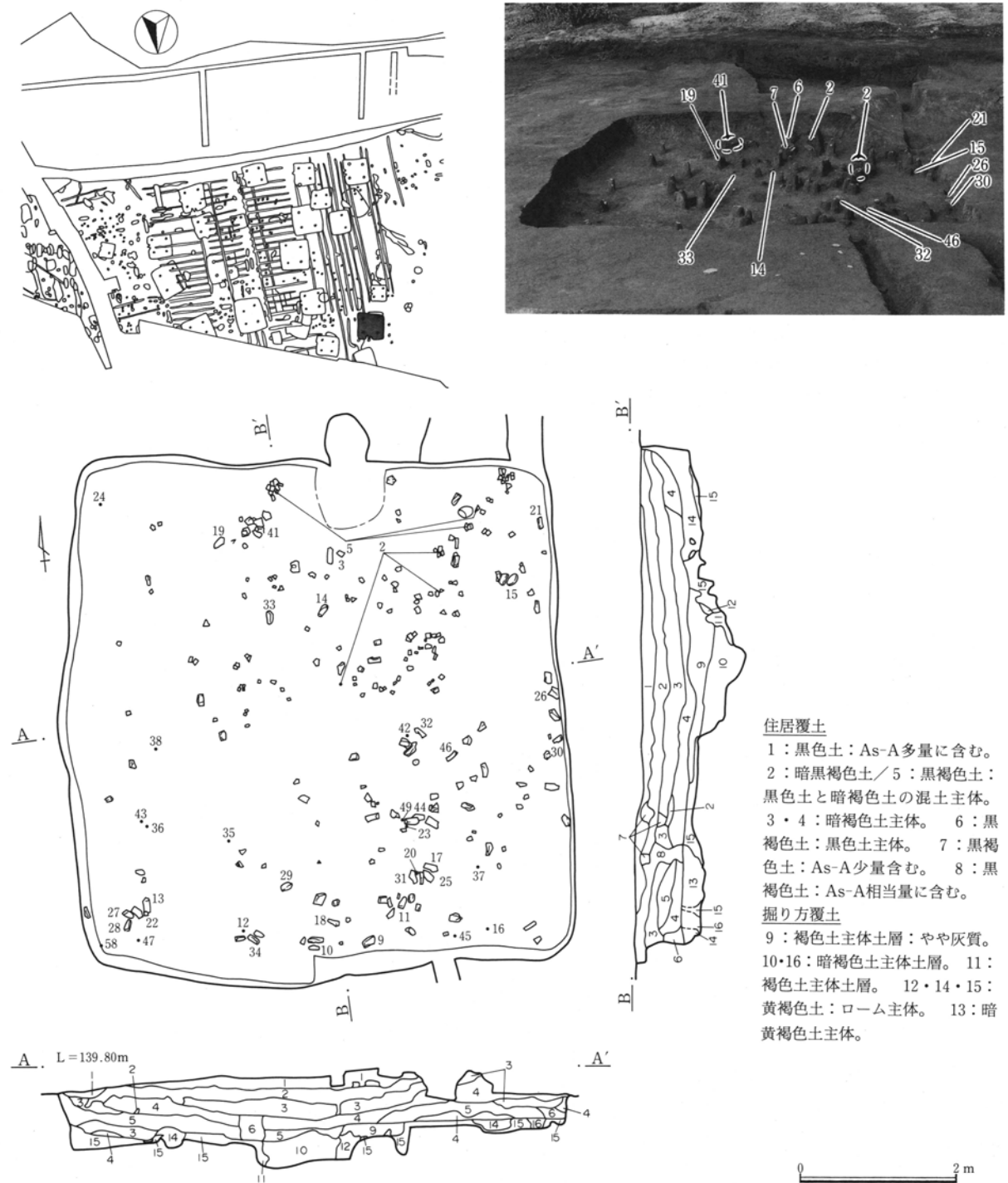
本住居の覆土中の遺物の分布は、確認範囲の中央部分に多く壁際に薄い。そのレベルは南壁際東部に出土した6・11は床面から50cm、12は10cm、南西部に出土した2は壁際では30cm、やや内側では5cm以内のレベルから出土しており、4・9・12の出土した分布集中域の中央付近では凡そ床面から15~20cmのレベルであった。このことから住居中央の分布集中域は窪地として当分の間、恐らくは5世紀前半までは遺存して遺物等の投棄場所になっていた可能性が考えられるのであり、南壁近くの西半部はなにか

しらの理由で深くっており、特に2は床面が見えていた、つまり廃棄後あまり時間の経過しない時点で転落していった様相が推定されるのである。

本住居に伴うと判断された遺物は1点だけであったが2にもその可能性が有り、覆土中の遺物にも4世紀前半のものが多いこと、住居形態やカマドの存在の可能性が見られないことを併せて、本住居は4世紀初頭の所産であろうと判断されるのである。

規模 長軸：残存458cm 短軸：438cm 深さ：63cm
 ピット1 径：36×41cm 深さ：(床面より)25cm
 ピット2 径：42×36cm 深さ：(床面より)43cm
 東周溝 幅：30cm 深さ：6cm 西周溝 幅：14~35cm 深さ：7cm

構造 本住居は北側が路線外に出ていてその全容はつまびらかでないが、凡そ長方形のプランを呈していたものと推定される。掘り方を持ち、ロームを主体とする土壌で埋め戻して床を造り出している。床面に炉や柱穴は確認されず、僅かにピット1が浅い窪みとして見られただけであった。しかし掘り方に於いては東壁と南壁の一部に周溝が見られ、南壁下やや西よりに入入口遺構と考えられる2つのピット(ピット1・2)が並んでいた。床面にこうした遺構が確認されたのは、これらに伴う構造物を設置後床を貼ったからではないかと思慮される。



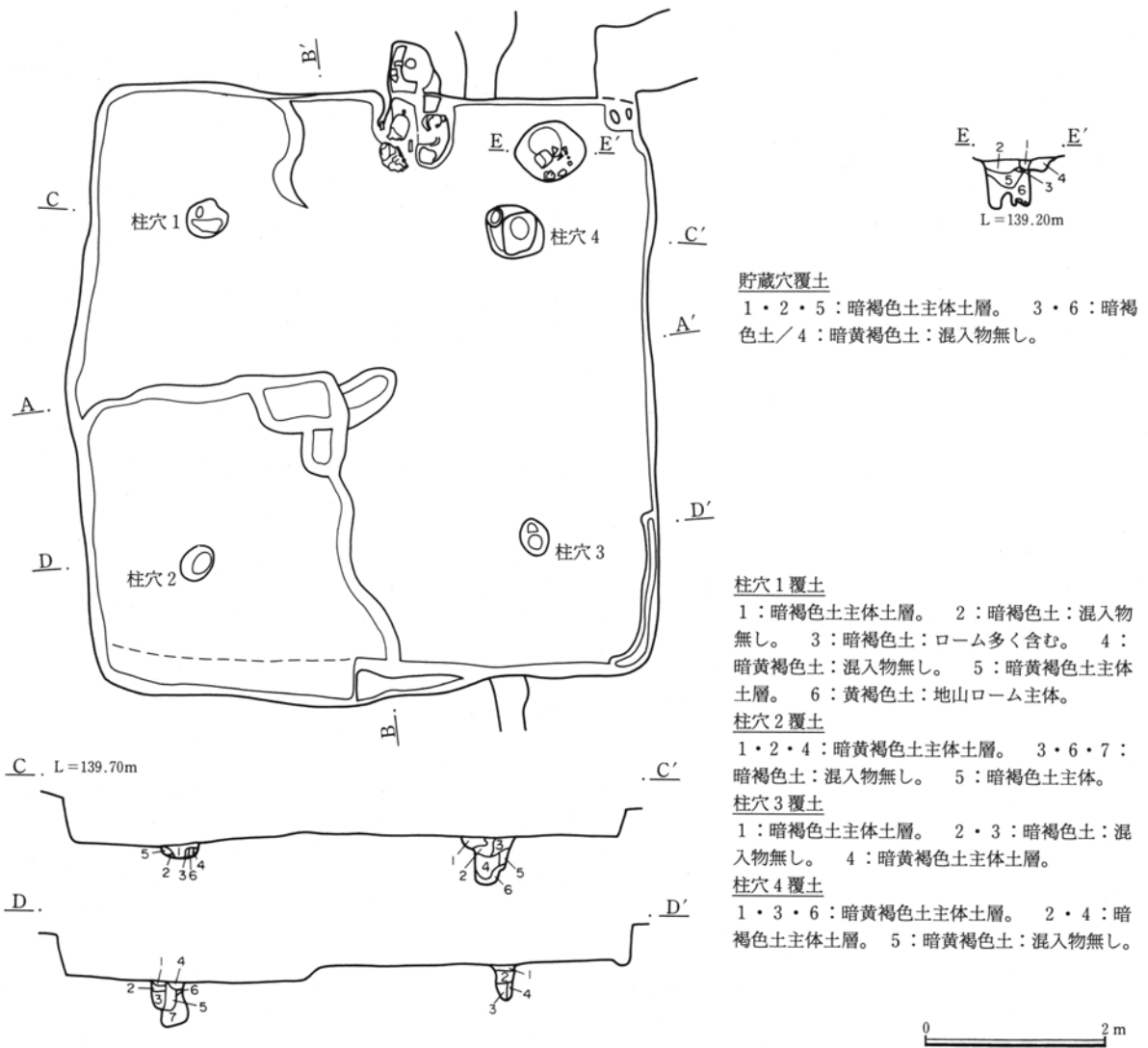
第586図 H-190号住居

H-190号住居(古墳時代後期。第586～591図。図版211～212・242～243・251)

概要 本住居はF区西北部に在り、矢田川沿いの沖積地へ落ちる斜面の縁辺部に位置する、やや大型の竪穴住居跡である。H-181号住居の北に隣接する。

本住居へ耕作溝が切り込んで、若干遺構を壊している。

出土遺物は多く見られたが、このうち本住居に伴うと判断された遺物には6世紀後半から7世紀前半にかけての特徴を示す土師器の鉢(1,3)・小型甕(2)、甕(5～7)、坏(4)があり、掘り方から土師器小型甕(8)も出土する他、また、床面からはこも



第587図 H-190号住居遺構

編み石 (9~34) が多く出土している。

一方、覆土中からは古墳時代後期の土師器甕片を中心に、縄文時代のスクレイパー(35,36)、磨石(37)、敲石(38)、石皿(42)が出土し、また本住居と同時期の土師器の坏(39)、甕(40)、甑(41)の出土が見られた他、こも編み石(43,44,45,46,47)や、小鍛冶に伴うと思われる台石(49)などの出土も見ている。

こうした出土遺物の状況から、本住居は凡そ西暦600年前後の所産であると判断される。また、覆土中の遺物から平安時代頃まではその痕跡を留めていたことが窺われる。

規模 長軸：667cm 短軸：646cm 深さ：68cm

カマド 幅：90cm 奥行：136cm 左袖 幅：21cm 長さ：61cm 高さ：49cm 右袖 幅：46cm

長さ：77cm 高さ：46cm 燃烧部 径：70×28cm

煙道 幅：35cm 長さ：52cm

柱穴1 径：44×42cm 深さ：23cm 柱穴2 径

：37×35cm 深さ：53cm 柱穴3 径：42×31cm

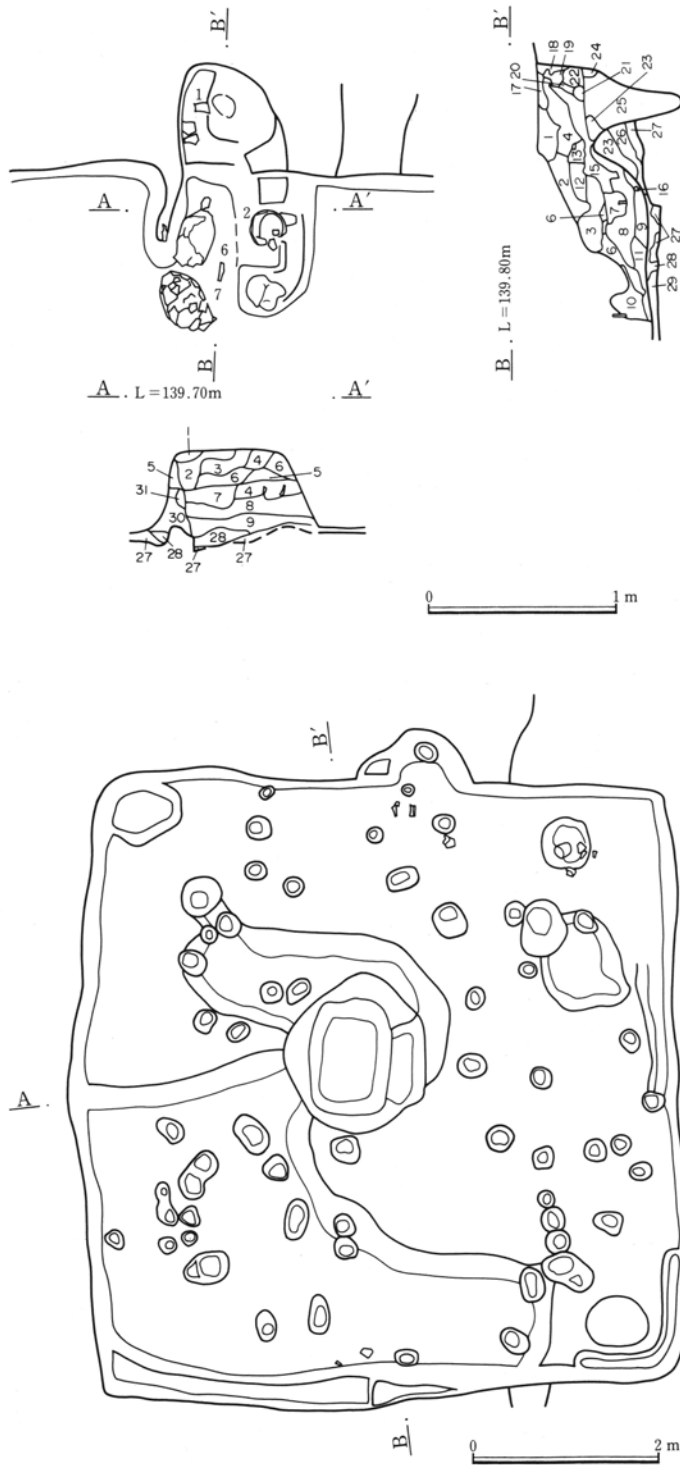
深さ：35cm 柱穴4 径：47×44cm 深さ：70cm

貯蔵穴 径：67×65cm 深さ：70cm

周溝 幅：11cm 深さ：4cm

床下土坑 径：120×86cm 深さ：64cm

構造 本住居は方形のプランを呈している。



第588図 H-190号住居カマド及び掘り方

掘り方を有するが、掘り方中央付近には床下土坑があり、その壁面に沿って褐色土またはロームが入り、その内側は暗褐色土で埋められていた。所謂床下粘土坑と同様カマドの構築に伴う遺構としての性格を持つものと思慮される。床面は、このような構

造を持つ掘り方を褐色土やロームで埋め戻して造られているが、面としてはあまり良好な状態ではなかった。カマドは北カマドで北壁やや中央付近に造られている。浅い掘り方有し、これを暗褐色土等で埋め戻している。焼面を造っている。焼部は壁面の手前に設定され、その両側に袖が造られる。袖は右側袖には手前に礫、奥に土師器甕を倒置したものを袖材として置き、左袖前には同様に袖材として使用したらしい土師器甕が転倒した状態で出土して来ている。袖はこれを焼土を含む暗褐色土等で固めて造り上げている。尚、焼部には土師器甕が転倒した状態で出土し、固定して掛けられていたものと考えられる。床面に於いては支柱穴4基と貯蔵穴1基を確認している。柱穴の径は或る程度の大きさを示していたが、掘り込みはさして深くなかった。また、その断面観察から柱の径は19cm以下であったものと推定される。一方、貯蔵穴はカマド右側の北東コーナー付近に掘削されている。隅丸方形のプランを呈し、掘り方は筒状を呈している。

カマド覆土

1：黒色土主体の層。 2：黒色土：黒色土と暗黒褐色土の混土主体の層。 3・6・8・9・13・15・20・23：暗褐色土主体の層。 4・5・10・11：褐色土主体の層。 7：暗赤褐色土：黒色土主体の層。 12・17・18・19：暗黄褐色土主体。 16：黒褐色土主体の層。 22：暗黄褐色土/21：暗褐色土/24：黄褐色土：混入物無し。 25：黒色土主体土層：樹木の根の痕跡か。

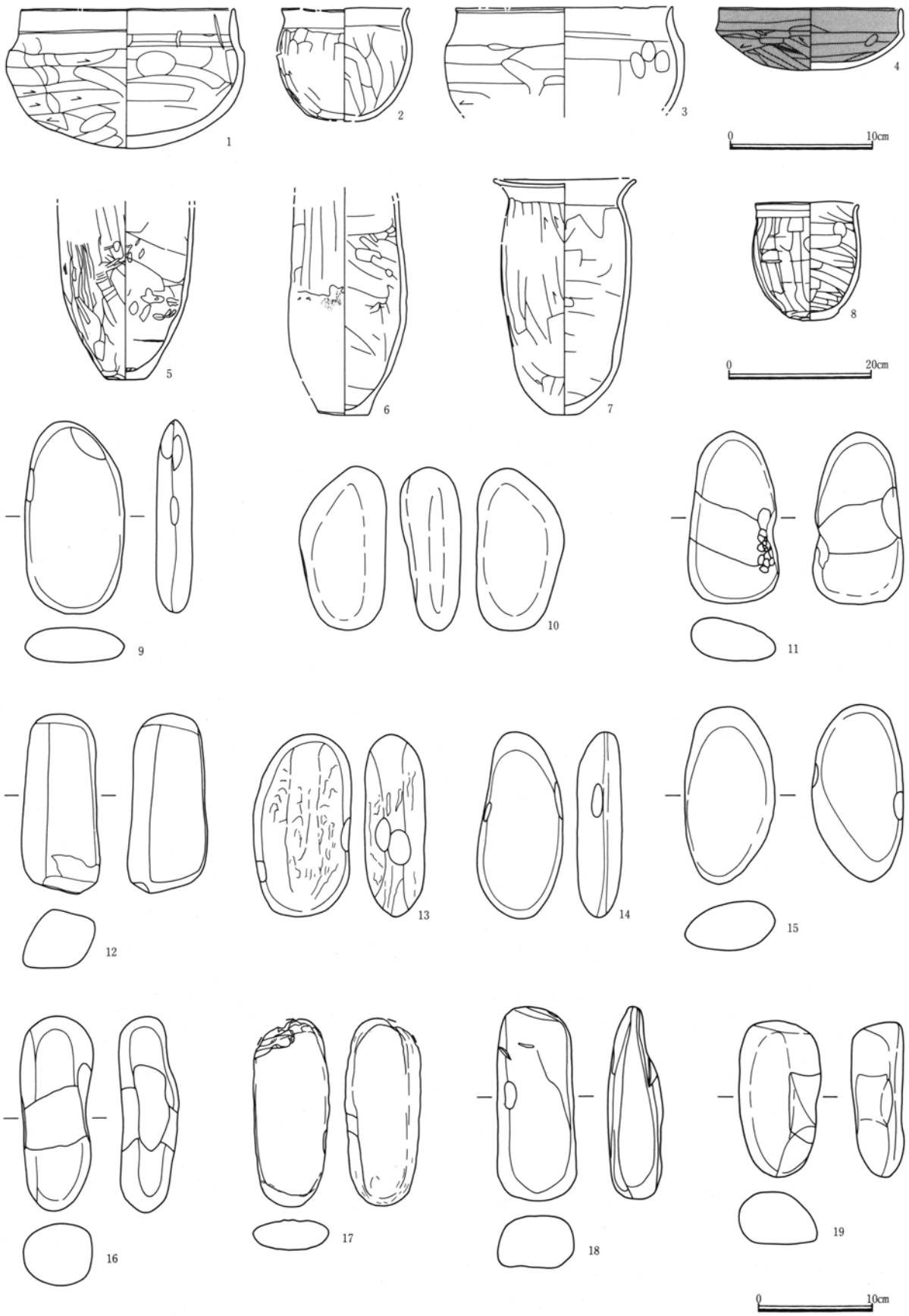
掘り方覆土

26：褐色土主体。 27：暗黄褐色土：ローム多く含む。 28：暗褐色土主体。 29：黄褐色土：ローム主体。

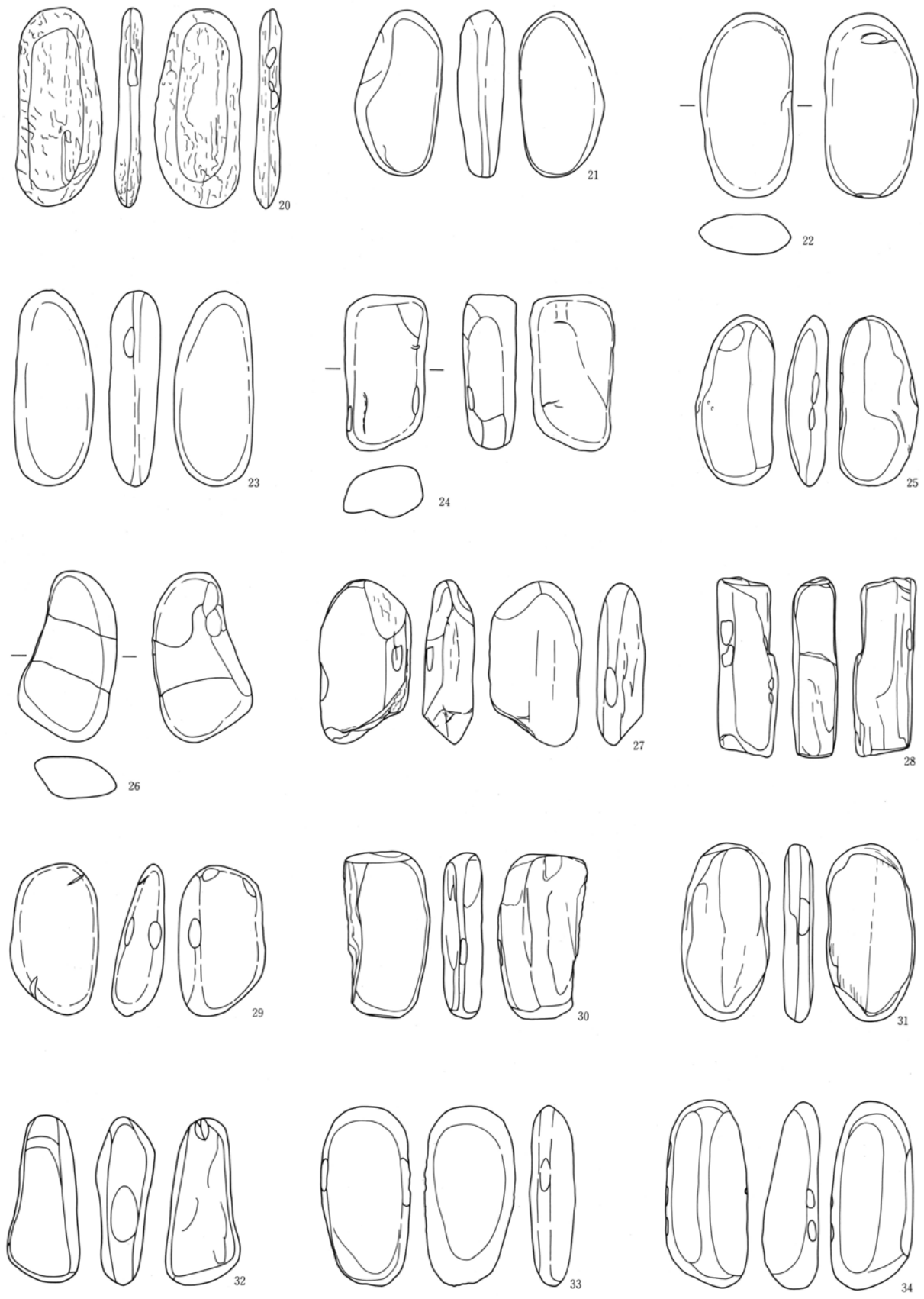
袖構築材

30：暗赤褐色土主体。 31：暗褐色土主体。

第3章 発見された遺構と遺物



第589図 H-190号住居出土遺物(1)

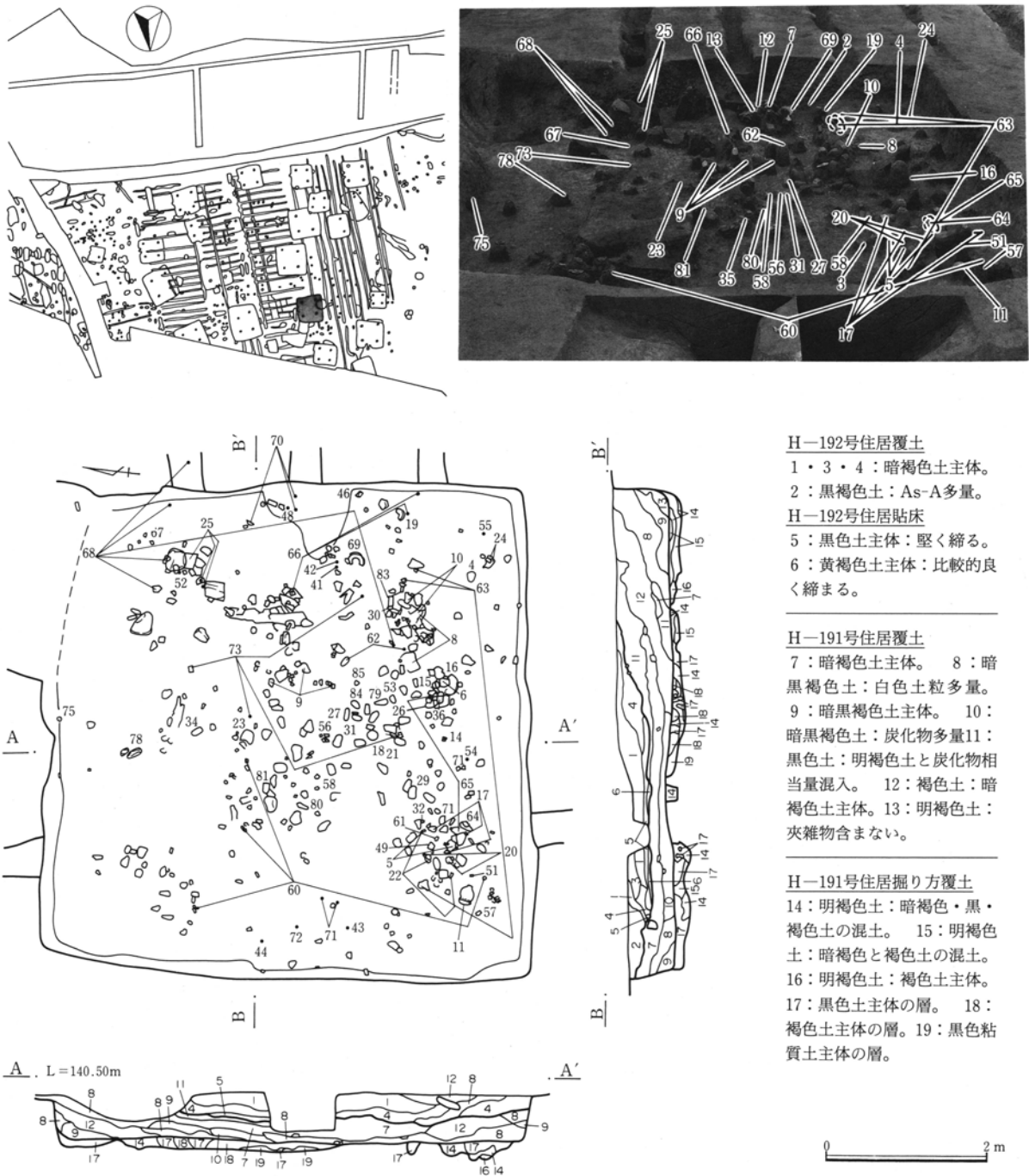


第590図 H-190号住居出土遺物(2)

第3章 発見された遺構と遺物



第591図 H-190号住居出土遺物(3)



H-192号住居覆土

1・3・4：暗褐色土主体。
2：黒褐色土：As-A多量。

H-192号住居貼床

5：黒色土主体：堅く締る。
6：黄褐色土主体：比較的良く締まる。

H-191号住居覆土

7：暗褐色土主体。 8：暗黒褐色土：白色土粒多量。
9：暗黒褐色土主体。 10：暗黒褐色土：炭化物多量
11：黒色土：明褐色土と炭化物相当量混入。 12：褐色土：暗褐色土主体。 13：明褐色土：夾雑物含まない。

H-191号住居掘り方覆土

14：明褐色土：暗褐色・黒・褐色土の混土。 15：明褐色土：暗褐色と褐色土の混土。
16：明褐色土：褐色土主体。
17：黒色土主体の層。 18：褐色土主体の層。 19：黒色粘質土主体の層。

第592図 H-191・192号住居

H-191号住居(古墳時代後期, 第592~597図, 図版212~243・247・251)

概要 本住居はF区北西部に位置する、F区に於いてはやや大型の竪穴住居跡である。

本住居は比較的しっかりした掘り方を持っているが、本住居の覆土を掘削してH-192号住居が造られている。

出土遺物は多かったが、本住居に伴うと判断され

たものは6世紀後半期から7世紀前半期にかけてのものの特徴を示すものを主体とする土師器の坏(3, 14, 15, 18, 19, 20~22)・高坏(17)・椀(1, 2, 4)・長胴甕(25, 11, 7~9, 12, 13)・丸胴甕(16)・台付甕(5)・小型甕(6)・甑(10, 23, 24)が見られた他、床面付近からはこもあみ石(26~36)も出土してきている。

第3章 発見された遺構と遺物

一方、覆土中からは古墳時代後期の土師器片を中心とした遺物の出土を見ているが、この中には、石鏃(41,42,43,44)・スクレイパー(45,46,47,48,50)・不定形石器(49,51)・打製石斧(52)・敲石(53・85)・台石(54)など縄文時代の遺物、古式土師の椀(58)が見られた他、本住居と同時期の土師器の坏(56,57,59)・高坏(62,60,63,64,65)・長胴甕(66,67,68)・胴張甕(69,71)・小型甕(70)・甑(73)があり、古代の瓦片(74)や回転ロクロ成形の高台付碗(72)も出土してきている。また、石製模造品の白玉(75)や砥石(76)、こも編み石(77~84)の出土を見ている。

こうした遺物の状況から、本住居は西暦600年を前後する時期の所産であると判断される。

規模 長軸：611cm 短軸：611cm 深さ：71cm

カマド 幅：111cm 奥行き：63cm 左袖 幅：53cm 長さ：43cm 高さ：22cm 右袖 幅：28cm 長さ：43cm 高さ：15cm 燃烧部 径：34×39cm 煙道 幅：36cm 長さ：24cm

柱穴1 径：42×40cm 深さ：57cm **柱穴2** 径：45×41cm 深さ：57cm **柱穴3** 径：33×30cm 深さ：62cm **柱穴4** 径：28×27cm 深さ：64cm **貯蔵穴** 範囲：59×57cm 径：46×44cm 深さ：

H-192号住居(古墳時代後期以降、第592~597図、図版212~243・247・251)

概要 本住居はH-191号住居の掘削中に発見され、断面観察などから竪穴住居跡と判断した遺構である。本住居はH-191号住居の覆土中に完全に納まる状態で遺存していたため、当初遺構の存在を想定することができず、本住居を認識した時点ではほとんどの部分は滅失した後であった。本住居で面的に調査できたのは住居の北西部に相当する部分の床面1.32m²程(第593図左下の囲みの中の実線部分)に過ぎず、一方断面観察でも明確な住居範囲は特定できなかったため、凡そH-191号住居の中央部から北西部の付近に所在していたことと、貼床を持っていたことが窺われるに過ぎなかったのである。

また、本住居に伴う出土遺物を特定することはで

52cm 床下周溝 幅：46~145cm 深さ：4~9cm 床下土坑 径：155×128cm 深さ：10cm

構造 本住居は方形のプランを呈している。

東南コーナー部分を除いて幅100~125cmを中心とする浅い周溝状の掘り込みが掘削される掘り方を有す。掘り方面中央の掘り残し部分の中程には床下土坑が掘削されている。床面は、こうした掘り方を埋め戻して造り出している。

カマドは東カマドで、東壁中央付近に造られている。カマドは掘り方を持つようである。燃烧部は東壁面の内側に設定されている。その両側には、手前側に自然石を立てて袖石とし、これを黒色土やロームで包み込んで短い袖が造られている。また、燃烧部には遺物の状態から、土師器の甕を2つ並べて設置していたようである。

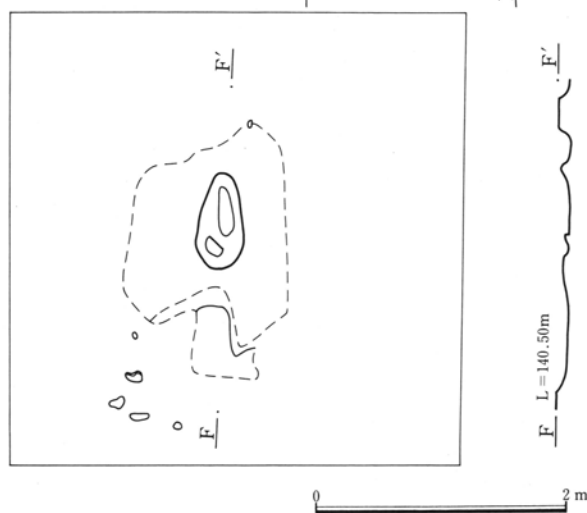
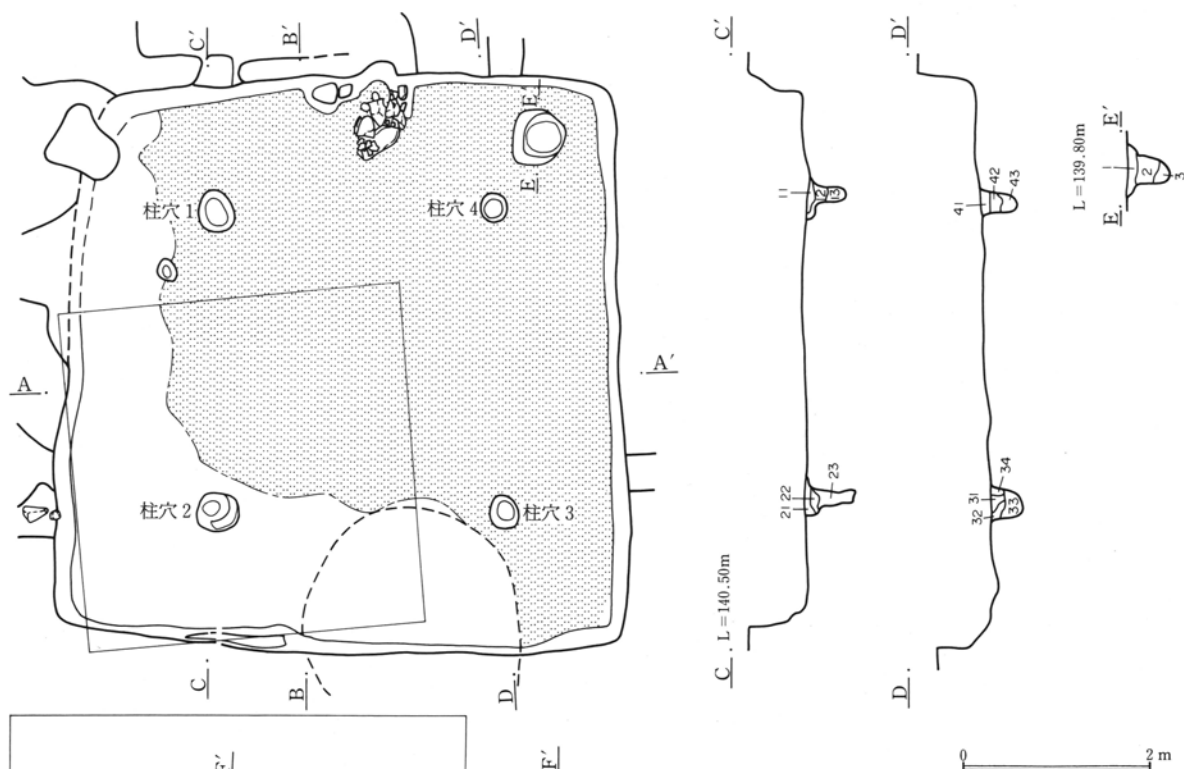
床面に於いては支柱穴4基と貯蔵穴1基を確認した。このうち柱穴はさして大きなものではなかったが、断面の観察から柱は15~20cmの径を持っていたものと推定される。また、貯蔵穴はカマド右側にあるが、北半部には深さ15cm以下の方形の浅い広がりがあり、蓋の設置された可能性を示唆している。

きなかった。従って、本住居の時期の特定はできなかったのであるが、H-191号住居の覆土中に造られていたことから7世紀以降の時期の所産である。

規模 長軸：288cm以上 短軸：248cm以上 深さ：48cm

ピット 径：67×36cm 深さ：10cm

構造 上述のように本住居の遺構の確認や記録化は行えなかったため、詳細を述べることはできない。遺構プランは不明であり、カマド・貯蔵穴は確認することができなかった。支柱穴も特定できなかったが、僅かに確認できた床面には不定形のピットが1基見られた。掘り方も特定できなかったが、黒色土と黄褐色土による貼床が観察されている。



H-191号住居柱穴覆土

11・21：暗黄褐色土主体。 12・13・23・33・43：暗褐色土：混入物無し。 22・31：暗褐色土主体。 32・42：暗黄褐色土：混入物無し。 34・41：黄褐色土：ローム多く含む。

H-191号住居貯蔵穴覆土

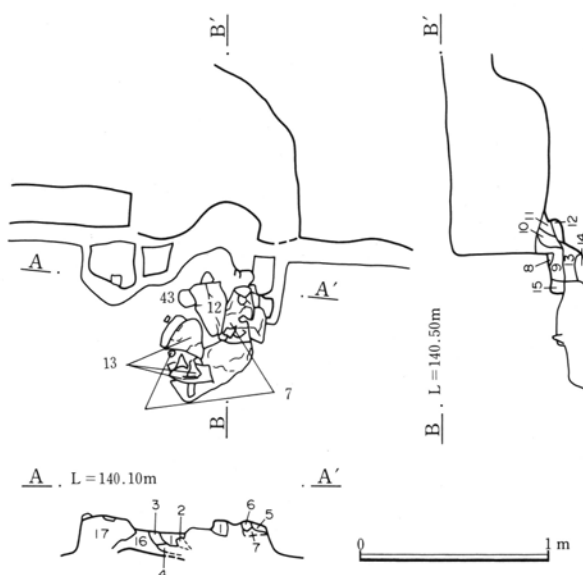
1：褐色土主体。 2：暗黄褐色土／3：暗褐色土：混入物無し。

H-191号住居カマド覆土

1・2・3・4・5：黒色土主体（焼土入る）。 6：暗赤褐色土：焼土主体。 7：暗赤褐色土：焼土多し。 8：暗褐色土：混入物無し。 9・10・11・12・13：暗赤褐色土主体（焼土入る）。 14：暗褐色土主体。 15：褐色土主体。

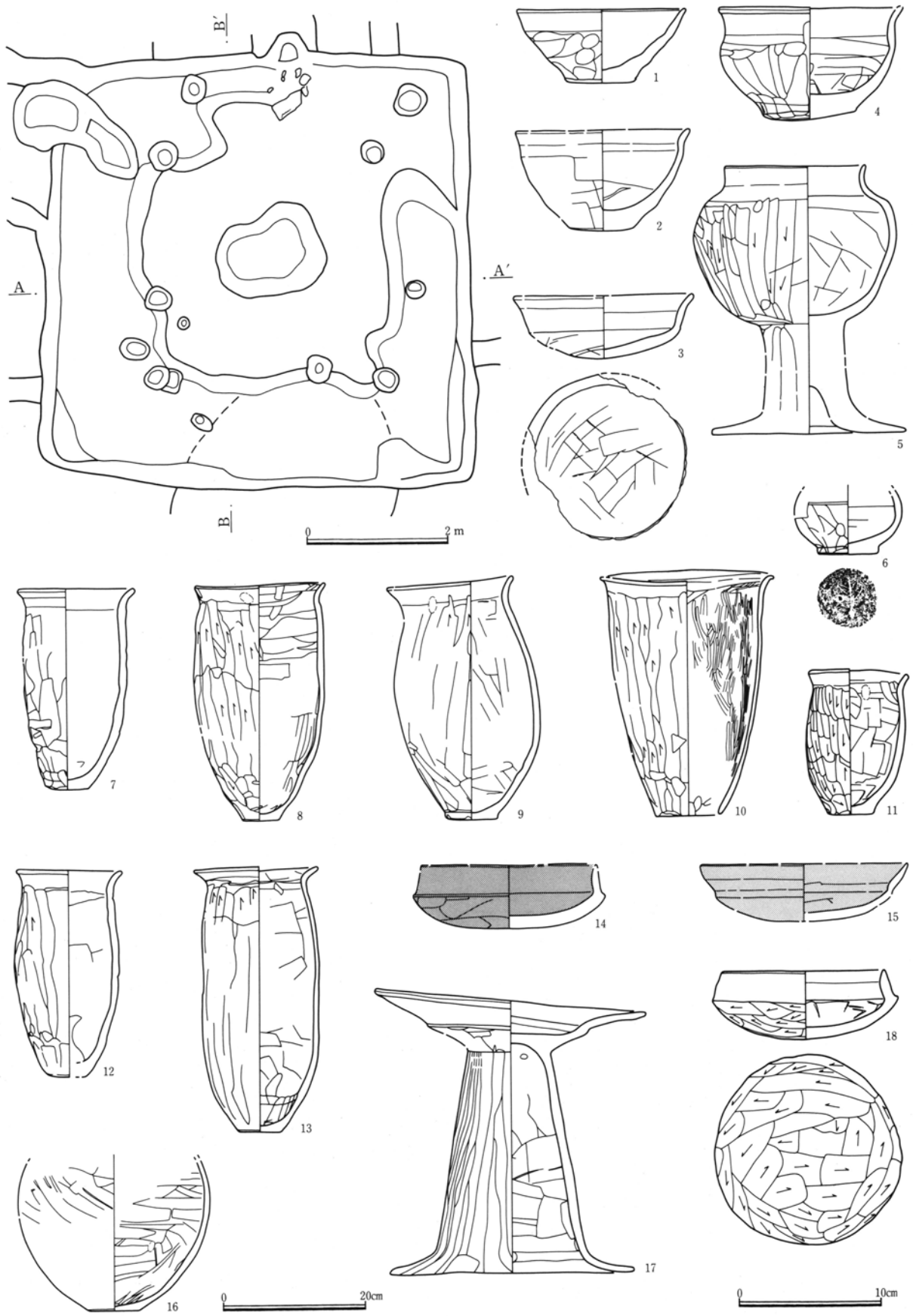
H-191号住居カマド袖構築材

16：黒色土：混入物無し。 17：黄褐色土：ロームかなり多く含。



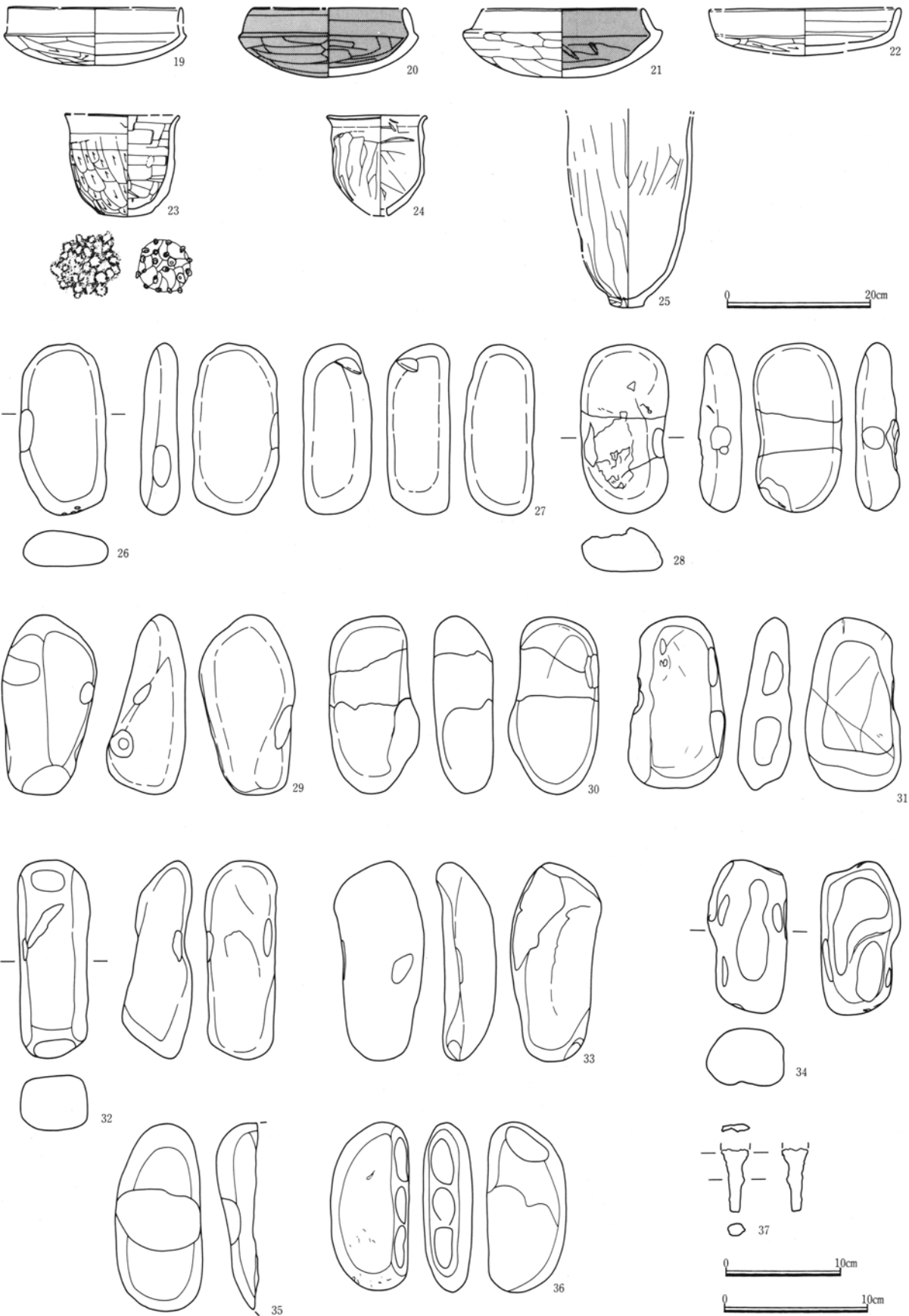
第593図 H-191・192号住居遺構

第3章 発見された遺構と遺物



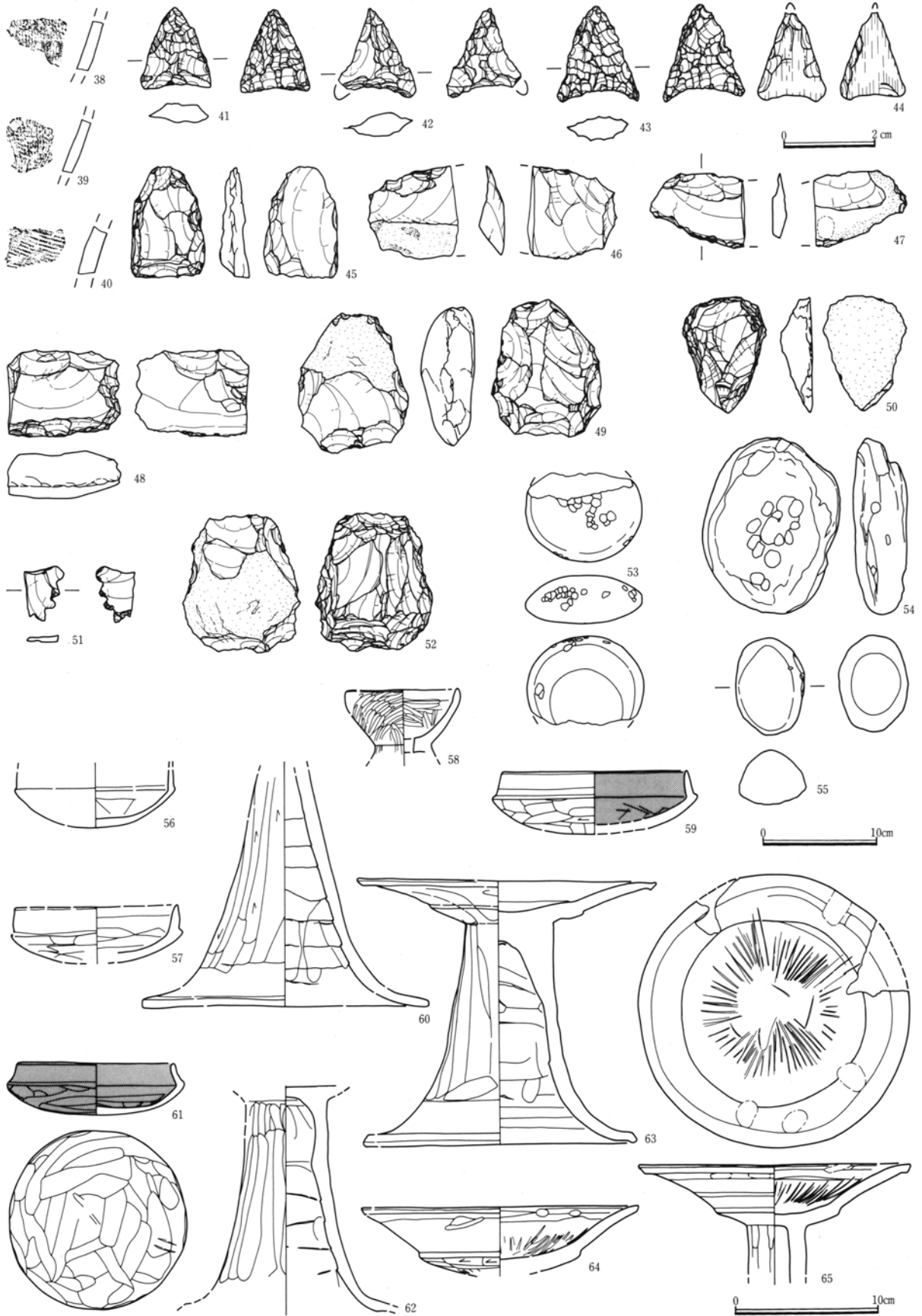
第594図 H-191・192号住居掘り方及び出土遺物

第11節 F区の遺構と遺物



第595図 H-191・192号住居出土遺物(1)

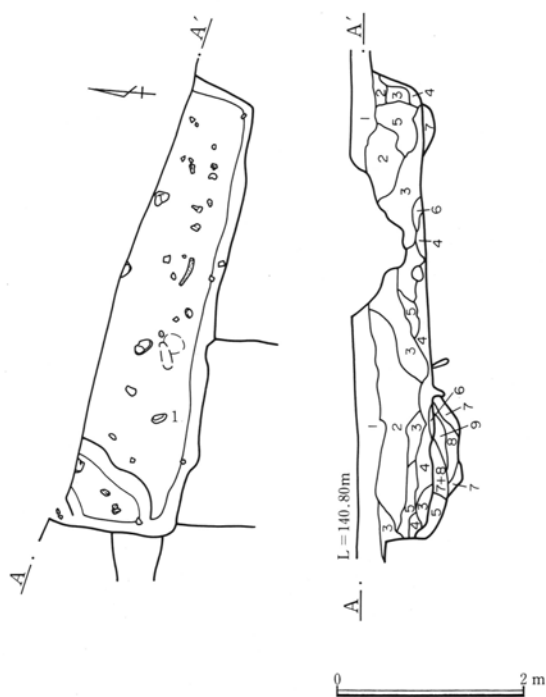
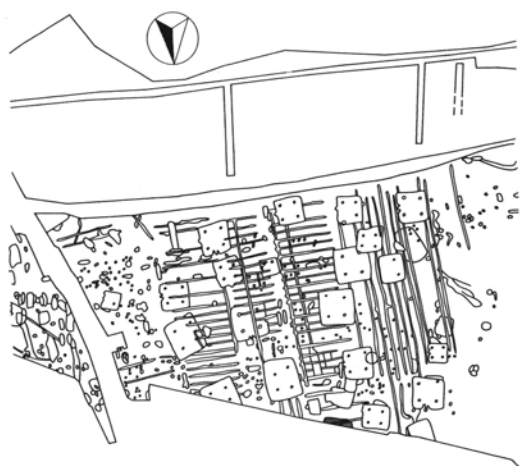
第3章 発見された遺構と遺物



第596図 H-191・192号住居出土遺物(2)

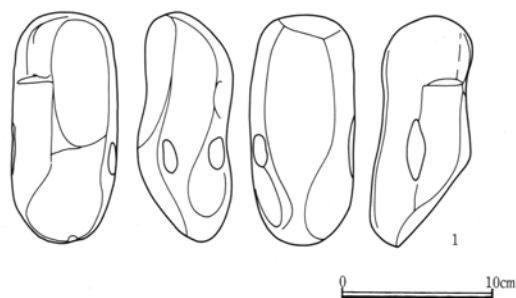


第597図 H-191・192号住居出土遺物(3)



住居覆土

1：暗黒褐色土：As-A多量に含む耕作土。 2：暗黒褐色土：暗褐色土と黒色土の混入土主体。 3：暗黒褐色土主体。 4：黒色土：漆黒土・黒色土とロームの混土。 5：3層に似るが黒色土の混入増加。 6：暗褐色土主体。 7：黒褐色土：褐色・黒色・暗黒褐色土とAs-YPの混土。 8：暗褐色土：暗黒褐色土と褐色土の混土主体。 9：暗褐色土：褐色土主体。



第598図 H-193号住居及び出土遺物

H-193号住居（古墳時代後期以降、第598図、図版212～213・247）

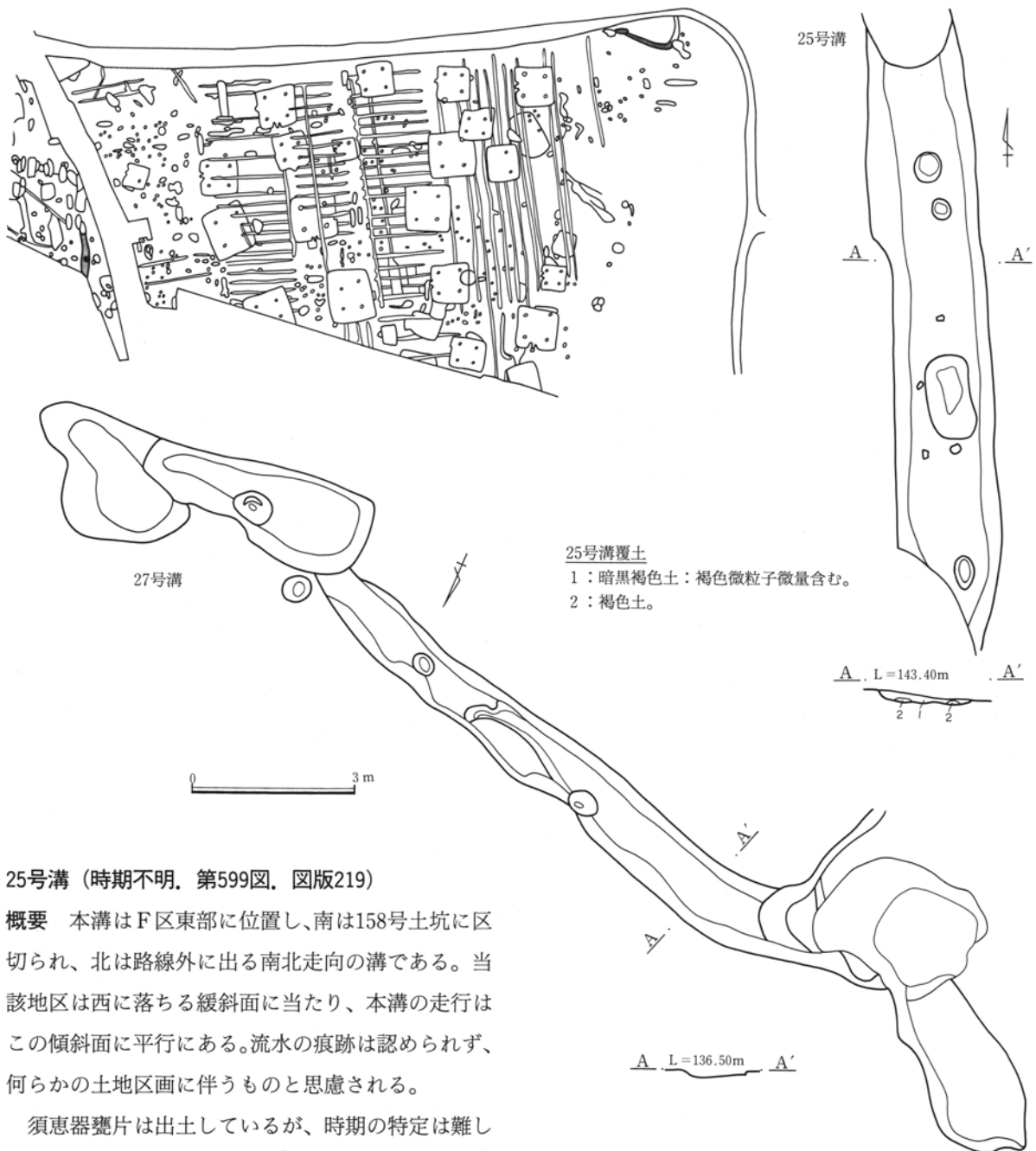
概要 本住居はF区北西部に位置する竪穴住居跡であるが、過半が北側路線外に出ていて南壁の一部を調査できたに過ぎなかった。

出土遺物も少なく、本住居に伴うものは無く、覆土中にも編み石(1)を認めただけに過ぎない。従って時期の特定はできなかった。

規模 残存範囲：496×67cm 深さ：52cm

構造 上述したように、本住居はそのほとんどの部

分が路線外に出ているので遺構の状況はつまびらかではないが、概ね方形または長方形のプランを呈するものと推定される。床は地床であるが部分的に掘り方を持ち、暗褐色～黒褐色の土で埋め戻して床を造り出している。床面にカマドまたは炉、周溝、柱穴、貯蔵穴等の遺構を確認することはできず、これらを含めた主要部分は路線の北側に残されているものと判断された。



25号溝 (時期不明, 第599図, 図版219)

概要 本溝はF区東部に位置し、南は158号土坑に区切られ、北は路線外に出る南北走向の溝である。当該地区は西に落ちる緩斜面に当たり、本溝の走行はこの傾斜面に平行にある。流水の痕跡は認められず、何らかの土地区画に伴うものと思慮される。

須恵器瓦片は出土しているが、時期の特定は難しい。覆土中にAs-A・As-B等のテフラは含まないので、古代以前の所産である可能性がある。

規模 長さ：777cm以上 幅：111～132cm 深さ：11cm

構造 本溝は概ね箱堀状の形態をなし、直線的に南北に走行する。底面は北側に緩やかに傾斜し、南よりそれぞれ径35×31cm、深さ54cm、径22×20cm、深さ35cm、径102×53cm、深さ19cm、径42×26cm、深さ5cmを測るピット或いは、土坑状の掘削が入るが、本溝に直接伴うものかどうかは特定できなかった。

第599図 25・27号溝

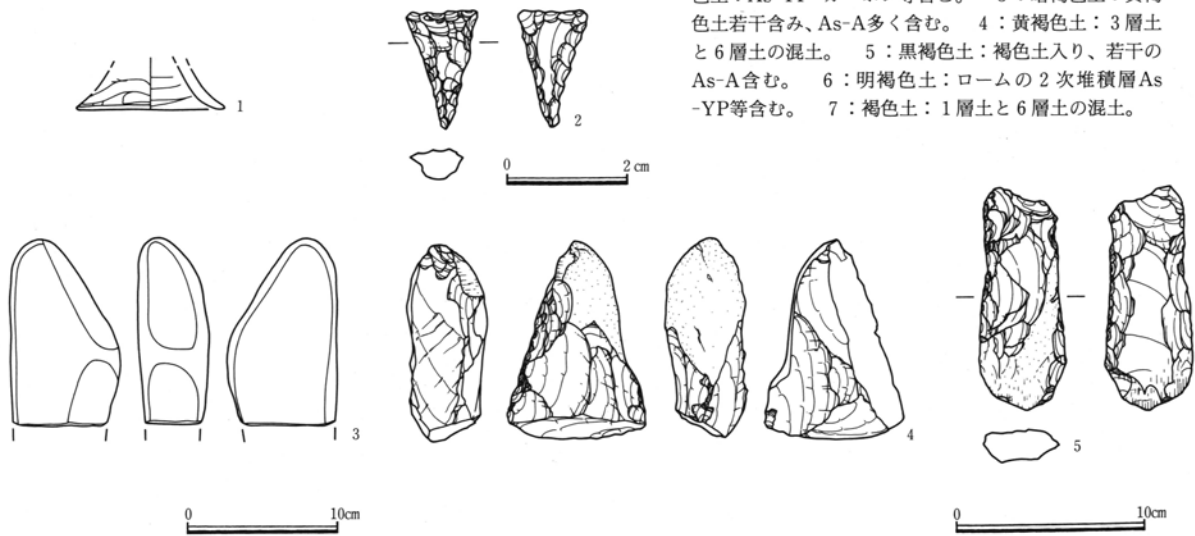
27号溝 (時期不明, 第599図, 図版219)

概要 本溝は矢田川沿いの沖積地に降りる現道の北側、F区とH区の境の斜面に位置している。遺構の遺存状況はあまり良好ではなく荒れている。本溝が自然のものである可能性は残るが、走行の方向が斜面に対して角度を持つので流水等によるものとは考えにくく、人為的なものと判断した。本溝は斜面をまっすぐに在るので沖積地へ降りる道路、或いはそ



26号溝覆土

1：黄褐色土：褐色土とAs-A含む。 2：にぶい黄褐色土：As-YP・カーボン等含む。 3：暗褐色土：黄褐色土若干含み、As-A多く含む。 4：黄褐色土：3層土と6層土の混土。 5：黒褐色土：褐色土入り、若干のAs-A含む。 6：明褐色土：ロームの2次堆積層As-YP等含む。 7：褐色土：1層土と6層土の混土。



第600図 26号溝及び出土遺物

の側溝ではなかったかと推定される。

出土遺物は無く、テフラも識別できなかつたので時期は特定できなかつたが、現道に近接するのでその旧道であった可能性が考えられる。

規模 長さ：544cm 幅：41cm 深さ：10cm以下

構造 本溝は南西に落ちる斜面を横切るようにこれ

を削平し、斜面に段を設けるような形に掘削されている。従って、本溝の北側の壁面には段差を感じるが、南側の肩は多少盛り上がっているように見えるだけである。掘り方は浅く、底面は西に傾斜している。底面の横断面の形態は水平であるが、底面全体として見た場合は平坦ではない。

26号溝（江戸時代後期以降、第600図、図版219・247）

概要 本溝は矢田川沿いの沖積地に落ちる斜面の縁辺、F区とH区の境に位置し、10cm程の段差を持って北側より低くなる削平面に掘り込まれている。本溝は3条の溝で構成され、従って2回以上の掘り直しが想定される。しかし、27号溝と同様その走行の方向が斜面に対して角度を持つので、その形成は自然によるものではなく人為的なものであると判断した。傾斜面に在るため、降雨に当たって斜面に集まる水を緩やかに排水する機能も持つが、27号溝と同様、矢田川沿いの沖積地へ降りる道路といった目的が考えられる。

本溝を構成する3条何れの溝もAs-Aを含んでおり、従って本溝は江戸時代後期以降の所産と判断される。本溝遺構の覆土中には礫等が比較的多く入り

込んでいるが、この中には石鏃(2)、打製石斧(5)、コア(4)等の縄文時代の石器や、土師器高坏(1)の脚部、こも編み石(3)等も混ざり込んでいる。

規模 長さ：1156cm 幅：173～320cm 深さ：14cm

構造 個々の溝は浅い箱堀状の形態を持ち、走行は北西に向って概ね直線的である。底面は概ね平で、走行に沿って北西方向に落ちている。本溝は東南部では南北2条の溝が接した140cm程の幅のものとして確認されたが、2条の溝の切り合い関係等は特定できなかった。この2条の溝は、東南より5.5mの地点でそれぞれ幅1m程の溝としてはっきり分岐している。また、南側の溝に南接して深さ7cmほどの溝の痕跡が約4mに亘って確認されるが、底面はやや荒れていて西側は浅い土坑で区切られている。

— F区東端部の土坑 —

147号土坑（時期不明、第601図、図版216）

概要 本土坑はF区東端部、H-171号住居の西側に位置する小型の土坑である。覆土中に須恵器甕片や羽釜片を混入するが、本土坑に伴うものかどうかは特定できなかった。またテフラは確認できず、平安期以降の所産ということはできたが、結果として時

期の特定はできなかった。

規模 径：99×82cm 深さ：19cm

構造 本土坑は円形に近い隅丸方形のプランを呈し、掘り込みは浅い。壁面は逆ハの字状に開き、底面は比較的平坦であるが南東に向かって低くなっている。

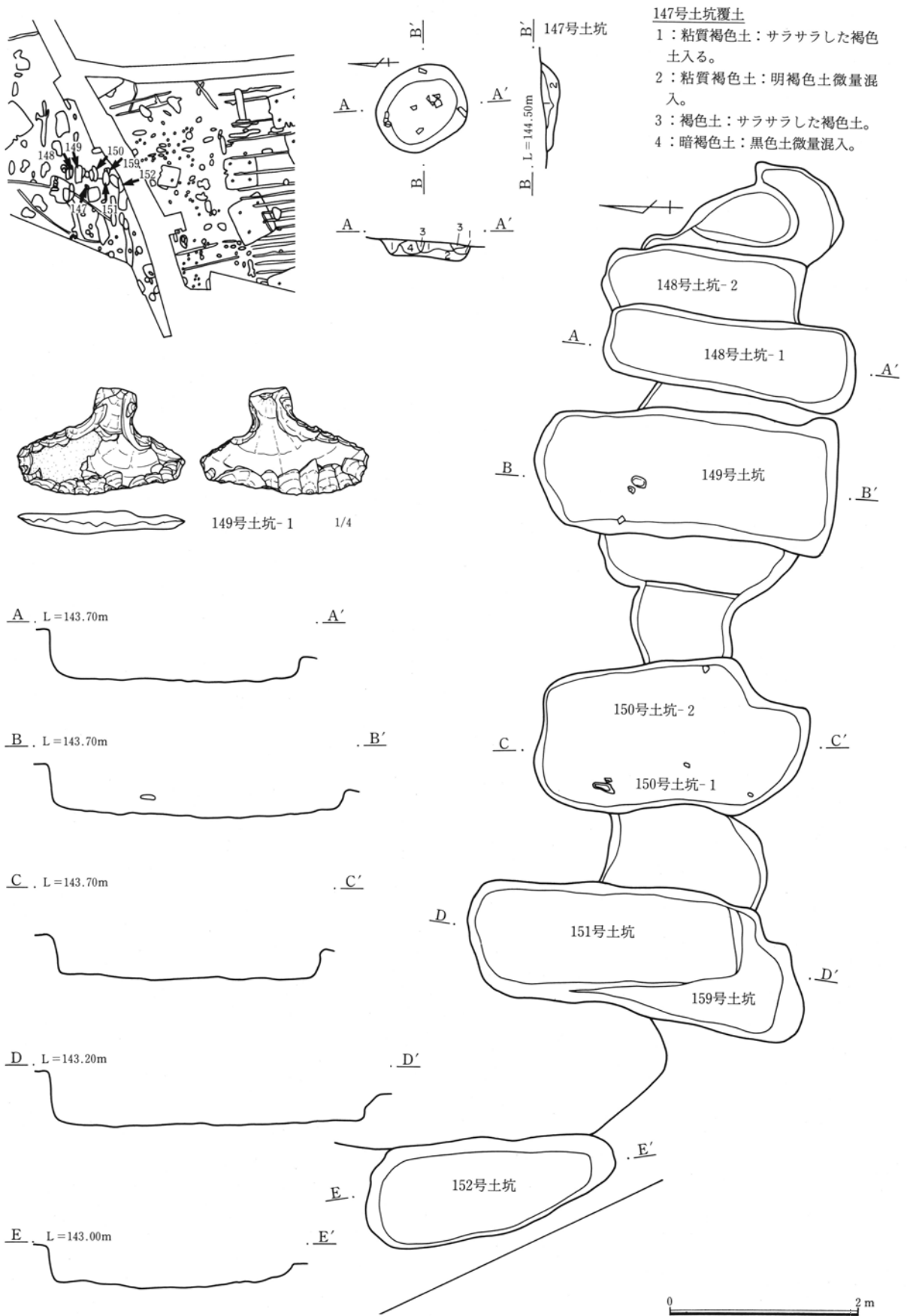
148・149・150・151・152・159号土坑（江戸時代後期頃、第601図、図版216）

概要 148・149・150・151・152・159号土坑はF区東端部に在って、ほぼ東西に並ぶ。多少の規模の違いはあるが近似した規格を持ち、長軸が南北を向くことから一括の土坑群として捉えられよう。

個々の土坑についてみると、148号土坑は西側のや

や細長い148号土坑-1と東側のやや幅広の148号土坑-2に分かれ、前者の方が深いが新旧関係は特定できなかった。149号土坑は単体の遺構。150号土坑は床面に段差等はなかったが、プランから見ると北に主軸を向ける150号土坑-1とやや西に傾く150号

第3章 発見された遺構と遺物



第601図 147~152・159号土坑及び149号土坑出土遺物

土坑-2とに分割されるようである。一方主軸を北に向ける151号土坑とやや東よりに在る159号土坑は、新旧関係は不明だが切り合っている。152号土坑は単体で遺存するが、公道下に入る西部分は調査できなかつた。

これらの個々の土坑の東西にも、新旧関係は不明だが各土坑と切り合い関係にある土坑様の落ち込みが見られた。これらのうち幾つかは、本土坑群の土坑と同様の性格を持つ土坑になるものと思われる。また、本土坑群は位置的に前述したE区の144・145号土坑に連なるものと考えられ、後述する153・154・157号土坑、155・156・158号土坑の土坑群や、161・162号土坑と同様の性格を持つものと判断される。

出土遺物は149～152号土坑から土師器の坏や須恵器の甕、羽釜など、F区で広く取り上げられた遺物の破片があった。覆土の所見は記録できなかったが、後述する154・156・158・157号土坑の覆土の所見から江戸時代後期頃の所産ではないかと判断される。

規模 [148号土坑-1(西)] 長軸：268cm 短軸：90cm 深さ：60cm

[148号土坑-2(東)] 長軸：209cm 短軸：71cm以上 深さ：42cm

[149号土坑] 長軸：318cm 短軸：148cm 深さ：64cm

153・154・157号土坑(江戸時代後期頃、第602～603図、図版216～217)

概要 153・154・157号土坑はF区東端部に位置し、148～152・159号土坑の北側に並ぶ土坑群である。性格については前述の148～152・159号土坑、後述する155・156・158号土坑の土坑群と同様に群を構成する土坑が同一ライン上に掘削され、長軸がラインに直行し近似した規模・規格で掘削されることから土地区画に規制されていることが窺われること、及び土坑の形状が所謂芋穴等の「室」に含まれることから耕作に拘わるものではないかと思慮される。

また、時期については覆土中にAs-Aが見られず、後述の156・158号土坑の覆土の所見から江戸時代後期頃の所産ではないかと判断される。

[150号土坑-1(西)] 長軸：290cm 短軸：108cm以上 深さ：45cm

[150号土坑-2(東)] 長軸：220cm 短軸：50cm以上 深さ：47cm

[151号土坑] 長軸：290cm 短軸：121cm 深さ：50cm

[159号土坑] 長軸：242cm以上 短軸：134cm 深さ：38cm

[152号土坑] 長軸：258cm 短軸：106cm 深さ：48cm

[148号土坑東の落ち込み] 長軸：202cm以上 短軸：118cm以上 深さ：28cm

[148・149号土坑の間] 長軸：213cm 深さ：41cm

[149号土坑西の落ち込み](東) 長軸：210cm以上 短軸：60cm以上 深さ：32cm (西) 長軸：110cm 短軸：83cm 深さ：15cm

[150・151号土坑の間] 長軸：182cm 短軸：94cm以上 深さ：21cm

構造 本土坑群に属する土坑は概ね長方形から隅丸長方形のプランを呈するが、細かくみると、やや細長いもの(148号土坑-1)、多少幅広のもの(149号土坑、159号土坑)、その中間のもの(150号土坑-1、151号土坑、152号土坑)に分けられ、規模の大小もある。底面は概ねフラットである。

規模 [153号土坑] 長軸：294cm 短軸：166cm 深さ：30cm

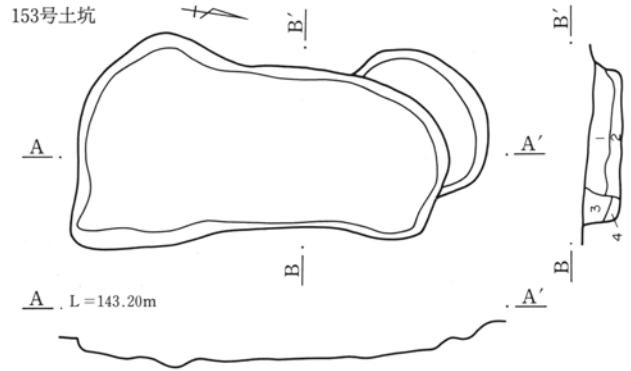
[154号土坑] 長軸：128cm 短軸：86cm 深さ：31cm

[157号土坑-1] 長軸：130cm 短軸：96cm 深さ：49cm

[157号土坑-2] 長軸：108cm以上 短軸：54cm以上 深さ：43cm

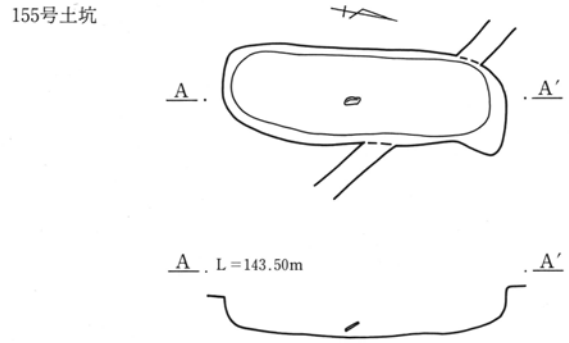
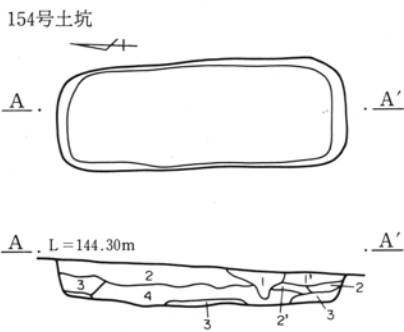
構造 153号土坑はやや台形に近い隅丸長方形様のプランを呈し、154・157-1・157-2号土坑はやや隅丸の長方形のプランを呈する。底面は、深さ5cm以下の小ピットの多く見られる157-2号土坑を除き、概ねフラットである。

第3章 発見された遺構と遺物



153号土坑覆土

- 1：暗褐色土：粒子荒い。 2：暗褐色土：比較的粘性強い茶褐色土と暗褐色土の混土。 3：暗黒褐色土：褐色土微量混入。
4：暗褐色土：褐色土相当量混入。

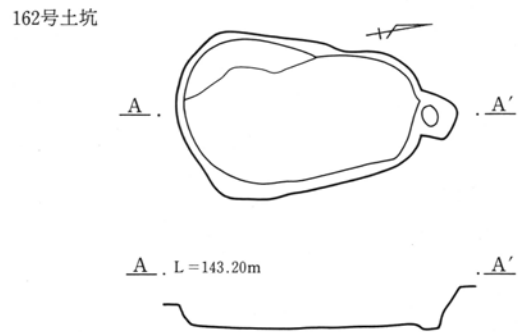
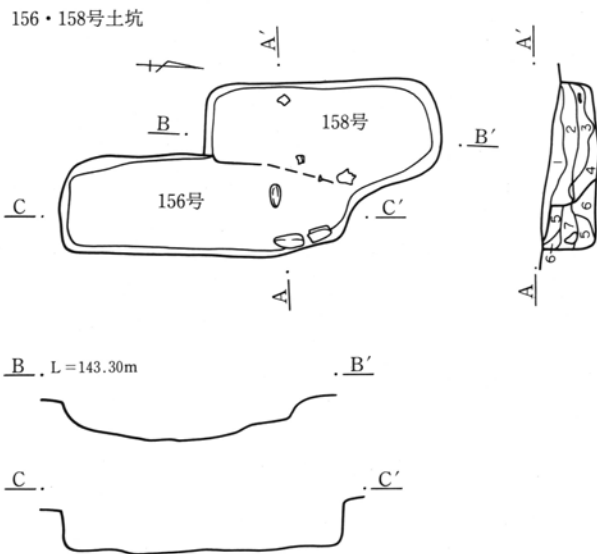


耕作土

- 1：暗黒褐色土主体。 1'：暗黒褐色土：褐色土との混土。

154号土坑覆土

- 2：黒褐色土：暗黒褐色土と褐色土の混土。 2'：黒褐色土：褐色土混入。 3：暗黒褐色土：黒色土と暗褐色土の混土。 4：暗黒褐色土：黒色土と褐色土の混土。



耕作土

- 1：暗黒褐色土：As-Aを多量に含む。

158号土坑覆土

- 2：暗褐色土：黒色土若干。 3：暗黒褐色土：黒色土に褐色土多量に入。 4：暗黒褐色土：粘質褐色土に微量の黒褐色土。

156号土坑覆土

- 5：褐色土：夾雑物ほとんど含まず。 6：3層土と5層土の混土。 7：3層土と同じ。



第602図 153～156・158・162号土坑

155・156・158号土坑（江戸時代後期頃、第602図、図版217）

概要 155・156・158号土坑はF区東端部に位置し、153・154・157号土坑の北側に並ぶ土坑群である。

性格については同一ライン上に掘削されることなどから前述の148号土坑等の土坑群と同様、「室」等の耕作に拘わる遺構ではないかと思われる。

156・158号土坑の覆土中にはAs-Aは見られず、一方その上位に乗る耕作土（第1層）中にはAs-Aが多量に含まれていた。従って156・158号土坑はAs-A降下以前の所産で、As-A降下頃には窪地であったか、覆土が軟らかかったものと判断される。

尚、156号土坑は158号土坑に切られている。

規模〔155号土坑〕 長軸：224cm 短軸：76cm 深さ：29cm

〔156号土坑〕 長軸：229cm 短軸：78cm 深さ：44cm

〔158号土坑〕 長軸：186cm 短軸：95cm 深さ：30cm

構造 158号土坑のプランは隅丸の長方形を呈しており、155・156号土坑はやや長めの隅丸の長方形のプランを呈する。底面は156号土坑は概ねフラットであり、155・158号は横断面は水平だが、縦断面は中央に向かって緩やかに傾斜している。

160号土坑（室町時代～江戸時代後期頃、第603図、図版217）

概要 本土坑はF区の東端部H-171号住居内に位置し、H-171号住居を切るものと判断され、157号土坑（-1・2）とも切り合い関係にあるが新旧関係は不詳である。

覆土中にテフラは確認されず時期等の特定は難しいが、軟質陶器鉢の破片を出土するので室町時代以

降でAs-A降下以前の所産ではないかと思われる。

規模 長軸：137cm 短軸：99cm 深さ：60cm

構造 本土坑は確認面では台形に近い隅丸の長方形のプランを呈し、底面は東に寄った位置に在って、縦長の長方形のプランを呈する。底面は概ねフラットである。

161号土坑（時期不詳、第603図、図版217・247）

概要 本土坑はF区の東端部、E区にまたがる位置に所在する。用途は不詳であるが、主軸の方向や西半部分の形態が148～159号土坑に近似するので、これらの土坑と同様「室」であった可能性を持つ。

覆土中から7世紀後半頃と判断される須恵器蓋が

出土しているが、時期等は特定できなかった。

規模 長軸：275cm 短軸：（北部）107cm（南部）179cm 深さ：49cm

構造 本土坑は、長方形の東壁南半部が大きく膨らんだプランを呈する。底面は概ねフラットである。

162号土坑（時期不詳、第602図、図版217）

概要 本土坑はF区東端部に位置する。小ピットを伴うと判断されるが、用途は不詳である。覆土の記録化はできず、回転ロクロ成形の碗又は坏等が出土するが時期は特定できなかった。

規模 長軸：222cm 短軸：134cm 深さ：35cm

構造 本土坑は洋なし形のプランを呈し、床面は概ねフラットである。頂部に33×31cmの小ピットを伴うが、小ピットの底部は床面より6cm程深い。

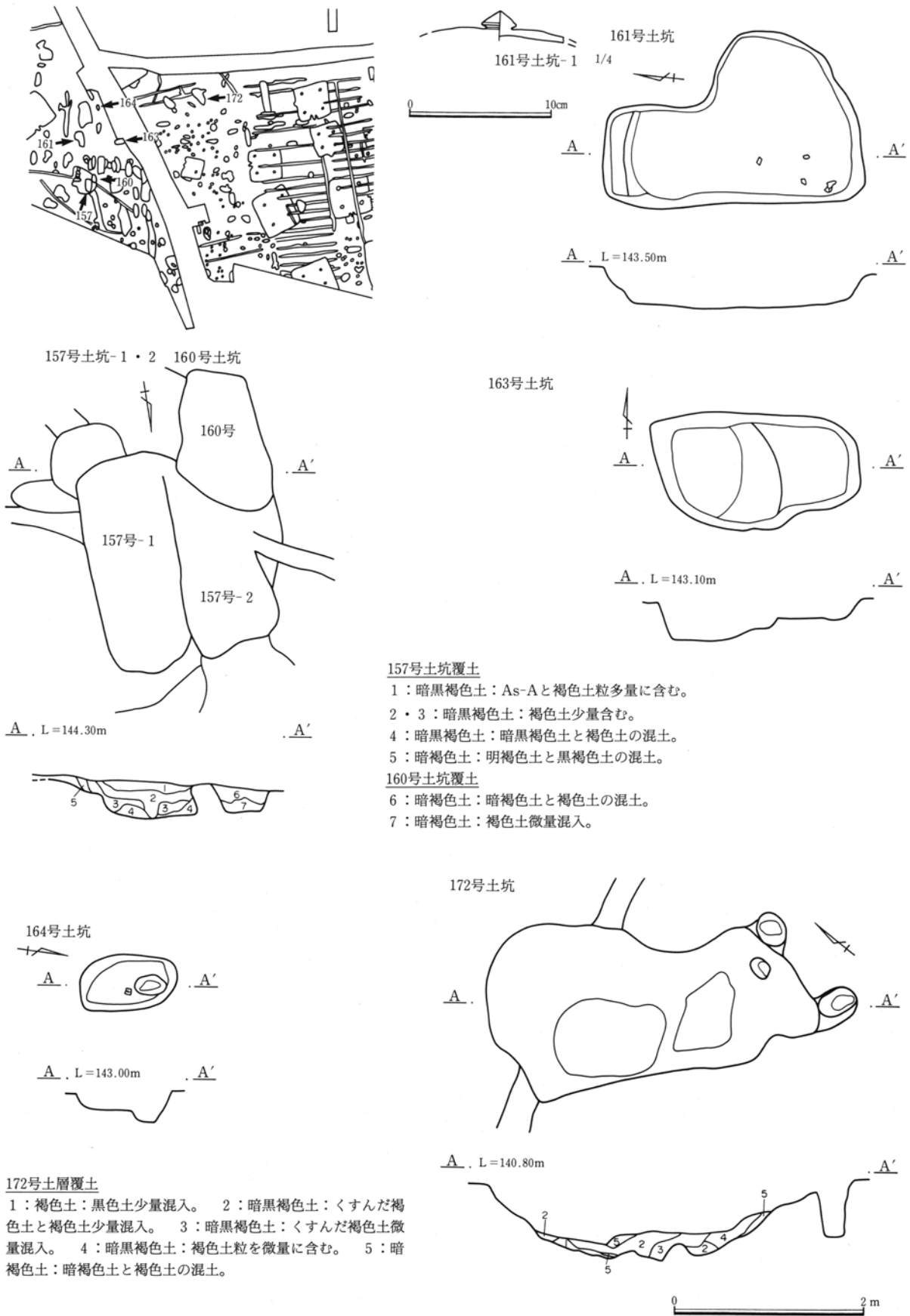
163号土坑（時期不詳、第603図、図版217）

概要 本土坑はF区東部に位置する。用途は特定できず、覆土は記録化できなかった。また出土遺物も無いため時期は特定できなかった。

規模 長軸：216cm 短軸：122cm 深さ：70cm

構造 片側にやや膨らんだ長方形のプランを呈する。底面は丸みを持ち、東半部にテラスを持っている。

第3章 発見された遺構と遺物



第603図 157・160・161・163・164・172号土坑

164号土坑 (時期不詳, 第603図)

概要 本土坑はF区の東南隅部に位置する、小型の土坑である。

本土坑からの出土遺物は無く、覆土の記録化も行い得なかったため時期の特定はできなかった。

尚、本土坑の用途については特定できなかった。

規模 長軸：102cm 短軸：59cm 深さ：21cm

構造 本土坑は、菱形に近い隅丸方形のプランを呈している。

底面は概ねフラットであるが、北端近くに径32×20cm、底面からの深さ9cmの小ピットが見られた。

—— F区中東部の土坑 ——

172号土坑 (時期不詳, 第603図, 図版218)

概要 本土坑はF区東南部に位置するやや大きめの土坑で、西南端部にはピットがつく。出土遺物も無く、覆土からAs-A降下以前とは考えられるが、時期は特定できなかった。

尚、用途は特定されなかった。

規模 長軸：348cm 短軸：179cm 深さ：102cm

構造 本土坑の長軸は等高線に沿っており、プランは瓢箪形に近い不定形を呈している。

壁面は斜面の高位に当たる北東部を除き緩やかに立ち上がっており、底面は凹凸が見られるものの最深部は南部にあって、北半部には窪地気味のテラスが見られた。

165・166号土坑 (江戸時代頃, 第604図, 図版217)

概要 165・166号土坑はF区の東部に所在する。土坑の主軸は東西方向を向き、この部分の4号畠跡のサクに平行に位置して、サクとサクの間に発見されている。これらの土坑が畠の単位の中に同様の方向性を以て位置していることと、サクの形態が148号土坑等に近似していることから芋等の貯蔵のための「室」ではないかと思われる。

覆土中からは土師器坏或は甕の破片が出土するが、時期の特定には供しない。しかし、2つの土坑が含まれると考えられる畠跡は規模等から近代以前の所産と考えられ、一方覆土中にはAs-Aを含まず、形態が148号土坑等に近似することから、As-A降下以前の所産と判断されるのである。

尚、165号土坑と166号土坑は切り合い関係にあるが、新旧を特定することはできなかった。

規模 [165号土坑] 長軸：350cm以上 短軸：109cm 深さ：17cm

[166号土坑] 長軸：230cm以上 短軸：79cm 深さ：10cm

構造 [165号土坑] 165号土坑はやや長めの隅丸の長方形のプランを呈し、掘り込みは比較的浅いものであった。床面は比較的フラットであるが、僅かに膨らみを持っている。

[166号土坑] 166号土坑は楕円形に近いやや長めの隅丸長方形のプランを呈している。

掘り込みは浅く、底面は概ね平坦である。

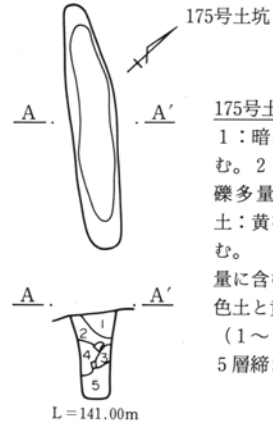
181号土坑 (古墳時代初頭, 第606図)

概要 本土坑はF区中部の北東寄りに位置する。

本土坑は確認面での遺物の集中的分布が見られていたが、後述のように赤井戸式の弥生土器壺(1)が正位に埋め込まれ、またその南には別の弥生土器壺(2)が重なるように埋め込まれていた。

これらの遺物の状況から、本土坑は3世紀末から4世紀初頭の所産と判断される。

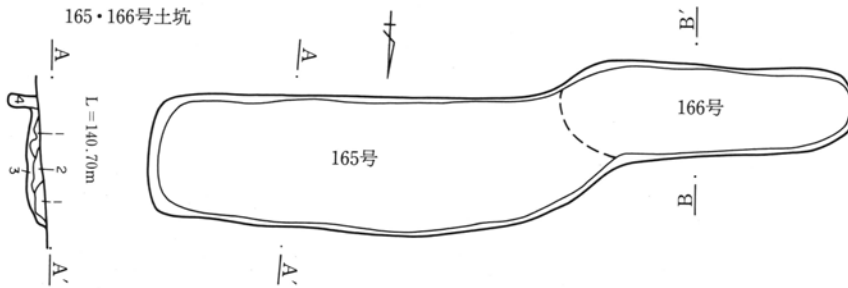
本土坑の用途については、壺を意図的に正位に配置していることから祭祀的性格を有するものと思慮されるが、付近の削平がやや進行しているため、豎



175号土坑

175号土坑覆土

- 1：暗褐色土：褐色土少量含む。
 - 2：暗褐色土：褐色土と小礫多量に含む。
 - 3：暗褐色土：黄褐色土部分的に相当含む。
 - 4：暗褐色土：褐色土微量に含む。
 - 5：暗褐色土：暗褐色土と黄褐色土の混入土。
- (1～4層非常に堅く締まる。5層締まりに欠ける。)



165・166号土坑

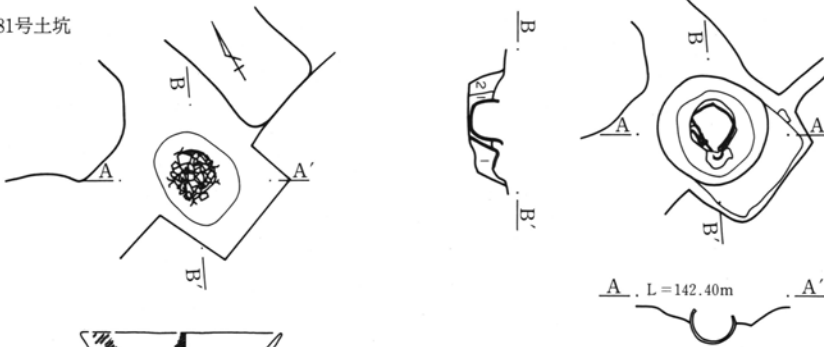
165号土坑覆土

- 1：暗黒褐色土：褐色土ブロック微量に混入。
- 2：暗褐色土：褐色土ブロック・褐色土粒多量に混入。
- 3：暗褐色土：暗褐色土と黒褐色土と黒色土の混入。
- 4：暗褐色土：褐色土と暗黒褐色土の混入。締まりに欠ける。

166号土坑覆土

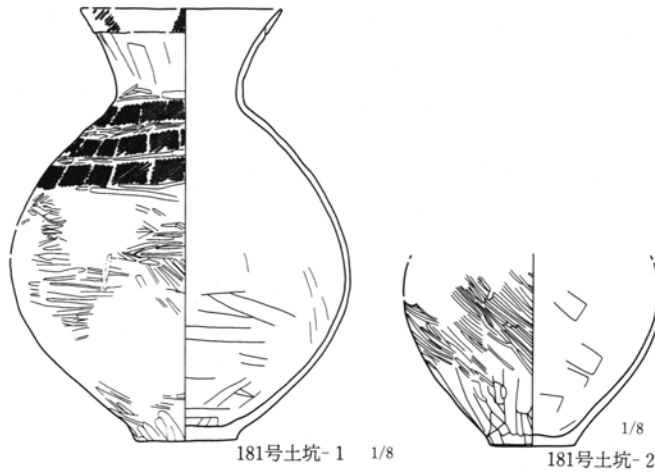
- 1：黒褐色土：褐色土ブロック少量混入。
- 2：暗褐色土：暗褐色土と褐色土の混入。
- 3：褐色土：粒子緻密。黒色土織状に混入。
- 4：暗黒褐色土：褐色土・黒色土微量に混入。

181号土坑



181号土坑覆土

- 1：暗褐色土：混入物はローム 粒極く僅かに含むのみ。締まり弱い。
- 2：黄褐色土：締まりやや弱い。ローム(地山)。



第604図 165・166・175・181号土坑及び181号土坑出土遺物

穴住居に伴う遺構である可能性も否定できない。

規模 径：87×81cm 深さ：15cm

構造 本土坑は円形に近い隅丸方形プランを呈するが底面は平底に近く、壁面は直角に近い角度を以て

立ち上がっている。

底面中央には正位で壺を置き、暗褐色土で埋め戻して固定している。尚、南側では補強のためか壺片を立て差し込んでいる。

173号土坑（江戸時代中期以前、第606図）

概要 本土坑はF区中部の北東に位置している。

本土坑への削平は進行しており、底面近くが残されているに過ぎないようで、遺存状況はあまり良くないものと判断される。

本土坑からの出土遺物は無く、覆土にテフラが見られなかったため、時期の特定は行えなかったのであるが、As-Aも見られないことから江戸時代中期

以前の所産ではある。

規模 径：115×108cm前後 深さ：13cm

構造 本土坑の主軸は北西方向を向き、プランは隅丸方形を基調に北西辺の西半部にやや張り出しを有している。

底面は丸底気味で、壁面はゆっくり開くものと想定され、張り出し部にはテラスを伴う。

175号土坑（江戸時代中期以前、第604図）

概要 本土坑は172号土坑の北東に位置し、172号土坑と同様に主軸を等高線に沿って掘削されている。

本土坑は極めて細長いプランの箱堀状の形態であり、その覆土が中・上位層は非常に堅く締まり、下位層は締まりに欠けているという特徴を有している。

出土遺物も無く、テフラも確認されなかったので時期の特定はできなかった。尚、覆土にAs-Aは含ま

れていないので江戸時代中期以前の所産ということではできよう。

また、用途を特定することもできなかった。

規模 長軸：194cm 短軸：36cm 深さ：70cm

構造 本土坑は細長い溝状のプランを呈している。

壁面は垂直若しくはやや薬研堀状に立ち上がる。また、底面は概ねフラットである。

177号土坑（江戸時代中期以前、第606図）

概要 本土坑はF区中北部に所在する。

本土坑付近には小型のピットが散在するように掘削されており、本土坑へもピットが掘削されて一部を壊している。

本土坑からの遺物の出土は無く、また覆土からも時期の特定は行えなかったが、覆土にAs-Aは確認されなかったので江戸時代中期以前の所産というこ

とはできよう。

尚、本土坑の掘削意図等は確認されなかった。

規模 径：100×75cm程 深さ：16cm

構造 本土坑はやや崩れた隅丸方形様のプランを呈している。

底面には凹凸が見られ、壁面は垂直に近い角度で立ち上がっている。

178号土坑（江戸時代中期以前、第605図、図版218）

概要 本土坑はF区中部に位置する小型の土坑であり、北に4号島のサク遺構に隣接する。

本土坑からの出土遺物は無く、覆土の状況からもその時期を特定することはできなかった。

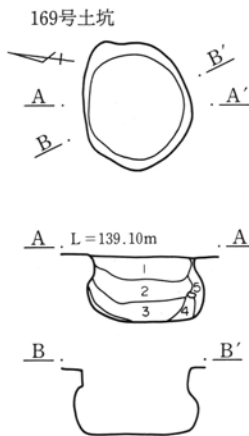
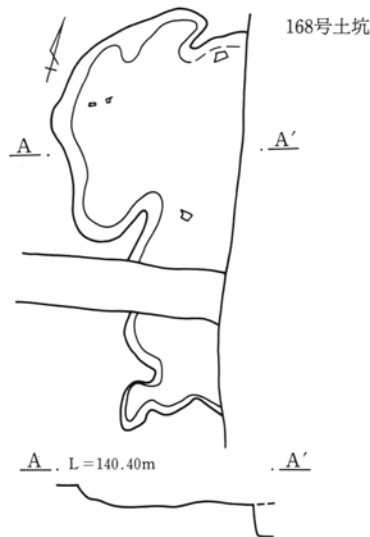
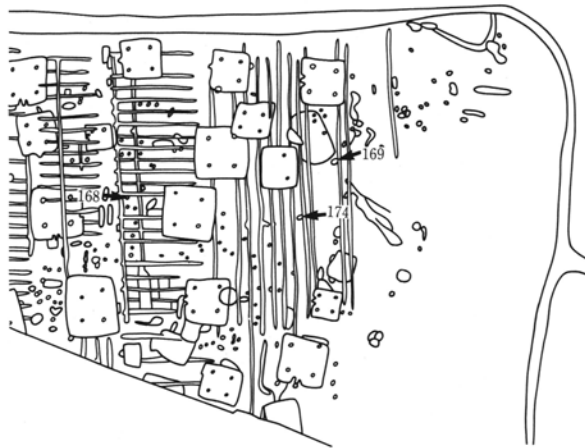
また、本土坑の用途も特定できなかったが、遺構

形態からは柱穴としての使用が思慮される。

規模 径：35×35cm程度 深さ：24cm

構造 本土坑は円形のプランを呈する。

上述のように本土坑の形態は柱穴様で、底面は平底を呈し、壁面は垂直気味に立ち上がっている。

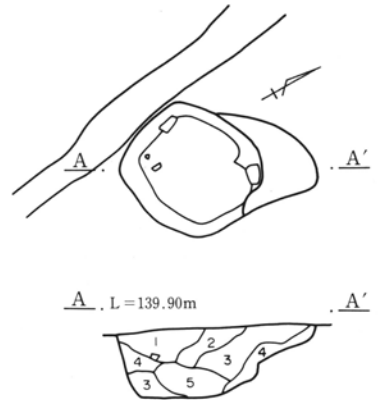


169号土坑覆土
 1：暗黒褐色土：白色・褐色土粒多量に混入する暗褐色土と黒色土の混土。 2：暗黒褐色土：暗褐色土と褐色土粒少量混入。 3：暗黒褐色土：暗褐色土少量混入。 4：暗黒褐色土：夾雑物認められず。 5：暗褐色土：くすんだ褐色土。



第605図 168・169・174号土坑及び168号土坑出土遺物

174号土坑



174号土坑覆土

1：暗褐色土：明褐色土少量混入。 2：暗黒褐色土：褐色土若干含む。 3：暗黒褐色土：くすんだ暗褐色土と淡褐色土を相当量含む。 4：暗褐色土：黒褐色土と褐色土の混土。 5：暗黒褐色土：くすんだ褐色土と炭化物微量含む。

— F区中・西部の土坑 —

168号土坑（江戸時代中期以前，第605図，図版218・247）

概要 本土坑はF区の西部の東寄りに位置する大型の土坑である。

土坑の東部は現代の耕作溝によって失われ、残存部の南寄りも6号畠のサクが入っている。また削平も進行し遺存状況は不良であった。

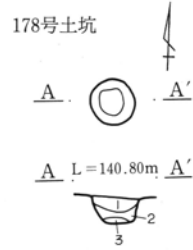
覆土中からは石匙(1)や弥生土器破片、黒曜石等が出土しているが、土坑の時期を特定するには至らなかった。尚、覆土中にAs-Aは認められていないので、江戸時代中期以前の所産ということにはなる。

尚、本土坑の用途等を特定することはできなかった。

規模 長軸：334cm 短軸：154cm以上 深さ：33cm

構造 本土坑は不整形のプランを呈する。

底面は小さな凹凸が見られるが全体的には比較的平坦に近い。遺存状況が悪いため明瞭ではないが、壁面はやや開き気味である。

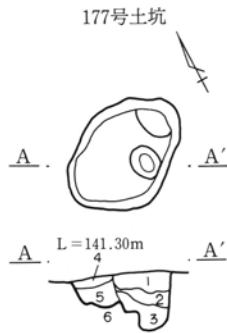


178号土坑覆土

- 1：黒褐色土：締まりやや弱い。ロームを僅かに含む。
- 2：暗褐色土：締まり弱い。ロームをまばらに少量含む。
- 3：黄褐色土：締まり弱い。ロームを多く含む。

173号土坑覆土

- 1：暗褐色土：白色土粒・褐色土粒を多量に含む。
- 2：暗褐色土：黒色土・白色土粒を少量含む。
- 3：褐色土：夾雑物殆ど含まず。



[177号土坑]

ピット覆土

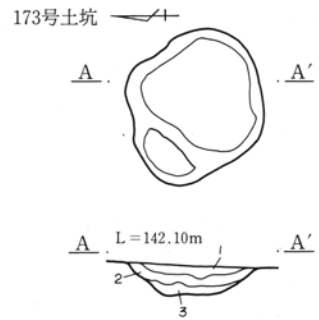
- 1：褐色土：白色粒を少量含む。締まりやや弱い。
- 2：暗褐色土：混入物無し。締まり弱い。
- 3：暗褐色土：ロームを主体に含む。締まり弱い。

177号土坑覆土

- 4：褐色土：締まり弱く、混入物無し。
- 5：褐色土：締まりやや弱い。ロームを全体に僅かに含む。

地山

- 6：黄褐色ローム。



第606図 167・173・178号土坑

169号土坑（縄文時代. 第605図. 図版218）

概要 本土坑はF区西部の矢田川に降りる斜面に近い位置に在る小型の土坑である。

出土遺物の中には縄文時代早期のもの1点と中期のもの2点の土器片が見られたが、時期の特定には至らなかった。しかし、その形態は袋状土坑であり、覆土の所見や出土遺物にも不合理が認められなかつ

たので縄文時代の貯蔵穴と判断される。

規模 径：100×90cm 深さ：56cm

構造 本土坑は円形に近いプランを呈している。

底面は概ねフラットであるが、底面から33内至39cmの間が7～8cm程オーバーハングし、縦断面形態は逆Ω状を呈している。

174号土坑（古墳時代後期以降. 第605図）

概要 本土坑は、F区西部中央付近に位置する小型の土坑である。

本土坑からは若干の縄文土器・弥生土器・土師器片が出土してきているが、時期の特定までには至らなかった。

尚、本土坑は出土遺物と覆土にAs-Aを含まないことを併せて、本土坑は古墳時代以降、江戸時代中期以前の所産という大雑把な範囲の中では捉えることができるのである。

尚、本土坑の用途等は特定できなかった。

規模 長径：129cm 短径：98cm 深さ：60cm

構造 本土坑は105×98cmを測る方形のプランを基調とし、北東側で壁面が三角形にやや広がるプランを呈している。

170号土坑（江戸時代中期以前、第607図、図版218・247）

概要 本土坑はF区中部西寄りに位置して、後述の170号土坑の南南東に隣接している。

本土坑の南西隅には新旧関係は特定できなかったが小型のピットが絡んでいる。

本土坑からは棗玉形の土製品(1)が出土しているが時期の特定には至らなかった。しかし、覆土上位にAs-Aを微量に含んでいるが、主体的に含むものとは思われないので、少なくとも土坑の掘削時期はAs-A降下以前になるのではないかと推定され、更に本土坑の掘削位置は5・6号畠の境に在って、本

171号土坑（江戸時代中期以前、第607図、図版218）

概要 本土坑はF区中部西寄り、170号土坑の北北西に近接して位置している。

本土坑からの出土遺物は認められず時期の特定には至らなかったが、覆土中にAs-Aを含まなかったことから江戸時代中期以前の所産であることは確認される。しかし170号土坑と同様、後述の5・6号畠の境に、その方向と主軸を同じくして位置している

182号土坑（古墳時代後期以前、第607図、図版219）

概要 本土坑はF区南西部のH-179号住居の内部、その北西隅部に位置している。

本土坑はH-179号住居の掘り方面調査の前後にサブトレンチを掘削して、その両側に広がることを確認し、調査したものである。

本土坑からの出土遺物は見られず時期の特定には至らなかったのであるが、H-179号住居より古い段階の土坑であるため、少なくとも7世紀中葉以前の所産ということにはなる。しかし、後述のように遺構形態から本土坑には陥穴である可能性が考慮されるので、縄文時代の所産ではないかと想定されるので

掘り方は箱状を呈し、底面は若干丸底気味であるが概ねフラットであり、壁面も垂直に近いが、北東部では床上10～20cmの高さから緩傾斜のテラス状の面が壁面を掘り込んで広がっている。

土坑の主軸方向がその境とするものの方向と一致するので、近世の所産であろうと判断されるのである。

尚、土坑の用途についてはその形態から、148号土坑等と同様、農耕に伴う芋穴のような貯蔵遺構であったものと想定される。

規模 長径：164cm 短径：79cm 深さ：22cm

構造 本土坑の主軸は南北方向を向き、隅丸の長方形のプランを呈している。

掘削形態は箱状を呈しているが、底面は若干の凹凸を見せている。

ので、近世の所産であるものと判断される。

本土坑の性格については、170号土坑と同様に農耕に伴う芋穴のようなものであろうと思われる。

規模 長径：289cm 短径：74cm 深さ：41cm

構造 本土坑の主軸は南北を向き、隅丸の短冊形のプランを呈している。

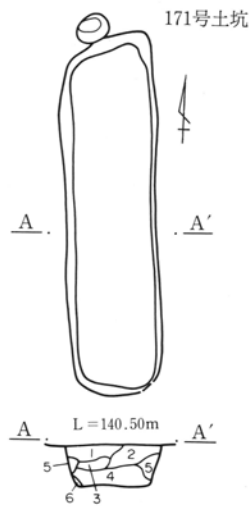
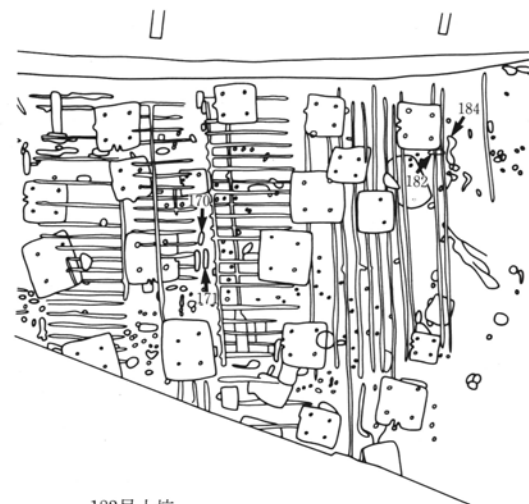
掘削形態は箱形で、底面もフラットである。

ある。

規模 長径：226cm以上 短径：60cm 深さ：74cm

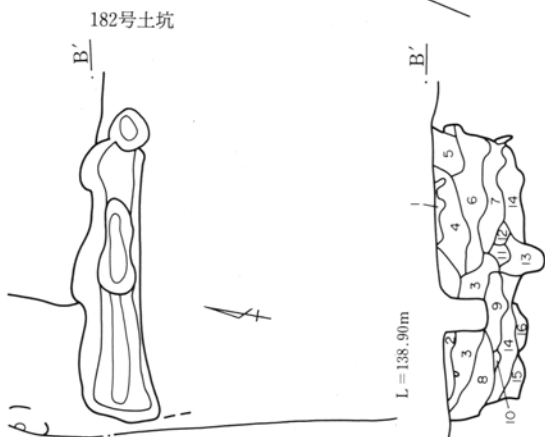
構造 本土坑の主軸は概ね東西を向き、そのプランはやや崩れるものの隅丸の短冊形を基調としているものと思われる。

掘り方は凡そ箱形を呈し、底面は平坦であるがその中心付近に長さ75cm、幅30cm、深さ8cm程を測る長円形プランの土坑状の掘り込みが認められた。この部分には、断面観察に於いても底面より30cm程上の位置まで柱痕様の土層の堆積状況が認められ、杭の逆位での設置が窺われるのである。

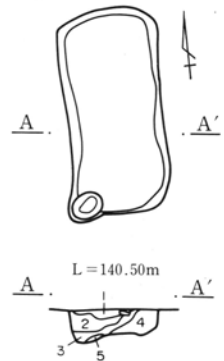


171号土坑覆土

1：暗褐色土：褐色土粒微量に含む。 2：暗褐色土：褐色土粒多量に含む。 3：暗褐色土：暗褐色土と明褐色土の混土。 4：暗褐色土：黒色土・褐色土ブロック少量混入。 5：暗褐色土：褐色土粒・黒色土粒多量に混入。 6：褐色土：夾雑物認められず。

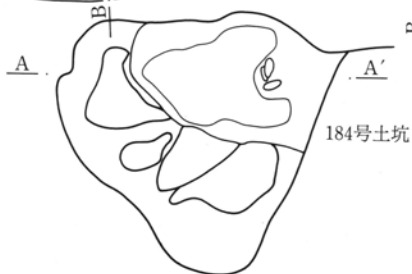


170号土坑



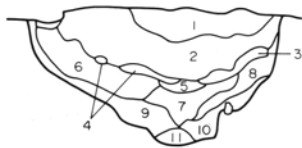
170号土坑-1

1/2



184号土坑

A . L=138.90m . A'



現在の耕作土

1：灰黄褐色砂質土：As-A含む。

182号土坑覆土

2：褐色土：にぶい黄褐色・暗褐色土やや多。
3：褐色土主体。 4：褐色土主体。 5：にぶい黄褐色土：ロームと暗褐色土やや多。
6：にぶい黄褐色土主体。 7：暗褐色土：ロームと黒褐色・褐色土等多し。
8：暗褐色土：下ににぶい黄褐色土多し。
9：暗褐色土：黒褐・にぶい黄褐色土と明黄褐色土ロームやや多し。
10：にぶい黄褐色土主体。 14：黄褐色土：明黄褐色土やや多し。 15：黄褐色土：ロームブロック層。 16：黄褐色土：明黄褐色土多し。

ピット覆土

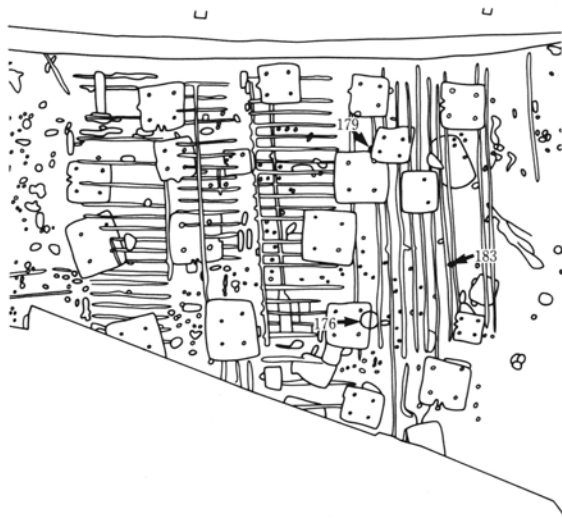
11：にぶい黄褐色土主体。 12：黄褐色土主体。 13：にぶい黄褐色土主体。

184号土坑覆土

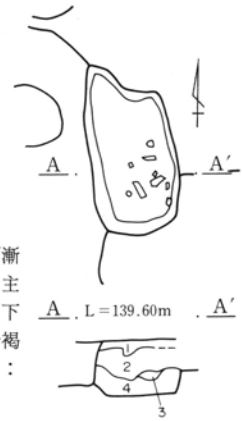
1：黄褐色土主体の層。 2：にぶい黄褐色土：褐色土多く入る。 3：暗褐色土主体の層。 4：明黄褐色土主体の層。 5：にぶい黄褐色土主体の層。 6：黄褐色土主体の層。 7：明黄褐色土：褐色・暗褐色土多く含む。 8：褐色土主体の層。 9：暗褐色土主体の層。 10：暗褐色土主体の層。 11：黄褐色土：ローム。



第607図 170・171・182・184号土坑及び170号土坑出土遺物



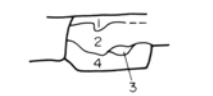
179号土坑



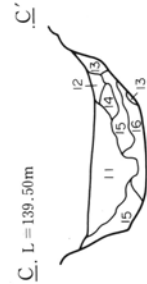
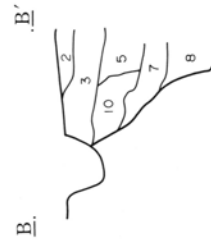
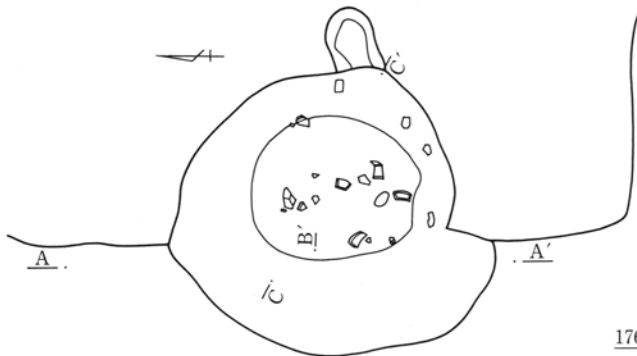
179号土坑覆土

1：黄褐色土：ローム漸移層（以下「漸移層」）下層土とロームの混土ブロック主体。 2：暗褐色土：漸移層上層土に下層土入る混土ブロック主体。 3：暗褐色土：漸移層上層土ブロック層。 4：褐色土：漸移層土ブロック主体。

A, L=139.60m A'



176号土坑

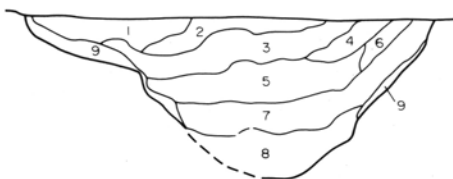


C, L=139.50m

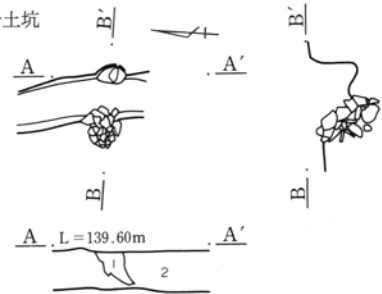
176号土坑覆土

1：褐色土：上端で白・黄色粒多く含む。 2：暗褐色土主体の層。 3・4・5・6：暗黄褐色土主体の層。 7：褐色土主体の層。 8：暗褐色土：混入物無し。 9：黄褐色土：ローム多く含む。 10：暗黄褐色土主体の層。 11：黒色土主体の層。 12：黒色土：褐色系軽石粒を相当量含む。 13：淡褐色土：As-MPを主体とする軽石層。 14：黒赤褐色土：褐色系軽石と焼土多量に含む。 15：黒色土主体：非常に良く締まる。 16：淡黒褐色土：As-MP主体の軽石層と黒褐色土の混土。

A, L=140.40m



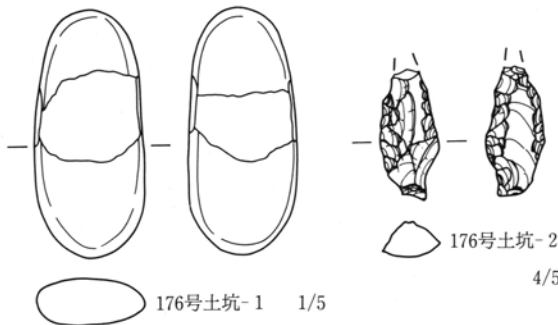
183号土坑



A, L=139.60m

183号土坑覆土

1：褐色土：黄色ロームと黒褐色土混入。 2：暗褐色土：黒褐色土多く、ローム粒若干含む。



176号土坑-1 1/5

176号土坑-2 4/5



第608図 176・179・183号土坑及び176号土坑出土遺物

184号土坑（古墳時代か、第607図、図版219）

概要 本土坑はF区南西部のH-179号住居の調査中に同住居の西壁部分に発見された遺構で、同住居の掘り方の調査終了後に掘削・調査されたものであり、同住居に切られているものである。

本土坑からは弥生土器片1点など若干の遺物の出土を見ているが、時期特定には至らなかった。

しかし乍ら、これらの状況から本土坑は弥生時代以降、7世紀中葉以前の所産であろうと判断されるのである。

176号土坑（古墳時代以前、第608図、図版219）

概要 本土坑はF区北西部に所在し、H-191号住居の調査に伴って発見調査されたものである。

本土坑からは、こも編み石(1)やスクレイパー(2)の他、須恵器片等若干の遺物や炭化物の出土を見ているが、基本的にはH-191号住居に切られるので6世紀後半以前の所産として把握される。

尚、本土坑は形態的特徴から倒木痕と判断される

179号土坑（時期不詳、第608図、図版219）

概要 本土坑はF区南西部のH-176号住居の東壁北寄りの、H-186号住居と接する位置に掘削される土坑で、H-176号住居の調査に伴って発見・調査されたものである。

本土坑からは弥生土器片や内耳鍋の破片等若干の遺物が、土坑の底面より10cm余り高い位置から出土している。しかし、一方で断面観察からは本土坑がH-176号住居に切られている状況が確認されてい

183号土坑（江戸時代中期以前、第608図、図版219）

概要 本土坑はF区西部に位置する。F区の上位面の調査の最終段階で調査された遺構の一つで、現代の耕作溝の壁面に確認し調査したものである。

本遺構からの出土遺物はなく、また覆土の状況からも時期の特定は行い得ず、江戸時代中期以前の所産として把握されるに過ぎなかった。

本土坑は集石遺構であるが、用途等を特定するこ

本土坑はその形態から風倒木痕ではないかと思慮されるが、この場合の倒木の方向については、断面からは特定できなかったが、遺構形態からは西側であったものと判断される。

規模 長径：223cm 短径：208cm 深さ：104cm

構造 本土坑の主軸は概ね南北を向き、そのプランは東壁を底部とする隅丸の三角形を呈する。

底面は丸底気味で、壁面は他の2面に対し、東壁面の傾斜がきつい。

が、その場合の倒木の方向は北北西と判断される。

規模 長径：260cm 短径：229cm 深さ：165cm

構造 本土坑の主軸は概ね北北西を向き、楕円形のプランを呈している。

底面は丸底気味で、壁面は開いているが、他の面に比較して南南東側の傾斜はややきつい状況を示している。

る。従って、本土坑の時期の特定には至らなかった。

尚、本土坑の用途についても特定できなかった。

規模 長径：138cm 短径：70cm 深さ：42cm

構造 本土坑の主軸は概ね北北西を向いており、プランは長方形を基調としているが、北西部は三角形に突き出している。

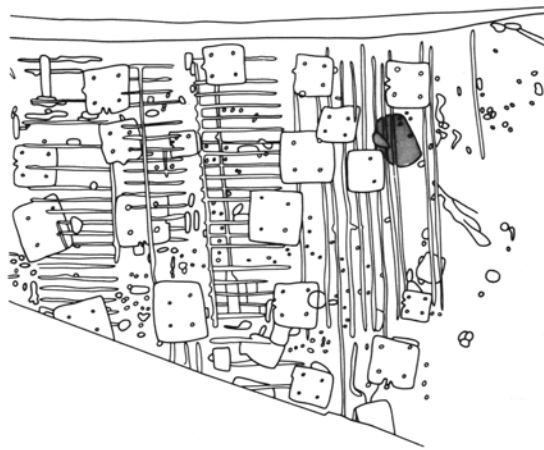
掘り方は箱状を呈している。

とはできなかった。

規模 長径：72cm 短径：33cm 深さ：56cm

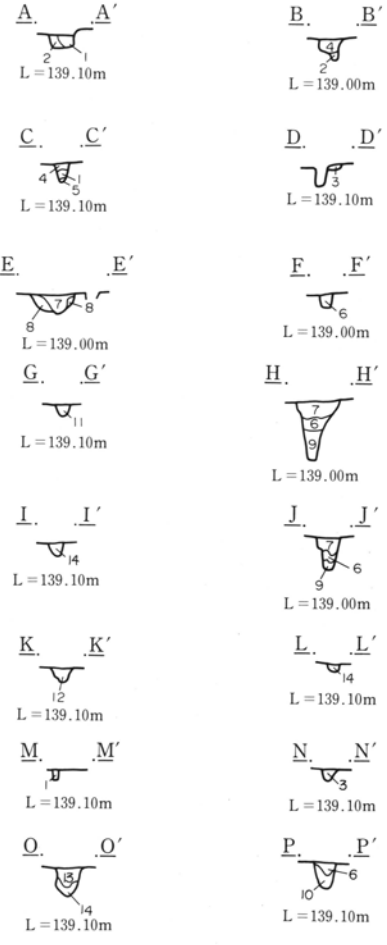
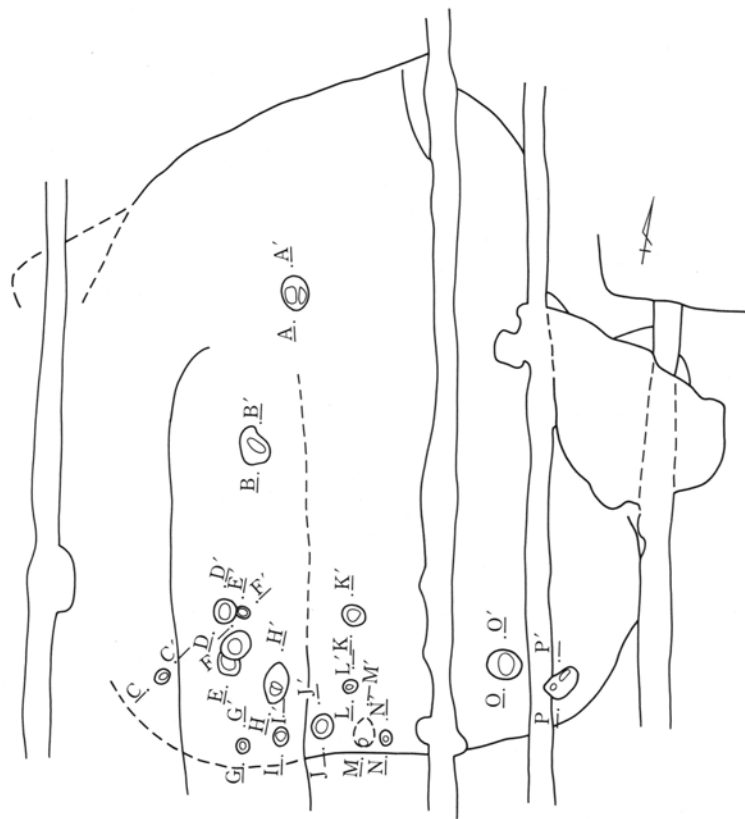
構造 調査を急いだこともあって本土坑の明確な形態を把握することはできなかったが、本土坑は概ね楕円形のプランを呈している。

耕作溝を挟んだ東部は褐色土・暗褐色土が充填し、西部に於いては握り拳大の礫が充填している。



小ピット群ピット覆土

1：にぶい黄褐色土：ローム多く入る。 2：暗褐色土主体の層。 3：黄褐色土：ロームと暗色ロームの混土。 4：褐色土：ローム漸移層下層土主体の層。 5：にぶい黄褐色土。 6：褐色土主体の層。 7：にぶい黄褐色土：黒褐色土やや多く入る。 8：明黄褐色ローム主体の層。 9：暗褐色土主体の層。 10：にぶい黄褐色土：ロームやや多く入る。 11：黄褐色ローム：褐色土多く入る。 12：褐色土：ロームと暗褐色・黒褐色土混入。 13：褐色土主体の層。 14：黄褐色土主体の層。



第609図 J-1号竖穴住居ピット群



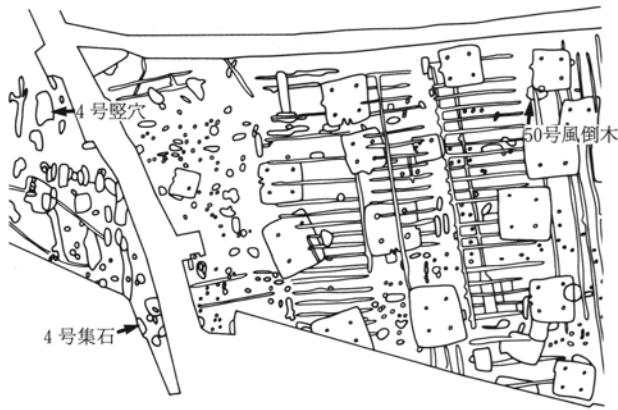
F区のパット群 (第609図)

概要 F区に於いても区の広い範囲に亘って数多くのピットが見られた。

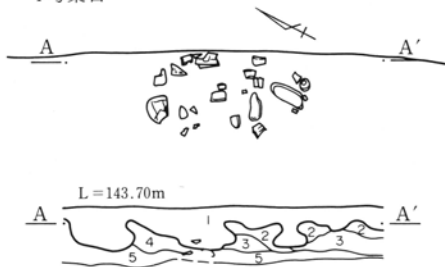
全体的に見ると区の中東部に当たる、確認面の高さで標高141.0~142.4mの範囲、及び中西部北よりのY-3・4号住居とH-191号住居の周辺にその分布は濃く、西部の区域では比較的均等に散在し、中部南半の区域ではやや薄い傾向にあった。

これらのピットについては時代的にも広い範囲に及ぶものと想定され、また、解析が充分でないこともあるためか、建物或いは柵列等の構造物を見出すことはできなかった。

第609図には、このうちJ-1号住居に見られたピット群を図示しているが、これらの柱穴の規模は小さく、柱材も細いものであったと判断される。



4号集石



耕作土

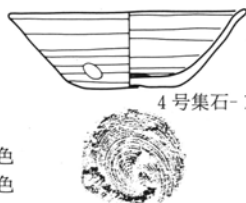
1：暗黒褐色土：As-A多量に含む。

4号集石覆土

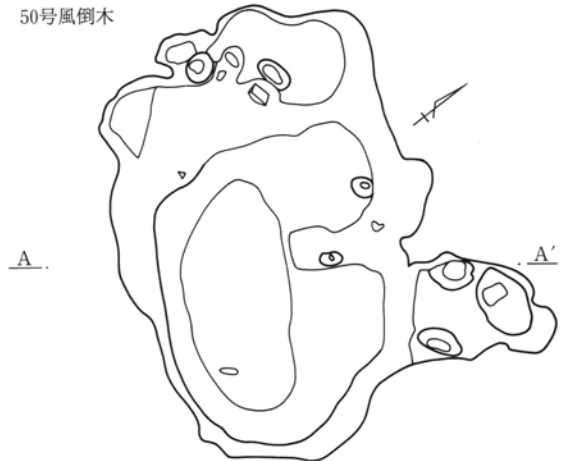
2：暗褐色土：少量の黒色土含む。 3：暗黒褐色土：黒褐色土と暗褐色土の混土。 4：暗黒褐色土：焼土微量に含む黒褐色土と暗褐色土の混土。

地山層

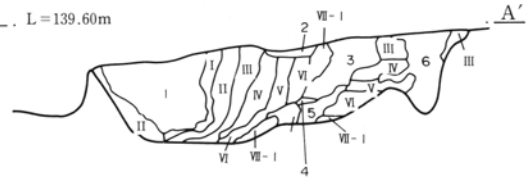
5：暗茶褐色土



50号風倒木



A. L=139.60m



表土層及び50号風倒木覆土

1：黒褐色土：表土。 2：黒褐色土：耕作痕。 3：黒褐色土：表土。ローム含む。 4：VII-1層土に少量の表土混入。 5：表土。VI層土とVII層土の混土。 6：黒褐色土：樹木の根の痕跡。

上部ローム層標準土層

I：黄褐色土：As-YP少量混入。 II：褐色土。 III：黄褐色土：As-BP微量混入。 IV：黄褐色土：As-BPをベースとする。 V：暗茶褐色土：As-BP微量混入。 VI：暗黒褐色土：所謂チョコレート色を呈する。 VII：As-BPの純層に近い。(VII-1：赤褐色：粗粒。)

4号集石遺構 (時期不詳, 第610図, 図版220・247)

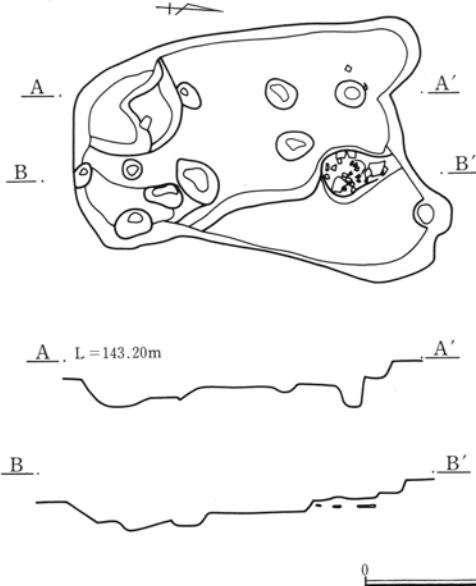
概要 本遺構はF区の東部、公道の東側の調査区北端寄りに位置している。

本遺構は後述のように礫の集中的分布によって確認された遺構であるが、北東側は路線外に出ていて全体状況を把握することはできなかった。

本遺構からは9世紀代の特徴を示す須恵器環 (1) や縄文土器片等が見られたが、時期の特定には至らなかった。

本遺構の性格については明らかにすることはできなかったが、微量ではあるが下位層に焼土を含むこ

4号竖穴



第610図 4号集石・50号風倒木・4号竖穴及び出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

とから燃焼行為に伴って使用された遺構である可能性を有する。

規模 長径：約176cm 短径：92cm以上 深さ：32cm

50号風倒木（平安時代か、第610図、図版221・248）

概要 本風倒木はF区の南西部に所在する、大型の風倒木痕である。

本風倒木の覆土中からは不定形石器(1)や縄文土器片・土師器片・羽釜片の出土が見られた。こうしたことから倒木の時期については概ね平安時代以降であるものと思われるが、倒木時期の細かい特定には至らなかった。

4号竪穴状遺構（古墳時代後期、第610・304図、図版121・220）

概要 本遺構はF区東南部、E区にやや掛かって位置している。

本遺構からは幾つかの土器の出土を見ているが、前述の3号竪穴状遺構の項(329頁)で述べたように、3号竪穴状遺構の出土遺物として取り扱っているものの多くは本遺構に伴うものと判断される。これらは本遺構北部のピットに伴って出土したものを中心とするものである。これらの出土遺物の中には土師器の坏・高坏・甕があり、坏(1,2)は6世紀前半期の、甕は6世紀後半期(4)と7世紀代(5)の特徴を持ち、高坏(3)も古墳時代後期の所産かと思われる。

3・4・5・6号畠（江戸時代後期～近代、第611～614図、図版220）

概要 3・4・5・6号畠は、F区中東部の中北部分に所在するサク状遺構群で、これらは吉井町多比良3096-1の区画内に収まるものである。

3～6号畠はF区の広い範囲に亘っているため多くの竪穴住居等との間に切り合い関係を有するが、3～6号畠の方が新しい場合が多い。

本遺構群は付近の土地区画や本遺構群を切る現代の耕作溝の走行と関連し、覆土にAs-Aを含んで覆土上位が現代の耕作土に似ていることから現代の土地区画に連続する時期のものとして判断され、遺構形態が江戸時代後期から近代の所産のものとして想定される。

構造 本遺構には明瞭な掘り込み等を確認することはできなかったが、上述の規模の範囲で楕円形状に磔の平面的且つ集中的分布が見られた。

尚、倒木の方向については、断面観察から南西方向と判断される。

規模 長径：488cm 短径：445cm 深さ：123cm

構造 本風倒木の平面形態はやや不整形な楕円形を中心に、北東部に突出する部分を伴う。

底面は平底に近く、壁面の傾斜は西側面ではやや緩やかである。

る。

これらの出土遺物には時期差があり、また上述のピットが本遺構に伴うものであるか否かの特定もできなかったのであるが、このピットが本遺構に伴うものであるとすれば、本遺構の時期は概ね古墳時代後期の所産ということができよう。

規模 長径：396cm 短径：282cm 深さ：44cm

構造 本遺構の主軸は北北西を向き、隅丸の台形状の不定形なプランを呈する。

底面は凹凸があり、幾つかのピット状の掘り込みも見られる。

規模〔3号畠〕 幅：12m 長さ：37.6m

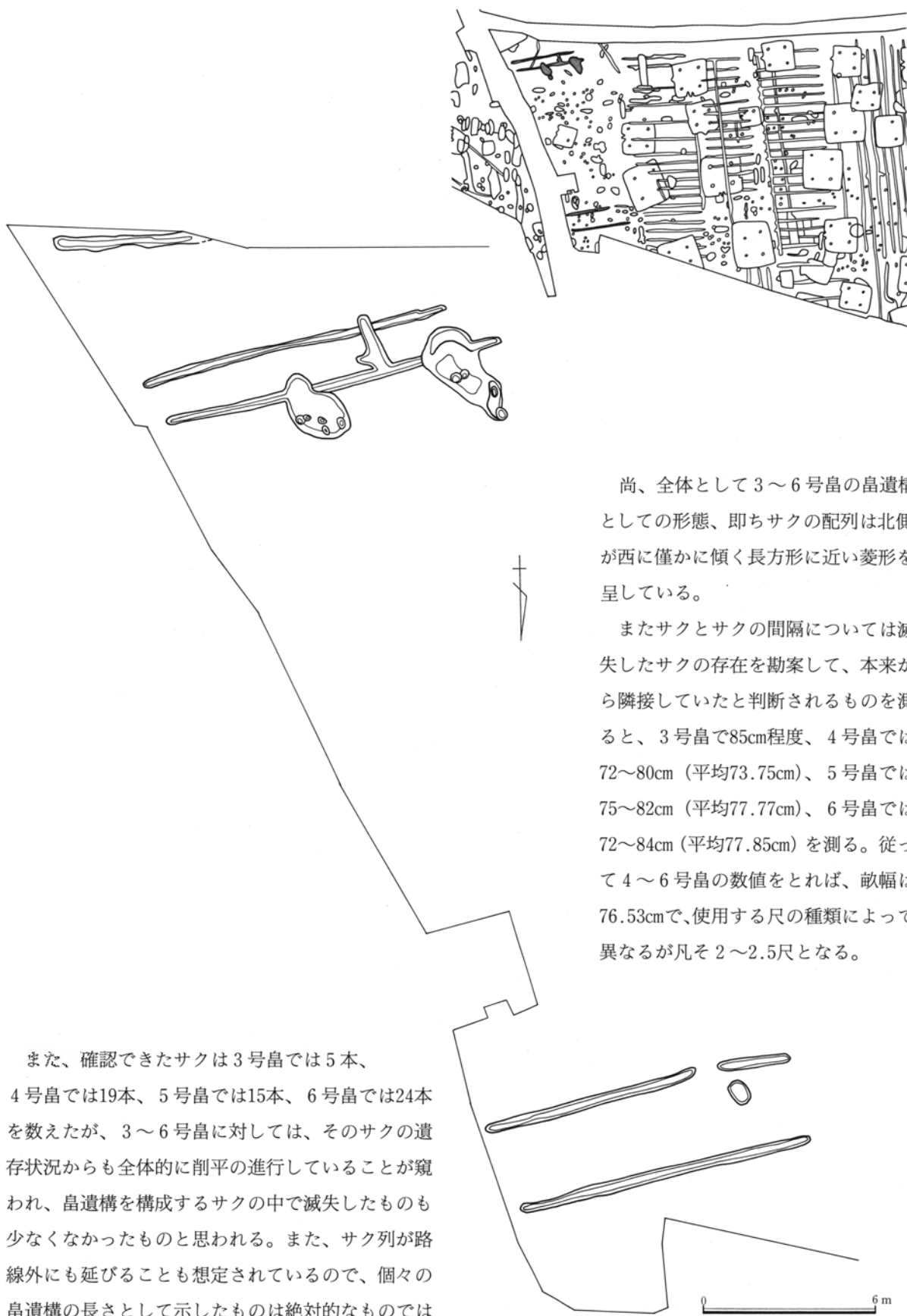
〔4号畠〕 幅：11.6m 長さ：35.1m

〔5号畠〕 幅：8.8m 長さ：23.3m

〔6号畠〕 幅：12.2m 長さ：43.6m

構造 3・4・5・6号畠は何れも幅十数cm～30cm程の、一部に鋤痕を残す東西走行の浅いサク遺構の集合体である。

サクの長さについては、3号畠では10.4～12m程、4号畠では10.5～11.6m以上、5号畠では8.0～8.8m、6号畠では10.9～12.2mを測り、各畠遺構の全体としての幅に若干の相違を生じさせている。

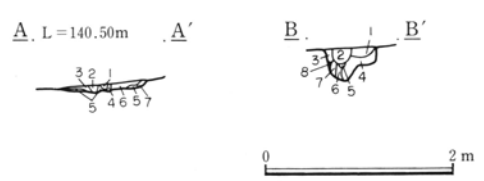
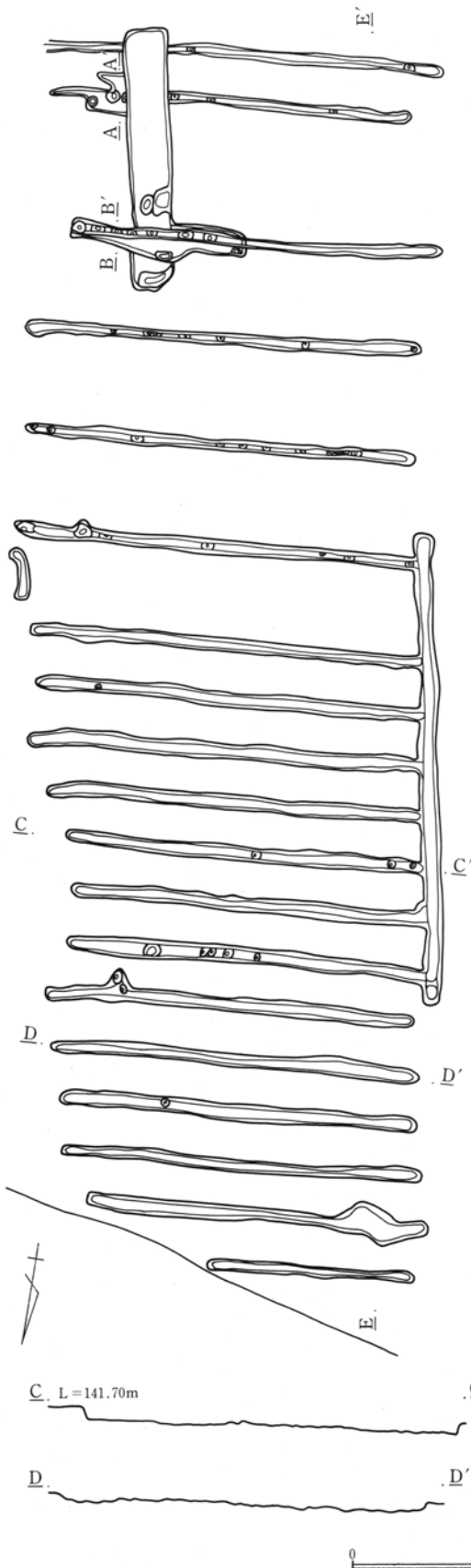


尚、全体として3～6号畠の畠遺構としての形態、即ちサクの配列は北側が西に僅かに傾く長方形に近い菱形を呈している。

またサクとサクの間隔については滅失したサクの存在を勘案して、本来から隣接していたと判断されるものを測ると、3号畠で85cm程度、4号畠では72～80cm（平均73.75cm）、5号畠では75～82cm（平均77.77cm）、6号畠では72～84cm（平均77.85cm）を測る。従って4～6号畠の数値をとれば、畠幅は76.53cmで、使用する尺の種類によって異なるが凡そ2～2.5尺となる。

また、確認できたサクは3号畠では5本、4号畠では19本、5号畠では15本、6号畠では24本を数えたが、3～6号畠に対しては、そのサクの遺存状況からも全体的に削平の進行していることが窺われ、畠遺構を構成するサクの中で滅失したのも少なくなかったものと思われる。また、サク列が路線外にも延びることも想定されているので、個々の畠遺構の長さとして示したものは絶対的なものではないものと思われる。

第611図 3号畠



[A-A'セクション]

4号畠サク遺構覆土

1：暗黄褐色土：締まり良く粘性無し。ロームブロックを含む。 2：暗褐色土：締まり弱く粘性僅か。ロームを少し含む。

溝覆土・地山層等

3：暗黄褐色土：締まりあるが粘性無し。ロームを少量、炭化物僅かに含む。 4：暗褐色土：締まり・粘性無し。ロームを含む。樹木の痕跡。 5：暗黄褐色土：締まり良く粘性僅か。地山のローム層。 6：褐色土：締まり良く粘性無し。ロームを全体に含む。 7：暗褐色土：締まり弱く粘性無し。ロームを少し含む。

[B-B'セクション]

4号畠サク遺構覆土

2：褐色土：締まりあるが粘性無し。ロームを層状に2面含む。ローム粒少量含む。 3：褐色土：締まりあるが粘性無し。ロームを含む。 4：暗褐色土：締まり弱く粘性無し。ローム僅かに含む。 5：暗褐色土：締まり・粘性無し。2層土と4層土の混土。 6：暗褐色土：締まり・粘性無し。ローム少量含む。 7：黄褐色土：締まり弱く粘性僅か。ロームかなり多く含む。

溝覆土

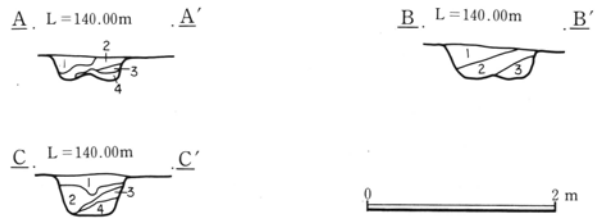
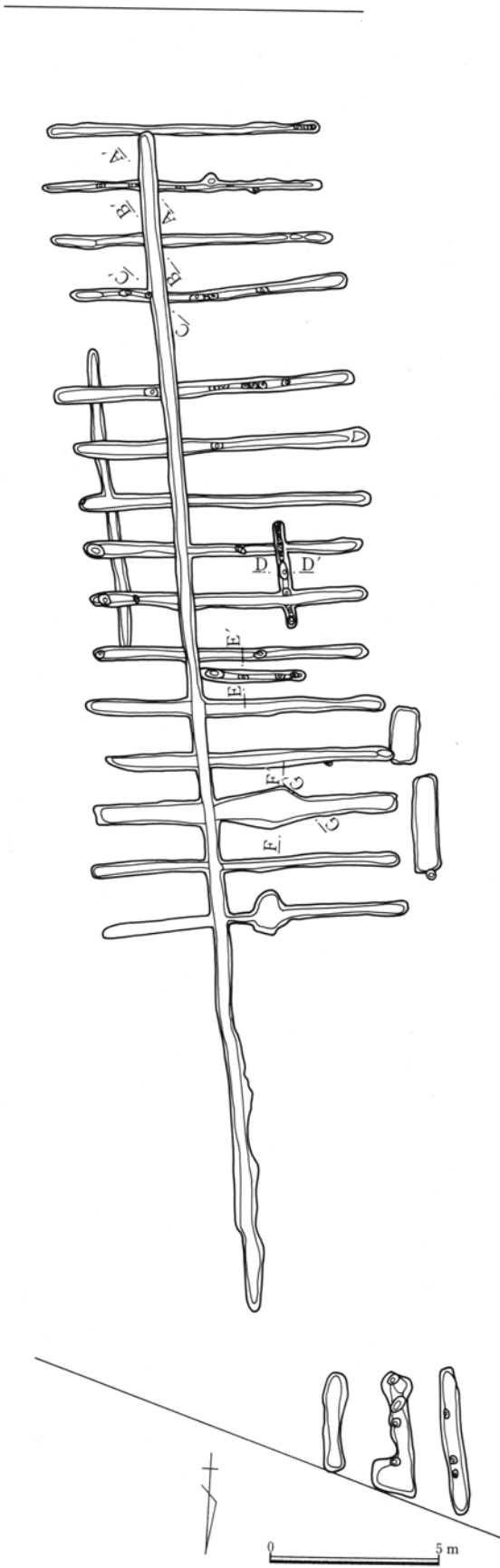
1：褐色土：締まりあるが粘性無し。ロームを少量含む。

地山層

8：黄褐色ローム：締まり良く粘性弱い。

E. L=141.40m

第612図 4号畠



〔A-A'セクション〕

現代耕作溝覆土

1：灰黄褐色砂質土：As-A含む。 2：にぶい黄褐色土：ローム漸移層土主体。As-A含む。 3：黄褐色土：ローム漸移層土と黄橙色ロームの混土。 4：暗灰黄色土：ローム漸移層土に現耕作土入る混土主体。

〔B-B'セクション〕

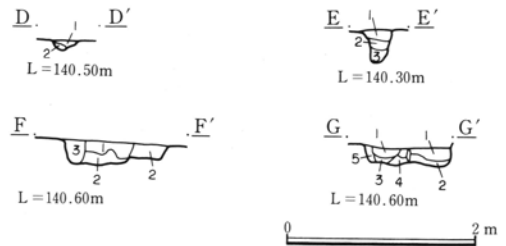
現代耕作溝覆土

1：にぶい黄褐色土：ローム漸移層土に現耕作土混入。 2：A-A'-3層に同じ。 3：褐色土：灰黄色砂質土（現耕作土）主体。

〔C-C'セクション〕

現代耕作溝覆土

1：明黄褐色土：黄橙色ローム主体。As-A混入。 2：A-A'-2層に同じ。 3：A-A'-3層に同じ。 4：灰黄褐色土：現耕作土主体。



〔D-D'セクション〕

耕作溝覆土

1：灰黄褐色土：As-Aとローム混入。 2：オリーブ褐色土：ローム漸移層土に黒色土とローム入る混土。

〔E-E'セクション〕

耕作溝覆土

1：にぶい黄褐色ローム：As-A混入。 2：暗褐色土：ローム漸移層土。As-A多量に混入。 3：黄橙色ローム主体。

〔F-F'セクション〕

5号畠サク遺構覆土

1：灰黄褐色砂質土：As-A等混入。現耕作土に同じ。 2：褐色土：As-Aを少量含むローム漸移層土主体。

土坑覆土

3：にぶい黄褐色土：ロームの入るローム漸移層土。

〔G-G'セクション〕

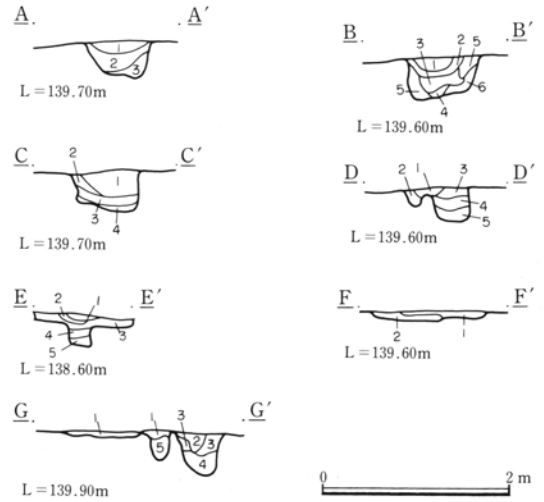
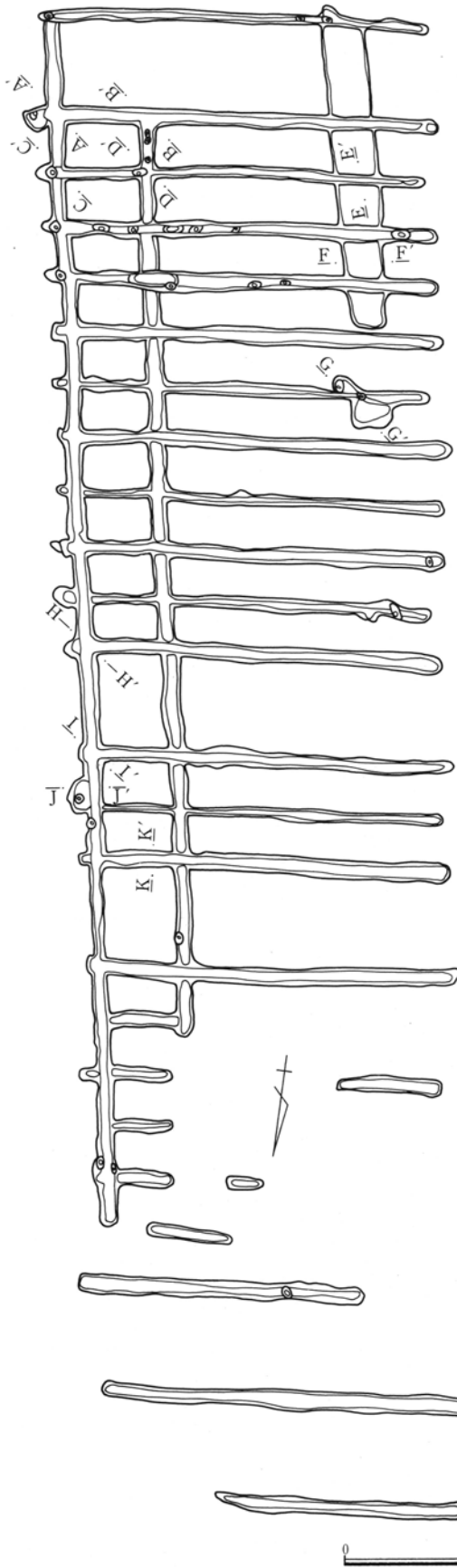
5号畠サク遺構覆土

1：灰黄褐色土：F-F'-1層に似る。 2：にぶい黄褐色土：ロームと1層土の混土。 3：暗褐色砂質土主体。As-A混入。 4：黄褐色土：ロームとローム漸移層土の混土。

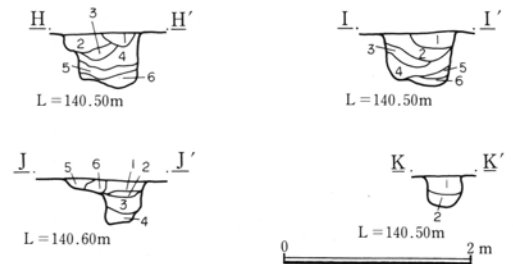
土坑覆土

5：暗褐色土：ローム漸移層土主体。

第613図 5号畠



- 〔A-A'〕 現代耕作溝 1：黄色土。 2：にぶい黄褐色土：As-A多く混入。 3：黄橙色土。
- 〔B-B'〕 耕作溝 1：にぶい黄褐色土主体。 6号畠サク 2：灰黄褐色砂質土主体。 3：黒褐色砂質土主体。 4：5+6層土の混土。 竪穴住居 5：黄褐色土/6：オリーブ褐色土。
- 〔C-C'〕 現代耕作溝 1：黄褐色土主体。 2：黄橙色土主体。 3：暗褐色土主体。 4：黄褐色土主体。
- 〔D-D'〕 現代耕作溝 1：灰黄褐色砂質土主体。 2：黄橙色ローム主体。 6号畠サク 3：黄褐色土主体。 4：3+5層土。 5：暗オリーブ褐色砂質土主体。
- 〔E-E'〕 現代耕作溝 1：黄褐色土主体。 2：暗灰黄色土。 3：灰黄褐色砂質土主体。 6号畠サク遺構覆土 4：黄色ローム主体。 5：暗灰色土主体。
- 〔F-F'〕 耕作溝覆土 1：E-E'-3層。 2：暗褐色土：E-E'-5層に似る。
- 〔G-G'〕 6号畠サク 1：暗褐色土主体。 As-A多く含む。 5：黄褐色ローム主体。 ピット覆土 2：にぶい黄褐色土。 3：暗褐色土主体。 4：黒褐色土主体。
(6号畠サク・耕作溝・現代耕作溝覆土にはAs-Aが散見される。)



- 〔H-H'〕 現代耕作溝 1：にぶい黄褐色土主体。 As-A多し。 2：にぶい黄褐色土主体。 3：褐色土主体。 4・5：暗褐色土主体。 6：明黄褐色ローム主体。
- 〔I-I'〕 現代耕作溝 1：黄褐色土主体。 As-A多し。 2・6：明黄褐色ローム主体。 3：にぶい黄褐色土主体。 4：暗褐色土主体。 5：黒褐色土主体。
- 〔J-J'〕 現代耕作溝 1：明黄褐色土主体。 2：灰黄褐色砂質土。 3：明黄褐色土主体。 4：暗褐色土主体。 落ち込み 5：オリーブ褐色土主体。 6：にぶい黄褐色土主体。
- 〔K-K'〕 1：褐色土主体。 2：黒褐色土主体。

第614図 6号畠

2号炭窯（昭和時代戦後復興期、第615～616図、図版221）

概要 本炭窯はF区東南部、T字路の交差点北西に近接して位置する炭窯跡である。

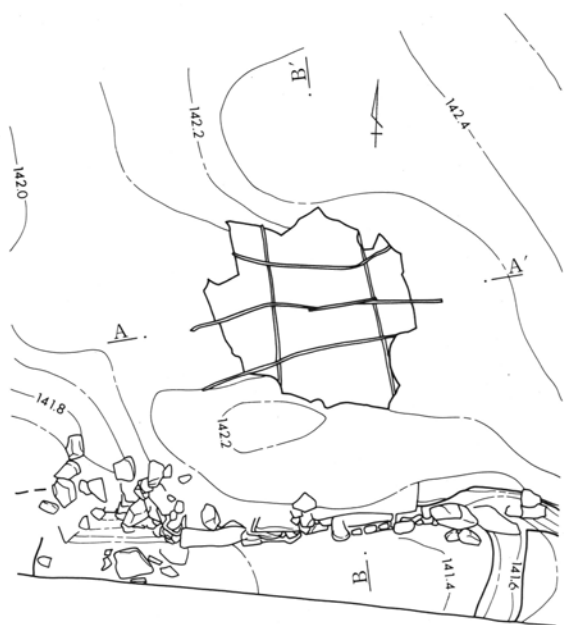
遺構は矢田川に向かう道路の北側の炉端の西側に向かって緩やかに傾斜する地点に立地し、調査段階に於いても現認することができたのである。その遺存状況は比較的良好ではあったが、天井部は一部陥没して開口した状態で見られた。

本炭窯はH-181号住居の上に造られており、一部これを壊している。またH-181号住居との識別が難しい部分もあった。

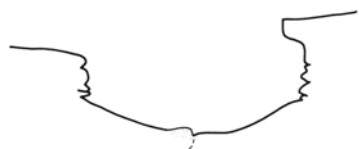
さて、上述のように本炭窯の天井部は本遺跡の調査着手時点に於いても開口した状態にあったのであるが、この部分には格子状に組まれた鉄筋が露出して見られていた。また、焚き口と思われる部分にはブロックも見られ、この遺構が現代のものであることは確認されていたが、地元住民の話では終戦後によく使用された炭窯ということである。この遺構は新しい時期のものではあるが、今日では珍しい遺構であるので報告したいと思う。

尚、本炭窯からは熱変成岩の剥片1点が出土したのみであり、当然のことではあるが製品である炭材等も認められなかった。

規模 幅：342cm 奥行き：322cm 高さ：100cm
燃烧部 幅：240cm 奥行き：250cm 高さ：83cm以上
入り口部 幅：399cm 奥行き：68cm 高さ：72cm
焚き口部 幅：42cm 奥行き：80cm 高さ：72cm
煙道部 幅：48cm 奥行き：71cm

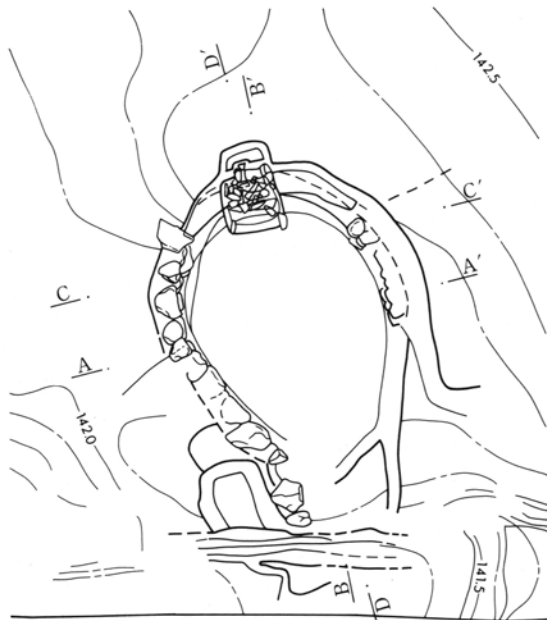
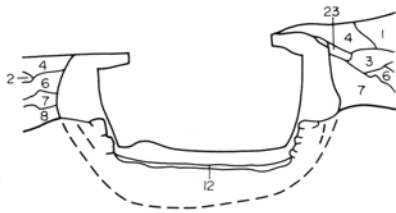
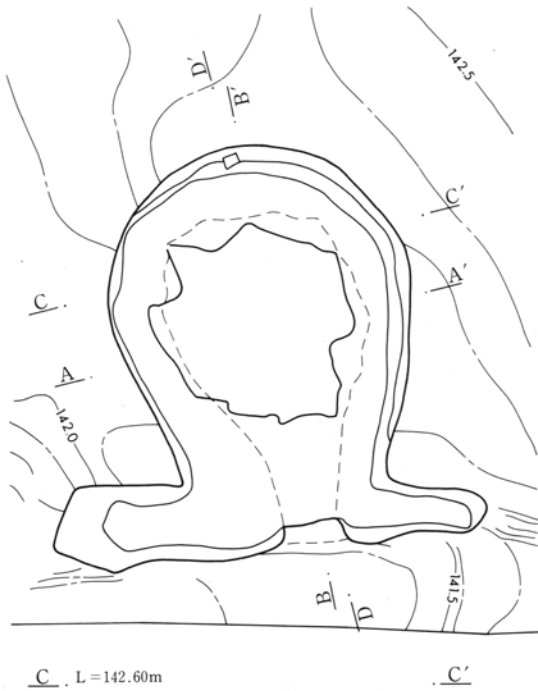


A . L=142.50m . A'

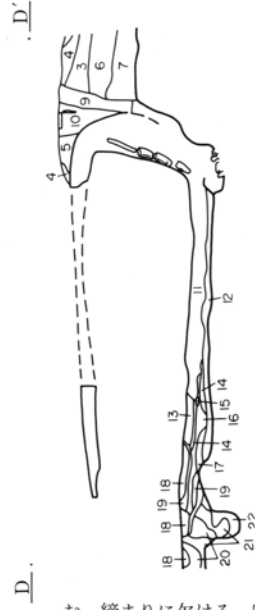


0 2 m

第615図 2号炭窯（1）



第616図 2号炭窯 (2)



2号炭窯掘り方覆土

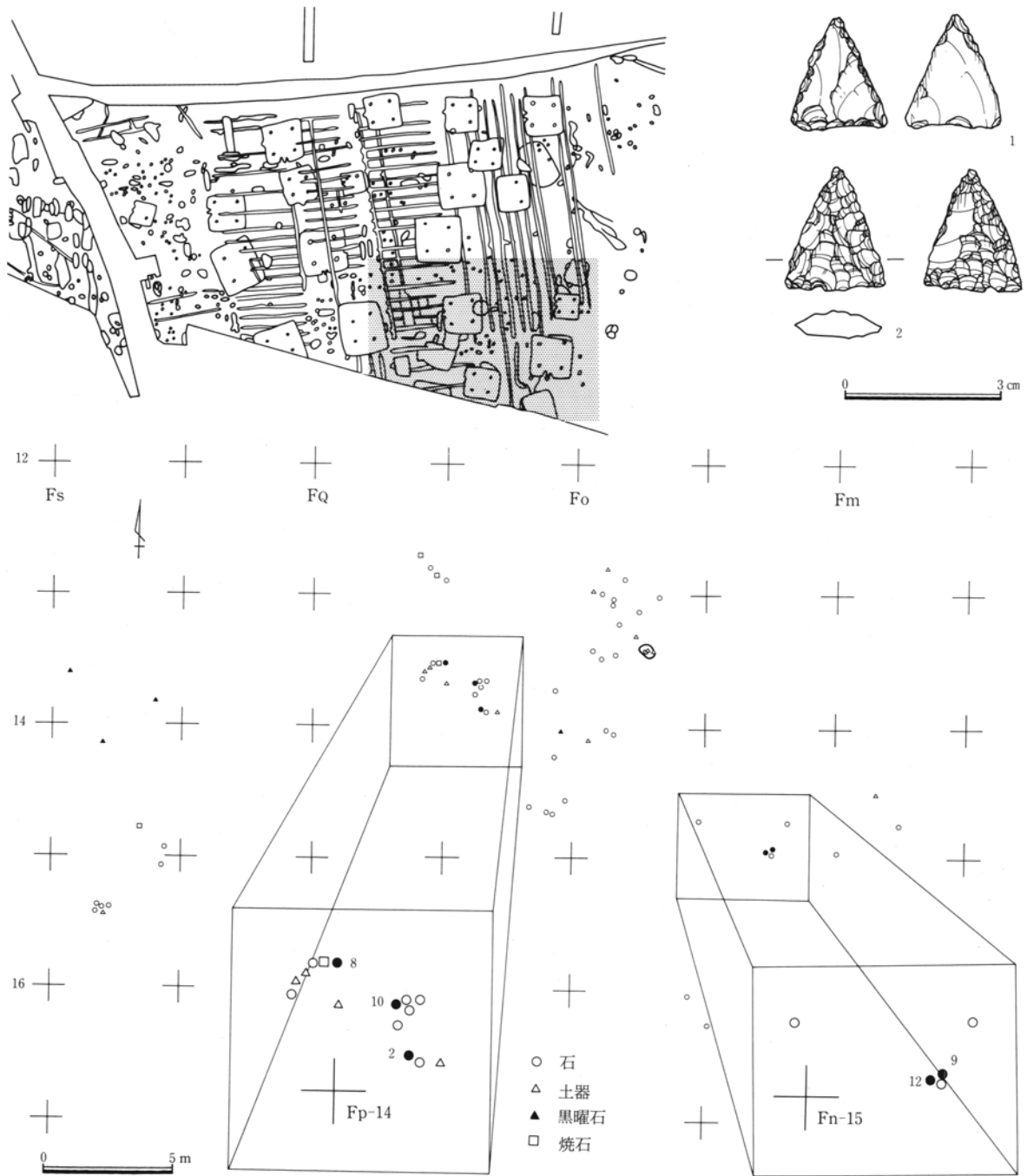
1：暗黒褐色土：As-A多量に混入し締まりに欠ける。
 2：暗褐色土：As-A・炭化物主体。3：暗褐色土：As-A主体。炭化物・焼土少量混入。
 4：暗赤褐色土：焼土主体。As-A・炭化物多量に含む。5：暗黒褐色土：As-A極めて多量、炭化物少量含む。6：暗褐色土：As-A・褐色土粒少量含む。7：暗褐色土：暗黒褐色土と暗褐色土の混土。
 8：暗褐色土：黒褐色土微量混入。9：暗赤黒褐色土：As-A・炭化物含み、全体に焼土化する。10：黒色土：ヤニ附着。堅く締まり黒化する。11：灰黒色土：炭化物中心。焼土微量混入。12：暗褐色土：地山層。13：暗赤褐色土：くすんだ赤褐色土と炭化物の混土。14：黒色土：炭化物と黒色土の混土。15：灰白色土：灰白色の灰層中心。16：灰赤色土：堅く締まった赤褐色土と灰白色土の混土。17：赤褐色土：きれいな焼土。焚口下部に当たる。18：暗黒褐色土：褐色土粒微量に含む。締まりに欠ける。窯廃棄後の埋没土。19：灰白色土主体。焼土微量に混入。20：暗黒褐色土：黒色土・褐色土微量に混入。21：暗黒褐色土：褐色土ブロック少量混入。22：明褐色土：黒色土微量に混入。23：赤褐色土：焼土ブロック。炭化物・暗黒褐色土少量混入。

構造 上述のように本炭窯は緩斜面に設置されるが、主軸を北側に向け、Ω字状に削って平坦面を造っている。

燃焼部は楕円形を呈し、底面は平坦である。壁面は自然石を数段積んで土留めとし、垂直に立ち上がっているが、奥壁には底面より十数cmの高さの位置に幅141cm、奥行き18cmのテラスが設けられている。天井部は土壌によるが、頂部には格子状に組んだ鉄筋で補強が施されている。

煙道は燃焼部の奥壁中央に設けられている。煙道の基底部には底面より8cm程の深さに径48×46cmの小礫を投入した方形プランの小土坑が掘削され、その奥側には床面より27cmの高さに幅32cm、奥行き9cmの小さいテラスを造っている。そして、こうした構造の両側に礫を積んで壁面を造り、上面に礫を幾つか渡すなどして蓋としている。

入り口部は燃焼部の底面と同レベルに短冊形の掘り残しを設け、その上に礫やブロックで石垣様の構造を造っている。焚き口部の底面・壁面・天井の構造は燃焼部に近似していた。



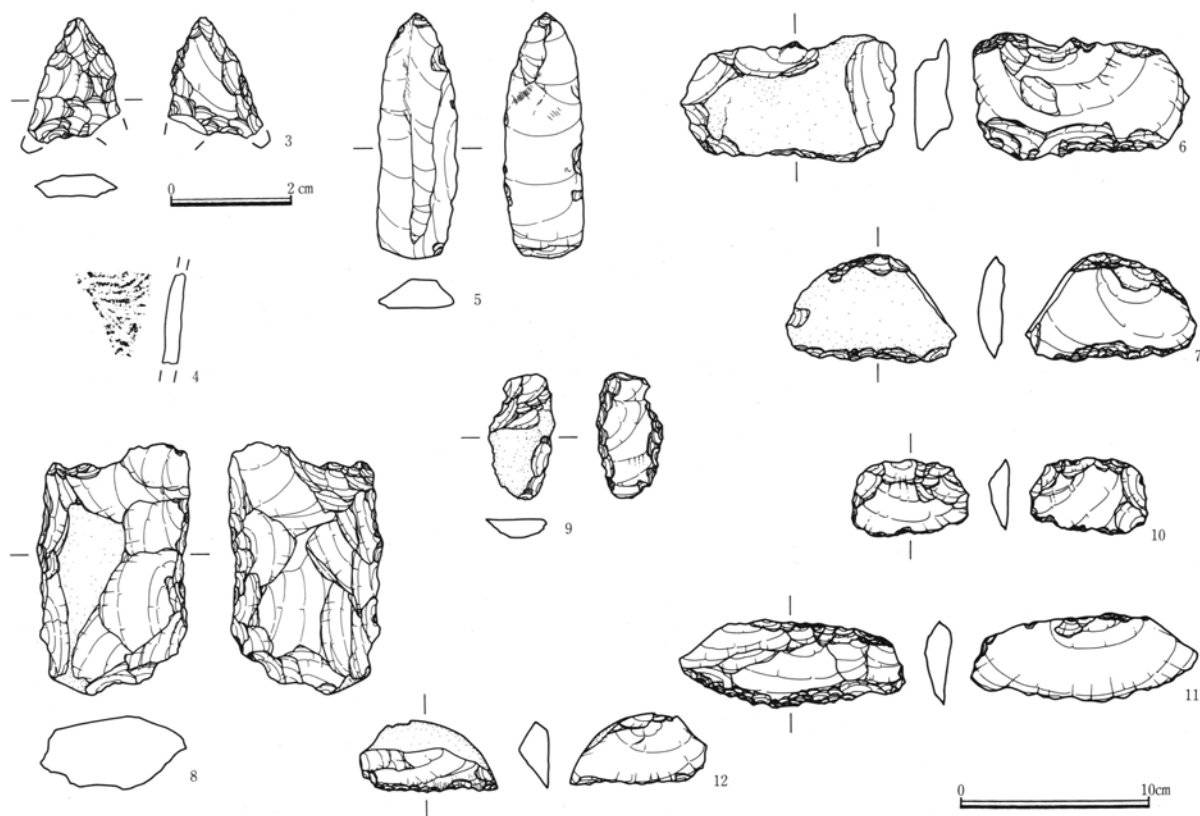
第617図 F区縄文包含層及び出土遺物(1)

縄文包含層及びグリッド取り上げの縄文時代の遺物(第617~618図, 図版221・248)

概要 F区の縄文時代以降の遺構の調査段階に於いて、F区西部の北端寄りの一角に縄文時代の遺物包含層の存在が想定されていた。そこで縄文時代以降の埋蔵文化財調査の最終段階に於いて縄文時代の遺物包含層の有無の確認を試みるため、確認面直下の掘削を試みたのであるが、その結果、Fm~Fo-13グ

リッドを中心とする、F1~Fr-12~16グリッド付近に土器・石器片等の遺物の出土を見たのである。

しかし、その後の処理の失敗から、当該包含層出土遺物と上位の確認面等のグリッドでの取り上げ遺物とを併せてしまったため、縄文包含層の遺物の特定ができなくなってしまった。従って、第167~168



第618図 F区縄文包含層出土遺物(2)

図に掲載した遺物は、グリッド毎で取り上げた遺物の中で、縄文時代の遺物として判断されたものを一括して図示したものである。尚、調査段階に於いてこの包含層は縄文時代早・前期の遺物包含層として把握している。

当該地区のグリッドで取り上げられた遺物のうち縄文時代の所産と判断された遺物には、前期の縄文土器片(4)が見られた他、石鏃(1~3)、石槍(5)、石匙(9)、スクレイパー(7,10~12)、不定形石器(6,8)が見られた。

F区に於ける遺構外出土の遺物(第619~620図、図版221・248~251・254)

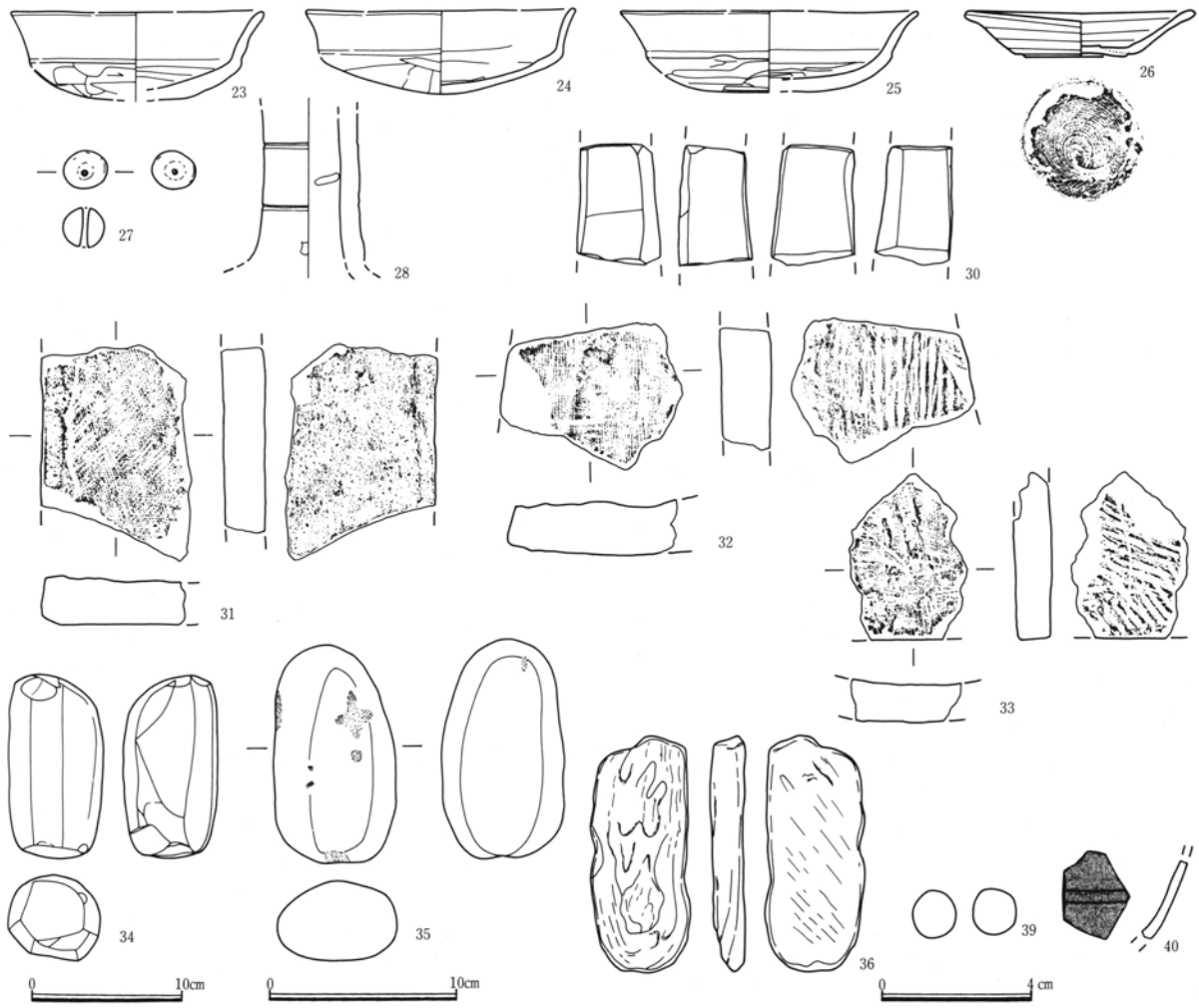
概要 F区では遺構及び上述の縄文包含層等で取り上げた以外にも、多数の遺物の出土が見られた。F区の出土遺物は、同じように竪穴住居を中心とする遺構の分布の見られたB~E区の遺物の出土量に対して、竪穴住居の軒数に鑑みればかなり多い遺物の出土が見られた。更に、耕作遺構が深く入っていたため、これに巻き込まれた遺物も量的に少なかった。

従って、F区の遺構外の出土遺物も量的に少ないものであったのであるが、この中には前期と中期の縄文土器の破片(1,2)、石鏃(4,5)、スクレイ

パー(6,8~12,15)、不定形石器(13,14,18)、打製石斧(16,17,19)、磨石(20,21,34,35)、石皿(22)、フレイク(7)等の縄文時代の遺物が見られた他、赤井戸式の弥生土器片(3)。6世紀後半~7世紀前半期の土師器坏(23,24,25)や、西暦800年前後と西暦900年前後の女瓦(32,33,31)、10世紀前半期の土師器皿(26)、土製小玉(27)、須恵器長頸壺(28)、砥石(30)などの古墳時代後期から平安時代にかけての諸々の遺物。そしてこも編み石(36)なども見られ、或いは鉄砲玉(39)や18世紀前半の肥前の陶器碗(40)など中近世の遺物の出土も見られた。



第619図 F区遺構外出土遺物 (1)



第620図 F区遺構外出土遺物(2)

第12節 G区の概要

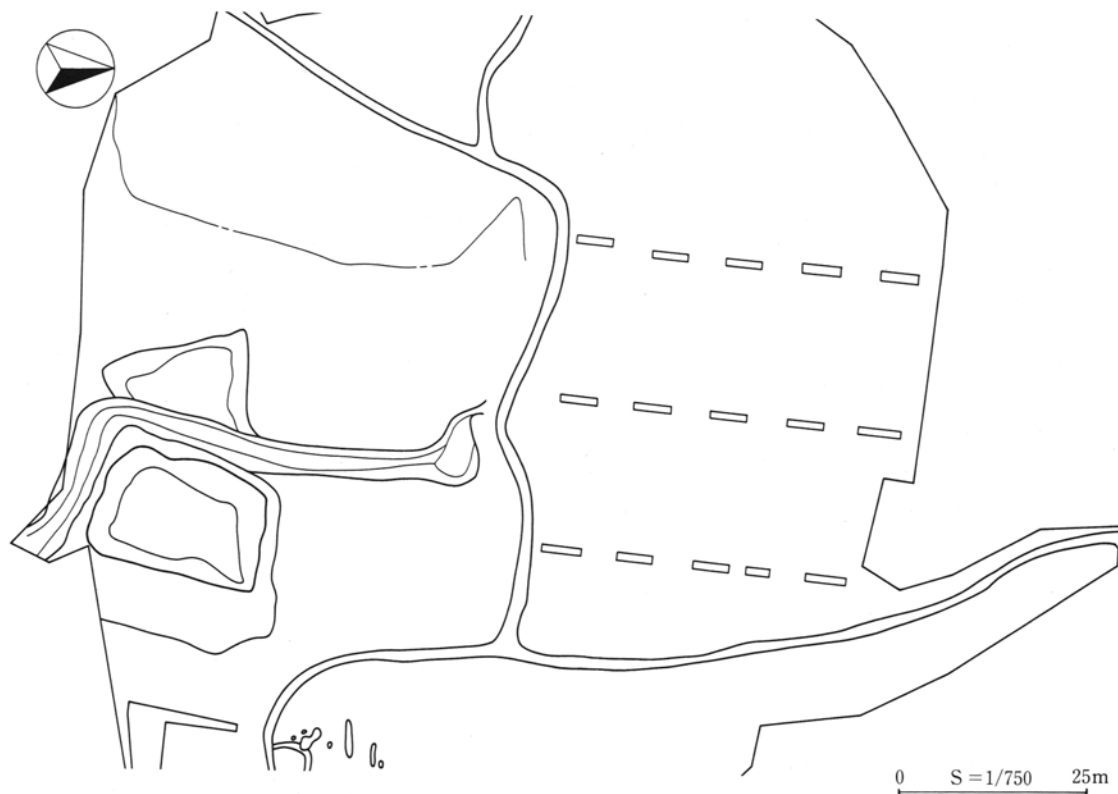
G区は本遺跡西部に位置しており、水田地帯である矢田川右岸の沖積地と、本遺跡の殆どを占める台地部の西端、及びこの台地と沖積地をつなぐ斜面部からなる地区である。

上述のようにG区はその東端に於いて本遺跡の台地部分の一部を含むのであるが、このうち南側の一画については前述の第10節(「F区南部の調査」、554頁)に、隣接するF区のものとして併せて報告している。此の一画については既に述べたようにF区の南側に西走する沢の氾濫の痕跡が確認されただけで、特段の遺構を見ることはできなかった。また、中・北部に所在する一画については崩落や攪乱等もあって前説(第11節)に報告した26号溝(651頁)の一部など、若干の溝や土坑、ピット様の掘り込みを確認できたに過ぎない。

さて、F区の南側に西走した沢は、G区の沖積地

部分に入ると水路状となり(以下「水路」とする)、間もなく流路を北に変じた後、区の中程でクランク状に西、更に北に折れて区の北西で矢田川に流れ込む。G区の沖積地の遺構は、この水路の上流部(南東部)東側、台地と水路に挟まれた一画に江戸時代に造られた溜池が残されていた以外、遺構の有無を含めその概要は把握されていなかった。そこで、溜池の水路を挟んで西側の地域と北部の地域に試掘調査を施した。その結果、溜池の西側には溜池に関連した盛土、As-Aに絡む江戸時代後期の水田面が発見され、前述の溜池と併せて面的調査を施した。この水田面の下層からは、As-Bの絡む平安時代後期の水田面が発見調査された。この他、平安時代以前の所産かと思われる土坑1基が調査されている。

尚、区北部については試掘調査を施したが、次節に述べるように遺構、その他は確認できなかった。



第621図 G区全体図

第13節 G区北部の試掘調査

前節に述べたように、G区北部の地域に対しては遺構確認のための試掘調査が行われた。

試掘調査は、地形に合わせて北北東に軸を取って概ね20m程隔てて平行に並ぶ、西から東にA列・B列・C列とした3本のラインを設定し、このライン

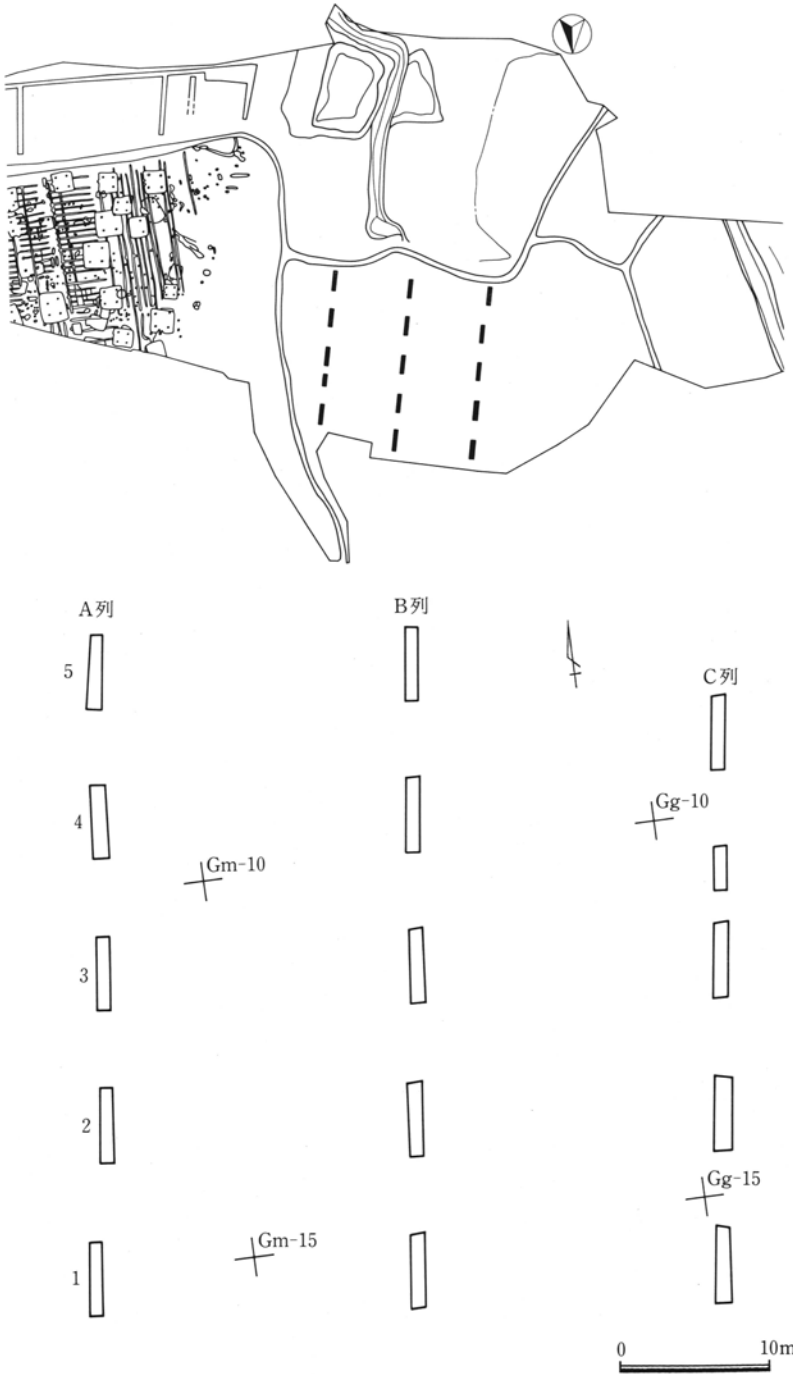
の東側に長さ5m、幅1mのトレンチを南から約5mおきに5本設定して掘削したものである。尚、このトレンチはA・B・C列毎に南から1～5列として表記した。また、トレンチの掘削は表層よりローム若しくは標準XI層に相当する粘質土まで行った。

試掘調査の結果、A・B列に於いては標準XI層に相当すると思われる粘質土の上に酸化鉄の凝縮層を挟んで河川氾濫層と想定される土壌が堆積し、耕作土が乗ることが確認され、C列に於いてはAs-YPを含む河川氾濫層と思われる土壌の上に耕作土の乗ることが確認された。

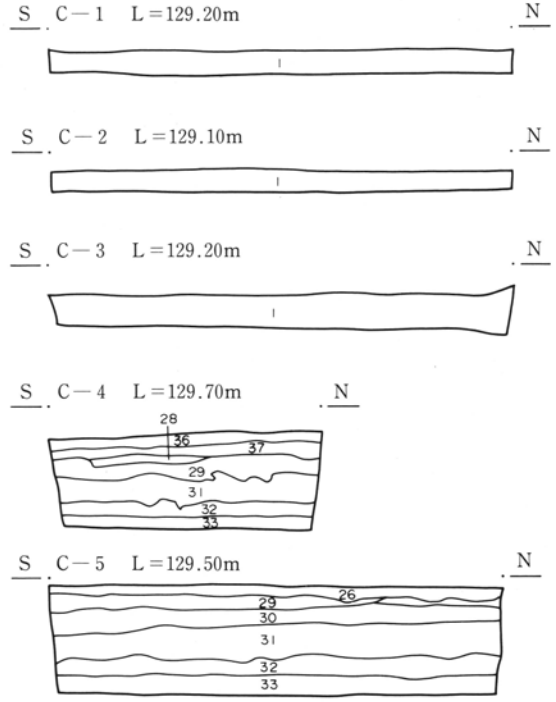
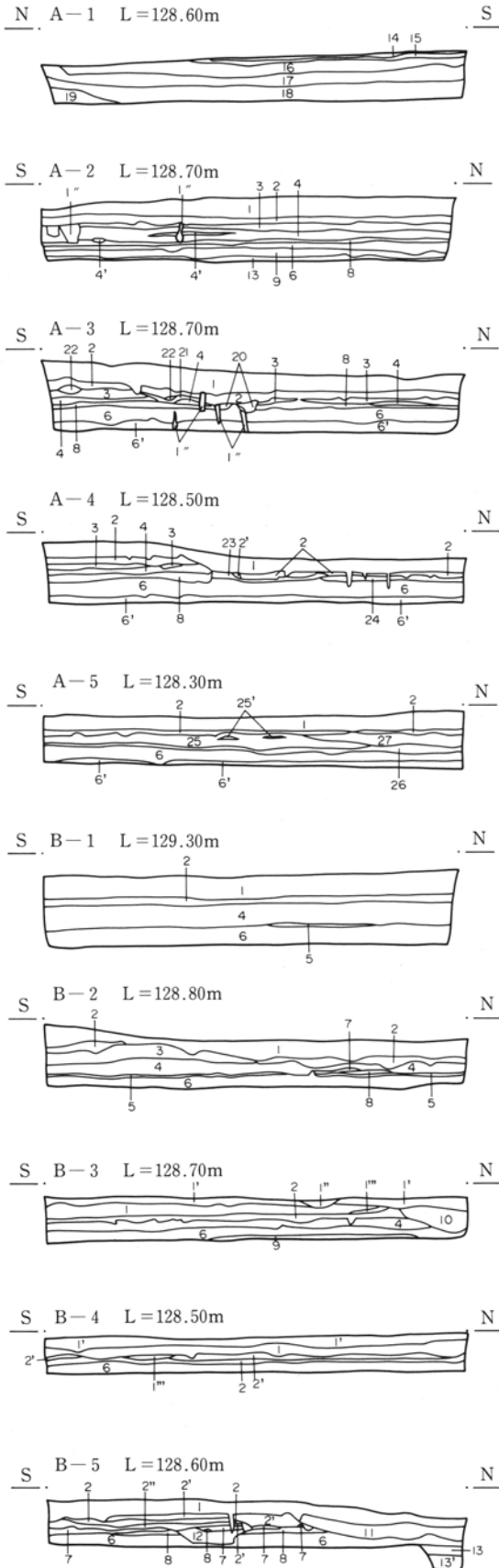
全体として、G区北部の土壌の堆積状況は、基盤層と思われる粘質土（層群）が矢田川に向かって傾斜し、河川氾濫によって生ずる堆積層がそれを覆い、その上に水田の耕作土が造られているのである。尚、G区で最終確認として行った深掘りも、付近の堆積層は礫を含む水性堆積或いは河川氾濫によると思われるローム若しくは粘質土によって形成されていることが確認されている。

表層及び表層下の層にはAs-Aを多く含む土層が見られるが、後述するように南半部で見られたような水田面としては確認されなかった。また、As-Bは全く確認されなかった。

このようにG区北半部に於いてはAs-A或いはAs-Bに伴う水田遺構（水田面）は確認されなかった。また、上層に於いては新しい段階の掘削の可能性を持つ落ち込みが土層断面に現れていたが、明瞭な遺構として認識することはできなかった。



第622図 G区北側試掘トレンチ（1）



現耕作土

1：暗褐色土：As-A少量鋤込む。(1'：締まり無し。 1''：樹木の痕跡。 1'''：1層に比しAs-A多い。) 2'：暗褐色土：1層土と2層土の混土。 36：暗褐色土：As-A含む。

As-A混入層

2：暗赤褐色土：As-A主体。上層中心に酸化鉄のため赤色化。(2''：酸化鉄の凝集強い。) 12：灰褐色土：As-A多く含む。 19：暗赤褐色土：As-A多く含む、酸化鉄により赤色が強い。 20：暗赤褐色土：As-A多く含む。 22：暗褐色土：As-A少量含む。 28：暗褐色土：As-A含む。 37：暗褐色土：As-Aやや多く含む。

暗褐色土・黒褐色系の土壌

10：暗褐色土：小礫含む。 11：暗褐色土。 14：黒褐色土：炭化物少量含む。 15：黒褐色土。 16：暗褐色土：細砂少量含む。 17：黒褐色土：細砂含む。 18：黒褐色土：小粒の砂礫含む。 29：黒褐色土：黄灰色・青灰色粘土含む。 30：暗褐色土：黄灰色・黒褐色土粘土含む。 31：暗褐色土：砂多く含む。 32：黒褐色土：As-YP少量含む。 33：黒褐色土A：As-YP含む。

灰褐色・黄褐色系の土壌

3：灰褐色土：4層に似るが赤色が強い。 4：灰褐色土：酸化鉄により赤色掛かる。上部ほど赤色が強い。(4'：酸化鉄の凝集の強い部分。) 6：灰褐色土：洪水層か。細砂含む。(6'：黄色粘土入る。) 8：灰褐色土：6層土に似るが全体に赤色掛かる。細砂含む。 9：黄褐色土：6層土と黄色粘度層の混土。 21：黄褐色土：4層に似るが酸化鉄により赤黄色強い。 23：暗黄褐色土：6層に比し締まり良い。 24：黄褐色土：細粒。 25：灰褐色土：細砂含む。やや赤色掛かる。(25'：赤色掛からない部分。) 26：灰褐色土：強く赤色掛かる。 27：灰褐色土：やや赤色掛かる。

酸化鉄層

5：赤褐色土：酸化鉄凝集層。 7：赤褐色土：酸化鉄凝集層。

粘質土層

13：灰色粘土：上端黄色掛かる。(13'：13層土の黄色掛かる部分。)

G区北部の土壌

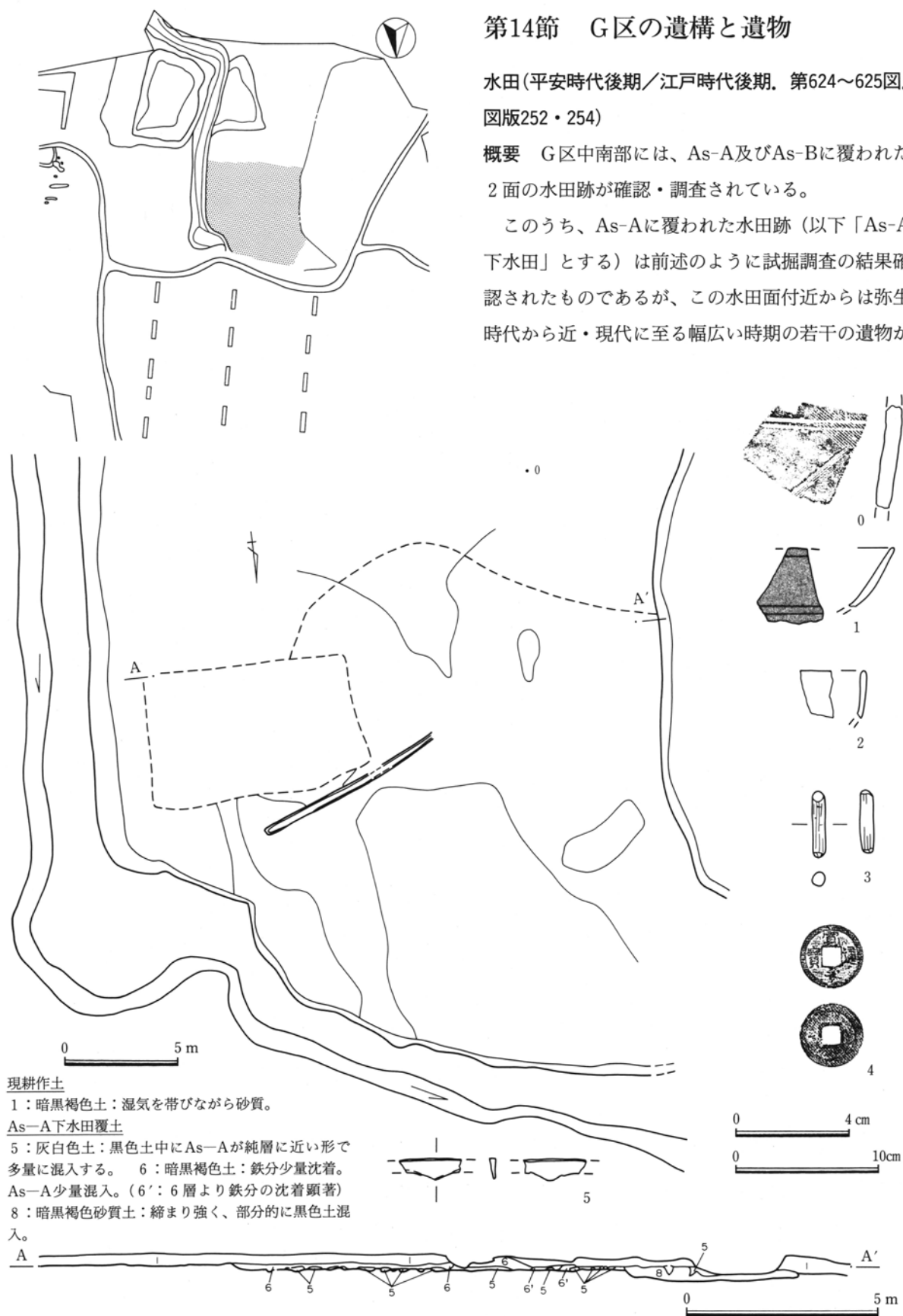
第623図 G区北側試掘トレンチ(2)

第14節 G区の遺構と遺物

水田(平安時代後期/江戸時代後期. 第624~625図, 図版252・254)

概要 G区中南部には、As-A及びAs-Bに覆われた2面の水田跡が確認・調査されている。

このうち、As-Aに覆われた水田跡(以下「As-A下水田」とする)は前述のように試掘調査の結果確認されたものであるが、この水田面付近からは弥生時代から近・現代に至る幅広い時期の若干の遺物が



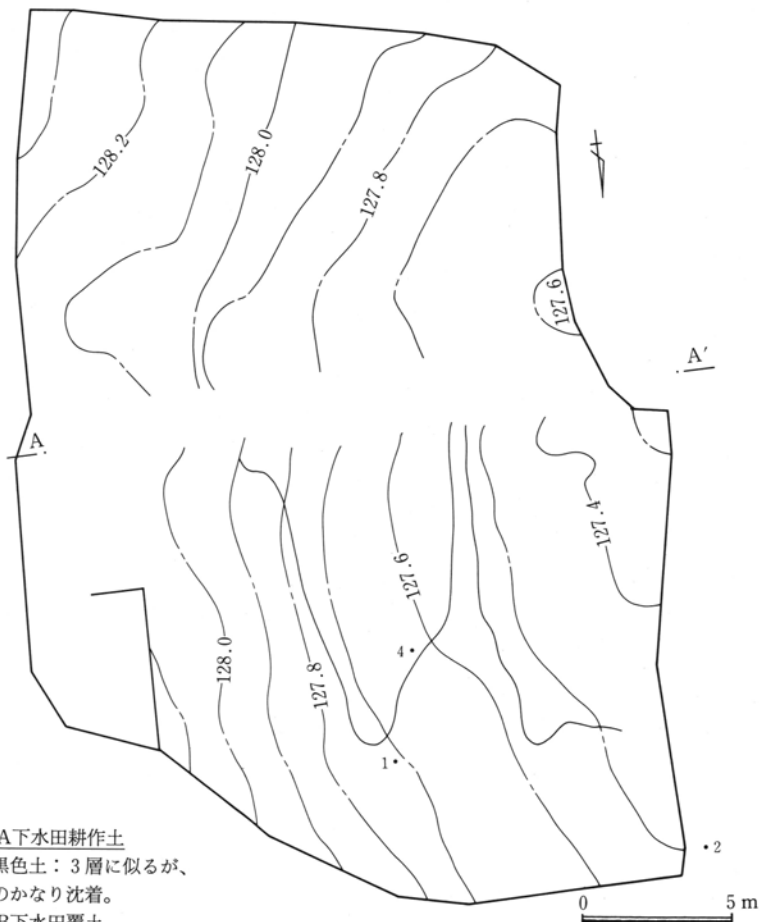
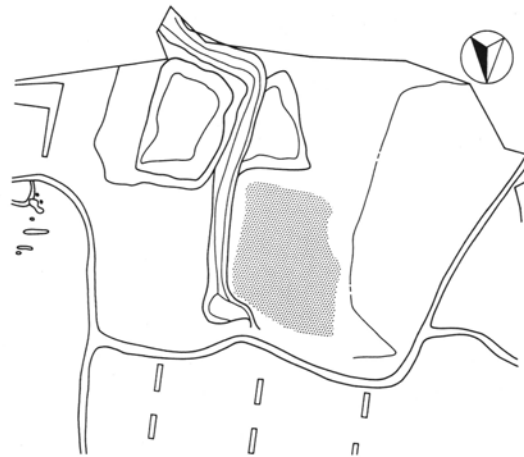
第624図 As-A下水田及び出土遺物

出土しているが、この中には軟質陶器の鉢(0)・陶器碗(1,2)、石墨かと思われるもの(3)、寛永通寶(4)、用途不明の鉄片などの出土も見られたが、概ねAs-Aの降下した天明3(1783)年という時間に対し齟齬は見られない。

As-A下水田の水田面の土壌(7層土)は水田土壌と認識されたが、畦畔は不明瞭であった。畦畔についてはAs-A下水田の畦畔と現代の水田の畦畔との位置的な一致の可能性が想定されるが、As-A下水田面の確認段階では現代水田の畦畔は既に掘削してしまっており、また土層断面の観察も該当位置が現代の水田面形成前に攪乱(8層)を受けていたため、その可否を確認することはできなかった。

一方、天仁元(1108)年降下とされるAs-Bに覆われた水田跡(以下「As-B下水田」とする)は、As-A下水田の下位に確認されたAs-B層の下位面の広がりについて確認されたものである。

As-B下水田の水田面の土壌(15層土)もAs-A下水田の耕作土である7層土と同様水田土壌と認識されたが、水田面は現況ではやや西に向かって傾斜する傾向にあった。また、As-A下水田同様に畦畔は不明瞭であった。



As-A下水田耕作土

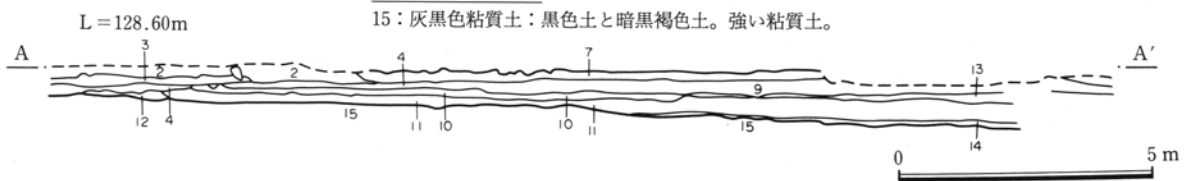
7：黒色土：3層に似るが、鉄分のかなり沈着。

As-B下水田覆土

2：暗黒褐色粘質土：1層より褐色粘質：1層より褐色。鉄分かなり沈着。 3：黒色粘質土主体。 4：黒色土主体。鉄分沈着多し。 9：暗黒褐色強粘性土主体。 10：灰黒褐色土強粘性土。 11：灰黒色強粘性土。 12：灰黒色土主体。相当量の鉄分沈着。 13：灰暗褐色土主体。 14：灰黒色砂質土：As-B層。暗黒褐色土若干混入。

As-B下水田耕作土

15：灰黒色粘質土：黒色土と暗黒褐色土。強い粘質土。



第625図 As-B下水田

第3章 発見された遺構と遺物

尚、科学分析所見（836～841頁、第4章第3節）によれば、As-B下水田の耕作土からAs-A下水田の耕作土、即ち平安時代後期から江戸時代後期にかけて継続して稲作の行われたことが想定されている。

規模 【As-A下水田】 確認範囲 東西：約17.8m 南北：約21.3m 溝 長さ：8.5m 幅：0.8m

【As-B下水田】 確認範囲 東西：約16.9m 南北：約32.0m 畦 長さ：約13m 幅：58～86cm

構造 【As-A下水田】 As-A下水田のAs-A下の面として確認されたのは、Gj～Gn-17～21グリッドにかけての範囲である。

上述のように畦畔が確認されなかったため、範囲や個々の水田面の形状等は特定されなかった。

水田面はほぼ平坦であった。

尚、確認された水田面の範囲の中央東寄りには、幅狭の浅い溝が確認されている。

【As-B下水田】 As-B下水田はGj～Gm-17～23グリッドにかけての範囲で確認された。

As-B下水田の水田面は、上述のように平坦ではなく確認範囲の中央西端部に向かって落ち込む、極く緩やかな傾斜として見られたのであるが、この傾斜が本来、As-B下水田の水田面が持っていた傾斜面であるか否かは特定されなかった。

また、As-B下水田の全体的規模・範囲や個々の水田面の形状は把握できなかったが、北西部に不明瞭な畦畔の痕跡と思われるものが見られ、南部に於いては畦畔を示唆する等高線の状態が見られた。これらの所見からAs-B下水田は東西に並ぶ南北に長い方形様の水田面の集合体ではなかったかと推定され、また、個々の水田面の規模については東西5.5m、南北13.7m程度のもではなかったかということが推定されるのである。

溜池（江戸時代～昭和時代前期、第626～627図、図版253・254）

概要 本遺構はG区南東部に位置する。

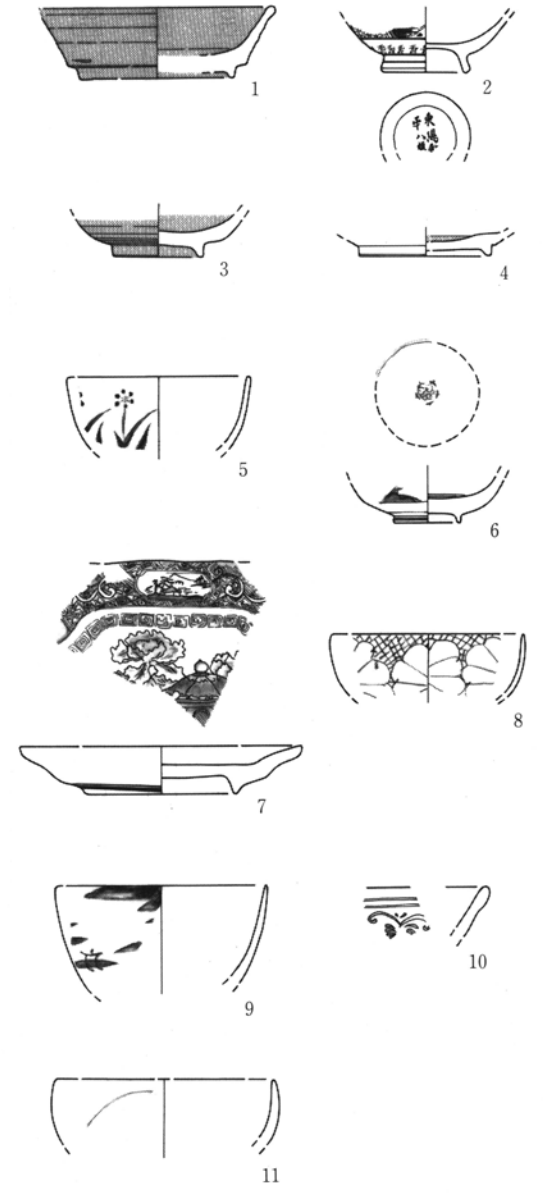
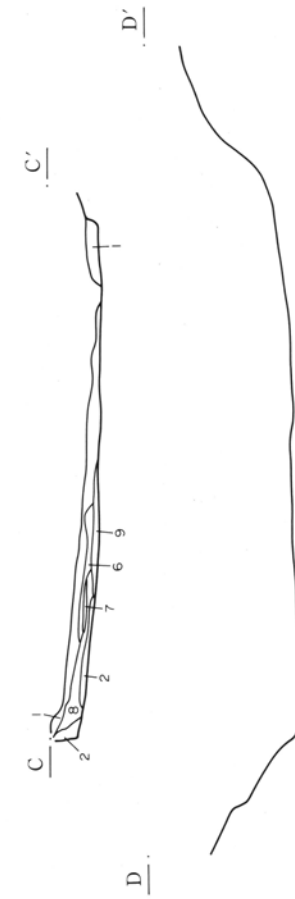
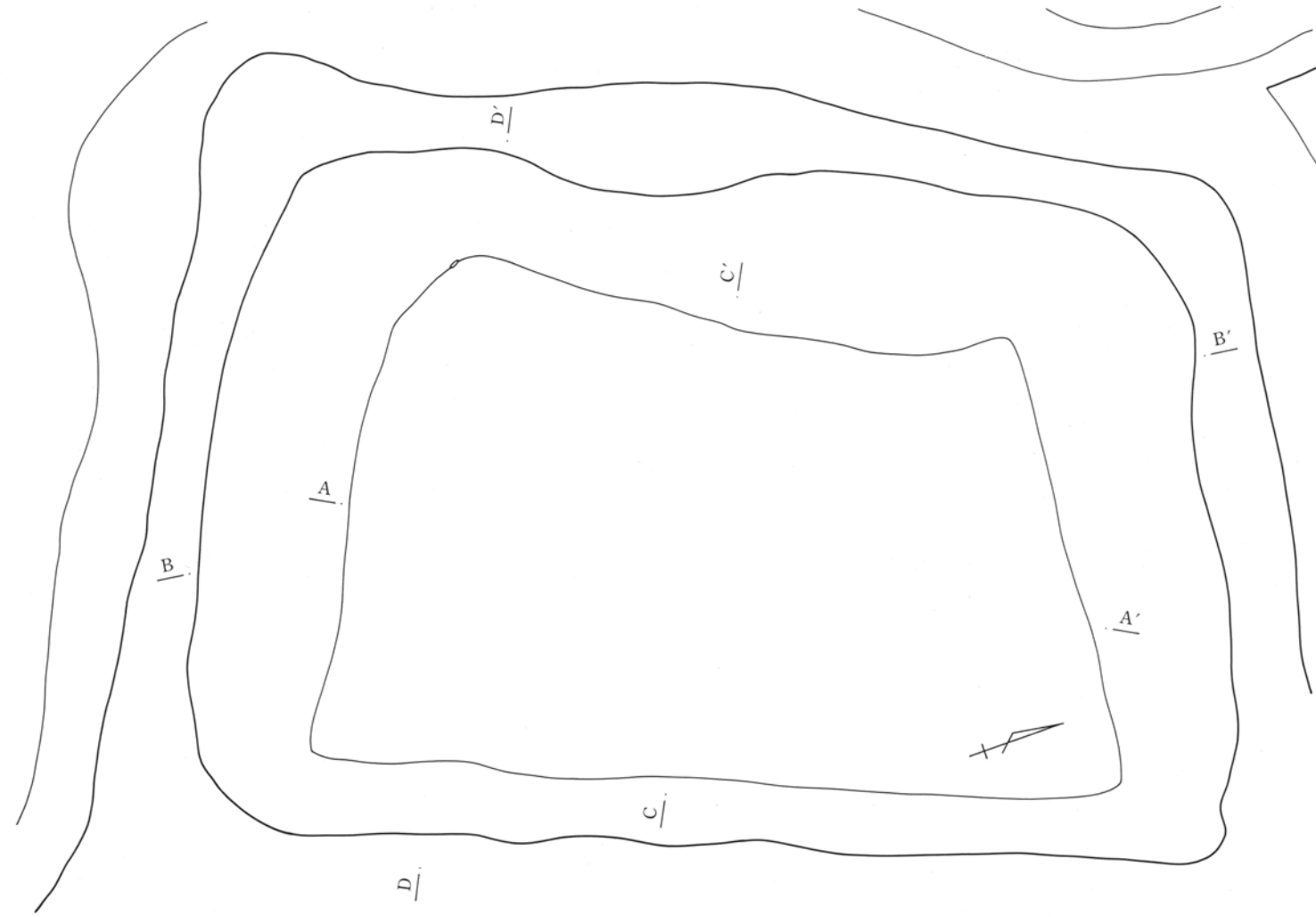
本遺構は調査段階に於いてその形状を留めていたもので、公団等による用地獲得以前、この遺構は共同管理地であり、多比良地区に10基見られたという溜池のうち一つであった。調査開始時点では竹林に覆われ、周堤及び内部の貯水部分にはクリ・カシ・エゴ・モク・ハンの木など樹齢11～27年の樹木が枝を広げていた。内部の貯水部分にはゴミの投棄も見られたが、僅かに水がたまって木々を映し、沢ガニやドジョウなどがかなりの数生息していたのであるが、ドジョウは奇形のものも見られ、やや体長が短い印象をもつものも見受けられた。

調査に伴う伐採の結果、西側の堤は一部穴が開いていてその機能を失っていることが分かったが、地元の方の話によると、この溜池は脇を流れる水路から水を取り入れたものであり、戦後は極端な水量の減少があつて、また、甘楽用水の配管によって現在は全く使用されていないということであった。尚、調査時点での溜水は、雨水や、台地側から浸透してくる地下水と判断された。本遺構が沢（水路）によ

て形成される沖積地に接する部分に造られているのは、前述の証言にあるように沢からの水の流入がし易い位置であり、また沖積地部分が地下水系を備えていたという条件のためであるものと思われる。

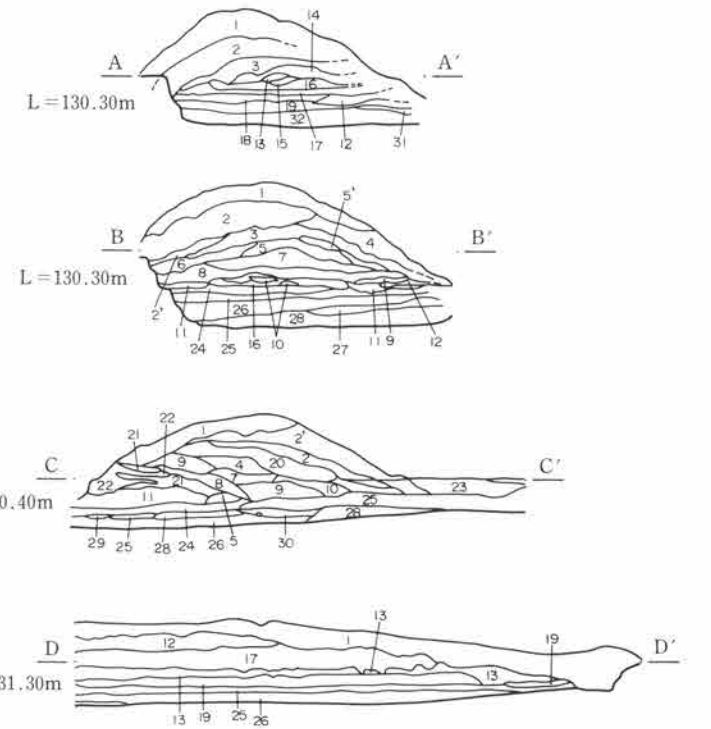
さて、本遺構の築造時期についての伝承は無いようであったが、出土遺物には17～20世紀にかけての陶器の皿（1, 4）・碗（3）や破片（10）、磁器の碗（2, 5, 6, 8, 9, 11）・皿（7）などが見られた。これらは概ね本遺構の存続時期を示唆するものと思われるが、堤の構築層や次に述べる盛土の土壌の状況も併せて、本遺構は江戸時代のAs-A降下以前に築造され、修復されつつ昭和時代前期まで使用されたものと判断される。

水路を挟んだ西側には盛土が見られたが、盛土の中・下位層鉄分沈着も見られる暗黒褐色土が、中位層の南北両側には暗黄褐色土が見られた。一方、上位層には暗褐色土が見られた。この盛土は溜池の補修に伴って搬出されたものと思慮されるが、As-Aの有無から中・下位層はAs-A降下以前、上位置は降下以降の埋土と思われる。



溜池覆土
 1：暗褐色土：締まり弱く、粘性あり。樹木の痕跡多い。 2：暗褐色土：締まり弱く、粘性弱い。川砂を含む。 3：灰褐色粘土ブロック。 4：黒褐色土：締まりなく、粘性弱い。川砂を含む。 5：褐色土：締まり弱く、粘性なし。川砂を主体とする。一部に粗粒の部分あり。 6：褐色土：粘性強い。 7：褐色土：6層に似るが川砂含む。 8：褐色土：締まりかなり弱く、粘性弱い。川砂含む。 9：褐色土：粗い砂主体。赤色掛かる。

第626図 溜池及び出土遺物（1）



〔A-A'～D-D'セクション〕

溜池覆土

23：暗褐色土：As-A少量含む。

盛土構築材

1：暗黒褐色土主体。 2：暗黒褐色土：As-A多量に含む。(2'：As-Aより多量。) 3：暗黒褐色土：円礫と砂層。 4：暗黒褐色土：砂質土と暗黒褐色土の混土。 5：5'：暗黒褐色砂質土主体。 6：黒褐色土主体。多量の砂含む。 7：黒褐色強砂質土主体。 8：黒褐色砂層主体。 9：暗黒褐色砂層：泥岩質小角礫と褐色土多量に含む。 10：黒色砂と円礫の混土。 12：暗赤褐色土：As-A細粒と砂の混土。 13：黒色土：黒色・暗褐色砂質土の混土。 14：暗黒褐色土：暗褐色粘質土主体。 15：黒褐色粘質土主体。 16：暗黒褐色土：黒色土と暗褐色土の混土。 17：暗黒褐色土：褐色土相当量含む暗褐色粘質土主体。 18：暗黒褐色土：褐色土多量に含む黒色粘質土。 20：暗褐色土：As-Aと砂質土多量に含む。 21：黒色粘質土：多量の褐色土含む黒色土と暗褐色土の混土。 22：暗褐色土：21層土に近似するが黒色土あまり含まない。

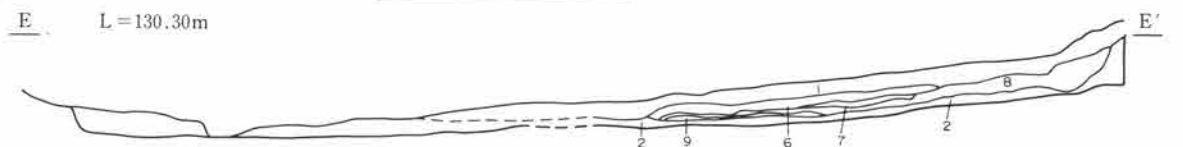
掘り方覆土

11：暗褐色土主体。 19：黒色粘質土。 24：灰黒褐色粘質土：灰黒色粘質土とくすんだ暗褐色土の混土。 25：灰黒褐色土：褐色掛かる13層土。 26：灰黒褐色土：黒色掛かる13層土。 27：暗褐色土：黒色・褐色土の混土。 28：暗褐色土：16層土主体。 29：灰黒色粘質土：強粘性。 30：灰黒色粘質土主体。 31：淡褐色粘性土。 32：暗褐色粘質土：黒色土と暗褐色土の混土。 基本的に24層と同組成乍ら鉄分の沈着顕著。

〔E-E'セクション〕

溜池覆土

1：暗褐色土：626図-1層に同じ。 2：暗褐色土：626図-2層に同じ。 3：灰褐色粘土：626図-3層に同じ。 4：黒褐色土：626図-4層に同じ。 5：褐色土：626図-5層に同じ。 6：褐色粘質土。 7：褐色土：6層土に川砂を含む。 8：褐色土：川砂を含む。 9：褐色土：粗粒砂主体。赤色掛かる。



第627図 溜池 (2)

規模 幅：32.4m 奥行き：19.25m

堤 上幅：120～135cm 基底幅：560～765cm 高さ：91cm

貯水部分 幅：19.1m 奥行き：11.0m

掘り方 幅：23.7m 奥行き：15.1m

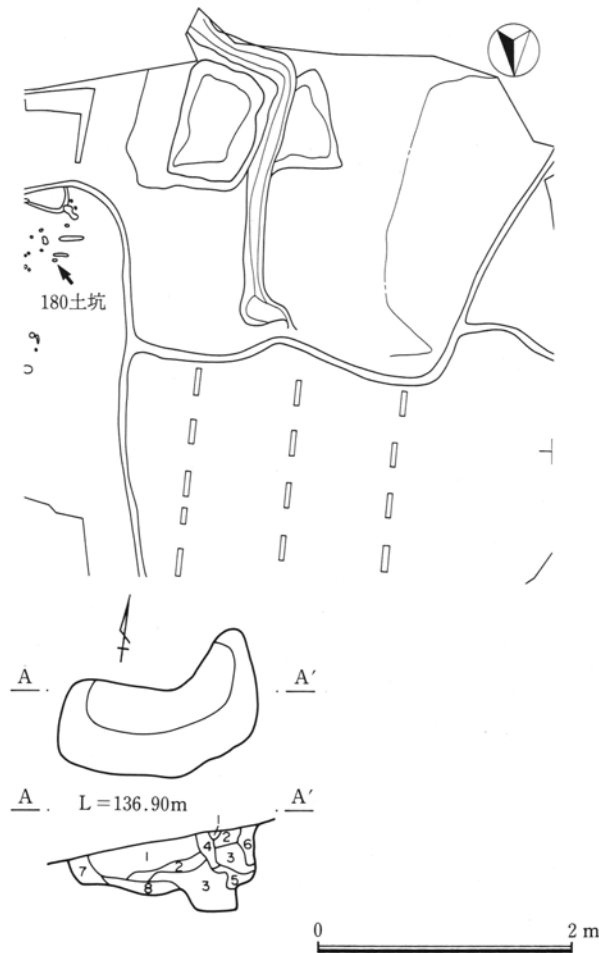
構造 本遺構は矢田川と土合川に挟まれた台地西端、追部野の集落方向から流下する沢（水路）の南に形成される沖積地部分に接した斜面を背に造られている。トレンチによる試掘調査の結果、背面にあたる台地側（東側）には、水路等を含め特段の掘削は認められなかった。また、遺構の南側と西側は水路に接しており、北側は削平されたように平坦な区画となっていた。

本遺構は隅丸台形プランで、平底を呈する浅い掘り方を有している。

堤はこの掘り方の外縁に沿って、台地の斜面を背にコの字状に造られるが、使用される土壌は砂・礫・粘質土・黒ボク土等雑多なものが見られ、中世城館の高土居（土塁）のように盛り上げられている。また、特に版築等は施されておらず、特段の漏水に対処する構造等も見受けられなかった。

溜池本体については平坦な貯水部分底面と土塁が見られるだけで、他に導水路・排水口等の施設は見受けられなかった。

尚、水路を挟んで西側には南北19.6m、東西12.3m、高さ160cmを測る、三角形の盛土が見られた。



180号土坑覆土

1・2・8：暗褐色土主体。 3：黒褐色土主体。 4：暗褐色土主体。樹木の痕跡か。 5：暗黄褐色土：ローム含む。樹木の痕跡か。 6：暗黄褐色土：ローム含む。 7：暗黄褐色土主体。

第628図 180号土坑

180号土坑（江戸時代中期以前、第628図、図版218）

概要 本土坑は、G区東端の台地部に発見された数少ない遺構のうちの一つである。

本土坑は斜面部分に掘削され、土層断面からは主体となる掘り込み部分（以下「ピット1」とする）と、これを切る東側の掘り込み部分（以下「ピット2」とする）の重複したものである。

出土遺物は見られず、時期の特定もできなかった。時期については僅かにピット1・2何れの部分の覆土にもAs-Aが含まれないことから、江戸時代中期以前の所産としては認識されるに過ぎない。

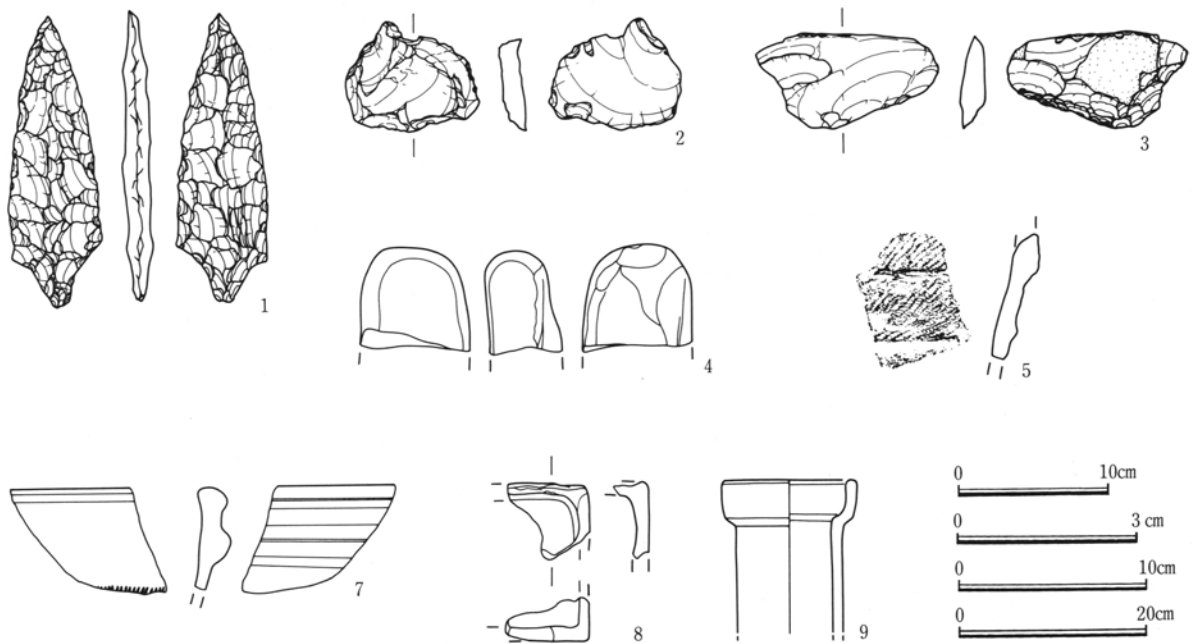
尚、土坑の用途についてであるが、ピット1については特定されなかった。一方、ピット2については柱穴と判断されるが、断面観察から得られた柱材の径は20cm程になるものと想定される。

規模 ピット1 長径：132cm以上 短径：52cm 深さ：69cm

ピット2 径：49×約89cm 深さ：52cm

構造 本土坑のうちピット1は隅丸の長方形のプランを呈し、ピット2は水滴状のプランを呈するものと想定される。

掘削形態はピット1は箱状であるが、底面は東に向かって深くなっており、ピット2は柱穴状を呈している。



第629図 G区遺構外出土遺物

G区に於ける遺構外の遺物 (第629図, 図版254)

概要 G区に於いては、遺構に伴わない出土遺物が僅かであるが見られた。G区に於いては確認された遺構が少なかったため、他の地区で見られたように、これらがその時期を反映するものであるか否かは確認できなかった。

遺構外に取り上げられた遺物は縄文時代から現代

まで幅広い時期のものを含んでいたが、この中には縄文時代の有舌尖頭器(1)やスクレイパー(2, 3)、磨石(4)、或いは前期の縄文土器片(5)が見られた他、中・近世の陶器摺鉢(7)や軟質陶器(8)、時期の特定できなかった土管(9)、近・現代のものと思われるバリカン(10)なども見られた。

第15節 H区の調査

H区は本遺跡の西端部、矢田川の左右両岸に沿って所在する地区である。H区は概ね沖積地からなるが、このうち右岸部（東側）はG区の沖積地に続くもので河川の氾濫層が主体を占めると想定され、発掘対象となり得るような遺構は存在しないものと判断されたために調査対象から除外された。

一方、以下に述べる左岸部（西側）は、西に接する矢田遺跡（吉井インターチェンジ周辺）の東端を画する斜面の麓側に当たっていたが、この部分の大字が多比良に属するために矢田遺跡側ではなく本遺跡側で調査することとなった。尚、この試掘調査は掘

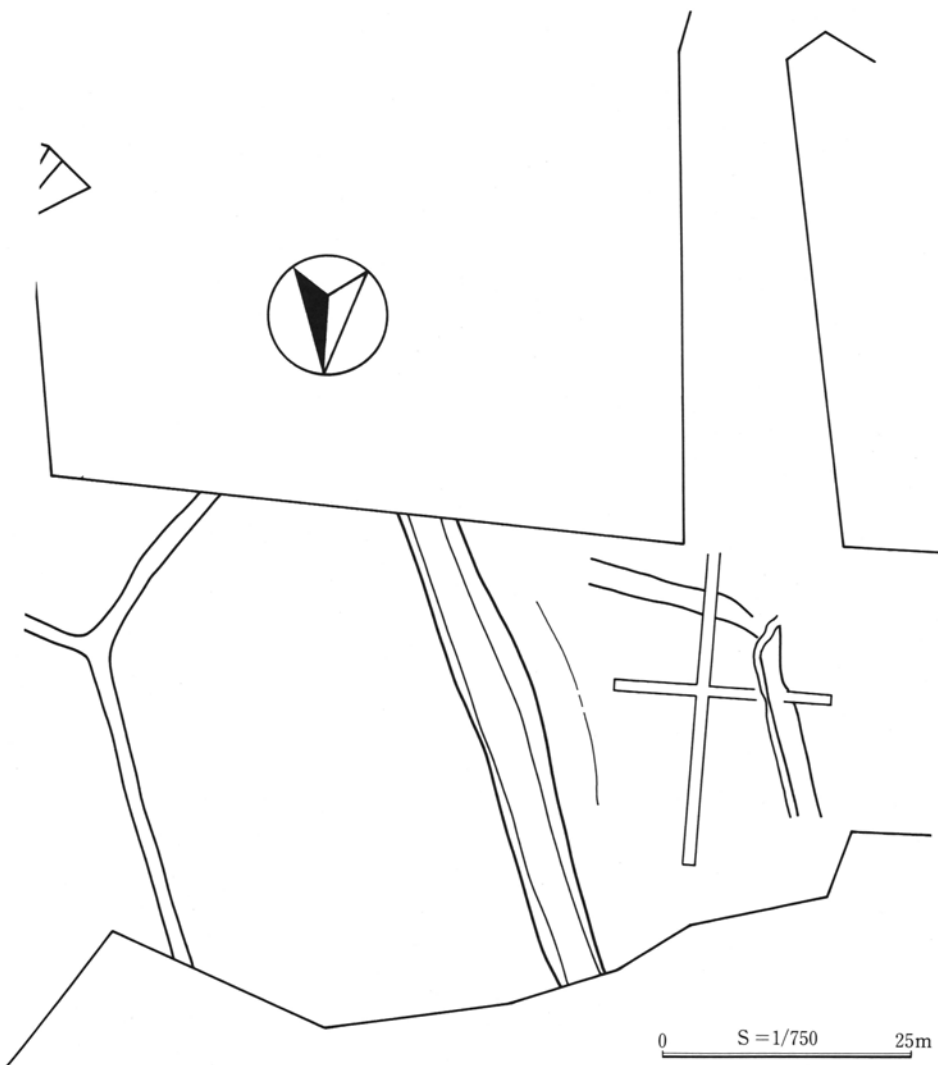
削機械の搬入が難しかったため人力によって行った。

H区の矢田川左岸部の殆どは斜面が占めているが、矢田川沿いの一画には階段状に若干の平坦面が見られ、水田耕作等が行われていた。試掘調査の対象としたのはこの平坦面を形成する一画であり、調査区の中で最も広い平坦面（以下「下位平坦面」とする）と、その南及び西に一段上がる平坦面（以下「上位平坦面」とする）である。試掘調査は下位平坦面を中心に、上位平坦面・下位平坦面に亘って東西・南北方向に幅1mのトレンチを十字に設定し、遺構の有無の確認を目的として実施した。尚、ト

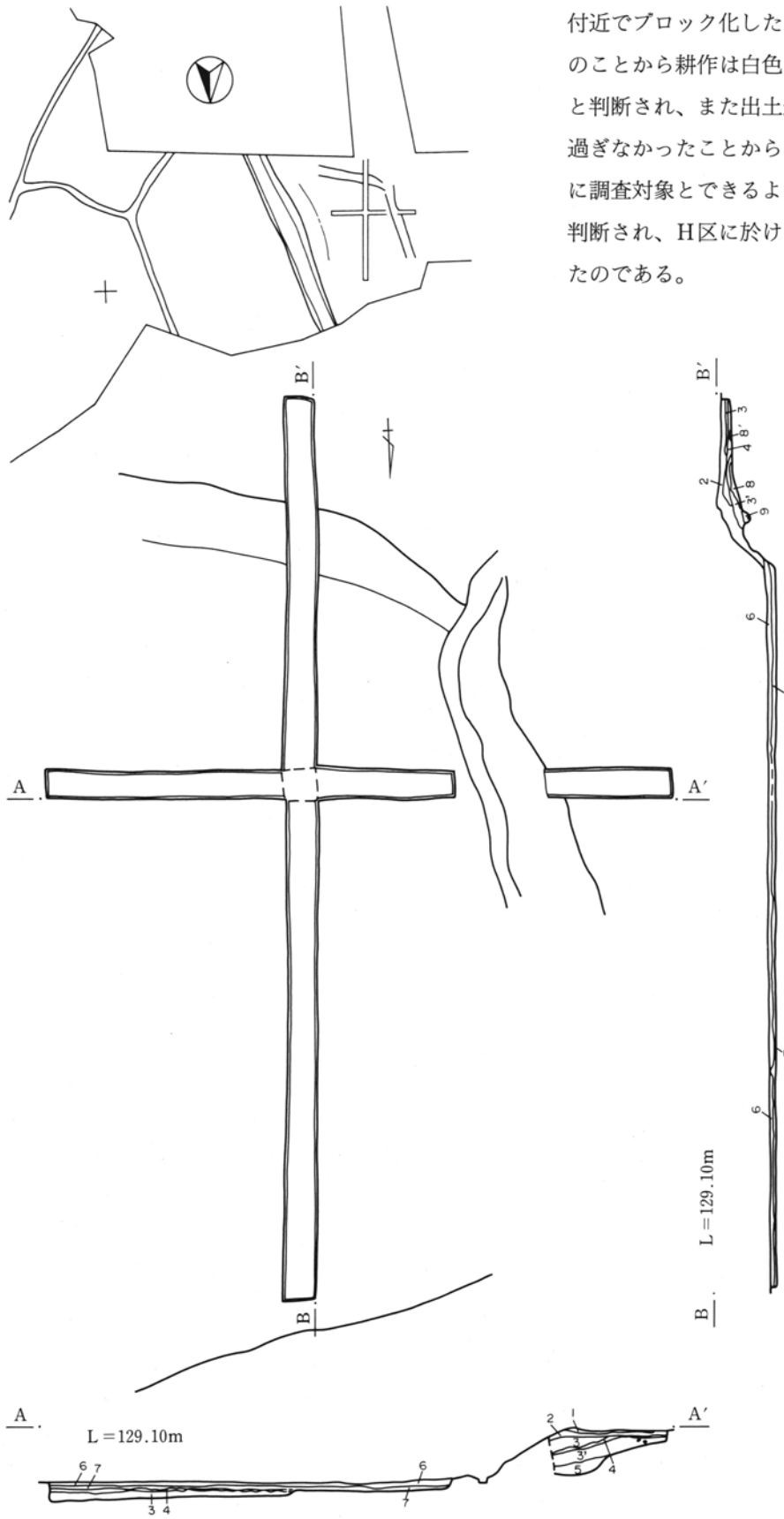
レンチの長さは東西で18.8m、南北27.0mを測った。

試掘調査の結果、南側の上位平坦面の北縁に沿って上幅36cm、基底幅26cm、深さ18cmを測る溝が確認された。この溝は、覆土にAs-Aを含まないのでAs-A降下以前の所産と推定されるが、調査段階ではさして古いものとは認識されていなかった。また、この溝は東西に走行するものであるが、調査時の掘削及び記録等に失敗したため、平面的な状態を記録化することができなかった。

さて、試掘調査範囲全体についてみると、表層にはグライ化した水田耕作土が見られ、この水田耕作土の下にははっきりとした酸化鉄・酸化マンガン層が認められ、その



第630図 H区全体図



付近でブロック化したシルトが確認されている。このことから耕作は白色系シルトまで及んでいるものと判断され、また出土遺物も土師器片1点を見たに過ぎなかったことから、当該地区には上述の溝以外に調査対象とできるような遺構は遺存しないものと判断され、H区に於ける調査を終了することとなったのである。

水田耕作土

1：黒色土：黒色土と暗黒褐色土の混土。比較的良く締まる。 2：暗茶褐色土：As-A等微量に含んで強く締まる。

水田下の土層

3：暗黒褐色土：小礫と灰色土粒を多量に含み粘性を持ち、比較的良く締まる。(3'：3層に対し大きめの礫を含む。) 4：黒色土：淡褐色微粒子を多量に含んで、強く締まる。 5：暗黒褐色土：淡褐色土少量含む。 6：黒色土：黄褐色土少量含み、粘性強い。 7：暗黒褐色土：鉄分の沈着多量に確認される鉄分沈着層。粘性強い。所謂シキ・カナドコ。 8：暗茶褐色土：暗褐色土とロームの混土。良く締まる。(8'褐色ローム。)

溝覆土

9：暗黒褐色土：ローム微量に含み、締まりに欠ける。

第631図 矢田川西

第16節 K区の概要

K区は本遺跡の南東、本線部分であるB・C区とは3号谷を挟んでその南に位置し、町道石神・多比良線沿いに所在している。

K区は北端の3号谷に向かって緩傾斜の斜面を見せているが、冒頭の第1章第2節-1に述べたように、その立地は少なくともB・C区とは異なっており、寧ろ南側に接する東沢遺跡の一部として把握されるものである。東沢遺跡は昭和61年7月吉井町教育委員会によって発掘調査が実施され、古墳時代後期の竪穴住居5軒と落ち込み1基、奈良時代の竪穴住居2軒、平安時代の竪穴住居3軒が調査されている。

K区に於いても同時期竪穴住居跡13軒と時期不特定のもの1軒を調査した。尚、13軒の内訳は古墳時代後期10軒、奈良時代2軒、平安時代1軒である。

この他、江戸時代中期以前の土坑2基、江戸時代前・中期の畠跡1面を含む近世以降のサク遺構も調査され、区北端の3号谷では地表下2m程に奈良・平安時代頃の形成層を確認した。また、特に報告はしないが、区の中程には東西走行の馬入れに伴う平行に並ぶ近世以降の溝遺構2状も確認している。

第17節 K区の遺構と遺物

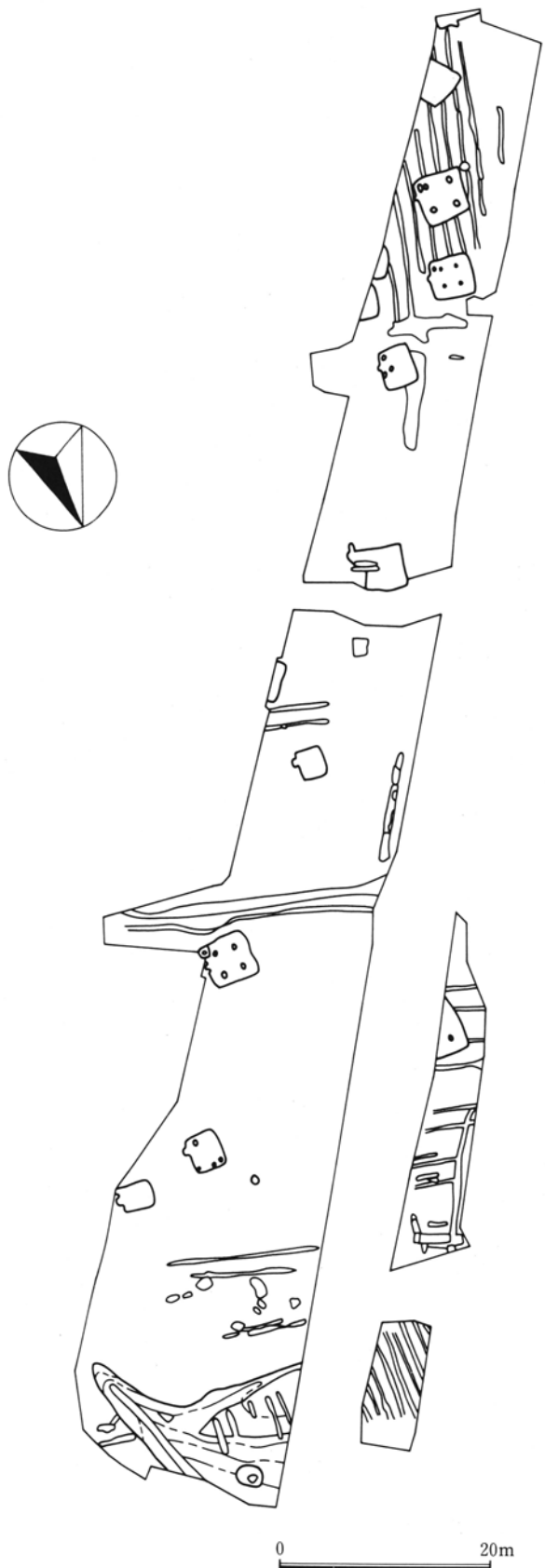
H-36号住居（奈良時代、第633図、図版256・262・266）

概要 本住居はK区北東の小型の竪穴住居である。

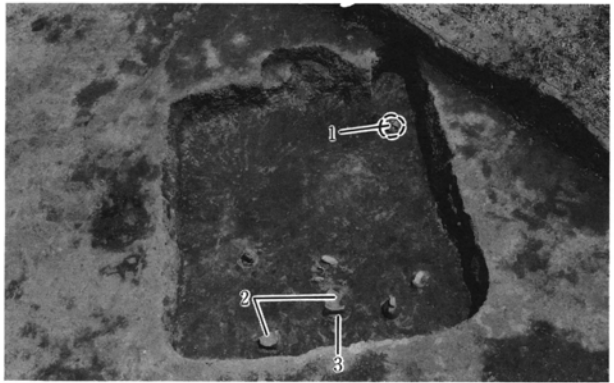
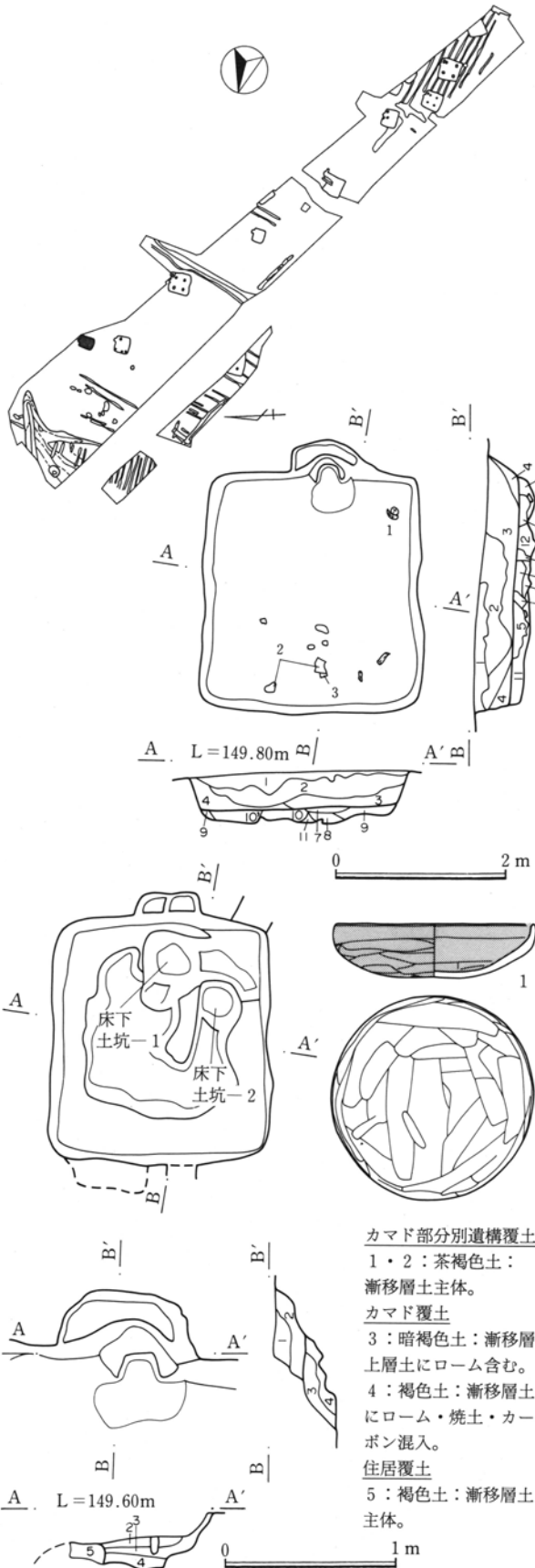
出土遺物は多くなかったが、この中で本住居に伴うと判断されたものには8世紀前半期の特徴を示す土師器（1）の他、須恵器甕片（2）が見られた。

一方覆土中からは古墳時代以降の時期の土師器甕片を中心に、凹石（3）などが見られた。

出土遺物が少ないために住居の時期は特定しがたいが、概ね8世紀前半期頃の所産として把握したい。尚、覆土の遺物から、本住居は平安期頃までその痕跡を留めていたことが窺われる。



第632図 K区全体図

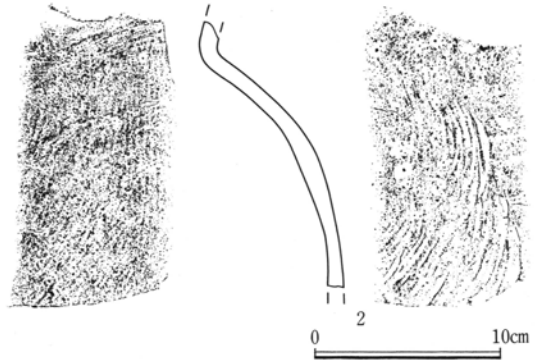


住居覆土

1：茶褐色土／2：暗茶褐色土：ローム漸移層(以下「漸移層」)土主体。 3：黒褐色土：黒色土主体。 4：明褐色土：漸移層下層土。

住居掘り方覆土

5：褐色土：黒色土と漸移層下層土の混土主体。 6：明褐色土：漸移層下層土主体。 7・7'：明褐色土：ロームと漸移層下層土の混土主体。 8・12：褐色土／10：暗褐色土：漸移層土主体。12層土は青灰色シルト多く混入。(10'：混入物多い。) 9：褐色土：漸移層上層土とロームの混土主体。 11：明黄褐色土：ローム主体。 13：黒褐色土：黒色土にローム・漸移層土多く混入。



規模 長軸：282cm 短軸：259cm 深さ：41cm

カマド 幅：52cm 奥行き：62cm 左袖 幅：18cm

長さ：15cm 高さ：4cm 右袖 幅：20cm 長さ

：14cm 高さ：3cm 燃烧部 径：18×15cm

煙道 幅：15cm 長さ：16cm

床下土坑1 径：62×55cm 深さ：45cm

床下土坑2 径：54×52cm 深さ：16cm

構造 本住居は隅丸方形のプランを呈する。

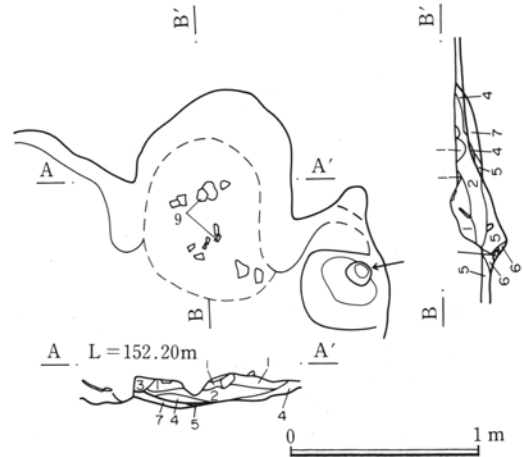
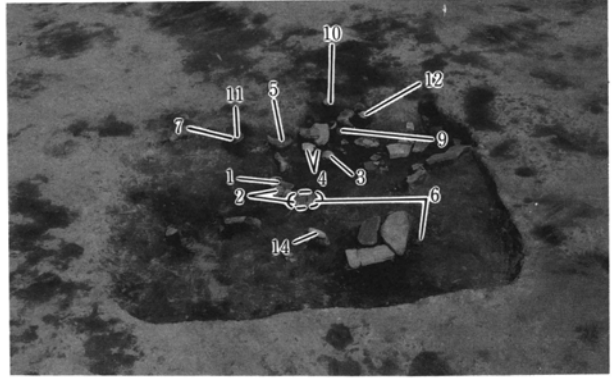
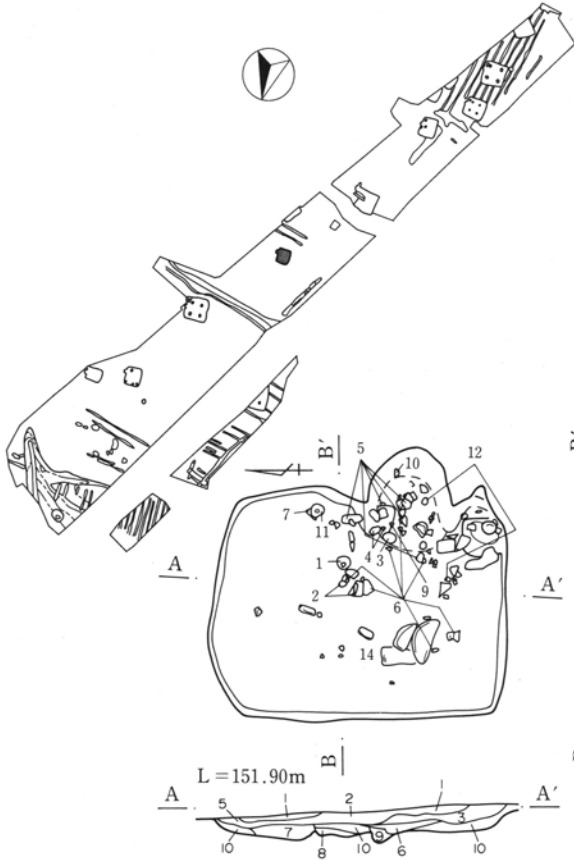
幅22～66cmを測るテラス状の掘り残しを伴って、中央が6cm程掘り窪められている掘り方を有する。掘り方のカマド前と住居南東部には土坑が掘削されているが、後者は青灰色シルトを多く含むので床下粘土坑と思慮される。床面はこうした掘り方を埋め戻して造られている。

第633図 H-36号住居及び出土遺物

カマドは東カマドで東壁中央やや南寄りに造られるが、破壊が進んでいて全体状況はつまびらかでない。カマドは掘り方をローム等の土壌で埋め戻して燃焼面を造る。燃焼部は壁面より手前側に設定され、

その両側に袖が設けられる。煙道は燃焼面より6cm程高い位置から東壁を削り込んで造っている。

尚、柱穴・貯蔵穴等の構造は、床面に於いても掘り方面に於いても確認することはできなかった。



住居覆土

1：茶褐色土：ローム漸移層土(以下「漸移層土」)。 2：暗茶褐色土：漸移層上層土と黒色土の混土。 3：黒褐色土：黒色土・漸移層土・ロームの混土。 4：明褐色土：漸移層土主体。 5：淡黄褐色土：漸移層下層土主体。

住居掘り方覆土

6：淡茶褐色土：下層土中心の漸移層土主体。青灰色シルト混入。
7：茶褐色土：上層土中心の漸移層土に暗黄色ローム多く混入。
8：黒色土：植物の痕跡か。 9：茶褐色土：漸移層土主体。 10：

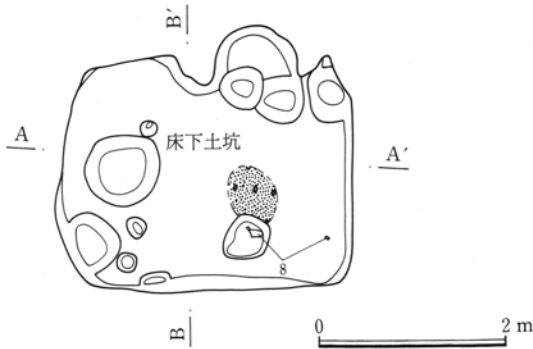
明褐色土：漸移層下層土とロームの混土主体。 11：明茶褐色土：ロームとAs-YPの混土主体。

カマド覆土

1：暗褐色土：漸移層上層土主体。 2：茶褐色土：漸移層土主体。
3：明褐色土：漸移層土。 4：明黄褐色土：ローム主体。

カマド掘り方覆土

5：暗褐色土：漸移層上層土主体。 6：明黄褐色ローム。 7：茶褐色土：ロームと漸移層上層土の混土。

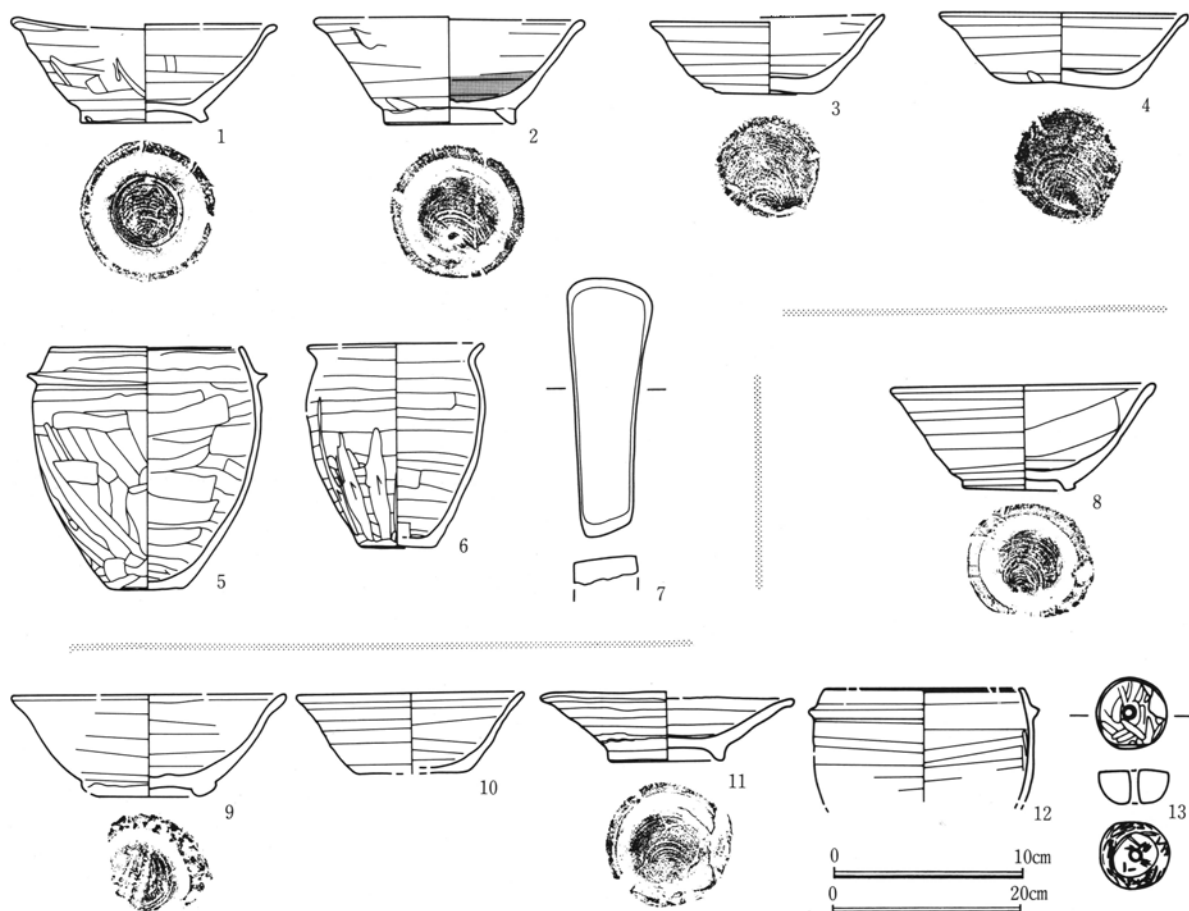


第634図 H-44号住居

H-44号住居 (奈良時代, 第634~635図, 図版256~257・262・266)

概要 本住居はK区中央に位置する、小型の竪穴住居跡である。

遺存状況はさして良くなかったが、カマド付近を中心に比較的多くの遺物が出土した。この中で本住居に伴うと判断された遺物には10世紀前半期の所産と思われる須恵器の高台付碗(1, 2)や坏(3, 4)、



第635図 H-44号住居出土遺物

羽釜（5）があり、この他須恵器甕（6）や磨石様の砥石（7）の出土も見られた。

一方覆土中からは平安時代の遺物を中心に、やはり10世紀前半期の特徴を示す須恵器の高台付碗（8, 9）・坏（10）・高台付皿（11）や羽釜（12）の他、石製紡錘車（13）やこも編み石（14）も見られた。これらの遺物の状況から、本住居は10世紀前半期の所産として把握される。

尚、貯蔵穴の覆土上位からも該期の須恵器高台付碗（→部分）1点の出土が見られたが、調査中に盗難に遭い失われている。

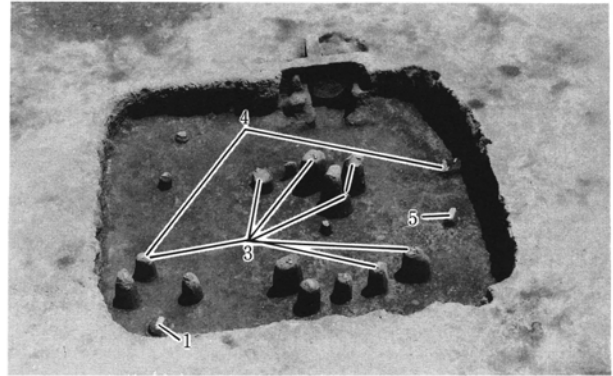
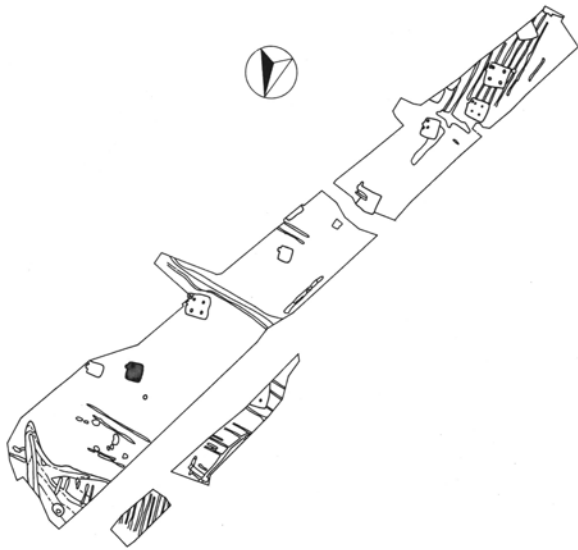
規模 長軸：316cm 短軸：250cm 深さ：13cm
カマド 幅：120cm 奥行き：110cm 左袖 幅：27cm 長さ：36cm 高さ：10cm 右袖 幅：30cm 長さ：29cm 高さ：10cm 燃烧部 径：63×83cm
貯蔵穴 径：41×41cm 深さ：28cm
床下土坑 径：80×72cm 深さ：17cm

構造 本住居は概ね横長の隅丸方形のプランを呈しているが、北壁に於いて膨らみが見られる。

本住居は掘り方を有する。この掘り方には住居全体に亘るような構造は見られなかったものの住居北寄りには土坑が掘削され、カマドの前側には径59×50cmを測る粘土の分布が見られた。床面はこうした掘り方をローム漸移層土等の土壌で埋め戻して造られている。

カマドは東カマドで東壁の左寄りに造られている。カマドは浅い掘り方を有し、これをロームやローム漸移層土で埋め戻して燃烧面を造っている。燃烧部は東壁を跨ぐ位置に設けられ、その両側に短い袖が造られている。

床面に於いては、カマド右側の南東コーナー付近に、南壁に接して隅丸方形プランの浅い掘り込みが掘削されている。尚、柱穴は床面に於いても、掘り片面に於いても確認されなかった。



住居覆土

1：茶褐色土／2：暗褐色土：ローム漸移層(以下「漸移層」)上層土。3：明褐色土：漸移層下層土にローム含む。4：茶褐色土：1層に似るが黒色土・ローム混入。5：黒褐色土：黒色土に漸移層土・ローム混入。6：暗褐色土：5層に似るが漸移層土多く含む。7：暗褐色土：漸移層土に黒色土・ローム多く含む。

三角堆積層

8・8'：黒褐色土：5層近似。漸移層土多し。9：黄褐色土：ロームに漸移層土・黒色土含む。10：茶褐色土：漸移層土にAs-Bp含む。

貼り床

11：黄褐色土：黄色ロームと暗黄色ロームの混土。12：茶褐色土：11層土と黒色土の混土。

掘り方覆土

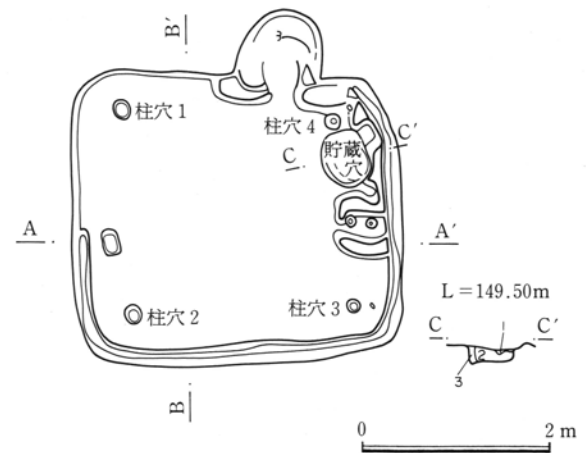
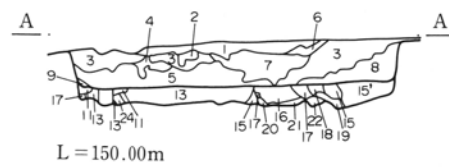
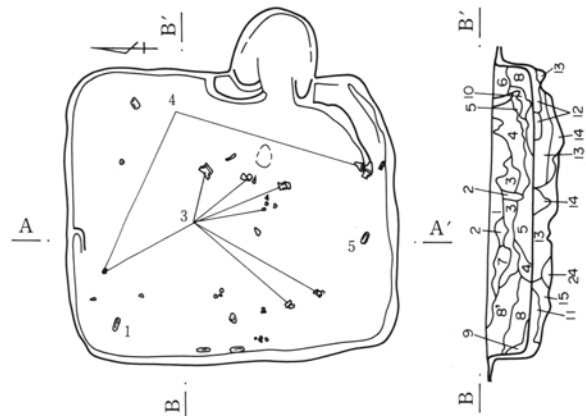
13：暗褐色土：黒色土に漸移層土と黄・暗黄色ローム多く混入。14：明褐色土：漸移層土と黄・暗黄色ローム。15：明褐色土：黄・暗黄色ロームに若干の漸移層土混入。(15'：ブロック径大きい。)16：明茶褐色土：漸移層土に暗黄色ローム多く、黒色土・灰色シルト等若干混入。17：灰褐色土：漸移層土・暗黄色ローム・灰色シルトの混土。18：明茶褐色土：暗黄色ロームと漸移層土の混土。19：明茶褐色土：18層に似るが黒色土・黄色ローム混入。20：淡灰褐色土：灰色シルトに黒色土・黄色ローム混入。21：茶褐色土：16層に似るが混入物やや少ない。22：黒褐色土：黒色土にロームと灰色シルト若干混入。24：黄褐色土：黄色ロームに暗黄色ローム入る混土。

貯蔵穴覆土

1：黒褐色土：黒色土に漸移層土混入。2：明黄褐色土：ロームと漸移層土の混土に白色・青灰色シルト混入。

住居掘り方覆土

3：明褐色土：黒色土・漸移層土・ロームの混土。白色シルト混入。



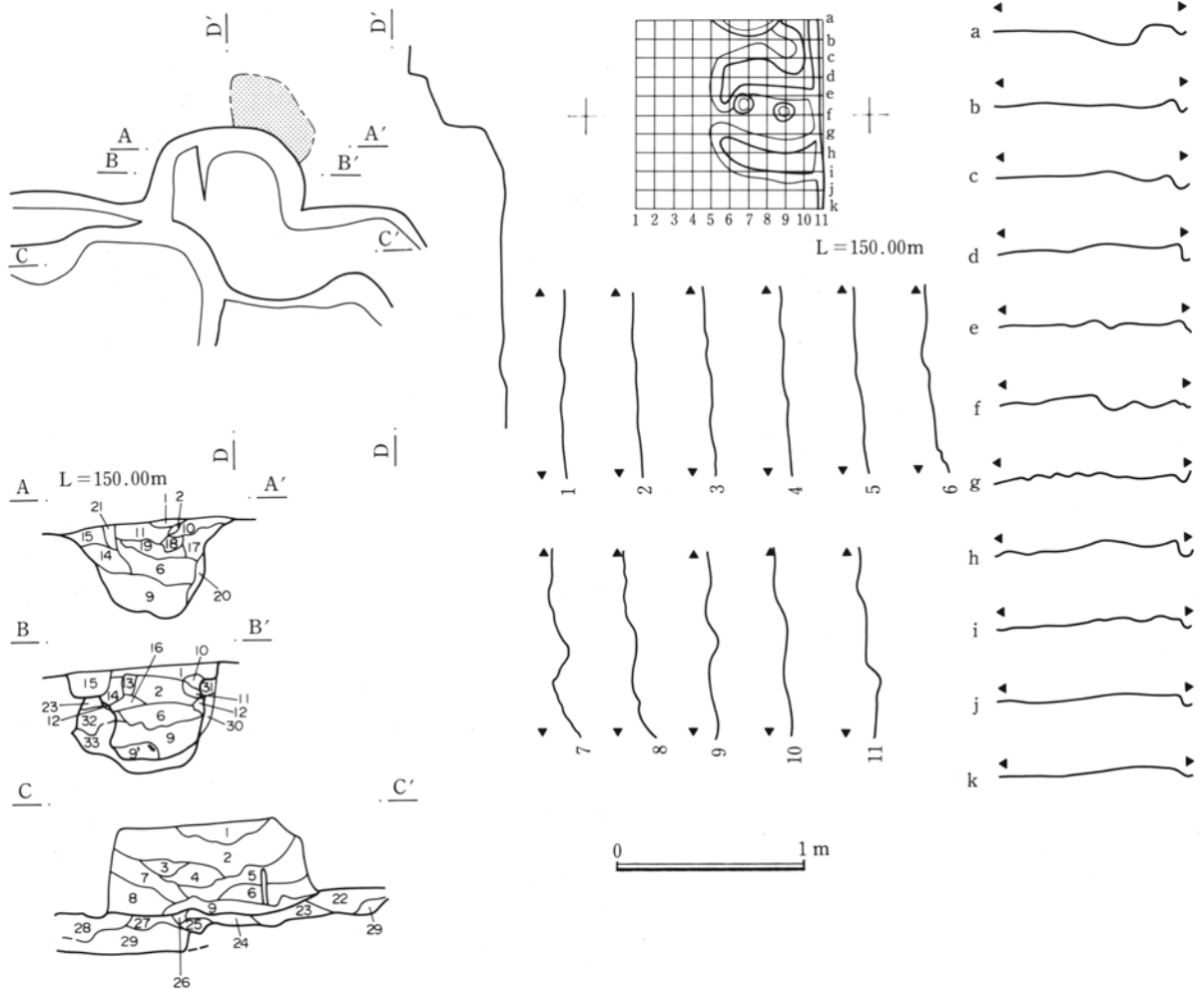
第636図 H-48号住居

H-48号住居 (奈良時代, 第636~638図, 図版257~258・262~263・266)

概要 本住居はK区北部の中程に位置する竪穴住居跡である。本住居の規模は小型のものに属し、カマドはほぼ破壊されてしまっていたが、床面や壁面

は比較的良好な遺存状況を示し、特に南壁際には入り口構造と判断される遺構を確認することができた。しかし、貯蔵穴についてはその東半部を掘り過

第3章 発見された遺構と遺物



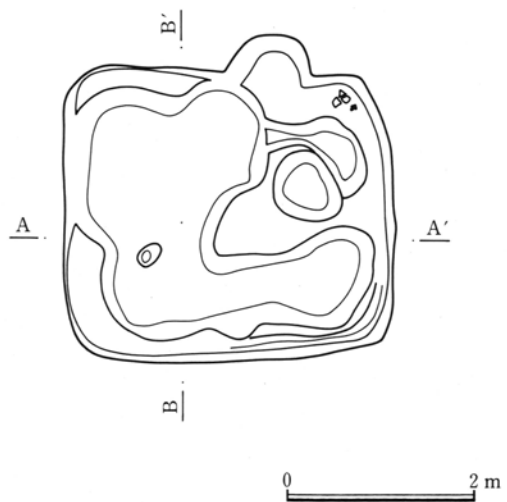
カマド覆土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)

1: 茶褐色土: 黒色土・ローム含む漸移層土。 2: 茶褐色土: 黒色土・漸移層土・ローム・灰色シルトの混土。 3: 淡黄褐色土: 2層土と焼土入る白色シルト。 4: 淡褐色土: 白色シルト・ローム入る漸移層土。 5: 茶褐色土: 漸移層土。若干のローム混入。 6: 淡赤褐色土: 5層に似るが焼土混入。 7: 黒褐色土: 黒色土と漸移層上層土の混土。カーボン・As-BP混入。 8: 淡黄褐色土: 黒色土と漸移層土の混土。白色シルト・カーボン含む。 9: 淡褐色土: 漸移層土。焼土・シルト含む。(9: 軟質。9' 硬質。) 10: 乳茶褐色土: 淡黄色シルトと漸移層土の混土。弱い焼土化。 11: 淡黄赤色土: 焼土化した淡黄色シルト。 12: 淡黄赤色土: 11層のブロック。 13: 暗褐色土: 漸移層上層土に15層土近似の土壤混入。 14: 茶褐色土: 淡黄色シルトと焼土含む漸移層土。(14': ローム多く混入。) 15: 淡黄褐色土: 淡黄色・白色シルトと焼土含む漸移層土。 16: 淡茶褐色土: 漸移層下層土。 17: 淡赤褐色土: 漸移層土中心。焼土化認む。 18: 淡赤明褐色土: 漸移層土・ローム・白色シルト・焼土の混土。 19: 暗赤褐色土: 漸移層上層土。焼土含む弱い焼土化認む。 20: 乳白色シルト。 21: 明褐色土: 漸移層下層土。上位に弱い焼土化。

カマド掘り方覆土

22: 淡茶褐色土: 漸移層下層土に焼土・炭化物・青灰色シルト多く混入。弱い焼土見る。 23: 褐色土: 漸移層土にローム・焼土多く混入。 24: 暗茶褐色土: 焼土化見る漸移層上層土に焼土・炭化物等混入。 25: 暗褐色土: 漸移層上層土に焼土等混入。 26: 淡茶褐色土: 漸移層土と焼土・黒色土の混土。 27: 淡茶褐色土: 暗黄

色・黄色ロームと漸移層土の混土。 28: 暗褐色土: 黒色土と黄色・暗黄色ロームの混土。 29: 明黄褐色土: 黄色・暗黄色ロームの混土。 30: 明褐色土: ロームと漸移層土の混土。 31: 明茶褐色土: 漸移層土・ローム・焼土の混土。内壁側に焼土混入。 32: 淡赤茶褐色土: 焼土化見る漸移層土に焼土・ローム多く混入。 33: 淡赤茶褐色土: 暗黄色ロームに焼土化した漸移層土混入。燃焼部側に焼土化顕著。



第637図 H-48号住居カマド及び掘り方



第638図 H-48号住居出土遺物

ぎてしまい、その構造を明らかにできなかった。

出土遺物は少なく、本住居に伴う可能性の大きいものには僅かにこも編み石(1)が見られただけであったが、掘り方から8世紀前半期の特徴を示す土師器坏(2)の出土が見られた。

一方、覆土中からは奈良・平安時代の土師器片を中心とした遺物の出土が見られたが、この中には7世紀後半期の特徴を持つ土師器甕(3)や8世紀前半期のもと思われる土師器小型胴張甕(4)、そしてこも編み石(5,6)などが見られた。

このような遺物の出土状況にあるため本住居の時期は特定できなかったのであるが、掘り方南東コーナー部分から出土した土師器坏(2)の存在と覆土中の遺物の状況から本住居は概ね西暦700年前後する時期以前の所産であろうと判断される。

尚、本住居の中央やや東よりの覆土中からは、径23×16cmという小さいものであったが焼土が面的に確認されている。これについては床面の遺物の出土が極端に少ないことと併せて本住居が所謂焼失家屋であった可能性を示すものと思慮される。

規模 長軸：354cm 短軸：310cm 深さ：48cm
 カマド 幅：150cm 奥行き：100cm 燃烧部 径：38×70cm

柱穴1 径：19×18cm 深さ：9cm 柱穴2 径：20×19cm 深さ：23cm 柱穴3 径：13×12cm 深さ：17cm 柱穴4 径：16×16cm 深さ：4cm 貯蔵穴 径：60×48cm 深さ：17cm

周溝 幅：6～11cm 深さ：7cm

入り口遺構 幅：75cm 奥行き：55cm 高さ：4cm

床下土坑 径：80×69cm 深さ：11cm

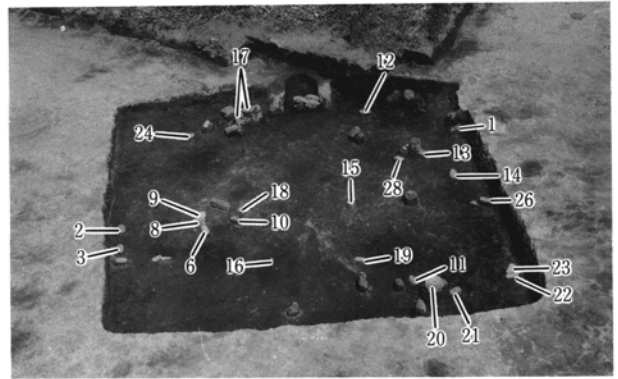
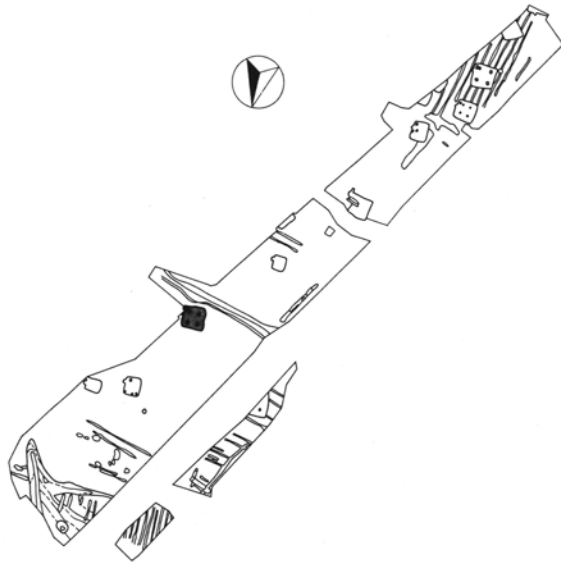
構造 本住居は南東コーナー部分がやや欠けるが、概ね隅丸方形を基本とするプランを呈している。

壁際には幅18～40cm程を測るテラス状の掘り残しを有する掘り方を有する。この掘り方面の中南部は微高地様に若干盛り上がっており、ここに床下土坑が掘削されて

いる。床面はこうした掘り方を黒色土やシルトを含むロームやローム漸移層土で埋め戻し、ロームと一部黒色土を用いた貼り床を施して造っている。

カマドは東カマドで東壁南寄りに造られるが、大きく壊されていて構造については若干を把握できなかった。カマドは掘り方を有し、これを焼土やシルトを含むローム漸移層土等の土壌で埋め戻して燃烧面が造り出され、燃烧部は東壁面を跨ぐ位置に設定されている。この燃烧部両側の壁際には幅30cm程を測るテラス状の構造が造られており、袖の基礎部分になるのではないかとと思われる。

床面に於いては支柱穴4基、貯蔵穴1基、周溝及び入り口遺構と考えられる遺構1カ所を確認した。このうち柱穴は住居の各コーナーに近い位置に見られ、何れも覆土は黒色土を主体とする径の小さなもので柱痕と判断される。しかし掘り方面に於いても柱穴は確認されなかったため柱材は柱穴を掘削せずに掘り方面に直接置かれ、柱設置後に床が貼られたものと想定される。一方、貯蔵穴についてはカマド右側の柱穴4の西の南壁寄りに掘削されている。上述のように掘り過ぎているが、そのプランは概ね隅丸方形を呈し土坑状の掘削形態を呈している。また、周溝は東壁と北壁東半部を除いて掘削されている。尚、「入り口遺構」は南壁中央付近、周溝を挟んで壁面に接して隅丸方形のプランで4～5cmの高さに盛り上げられていて、そのプランは概ねカマドの袖状を呈している。この盛土の中程には南北方向に若干窪みが見られ、その南或いは北寄りには掘削したか否かは特定できないが、径10cm内外、深さ6cmを測る小ピットも見られる。



住居覆土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)

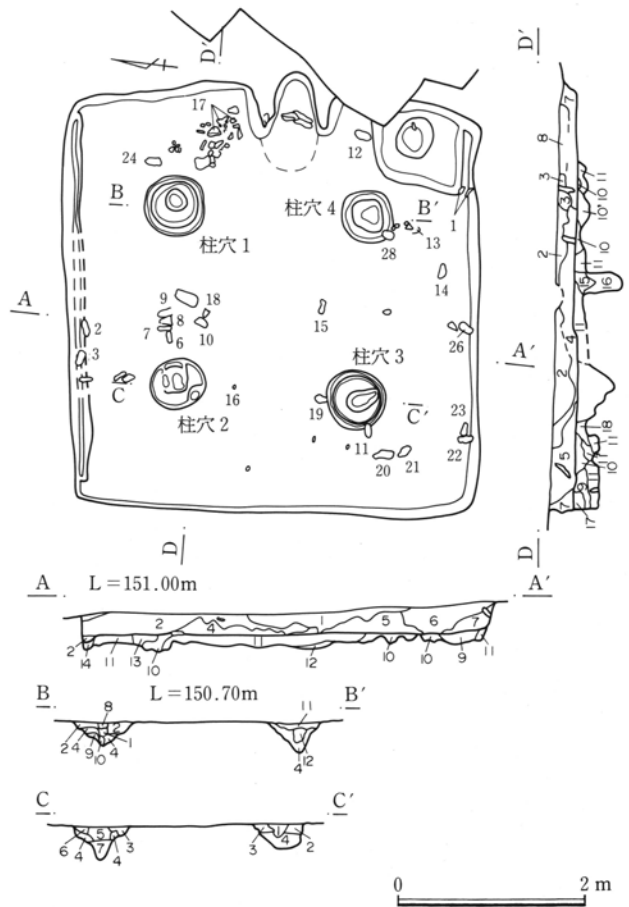
1: 茶褐色土: 漸移層下層土中心。 2: 暗褐色土: 漸移層土主体。 3: 茶褐色土: 黒色土・漸移層土・As-BPの混土。 4: 明黄褐色土: 黒色土・漸移層土・ロームの混土。 5: 明黄褐色土: 4層に似るがAs-BP混入。 6: 黒褐色土: 黒色土と漸移層上層土の混土主体。 7: 明褐色土: 漸移層下層土とロームの混土。 8: 明黄褐色土: ローム主体。

住居掘り方覆土

9: 黒褐色土: ローム・漸移層土・黒色土の混土。 10: 暗褐色土: ロームと漸移層土の混土主体。(10': ローム多く混入) 11・11': 明黄褐色土: ローム主体。(11' 漸移層土混入) 12: 明褐色土: ローム主体。(床下粘土坑覆土) 13: 暗褐色土/15: 黒褐色土/16: 暗茶褐色土: 漸移層上層土主体。 14: 茶褐色土: 漸移層土主体。 17: 明黄褐色土: 黄色系ローム。 18: 茶褐色土: 漸移層上層土とロームの混土。

柱穴覆土

1: 茶褐色土: 漸移層上層土主体。炭化合物含む。 2: 褐色土: 漸移層土とロームの混土。 3: 暗褐色土: 黒色土と漸移層上層土の混土主体。 4・9: 明褐色土: ローム主体。 5: 褐色土: 黒色土・漸移層土・ロームの混土。 6: 褐色土: 2層に似るが黒色土混入。 7: 褐色土: 漸移層下層土とロームの混土主体。 8: 黒褐色土: 黒色土と漸移層上層土の混土。 10・11: 茶褐色土: 漸移層上層土中心。 12: 褐色土: 漸移層土主体。(貯蔵穴覆土は4層に似る。)



第639図 H-49号住居

H-49号住居 (古墳時代後期, 第639~641図, 図版257~258・262~263・266)

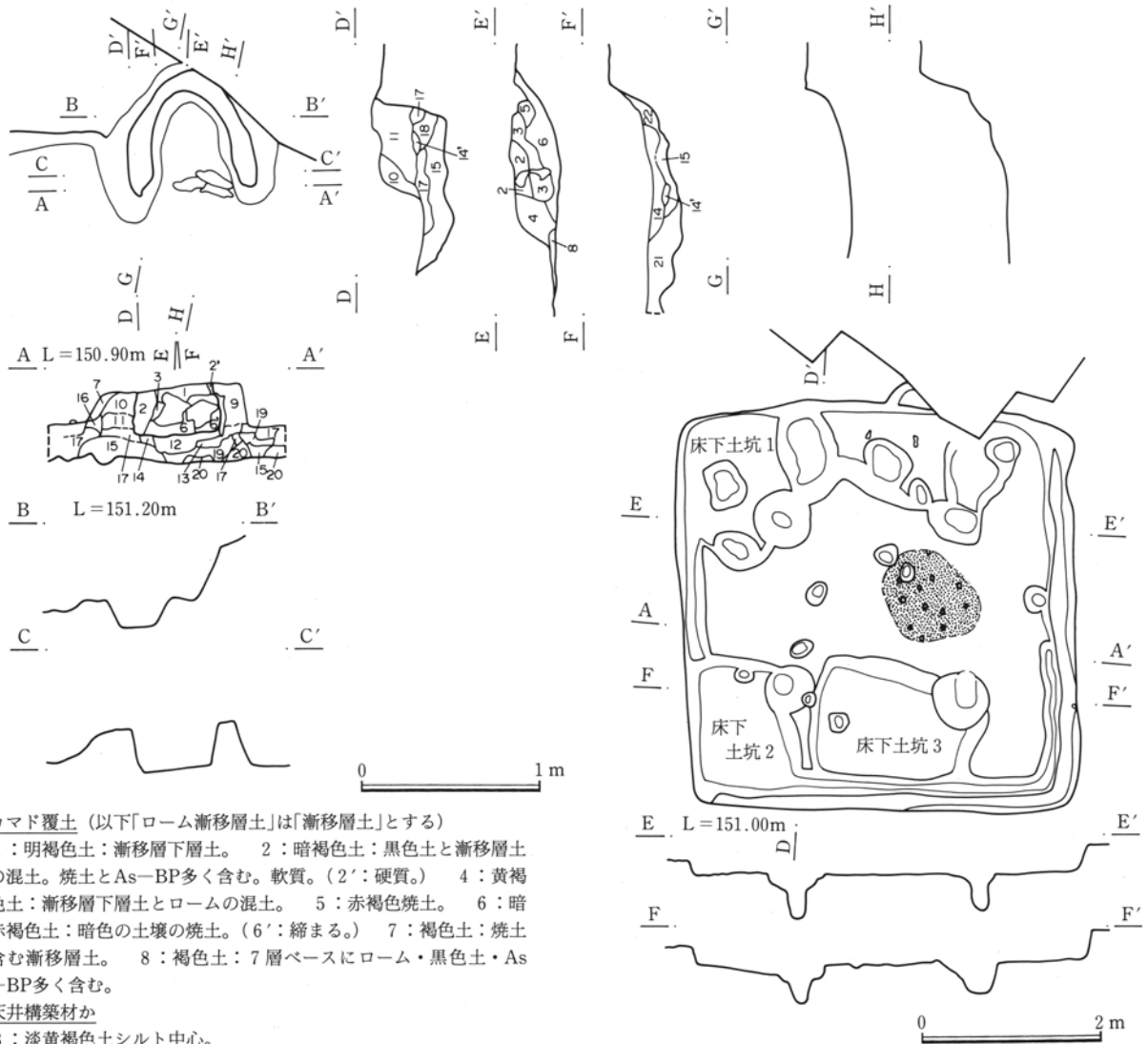
概要 本住居はK区中北部に位置する、K区に於いては大型のものに属する竪穴住居で、南東部の一部が路線外に出て調査することができなかった。

本住居からの遺物の出土は多くなかったが、このうち本住居に伴うと思われるものには7世紀前半期の特徴を示す土師器坏(0, 1)があり、北寄りの部分を中心にこも編み石(2~16)も見られた。

一方、覆土中からは土師器甕片を中心に、7世紀前半期の特徴を持つ土師器甕(17)、そしてこも編み石(18~26)や磨石(27)などが見られた。

以上の点から本住居は概ね7世紀前半期の所産として把握され、覆土中の遺物から奈良・平安時代頃まではその痕跡を留めていたことが窺われる。

また、本住居は掘り方面の構造から、南と西に若



カマド覆土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)
 1：明褐色土：漸移層下層土。 2：暗褐色土：黒色土と漸移層土の混土。焼土とAs-BP多く含む。軟質。(2'：硬質。) 4：黄褐色土：漸移層下層土とロームの混土。 5：赤褐色焼土。 6：暗赤褐色土：暗色の土壤の焼土。(6'：締まる。) 7：褐色土：焼土含む漸移層土。 8：褐色土：7層ベースにローム・黒色土・As-BP多く含む。
 天井構築材か
 3：淡黄褐色土シルト中心。
 袖構築材
 9：淡茶褐色土：淡褐色シルトに焼土・青灰色シルト・ロームを多く含む。燃焼部側弱い焼土化。 10：淡青灰色土：青灰色・淡褐色シルト主体。 11：淡黄褐色土主体。部分的に弱い焼土化。 16：暗褐色土：漸移層土に淡褐色シルト混入。
 カマド掘り方覆土
 12：暗赤褐色土：焼土化見る漸移層土主体。 13：淡赤褐色土：弱

い焼土化見る漸移層土主体。 14・14'：茶褐色土：弱い焼土化見る漸移層上層土主体。 15：黒褐色土：黒色土と漸移層上層の混土主体。 17：淡茶褐色土：ロームと漸移層下層土の混土。 18：黒色土：黒色土主体。 19：明褐色土/21：淡茶褐色土：ロームと漸移層土の混土主体。 20：明黄褐色土：ローム。下位はプライマリーである可能性大。 22：淡黄褐色土：暗黄色ローム主体青灰色シルト混入。

第640図 H-49号住カマド及び掘り方

干の拡張の行われていたことが確認される。

規模 長軸：456cm 短軸：442cm 深さ：32cm

カマド 幅：104cm 奥行：83cm 左袖 幅：36cm 長さ：50cm 高さ：25cm 右袖 幅：33cm 以上 長さ：40cm以上 高さ：21cm 燃焼部 径：33×62cm

柱穴1 径：65×64cm 深さ：84cm 柱穴2 径：58×54cm 深さ：71cm 柱穴3 径：64×62cm

深さ：64cm 柱穴4 径：57×56cm 深さ：79cm

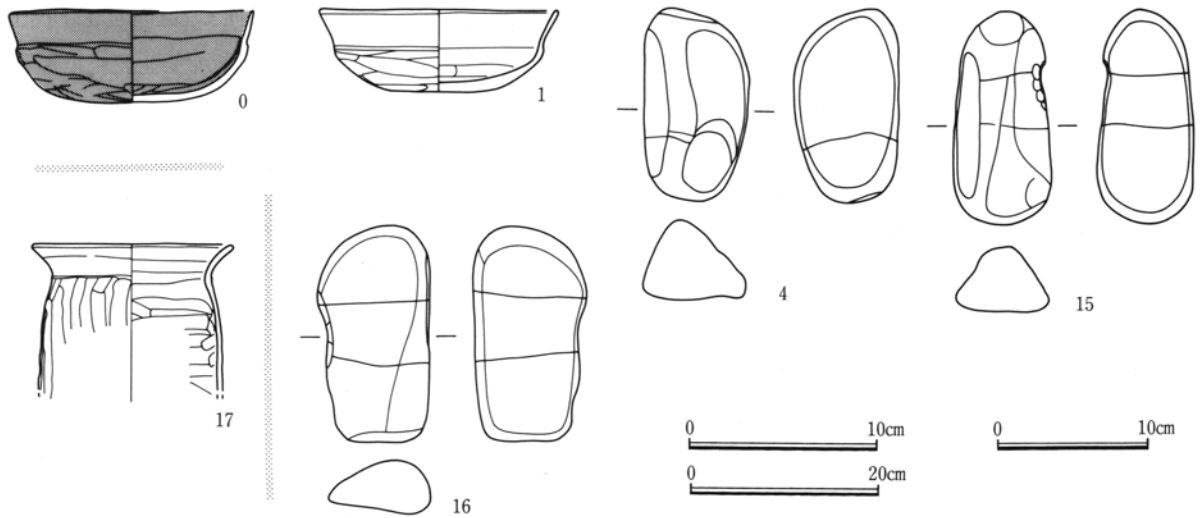
貯蔵穴 上位構造 径：98×78cm 深さ：17cm

下位構造 径：44×39cm 深さ：13cm

周溝 幅：15~22cm 深さ：4cm

床下土坑1 径：53×47cm 深さ：51cm 床下土坑2 径：154×113cm 深さ：17cm 床下土坑3 径：167×140cm以上 深さ：11cm

掘り方周溝 幅：15~26cm 深さ：12cm以下



第641図 H-49号住居出土遺物

構造 本住居はその一部を調査できなかったのであるが、プランは概ね方形を呈する。

掘り方を有し、掘り方には床下土坑2・3のような大型の長方形様のプランの土坑状の掘り込みが南端部を除く東・西壁際に掘削され、この他にも床下土坑1などの若干の土坑・ピットの掘削が見られた。また西壁と南壁西半の壁際より20~25cm程内側には拡張のあったことを示す周溝が見られる。尚、中央やや南寄りには径115×90cmの範囲で粘土の分布が見られた。床面はこうした構造を持つ掘り方をロームやローム漸移層土等で埋め戻して造っている。

カマドは東カマドで、東壁中央やや南寄りに造られる。カマドは掘り方を有し、これを焼土を含むローム漸移層土等で埋め戻して焼成面を造っている。燃

焼部は東壁を跨ぐ位置に設定され、その両側、壁面より手前側にシルトを中心とした土壤で袖を造っているが、その燃焼面側は良く焼けている。天井は天井石を渡しており、3層としたシルト中心のものが天井材の名残であろうと判断される。

床面では主柱穴4基と貯蔵穴1基を確認した。このうち柱穴は何れもしっかりした掘り方を有し、底面及び断面の観察から柱材の径は20cm程あったものと想定される。一方、上位構造と下位構造を持つ貯蔵穴は、住居南東コーナー部に造られる。上位構造は東壁に接して掘削される隅丸方形プランの浅い掘り込みのもので、その北寄りに柱穴様の掘削形態を持つ下位構造が掘削されている。尚、貯蔵穴本体は後者で、前者については蓋等の設置が想定される。

H-50号住居（古墳時代後期、第642図、図版258・263）

概要 本住居はK区中部に位置する竪穴住居であるが、そのほとんどは調査区外に出ており、更に調査範囲の西半も掘り過ぎて床面を調査できなかった。

本住居で確認された出土遺物は少なく、その中で本住居に伴うと判断されたものは僅かに6世紀後半期の特徴を示す土師器杯（1）1点のみであった。

一方、覆土中からは6世紀後半期の特徴を持つ土師器高杯（2）など古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての遺物の出土が認められた。

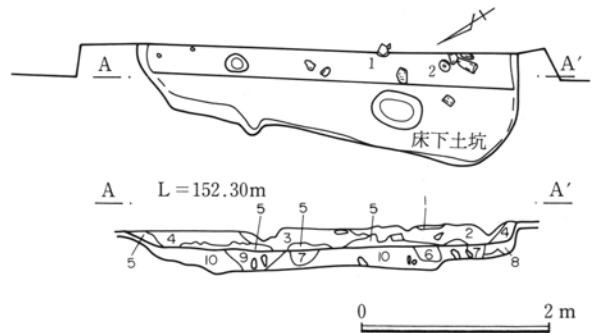
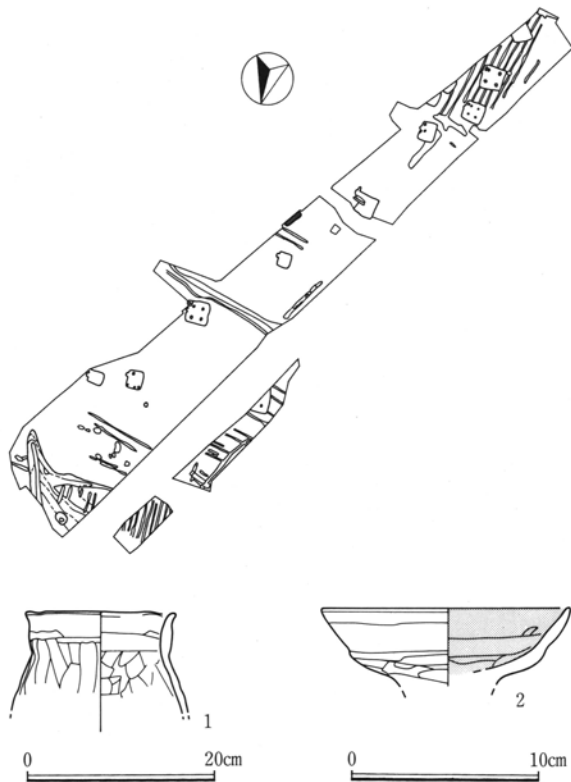
以上の状況のため本住居の時期特定は難しいが、概ね6世紀後半期頃の所産と判断される。

規模 長軸：400cm 短軸：120cm以上 深さ：23cm
床下土坑 径：68×37cm 深さ：10cm

構造 本住居はその一部を調査できたに過ぎないが、そのプランは隅丸方形様を呈するものと想定される。

全体的構造は不明だが掘り方を有し、これをローム等で埋め戻して床面を造っている。

尚、カマド・柱穴・貯蔵穴等は確認できなかった。



住居覆土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)
 1:炭化物層:2層土に炭化物を含む。 2:茶褐色土:漸移層土にカーボン・ローム含む。 3:暗褐色土:黒色土・漸移層土の混土。 4:淡褐色土:漸移層土の混土。ローム含む。 5:

黄褐色土:漸移層下層土とロームの混土。
 掘り方覆土
 6:茶褐色土:黒色土・漸移層土・ロームの混土。 7:明褐色土:漸移層土にローム混入。 8:明褐色土:ロームと漸移層土の混土。 9:明黄褐色土:ロームに漸移層土混入。 10:明黄褐色土:ロームに黒色土混入。

第642図 H-50号住居及び出土遺物

H-53号住居 (古墳時代後期. 第643図. 図版258・263・266)

概要 本住居はK区北西部に位置する竪穴住居で、その中～東の部分は町道石神・多比良線に出ている調査する事ができなかった。

本住居の出土遺物はさして多くなかったが、この中で本住居に伴うと判断されたものには何れも6世紀後半期の特徴を示す土師器(1,2)がある。

一方、覆土中からは土師器甕片を中心に、土師器碗(3)やこも編み石(4)の出土が見られた。

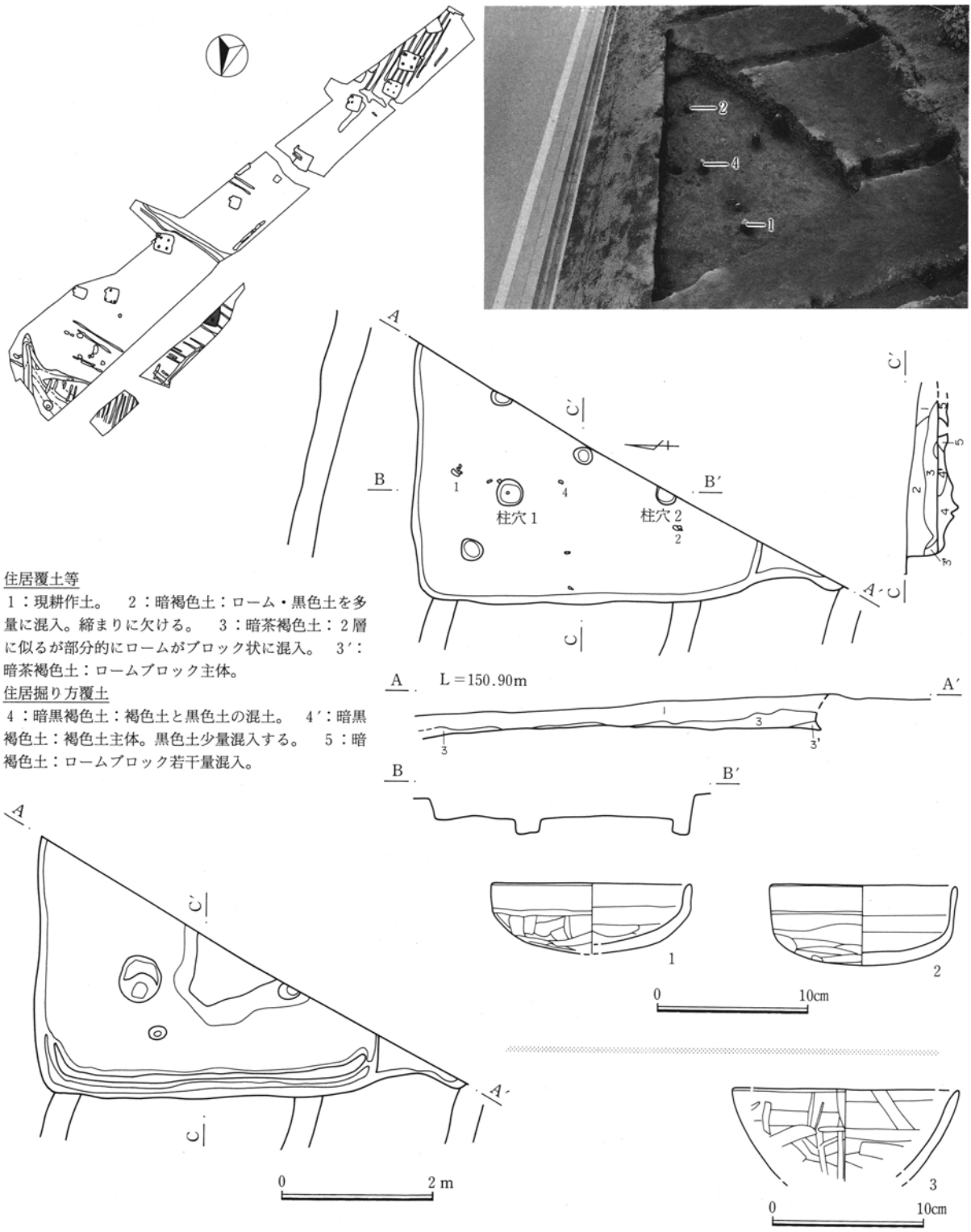
以上の点から、本住居は概ね6世紀後半期の所産として把握される。

規模 長軸:466cm 短軸:336cm以上 深さ:49cm
 柱穴1 径:34×34cm (掘り方面径:58×34cm)
 深さ:19~55cm 柱穴2 径:27×20cm以上
 深さ:19cm
 周溝 幅:10~13cm 深さ:10cm

構造 本住居は全面を調査できてはいないが、やや隅丸の方形プランを呈するものと判断される。

掘り方を有しており、掘り方面の調査範囲内に於いては、西壁から北西コーナーにかけての壁際には周溝の掘削が見られた。また、この周溝の内側には幅4~14cmの堀残し部を伴ってその内側には幅81~180cmを測る周溝状の掘り込みが住居の壁際を一周するように掘削されているのが見られ、中央には隅丸方形様プランの掘り残しが残される。

床面はこうした構造を持つ掘り方を黒色土・褐色土・ロームで埋め戻して造っているが、床面に於いては同じような掘削深度を測る5基のピットを確認している。これらのピットのうち支柱穴と判断したものは柱穴1と柱穴2である。この2基の柱穴はさして規模の大きなものではなかったが、柱穴1は掘



住居覆土等

1：現耕作土。 2：暗褐色土：ローム・黒色土を多量に混入。締まりに欠ける。 3：暗茶褐色土：2層に似るが部分的にロームがブロック状に混入。 3'：暗茶褐色土：ロームブロック主体。

住居掘り方覆土

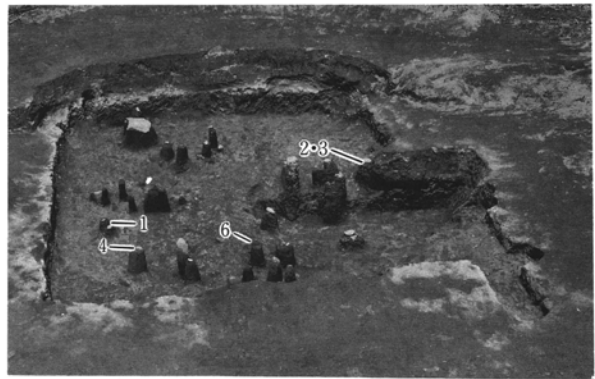
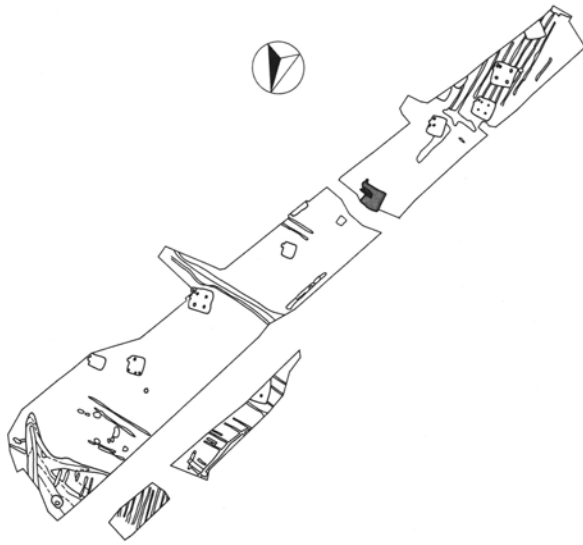
4：暗黒褐色土：褐色土と黒色土の混土。 4'：暗黒褐色土：褐色土主体。黒色土少量混入する。 5：暗褐色土：ロームブロック若干量混入。

第643図 H-53号住居及び出土遺物

り方面に於いてしっかりした径の大きな柱穴として見られた。床面に見られたものが柱痕を示すものである可能性も考慮されるが、覆土の記録化ができなかったので特定できなかった。尚、床面に見られた

柱穴以外のピットについては、本住居に伴うものであるか否かも特定することはできなかった。

尚、カマド及び貯蔵穴については調査した範囲の中で確認することはできなかった。

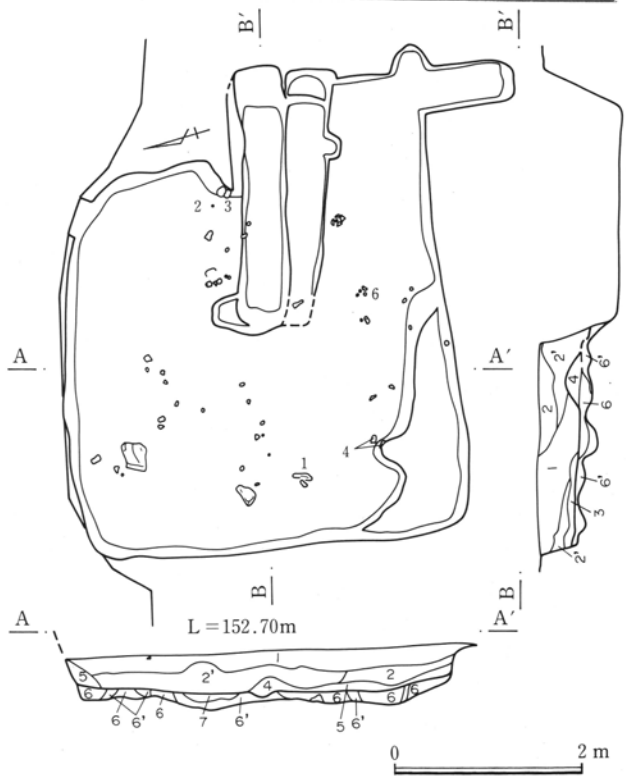
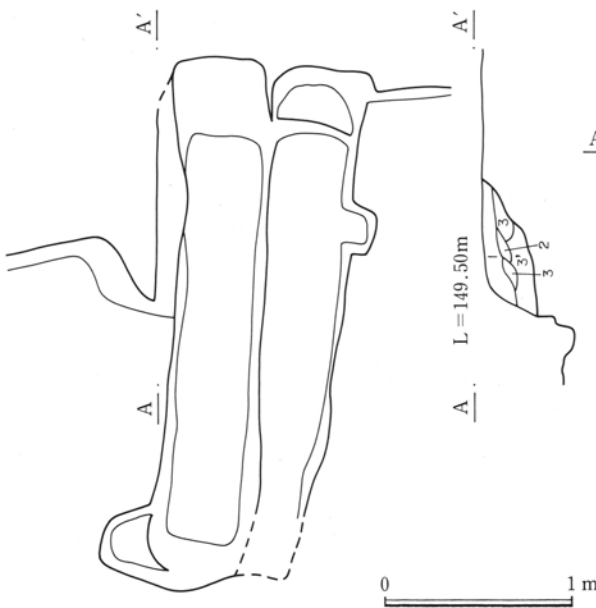


住居覆土

1：黒褐色土：褐色土若干量含む。 2：暗褐色土：褐色土少量、くすんだ褐色土微量に含む。(2'：2層に比し黒味強く、より強い粘性持つ。) 3：褐色土：黒色土若干量混入。緻密でここで一面を成す。 4：暗褐色土：比較的大きな褐色土相当量含まれる。 5：褐色土：黒色土若干量混入する。

掘り方覆土

6：暗茶褐色土：黒色土少量混入。(6'：6層に比し黒色土の混入多い。) 7：暗黄褐色土：暗褐色土中に黄褐色土縞状に混入。



カマド袖構築材

1：黒色土：一部攪乱が及ぶ。微量の焼土と粘土含む。 2：暗灰褐色土：粘土を微量に含む。 3：暗赤褐色土：焼土を若干量含む。(3'：焼土を多量に含む。)

第644図 H-67号住居

H-67号住居(古墳時代後期, 第644~645図, 図版259・263・266)

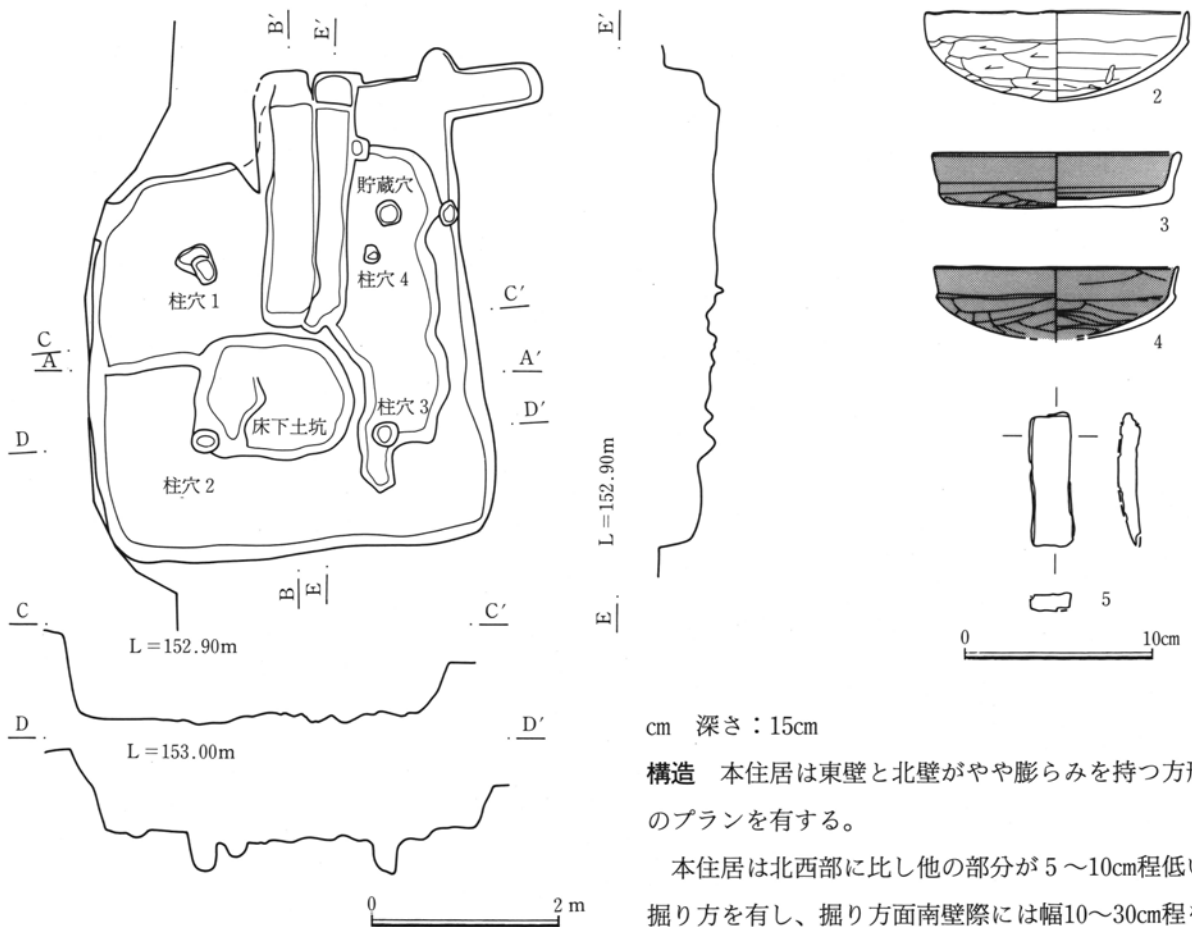
概要 本住居はK区中南部の竪穴住居跡である。

本住居の北東部は幾つかの短冊形の土坑の掘削によって、特にカマドは大きく壊されていた。

出土遺物は多くなく、本住居に伴うと判断されたものは僅かにこも編み石1点(1)だけであった。

一方、覆土中からは7世紀前半期の特徴を示す土師器杯(2~4)の他、短冊形の鉄斧(5)やこも編み石(6)などの出土が見られた。

以上の状況から断定はできないが、出土位置から土師器杯(2, 3)が本住居に伴う可能性を持つため、本住居には7世紀前半期という時期を充てたい。



第645図 H-67号住居掘り方及び出土遺物

規模 長軸：422cm 短軸：418cm 深さ：42cm
カマド 残存幅：60cm 奥行き：60cm以上 左袖幅：49cm以上 長さ：51cm 高さ：38cm
柱穴1 径：31×23cm 深さ：24cm (床面からの深さ：35cm) **柱穴2** 径：28×24cm 深さ：39cm (床面からの深さ：53cm) **柱穴3** 径：27×26cm 深さ：37cm (床面からの深さ：43cm) **柱穴4** 径：20×18cm 深さ：12cm (床面からの深さ：21cm) **貯蔵穴** 径：26×25cm 深さ：37cm (床面からの深さと同じ) **床下土坑** 径：170×134

H-68号住居 (古墳時代後期, 第646~647図, 図版259・263・266)

概要 本住居はK区南部に在る竪穴住居跡である。出土遺物のうち本住居に伴うと判断されたものには7世紀後半期の特徴を示す土師器坏(1)や、こも編み石(2~10,14)がある。

cm 深さ：15cm

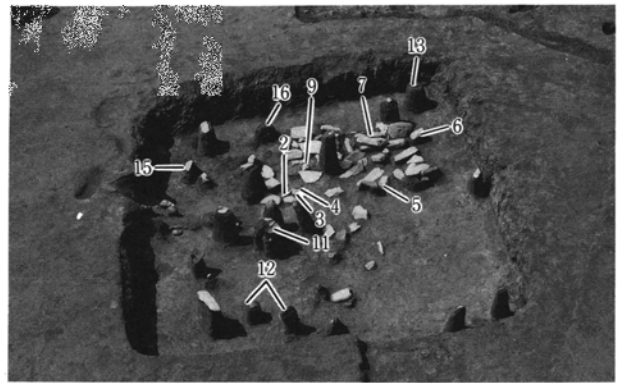
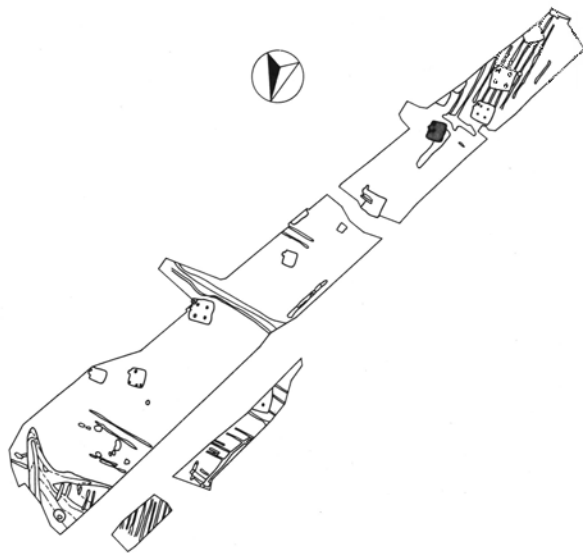
構造 本住居は東壁と北壁がやや膨らみを持つ方形のプランを有する。

本住居は北西部に比し他の部分が5~10cm程低い掘り方を有し、掘り方面南壁際には幅10~30cm程を測る帯状の掘り残しが、また住居中央西寄りには大型の床下土坑の掘り込みが見られた。床面はこのような掘り方を暗褐色土等で埋め戻して造っている。

カマドは東カマドで東壁の中程に造られる。暗色系の土壌で造られる左袖の過半を除いて壊されていたためその状況はほとんど不明であるが、燃焼部は東壁を跨ぐ位置に設定されたものと想定される。

床面に柱穴・貯蔵穴等は認められなかったが、掘り方面のピットの中に支柱穴・貯蔵穴と判断されるものを確認した。このうち柱穴と想定される4基は何れも径が小さく柱材も径の細いものと想定される。また、柱穴様の掘削形態を示す貯蔵穴の径も小さい。

一方、覆土中では南西部を中心に床上数cm以上のレベルで浅い摺鉢状に多量の片岩質の礫が投棄され、7世紀後半期の土師器坏(11,12)や須恵器坏(13)の他、こも編み石(15~17)なども見られた。

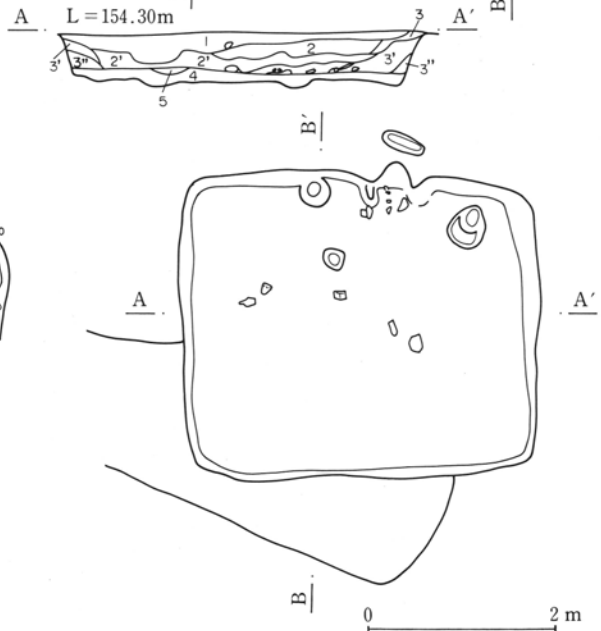
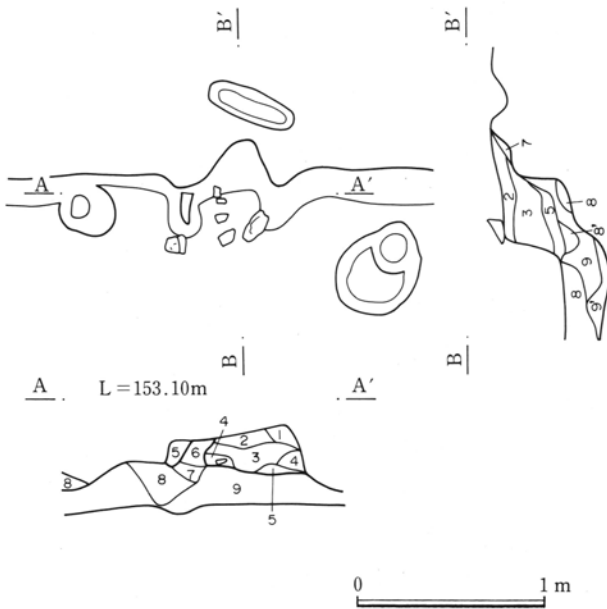
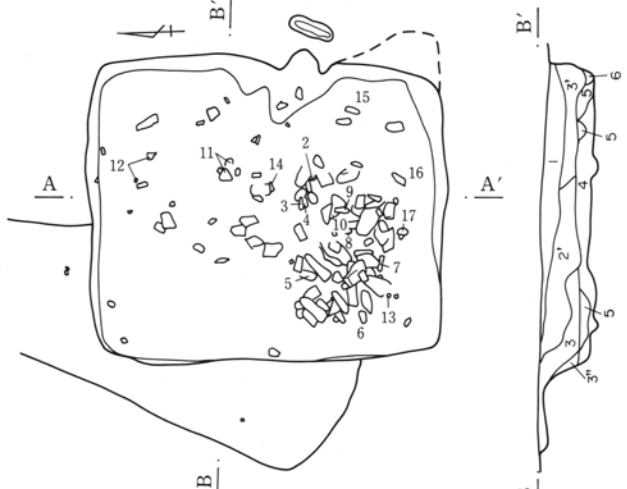


住居覆土

1：暗褐色土：上層中心に多量のAs-A、褐色土粒の混入が見られる。 2：暗褐色土：多量の褐色土混入。(2'：2層に比し褐色土の混入大幅に減少。) 3：暗黒褐色土：褐色土微量に混入。(3'→3→3"の順で褐色土の混入増加。)

住居掘り方覆土

4：暗黄褐色土：暗褐色土微量に混入。 5：暗黒褐色土：暗褐色土と黒色土の混土。 6：漆黒土：ロームが少量混入する。



カマド覆土

1：暗黒褐色土：ローム・焼土を微量に含む。 2：暗黒褐色土：1層に比し色調明るく、焼土殆ど見られない。 3：暗赤黒褐色土：ロームと焼土を比較的多量に含む。 4：暗黒褐色土：淡灰褐色粘質土を若干量含み、焼土微量に見る。 5：黒褐色土：ローム微量に含む。

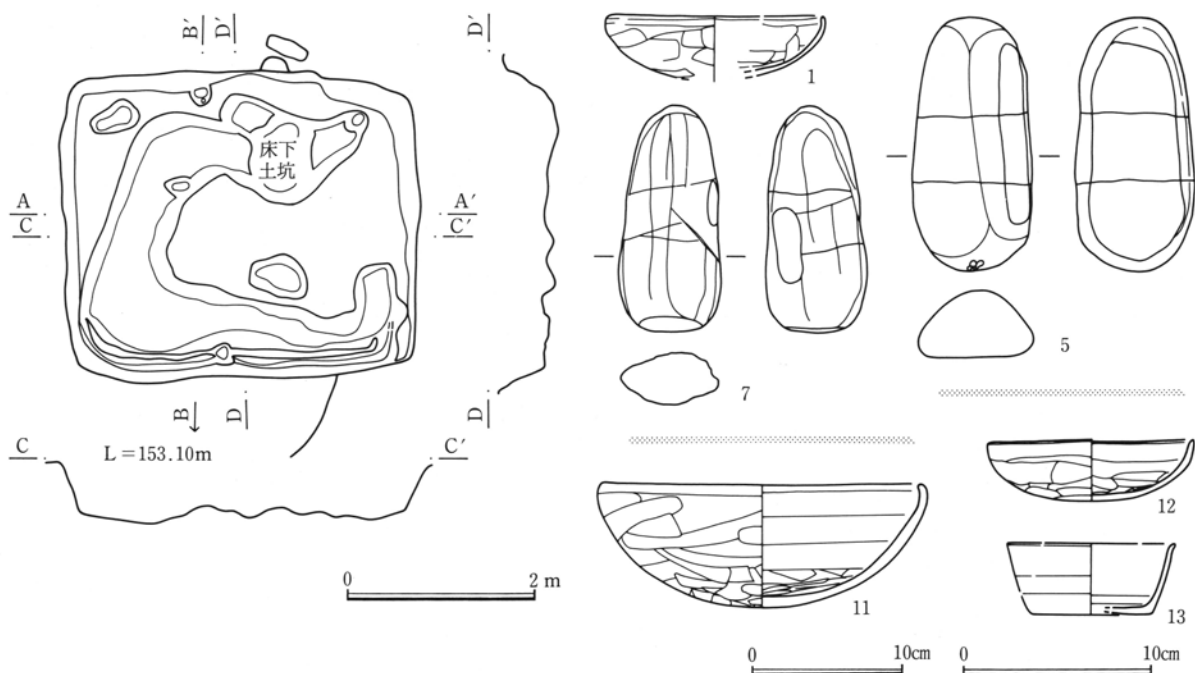
袖構築材

6：明黒褐色土：焼土を全く含まず、ローム微量に入るのみ。

カマド掘り方覆土

7：黒褐色土：焼土を含む。 8：黒褐色土：ロームと黒色土の混土。(8'：焼土を若干量含む。) 9：暗茶褐色土：灰褐色土とロームの混土。(9'：ロームを主体とする。)

第646図 H-68号住居



第647図 H-68号住居掘り方及び出土遺物

以上の点から、本住居は概ね7世紀後半期頃の所産として把握され、住居廃棄後早い段階から遺物や礫の投棄の行われたことが窺われる。

規模 長軸：380cm 短軸：328cm 深さ：46cm
カマド 幅：77cm 奥行：50cm 左袖 幅：18cm 長さ：33cm 高さ：14cm 右袖 幅：30cm 長さ：34cm 高さ：34cm 燃烧部 径：31×23cm
煙道 幅：33cm 長さ：27cm
貯蔵穴 径：47×39cm 深さ：20cm
床下土坑 径：95×66cm 深さ：21cm
周溝 幅：10～23cm 深さ：11cm

構造 本住居は横長の隅丸方形プランを呈する。

掘り方を有し、掘り方面の西壁周辺の壁際には周溝が掘削され、H-53号住居同様、周溝の内側には幅10～11cmの帯状の掘り残しを挟み、或いはテラス

状の掘り残しを伴い乍ら幅32～94cm、深さ13cm以下の周溝状の掘り込みが南壁の中・東部を除いて廻っている。また、カマド構築に伴うものと想定される床下土坑など、幾つかのピットが見られた。床面はこうした掘り方を埋め戻して造っている。

カマドは東壁中央やや南寄りに設けられ、掘り方を有し、これを埋め戻して燃烧面を造っている。燃烧部は東壁より手前側に設定され、その両側手前に礫を立てて袖石とし、明黒褐色土で袖を造り出している。煙道は東壁面を削って鋭角に立ち上げている。

床面に於いては3基のピットを見たが、この中に柱穴は認められず、カマド右側のものを貯蔵穴と判断した。貯蔵穴は楕円形プランで深さ11cm程の上位の構造と、その東端に深さ9cm程の柱穴様の掘削形態で掘られる下位構造とに分けられる。

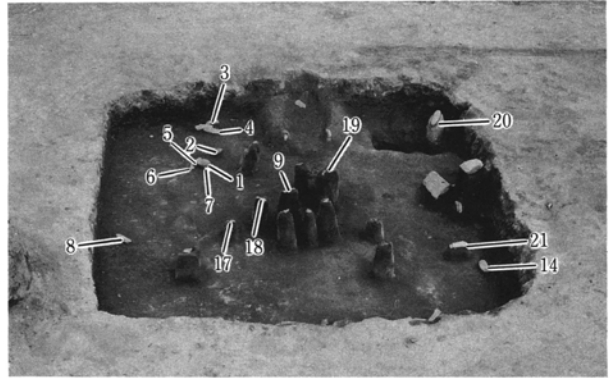
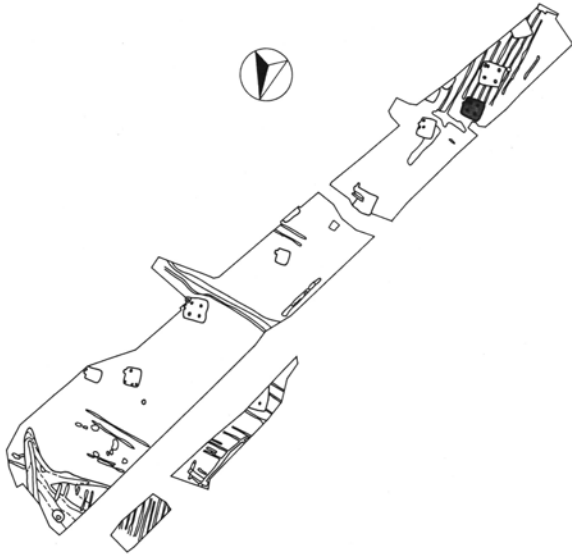
H-69号住居 (古墳時代後期, 第648～649図, 図版259・263・266)

概要 本住居はK区南部に在る竪穴住居跡である。

出土遺物はさして多くなかったが、本住居に伴うと判断されたものには6世紀後半期の特徴を示す土師器坏(1, 2)、南西コーナーを中心にこも編み石(3～14)の出土を見た。

一方、覆土中からは有溝砥石(15)や磨石(18)、6世紀後半期の土師器碗(17)や7世紀前半期の土師器坏(17)、こも編み石(19～21)などを見た。

以上のように出土遺物は少なかったが、本住居は概ね6世紀後半期の所産と判断される。



住居覆土 [A-A'・C-C'セクション]

1：暗黒褐色土：褐色土・白色土多量に含み、炭化物若干混入。
 (1'：更に多量の褐色土含む)。 2：暗黒褐色土：1・1'層より色調明るく褐色土更に多く混入。 3：褐色土：少量の暗褐色土入る。 4：暗褐色土：少量のローム混入し締まりに欠ける。(4'：ローム減少し黒味増す)

柱穴2覆土

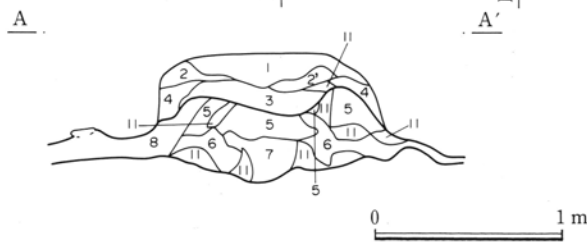
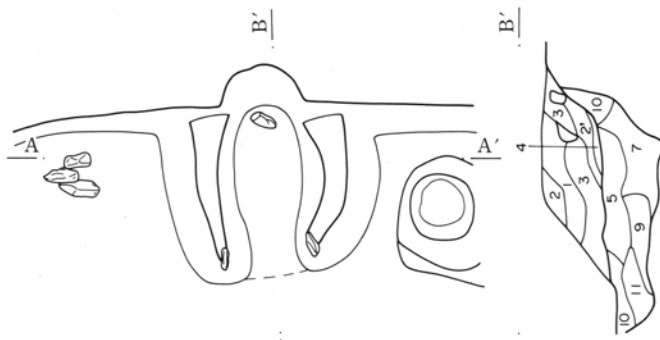
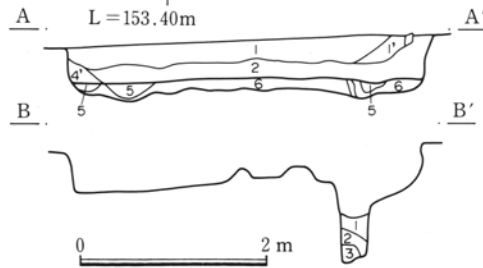
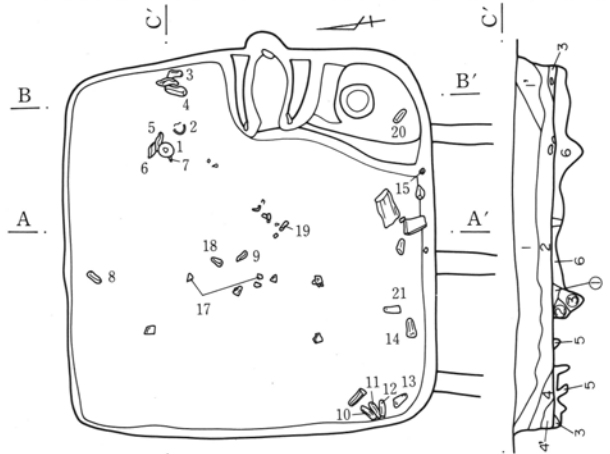
①：暗褐色土：ローム少量含む。②：暗褐色土：微量のローム含む。
 ③：暗褐色土。

住居掘り方覆土

5：暗褐色土。 6：暗褐色土：黄褐色土中に黒色土微量混入。

貯蔵穴覆土 [B-B'セクション] (全体に締まりに欠ける)

1：暗褐色土：黒色土微量に含む。 2：暗褐色土。 3：暗褐色土：As-BP若干量含む。



カマド覆土

1：暗黄褐色土：淡褐色土と黒褐色土の混土。褐色土多量に含む。
 2：黒色土：褐色土少量混入。(2'：微量の焼土含む)。 3：暗褐色土：暗黄褐色土中に黒色部分的に混入し赤褐色焼土局部的に多量に見る。 4：暗黄褐色土：褐色土多量に含み、微量の焼土散見。

袖槽築材

5：暗茶褐色土：焼土と黒色土微量混入。 11：ローム。

カマド掘り方覆土

6：暗褐色土：淡褐色土微量含む。 7：黒色土：ローム少量含む。
 8：暗褐色土。 9：暗黒褐色土：黒色土と褐色土の混土。 10：暗茶褐色土：焼土微量含む。

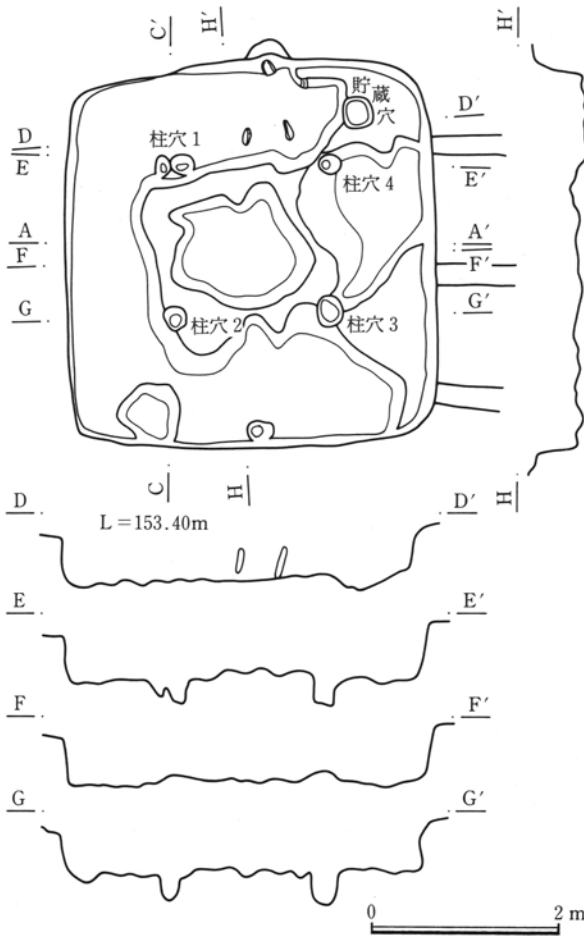
規模 長軸：412cm 短軸：392cm 深さ：52cm

カマド 幅：115cm 奥行き：112cm 左袖 幅：38cm 長さ：90cm 高さ：18cm 右袖 幅：41cm

長さ：81cm 高さ：17cm 燃烧部 径：36×93cm

貯蔵穴 幅：126cm 奥行き：106cm 上位構造 幅

第648図 H-69号住居



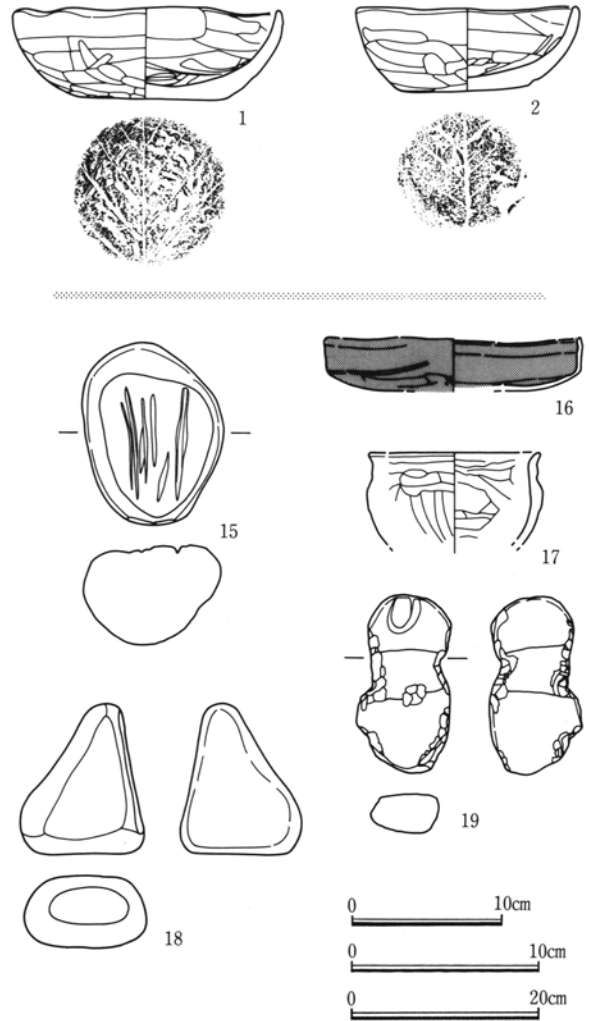
：91cm 奥行き：80cm 深さ：25cm 周堤幅：24～32cm 長さ：127cm 周堤高さ：7cm 下位構造径：36×36cm 深さ：69cm

床下土坑 径：152×132cm 深さ：9cm

柱穴1 径：26×24cm 深さ：20cm (床面からの深さ：33cm) 柱穴2 径：25×24cm 深さ：33cm (床面からの深さ：40cm) 柱穴3 径：33×29cm 深さ：40cm (床面からの深さ：44cm) 柱穴4 径：25×22cm 深さ：23cm (床面からの深さ：36cm)

構造 本住居は隅丸方形のプランを呈する。

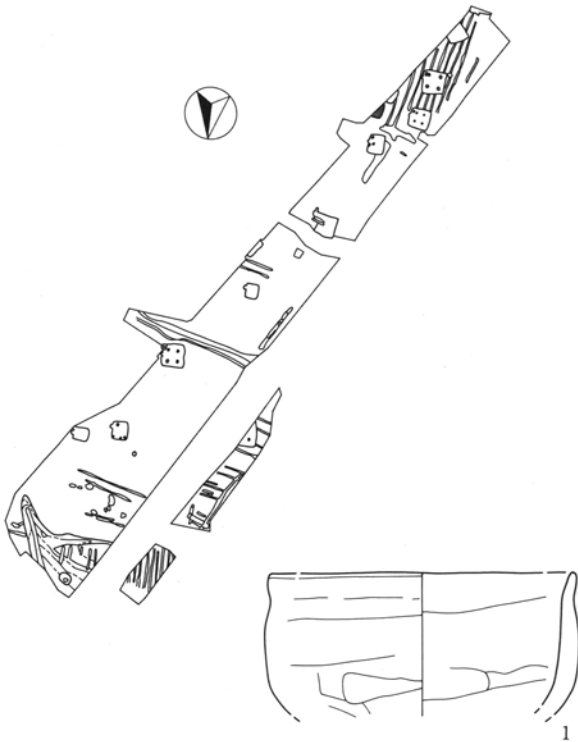
凹凸はあるが幅72～133cm、深さ5～17cmを測る周溝状の掘り込みが、南東コーナーを除き壁際に一周する掘り方を有し、中央の掘り残し部分には不整形プランの土坑が掘削され、この他にも幾つかのピットが見られた。床面はこうした構造の掘り方を暗褐色土等で埋め戻して造っている。



第649図 H-69号住居掘り方及び出土遺物

カマドは東壁中央付近に造られ、掘り方を暗褐色土等で埋め戻して焼面を造っている。焼部は僅かに東壁に掛かる位置に設定され、袖は焼部の両側手前に礫を立てて袖石とし、焼部を丸く囲むように暗茶褐色土やロームで袖を造っている。

床面に於いてはカマド右側の南東コーナーに、非常に特徴的な貯蔵穴1基を確認した。貯蔵穴はコーナーに接して隅丸方形プランに浅く掘削される上位構造と、その北寄りに柱穴様の形態に掘削される下位構造とに分けられるが、上位構造にあってはカマド右袖先端から南壁にかけて周堤が設けられ、貯蔵穴の西側が画されている。尚、柱穴については床面には確認されなかったが、掘り方面のピットの中で柱穴1～4とした径は小さいものが比定される。



耕作土

1：暗茶褐色土：As-Aを多量に含む。 2：暗茶褐色砂質土：上層に若干量のAs-Aを含む。

住居覆土

2'：暗茶褐色土：2層より弱い砂質を呈し、黄褐色土少量混入。
3：暗褐色土：2'層に比し、黄褐色土が更に多量に含まれる。
(3'：更に多量の黄褐色土的要素が含まれる。) 4：暗褐色土：3層の黄褐色土が更に混入し、黒色土も部分的に見られる。

住居掘り方覆土

7：褐色土：黒色土が少量混入する。

H-70号住居(古墳時代後期か、第650図、図版260・263)

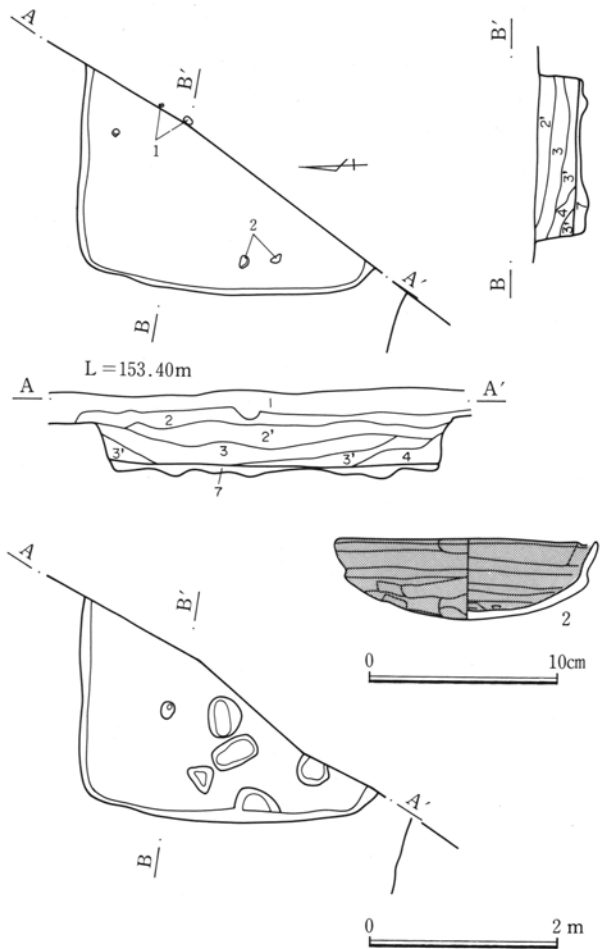
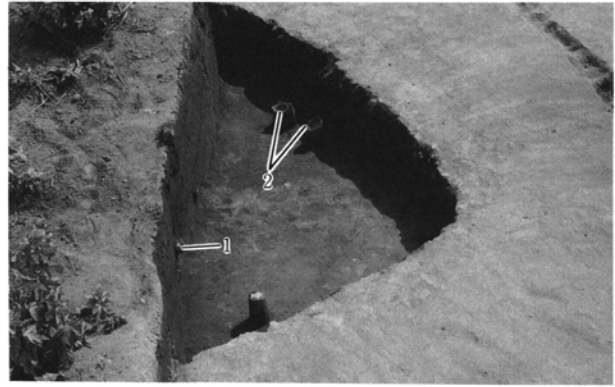
概要 本住居はK区南部の竪穴住居跡で、多くが調査区外に在るため北西部を調査したに過ぎない。

出土遺物は少なく、本住居に直接伴う遺物は確認できなかったが、覆土中からは6世紀後半期のものと思われる土師器鉢(1)や7世紀前半期の所産と思われる土師器坏(2)などの出土が見られた。

このような状況のため、本住居の時期特定は難しいが、覆土中の土師器の鉢(1)や坏(2)が比較的低い位置に見られたことから本住居は西暦600年を前後する時期以前の所産ではないかと推定される。

規模 幅：321cm以上 残存長：226cm 深さ：50cm
ピット1 径：20×12cm 深さ：19cm

構造 上述のように本住居はその一部を調査できた

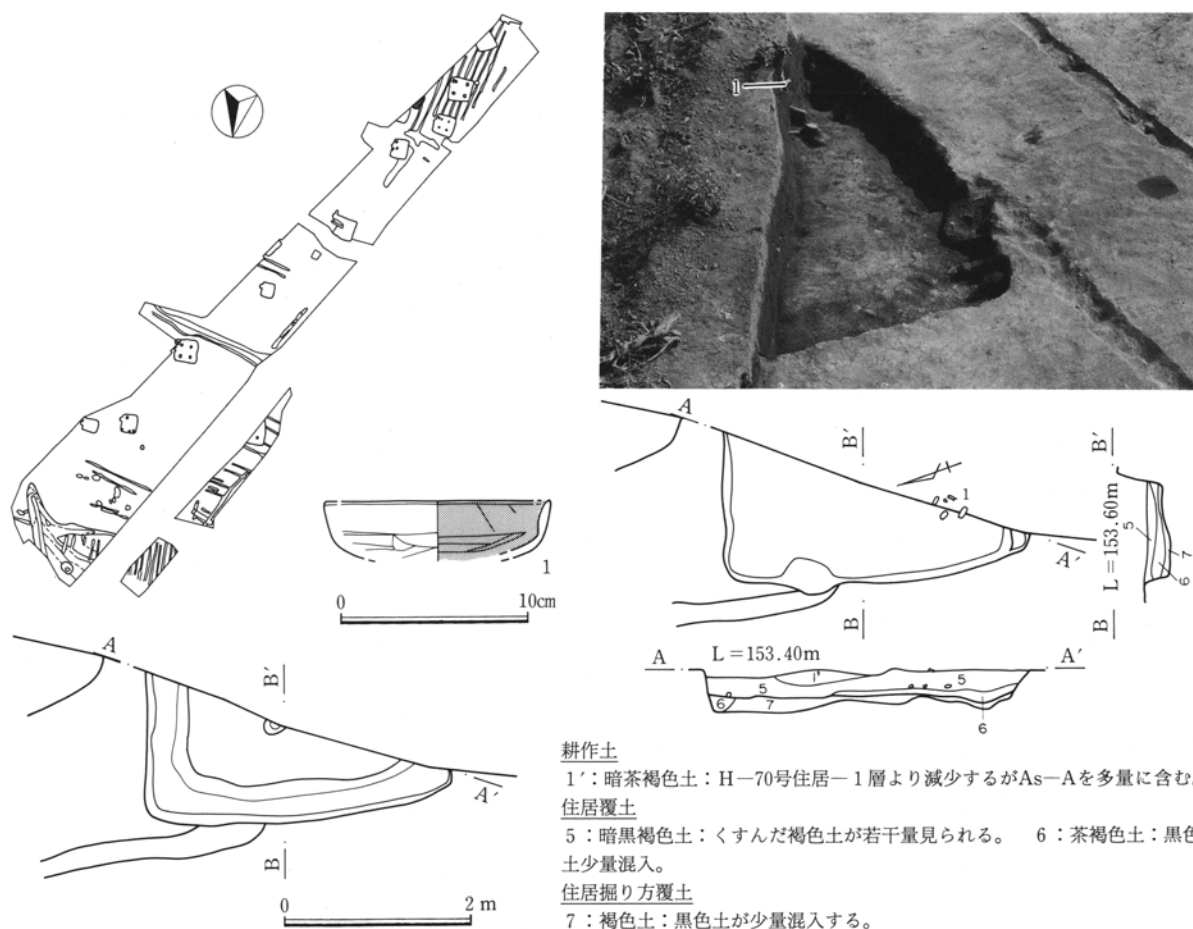


第650図 H-70号住居及び出土遺物

に過ぎないので全体の状況はつまびらかでないが、概ね隅丸方形のプランを呈する。

掘り方を有し、掘り方面には数cm~10cm程の深さの掘り込みが見られるが特段の構造は認められない。床面は掘り方を褐色土等で埋め戻して造っている。

カマド・柱穴・貯蔵穴等は認められなかったが、掘り方面のピット1には柱穴の可能性が考えられる。



第651図 H-71号住居及び出土遺物

H-71号住居 (時期不詳, 第651図, 図版260・263)

概要 本住居はK区南部に在る竪穴住居跡で、多くは調査区外に在って一部を調査できたに過ぎない。

出土遺物は覆土中出土の7世紀前半期の土師器坏片と、平安期の羽釜体部片の僅か2点であり、従って本住居の時期の特定はできなかった。

尚、住居の北西部には垂木材と考えられる若干の炭化材片の出土を見ており、焼失家屋と考えられる。

規模 幅: 329cm 残存長: 158cm 深さ: 21cm

構造 本住居はその一部を調査したに過ぎないが、概ね隅丸方形プランを呈するものと判断される。

本住居は掘り方を有し、掘り方面には幅28~39cm、深さ8cm以下を測る周溝状の整ったプランの掘り込みが壁際を廻っている。床面はこうした掘り方を褐色土等で埋め戻して造るが、南壁際には幅16cm、高さ11cmを測るテラス状の掘り残しが認められる。

尚、カマド・柱穴・貯蔵穴等は確認されなかった。

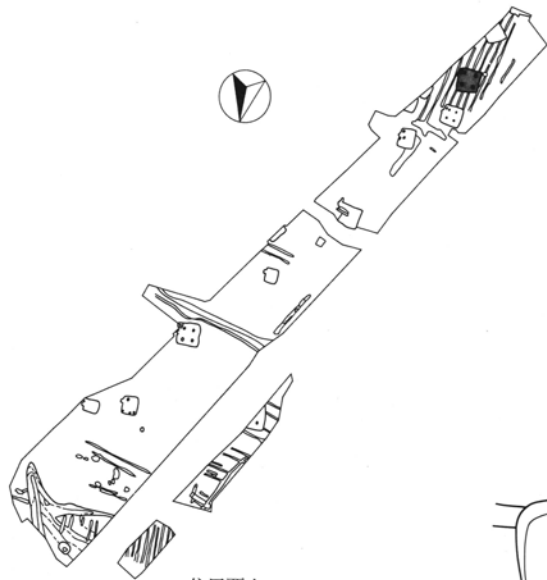
H-72号住居 (古墳時代後期, 第652~654図, 図版260・263~264・266)

概要 本住居はK区南部に位置する竪穴住居で、出土遺物のうち本住居に直接伴うものは何れも7世紀後半期の土師器坏(1, 2)や須恵器脚付盤(3)、そして鉸具(4)やこも編み石(5)がある。

一方、覆土中からは奈良・平安時代の土師器甕片

を中心に6世紀後半期の土師器小型甕(14)や7世紀後半期の土師器坏(6~13)と須恵器坏(16)・盤(15)、10世紀前半期の須恵器坏(17)の他、刀子(24)やこも編み石(18~23)の出土が見られた。

以上の点から本住居は概ね7世紀後半期の所産と

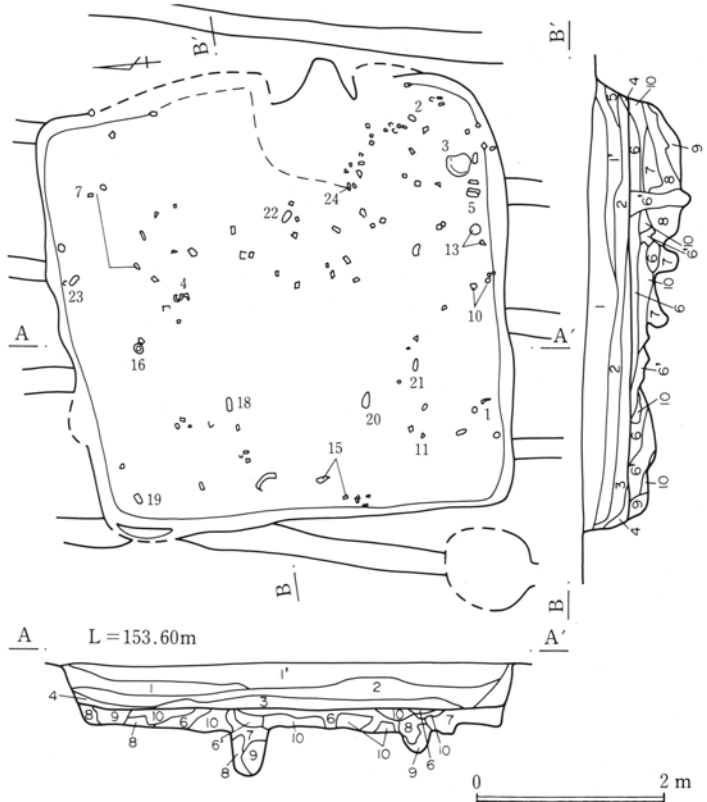
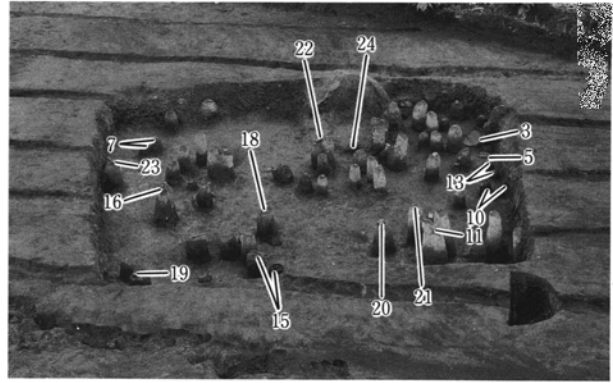


住居覆土

1：暗黒褐色土：白色土・褐色土を極めて多量に含む。赤褐色土（焼土か）の混入も比較的良く目立つ。（1'：炭化物加わる。） 2：暗黒褐色土：1層に比し褐色土の混入多く全体に色調明るい。 3：暗黒褐色土：赤褐色土の混入更に顕著。カマド付近で炭化物の混入量増加。 4：暗褐色土：汚れた暗褐色土。 5：暗黒褐色土：夾雑物殆ど見られず。

柱穴及び住居掘り方覆土

6：暗黒褐色土：褐色土斑状に相当量混入。（6'：褐色土更に増加） 7：暗黒褐色土：黒褐色土にローム少量混入。 8：暗黒褐色土：ローム微量含む。 9：暗茶褐色土。 10：暗茶褐色土：褐色土に暗褐色土少量混入。



第652図 H-72号住居

判断され、平安時代頃まではその痕跡を留めていたことが窺われる。

また後述の床面及び掘り片面の柱穴の所見から、本住居は西に向かって70~90cm、北に向かって80~95cm程拡張されていたことが確認された。

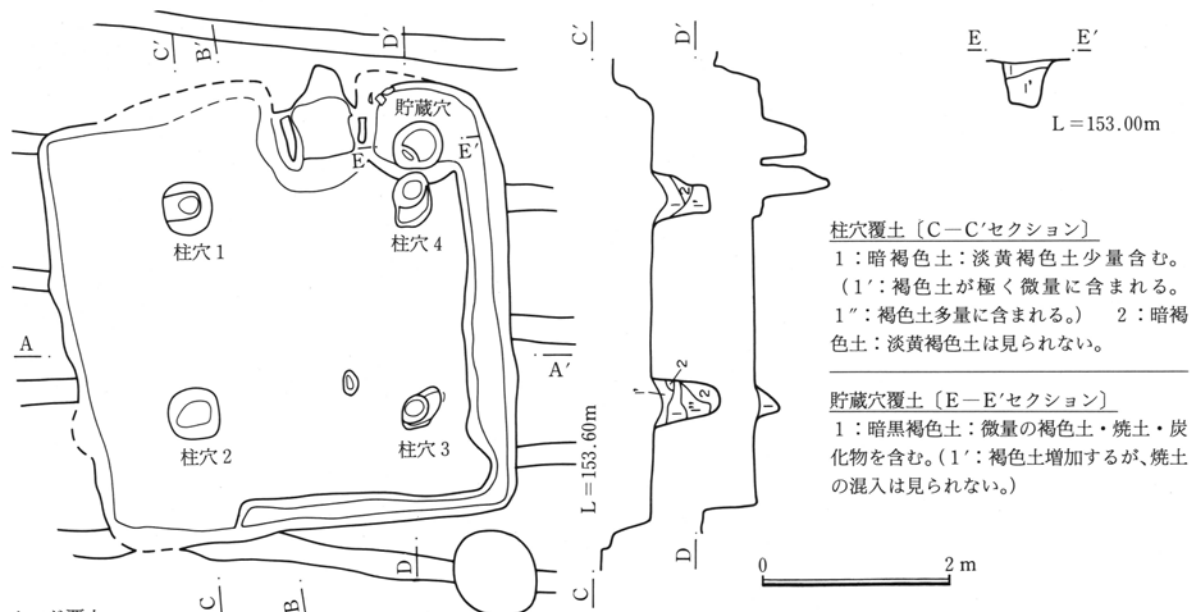
規模 長軸：推定486cm 短軸：485cm 深さ：65cm
カマド 幅：128cm 奥行：130cm 左袖 幅：27cm 長さ：推定98cm 高さ：27cm 右袖 幅：20cm 長さ：推定88cm 高さ：43cm 燃烧部 径：59×65cm 煙道 幅：45cm 長さ：33cm
柱穴1 径：54×53cm 深さ：76cm **柱穴2** 径：56×55cm 深さ：88cm **柱穴3** 径：51×36cm 深さ：74cm **柱穴4** 径：56×41cm 深さ：83cm
貯蔵穴 上位構造 径：約114×101cm 深さ：9cm
下位構造 径：52×49cm 深さ：62cm
周溝 幅：18~41cm 深さ：11cm

ピット1 径：25×23cm 深さ：12cm（床面からの深さ：64cm） **ピット2** 径：33×32cm 深さ：22cm（床面からの深さ：74cm） **ピット3** 径：26×25cm 深さ：45cm（床面からの深さ：71cm）

構造 本住居は方形に近い隅丸方形プランを呈し、壁際に幅13~76cmを測るテラス状の不整形な掘り残り、その内側に幅25~128cm、深さ13cm以下を測る不整形な周溝状の掘り込みなどを持つ掘り方を有する。床面こうした掘り方を埋め戻して造られている。

カマドは東カマドで東壁やや南寄りに設けられる。掘り方を有し、これを焼土を含む黒褐色土等で

第3章 発見された遺構と遺物



カマド覆土

1・1': 灰褐色粘質土主体。 2: 茶褐色粘質土: 灰色粘土混入。
 3: 黒褐色土: 茶褐色粘質土と焼土含む黒色土の混土。 4: 暗褐色土主体。 5: 暗褐色粘質土主体。 6: 赤暗褐色土: 灰白色粘土等含む。 7: 黒褐色土: 緻密。 8: 赤灰白色土: くすんだ焼土層と灰白色粘質土の混土。緻密。 9: 赤黒褐色土: 焼土主体。

袖構築材

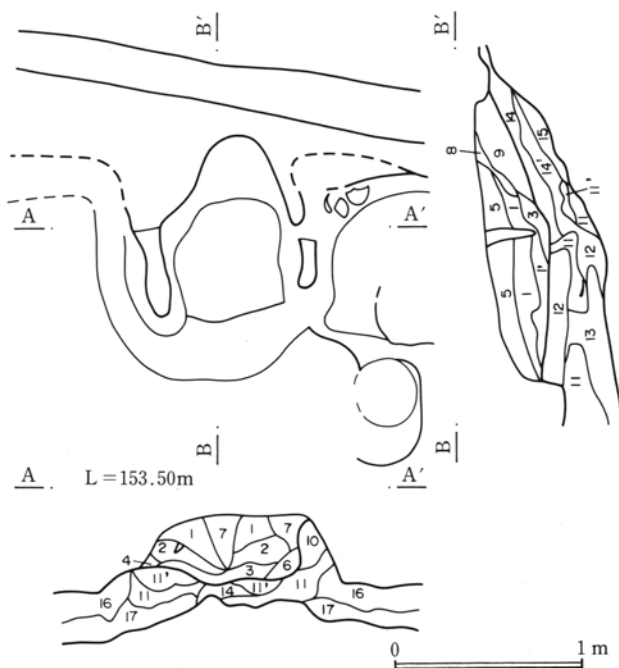
10: 灰黄色土: 白色粘土を主体し褐色緻密少量混入。

カマド掘り方覆土

11, 赤褐色土: 焼土主体。(11': 粘土多量に含む。) 12: 黒褐色土主体。 13: 黄褐色土: 褐色土と暗褐色土の混土。 14: 黒褐色土: 黒色土主体。(14': 褐色土の混入増加。) 15: 黒褐色土主体。 16: 黒褐色土主体。 17: 褐色土主体。

埋め戻して床面より7~10cm程高いレベルに燃焼面を造り出している。燃焼部は東壁の手前側に設定され、その両側に灰色粘土を主体に袖を造っている。煙道は東壁をやや削り込み、燃焼面からストレートに45°程の角度で立ち上げている。

床面では支柱穴4基と貯蔵穴1基、周溝を確認した。支柱穴の径は柱穴1・2では大きく、柱穴3・4ではこれよりやや小さいが、何れもしっかりした掘り方を有する。また、掘り方面に見られたピット1~3も住居掘り方断面に確認されたように柱穴である。これらは床面から掘削され、その配置は柱穴4を含めて方形を成してカマドの中心線はその中



第653図 H-72号住居遺構及びカマド

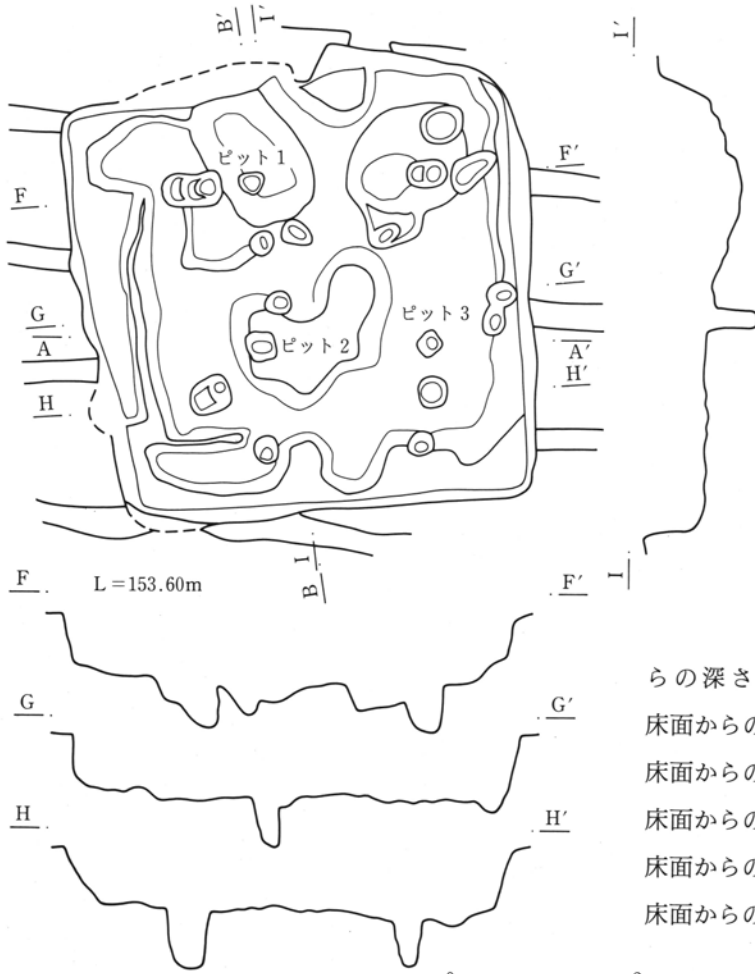
程を通る。貯蔵穴はカマド右側に設けられ、南東コーナー近くに広く掘削される浅い掘り込みの上位構造部とその中央西寄りに柱穴様の形態で掘削される下位構造部とに分けられる。周溝は崩れているためか幅広で東端で貯蔵穴の上位構造部と接する。

H-73号住居 (古墳時代後期, 第655図, 図版260~261・264~266)

概要 本住居はK区南部に位置する竪穴住居であるが、その東部は調査区外に在って調査できなかった。

出土遺物で本住居に伴うと判断されたものには7世紀前半期のものを主体とする土師器の坏(1,

第17節 K区の遺構と遺物



2)・甕 (3)・小型甕 (4)・甔 (5) があり、砥石 (6) も見られた。

覆土中からは、古墳時代後期から奈良・平安時代にかけてのものを中心とする遺物の出土が見られた。

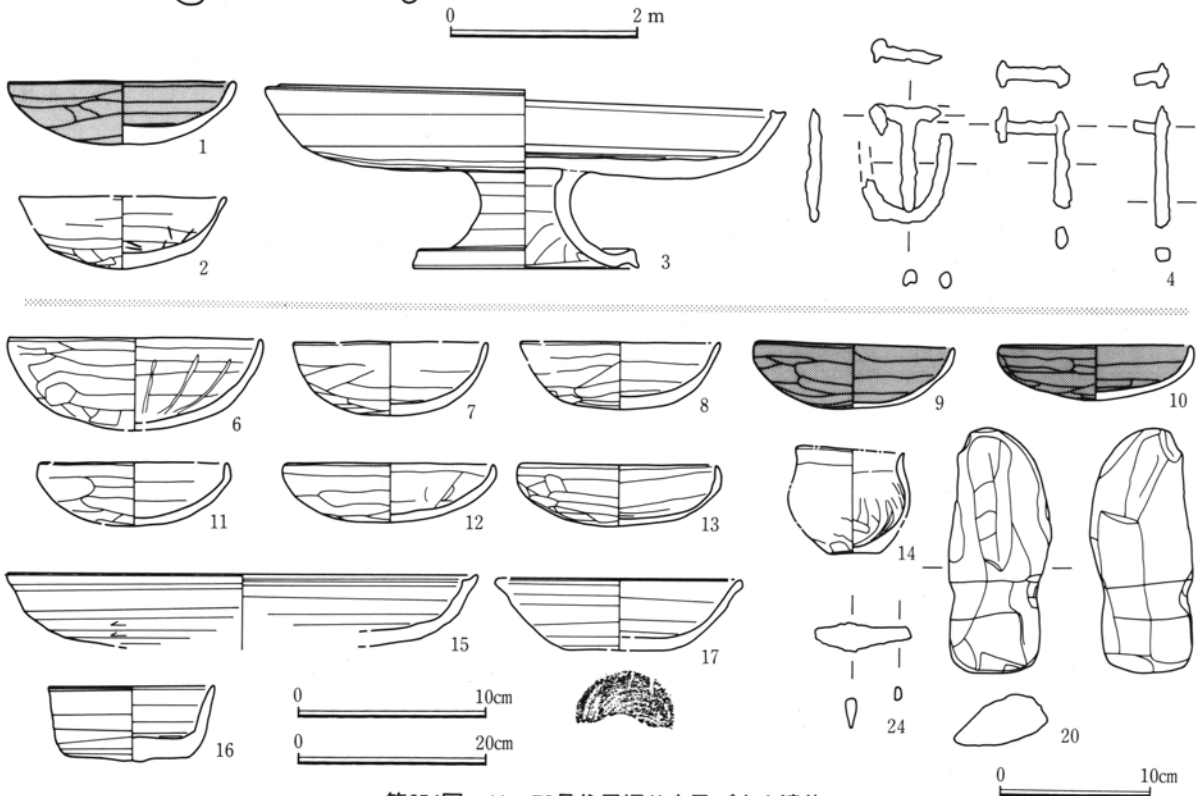
以上の点から、本住居は7世紀前半期の所産と判断される。

また、後述するピットの状況から一回以上の建て直しが確認された。

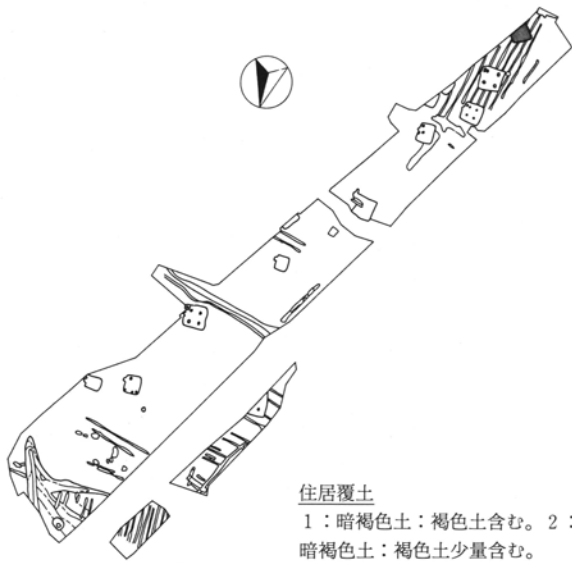
規模 長軸：368cm以上 短軸：366cm 深さ：32cm

カマド 残存範囲 (燃焼部か) 径：36×42cm

ピット 1 径：32×23cm以上 床面からの深さ：65cm
 ピット 2 径：32×20cm以上 床面からの深さ：84cm
 ピット 3 径：27×18cm 床面からの深さ：36cm
 ピット 4 径：27×18cm 床面からの深さ：41cm
 ピット 5 径：28×26cm 床面からの深さ：39cm
 ピット 6 径：28×26cm 床面からの深さ：42cm



第654図 H-72号住居掘り方及び出土遺物

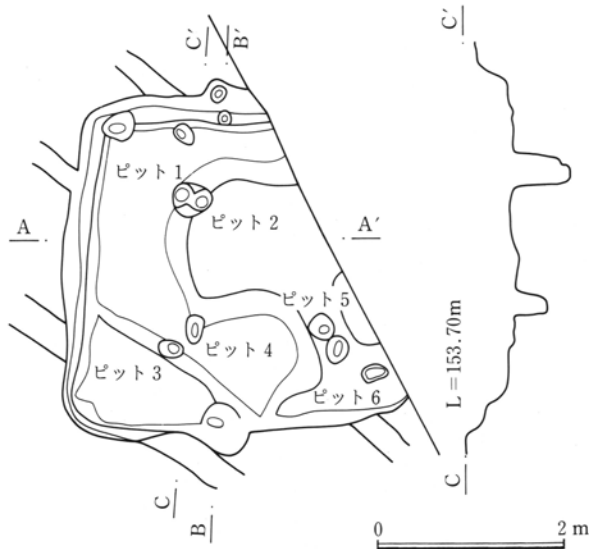


住居覆土

- 1：暗褐色土：褐色土含む。 2：暗褐色土：褐色土少量含む。
- 3：黒褐色土：褐色土少量含む。 4：暗茶褐色土：褐色土若干量混入。 5：暗茶褐色土：暗茶褐色土と褐色土の混土。

住居掘り方覆土

- 6：暗黒褐色土：褐色土多量に混入。 7：褐色土に黒色土微量入。

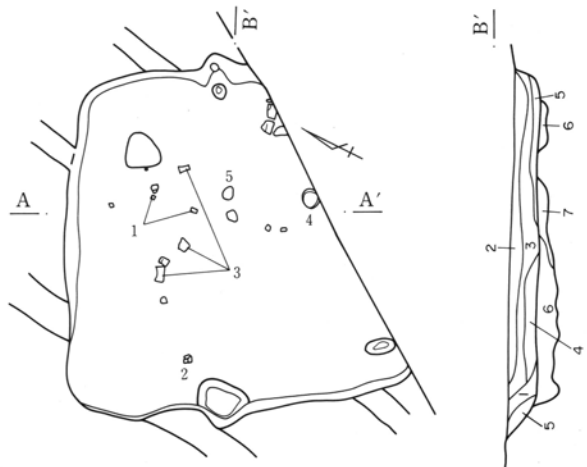


第655図 H-73号住居及び出土遺物

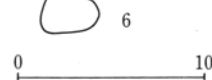
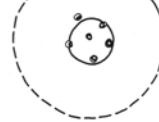
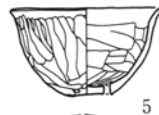
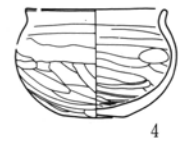
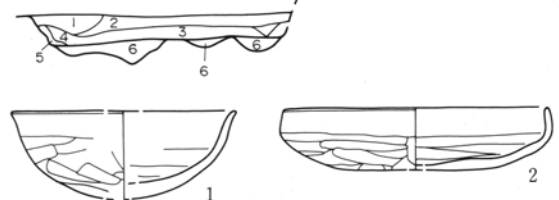
構造 本住居は隅丸方形のプランを呈する。

北・西及び南西半の壁際に、4～28cmの幅でテラス状の掘り残しを持ち、その内側が10cm或いは20cm程掘り下げられる掘り方を有する。床面はこうした掘り方を褐色土等で埋め戻して造られている。

カマドは北カマドと推定されるが、破壊が著しく、礫の出土を見たが、構造等は明らかにできなかった。床面に於いては柱穴・貯蔵穴等は確認できなかったが、掘り方面に見られたピット1～6は柱穴と考えられ、ピット1・2、ピット3・4、ピット5・6



A L=154.00m B

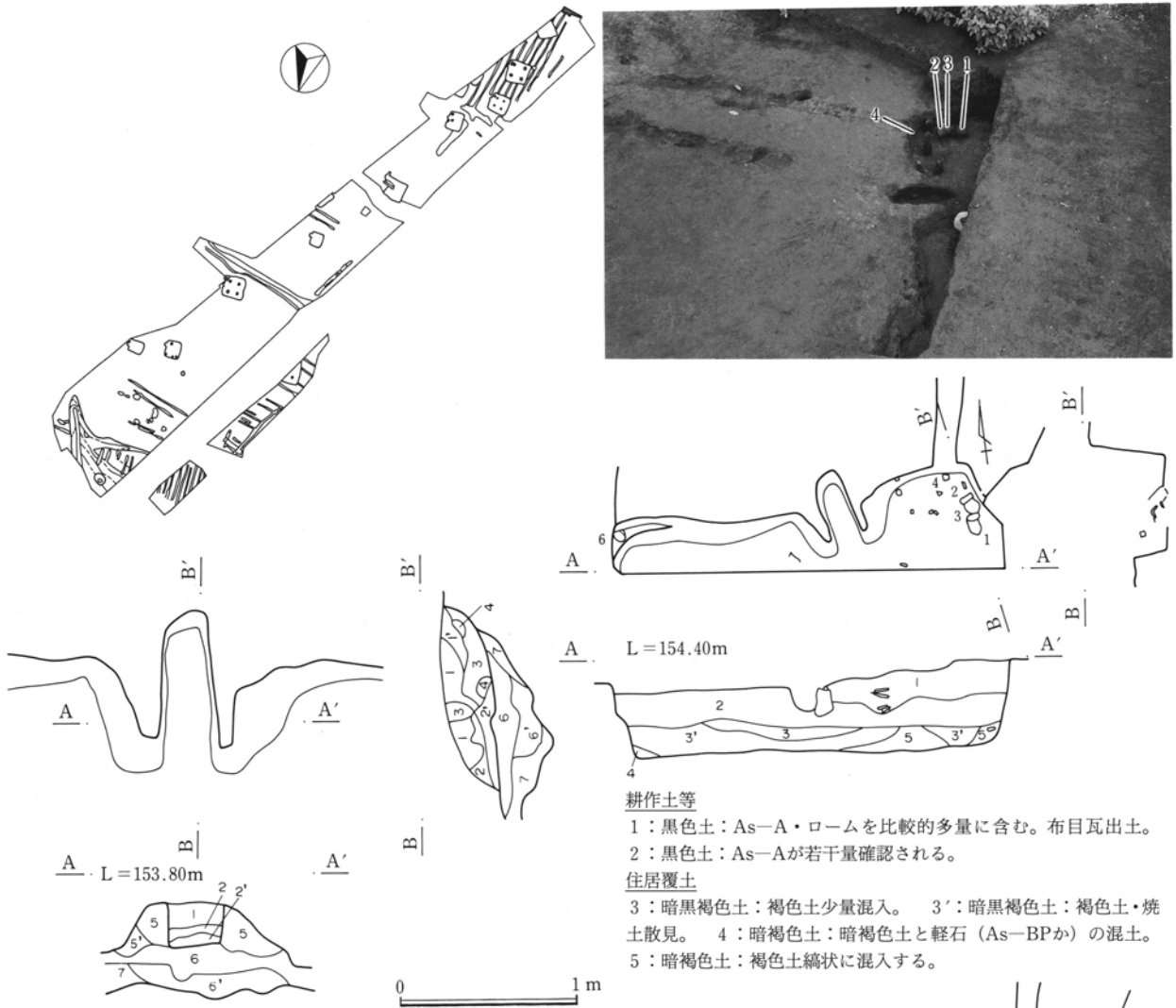


0 10cm

0 10cm

0 20cm

がそれぞれ対になっているので、掘り直しに伴うものと判断される。



カマド覆土

1：暗褐色土：粘性強く灰褐色粘質土と焼土若干量含む。(1'：黒味増す。) 2：暗黒褐色土：粘性強く焼土微量混入。(2'：焼土含まない。) 3：黒色砂質土：白色土粒若干量混入。 4：暗黄褐色砂質土。

袖構築材

5：灰褐色土：白色土少量含み非常に堅く締まる。 5'：灰褐色粘質土：堅く締まり炭化物少量含む。

カマド掘り方覆土

6：暗黒褐色土：焼土・灰白色粘土微量に含む。 6'：暗黒褐色土。 7：暗黒褐色土：褐色土少量含む。

第656図 H-74号住居

H-74号住居（古墳時代後期。第656～657図。図版261・265～266）

概要 本住居はK区南端部に在る竪穴住居跡で殆どが調査区外のため北端部を調査したに過ぎない。

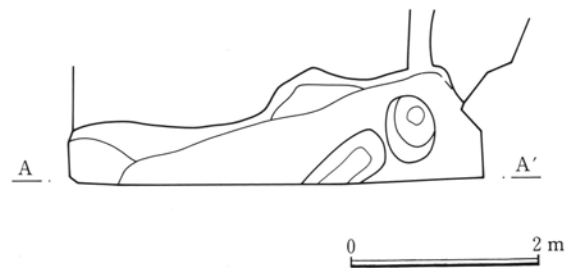
本住居に伴う出土遺物には、重ねたものが転倒した状態で出土した7世紀後半期の特徴を示す土師器

耕作土等

1：黒色土：As-A・ロームを比較的多量に含む。布目瓦出土。
2：黒色土：As-Aが若干量確認される。

住居覆土

3：暗黒褐色土：褐色土少量混入。 3'：暗黒褐色土：褐色土・焼土散見。 4：暗褐色土：暗褐色土と軽石（As-BPか）の混土。
5：暗褐色土：褐色土縞状に混入する。

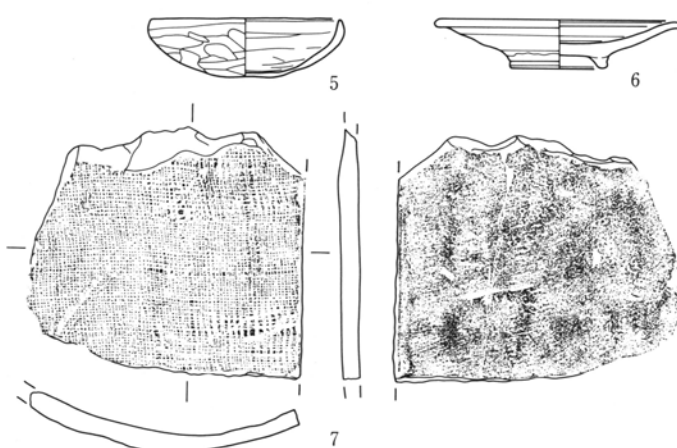
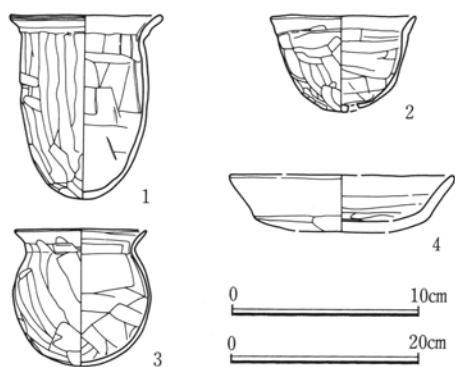


の小型甕（1）・甌（2）・小型胴張甕（3）がある。

一方、覆土中からは古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての土師器甕片を中心に6世紀後半期の土師坏（4）、7世紀後半期の土師器坏（5）、9世紀後半期の須恵器高台付皿（6）や女瓦（7）の他、こも編み石（8）や異形石製品（9）、そしてカマドの壁体かと思われる遺物（10）が見られた。

これらの状況から、本住居は7世紀後半期の所産と判断され、平安期頃までその痕跡を留めていたものと思われる。

第3章 発見された遺構と遺物



規模 調査範囲 幅：418cm 奥行き：132cm 深さ：35cm

カマド 幅：113cm 奥行き：92cm 左袖幅：41cm 長さ：38cm 高さ：18cm 右袖幅：43cm 長さ：46cm 高さ：30cm 燃烧部 径：28×82cm

貯蔵穴 径：69×51cm 床面からの深さ：57cm

構造 本住居はその一部を調査できたに過ぎなかったため全体の状況は不明だが、そのプランは概ね隅丸方形を呈するものと判断される。

住居は掘り方を有するが、掘り方面に特段の構造は認められず、床面は掘り方を埋め戻して造られる。

第657図 H-74号住居出土遺物

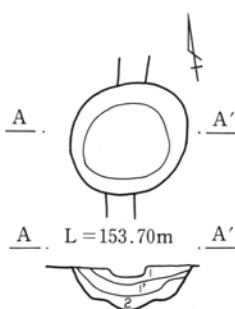
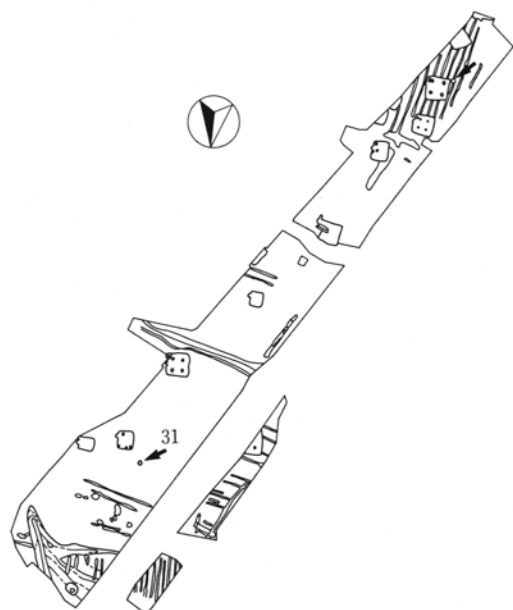
カマドは北カマドで北壁のやや東寄りに造られている。掘り方を有し、これを暗黒褐色土等で埋め戻して燃烧面を造っている。燃烧部は北壁を跨ぐ位置に設定され縦に細長く、その両側壁面より手前側には灰褐色の粘質土を用いて袖を造り上げている。

床面では柱穴・貯蔵穴・周溝等を確認することはできなかったが、貯蔵穴については柱穴様の掘削形態を取り、掘り方面のカマド右側の北東コーナー近くに確認された。

12号土坑 (江戸時代中期以前, 第658図)

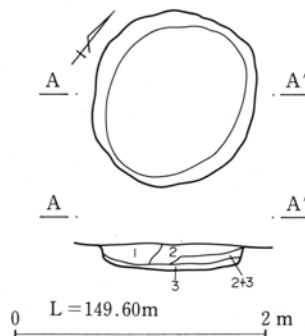
概要 本土坑はK区南部にH-74号住居の西に近接して位置し、現代の耕作溝に切られている。

出土遺物はなく、覆土にAs-Aを含まないので僅



12号土坑覆土

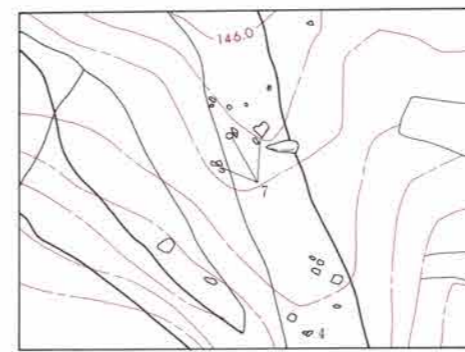
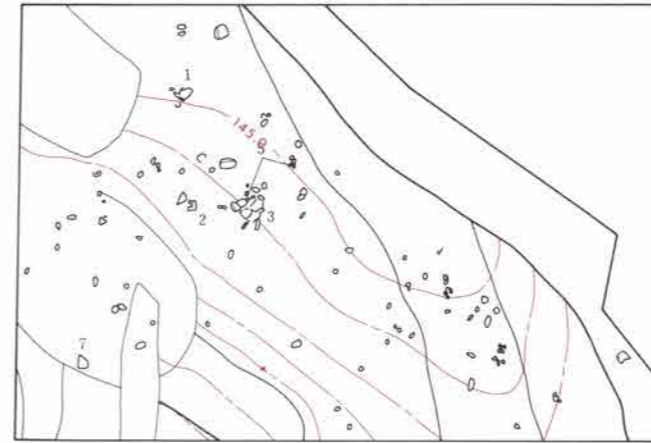
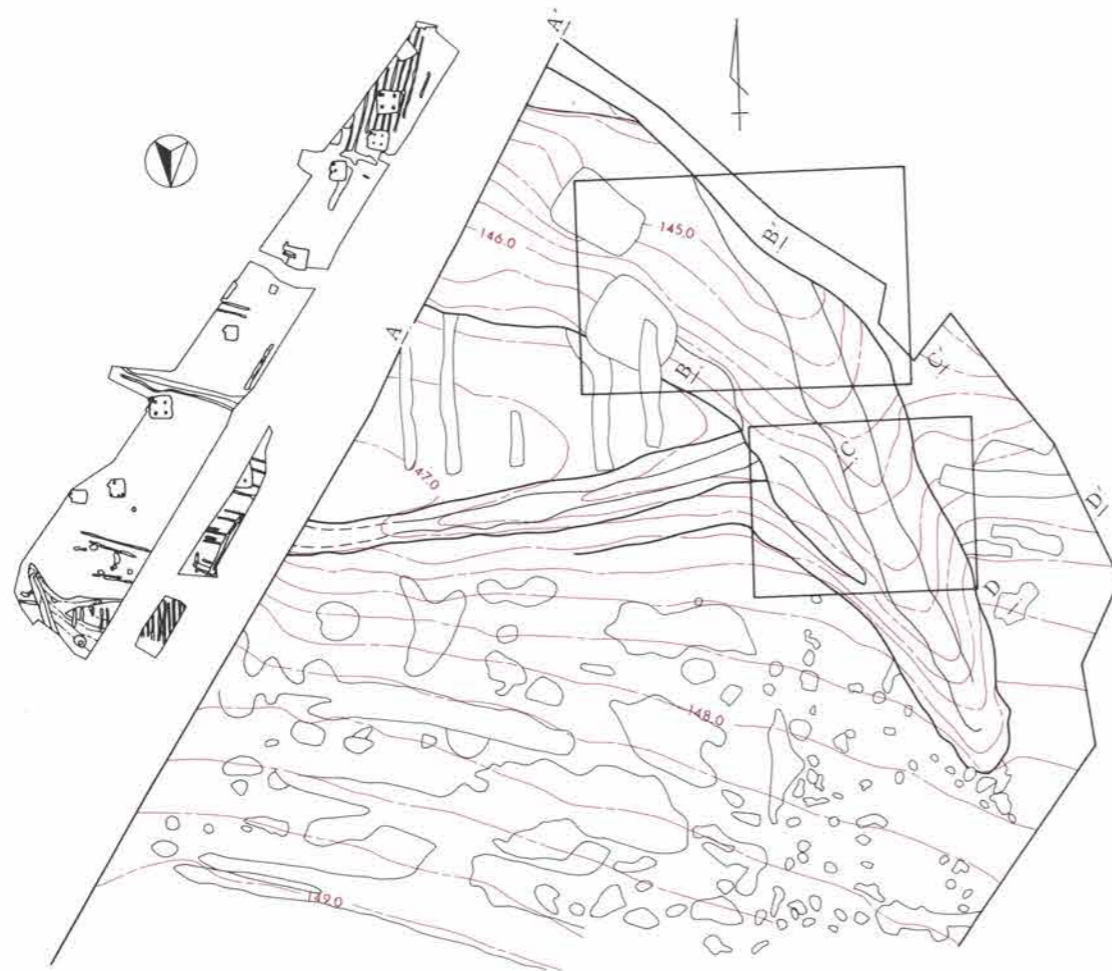
1：暗褐色土：ローム少量含む。
1'：暗褐色土：1層より多量のローム含む。 2：暗褐色土：暗褐色土とロームの混土。



31号土坑覆土

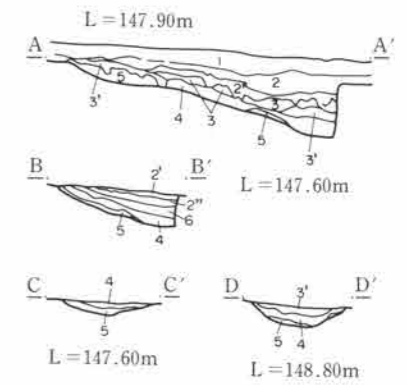
1：暗黒褐色土：As-BP極く微量含む。 2：暗褐色土。
3：暗茶褐色土。

第658図 12・31土坑

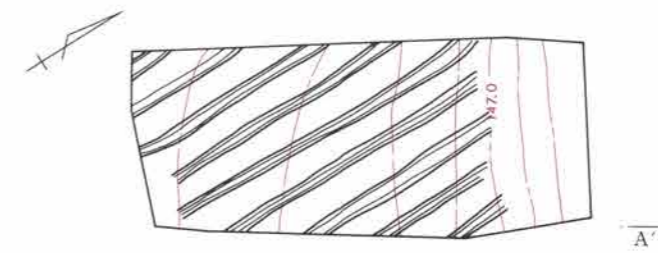
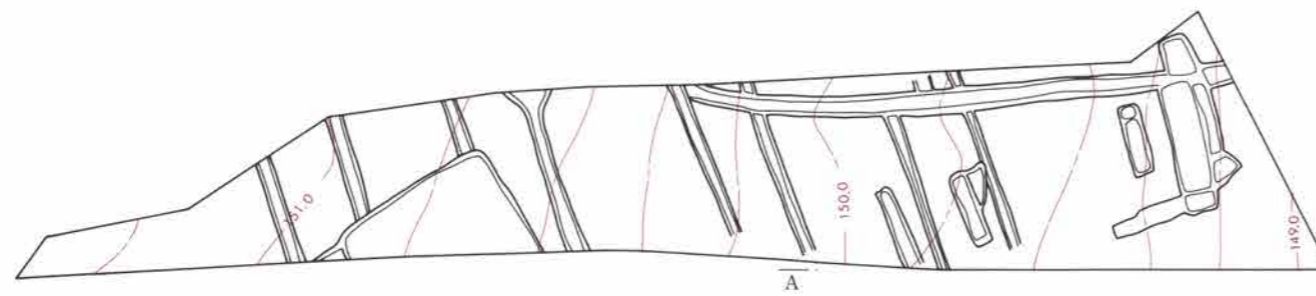


3号谷埋土

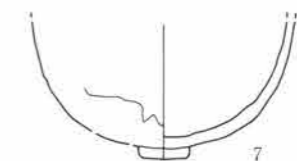
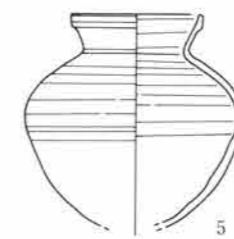
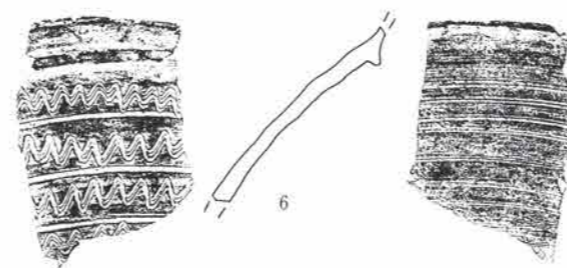
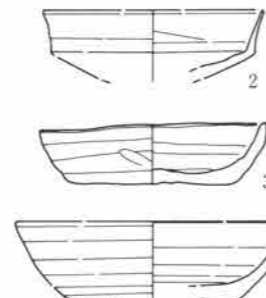
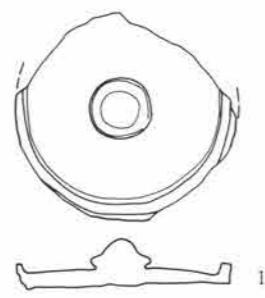
- 1: 耕作土及び攪乱土層。
- 2: 灰茶褐色土: As-A多量に含む。
- 2'・2'': 灰褐色土: 2層に比しAs-A減少。
- 3: 暗黒褐色土: 黒色砂質層を斑状に含む。
- 3': 暗黒褐色土: 3層に比し粘性増し、黒色砂質層殆ど含まない。
- 4: 暗黒褐色土: 粒子細かく粘性に富む。
- 5: 暗褐色土。
- 6: 灰黒色土: 砂質分が強く粒子粗い。(As-Bか)



0 3m



0 6m



0 10cm 0 20cm

第659図 7号島・3号谷及び出土遺物

かに江戸時代中期以前の所産とできるに過ぎない。

尚、本土坑の掘削用途等は特定できなかった。

規模 長径：92cm 短径：86cm 深さ：31cm

31号土坑（江戸時代中期以前、第658図、図版261）

概要 本土坑はK区北部に所在する。

出土遺物はなく時期特定には至らず、覆土にAs-Aを含まないので江戸時代中期以前という大雑把な時間の中で捉えられるに過ぎない。

7号畠（江戸時代中期以前、第659図、図版261）

概要 7号畠はK区北部、後述する3号谷の調査段階に発見・調査された遺構で、町道石神・多比良線を跨いでその東西の区域に遺存していた。

この畠の掘削・使用時期については、As-Aを含まない暗黒褐色土を覆土としていること、個々のサクの長さが短いこと、及び現代の地割である吉井町多比良281-1・3に乗ることから、江戸時代の所産で、且つ中期以前のものと判断される。

規模 全体規模：長さ22.2m以上 幅：9.2m以上

3号谷（奈良・平安時代以前、第659図、図版261・265）

概要 3号谷はK区北端部に在り、調査前段階に於いても窪地であり、その下方に当たる土合川へ落ちる斜面では明瞭な谷地形として残されている。

本谷の形成の初源は明らかではないが、表出面とした暗褐色土に於いては8世紀代の須恵器の蓋(1)や坏(3, 4)の他、須恵器の坏(2)や小型甕(5)・甕(6, 7)など、土師器・須恵器の甕を中心とした古墳時代後期から平安時代にかけての遺物の出土が

構造 本土坑はやや菱形に近い楕円形のプランを呈している。

底面は丸底を呈し、壁面は若干ハの字状に開く。

尚、本土坑の掘削用途等は特定できなかった。

規模 長径：139cm 短径：127cm 深さ：25cm

構造 本土坑のプランは隅丸方形を呈する。

掘削形態は桶状で底面は僅かに丸みを帯びる。

サク（町道東部）長さ：146～428cm（平均：314.8cm）幅：37～52cm（平均：42cm）深さ：6～44cm（平均：27.2cm）

構造 本遺構は町道西で9条、町道東で5条の併せて14条のサク遺構で構成される。本遺構は3号谷の斜面を若干削平して造られ、全体としては3号谷の等高線沿いの、東西に長い短冊形を呈している。

尚、サクとサクの間隔は町道西で95～115cm、平均73.3cm、町道東で115～220cm、平均16.0cmを測る。

見られたことから、この層の形成時期は奈良・平安時代を前後する時期であろうと想定される。

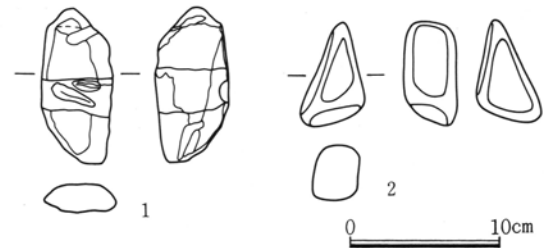
規模 調査範囲：34×16m 表出面深度：210cm

構造 K区に於いては北に向かって凸面を以て傾斜し、谷底は東に向かって傾斜する。

概ね暗褐色土、黒色系の土壌、As-Aを含む灰褐色系の土壌の順に土壌の堆積が見られ、下位に行くに従って傾斜面はきつくなっている。

K区に於ける遺構外出土の遺物（第307図、図版121～123）

概要 量的に多くはなかったが、以上報告した以外にも、K区の各グリッド或いは埋土からは古墳時代後期の土師器甕片を初めとする幾つかの遺物の出土を見ている。これらは古墳時代後期から平安時代にかけての遺物を中心としているが、こも編み石(1)、砥石(2)などの出土も見ている。



第660図 K区遺構外出土遺物

第18節 旧石器時代文化層の調査

1 概要

多比良追部野遺跡が立地する鑄川右岸（南岸）には上位段丘面と下位段丘面の二段の段丘面が形成されている。本遺跡は高位の段丘面である上位段丘面に立地し、東を土合川、西を矢田川によって画された台地によって構成される。北側には台地が広がり、南側には丘陵が続いた後に山地となる。

本遺跡で旧石器時代の遺構、遺物が検出されたのは遺跡西端のF区と呼称する台地縁辺部で、上位段丘面と下位段丘面を画する崖線から矢田川を約mほど遡った上位段丘面最奥部の台地である。この台地縁辺部は西側の矢田川に向かって緩やかに傾斜し、ちょうど傾斜変換点あたりで石器群が検出された。矢田川を挟んで西側の台地上には矢田遺跡が立地し、AT下層から黒曜石製や黒色安山岩製の台形様石器をはじめとする石器群が1カ所のブロックを形成して検出されている。

本遺跡での石器群の出土層位はAT下層の粘土層である。この層位からは甘楽町白倉下原遺跡や同天引狐崎遺跡、同天引向原遺跡をはじめとする多数の遺跡で石器群が検出されており、鑄川流域で最も旧石器時代遺跡の検出例が多い層位である。このほか住居跡の覆土等から数点の旧石器時代に帰属する石器が検出されたものの、上層のローム層から原位置を保っての石器の出土はなく、旧石器時代の文化層はAT下層の一枚のみに限定される。

AT下層から出土した石器は総数422点、礫は3点で、それらは1～10ブロックの10カ所のブロックを構成して分布していた。このうち1～9ブロックが環状ブロック群として評価できる。

2 石器

本遺跡からは422点の石器群と3点の礫が出土した。石器群の内訳はナイフ形石器9点、台形様石器10点、スクレイパー10点、二次加工のある剥片3点、楔形石器1点、石核13点、石刃12点、剥片198点、碎

片156点、原石1点、敲石7点、台石3点である。

ナイフ形石器（第661図1～9、図版269）

1 黒曜石製で、石刃を素材とする。調整加工は両側縁の下半部に施され、両側縁とも背面から主要剥離面に向かってやや平坦である。打面は残置され、調整打面である。

2 黒曜石製で、石刃を素材とする。左側縁の調整加工は基部と上半部に施され、後者では微細である。右側縁の調整加工は背面から主要剥離面に向かって下半部に施される。左側縁の上半部に微細剥離痕が認められる。打面は残置され、調整打面である。

3 黒曜石製で、小型の石刃を素材とし、尖頭形のプロポーシオンを呈する。調整加工は左右両側縁に施される。右側縁ではインバース状にやや平坦な調整加工が背面から主要剥離面に向かって施されている。打面部は折断されている。

4 黒曜石製で、小型の石刃を素材とし、調整加工は左右両側縁の下半部に施され、右側縁では背面から主要剥離面に向かって施される。打面は残置され、調整打面である。素材の形状やプロポーシオン、調整加工などに3と共通する部分が多い。

5 チャート製で、石刃を素材とする。調整加工は右側縁の基部に施される。ブロック群から離れて、Ft-19グリッドから単独で出土した。

6 黒曜石製で、幅広の石刃を素材とする。尖頭形のプロポーシオンを呈する。打面は残置され、平坦打面である。調整加工は右側縁の下半部と左側縁の基部に施され、両者とも急斜である。左側縁の上半部には微細剥離痕が認められる。

7 黒曜石製で、石刃を素材とする。調整加工は右側縁と左側縁の上半部に施される。右側縁では、背面から主要剥離面に向かってやや平坦である。打面は残置され、平坦である。

8 黒曜石製で、石刃を素材とし、先端部を欠損する。調整加工は右側縁に施され、器体中央部にまで及ぶようなやや平坦な調整加工である。左側縁の全体に微細剥離痕が認められる。

9 黒曜石製で、上半部を欠損するが、素材は幅広の石刃と考えられる。調整加工は左右両側縁に施され、急斜である。打面は残置され、自然面である。

3・4・6のナイフ形石器については、ここではナイフ形石器として分類したが、プロポーションや調整加工から考えて台形様石器の範疇に組み入れることも可能であろう。

台形様石器（第661～662図10～17、図版269）

10 黒曜石製で、幅広の縦長剥片を素材とする。プロポーションは左右対称の尖頭形を呈し、両側縁の上半部には微細剥離痕が認められる。調整加工は基部を作出するかたちでインバース状に左右両側縁に施される。右側縁では、折断と平坦な調整加工を組み合わせ、折断後に背面に平坦な調整加工を施している。左側縁では、背面と主要剥離面に平坦な調整加工が施されている。打面は一部残置され、平坦である。

11 黒曜石製で、幅広の縦長剥片を素材とする。調整加工は左右両側縁に施される。右側縁では、主要剥離面から背面に向かって調整加工が施され、上端部では折断されている。左側縁では、背面から主要剥離面に向かってやや平坦な調整加工が施されている。両側縁下半部の調整加工は基部を作出するかたちでインバース状に施され、プロポーションも刃部が平刃で左右対称である。刃部には微細剥離痕が認められる。

12 黒曜石製で、幅広の縦長剥片を素材としていると考えられる。刃部は斜刃で、微細剥離痕が認められる。調整加工は両側縁が平行するかたちで急斜に施され、それによって素材の打面部と端部を除去している。右側縁の上端部には折断面が残っている。

13 黒曜石製で、縦長剥片を素材としている。調整加工は右側縁に、背面から主要剥離面に向かってやや平坦に施されている。刃部は平刃である。

14 黒曜石製で、一部欠損する。幅広で寸詰まりの縦長剥片を素材としている。調整加工は両側縁の下半部に施される。右側縁では、微細な調整加工が

若干施される。左側縁では、背面に微細な調整加工、主要剥離面にやや平坦な調整加工が施されている。

15 黒曜石製で、上半部を欠損する。素材は横長剥片である。調整加工は右側縁に背面から主要剥離面に向かって施されている。背面左側には平坦な調整加工が施されているが、素材剥離以前の頭部調整か剥離後の調整加工かは判断が困難である。打面は残置され、自然面である。

16 黒曜石製で、上半部を欠損する。素材は縦長剥片と考えられる。調整加工は両側縁に施され、右側縁では微細な調整加工である。左側縁では、平坦な調整加工である。主要剥離面に施される調整加工は平坦である。

17 黒曜石で、下半部と上半部の一部を欠損する。素材は縦長剥片と考えられる。調整加工は主要剥離面に平坦に施されている。

スクレイパー（第662～663図18～23、図版270）

18 黒色安山岩製で、石刃を素材とする。スクレイパーエッジは左側縁の主要剥離面に作出されている。欠損後も下半部の資料には調整加工が加えられている。

19 黒色安山岩製で4点の資料からなる。素材は石刃である。スクレイパーエッジは右側縁に作出される。刃部再生剥片が1点接合する。ブランディング状の急斜な調整加工であることから、ナイフ形石器として考えることも可能である。

20 黒色安山岩製で、横長剥片を素材とする。端部にスクレイパーエッジが作出されている。

21 黒色安山岩製で、幅広の縦長剥片を素材とする。スクレイパーエッジは左側縁の主要剥離面側に作出されているが、概して粗く剥離面も大きいことから石核の可能性もある。

22 黒曜石製で、縦長剥片を素材とするが上半部は折断されている。スクレイパーエッジは右側縁の下半部に作出されている。

23 黒曜石製で、横長剥片を素材とする。スクレイパーエッジは左側縁にインバース状に作出されて

第3章 発見された遺構と遺物

いる。端部には微細剥離痕が認められる。

楔形石器 (第663図24, 図版270)

24 黒色安山岩製で、横長剥片を素材とする。素材の左右両側縁を機能させている。両極剥離痕は頭部では背面と主要剥離面に、端部では背面にそれぞれ残っている。

二次加工のある剥片 (第663図25~27, 図版270)

25 黒色安山岩製で、厚手の縦長剥片を素材とする。主要剥離面側にパルプ、打面を取り除くかたちに二次加工が施されている。

26 黒曜石製で、小型で幅広の縦長剥片を素材とする。打面を取り除くかたちで二次加工が施されている。

27 黒曜石製で、幅広の寸詰まりの縦長剥片を素材とする。二次加工は打面を取り除くかたちに施されている。

石核 (第664~668図30~42, 図版271~272)

30は黒曜石製で、Ob-11に帰属する。31は黒曜石製で、Ob-7に帰属する。横長剥片を素材とし、主要剥離面側で剥片生産を行っている。右側縁には微細剥離痕が認められ、さらに左側縁の主要剥離面側にはスクレイパーエッジが作出されており、石核として用いられた後もスクレイパーとして機能していたと考えられる資料である。32は黒曜石製で、Ob-5に帰属する。厚手の縦長剥片を素材とし、主要剥離面側で1枚横長剥片を生産している。縁辺部に微細剥離痕が認められる。33は黒曜石製で、7のナイフ形石器が接合する。縁辺部に微細剥離痕が認められる。34は黒曜石製である。35は黒色安山岩製である。36は黒色安山岩製で、GAn-1個体Cに帰属する。37は黒色安山岩製で、GAn-3個体Aに帰属する。38は黒色安山岩製で、GAn-1個体Bに帰属する。39は黒色安山岩製で、GAn-7に帰属する。やや扁平な円礫を素材とし、打面と作業面を交互に入れ替えながらチョッピングツール状に剥片生産を

行っている。10ブロックに帰属し、環状ブロック群から離れて出土している。40は安山岩製で、扁平な円礫を素材とする。41は硬質泥岩製で、HMs-1に帰属する。扁平な円礫を素材とし、打面と作業面を交互に入れ替えながらチョッピングツール状に剥片生産を行っている。42は黒色安山岩製でGAn-1個体Aに帰属する。

石刃 (第668~669図43~52, 図版274)

43 黒曜石製で、3点の資料からなる。横位に3点に折断されている。1ブロックと4ブロックとの間で離れて分布し遠距離間で接合した。背面には主要剥離面と同一の加撃方向の剥離面と自然面が残る。右側縁と左側縁の上半部に微細剥離痕が認められる。端部に残る剥離面は旧石核打面か作業面である。

44 黒曜石製で、打面は弾け飛んでいる。右側縁には微細剥離痕が認められる。背面は主要剥離面と同一の加撃方向の剥離面と自然面で構成される。

45 黒曜石製で、端部が尖鋭となる。左右両側縁に微細剥離痕が認められる。背面には主要剥離面と同一の加撃方向の剥離面が3枚認められる、中央部の稜を取り除くように頭部調整が施されている。打面は平坦である。

46 黒曜石製で、頭部を欠損する。背面には主要剥離面と同一加撃方向の剥離面が4枚認められる。左右両側縁には微細剥離痕が認められる。

47 黒曜石製で、背面には主要剥離面と同一加撃方向の剥離面が2枚残っており、本資料が石刃技法によって生産されたことが看取される。右側縁には微細剥離痕が認められる。打面は自然面である。

48 黒曜石製で、背面には主要剥離面と同一加撃方向の剥離面が4枚認められる。打面には自然面がのこるが調整打面と考えられる。頭部には頭部調整が施されている。

49 黒曜石製で、Ob-11に帰属する。右側縁の上半部と左側縁の下半部に微細剥離痕が認められる。

50 黒曜石製で、Ob-11に帰属する。左右両側縁に微細剥離痕が認められる。

51 黒曜石製で、Ob-11に帰属する。

52 黒曜石製で、背面は主要剥離面と同一加撃方向の3枚の剥離面で構成される。左側縁と右側縁中央部に微細剥離痕が認められる。また、主要剥離面の頭部には平坦な調整も認められることからナイフ形石器として識別することも可能である。

剥片(第663? 669~681図28・29・53~174, 図版270~271・274~282)

53は黒曜石製での横長剥片で、縁辺部には微細剥離痕が認められる。54は黒曜石製の幅広の縦長剥片で、右側縁と左側縁下半部、端部に微細剥離痕が認められる。55は黒曜石製の幅広の縦長剥片で、左右両側縁に微細剥離痕が認められる。56は黒曜石製の縦長剥片で、左側縁に微細剥離痕が認められる。57は黒曜石製の縦長剥片である。58は黒曜石製の縦長剥片で、右側縁に微細剥離痕が認められる。59は黒曜石製の厚手で幅広の縦長剥片である。60は黒曜石製の横長剥片である。59・60はOb-1に帰属する。61は黒曜石製の石刃ともいえる縦長剥片で、Ob-11に帰属する。62は黒曜石製の縦長剥片で左右両側縁に微細剥離痕が認められる。63は黒曜石製の縦長剥片である。64は黒曜石製の幅広の縦長剥片、66は黒曜石製の横長剥片で、左側縁に微細剥離痕が認められる。67・68は黒曜石製の横長剥片である。69は黒曜石製の横長剥片で頭部が折断されている。74は黒曜石製の縦長剥片で左側縁に微細剥離痕が認められる。76~96は黒曜石製の小型の剥片類である。97は黒色安山岩製の大型の幅広の縦長剥片で、4点に折断されているが意図的な折断であろう。2ブロックと4ブロック間で離れて分布し遠距離間で接合した。99は黒色安山岩製の横長剥片で縦位に折れているが、加撃方向と一致することから剥離時の同時割れであろう。100 黒色安山岩製の石刃ともいえる縦長剥片である101・102は黒色安山岩製の縦長剥片である。103は黒色安山岩製の横長剥片である。107は黒色安山岩製の横長剥片、108は黒色安山岩製の幅広の縦長剥片である。115は黒色安山岩製の縦長剥片で

3点の資料からなる。118は黒色安山岩製の厚手の横長剥片で、右側面と端部に折断面が認められる。126は黒色安山岩製の横長剥片で、2点の資料からなる。右側面と上部に折断面が認められることから本資料も意図的に折断されたと考えられる。128は黒色安山岩製の横長剥片で、2点の資料からなる。折断面は加撃方向と一致することから剥離時に折れたものと考えられる。133は黒色安山岩製の横長剥片で、3点の資料からなり、折断面は加撃方向と一致することから剥離時に折れたものと考えられる。134は黒色安山岩製の横長剥片で、端部に折断面が認められる。136は黒色安山岩製の横長剥片で、上部に折断面が認められる。138は黒色安山岩製の横長剥片で、上部と端部に折断面が認められ、意図的な折断である可能性が大きく、プロポーシオンも台形様石器に類似する。139~165は黒色安山岩製の小型の剥片類である。166~173は硬質泥岩製の剥片類で、HMs-1に帰属する。174は硬質泥岩製の横長剥片で、環状ブロック群から離れた10ブロック出土。

原石(第681図175, 図版282)

黒曜石製の扁平な角礫で、節理が著しい。剥片生産を行った痕跡は認められない。端部縁辺は鋭く、スクレイパーエッジ状の剥離痕が認められる。

敲石(第681~683図176~181, 図版283~284)

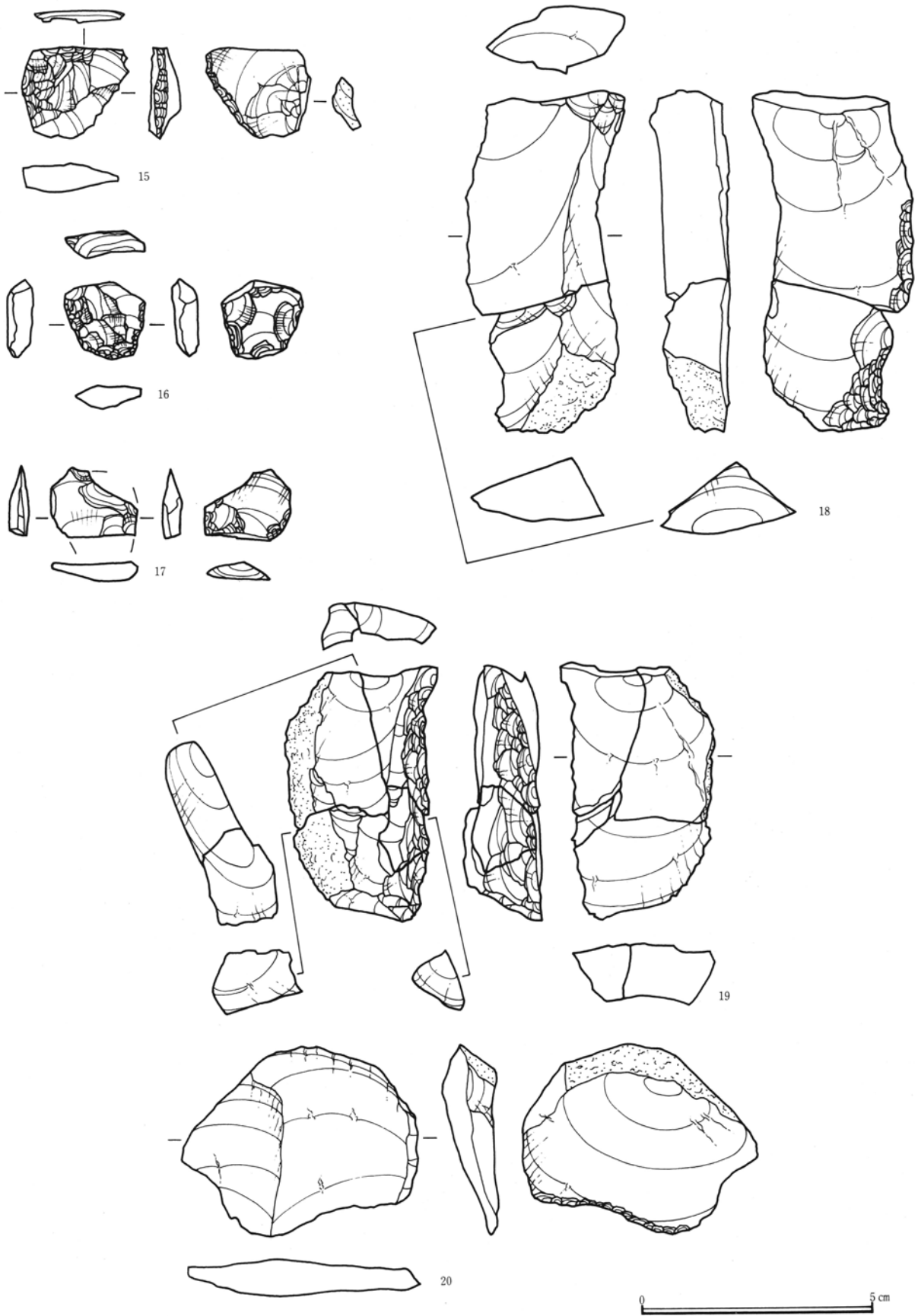
176は砂岩製で、棒状の礫を素材とする。端部に敲打痕が認められる。177は結晶片岩製で、棒状の礫を素材とし、端部に敲打痕が認められる。180は結晶片岩製で、大型で扁平な長楕円礫を素材とする。左右両側縁部に敲打痕が認められる。敲石としたが、台石と近接してセットで出土している点が注目される。

台石(第683図181~183, 図版284)

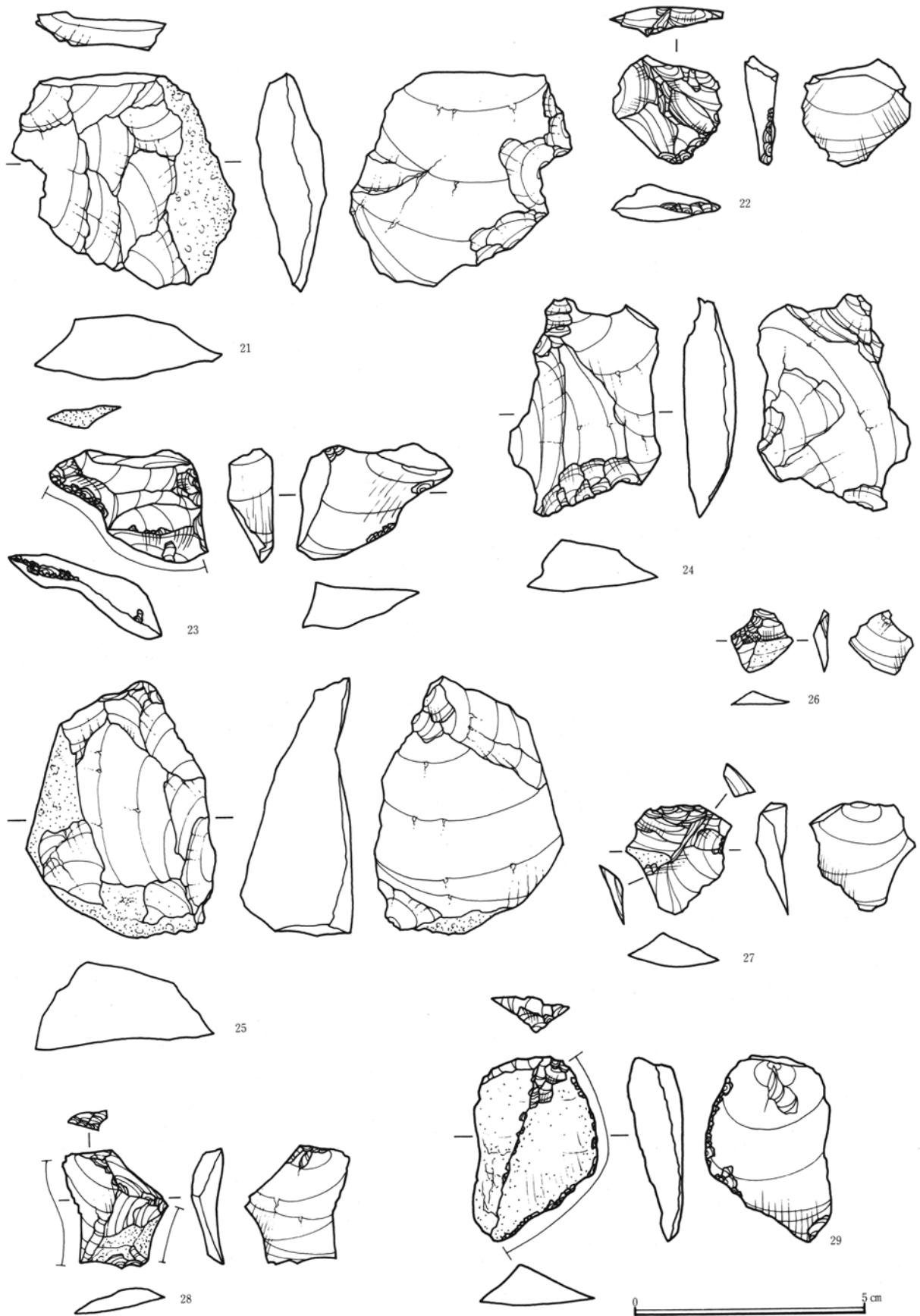
181は輝緑岩製で、扁平な円礫を素材とする。182は石英で、厚手の垂角礫である。183は輝緑岩の円礫である。



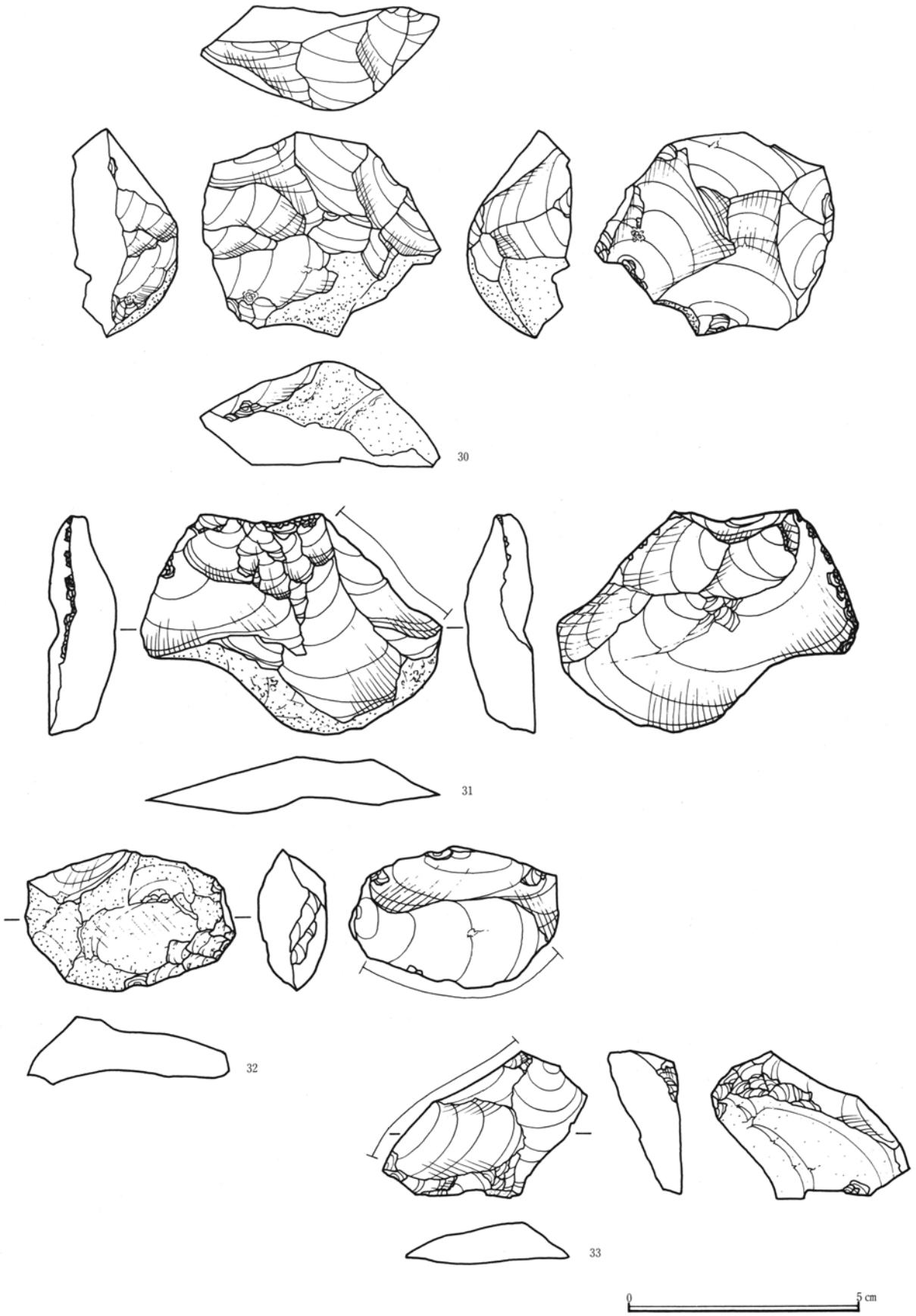
第661図 ナイフ形石器・台形様石器



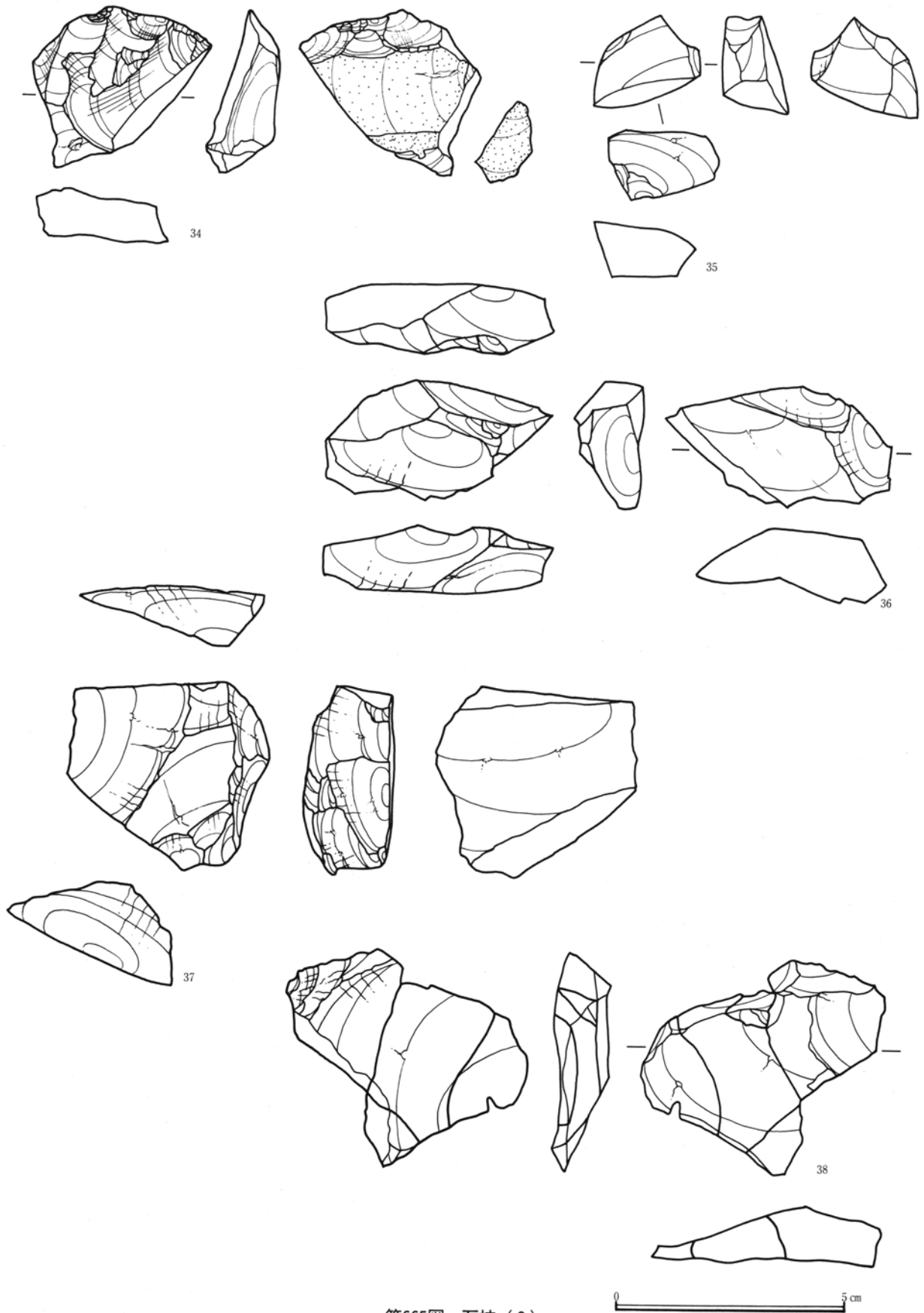
第662図 台形様石器・スクレイパー



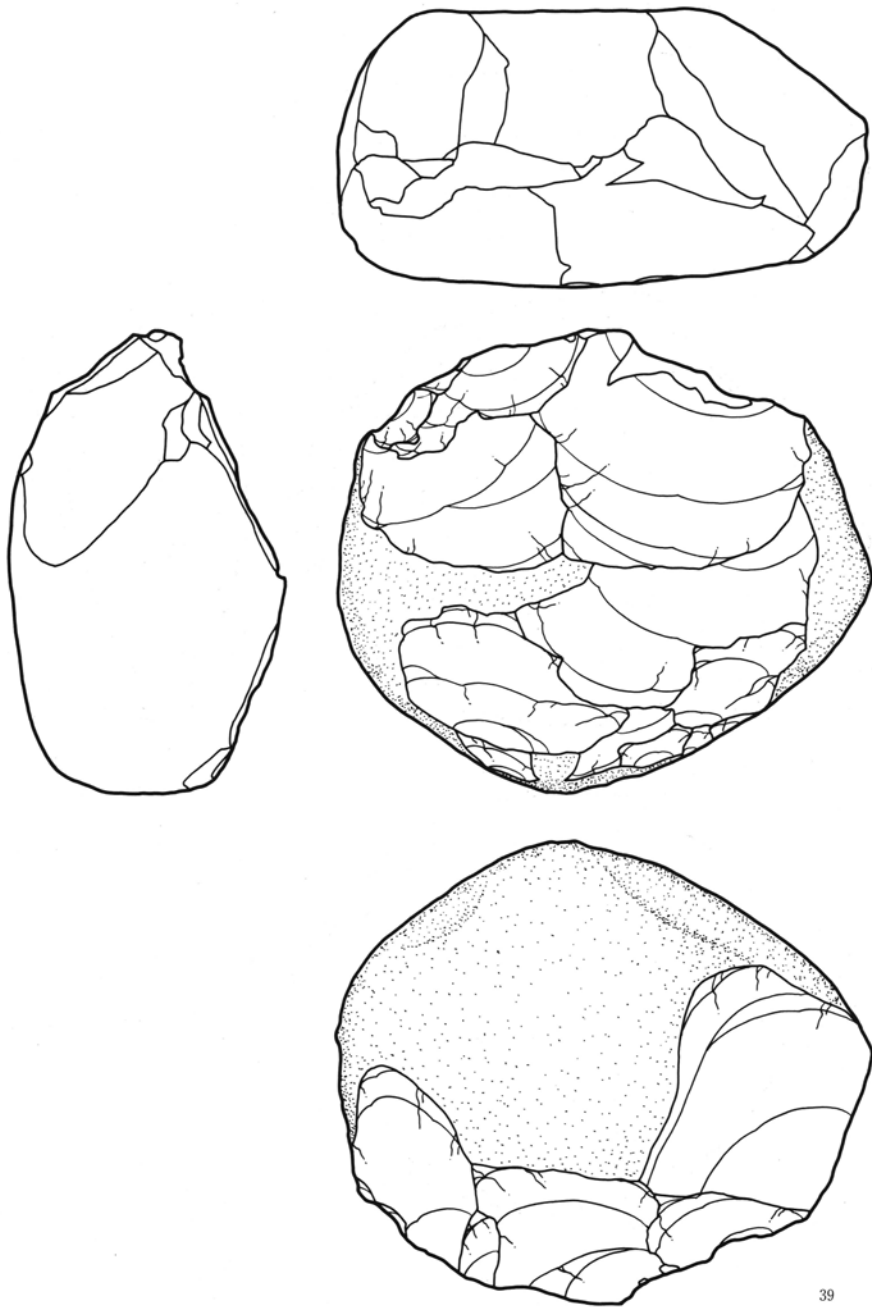
第663図 スクレイパー・楔形石器・二次加工のある剝片・剝片



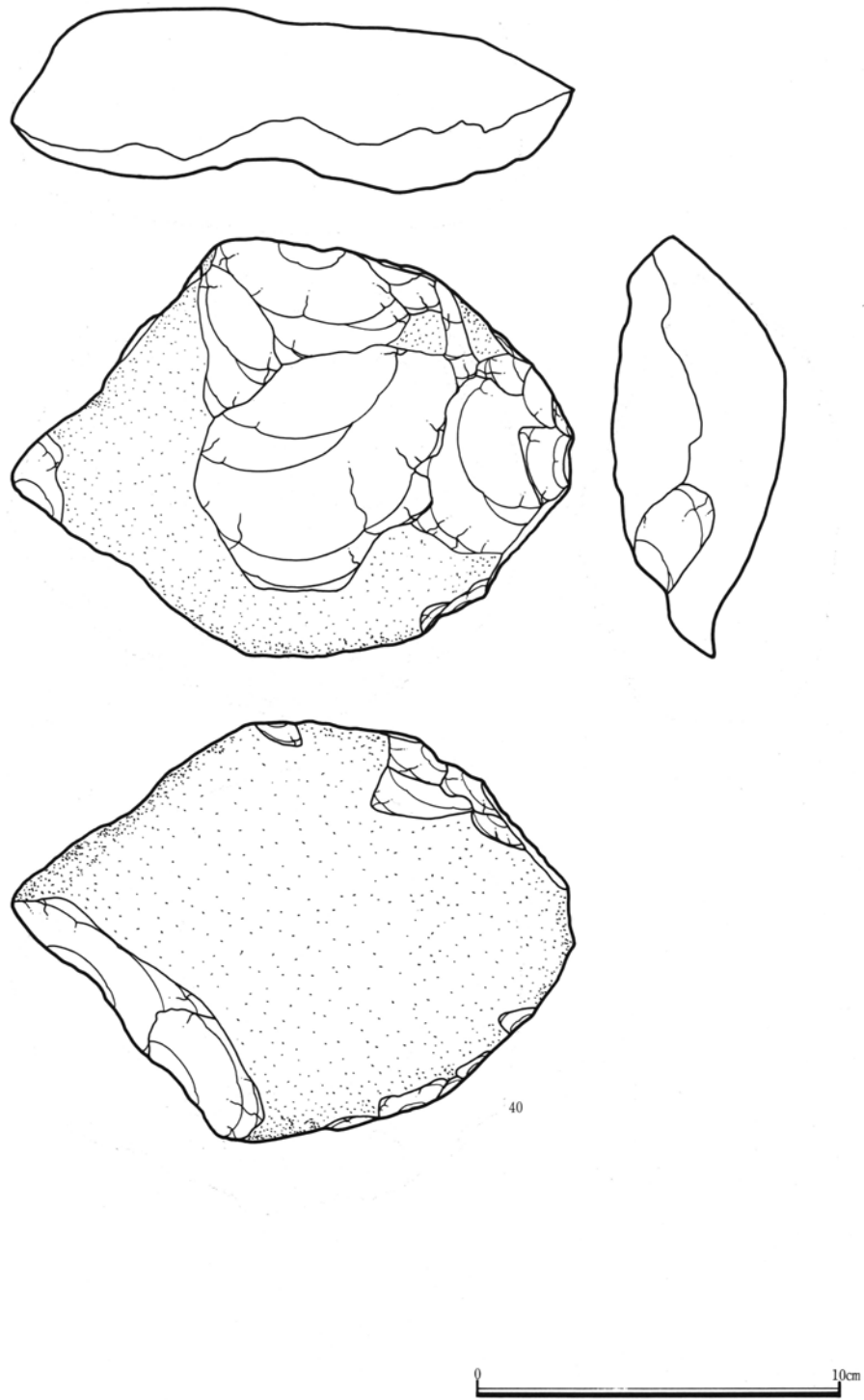
第664図 石核 (1)



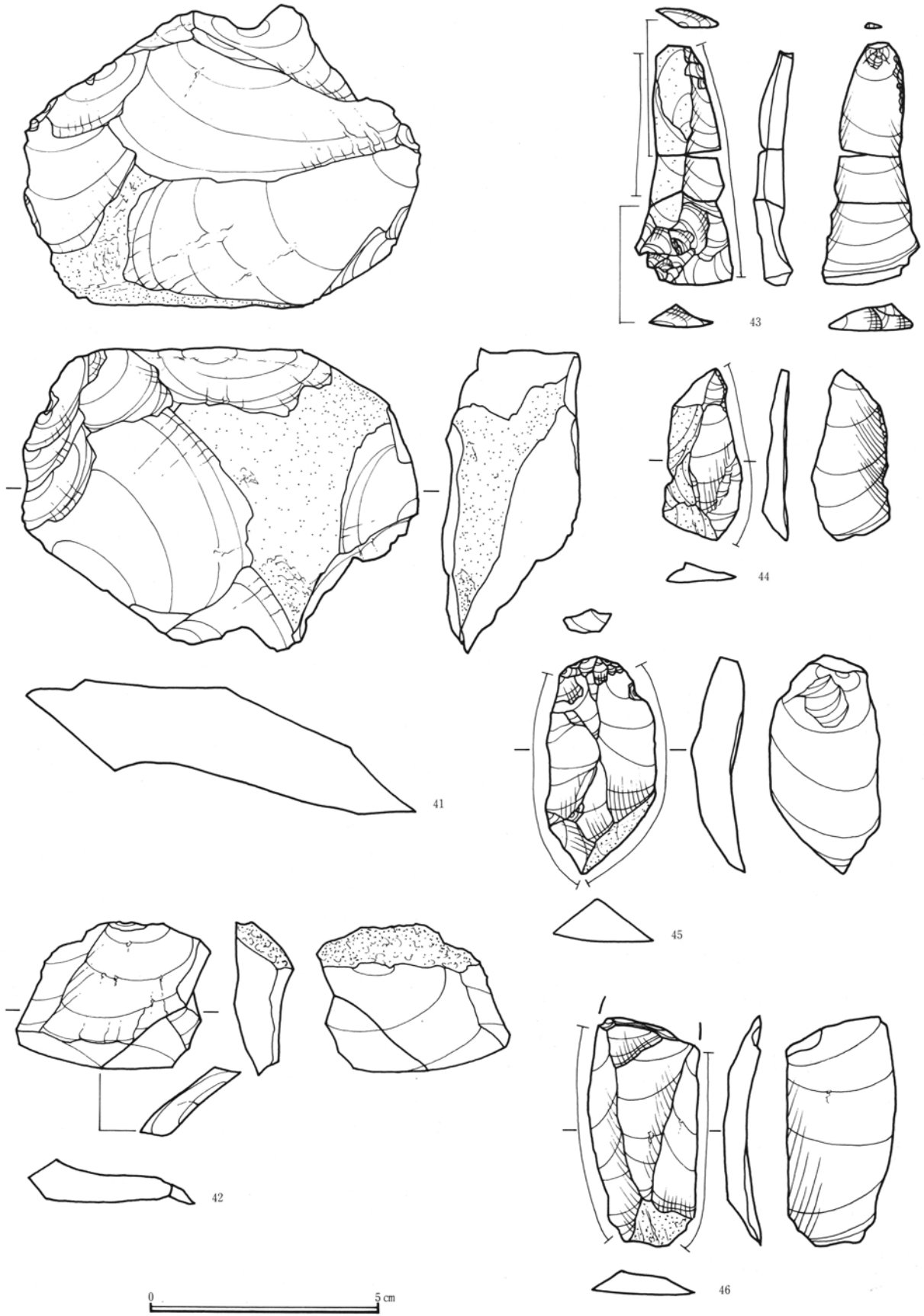
第665図 石核(2)



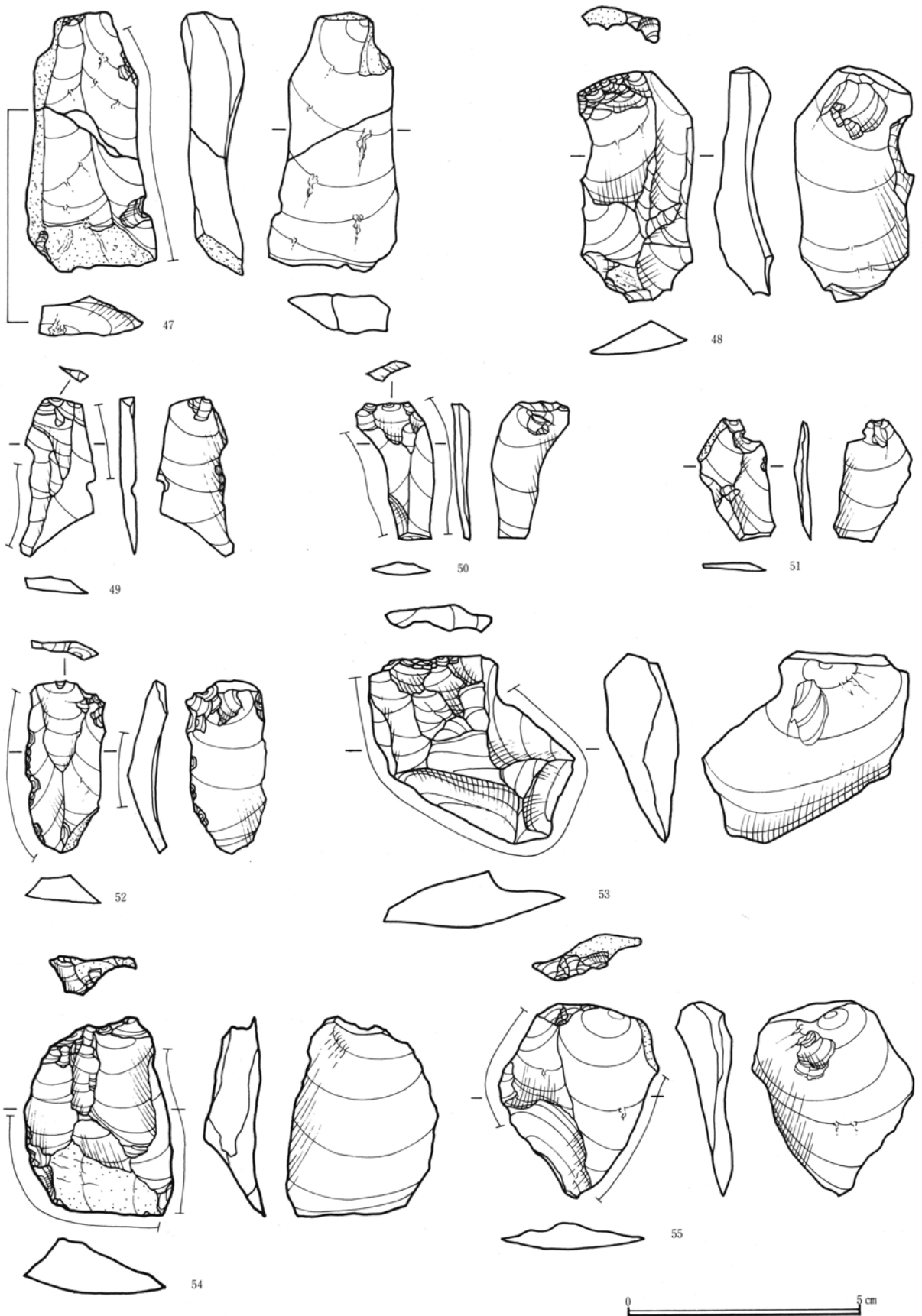
第666図 石核 (3)



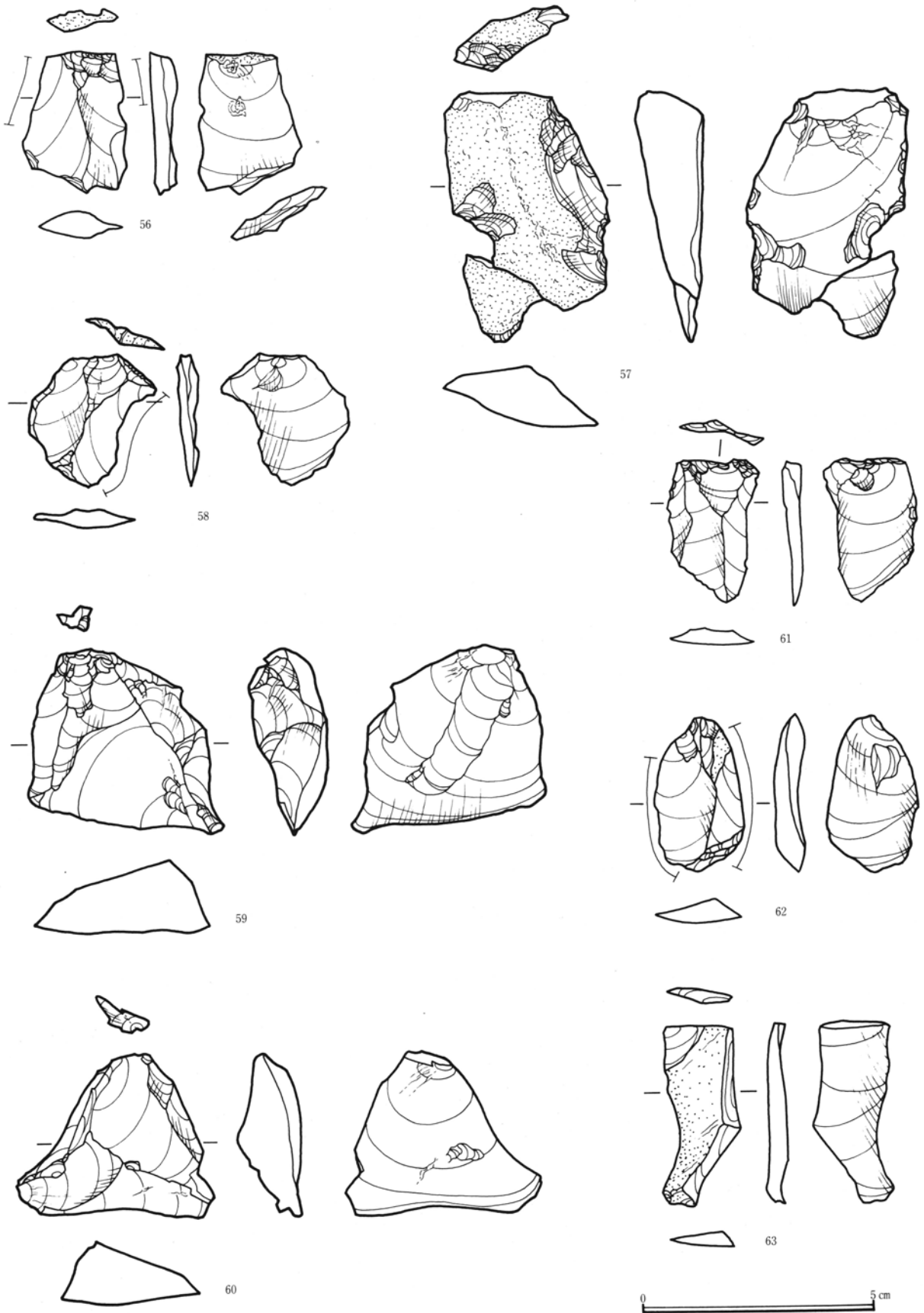
第667図 石核(4)



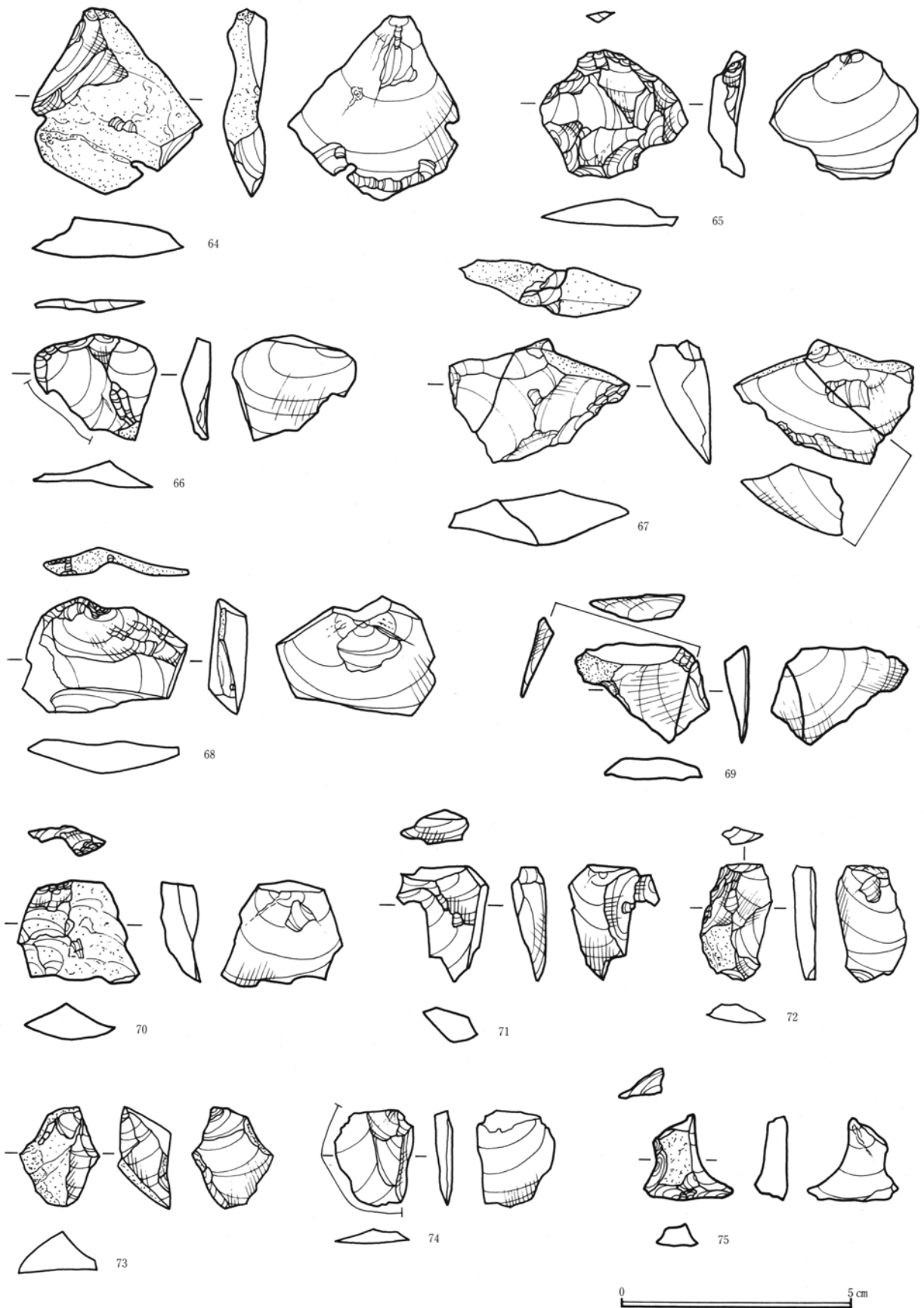
第668図 石核・石刃



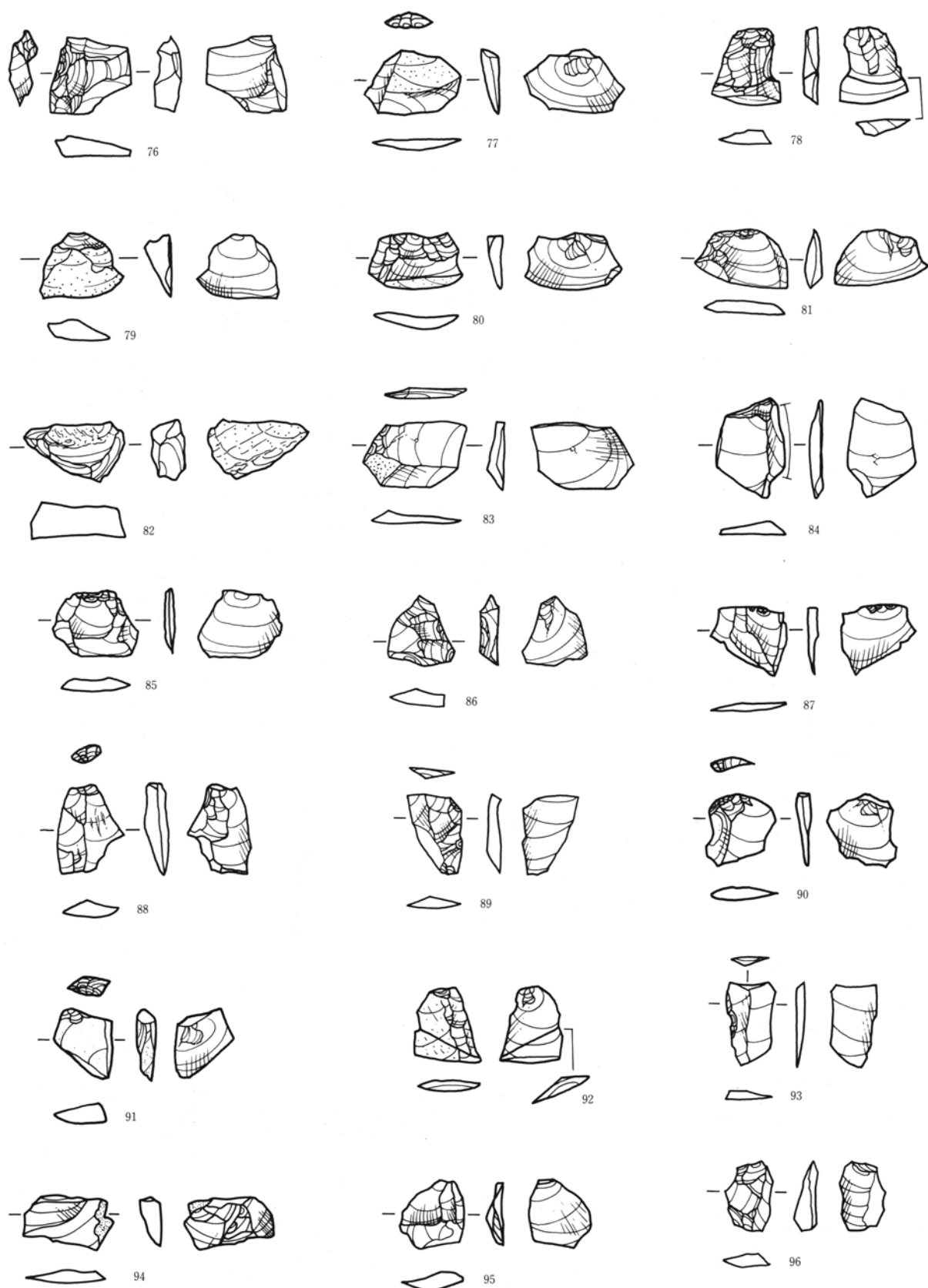
第669図 石刃・剝片



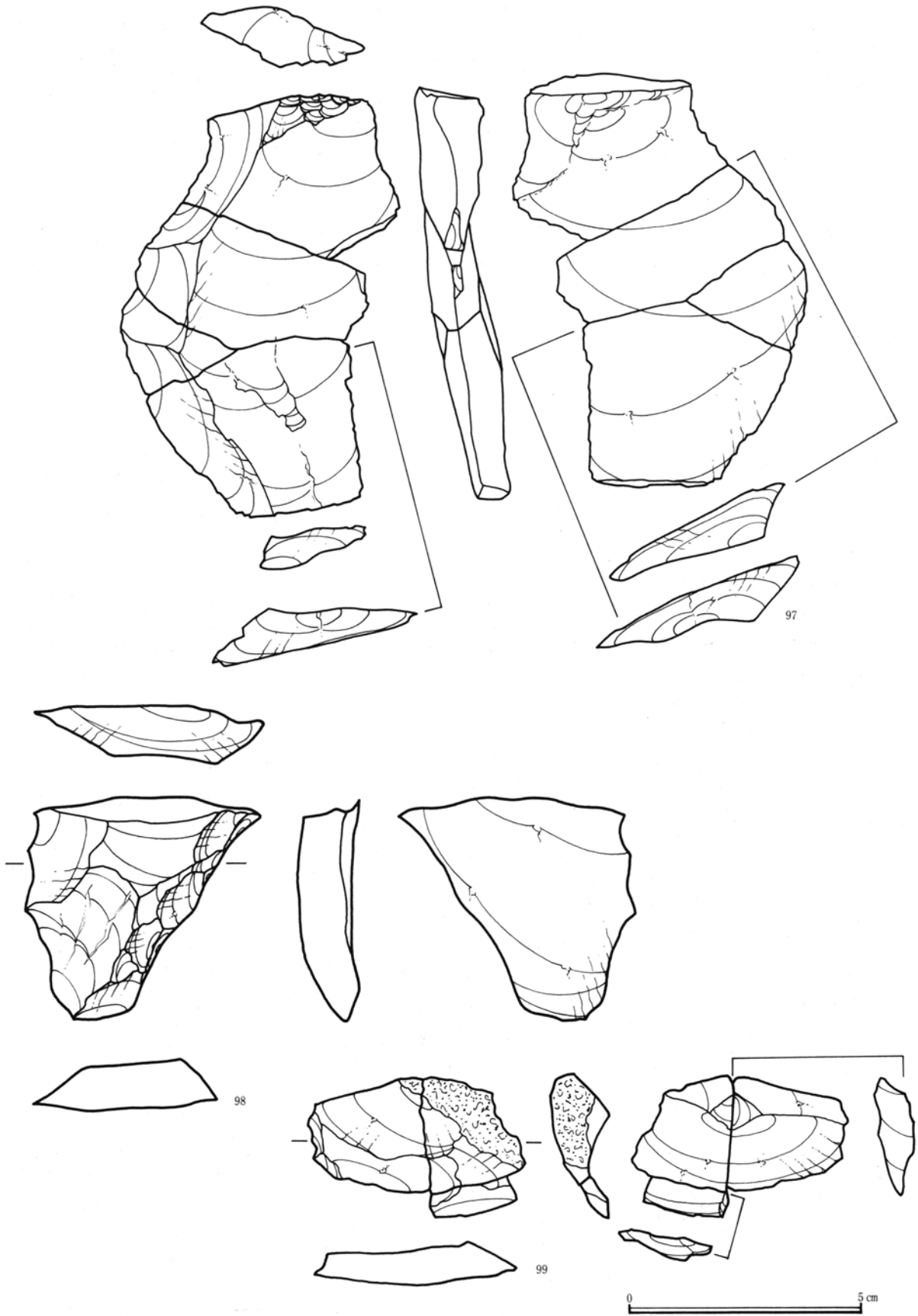
第670図 剥片(1)



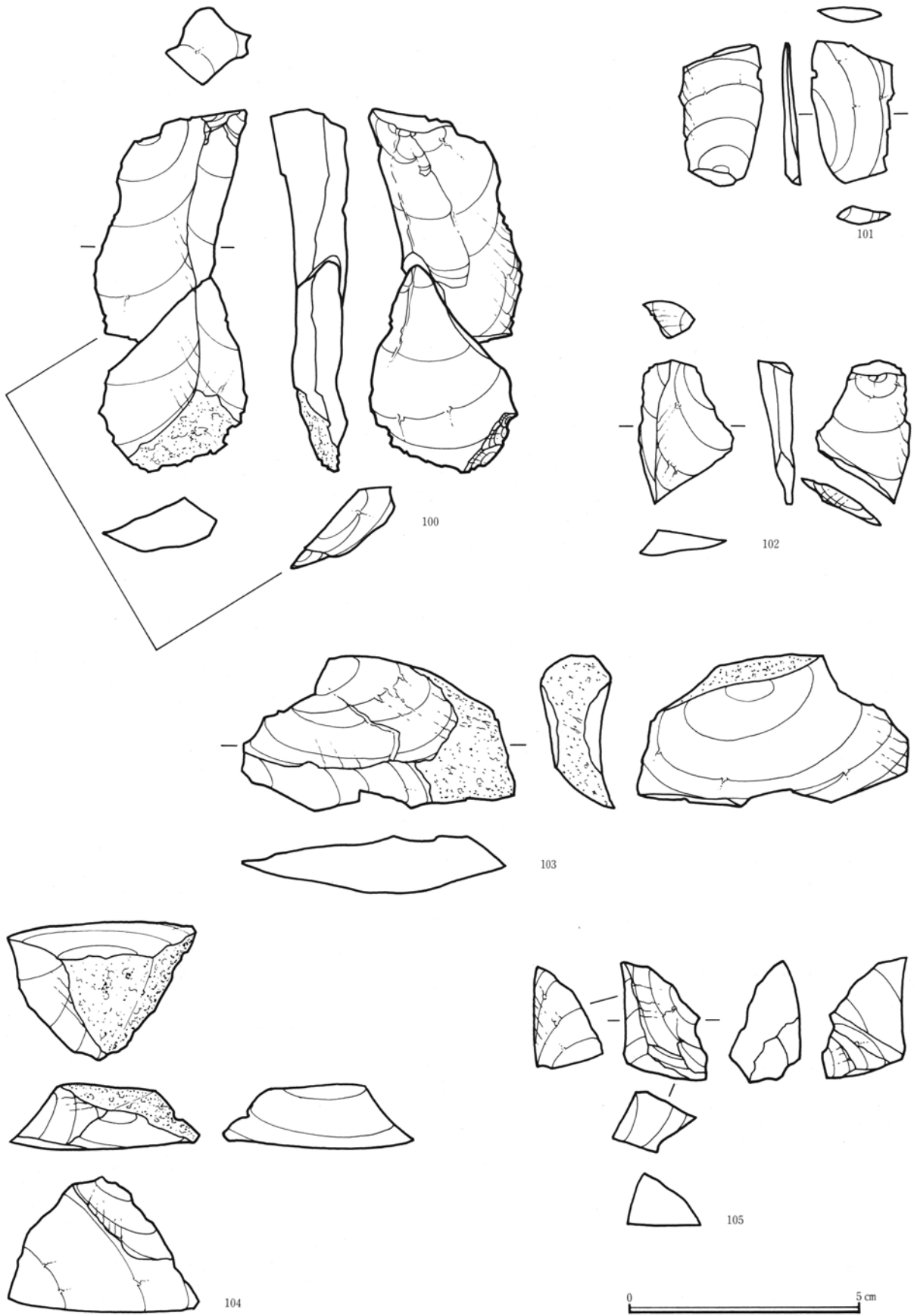
第671図 剥片(2)



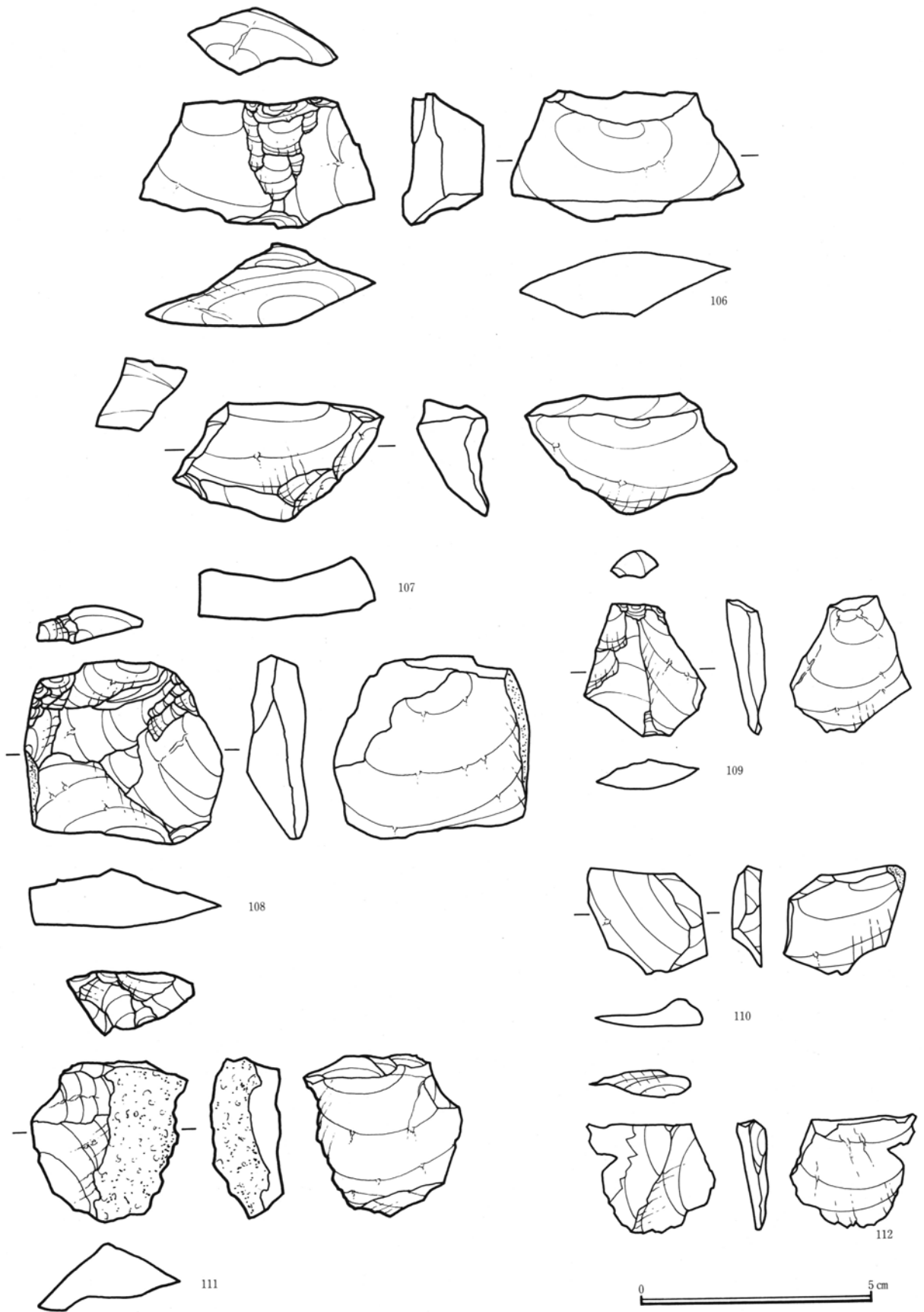
第672図 剝片 (3)



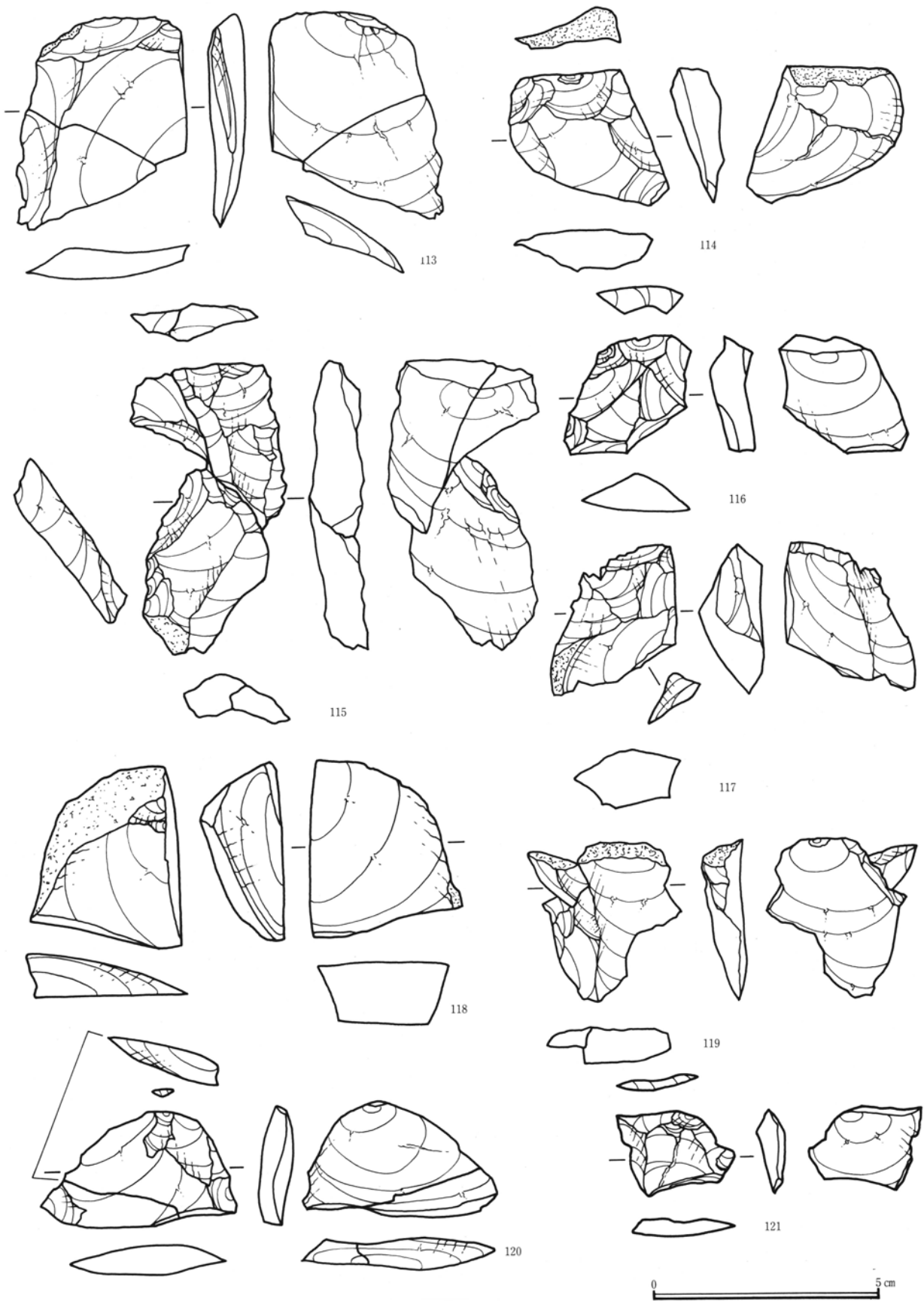
第673図 剥片(4)



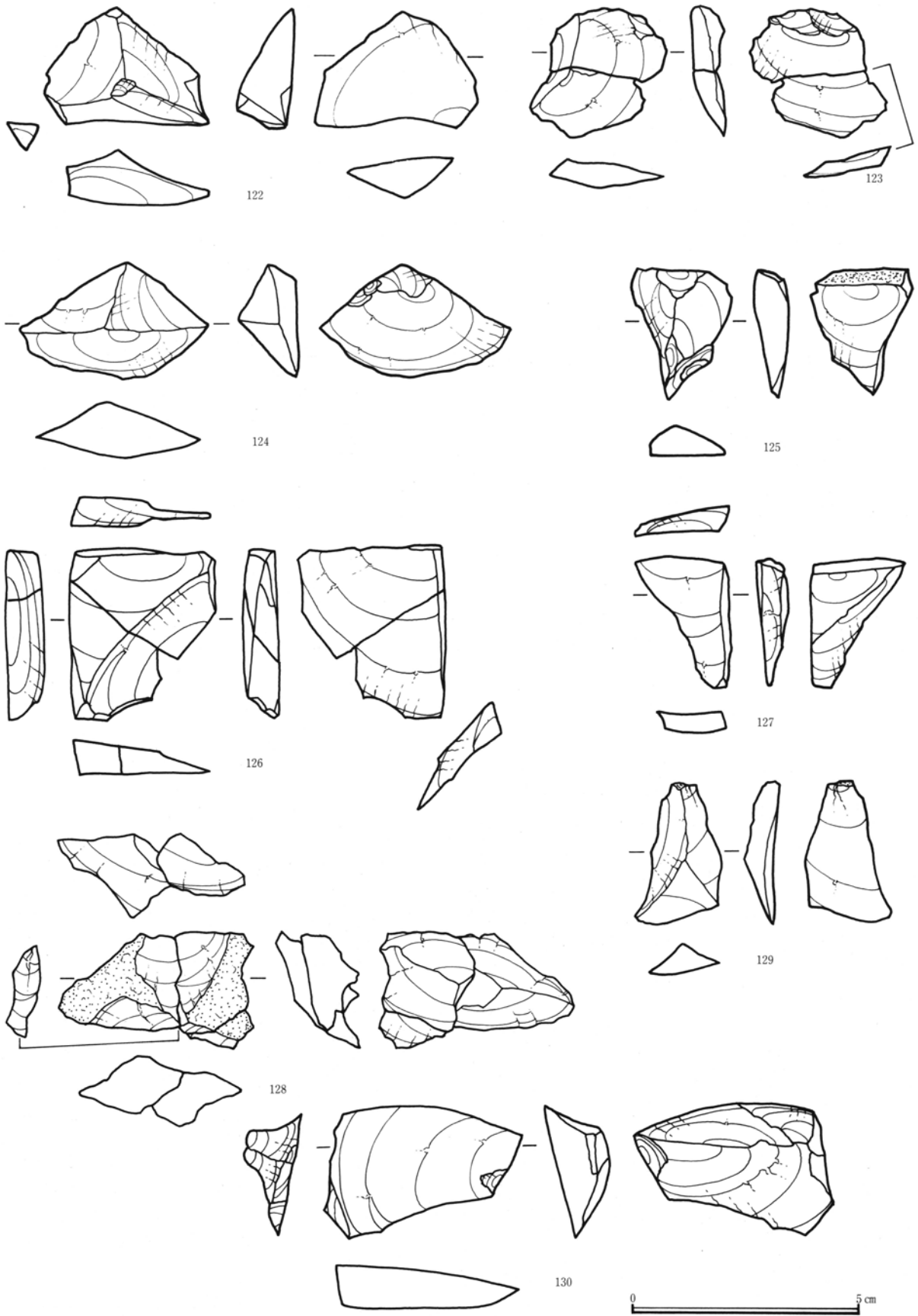
第674図 剥片 (5)



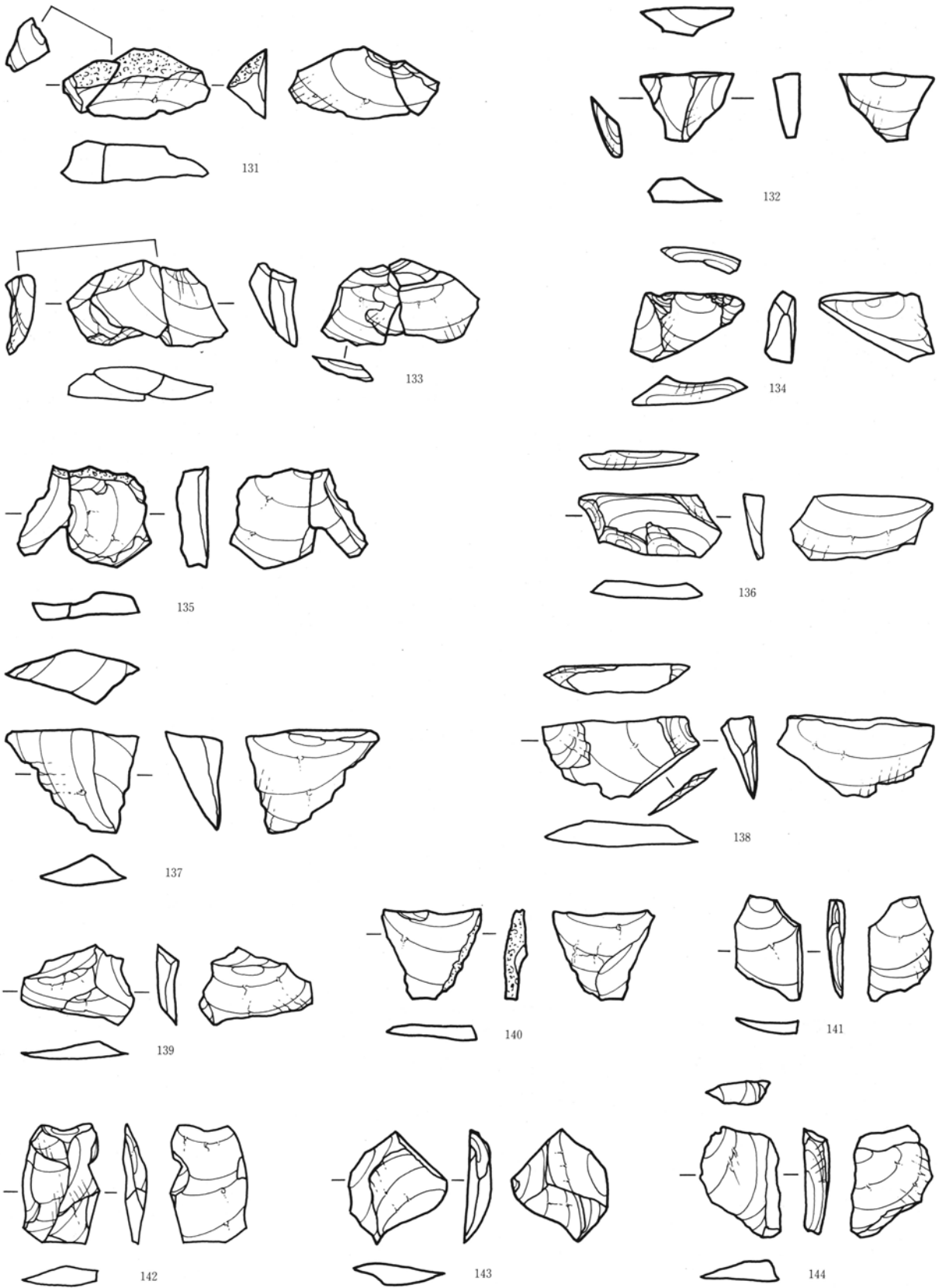
第675図 剥片 (6)



第676図 剥片(7)



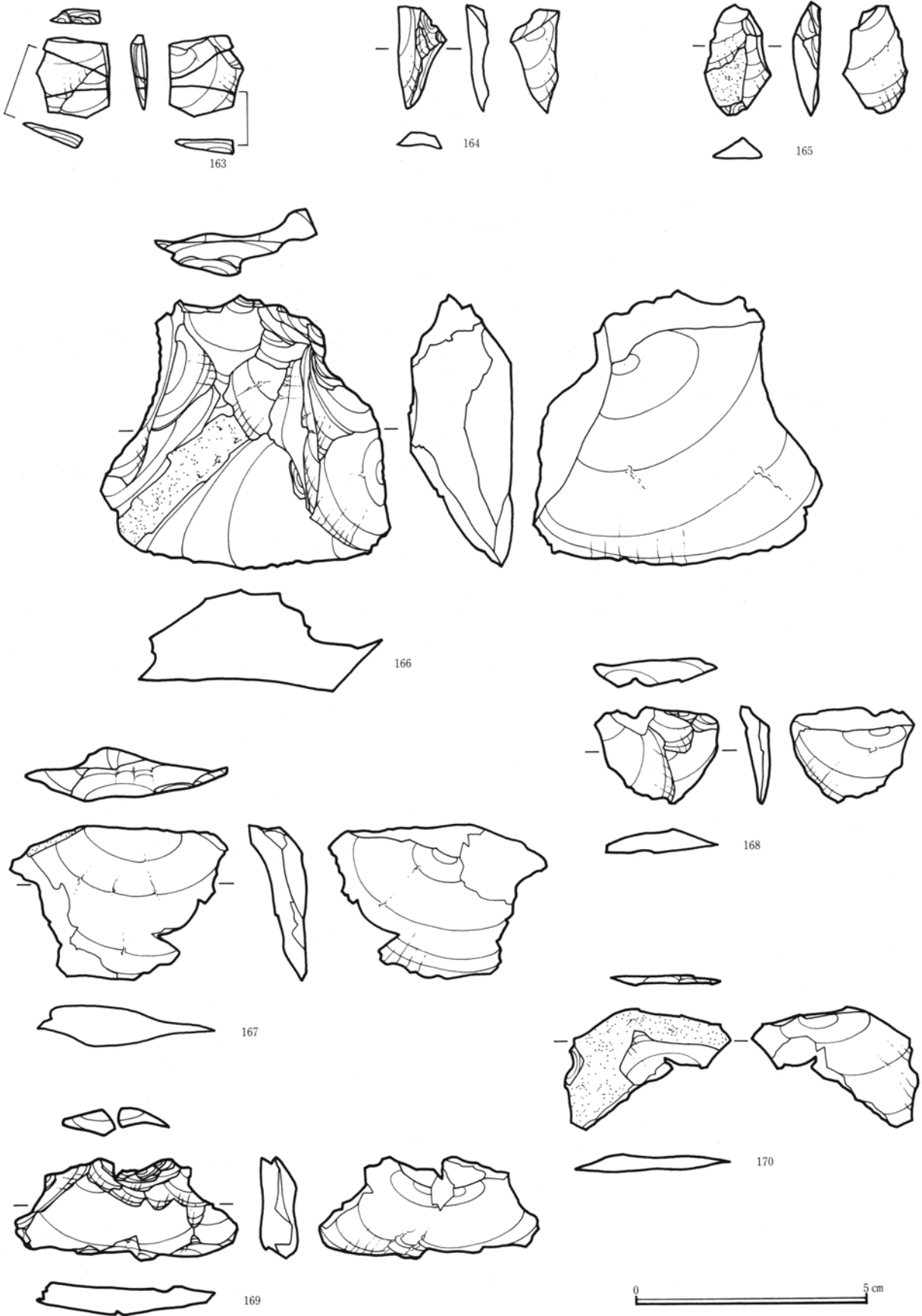
第677図 剥片(8)



第678図 剥片 (9)

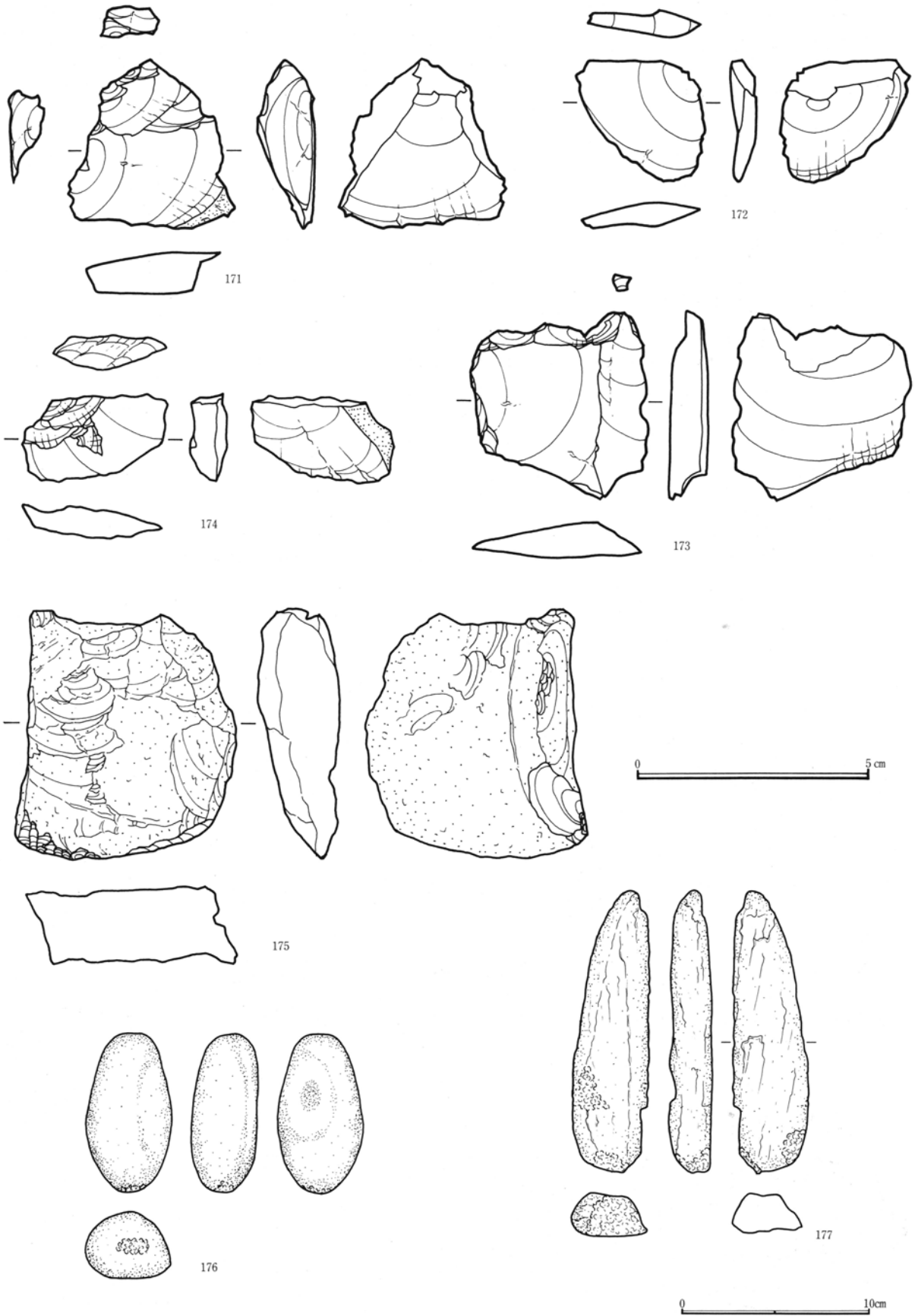


第679図 剥片 (10)

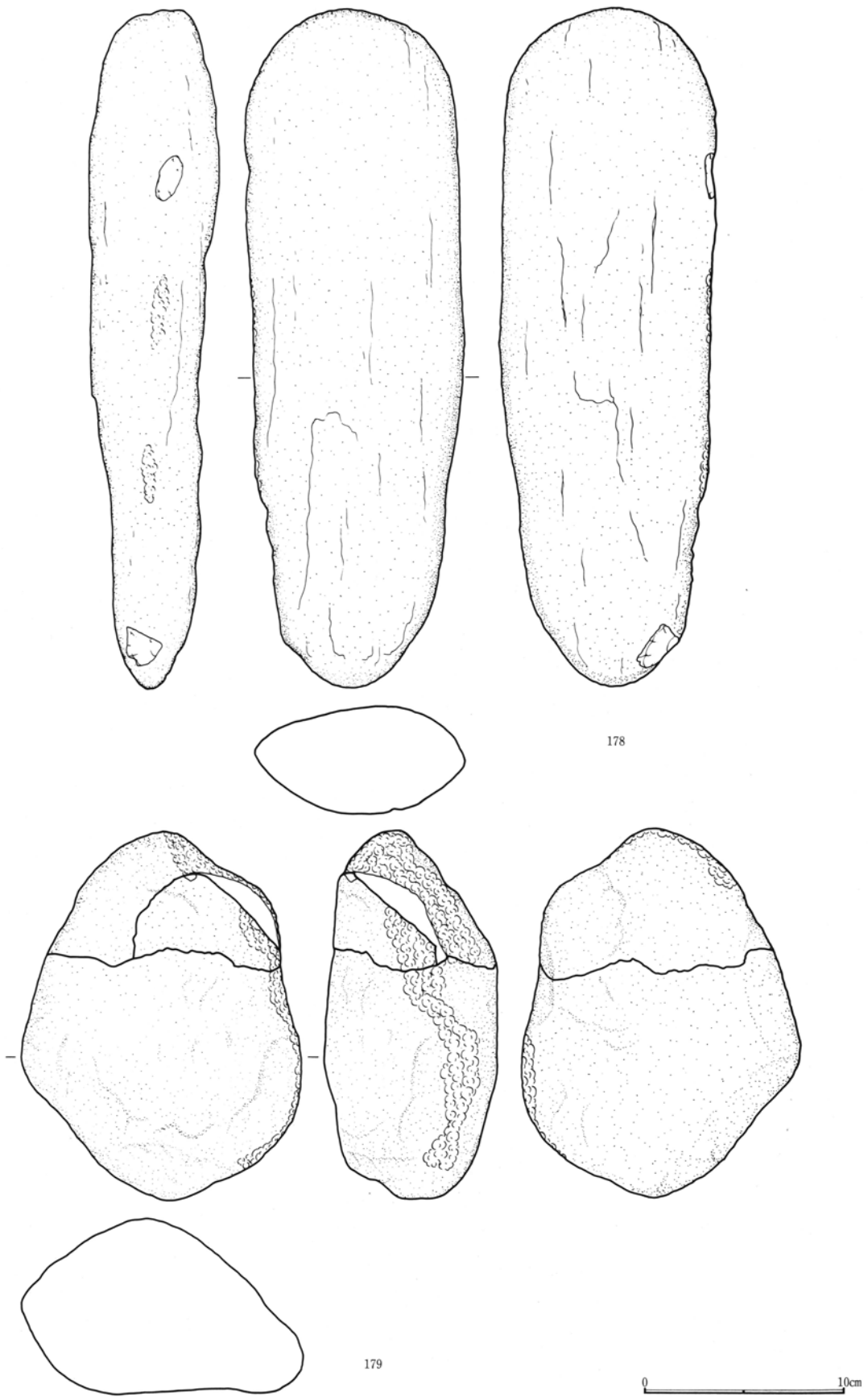


第680図 剥片 (11)

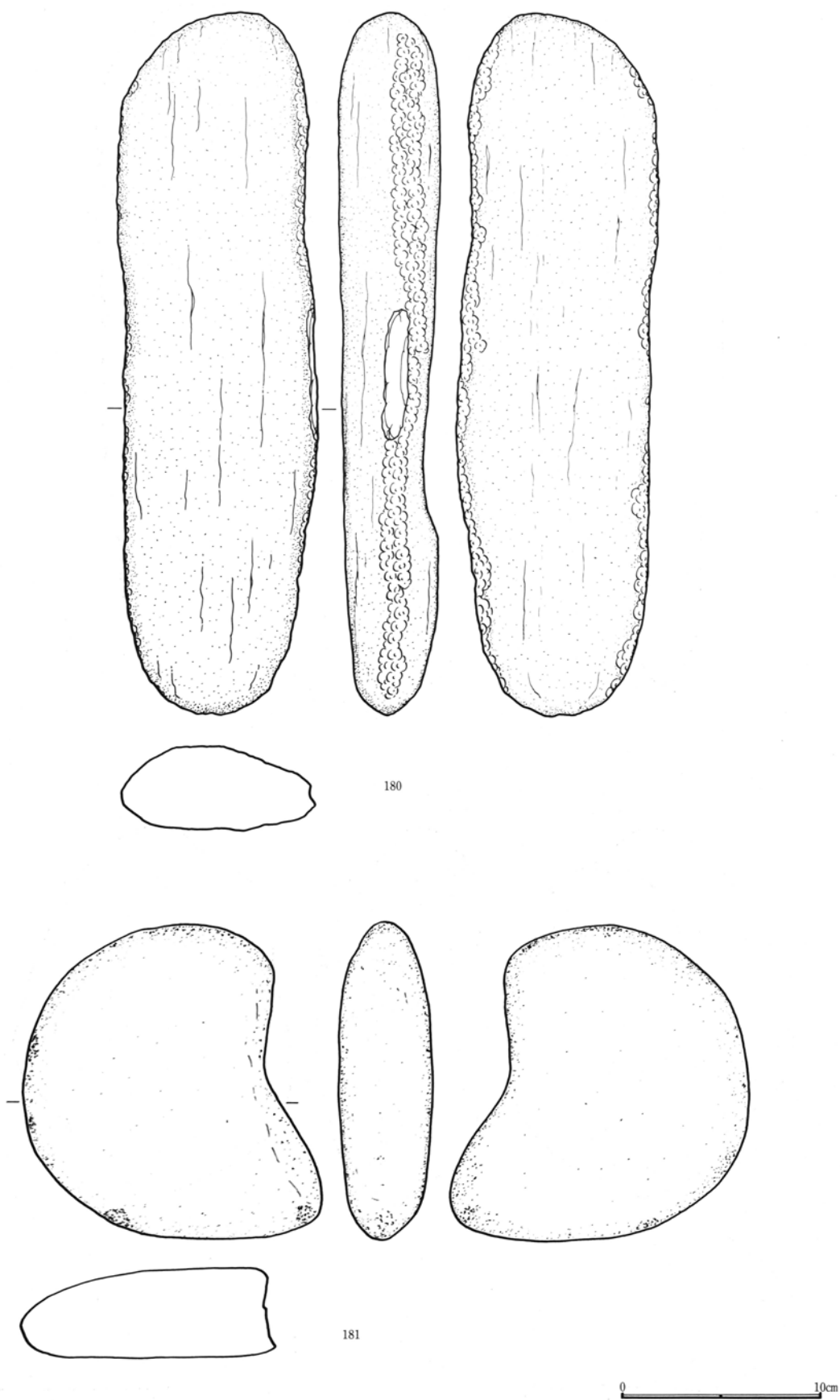
第3章 発見された遺構と遺物



第681図 剥片・原石・敲石



第682図 敲 石



第683図 敲石・台石

3 接合資料

出土した422点の石器の内、103点に接合関係が確認された。接合率は24.4%である。

Ob-1 (第684図1~15, 図版285)

Ob-1に含まれる接合資料で、15点の資料から構成される。3・4のような大型の剥片、5・7・14のような縦長剥片以外は小型の剥片類が多数を占める。小型の剥片類を目的剥片として生産していたのか、あるいは小型の剥片類が調整剥片なのかは判断が困難である。

Ob-2 (第684図16・17, 図版285)

Ob-2に帰属する接合資料で、2点の資料から構成される。16を剥離した後に17を剥離している。

Ob-11 (第685~686図)

Ob-11に帰属する接合資料でA・B・Cの3例の接合資料が確認された。AやCの接合資料は自然面や剥離面の状況から考えて、明らかにBの接合資料よりも以前に剥離されたことがわかる。ただし、接合を懸命に試みたものの、A・B・Cを互いに接合させることはできなかった。

個体A (第685図1~6, 図版286)

6点の資料から構成される。1を剥離した後に90度打面を転移する。その後は打面と作業面を固定し、打点を後退させながら、2~6の石刃ともいえる縦長剥片を連続して生産している。また、それぞれの資料に残る打面は小さい。

個体B (第685図7~12, 図版286)

8点(接合後6点)の資料から構成される。打面と作業面を固定し、打点を後退させながら、1の石刃、2の石刃、3のナイフ形石器が生産されている。その後は、作業面を裏面に移し、4の横長剥片、5の縦長剥片が生産されている。また、接合図の表面には、石刃ないしは縦長剥片を生産した剥離面が残っている。さらに、打点の位置も遠く1や2の石刃よりも大型であったことが推察される。

個体Aの接合資料は、個体Bと直接接合関係は確認できなかったものの、個体Bの1・2・3の同一打面・作業面から生産されていると判断される。このような状況から考えて、Ob-11の剥片生産技術には石刃技法が用いられていたと考えられ、次のような剥片生産技術が復元できそうである。作業面の大きさがある程度保障される初期の段階では、石刃技法によって大型の石刃が生産され、作業面が小さくなるに従い、個体Aの4・6、個体Bの1・2のように小型化した石刃を連続して生産している。

個体C (第686図1・2, 図版286)

2点の資料から構成される。1には背面が自然面で構成されることから、初期の段階で剥離されたことが判断される。

Ob-12 (第686図)

2例の接合資料が確認された。A・Bの接合資料にはそれぞれ節理面が残っている。

個体A (第686図3~5, 図版287)

3点の資料で構成される。打面と作業面を固定し、打点を後退させながら、1→2→3の順番で連続して生産されている。背面構成を見ると、1の生産以前にも石刃ないしは縦長剥片が生産されていたことが理解される。

個体B (第686図6・7, 図版287)

2点の資料で構成される。6のナイフ形石器の素材となる石刃が生産され、その後寸詰まりの縦長剥片が生産されて剥片生産を終了し石核は廃棄される。

GAn-1 (第687・688図)

個体A・B・Cの3例の接合資料が確認されたが、それぞれの資料間で接合させることはできなかった。

個体A (第687図1~7, 図版287)

8点(接合後7点)の資料で構成される。総重量は38.37gである。大型の剥片を石核の素材としてい

る。5を剥離した後、打面を自然面に転移して、2・3・4・6の小型の剥片が生産されている。

個体B (第687図8・9, 図版287)

6点(接合後2点)の資料で構成される。総重量は24.62gである。大型の横長剥片を石核の素材とし、主要剥離面側で1が剥離されている。その後は素材剥片を折断するかたちで剥片生産を行っている。

個体C (第688図1~7, 図版288)

7点の資料で構成される。総重量は59.96gである。大型の幅広の縦長剥片を石核の素材としている。1を切断するかたちで剥離した後、打面を移転しながら2~6の剥片が生産されている。生産された剥片は厚手で不定形である。

GAn-1 個体A・B・Cはそれぞれ大型の剥片を石核素材として剥片生産を行っているが、石核素材の生産は遺跡外で行われ、それを石器製作の原料として本遺跡内に搬入し剥片生産を行っている。

GAn-2 (第688・689図)

2例の接合資料が確認された。

個体A (第688図8・9, 図版288)

5点(接合後2点)の資料から構成される。スクレイパーとその刃部再生剥片の接合資料である。

個体B (第689図1~6, 図版288)

8点(接合後6点)の資料から構成される。1を剥離した後、打面を転移して、2~6の小型の剥片を生産している。

GAn-3 (第689・690図)

個体A・Bの2例の接合資料が確認されたが、両接合資料間での接合関係は確認できなかった。

個体A (第689図7~13, 図版289)

7点の資料で構成される。総重量は84.89gである。大型の幅広の縦長剥片を石核素材として、剥片生産を行っている。12を切断した後、打面を素材主要剥離面に設定して、7~10の剥片を連続して生産している。

個体B (第690図1~9, 図版289)

11点(接合後9点)の資料で構成される。総重量は40.82gである。大型の剥片を石核素材として剥片生産を行っている。生産された剥片は小型で不定形なものである。

GAn-4 (第690図10~12, 図版290)

5点(接合後3点)の資料から構成される。スクレイパーと縦長剥片、碎片の接合資料である。平坦な打面から1と3が連続して生産されている。背面構成からも石刃ないしは縦長剥片を生産していることが看取される。

HMs-1 (第691・692図)

A・Bの2例の接合資料から構成される。HMs-1 BはHMs-1 Aから生産されていることは明らかであるが、接合関係を確認することはできなかった。

個体A (第691図1~8, 図版290)

8点の資料から構成される。扁平な円礫を素材とし、打面と作業面を交互に入れ替えながら1~7の不定形な剥片類が生産されている。

個体B (第692図, 図版291)

2点の資料から構成される。同一の打面から、連続して2枚の不定形な剥片が剥離されている。

4 その他の石器

縄文時代以降の遺構覆土や表土から旧石器時代に帰属すると考えられる次の石器が確認された。

1 黒曜石製の槍先尖頭器である。縦長剥片を素材とし、背面と主要剥離面に調整加工が施されている。背面では全面を覆う調整、主要剥離面では周辺調整である。

2 黒色安山岩製の槍先尖頭器である。

3 黒色頁岩製の槍先尖頭器である。縄文時代に帰属する可能性もある。

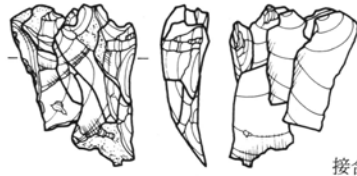
4 硬質泥岩製のスクレイパーである。縦長剥片を素材とする。



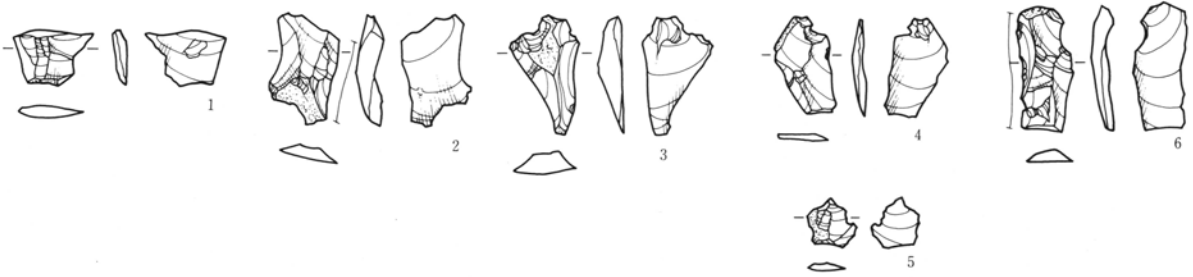
第684図 接合資料 (Ob-1・Ob-2)

第3章 発見された遺構と遺物

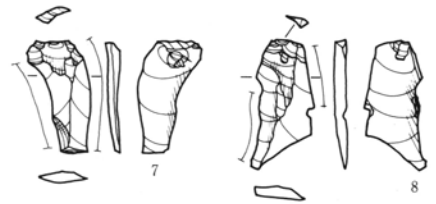
Ob-11個体A



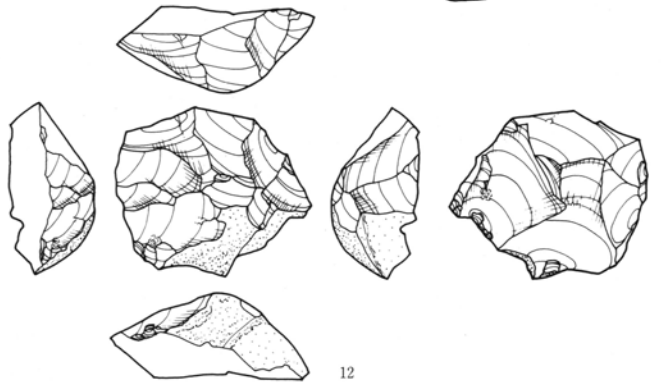
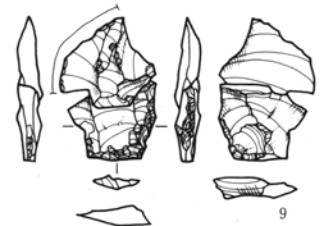
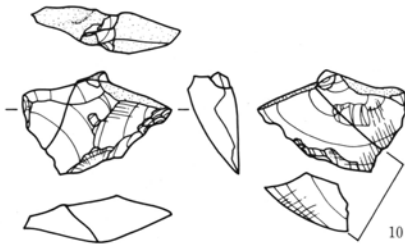
接合状況



Ob-11個体B

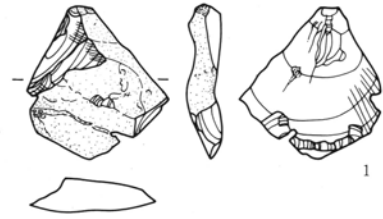
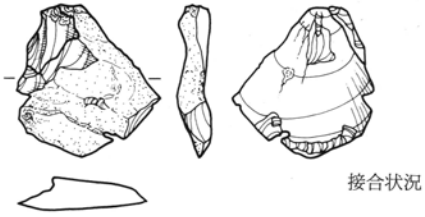


接合状況

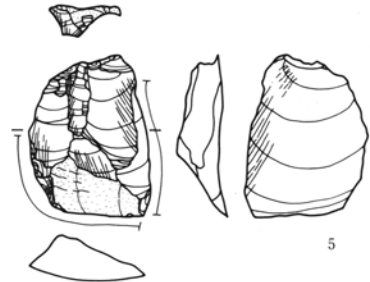
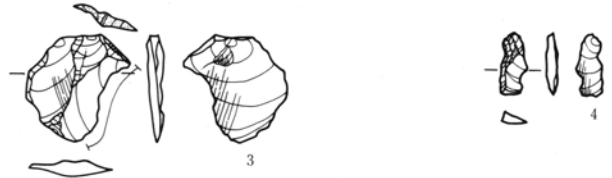
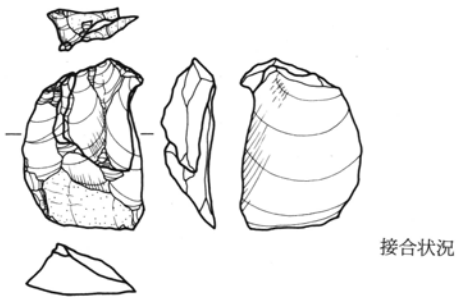


第685図 接合資料 (Ob-11)

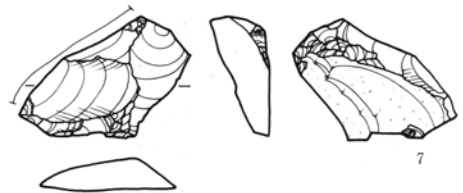
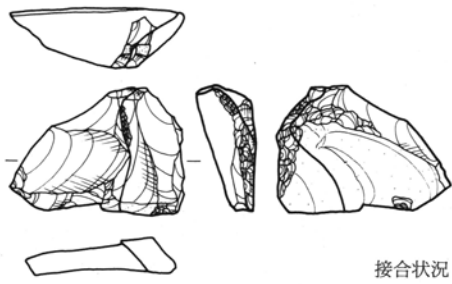
Ob-11個体C



Ob-12個体A



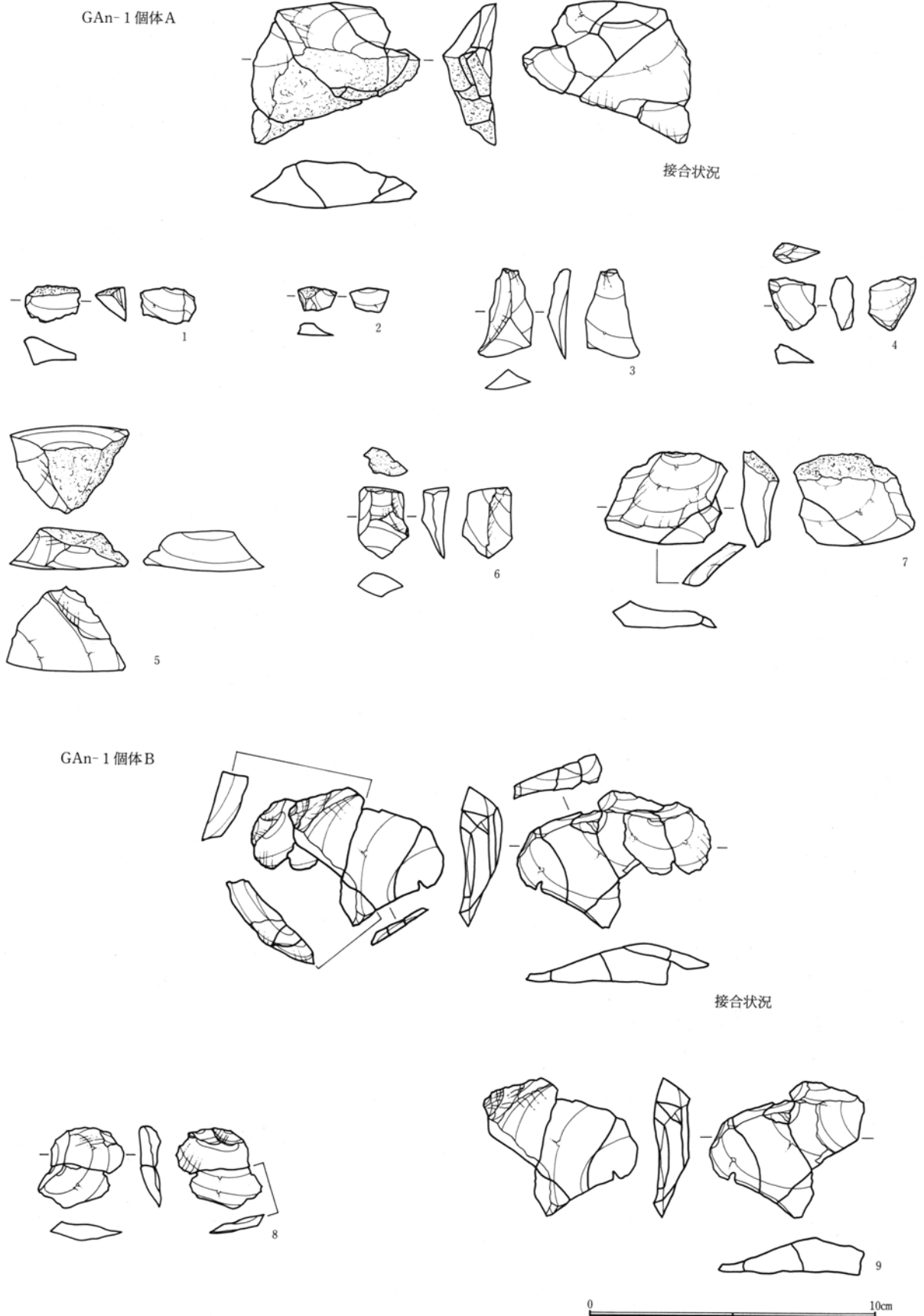
Ob-12個体B



0 10cm

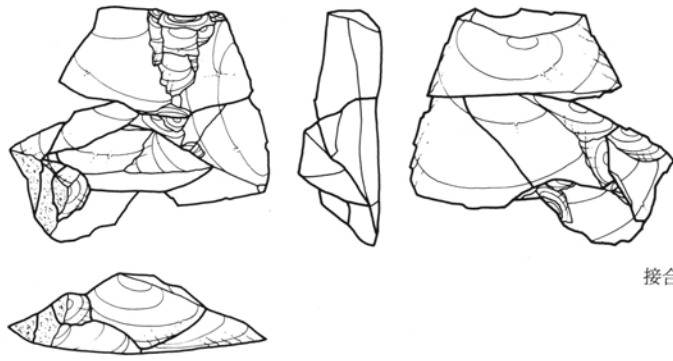
第686図 接合資料 (Ob-11・12)

第3章 発見された遺構と遺物

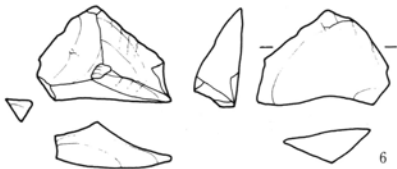
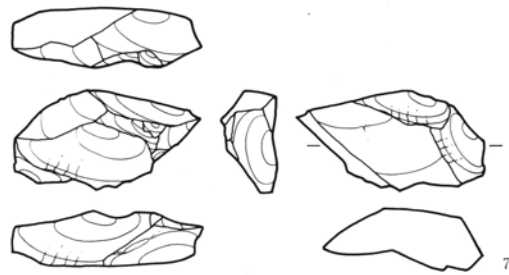
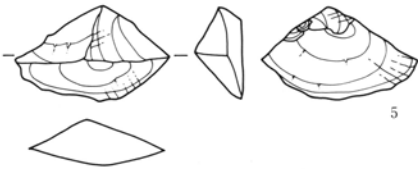
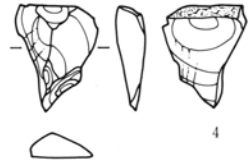
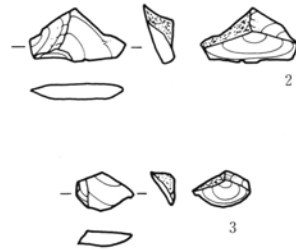
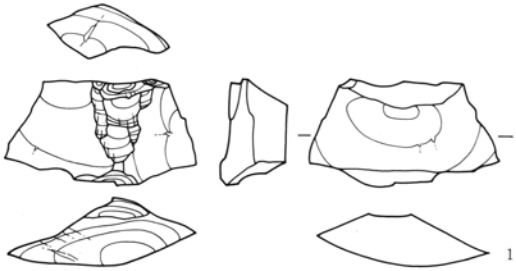


第687図 接合資料 (GAn-1 [A・B])

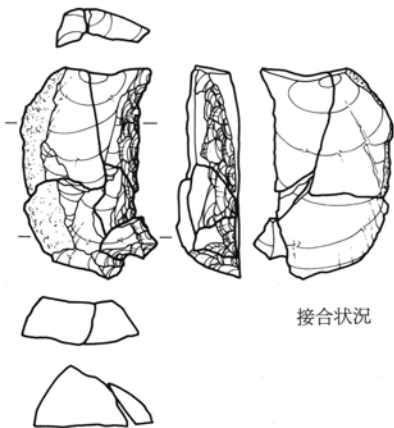
GAn-1 個体C



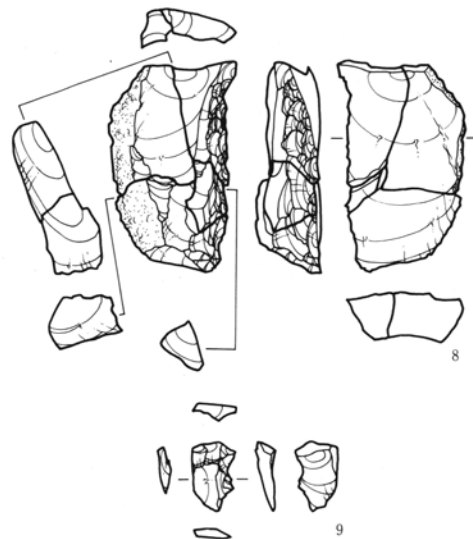
接合状況



GAn-2 個体A



接合状況



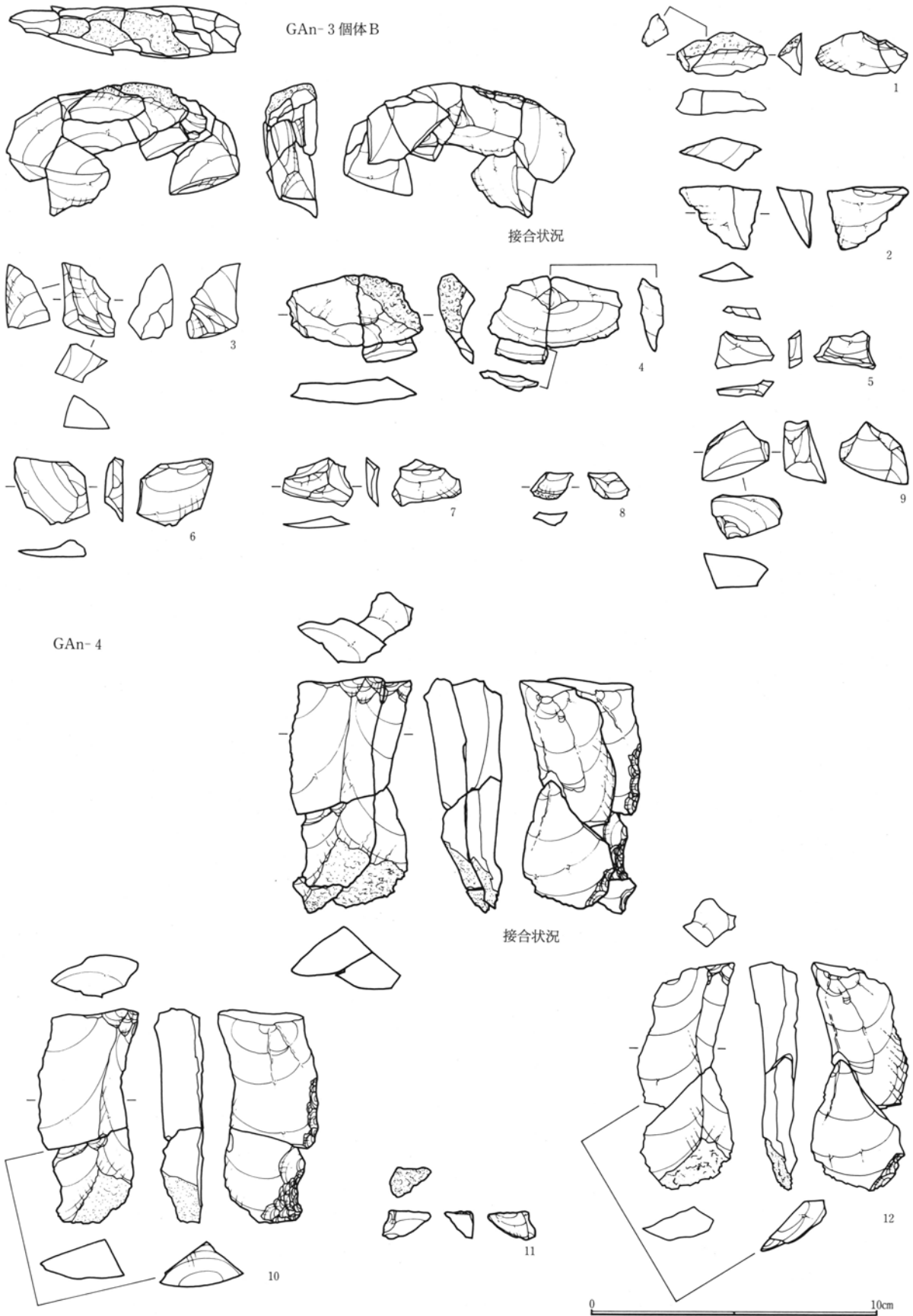
0 10cm

第688図 接合資料 (GAn-1 [C]・GAn-2)

第3章 発見された遺構と遺物

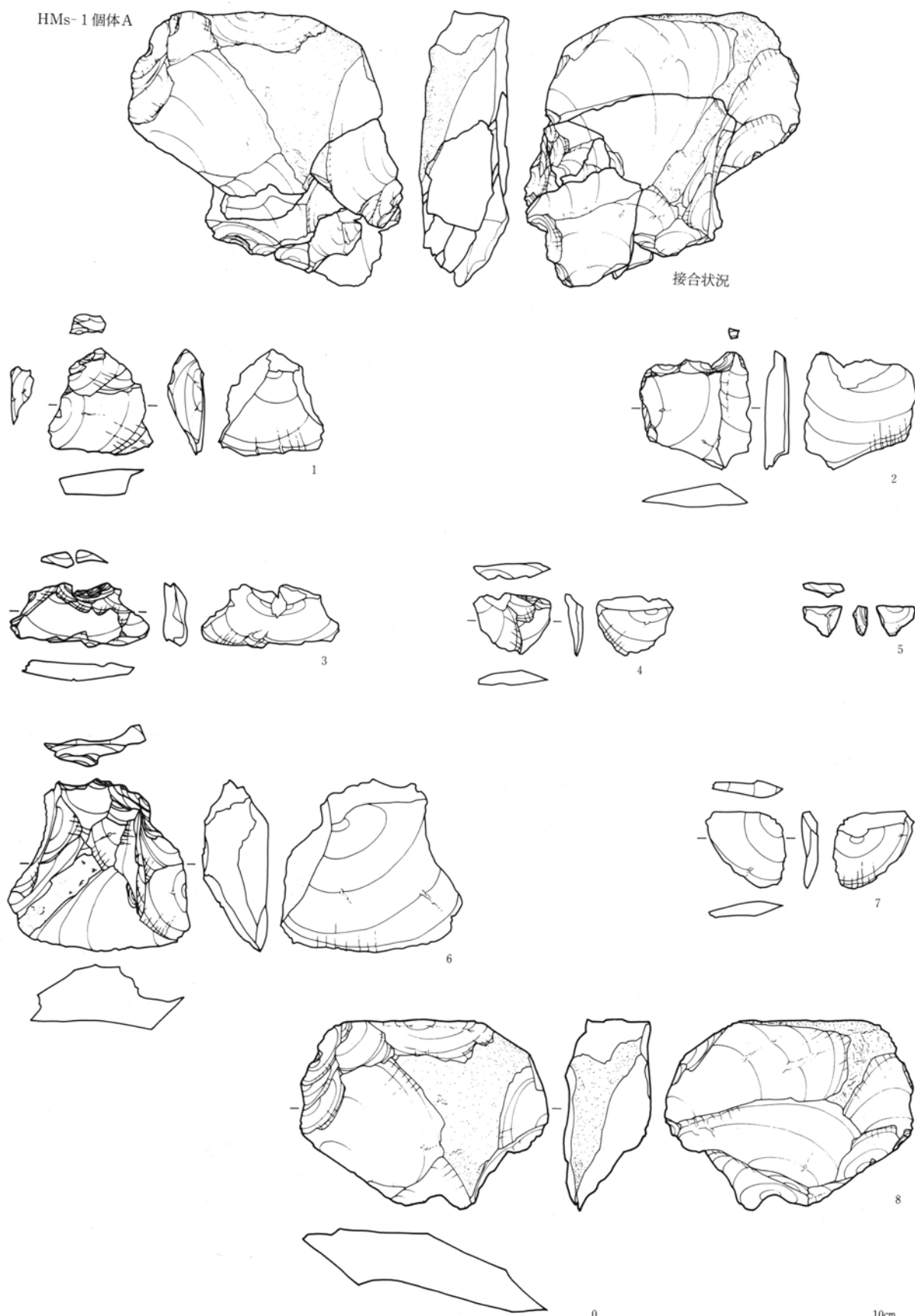


第689図 接合資料 (GAn-2・3)

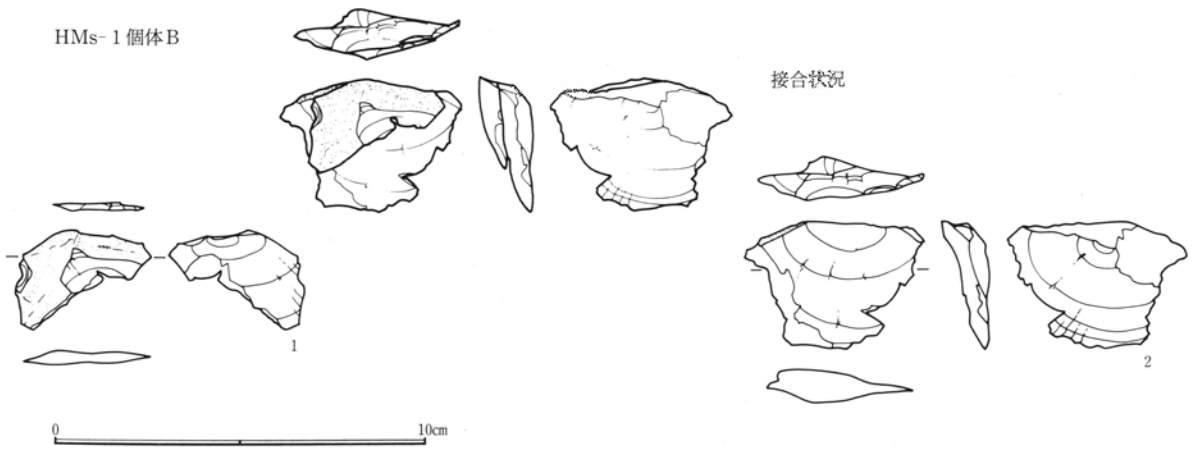


第690図 接合資料 (GAn-3・4)

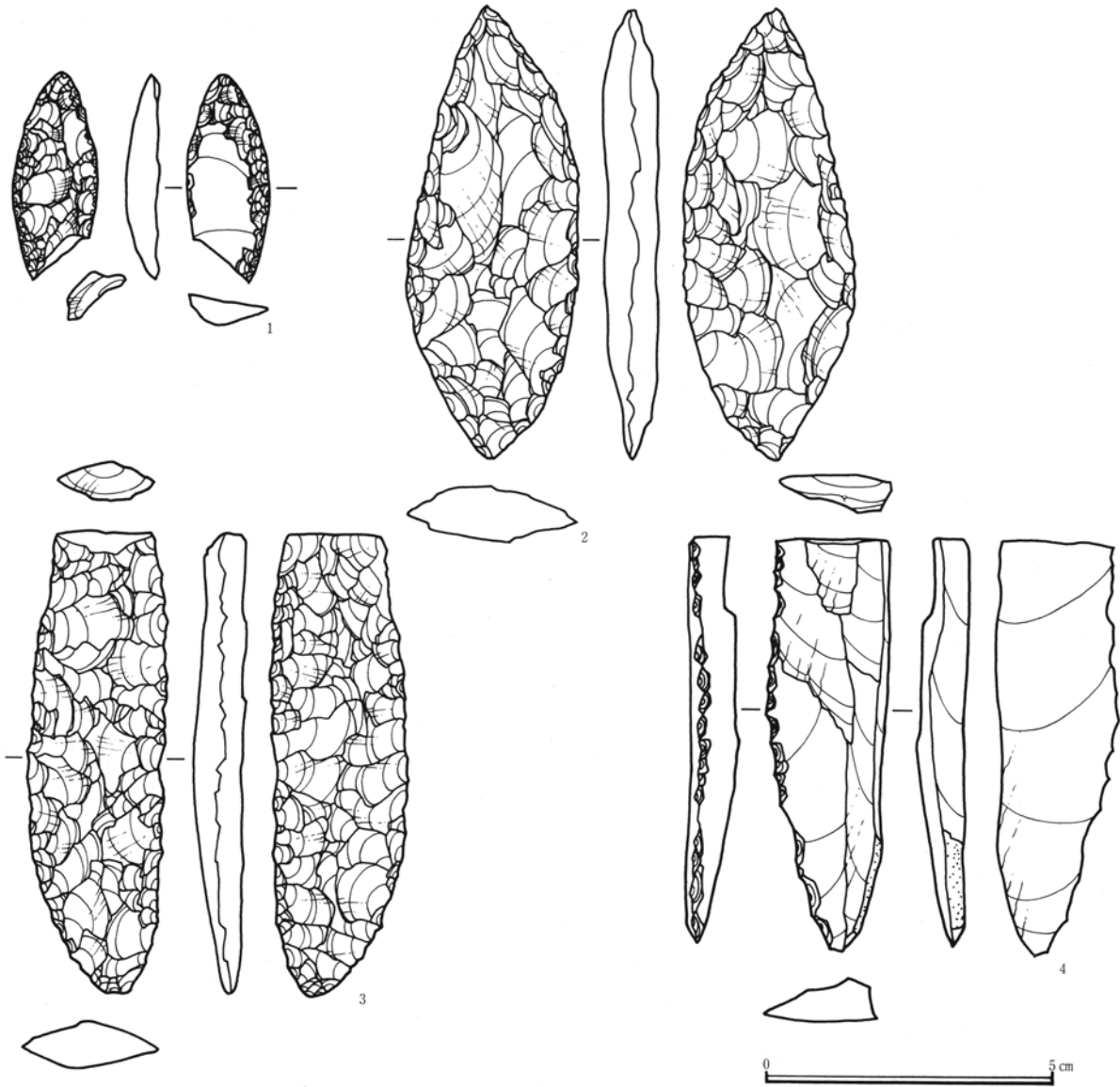
HMs-1 個体A



第691図 接合資料 (HMs-1 (A))



第692図 接合資料 (HMs-1 [B])



第693図 表 採

5 ブロック

本遺跡からは422点の石器と3点の礫が出土した(第694図)。分布状況から1ブロック～10ブロックの合計10カ所のブロックをここでは設定した。このうち、1～9ブロックが一つのブロック群で、環状ブロック群として認識できる。この環状ブロック群は明確な正円形を呈していないが、石器分布が希薄な中心部を取り囲むようにブロックが展開していることから、環状ブロック群の範疇に含められる。

なお、分布図から見てわかるように、北側の調査区外にも石器分布が及んでいる可能性も残している。

10ブロックは環状ブロック群から50mほど南の台地縁辺部に単独で展開している。環状ブロック群との間で母岩別資料の共有関係が見られないことから、先後関係は判断できないものの、環状ブロック群と10ブロックとの間には時間差をおいて考えた方が妥当と言える。

1ブロック (第696・697図)

調査区北側のFm・Fn-13・14グリッドに位置する。南側には2ブロック、西側には8ブロック、南西側には9ブロックがそれぞれ隣接する。ブロック東側のFm-13グリッドに集中して分布し、西側に行くに従って散漫な分布となる。

総数123点の石器で構成され、その内訳はナイフ形石器4点、台形様石器3点、スクレイパー2点、二次加工のある剥片2点、石核2点、石刃6点、剥片58点、碎片46点である。石材別に構成を見ると、黒曜石が118点(重量232.71g)、黒色安山岩が5点(重量3.62g)で、圧倒的に黒曜石が主体を占めている。母岩別の構成では、Ob-1が25点(重量46.2g)、Ob-11が66点(重量108g)、Ob-12が15点(重量35.8g)、Ob-21が3点(重量8.67g) GAn-1が3点(重量2.8g)で、その他は2点以下で、数量・重量ともにOb-11が圧倒的に主体を占めている。母岩別に分布状況を見ると、Ob-1が北側、Ob-11が中心部、Ob-12が南側に分布し、分布域に異なりを見

せている。

接合関係はブロック内でほとんど収束するがOb-12に帰属する折断された石刃が4ブロックとの遠距離間で接合している。

2ブロック (第698・700図)

調査区北寄りのFm・Fn-14グリッドに位置する。北側には1ブロック、南側には3ブロック、西側には7・9ブロックがそれぞれ隣接する。中心部よりやや南側に集中して分布し、周辺部に行くに従って散漫となる。黒曜石は中心部にはなく、周辺部に分布している点が注意される。

総数64点の石器で構成され、その内訳は台形様石器2点、二次加工のある剥片1点、石核3点、石刃2点、剥片35点、碎片19点、原石1点、敲石1点である。石材別では、黒曜石が11点(重量85.12g)、黒色安山岩が47点(重量220.57g)、硬質泥岩が5点(重量226.66g)、輝緑岩が1点(重量675g、ただし敲石)で、数量・重量ともに黒色安山岩が主体を占める。母岩別では、GAn-1が35点(重量117g)で主体を占め、HMs-1が5点(重量227g)で、その他は3点以下である。GAn-1は個体A・Bが分布している。

接合関係は南側に展開する3・4・5・6ブロック間で多数が確認された。一方、北側に隣接する1ブロックや西側に隣接する7・9ブロックとの間では確認できなかった。3・4ブロック間との密接な関連が窺えるとともに、5・6ブロック間との遠距離間で接合関係が確認された点が注目される。

3ブロック (第699・701図)

調査区北寄りのFm・Fn-15グリッドに位置する。北側には2ブロック、南側には4ブロック、西側には7ブロックがそれぞれ隣接する。中心部1mほどの範囲に集中し、周辺部では散漫である。2ブロックと同様に黒曜石はブロック周辺部に分布している。また、3ブロックからやや離れた周辺部から黒曜石製の石刃が1点出土している。

総数33点の石器で構成され、その内訳は台形様石器1点、楔形石器1点、石核2点、剥片14点、碎片15点である。石材別では、黒色安山岩が29点(重量109.5g)で圧倒的に主体を占め、黒曜石は4点(重量25.07g)が分布するのみである。母岩別では、GAn-1が22点(重量95.8g)で主体を占め、GAn-2が6点(重量12.9g)であるほかは単独の資料である。

接合関係は北側に隣接する2ブロック、南側に隣接する3ブロック間で確認された。2ブロックと同様に西側に隣接する7ブロックとの間では確認できず、南北に並列するように展開するブロック間での密接な関連が窺える。

4ブロック(第702・704図)

調査区中央部寄りのFm・Fn-15・16グリッドに位置する。北側には3ブロック、南側にはやや距離を置いて5・6ブロック、北西部には同じくやや距離を置いて7ブロックがそれぞれ隣接する。ブロック北側で集中し、南西方向に行くに従って散漫な分布となる。本ブロックからは炭化物が検出されたが、焼土は確認できず、炉跡が存在したか否かは判断できなかった。

総数64点の石器で構成され、その内訳はナイフ形石器1点、台形様石器1点、スクレイパー6点、石核3点、石刃2点、剥片36点、碎片15点である。石材別では、黒色安山岩53点(重量351.11g)、黒曜石6点(重量11.43g)、チャート3点(重量0.93g)、硬質泥岩(重量5.44g)で、黒色安山岩が圧倒的に主体を占める。母岩別では、GAn-1が11点(重量68.5g)、GAn-2が14点(重量42.3g)、GAn-3が21点(重量151g)、GAn-4が6点(重量74.5g)であり、その他は2点以下である。

接合関係はブロック内で収束するものが多いものの、隣接する3・5ブロック間や1・2ブロックとの遠距離間でも確認された。2・3ブロックでの接合関係と同様に北西側に隣接する7ブロックとの間では確認できなかった。

5ブロック(第703・705図)

調査区中央部寄りのFm-16グリッドに位置する小規模なブロックである。北西側にはやや距離を置いて4ブロック、西側には同じくやや距離を置いて6ブロックが隣接する。

総数8点の石器で構成され、その内訳は台形様石器2点、スクレイパー1点、剥片2点、碎片1点、敲石2点である。石材別では黒色安山岩が3点(重量26.52g)、黒曜石が2点(重量2.71g)、硬質泥岩が1点(重量11.15g)輝緑岩2点(重量2195g、ただし敲石)である。

接合関係はブロック内ではなく、ブロック間で頻繁に確認できた点が注目される。HMs-1では隣接する4ブロック間と2ブロックとの遠距離間で、Ob-11の台形様石器では3mほどの距離を置いて4ブロック間で、Bs-1の敲石では2ブロックとの遠距離間で、それぞれ接合関係が確認された。

6ブロック(第706・708図)

調査区中央部寄りのFn-16グリッドに位置する小規模なブロックである。北側には4ブロック、東側には5ブロックがやや距離を置いてそれぞれ隣接している。

総数7点の石器から構成され、その内訳は剥片2点、碎片1点、敲石2点、台石2点である。敲石は共に結晶片岩製の大型の長楕円礫を素材とし、形態極めて類似する資料である。この2点の敲石には、これもまた大型の台石がそれぞれ近接しセットになって出土している点が注目される。

接合関係はHMs-1で、2ブロックとの遠距離間で確認された。

7ブロック(第710・711図)

調査区北寄りのFn・Fo-14・15グリッドに位置する。東側には2・3ブロック北側には9ブロックが隣接し、やや距離を置いて南東には4ブロック北西には8ブロックがある。分布は中心部より北側に集中し、南東部に移行するにつれて散漫となる。黒曜

第3章 発見された遺構と遺物

石の分布はブロック周辺部に認められ、特にブロック南東部に6点が偏在している。

総数66点の石器と1点の礫で構成され、その内訳は台形様石器1点、スクレイパー1点、石核1点、剥片32点、碎片30点、敲石1点である。石材別に見ると、黒色安山岩が53点(重量97.71g)、黒曜石が11点(重量12.44g)で、その他の安山岩と結晶片岩はそれぞれ1点で、圧倒的に黒色安山岩が主体を占めている。母岩別では、GAN-2が54点(重量898g)で、数量・重量ともに主体を占め、Ob-2が2点(重量2.11g)、Ob-15が5点(重量4.01g)である他は単独である。

接合関係はブロック内で収束するものがほとんどであるが、Ob-2では北側に隣接する9ブロックとの間で接合関係を持つ。東側に隣接する2・3・4ブロックの接合関係は確認できなかった。

8ブロック(第712・714図)

調査区北寄りのFo・Fp-12・13グリッドに位置する。東側に1ブロックが隣接し、やや距離を置いて南東部に7・9ブロックがある。

総数41点の石器と2点の礫で構成され、その内訳はナイフ形石器2点、剥片10点、碎片27点、敲石1点、台石1点である。石材別に見ると、敲石と台石を除けばすべて黒曜石であり、黒色安山岩の分布はなかった。黒曜石の重量は9.88gで、小型の剥片や碎片が多いため重量は少ない。母岩別ではOb-13が23点(重量4.26g)、Ob-15が12点(重量2.84g)で前者が主体を占める。その他は2点以下の資料である。

接合関係は確認できなかった。

9ブロック(第707・709図)

調査区北寄りのFo-14・15グリッドに位置する小規模なブロックである。北側に隣接する1ブロックと南側に隣接する7ブロックに挟まれようなかたちで位置している。

総数7点の石器で構成され、その内訳は石核1点、

石刃1点、剥片5点である。石材別には黒曜石が6点(重量86.35g)で黒色安山岩は1点である。母岩別には、Ob-2が4点(重量32.8g)である他はすべて単独である。

接合関係はOb-2で隣接する7ブロック間で確認された。

10ブロック(第713・715図)

調査区南西寄りのFs・Ft-22・23グリッドに位置する小規模なブロックである。環状ブロック群からは50mほど離れて、単独で展開する。出土層位は環状ブロック群と同じAT下層であるが、先後関係は判断できない。

総数4点の石器で構成され、その内訳は石核1点、剥片3点である。石材別では黒色安山岩3点(重量1203g)、硬質泥岩1点である。黒色安山岩3点はすべてGAN-7に帰属するが、接合関係は確認できなかった。環状ブロック群との母岩別資料の共有関係・接合関係は認められない。

ブロック外

ブロック外からは2点の石器が出土している。Ft-17グリッドからはチャート製の碎片が単独で出土している。Ft-19グリッドからはチャート製のナイフ形石器が単独で出土している。いずれも単独の母岩別資料である。2点とも出土層位はAT下層であるが、環状ブロック群に伴う石器であるかは判断できない。